

放射能災害下の保育問題研究

平成 25 年・26 年調査報告書



発行 一般社団法人日本保育学会

編集 放射能災害にかかる保育問題研究委員会

はじめに

本報告書は、日本保育学会発行『災害時における子どもと保育』（平成23年5月発行）、『災害を生きる子どもと保育』（平成25年5月発行）の続編であり、本委員会が2年間に行ってきた継続調査結果について、まとめる事が出来た部分をそのままご報告させていただきます。今後さらに新たな調査結果、分析結果を加えて、平成28年度に最終的にご報告させていただく予定であります。

東日本大震災発生から4年を経過し、福島県を中心にした原子力発電所事故による放射能災害からの環境汚染の問題は、平成27年で5年目を迎えます。放射能汚染による問題は、震災の直接的被害とは異質の問題を含んでいます。環境の改善は進んでいるとはいえ、ある時期をそこで生活したことについての健康被害に対する長期的な不安は払拭できず、特に育ちざかりの乳幼児期を、戸外活動制限や社会的な不安の中で暮らしたことがもたらす影響については、すぐには結果が出ないだけに、慎重に長期的に見届ける必要があると考えられています。現在も目に見えないところで生活のひずみや、子ども達への配慮が欠かせない状態が続いています。

本委員会は、環境の危機的状況において、保育専門の施設としての保育所や幼稚園が子どもの健康管理と発達保障の為に、厳しい環境の中での日々の営みにおいて、いかなる対応してきた（いる）のか、子どもも保護者もそれぞれの立場において、主体的にどう対処してきた（いる）のか、その実際の姿から、保育や発達に関して学ぶことが極めて大きいとの観点から、強制避難区域には当たらない放射能低線量下の福島県中通りの幼稚園、保育所のご協力のもとに、保育実践状況を中心に、保護者、園児の実態調査に取り組んできました。

本報告書では、主に震災後3年目、4年目の調査結果および、災害後3年間の変化の状況の報告をします。震災保育問題関連報告書平成25年度版『災害を生きる子どもと保育』において、2年目（1年経過後）の調査結果の報告をしていますので、合わせて検討していただけると幸いです。

本報告書は、委員会メンバーに加えて、本研究に関心を寄せてくださったワーキングメンバーの皆様のお力をお借りしています。ご多忙な中、集計や分析の労をとっていただきました。しかしながら、研究の枠組みが狭かった為に、参加者各位の期待に応えられず、お力を十分に反映する事が出来なかったところをもあり、お詫び申し上げます。

現地の皆様の実情に関心をもち続け、研究し、風化させないことは保育の実践・研究に携わる者の役割の一つかと考えます。次年度報告書に向けて、学会員諸先生方からの見解、ご意見等があれば本委員会あてにお寄せいただきたくお願い申し上げます。

<委員会メンバー >

関口はつ江（委員長）・太田光洋・加藤孝士・賀門康博・原野明子・生駒恭子

<ワーキンググループメンバー>

永井知子・浜崎隆司・岡本弘子・渡邊望・笠原広一・伴浩美・田中三保子・中山智哉
目良秋子・中田奈月・濱田尚志・堺秋彦・井上大樹・佐藤菊子・東山薫・長田瑞穂・
山崎晃

（関口はつ江）

平成 25 年度から 2 年間の放射能災害にかかる保育問題研究委員会活動

平成 25 年度会議

1 委員会開催

第 1 回委員会 平成 25 年 6 月 29 日

平成 25 年度、26 年度の委員会活動の確認

- (1) 研究協力園との研究会開催
- (2) 研究協力園対象調査の継続
 - ① 保育状況調査 対象：園長等
 - ② 新入園児園生活調査 対象：保護者
 - ③ 在園児発達調査 対象：保育担任
 - ④ 在園児保護者調査 対象：保護者
- (3) 福島県中通の保育所・幼稚園対象調査の継続について
 - ① 平成 24 年度の継続実施 対象：園長、保育者、保護者
 - ② 園児移動調査
- (4) 環境調査の実施
 - ① 放射線量、除染活動、子どものための施設整備等
 - ② その他の生活環境調査
- (5) ワーキングメンバー公募の決定

第 2 回委員会 平成 25 年 10 月 5 日

- (1) 平成 25 年度の研究活動 中間報告
- (2) ワーキングメンバー決定
- (3) 報告書作成の仕方（平成 25 年度、26 年度の結果をまとめて作成）

2 協力園との研究会（報告会）開催

第 1 回研究会 平成 25 年 6 月 19 日 研究協力園園長・保育者 10 名、委員 1 名

- (1) 平成 25 年度から新たに放射能災害にかかる保育問題研究の協力依頼、特に新入園児保護者への調査協力依頼
- (2) 平成 25 年度新入児の特徴、平成 25 年度の保育への取り組みについての意見交換

第 2 回研究会 平成 25 年 10 月 28 日 研究協力園園長・保育者 21 名、委員 6 名

- (1) 7 月の新入児保護者調査結果の報告
- (2) 平成 25 年度調査内容についての意見交換と了承
- (3) 平成 25 年度の子どもの状態と保育上の工夫、園の課題と解決法についての交換

平成 26 年度会議

1 委員会開催

第 1 回委員会 平成 26 年 6 月 15 日

- (1) 各分担研究についての進捗報告および問題点の討論
- (2) 協力園との研究会、研究集会開催についての意見交換

2 協力園との研究会開催

第 1 回研究会 平成 26 年 8 月 25 日 協力園園長・保育者 15 名、委員 5 名

- (1) 平成 25 年度調査（本園 1 月回収）の概要報告（保護者自由記述を中心に）
- (2) 平成 26 年度調査の内容意見交換と調査依頼
- (3) 研究集会（12 月 6 日）への参加依頼
- (4) 平成 26 年度の子どもの特徴についての意見交換（経験不足、親の不安等の問題）

第 2 回研究会 平成 27 年 3 月 4 日 協力園園長・保育者 21 名、委員・WG 6 名

- (1) 新入児対象調査（平成 25 年、26 年）の概要報告
- (2) 発達調査（3 か年）の概要報告
- (3) 保育内容調査（平成 25 年、26 年）の概要報告
- (4) 震災後 4 年間の子どもの変化と保育上の課題
- (5) 研究活動に関する意見（積極的情報公開の重要性、諸側面の関連の分析、子どもの変化の追跡の必要性など）

3 研究集会開催

期日 平成 26 年 12 月 6 日

会場 福島市 福島大学

参加者 約 80 名

目 次

はじめに	委員会活動	関口はつ江	…	i
目 次			…	iv
第 1 章	平成 26 年度研究集会報告	-----		1
I	幼稚園における東日本大震災以降の保育実践と子どもの育ち			
		新妻英昭	…	2
II	保育所における東日本大震災以降の保育実践と子どもの育ち			
		渡辺恭子	…	11
III	北海道に避難している子どもと保育	井上大樹	…	16
IV	震災以降の支援について	小川 武	…	24
V	現場の実践者との交流・意見交換記録			
		原野明子・堺秋彦・佐藤菊子	…	33
第 2 章	研究協力園保育実践調査報告	-----		37
I	保育の基本的内容および子どもの状況について	賀門康博	…	40
II	指導計画、実践上の内容、配慮およびその背景の内容から			
		賀門康博・田中三保子	…	45
III	カリキュラムの変更と評価についての記述内容			
		賀門康博・伴 浩美	…	50
IV	エピソード記録内容から	賀門康博・伴 浩美	…	58
第 3 章	発達調査報告	-----		74
I	各年度の領域、年齢、地域別調査結果	長田瑞恵	…	78
II	クラスター分析による発達のパターン	長田瑞恵	…	87
III	3年間の園別発達調査結果	山崎 晃	…	91
IV	3年間の領域別性別調査結果	山崎 晃	…	187

第4章 協力園保護者調査	-----		202
I 協力園継続調査について		加藤孝士 …	203
II 2013、2014年、新入园児保護者調査		加藤孝士 …	210
第5章 広域調査結果	-----		222
I 2014年、2015年調査 園長調査		永井知子 …	223
II 4年間の園長調査を振り返って		加藤孝士 …	234
資料			… 239
第6章 子どもの居住と支援	-----		246
I 災害後の福島県内保育所、幼稚園、子どもに関する動態		太田光洋・原野明子 …	246
II 災害後の保育に対する支援について ～保育現場に対する災害後の行政等の対応		原野明子 …	251
III 地域住民への支援		新山伸一・堺秋彦 …	253
あとがき 編集後記		関口はつ江 …	262

第1章 平成26年度研究集会報告

原野明子・堺秋彦・井上大樹・佐藤菊子
(新妻英昭・渡辺恭子・小川武)

はじめに

平成26年12月6日(土)に、「放射能災害下の保育実践と子どもの育ち～子どもの育ちの変化と保育現場での工夫そして外部からの支援について～」というテーマのもと福島大学にて研究集会を開催した。研究集会では、表1のとおり、幼稚園、保育所、県外避難している子どもの受け入れ、自治体という4つの視点から、震災後の保育や支援について話題提供があった。さらに、話題提供後は、グループに分かれ、参加者による意見交換を行った。参加は、日本保育学会会員をはじめ、県内外の保育者や行政関係者等80名近くにのぼった。なお、本研究集会開催にあたっては、一般社団法人日本保育学会研究集会補助金および福島大学学術振興基金の助成を受けた。

表1 研究集会の次第

司会	関口はつ江氏(東京福祉大学)
<第1部 シンポジウム>	
幼稚園における東日本大震災以降の保育実践と子どもの育ち	学校法人新妻学園かしま幼稚園園長 新妻 英昭氏 (福島県全私立幼稚園協会常任理事)
保育所における東日本大震災以降の保育実践と子どもの育ち	元本宮第一保育所所長 渡辺 恭子氏 (福島県保育協議会元事務局長)
北海道に避難している子どもと保育	北海道文教大学 井上 大樹氏
震災以降の支援について	福島県子育て支援課課長 小川 武氏
<第2部 現場の実践者との交流・意見交換>	

以下、当日の話題提供内容をI～IVに、続いてVで、当日の参加者の意見交換内容および当日の参加者の感想を紹介し、本研究集会の報告とする。なお、話題提供者の肩書きは、研究集会当時のものである。

I 幼稚園における東日本大震災以降の保育実践と子どもの育ち

学校法人新妻学園かしま幼稚園園長
新妻英昭氏（福島県全私立幼稚園協会常任理事）

今ご紹介いただきましたかしま幼稚園の園長をしております新妻と申します。私立幼稚園です。このあいだ、園庭で子どもが頭を打って、病院に行ってレントゲンを撮りました。そのときに、「ああ、頭に放射線浴びちゃったね」というのを、ちょっと冗談っぽく言えるような雰囲気には最近はなっております。

皆さんご存じのとおり、レントゲンを1回撮るとかなりの放射線を浴びるということを原発事故でわかったわけですが、それからみると、普段の周りの放射線というのはたぶん低いのですが、ただ、それにはかなり怯えていますし、これからも怯えてはいけません、そんな生活が続いています。

たぶん、私よりももっとふさわしい方やもっと詳しい方がいらっしゃると思うのですが、県の幼稚園協会の先輩の理事の先生からの推薦があり、協会内は上下関係が大変厳しいので、私がお話しなくてはならないかなということになってまいりました。

さて、このスライドに映っているのは、3月11日の12時40分ぐらいの写真です(①)。この日はとてもよい天気だったのですが、震災があり、その後、ちょっとみぞれまじりの天気になりました。これは、赤い屋根のところは卒園記念品の三角小屋で、中に子どもたちの自分で描いた自画像がずっと貼ってあります。そこで記念写真を撮ったのがちょうどこの日のことでした。

①



資料のほうとの関係ですが、まずレジュメ1枚目と2枚目がだいたい今日お話しすることの内容になって、3枚目以降は全部資料になっております。

私は、幼稚園協会の理事で、いわきの方部長をしております関係上、いろんな関わりがありましたので、できる範囲でお知らせしたいと思い、資料として印刷してお配りしていただくことにしましたので、参考にしてください。

それでは、まず資料1からお話ししていきます。これは「生駒メモ」です。今日の発起人である生駒恭子先生というほうと幼稚園の先生がいらっしゃいます。今日はお見えでないですが、彼女から指示がいろいろと出まして、「新妻君、こう動きなさい、ああ動きなさい」ということで、いろいろと話し合った中でまとめたメモです。

これは3月24日ですが、「ガソリンは電話の後、30分ほどで入れられました」という、ガソリンがなかったころの状況です。満タンにしてくれるガソリンスタンドというのは、その当時すごく貴重な情報だったのです。だから、その当時のメモがあったんです。

いくつかポイントがあり、卒園式はどうするのか、保育料、給食費の返還をどうするか、入園式、始業式はどうするか、そういうことを園長会を開いて、みんなである程度協議をしていかないと困るのではないかと、そんなことでメモを出し合っていた時期です。

それから、他地区へ避難している園児がどうなるか、あるいは、他からいわきに避難して

きている園児をどういうふうに受け入れるか、そんな話も出ております。

その他、県や市からの救済の求め方、要望書をどのように書こうとか、あと、私立幼稚園の場合、県の管轄なので、地元の市と直接のつながりが薄いため、黙っていると何も支援にこないねというような話になっておりました。

次に書いているのは、別の先生との話で、職員の身分保障をどうするかについてです。私立幼稚園の場合は、保育料の収入と、県の補助、市の補助、これは在園児の人数分で来ますので、保育料が入らないと収入が全く断たれてしまうため、先生方の毎月の給料も払えませ

〈A〉

資料 3

緊急設置者・園長会議 議事録（抜粋）

社団法人 いわき市私立幼稚園協会

日時：平成 23 年 3 月 31 日（木） 13：30～

場所：ほうとく幼稚園

【審議事項】

①今後の危機管理について

1. 対策本部の立ち上げの了承
2. 協会事務局の移動
3. 各幼稚園での問題点の整理
4. 要望書の内容

②各園の現状の把握

③要望（陳情）について（政府・全日幼・福全幼・市教育委員会）

【共通の問題】

1. 園児…調査一新入園児、在園児の意思確認
→職員の配置、安全の保障も影響
2. 園児受け入れについて一園児、親支援
3. 職員の確認→原発不安の中で、職を全うしてもらえるのか。
4. 園児の心のケア

【心配】

1. 原発 →情報 公…基準
2. 危機管理→安全性〔園舎、原発〕
園の方針の公開（HP等）
3. 保育料減免→職員の給与保障
4. 再開時期
5. 保育園と幼稚園 公立と私立との対応の差
6. 4月運営方法・公立学校・ライフラインの確保

ん。先生方に無給ですと残っていただきと言える訳もない中での身分の保証です。子どもたちはいつ戻ってくるかわからないのに、ただ園は開けておかないと子どもは戻れないしと、そんなことをお話ししていたメモです。

資料 2 は、全日本私立幼稚園連合会のホームページで情報が出ていたのですが、こういうのを見ると、すごくありがたいなと思いましたのでここに掲載しました。

資料 3 は、緊急設置者・園長会議議事録の抜粋です〈A〉。これは、3月31日に会議が持たれていまして、場所がほうとく幼稚園で、いわき市の中で一番南側のほうにある園です。ということは、原発から一番遠い地区で開いたということです。いわきは38園あったのですが、ほとんどの園が集まりました。普通、園長会は、多くても30園ほどしか集まらないのですが、ここでみんなの情報交換をしました。その記録をとっていた先生がいらっしやったので、いわきでこんなことがあったということの後でご覧いただければと思います。

次に、資料 4 は自分の園で使った「園児確認カード」です。避難先や園児の管理がわからないということが園長会でも出ましたので、いつ戻ってくるとか、今はどこにいるのかということを確認するために、そ

れを形にまとめたものです。

資料 5 が、要望書です。園長会等での要望をまとめて、要望書にしました。「市長による、子どもを持つ全ての市民に向けての安全宣言のメッセージをお願いします」と、全く安全かどうかはわからない状況だったのですが、小学校と公立幼稚園向けには教育長名で安全宣言が出て、4月7日から始めるということだったので、私立幼稚園は全く情報がない中で、安全なので来てくださいと言ったときに、保護者にどう説明できるのか、何を根拠に安全だと言えるのかと、そういう話が出ましたので、こういうのも市の責任、行政の責任でやってもらいたいとお願いしました。そうでないと私らはなかなか動けないのではないかと、ということがありました。また、授業料等納付の減免措置、保護者も大変なので、そちらのほうの保護者の財政措置もお願いしました。

して保育をやっているよと。変身ごっこで、いわき市規格のごみ袋を逆さにかぶって遊ぶとか、それに絵も描けば、結構造形的にもいいんじゃないのとか、そんな話がありました。先生方が集まって、頑張れるねというような励ましが書いてあります。

4月20日(⑤)、「心のケアの意味が1つわかりました」ということで、文部科学省から放射能に関して安全基準が出され、それを受けて先生方で話し合いました。大丈夫だと言っ
てなかったのに、大丈夫だとなったので、どうしようかと。「お外の空気は毒がある」と言う
お子さんがいるという報告がありました。今まで毒だと思っていたのが安全だということ
で、どう納得させればいいのか、それは心のケアだねと話をしました。この写真は、
こいのぼりを見ているところです。例年だと園庭に出て、竿のすぐ下で見めるのですが、屋根
のついたベランダのところから見えています。

避難訓練も外に行かないで、お部屋の真ん中に固まって行いました(⑥)。このクラスは
本来29人のクラスなのですが、この人数しかこの時期はいなかったのです。でも、子ども
たちが戻ってくるかもしれないので、クラスの数は維持していました。

これはビニールのすだれです(⑦)。後で出てきますが、こういうものを掛けていました。
これだとほこりが入りにくいのではないかと考えたのです。冷凍倉庫の入口などにあります
けれども、外の空気を少しでも遮断し、放射能の空気が入ってくるのを防げるのではないかと
涙ぐましいことをやっていました。

あとは、「神戸からお客さんが見えました」(⑧)ということで、子どもたちがそっと散歩
している園庭に、チューリップがきれいに咲いてますが、全然外で遊べない。この辺りはこ
んなに自然がいっぱいで春の美しい光景が広がっていますが、遊べない。

「親子でランチ」(⑨)、これは、遠足に行けないので、そのかわり、やはり何か楽しいこ
とをやらないとだめだよねということをやりました。幼稚園に親子で集まって、みんなでお
弁当を食べてゲームをして遊びました。

その次は、「家族の絆」(⑩)ということで、「家族で過ごす『ふつう』」の生活を、より大
切に思われているのが伝わってきます」ということで、以前よりもいろいろな準備を親子で
やるというのが多いねという先生方の感想からこれを書いています。

「ボランティアの方による読み聞かせ」(⑪)は、なかざとまことさんとかわかみりゆう
さんが読み聞かせに来てくれたこと。また、シャボン玉飛ばしをやったのですが、園庭に下

<p>⑦ 2011.4.28 ビニールのすだれ</p> 	<p>⑧ 2011.4.30 神戸からお客さんが見えました</p> 	<p>⑨ 2011.6.13 親子でランチ</p> 
<p>⑩ 2011.6.11 家族の絆</p> 	<p>⑪ 2011.6.20 ボランティアの方による読み聞かせ</p> 	<p>⑫ 2011.9.4 クールスポット</p> 

りないようにということが書いてあります。

「クールスポット」(⑫)には、ここの砂をこれだけスコップで掘ってここに入れたということを書いています。パワーショベルが入らないので自力でやりました。5センチから10センチぐらい、かなりの重労働で、「何でこんなことをしなければならないと、ふと考えてしまいます」と書いてます。夏休みが終わった後ですね。こうやって表面の砂を取ると確かに放射線量が半分以下になるのです。こちらのほうもパワーショベルでやっていただいていたのですけれども、当たり前の園生活を思っていました。


「砂山プロジェクト」(⑬)は、9月5日に青森から7時間かけてこの10トントラックで、3日間、砂を30トン運んでくださいました。ガソリン代だけで、運んでくれました。ボラ

ンティアです。手間賃や砂代は入ってなかったのですが、30万かかりました。子どもたちがザーッとあけるところを見ている、それで、おじさんたちに「ありがとう」という目で見ているのです。「砂山一つで、園児たちは、こんなにも喜ぶのです。安全な砂が欲しい！」ということで、みんなに話を広めようと思いブログに載せました。

⑬

2011.9.5 砂山プロジェクト

園児たちの視線が集まっています。
その先にあるのは、砂山一つ。
遠く、青森から7時間かけてやって来ました。
「おじちゃん、ありがとう」園児たちの声が届きました。
あしたから、砂遊びができる！
砂山一つで、園児たちは、こんなにも喜ぶのです。
安全な砂がほしい！
どこかの企業、NPO、行政、どこでもいい、
どなたか、安全な砂を福島県の幼児施設に届ける
「砂山プロジェクト」を始めてはみませんか。
企業イメージ、アップしますよ。特に東京電力さん、お願いします。



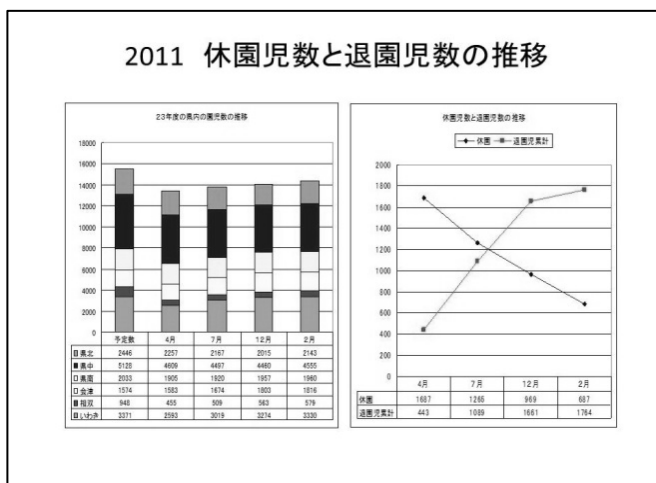
さて、突然グラフが出ましたが、これが園児数と教員数の推移で、幼稚園協会の白書に出ている数字です(⑭)。ずっと教員数は伸びていたのですが、園児数が減るにしたがって減ってきて、ここ(平成24年)でぐんと減ったのですが、平成23年はそんなに減ってないのです。平成23年は普通に減っていたのですが、平成24年度、子どもが帰ってこないということで、ここまで先生が減りました。震災・原発事故があった年は、子どもたちが帰ってくるのをがんばって待っていたのです。

⑭



さて、紙のほうに戻ります。「私立幼稚園の置かれた状態や動き」の1番目の「初動」で、子どもを親元に帰すこと、被害状況の確認、いつまで休園するかというのは、先ほどパワーポイントで見たとおりになっています。本当に、いつ再開できるかと不安でした。

⑮



2番目、「幼稚園協会等の動き幼稚園協会等の動き」ということで、要

望書として資料5をご覧ください。あと、文科省の濱田課長という方がいらっしやったときの説明資料が資料6です<C>。これは、久之浜第一幼稚園がいわき地区で唯一津波に遭

って全壊しましたので、そのときの説明が資料6になっていて、避難の様子や被害状況、休園者数などの数字が入っています。

支援物資は、保育所には配布の連絡があったのですが、私立幼稚園にはなかったので、話を聞きつけて市にもらいに行き、みんなで配りました。あと、先生方のアイデア交換会については先ほどの話をしました。

保護者の行動や意識アンケートについては、震災の年の7月に目白大学の西方先生という方にご協力を得てまとめてあります。そのときどんなことを考えていたのか、もう時間がたつとわからなくなってしまうということで、やはり食べ物とか洗濯についてすごく気をつけているというのがここからわかります。

あとは平成25年度、日本女子大学の大学院生でいわき市出身の方が、子どもと遊びの関係を調査をされました。このときは、3歳より5歳児の母親のほうが遊びの環境にもものすごく敏感だと。3歳のお子さんというのは、震災当時、生まれたか生まれてないかなのです。5歳児は、幼稚園に通うか通わないかのときで、そのときに小さい子どもほど影響が強いというふうに刷り込まれた方は、その後ずっと強い印象のままいくのだらうなというのは、そのアンケートで感じました。

また、生活の困難については、原発事故直後にこんなことがありました。いわきの場合、高速道路が閉鎖されている中、10時間ぐらいで東京に避難した方もいるし、福島のほうが安全だと思って福島に避難した方もいました。結果的に福島の方が放射能は大変だったようです。

次に、放射能汚染への不安についてです。外部被ばく、空気、お外の空気は毒であると、土も毒だから触ってはいけませんと子どもに伝えていました。内部被ばくとしては、水。水道水から放射能が検出ということで、ペットボトルの水や浄水器が足りない。内部被ばくは、野菜から放射能が出ましたので、輸入品とか加工食品、食品添加物がばんばん入っていても平気で食べていますが、地元の野菜、米は絶対食べないという、そういう方がいまだにいらっしゃいます。

あとは被ばく不安へのストレス、子どもに対しては禁止の連続、身の回りの環境を毒と言わなければいけなかったということが、心の傷として、たぶんずっと残るのだらうと思います。思春期に困るのではないかと私は思っておりますが、それを学術的にどなたかが研究していただかないと、ケアが遅くなってしまってからでは取り返しがつきません。青少年の問題で、特にその時期、幼稚園と保育所にいた子どもの世代だけの、2～3年だけの問題ではなく、私はかなり深刻だと思います。そこについても研究者の方にぜひ研究していただきたい。何ともしなければそれでいいのですけれども、ただ、何かあった場合は怖いなと思っております。

それから、自分の子どもに毒を食べさせているのではないかと、毒の環境の中に置いているのではないかと、ものすごく自分を責めていらっしゃるお母さんがいらっしゃいます。幼稚園の対応としては、このようなことがあって、運動会は外でやった幼稚園はありませんでしたし、その後3年間ずっと体育館でやっていた園もあって、今年ぐらいから外でやるという園が普通になりました。他に、いわきで園庭にブルーシートを敷き詰めていた園がありました。放射能を防ぐものでもないのにとしたら、ほこりを防いでいたんですね。園庭のほこりが園舎に入ってくるので、これも2年間ぐらい続けていました。今はもう取っています。

次に、保育上の困難点についてお話しします。危険度のわからない不安な中で安全をアピールしながら保育をすることに対して先生方にストレスがたまっていたと思います。例えば、地産地消の食育の崩壊、とにかく地元はだめということ。それから、外での行事の見直し、外遊びできなかつたことでの運動能力の低下懸念があります。

運動量をどうやって確保するかですが、私が心配したのは、泥んこ遊びに代表される開放感のある遊びの激減という、開放感がない中で、子どもがいくら室内で汗をかいてもやっぱり違うのではないかなということです。これもちょっと理論的に言ってくれる人がいないと困るなと思っています。

それから、年長から伝わっていた外遊びの文化が途絶える。これは、年長が遊んでいるのを見て下の子どもがまねをするという、その文化が全くなくなってしまうました。もう一回作り直さないといけない。うちは、山に遊びに行っ、昔、桑の実を食べていたのです。おいしいですね。見た目は毛虫みたいなのですがすけれども、おいしい。だから、子どもらは、忘れない。小学校の卒園生などは、遊びに来ると、桑の実のところに寄って、「ないね」などつぶやくんですけども、今の子どもは、桑の実がなっているても全然関心を示しません。そういうようなことが、たぶんほかにも、ほかの遊びとか生活の中でも、一回切れてしまった文化というのがあるのではないかなと思っています。それが、今は目立たなくても、小学校の高学年、中学、高校に行ったときに何か足りないねというのは、これが足りなかったのではないかなということになるのではないかなと思っています。

支援については本当にいろいろお世話になったと思います。うれしかったのは、つながっている、心配してくれる仲間がいるということ。資料2にあるような、全日幼のホームページに載っているのを見て励まされました。自分の園のホームページの投稿の機能を使って、保護者同士励まし合いました。これがまず初期の段階ではすごく大事なことだと思っています。4月から6月で一番欲しかったのは水、その後は砂が欲しかったです。

しかし、支援網の違いはありました。これは、保育所にあつたけれども幼稚園になつたというひがみですね。付き合いの広い園には個人的にいろいろ届くのです。でも、そうでない園にはなかなか来ないので、協会が頼りだったというのがあります。

資料には書きませんでした。避難の格差というのを感じています。逃げて行ける場所があつた人、お金があつた人、人脈があつた人は、遠くに逃げる事ができたのですが、そうでない人は避難所で本当に悲惨な生活を送らざるを得なかつたというのがあります。なかつた人との差。

また、支援プログラムがいろいろあります。沖縄とか北海道とかのキャンプもありますが、それも情報がある人とない人、あとは、行きたくても行けない、お母さんが働いている、お父さんが働いている、子どもだけでなかなか参加できないと。行く人は毎年夏休みに行っているのですがすけれども、そうでない人もあつて、どういう差があるのかなというのは不思議な感じがします。

時間が押ししてしまいましたが、以上です。まとまらない発表ですが、ありがとうございます。

資料5

平成23年4月8日

いわき市長 様

社団法人 いわき市私立幼稚園協会
理事長 小名川 清彦
いわき市私立幼稚園協会 PTA 連合会
会長 岩城 光英

東日本大震災に係る緊急要望書

東日本大震災の発生直後から、渡辺いわき市長はじめ、市の関係職員の皆さんが災害からの救助・援助・復興のために、日々奮闘しておられますことに、敬意と感謝を申し上げます。

いわき市の私立幼稚園でも、震災直後から、お預かりしている園児の安全確保・避難・保護者に安全にお渡しするところまで、各職員が必死の思いで対応いたしました。一部の職員については、地震・津波での家族の安否もわからない不安の中ではありましたが、学校教育法の下での幼稚園という公教育を

担う者の立場として、各職員、職責を全うしました。

その結果、いわき市の私立幼稚園の管理下での園児犠牲の報告はゼロです。残念ながら、帰宅してから被害にあって亡くなったお子さんは1名報告されています。(4/1 現在)

その後も、帰宅してからの園児の安否確認に努めてまいりました。震災の被害で避難を余儀なくされたご家族、その後の放射能漏れの不安から新たに避難をするにいたったご家族、ライフラインの復旧までいわきを離れざるを得ないと判断した乳飲み子を抱えているご家族、会社の命令でいわきを離れたご家族・・・様々な理由で、一時は園児の半数以上がいわきを離れている状態で、連絡を取るにも困難を極めました。

そのような中ではありますが、ライフラインの復旧や、放射能漏れへの必死の取り組みの報道などから、いわきに戻ってくるご家族が増えてきました。それに伴い、学童や保育所施設、春休み中の一時預かりを希望するご家庭へも、対処してまいりました。また、相双地区から避難してきた園児の受け入れについても、まずは、緊急の一時預かりの体制を整えているところです。

そして、教育長から出された、予定通りの入学式の実施や、安全宣言により、いわきに戻ってくるご家庭は急増し、私立幼稚園でも、新学期の準備を急いでいるところでもあります。

しかし、震災の被害で打撃を受けているご家庭や、放射能漏れに対する不安を抱えたご家庭が多いのも事実です。特に、放射能漏れへの不安から、市外や県外に避難し、長期の休園を希望するご家庭や、一時的に退園を希望するご家庭はかなりの数に上ります。私立幼稚園では、保護者の経済的負担を考えて、震災被害のご家庭や、放射能漏れへの不安からの休園希望については、保育料の減免を考えております。

また、震災の被災を受けて園舎が崩壊したり教材教具が損壊してしまった幼稚園、ライフライン（水道等）の復旧がまだの幼稚園等もあり、園児の受け入れについて障害になっております。

いわき市の私立幼稚園は、市内の幼稚園児の約79パーセントのお子さんを、お預かりしている公教育施設です。この私立幼稚園が無事再開し、安定的に園を運営することは、いわき市の災害からの復興にも大きく寄与するものと考えます。

災害からの早期復旧と併せて、園児保護者ならびに私立幼稚園経営に対する支援は緊急の課題であります。何卒、従来の枠を超えた特別のご配慮をお願いいたします。

1、市長による、子どもを持つ全ての市民に向けての安全宣言のメッセージをお願いします。

市教育長による公立幼稚園、小中学校への安全宣言のメッセージは出されましたが、それ以外の学校や教育施設に通う子どもを持つ市民は、数多くいます。未だいわきに戻ることを躊躇しているご家庭や、放射能漏れへの不安から転出（退園）を決めてしまったご家庭は、かなりの数にいたっています。それらの市民に向けた、市長自らの安全宣言のメッセージが、災害からの復興にとっては必要不可欠です。

2、授業料等納付金の減免措置に対する助成援助をお願いしたい。

(1) 幼稚園就園奨励費補助制度における補助対象を拡大し、災害を受けた保護者を対象として補助されたい。

(2) 幼稚園が園児に授業料減免措置を行った場合に財政上の援助をお願いしたい。

3、保育再開の支援をお願いしたい。

(1) 倒壊建物の撤去、仮設園舎の建設、その他保育再開のために必要な支援をお願いしたい。

(2) 被災施設の安全性、あるいは放射線の漏れへの安全性を確認するための専門的な技術者の派遣についての支援をお願いしたい。

(3) 放射能漏れへの不安から、公立幼稚園、小・中学校では、当面の間戸外での活動を控える旨の説明が保護者にありました。私立幼稚園各園は、組織的な情報の収集が困難です。いわき市において園児や保護者が安心して保育を受けるための指針を私立幼稚園にもお示し願いたい。

(4) 各園の保護者の不安を解消するため、放射能測定器の配布をお願いしたい。

(5) 支援物資の配給については、いわき市私立幼稚園協会事務局を窓口として、先日お願いしたところです。公立・私立、幼稚園・保育園等を問わず、同じいわき市民のお子さんを預かる幼児施設として、私立幼稚園にも必要に応じて配給をお願いしたい。

(6) ライフライン（特に水道）の復旧が遅れている地区にある幼稚園があります。公立幼稚園、小中学校と同じように、給水車の派遣や仮設トイレの設置をお願いしたい。

(7) 専門家による学校経営についての相談体制の整備をお願いしたい。

4、教職員の身分保障のための支援をお願いしたい。

(1) 被災幼稚園についてはもちろん、被災を免れた幼稚園にとっても、原子力発電所からの放射能漏れへの不安から長期間の休園や退園を希望する保護者が増えています。この間、保育料の収入は大幅に減りますが、この間教職員については保育開始に備えて身分を保証しなければなりません。このための十分な支援措置をお願いいたします。

(2) 特に、例年ご配慮いただいている私立幼稚園運営費補助については、今月中に平成22年度補助金の80パーセント以上の額を概算払いしていただくなど、特段のご配慮をお願いします。

以上のことを、いわき市としても緊急に援助を決定するとともに、県や国へも働きかけていただきたい。

<C>

資料6

いわき市私立幼稚園協会 災害対策本部 東日本大震災に係わる現状報告

平成23年4月27日

3月11日の東日本大震災では、いわき市内の幼稚園1園が津波により全壊、また建物には大きな被害がなかったものの交通、電気、ガス、水道などが遮断、物資、ガソリン等のライフラインのマヒ、在園

児家族、職員も被災する状況下となった。津波に追いかけるながらも難を逃れた園児バス、園舎が津波にのまれてしまったが、園長のとっさの判断で避難が間に合った園、保護者が迎えにこられず保育者が幼稚園で園児を預かった園、・・・各園とも教職員が必死の思いで、園児の安全確保・避難・保護者に安全にお渡しするところまで対応した。その結果、幸いなことに、いわき市私立幼稚園管理下での人的犠牲者はゼロであった。(帰宅後津波の犠牲が1名)。それに続く原子力発電所の事故により、いわき市の機能は麻痺、一時は園児の半数以上が避難する事態となり、園児の帰宅後の安否確認も困難を極めた。4月に入ってからも、自主的避難をやむなくしている園児が1,184名(4/15集計)の状態である。

さらに、4月11日と12日の、震度6の余震で、園舎に大きな被害をこうむった園が多く出た。いわき市の公教育を担っている私たち私立幼稚園も、早期の再開を目指している。しかし、幼稚園・並びに保護者の不安はぬぐえないものがある。いわき市のすべての子どもが安心安全で希望に満ちた未来を描くためにも、行政と協力して教育関係者が一丸となり迅速に対応することが急務である。

1. 被災状況

平成23年3月31日現在

地震発生直後の安否	園児 1名	家族 5名	行方不明 2名
津波による家屋流失	園児 51件	職員 3件	
園舎被害	津波による全壊 1園		

※平成23年4月11日・12日のマグニチュード6弱の余震による、各園の被害状況は除く
※別紙 参考資料1「被害状況写真」参照

2. 就学状況

平成23年4月15日集計

私立幼稚園就学予定園児数		4,131名(平成23年2月1日調べ)		
調査未提出園9園の園児数(881名)を省いた人数		3,250名		
	理由	人数	合計	%
休園	原発安定後に登園を希望	623	1,054	32.4 ※25.5
	原発による不安から休園	401		
	ライフラインの不安 ※原発による影響含む	18		
	保護者の転勤・転職・職業喪失 ※震災・原発による影響による	12		
退園	原発による不安から転園・退園	89	130	4.0 ※3.1
	ライフライン不安定 ※原発の影響含む	4		
	保護者の転勤・転職・職業喪失 ※震災・原発による影響による	37		
	いわき市私立幼稚園において4月に保育を受けない園児		1,184	36.4 ※28.6

注)※印は、2/1調べの就学予定園児数に対するパーセンテージ

3. まとめ

今回の災害における「被害」のもっとも大きいものは「原発」による被害と言わざるを得ません。自然災害である、地震・津波に関する直接的な被害は、1で示したとおりですが、東京電力福島第1原発における被害は以下実害として私立幼稚園の経営を直接的に圧迫し、私立幼稚園の使命すら奪いかねない非常な事態となっています。東北地区の甚大な被害に心を痛めながらも、東京電力第1原発事故の収束する見通しが立たないままいわき市の復興が立ち遅れ、しいては、子ども達の未来・私立幼稚園の未来への不安は増幅しています。この問題は、長期間にわたる問題であり重大な問題です。

そのような、苦境の中でリスクを抱えながら4月の保育を再開しようとしています。

II 保育所における東日本大震災以降の保育実践と子どもの育ち

元本宮第一保育所所長 渡辺恭子氏（福島県保育協議会元事務局長）

私は、ただ今ご紹介いただきましたように、3.11 東日本大震災のときは本宮市の保育所に勤務しておりました。その後2年間、保育協議会の事務局をお手伝いさせていただきましたので、その際の資料などにも触れながら、お話しできればと思っております（①）。

3月11日は、震度6弱という大きな揺れと次々に襲う余震、そして外は雨、雪、風という、まさに天と地が怒っているという状況でした（②）。お昼寝中の子どもたちに、頭から布団を被るよう話し、状況を注視しておりました。保育所は、幸い大きな被害はなく、午後6時55分には最後の子どもたちも保護者が迎えに来てくれました。

その後、状況報告にと市役所に向かいました。市役所の中では、暗い中次々に入ってくる被害への対応や避難所の設置に奔走しており、災害の大きさを感じ取ることができました。

この災害をとおして避難訓練の大切さを痛感しました。1年間、12回の訓練を行ってきましたが、その成果でしょうか、子どもたちの姿から、聞くことの大切さや落ち着きを感じ取ることができました。そして、職員からも子どもたちの安全・安心につながる速やかな対応の姿を見ることができました。

ただ、これが新たなスタートを切った4月、5月だったらどうなのでしょう。子どもたちの姿は？ 保護者との連絡手段は？ 職員の共通理解は？ いつ起きるかわからない想定外の出来事に、どう対応していくか、職員会議の在り方、避難訓練から見えてくる課題など、災害当時を忘れることなく、園内研修を積み重ねていくことが大事かと思えます。

避難訓練の大切さとともに、瞬時の判断、子どもの安定を図りながらの対応、非常用電源と非常時の備蓄品の確保、保護者との連絡手段など、その園、その園にあった方法を常に頭に置きながら訓練したり、環境を整えたりすることが大事なのかと思えます（③）。

①


**保育園における
東日本大震災以降の
保育実践と子どもの育ち**

～振り返りから～

本宮市 渡辺恭子

②

東日本大震災
3月11日 午後2時46分 M9の大地震発生



予想を超える津波

③

マグニチュード9の地震から

- 子ども達の安全確保
 - ・求められる瞬時の判断
 - ・子ども達の心の安定を図りながらの対応
- 保護者との緊急連絡手段の確立
- 非常時電源と非常用備品の確保
- 避難訓練の大切さ
 - ・非常時における約束の確認
 - ・子ども達を取り巻く環境や子どもの状況把握

④

東京電力 福島第一発電所の事故発生

- 子ども達を守るために
 - ・マスクの着用
(支援でいただいたマスクを各家庭に配布)
 - ・帽子の着用
 - ・室内に入る際は、服の塵を払い、手と顔を洗う約束
 - ・窓を開けずに保育 等
- 屋外活動の制限⇒屋内活動の工夫
- 園庭の遊具、側溝清掃

私たちの保育所でも状況に応じた避難場所の見直しを行い、訓練とともに保護者にもお知らせしました。実は、私の勤務する保育所の前には大きな川が流れており、数年前には1メートル弱の床上浸水となったことがあります。堤防の決壊なども想定されますので、避難場所を高台としました。

そのほか、本宮市の保育所・幼稚園においても、保護者との連絡手段を確保したり、水やパンそして防災ずきんを備蓄することができました。

これまでは、主に地震における対応を話してきましたが、その後の原発事故についてお話しさせていただきます。

本宮市では、大震災から保育所・幼稚園の再開までは、2週間という期間がかかってしまいました。非常時における保育所再開などの対応がもう少し早くできなかったものか、今でも悔やまれる課題です。

事故発生当初は、どの園も同じかと思いますが、子どもを守る対策として、マスクや帽子の着用、部屋に入る前に服のちり・ほこりを払い、手と顔を洗うことを約束としました。窓は開けず、屋外活動の制限をし、室内でできる遊びの工夫を保育士とともに考えました(④)。また、部屋の床や固定遊具の拭き取り、側溝の清掃にも努めました。

原発事故により、小さい子どもさんを抱える保護者の皆さんや妊娠中のお母さんにとっては、ここで生活してよいのか悩み、苦しい選択を迫られたことは事実です。放射能への不安から、表情が硬くなっていくお母さん。家族間で話し合い、お母さんと子どもさんが避難した家族。新たな地に職を求め、家族全員で避難した家族。仕事が、家族が、地域がここに

あると、覚悟を決め、ここに残ることを選択した家族。どの家族も不安・腹立たしさ・情けなさ…を感じた悲惨な事故でした。

恥ずかしいことですが、私は放射能に対する知識は全く持ち得ませんでした。

これは震災2年後に保育協議会が実施したアンケートのものです。事故以前から知識のあった方は、6%に留まり、事故後に知った方が83%となっております。

“安全”という神話が根づいていたのでしょうか(⑤)。また、今後、知識を学ぶ機会は必要ですか?の問いには、88%の方が必要であると答えておられます。

国や報道からの情報は、保護者の不安に沿うものではなく、“安心”にはつながらず、「本当にこの数値で安全が確保できるのですか?」「うちの子は外に出さないでください!」「ここで生活してよいのでしょうか?」と、“安全”と“安心”はイコールではなく、“安心”の度合いは一人ひとりが違うこと。

⑤

保護者に向き合って①

①私たちが自身が、放射能に対する知識不足
放射線の特徴・気象との関係・単位の認識等
「本当にこの数値で安全が確保できるのですか?」
「うちの子は、外に出さないでください!」
「ここで生活して居ていいの?」

↓

②安全と安心はイコールではなく、安心の度合いは一人一人が違う
③不安を感じている保護者に寄り添うこと、「傾聴」の大切さを痛感

※誰の言葉を信じ、どう対処したらよいのか?

この間、市の対策として、教育施設等の表土の入れ替えが決定!
保育所・幼稚園も5月から6月にかけて、実施されました。

知識をお持ちですか?	
保護アンケートより	
はい: 事故前	6%
はい: 事故後	83%
いいえ	11%

知識を学ぶ機会は必要ですか?	
必要である	88%
必要としない	12%

⑥

保護者に向き合って②

表土の入れ替えにより、園庭の線量は10分の1に
下がり、これで外遊びができるかな?と、思っておりましたが、
残念ながら、保護者の皆さんの安心にはつながりませんでした。


「本当に安全なのですか?」
「将来の責任をとってもらえるのですか?」 等の意見の一方、
「外に出られない子どものストレスの方が心配!」 等の意見も


↓

保護者役員会を開催し、皆さんの意見を伺った。

↓

その結果
保育所内の線量と活動時間を毎日お知らせ
外遊びの是非を保護者に確認しての屋外活動の実施
(30分程度)





不安を感じている保護者に寄り添うこと「傾聴」の大切さを痛感しました。

その後、市の子どもを守る対策として、5月から6月にかけて、表土の入れ替えが実施されました。この作業により園庭の線量は10分の1に下がり、「これで外遊びができるかな」と思いましたが、残念ながら、“保護者の皆さんの安心”にはつながりませんでした。「本当に安全なのですか?」「将来の責任を取ってもらえるのですか?」などの意見の一方、「外に出られない子どものストレスが心配!」「先生、もういいから外に出してください!」などの意見もあり、役員会で保護者の考えを聞くことにしました(⑥)。

役員会でも、双方の意見が聞かれました。どちらか一方の選択とするのではなく、「保護者の是非を確認しての外遊び30分程度」とし、「外に出ていい」「外に出さない」のいずれかに○×方式で毎日選択していただくと同時に、「保育所内の線量と屋外活動時間」を毎日掲示し、お知らせすることとしました。

「外部被ばくを受けている子どもたちには、少しでも内部被ばくを受けさせたくない」との保護者の思いを受けて、保育所の給食で使用する野菜・肉類は県外産のものを使用することとして、ホームページで産地の公表をしました(⑦)。また、米は農協の協力を得て前年度米を使用しました。その後、食品の放射線検出器が導入されてきました。

今までに経験したことのない事故は、私たちに多くの苦しみをもたらしました。国も県も東電も専門家もどうしてよいのかがわからず、後手後手の対応が生じたことは確かです。そして、そのような方々から指示も情報も出ない中、各市町村は、住民の不安に対応するため、

アドバイザーとともに、線量測定、講演会開催、表土除去、除染、食品検査、甲状腺検査、ホールボディ検査等に取り組んできたことは、確かな事実として残っています。

一方、私たちは、子どもたちの体力や育ちを支えるために、日常の保育の中でできることを大事にしながら、室内やテラスを使ってできる運動遊び、水遊び、シャボン玉遊び・砂遊びなどの取り組み方や、五感を刺激する素材の活用、自然や季節を感じ取らせていく“保育士のつぶやき”の大切さなどについても話し合いました(⑧)。

行事では、笹飾りの笹は近隣からいただく竹を用いていました。でも、それは不可能ですので、壁面を利用した七夕飾りとし、支援でいただいた短冊も飾りつけました。

クリスマスリースは、薩摩芋のつるが使えないので、それに代わるものとして画用紙や段ボールを使用したり、徳島県の保

⑦

外部被ばくから内部被ばくに対する心配

「子ども達には少しでも内部被ばくを受けさせたくない」

保育所の対応 ↓


- ・ 保育所の給食で使用する野菜・肉類は、県外産を使用
- ・ ホームページにて食品の産地公表
- ・ 米は、JAの協力を得て、前年度産米を使用

市が ↓

- ①ホールボディカウンター：体内の放射性物質を測定
- ②食品の放射線検出器を導入

↓

県内産・県外産を問わず、測定されたものを食していく



⑧

原発事故後の保育活動 ～保育所内での話し合い～

保育の日常を大事にしよう!

- ・ 室内やテラスを使った運動遊びや水遊び、しゃぼん玉遊び、砂遊び。
- ・ 五感を刺激する、様々な素材の活用
- ・ 自然や季節を感じ取らせていく保育士のつぶやき。 等

行事

笹飾りの笹は?

- ・ 市販の物を使用したり、壁面や天井を利用しての取り組み!

クリスマスリースは?

- ・ 薩摩芋のつるが使用できないなら、それに代わる段ボールで!

夏野菜、秋野菜の栽培は?

- ・ 植えるのは職員。子ども達は水やりと成長を観察!

運動会は?

- ・ 小学校の体育館を借りて実施!

その他

- ・ ユニセフ思いっきり外遊びプロジェクトによる親子遠足 (3歳・4歳・5歳児)
- ・ 3歳未満児は、親子で遊戯室を使つての触れ合い遊びや会食
- ・ 講演会の開催 等

育所から支援で届いた大きなまつぼっくりでクリスマスツリーをつくり、各家庭に持ち帰っていただきました。夏野菜・秋野菜の栽培は、プランターを使用して子どもの目に触れる場所に設置し、職員が植えて、子どもたちは水やりのお仕事、ゴーヤ、キュウリ、トマト、ピーマンなどの成長を観察することができました。

運動会は小学校の体育館を借りて実施しました。そのほか、ユニセフ『おもいっきり！そとあそび』プロジェクトを活用し、那須方面に3・4・5歳児の親子遠足。1～2歳児は親子で遊戯室を使っての触れ合い遊びや給食の試食会を実施しました。

保護者の方の、「できないこともあるけれども、できることもありますね」の言葉に支えられました。そのほか、「放射線への影響が心配な方へ」と向けて施設内での講演会も開催してきました。

想像を超える事件・事故を想定し、①避難訓練の大切さ ②瞬時の判断と対応 ③職員間の共通理解 ④情報を得ること・発信することの難しさと大切さ ⑤保護者、地域、関係機関との連携の大切さなどに取り組んでいくことの必要性を学びました(⑨)。

私たちの保育所ばかりではなく、県内の多くの保育所でもさまざまな取り組みやマニュアル等の見直しに取り組んでいます。

これは、アンケートの中で挙げられたものですが、食材の安全性、備蓄品の確保、避難訓練の取り組み、保護者との連絡手段、関係機関との連携、保育活動の見直しなどが挙げられておりました。

また、見直したマニュアルや新たに作成したマニュアルはありますかの問いには、避難経

⑨

震災及び原発事故からの学び

園として、保育士として

- ・想像を超える事件、事故への対応
- ↓
- ・避難訓練の大切さ
- ・瞬時の判断と対応
- ・職員間の共通理解
- ・情報を得ること、発信することの難しさと大切さ
- ・保護者、地域、関係機関との連携の大切さ

※ 私たちは、この災害・事故を体験した者として、取り組みや課題を次世代につなぎ、伝えていくことが必要なのではないだろうか？

震災・原発事故後に取り組んだこと

食材の安全性・備蓄品の確保・避難訓練の取組・保護者との連絡手段・関係機関との連携・保育活動の見直し等

見直したマニュアル・新たに作成したマニュアルはありますか？

避難経路・防災(災害)マニュアル連絡網の見直し等

路、防災マニュアル、連絡網の見直しなどが挙げられていました。

私たちは、この災害、事故を体験した者として取り組みや課題を次世代につなぎ、伝えていく責務があると感じております。

富岡町、大熊町、楢葉町、浪江町など、多くの市町村の方々が、中通りや会津そして県外へと避難して行きましたが、一部の避難所では、子どもたちの集まる場は確保されたものの、保育者も行政の手伝いに回ったため、子どもたちと関わる事ができなかったとのことです(⑩)。子どもたちをしっかりと受け止め、家族生活に安定を取り戻すことが保育者としての大きな役割と考えますと、非常時であってもボランティアにお願いすること、保育者が対応しなければならないことがあるのではないかと考えさせられました。避難所に行ってお話を聞いたときに、「ボランティアの方が帰ってし

⑩

震災及び原発事故からの学び

避難者(幼児)への対応

○子ども達が集まる場は確保されたものの、行政の手伝いにまわった保育者も多かった。子どもをしっかりと受け止め、家族生活に安定を取り戻すことが保育者として大きな役割ではなかったか。

※非常時であっても、ボランティアにお願いすること、保育者が対応しなければならないこと等があるのではないだろうか？

子どもが安定すれば、大人も安定する
大人が安定すれば、子どもも安定する

○避難者の預かりは一時保育で対応

※緊急時においても、通常のルールや規則が足かせとなり、すぐ対応すべき事が前に進まないもどかしさを感じた。被災者の立場に立ち、不安感や困り感にすぐ対応できる体制をつくるのが大事と考える。

まった後に、子どもたちがとても荒れてしまい、落ち着きを取り戻すまでに時間がかかってしまった。」と言うお話を聞いて、やっぱり子どもたちを知っている私たち（保育者）が関わらなければいけないのではないかと、確かに忙しい、手が欲しいとは思いますが、そこをしっかりと守ってほしいと感じました。

本市にも、「同年齢の子と関わらせたいので子どもを預けたい」という保護者の方がおいでになりました。その方々の思いに応えたいが、通常の規則や考え方が足かせとなり、すぐに対応できない、前に進めないもどかしさを感じました。

⑪

震災及び原発事故からの学び

厚労省と文科省の対応に差が・・・

・除染・放射線測定器・研修 等

※ 幼稚園に籍をおいても、保育園に籍をおいても、同じ福島県の子どもである。健康に関わるような対策や対応は、国や県、省庁が垣根を取り払い、連携を取り、同じ対応をすべきと感じた。

緊急時です。被災者の立場に立ち、不安感や困り感にすぐ対応できる体制をつくるのが大事と考えます。

また、先ほども新妻先生からお話がありましたように、厚労省と文科省の対応に大きな差を感じました(⑪)。幼稚園に籍を置いて、保育園に籍を置いて、同じ福島県の子どもたちです。まして非常時です。健康にかかわるような対策や対応は、国や県、省庁の垣根を超えて、連携して前に進めてほしいと願います。

私は、福島県の子どもたちには放射能教育をしていただきたいと考えております(⑫)。

「福島県に何が起きたのか」「放射能とは何か」を、学校も行政も一体となり、しっかりと説明できる福島の子どもたちを育ててほしいと願います。「全国で胸を張って生きていくために!」、「世界で“フクシマ”を背に、たくましく生きていくために!」も、福島県の子どもたちには教えていかなければならないと思います。

⑫

将来を担う福島県の子ども達のために

○放射能教育を!

・「福島県に何がおきたのか?」

・「放射能とはなにか?」

○福島県の子ども達へ、学校も行政も一体となり、教えてほしい。

・「全国で胸を張って、生きていくために!」

・「世界で“フクシマ”を背に、逞しく生きていくために!」

※ 私達保育者も、知識を得ておこう!

もちろん、子どもたちと関わる私たち保育者も、つらくとも、真実を見つめ直さなければならないと思っています。

除染が実施され、健康診査や甲状腺検査、そして食品検査など、不安への対応は少しずつ実施されていますが、県民一人ひとりの心の片隅には、常にぬぐい去ることのできない不安や不信感を、奥深くにもちながらの日々を送っていると思います。それでも私たちは、日々の生活をとどめることはできないし、前を向いて進むしかないのですから…。

⑬

美しい福島県



廃炉作業が無事終了し、福の島、「ハッピーアイランド」が戻ってくるその日まで頑張りましょう(⑬、⑭)。以上で終わらせていただきます。

⑭

福の島 ハッピーアイランド

除染が実施され、健康診査や甲状腺検査、そして食品検査等、不安への対応は少しずつ実施されているが、県民一人ひとりの心の片隅には、常にぬぐい去ることの出来ない不安や不信感をもちながらの日々を送っていると思う。

私たちの日々の生活を留めることはできないし、前を向いて進むしかないのだから。

廃炉作業が無事終了し、福の島「ハッピーアイランド」が戻ってくるその日まで……。

Ⅲ 北海道に避難している子どもと保育

北海道文教大学 井上大樹氏

- ①
-
- ②
-
- ③
-

北海道札幌市と千歳空港の千歳市の間にあります恵庭市というところからやってまいりました北海道文教大学の井上と申します(①)。今日は、先ほどのお二人の先生のお話と流れが違うのですが、実は北海道に、札幌市を中心として福島から避難されている方々がいらっしゃいます。結構な数なので、その方々を受け入れている幼稚園と保育所が結構あります。もともと私は札幌で若者問題を扱いながら、さまざまなNPOの話に関わっていたのです。今は保育者養成の大学教員であり、今、北海道に避難している子ども、子育て家庭の実態が、受け入れている幼稚園・保育所の中でどういうふうに見えているかということ、幼稚園・保育所の調査自体、手掛けたばかりで、中間報告というように感じになっているのですが、そのあたりを少し皆様にお話しできたらということで報告をさせていただきます(②、③)。

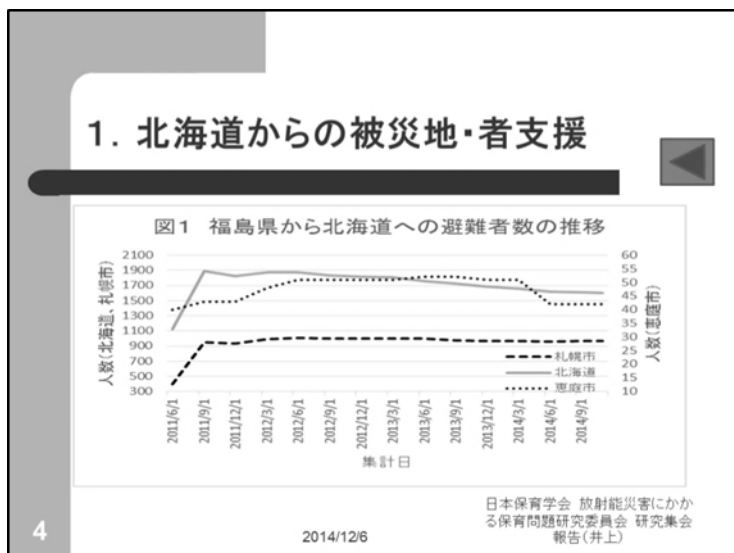
私自身は、実は今の職場に来る2年半前までは、いわゆるもともと教育学者というか教育畑を、高校とか若者をずっとやってきて、子育て支援に関わってはいたのですが、そのさなかに東日本大震災が起きました。その直後から、福島だけではなくて被災された地域からさまざまな方々が移られてきた、避難されてきたというようなことです。

当初は、どちらかというと、そういう受け入れをしているNPOとのつながりがいろいろありまして、

そういう問題をぜひ今後北海道の地域にも、だいぶ疲弊をしている時期でもありましたし、北海道の場合は県民ではなくて道民といいますけれども、道民の生活をちゃんと守っていくような社会づくりというのができるか、あるいは、そういう一人ひとりを大事にする教育ができるかどうかという瀬戸際でありましたので、このあたりを考えるようなさまざまなシンポジウムですとか手掛けておりました。

今は、札幌市、恵庭市の被災担当部局や保育所、聞き取りをしています。実際、北海道から被災地被災者支援ということであると、今までの震災とはまた違う傾向があったため、被災当初は社会全体が混乱することもあったのですが、そういうような傾向が見られました。一応、実態だけ先にお話しさせていただきますと、北海道からの避難者支援、福島県からということで、あえて福島県全体というふうにくくりました。なぜかといいますと、今、私たちが収集しているケースなどからいっても、放射線・放射能に関わっている避難ということと違いがない。全体的には、実は原発立地に関わる場所からの避難というのはいらない。自主避難が8割以上を占めているということで、あえてそのまま入れたのですが、実は、被災後の半年で今のだいたいの数になっているということで、札幌市では900人ちょっとまで増えました。それで、2011年9月までに全道では1,900人近くになりま

④



⑤

1. 北海道からの被災地・者支援

(1) 東日本大震災と北海道の市民活動

- 被災者支援による地域の変化
 - 行政と市民団体との連携
 - 「個人情報保護」の壁
 - 避難者への情報提供
 - 拠点スペースの提供(札幌市市民活動サポートセンター)
 - 補助金、協働型事業の展開
 - 福島県、北海道、札幌市など
 - 避難など移動に関わる補助が中心
 - あくまでも一時的な位置づけ(北海道内自治体)

5
2014/12/6
日本保育学会 放射能災害にかか
る保育問題研究委員会 研究集会
報告(井上)

す。その後は、北海道全体では暫減といいますが、徐々に減っているということです。1,600人ぐらいだったと思います(④)。

それで、札幌市は、実はほとんど減っていません。これは、考えられることとしては、札幌市では、特に福島県からの自主避難の方を中心とした集住地区があります。つまり、公営住宅等で受け入れをまとめて行っている、場合によっては雇用促進住宅といって、実は小泉改革の行政改革の中でそのまま空き家になってしまっている、空き家というかマンションぐらいですけども、そういうところに住宅支援を受けてというようなことが、3カ所ぐらいあるのです。そういうところに200~300人ぐらいの単位で住まわれているというようなところが、固定的に受け入れといいますか、この後、例えば例の雇用促進住宅ができますと、今のところ2016年の3月で一応

終わりということになっています。だから、この後どうなるかという問題はあるのですが、人数としてはいまだにこれだけの人数がおられると。

それで、恵庭市という、全体の人口は7万人弱なのですが、それでも、今は福島県以外からの自主避難とかそういう避難者はいません。本当に福島県からです。それで40人台ということになっております。

この被災者などの支援というのが、北海道の場合は、市民活動が主導してきたというところがあります(⑤)。特に札幌市の場合は、いわゆる市民活動を支援するような条例もあるぐらいで、NPOですとかそういうものの活動が非常に進んで、行政との協働、共に働くという協働がある意味始まっていたのです(⑥)。この被災者支援のところでは、そういう人たちを受け入れていくにあたっての情報交換ということで、支援したい側というのは、どういう人がどこに避難しているのかということを知りたい。これは行政からすると個人情報なかなか出せないということだったのだけれども、この件に関しては、ある程度の歯止めをかけながら、そういう情報交換を可能にした。実際に避難をされてきた方が何のつてもなく避難されてきたとしても、住宅支援のみならず、例えば必要な家具とかそういうものを、ある団体ではそういうものをみんなに呼びかける。この人にはテレビが要るからとか、この人には冷蔵庫も要るからといったら、1週間ぐらいで全部そろうような支援をやっているところがあったのです。そういうことや、最終的には仕事がないとそこで暮らしていけませんので、そ

⑥

1. 北海道からの被災地・者支援
(1) 東日本大震災と北海道の市民活動

- 市民活動のすそ野の広がり、再組織
 - 学生+勤労青年、NPOスタッフ
 - 女性(特に母親)
 - かつて「市民活動」に関わっていた人
 - * 自分たちの地域や生活スタイルを問い直す「学び」へ
- 市民活動のネットワーク化
 - 「むすびば」など
 - 行政との連携、相互関係の構築の可能性

6 2014/12/6 日本保育学会 避難被災者にかかわる保育問題研究委員会 研究集会 報告(井上)

⑦

1. 北海道からの被災地・者支援
(2) 被災「地」支援から被災「者」支援へ

- 「むすびば・札幌」
- 震災直後に結成(2011.3.25)
 - 環境や子育て支援など様々な市民活動団体が集まる
 - 札幌市市民活動サポートセンターに拠点が設置
- 当初の活動方針(最優先課題)
 - 被災者の支援(ボランティア派遣、物資輸送・供給など)
 - 被災者の受け入れ(北海道への受け入れとケア)
 - チャリティ・募金(活動を支えるための募金や資金調達)
 - ネットワークの構築(札幌や道内でのさまざまなNGO・NPO、市民団体、ボランティア、個人による)

7 2014/12/6 日本保育学会 避難被災者にかかわる保育問題研究委員会 研究集会 報告(井上)

⑧

1. 北海道からの被災地・者支援
(2) 被災「地」支援から被災「者」支援へ

- 地域密着型の支援を目指す(資料1)
 - NPO法人ねおす
 - 自然体験型環境教育の推進
 - スタッフのつてがある岩手県釜石市へ
 - 住民に「寄り添う」支援の追及
 - 無期限(人手が足りなければ他団体にも呼びかけ)
 - 地域の様々な人に関わりながら活動を展開
 - 地域の「復興」を視野に入れる

8 2014/12/6 日本保育学会 避難被災者にかかわる保育問題研究委員会 研究集会 報告(井上)

ういう仕事のこととかもいろいろ相談に乗ってくれるとか、総合的な避難者の生活基盤が整うまでの支援というのが進んでいました(⑦)。

もう一つ特徴的なのは、いわゆる避難とか災害時でやはり抜け落ちてしまう女性や母親などの目線による問題点というか、例えば被災地のほう、実際多くのケースは、津波の被害を受けたところなどに札幌や北海道でよく出入りをしていたのですが、その避難所などでは、例えば女性の場合はトイレですとか着替えですとか、そういうような場所が全然確保されていない。あるいは小さい子どもがいるところなどは、同じ体育館などで一緒にいないといけないところでは、かなりいろいろ配慮しなければいけない、子どもの声とか、そういうのがあったのですが、いち早くそういうのを女性の立場、母親の立場で支援していく人たちが結構現地にもいて、そういう人たちから問題を提起して是正をしてもらったりということが、実はあまり表には出ていないのですが、地道な取り組みがあります(⑧)。

そういうことを通じて、被災支援というのは、北海道や札幌などでは、これから自分たちの地域社会の在り方を考えるということでは、私たちもいろいろなことを学んでいます。まさしく地域のつながりがあるというのは、本当にこういうところでどうしようかということなのだ、

さまざまな学びがあります(⑨～⑱)。

その流れと実際に受け入れをしている幼稚園・保育所というのは結構つながっているというか、一応、地域のそういう雰囲気もありますので、かなり園の中で、特にこれは園長先生がキーマンだったりします。それで、受け入れている子どもや保護者に対するまなざしというのが、安心してそういう人たちが生活できる環境がつけられているということがあるかなというふうに思います。

それで、実際に今日紹介する事例としては4ケース、2つの町の2ケースを聞き取ったのですが、その4ケースを紹介したいと思います。聞き取った対象が非常に少ないので、あえて資料では全部混ぜています。必要であれば、ここだけの話ということで、どういう背景かというような話をしたいと思うのですが、

今回の県の聞き取りの中で明かになった4つのケースというのは、いずれもいわゆる原発立地に関わっての避難ではなくて自主避難です。しかも、避難時期を見ていただくと、私もびっくりしたのですが、例えば2011年7月とか9月ですね、そういうのがいろいろあって避難されているということなのですが、中には2012年5月ですとか、それ以降に避難されている方もいらっしゃいます。

先ほど避難している人数は横ばいだという話をしました。ちょっと減ってというのは誤解がある。中では相当入れ替わっていると。すぐ避難して、半年もたたないうちに戻られてい

9

1. 北海道からの被災地・者支援 (2)被災「地」支援から被災「者」支援へ

- 地域密着型の支援を目指す
 - 子どもたちのケア(遊びを中心に)
 - 生活支援と居場所づくり
 - まちづくりサポート、コーディネート
 - 漁業復興支援
 - 農業再生支援
 - 商店街支援
 - 復興ツーリズム
 - 住民とともに協働を通じた地域再生の道

9 2014/12/6 日本保育学会 特別総会室にかか
る保育問題研究委員会 研究集会
報告(冊上)

10

1. 北海道からの被災地・者支援 (3)避難者の受け入れ

- 避難者の困難
 - 被災から1ヶ月で札幌市内に約100名が転入(小中)
 - 2011年8月までに約450世帯、1000人余りに達する
 - 住居紹介・支援以外の行政からの支援がほとんどない
 - 見知らぬ土地での生活再建(見通しがたない)
- 「うけいれ隊」の結成
 - 物資提供にとどまらない支援スタイルの追求
 - 被災者の「御用聞き」に徹する

10 2014/12/6 日本保育学会 特別総会室にかか
る保育問題研究委員会 研究集会
報告(冊上)

11

1. 北海道からの被災地・者支援 (3)避難者の受け入れ

- 「うけいれ隊」の主な活動
 - 住居に関する情報提供
 - 候補先の交通条件(仕事先に通いやすいか)
 - 家財・家電の提供
 - 避難者が求めるものがいきたるよう「マッチング」を重視
 - 引越サポート
 - 車庫なども含めボランティアがお手伝い
 - 生活相談
 - 行政手続き、子どもの学校、仕事探し、心のケア など
 - これらを全て無償で行う

11 2014/12/6 日本保育学会 特別総会室にかか
る保育問題研究委員会 研究集会
報告(冊上)

12

1. 北海道からの被災地・者支援 (4)とある母親の関わり(Aさん)

- かつては「行動する母親」
 - 3児の母
 - 社会人院生(教育学)
 - 共同保育運動
- 震災直後のニュースを見て
 - 自分と同じ乳幼児の親たちが避難所で肩身の狭い思
いをしていた
 - 「人ごとではない」→「むすびば 札幌」の結成に参加

12 2014/12/6 日本保育学会 特別総会室にかか
る保育問題研究委員会 研究集会
報告(冊上)

13

1. 北海道からの被災地・者支援 (4)とある母親の関わり(Aさん)

- ボランティア希望者と被災地のコーディネート
 - ウェブサイトや事務局前の掲示板にあふれる情報
 - 事務局に毎日夜遅くまで詰めて個別対応にあたる
 - 「ねおす」(前述)の助っ人として被災地へ
- 被災直後の「リアル」な姿を目の当たりに
 - 被災した自分のまちが避難所から見える場合も
 - 大量のがれき撤去(手作業、住民・ボラ総出)
 - 遊び場で会おう子どもだけでなく大人の表情も明るい
 - 仮設住居への移住で長年のご近所がばらばらに

13 2014/12/6 日本保育学会 特別総会室にかか
る保育問題研究委員会 研究集会
報告(冊上)

14

1. 北海道からの被災地・者支援 (4)とある母親の関わり(Aさん)

- 行政による支援や仲介の問題点
 - 平等主義をたてに「塩漬け」される物資
 - 住民たちの判断で必要な人から配れる条件はあった
 - 避難所暮らしと自宅(被災)暮らしの格差
 - 救護物資や支援情報が来ない
 - 地域づくりの担い手の多くが犠牲に
 - コミュニティの機能不全が現実
 - 女性に必要な支援が不十分
 - 物資、トイレ、着替え、授乳場所... など

14 2014/12/6 日本保育学会 特別総会室にかか
る保育問題研究委員会 研究集会
報告(冊上)

15

1. 北海道からの被災地・者支援 (4)とある母親の関わり(Aさん)

- 被災住民が支援に求めていること
 - 「まとまった期間」参加できることをボラの条件に
 - 人としての信頼関係が不可欠
 - 「助け合い」の関係
 - ボランティアに風呂を貸してくれた住民
 - ゆつくり寝られる場所を探してくれた住民
 - 食事をつくりきてくれた住民
 - 「絆」の大切さを強調する前に
 - どんなに不便でもここから離れたくない(釜石の方)

15 2014/12/6 日本保育学会 特別総会室にかか
る保育問題研究委員会 研究集会
報告(冊上)

16

1. 北海道からの被災地・者支援 (4)とある母親の関わり(Aさん)

- ボランティアを精神的に支える役割も担う
 - 「リアリティショック」を受け止めあう
 - 苦勞をねぎらい、気持ちを整理する時間
- 家庭の理解を得るまで
 - 夫は単身赴任
 - 子どもとの時間が取れない
 - 「なんでそんなに忙しいの？」
 - 「ママは地震のお仕事をしてるの」(小2・長女)

16 2014/12/6 日本保育学会 特別総会室にかか
る保育問題研究委員会 研究集会
報告(冊上)

17

1. 北海道からの被災地・者支援 (5)被災地(者)へのまなざしと学び

- 自分の生き方と生活に照らし合わせて問い直す
 - 女性や母親の目線から(Aさん)
- 持続可能な生活や地域経済という視点
 - 人とのつながりを保つ復旧と復興の道
 - 人とのつながりを保つ仕事づくり(ねおす-Aさん)
 - 「生きる」基盤を脅かす放射能に向き合う
- 「ふるさと」への思い

17 2014/12/6 日本保育学会 特別総会室にかか
る保育問題研究委員会 研究集会
報告(冊上)

18

1. 北海道からの被災地・者支援 (5)被災地(者)へのまなざしと学び

- 競争ではなく協働で生きられる「知」の創造
 - 居住地域の枠を超えたネットワーク
 - 多様な暮らし、思想に向き合う
 - 「排除されている」層や課題の掘り起こし
 - 空虚な「競争」社会や教育に対する反証を明示することの重要性
 - ディスカッションがないことの批判(原発出前授業)
 - 対抗的な世界観を提示してこそ、「自由な議論」の土壌ができるのでは

18 2014/12/6 日本保育学会 特別総会室にかか
る保育問題研究委員会 研究集会
報告(冊上)

19

表1 保育園が受け入れた避難家族の事例

家族名	受け入れ児童	避難時期	避難理由	備考
A	長男(4歳)、次女(1歳)	2011年7月	避難先が中小都市のため父親は反対	災害宅入居/母子のみ避難の後、母親
B	長女(1歳)	2011年9月	放射能への不安及び家賃の事情から子育て環境を良しと	災害宅入居/母子のみ避難の後、父親も一緒に避難に理解
C	長男(5歳)、長女(3歳)	2011年12月	子どもの健康(ぜんそく)を心配し、転居	父親は避難先自治会の副会長
D	長女(5歳)、次女(3歳)	2012年5月	放射能への不安から子育て環境を要する	災害宅入居/父親の仕事を安否確認中に出張先へ一度転居

19 2014/12/6 日本保育学会 特別総会室にかか
る保育問題研究委員会 研究集会
報告(冊上)

る方もいらっしゃる、中では相当入れ替わりがある。私たちもよくよく実態を見て、やっとなんかということだったということがわかりました。

それで、自主避難の方々の共通しているのは、ここに書いてあるとおり、放射能に対する不安ですね(19)。Aさんのケースに関しては、ほぼ実害とっていいと思うのですが、自分の住んでいるマンションがホットスポットだったということです。それで、今後のことを考えたときに、これはすぐに出ないと、ということで母親が決断をして、父親と意見が合わない状態だったのですが、そのまま避難をしたということです。このような形で、避難理由としては、やはり放射能の事情を考えて、子どもの健康や子育てを考えての避難だということが共通していえるのかなと思います。

ただ、細かい事情を聞いていくと、その中にはいろいろ濃淡があったり、ほかの要素というか、簡単にいうと家庭の問題ですね。母親、父親の関係の問題があります。そういうのがこの中には交じっていたりもします。

では、そこで避難した人たちは定着するのかどうかということでは、この4つのケースだけでもそれぞれ違います。来週には戻られるという家族、Bさんのケースですね。Bさんは、父親も意見が一致して、一家で避難しています。一家で避難をしているのですが、残念ながら父親の仕事が安定しなかった。2回転職したのだけれども、それもだめで、やはり仕事が安定しないとまず生活ができないということで。父親のご両親は実家で、親族は全員福島にいるということです。それで、もう一回県内に戻られるということだそうなんです。こういうケースもありますし、Cさんの場合は、もう移る時点で完全移住を決意しています。ですので、例えば父親が保護者会の副会長をつとめたり、地域の中に完全に入って、しかもご自身の仕事を立ち上げられて、母親もパートなどしながら、定着を目指してやるということをやっているという方々もいらっしゃいます。

母子避難の場合は、父親を残して避難されていることで、家族関係のリスクというのが非常に大きいものがありまして、やはり、父親が仕事の関係などで福島に残っていたりするのですけれども、家族関係を維持するというのが非常に難しい。これはAさん、Bさんのケースは両方とも離婚というケースなのですが、例えば経済的にお金が送られない、送れないとかという話になったときには、母親は納得しないけれども、やはり戻るわけですから、そういう意味でも戻られるケースなどもあったり、どうしようもなくなった場合は、これで離婚して、もう一回母子でゼロからやっていかなければいけないというような状況があります。

ですので、今回のケースでは、自主避難ということもあって、例えば、原発立地地域からですと、いわゆる補助金というのがありますし、もろもろの支援ですとかがあったりするのですが、自主避難の場合はそういうのがないので、先ほど紹介した支援のほかには自力でどう生活を立て直していくのかということなどが大きな困難として立ちまわっているということでもあります。

一方、保育所で受け入れている園では、福島から来られているケースでも他の子どもと変わらないということです。私はこの放射能災害にかかる保育問題研究委員会には、平成26年度からメンバーに入れていただきまして、平成25年度までやっていた調査の報告なども読ませていただいて、本当に(福島県内の)皆さんが大変なご苦労をされて、保育環境を、外で遊べないとかそういう条件がありながらなさっているということを知って非常に頭が下がる思いです。そういう心配は、札幌とか北海道の場合は、事故後放射能からどれだけ流れたかというのがSPEEDIなどには出てきているのですけれども、そこまで大変だということはないというか、情報としては入っていませんし、それで安全だからということで、自主避難をされている方が多いですので、保育環境に関しては、(震災前から)変化というのはありません。ですので、子どもとの関係というか、子どもに対する配慮とかそういうことに関しては、2つの園とも特に気になることもないですし、何か特別のことをしているわけではあり

ません。ほかの子と変わらないです、というような言い方をされています。

ただ、これは小学校とかに転校して、というケースとは基本的に違って、やはり保育所や幼稚園の場合ですと、特に保育所の場合は、入って、転園という形ではなくて、もともと生まれてすぐ移ってきて、ここに入園する場合がほとんどです。原体験というところでは、札幌とか恵庭の時点であり、子どもからすると、ここから一から経験を積んでいくというよう

な状況もその理由としてあるかなと思います。

では、実際に受け入れている園というのはどういう園なのかということなのですが、今回急遽聞き取りをお願いしたところなので、かなり協力的な園だということではあるのですが、この2つの園ともだいたい園児数が90人ぐらいで、規模としては札幌とかでは普通です。もしかしたら、皆さんからすると、ちょっと大きいというふうに感じられるかも知りません(⑳、㉑、㉒)。

それで、受け入れの家族がいるのですけれども、EとFの園で共通しているのは、やはり園長先生がまず率先をしてこの家族に関わっていると。いち早く親御さん、保護者の方の声とか、やはりこの意見は、ほかの家族、保護者とは違うということで、よく聞き取って、それに対する配慮や対応ということを職員に呼び掛けて、そういう理解のある雰囲気組織でしているということが挙げられるかなと思います。

E園では、昨年度だけではあるのですけれども園長主催で茶話会、この3つの家族が集まってのお互いそこで悩みとかを語り合う茶話会をしていたということもあります。F園に関しては、ボランティアに行った職員もいたりするので、園長だけではなくて、早い段階で園の中で、ほかの保護者などがいろいろわかるような形で、今、被災地はこんな状況になっていますと、この被災地は津波のほうの被災地だったのですが、そういうような写真とかそういうものの掲示をしていたりとか、この被災地も、これは実は津波以外の地域が中心なのですが、物資支援ということは今でも続けているということです。そういうような取り組みをしているという園であるということです。

それで、地域の理解というのは非常に大事です。ある園の場合は、近くに公宅があって、この3家族が皆さん、その受け入れの公宅に住んでいます。そういう支援の活動とかも盛

⑳

2. 北海道に避難している子ども、子育て家庭の受け入れ(保育所)

- 全体としては減少傾向にあるものの、事情が多様化している。
 - 震災後しばらく経ってからの避難も
 - ホットスポットなど放射線量に対する将来の不安
 - 経済的(仕事)、家庭的(親族との関係など)事情で福島県に戻る場合も

20 2014/12/6 日本保育学会 放射能災害にかかわる保育問題研究委員会 研究会報告(併上)

㉑

表2 保育園における避難者受け入れ事例

園名	園児数	受け入れ数	園の取り組み	保護者・近隣住民の理解	備考
E	約90	3家族5名	園長主催の茶話会(2013年度実施)、園長が率先して保護者への対応を行う	近隣住民による避難者への支援活動が盛ん	近隣に避難者が集住している/2011年度開設
F	約90	1家族2名	被災地3園への物資支援・交流/被災地ボランティア活動報告(職員1名参加)	主に津波被災地へのボランティア参加・職員を体験している保護者が多い	

21 2014/12/6 日本保育学会 放射能災害にかかわる保育問題研究委員会 研究会報告(併上)

㉒

2. 北海道に避難している子ども、子育て家庭の受け入れ(保育所)

- 「(福島から来た)子どもたちには他の子どもとの違いがあるようには思えない」
 - 他の子どもたちと顕著に異なる言動は見られなかった
 - (学齢期の子どもたちと異なり)あまり記憶がないうちに避難をしているため

22 2014/12/6 日本保育学会 放射能災害にかかわる保育問題研究委員会 研究会報告(併上)

㉓

2. 北海道に避難している子ども、子育て家庭の受け入れ(保育所)

- 避難した理由(事情)によっては保護者に対する配慮や支援が必要だった。
 - 特に食べ物の問題: 給食で使う食材への問い合わせ、変更の要求
 - 避難先での定着(仕事など)、家族関係などの悩みについて相談を受ける

23 2014/12/6 日本保育学会 放射能災害にかかわる保育問題研究委員会 研究会報告(併上)

んだったり、近隣住民も理解が非常に高いところであったりしますので、保護者も自然とそういう雰囲気当たり前だという雰囲気の中でそういう家族を受け入れているという状況があります。

もう一つ園に関しては、いわゆる仕事で被災地にボランティアに行って、自衛隊として。自衛隊の町なので、自衛隊の人たちが被災地、特に福島に行って、そこで本当に今でも周りに話せない大変な現場を見てしまったという方々もいらっしやったりもするのですけれども、そういう現実を皆さん知っている方々が多い。このFの園でも住民や保護者の方というのは非常に多くの方が同様の経験しており、そういうところで避難家族が受け入れられているということです。

実際、受け入れで何が一番配慮が必要だったかという点、レジュメでいうと、この2番の3つ目です。これが2つの園とも一番気を使ったということで、食べ物ですね(23)。給食で使う食材の問い合わせで、自分で調べていて、この食材は絶対(放射線の数値が)高いはずだから替えてくれというような声なども出てきたことがあったそうです。

そのケースはどうしたかということなのですが、さすがにその要求に関してはすぐ対応ということにはなりません。園長としては、先ほど安心という話がありましたけれども、まず、いっぺん聞くということが大事だということで、できる限り対応するという点で、職員とは相当議論したらしいのです。役所と相談して、魚の問題だったのですけれども、メニューの変更は可能だということで、確認を経た上で対応しているということです。やはり、かの家庭よりは食べ物に関しては、要求というかそういう質問が出てくるので、そういうものには丁寧に答えるようにしていくということです。

それ以外にも避難先の仕事の問題ですとか家族関係の悩みについて、不安定になってしまいがちなところがあるので、なるべくそういう相談とかがあれば、まず園長から率先して丁寧に聞くようにしており、そういうところで保育所として受け入れを丁寧にやっているということです。

ちょっと時間が来てしまいましたので、後でこういうところはどうなっているのだという話がありましたら、後で質問で聞いていただければと思うのですが、今のところ中途の調査ではあるのですけれども、学校とかで受け入れると何が一番違うかということなのでも、保育所も、幼稚園も、もともと持っている機能が、いわゆる個に対応する、福祉的な援助というか、ケアといいますか、こういう避難してきている家族、被害を受けられてきた家族の受け入れに非常に有効であるのではないかと。そこを園長先生のリーダーシップ、園長先生がそこをよく自覚をされていて、そこをどう発揮しようかということで、いろいろな個別の問題が出てくるのだけれどもその大本で対応されているということがこういう支援に関しては非常に効果的であったのではないかと思います(24)。

ただし、両方の園とも、地域の理解がないとなかなかそれはできないのですよという話をしていました。特に、ほかの保護者が、先ほどの食べ物の件でいっても、「それは特別扱いで

②4

3. まとめ

- (公立学校とは異なり)園長のリーダーシップで避難児童や家庭へのニーズに柔軟に対応可能
 - 保育実践そのものも持っている家庭支援の機能が発揮されている
- 地域のさまざまな「まなざし」によって避難児童への保育環境が左右される。
 - 他の保護者や住民の理解が鍵
 - 反対やクレームがある状況での取り組みは難しい

日本保育学会 放射能災害にかかわる保育問題研究委員会 研究集会報告(井上)

24 2014/12/6

はないか」というふうないろいろ声が出てきてしまうと、やはりそう簡単にはできないということ。 (園長が)自分としてはそういう支援していくことは当たり前だと思っている方々の中でもそういうことを気にしなくてはいけないことがあります。その地域の中でそういう家庭に対する(暖かい)まなざしができるかということによっても、その保育所や、今回は調査をしていないのですが、幼稚園が、こういう避難

された家庭に対しての関わり方に影響すると、そういうことが少し見えてきたと思っています。

それで、話が少し飛び飛びになってしまったのですが、福島県内のケースとだいぶ違うのです。実際にこういう被災を受けられた方々との関わりというのは、北海道などではこういう保育実践に関していうと、むしろ自分たちがいろいろ大本を考える大きなきっかけになっていたり、あるいは、先ほどの地域のつながりですとか、そういうことも考えるきっかけになっているということです。負担だとかそういうことではなくて、本当にここで学び合って、これからどうしようかということによりよい社会をつくるという意味では、実は非常に貴重な機会を私たちが与えられているのではないかというふうに思っているところがあります。

すみません。時間をちょっと超してしまいました。以上です。ありがとうございました。

②⑤

文献・資料

- 石井山竜平『東日本大震災と社会教育 3・11後の世界に向き合う学習を拓く』、国土社、2012
- 井上大樹「報告者が語った3.11からのドキュメント」北海道民間教育研究団体連絡協議会『みんきょう』、127、2011、pp.2-11
- NPO法人ねおす <http://www.neos.gr.jp/>
- 環境NGO ezorock <http://www.ezorock.org/>
- 東日本大震災市民支援ネットワーク・札幌むすびば <http://shien-do.com/musubiba/home/>
- 北海道庁ウェブサイト <http://www.pref.hokkaido.lg.jp/>
- みちのく会 <http://ameblo.jp/coco-kara-hokkaido/entry-11258047250.html>
- みやぎ教育文化研究センターほか(編)『3・11 あの日のこと、あの日からのこと』、かもがわ出版、2011

* ウェブサイトはいずれも2014.12.04確認

25

2014/126

日本保育学会 放射能災害にかかる保育問題研究委員会 研究集会 報告(井上)

IV 震災以降の支援について

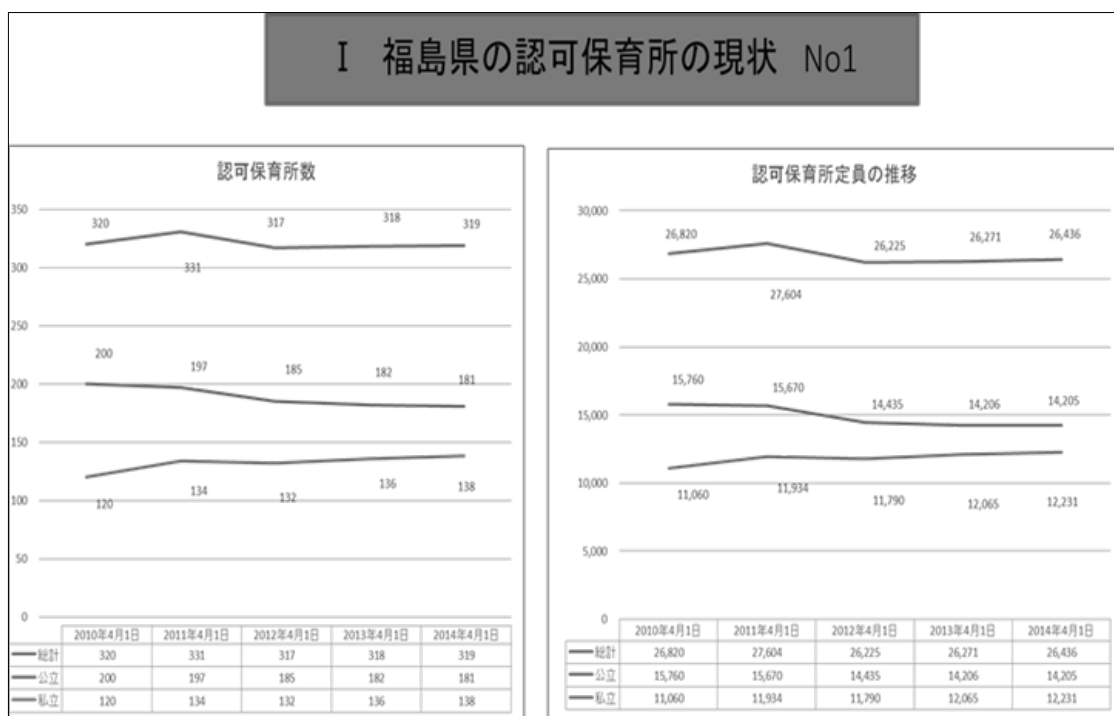
福島県子育て支援課課長 小川武氏

福島県の子育て支援課の課長をしております小川と申します。このような機会を設けていただきましてありがとうございます。関口先生が最初から私を守っていただくような紹介をしてくれました。こういうところに行政が来ると、例えば「県は何をやってくれているんだ」という話が出まして、非常につらい立場になるのです。先ほどからずっと各先生方がお話ししていたのは、各現場でどれだけ苦勞されて震災後も活動してきたのかというようなお話だったかなと思います。行政側の立場からすると、特に県の立場というのは微妙な立場でして、保育というのは、児童福祉法の中でも市町村がサービスを提供するものですから、第一線で矢面に立つのは市町村になってしまうんです。それで、県の立場というのと、市町村などがうまく行政サービスとかを提供するための財政支援を行うこと、国と県とがお金を出して、そして市町村もお金を出して行政サービスを提供していくというのが基本的なところなんです。この震災が起きたときも、福島県内の保育サービスをどういうふう提供していったらいいのかを考えました。例えば、被災者がたくさんいらして、移動もします。通常だったら考えられないような数の子どもたちも受け入れなければいけない。逆に、子どもや保育士がいなくなってしまうと、自分の保育所をどうやってその後運営していくか悩む場合も出てきます。そういったときにどう対応していったらいいかというのをまず考えなければいけないのが県の役割だったということもあります。

したがって、今日私が皆さんにご提示した資料を見ると、ずいぶん数字が集計されてしまい個々の現場の事情をどこまで反映しているかわからないというものになっているかもしれません。しかしながら、今までの発表にあった震災への対応を、例えば県・国の予算でいうと、どのような形になっていたのかというのを整理する上で見ていただければありがたいと思います。

最初に、福島県の保育所の現状はどうなっているか、ちょっとおさらいをしたいと思い資料を準備しました。保育所の入所児童数(①)とか待機児童数ですが、やはり2011年4月1日と2012年4月1日では大きな差があります(②)。2012年4月1日が震災後の数字になります。震災の関係で、当初は30施設が休所していたのです。その後、廃止になってしまった

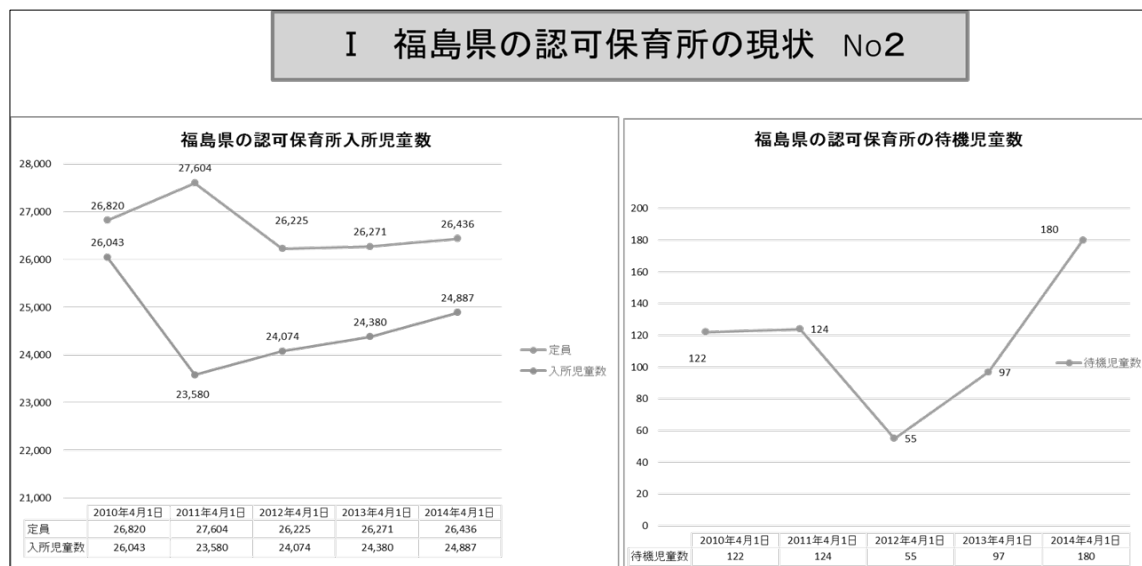
①



ところもあり、実際に子どもたちを預かる定員も減るし、実際に入所していた児童数も減ります。一番低かった時が、待機児童が 55 名です。

我々は、当初、避難されていた方が戻ってきてくれるのかどうか心配でした。この分、待機児童数はたぶんもっと下がってくるのではないかとも思っていました。福島県では子ども夢プランという、次世代法に基づく県の行動計画で、保育所等の整備の目標として、待機児童数を下げていきたいと思いますという目標にしたのですけれども、このときの 55 名をさらに下げたいという目標を立っています。

②



ところがずっと増えています。これは、我々としては、目標は達成できないけれども、福島県全体として考えてみれば、避難されている方々が戻ってきてくれている、こちらで生活してくれる子どもたちの数が増えているという一つの表れなので、負け惜しみではないのですけれども、少しはよかったかなという思いもあります。

次に、保育所の現状に移りたいと思います。震災以降やっと子どもたちも戻ってきているということですが、震災直後どのような対応をしなければいけなかったかということがあります(③)。今回私の資料で「保育の実施に関する事務処理の特例」というのがありますが、具体的には「東日本大震災における原子力発電所の事故による災害に対処するための避難住民に係る事務処理の特例及び住所移転者に係る措置に関する法律」と、すごく長い法律によります。これはいわゆる原発特例法です。

③

II 保育に関する震災対応について

1 保育の実施に関する事務処理の特例

○ 東日本大震災における原子力発電所の事故による災害に対処するための避難住民に係る事務処理の特例及び住所移転者に係る措置に関する法律に基づくもの。

(1) 保育所に関する事務処理について

特例法に基づく特定の事務の施行後は、避難先自治体が指定市町村の指定避難住民に関する「保育の実施」をすべて行う。指定市町村からの避難住民である児童等の「広域入所」はなくなり、避難先自治体に住所を置く住民と同様の取扱いとなる。

※指定市町村： いわき市、田村市、南相馬市、川俣町、広野町、楢葉町、富岡町、大熊町、双葉町、浪江町、川内村、葛尾村、飯館村

※避難区域の見直しが進んでいるが現在はこの取扱いによる。

(2) 保育料の徴収について

避難先自治体が、指定市町村から避難している住民の方から直接徴収することとなる。この場合、保育料は避難先自治体の保育料の規定に基づき徴収。

2 保育料減免事業

○ 東日本大震災に伴い、①前年と比して収入が減少した場合②不時のやむを得ざる支出が必要になった場合の事情により世帯の負担能力に著しい変動が生じ、費用負担が困難であると県知事又は市町村長が認めた場合。

さて、保育というのは現住主義ですよ。住民票がある市町村で保育サービスが受けられる。ただ、そういった住民票がなくても保育サービスを受け入れられる仕組みは原発事故の前からありました。皆さんご存じの広域入所という仕組みです。通常の例として、福島市と伊達市で考えてみましょう。福島市に住居があって生活している、働く場所が伊達市にある、利便性から考えると伊達市の保育所に預けたほうがそのお母さんは生活しやすい、働きやすいといった場合に、伊達市と福島市の間で、「わかりました、福島市の子どものみだけれども、伊達市の保育所に空きがあるから受け入れますよ」という調整をする。それは、福島市と伊達市の契約に基づいて、お金のやりとりは最終的に福島市が伊達市に払うようになります。これが広域入所という仕組みでの対応です。

一方、震災直後は避難されている方が県内外のいろいろな場所に避難されました。その先で措置をしなければならない場合、避難してきた側の市町村と避難元の市町村でうまく調整をとって、「広域入所をやってください」「わかりました、受けます」ということであるならば、その子どもたちは避難した先で法的にちゃんとした形で認可保育所に入所できるということだったわけです。ところが、これだけ広域にわたって被災している市町村がたくさんあり、避難されている方も非常に多くて、個別に各市町村同士でやりとりをしていたら、市町村がもたなくなります。そこで、「保育に関する事務の特例」が定められました。これで一応、被災地域として指定された市町村の保育の事務については相当軽減されていると思います。避難地域から避難してきたという保護者の方が、保育に欠けますと認定され、行った先で保育サービスを受けたいとなれば保育サービスは受けられるようになっています。

ところが、まだ問題が1つ残っています。井上先生からご説明のあった自主避難のケースです。自主避難のケースというのは、この原発特例法で救えません。子ども被災者支援法で救う道はあると考えられますが、まだ整備されていません。だから、個別に各市町村間で避難元の市町村と避難先の市町村で広域入所の手続きを取らなければなりません。そうしないと、きちんとした認可された保育サービスが受けられないことになってしまいます。

これは、県内の市町村にとってはやっていかどうか非常に悩みがちな問題です。というのは、自主避難の人に対する保育所入所を認めるとすると、たぶん保育の現場で子どもたちを扱っている皆さんからすると、避難してきた子どもたちを預かって、きちんとした保育サービスを提供するのは当たり前だと思うのです。私もその現場の立場だったら絶対そう言います。しかし、市町村や全体の行政を預かっている立場からすると、それはやってしまったとたんに、もう帰ってきてくれないのではないかと思います。自分の市・町・村の人口も減っていくということになると、将来的にみて自分のところの市・町・村の活力がだんだん落ちていく、自治体として成り立つのかなという思いが出てきます。したがって、自主避難の人に対して広域入所を決断するのは、実は首長さんにとっては大変な決断だったと思います。現在、県内の市町村は、自主避難の方についてはほぼ広域入所で対応していると思います。若干どうしても自分の市・町・村の方針からすると認められないといっているところはいくつかあるかもしれませんが、ほぼ自主避難の方の広域入所もできることになっています。

もう一つの震災対応の特例が保育料の減免の問題です。被災された方はある時期収入がぐっと減ってしまいますから、保育料を減免することになります。保育料を減免するとすると、市町村や私立の保育所は収入がなくなりますから、減免した分については国で補填することになっています。

次は保育施設等の災害復旧の話です(④)。建物や備品関係をどうしたらいいか。先ほど幼稚園の災害復旧の話も出てきて、壊れてしまったところをどう直したらいいかという話がありましたが、これも国ではお金を準備していて、児童福祉施設の災害の復旧補助金という形で、被災した建物等の復旧工事を一部補助することになっています。補助率というのは全部かかったお金のうちのどのぐらいを補助するかということです。保育所とか児童館というの

Ⅲ 保育施設等の災害復旧について

1 児童福祉施設災害復旧補助金によるもの

○東日本大震災による被害のうち、特に被害が大きいもの(事業費1件80万円以上、保育所は40万円以上)について、復旧工事費用の一部を補助することで、事業再開に向けた支援を行う。

※補助率 保育所・児童館等 3/4 (国2/4 県1/4)
放課後児童クラブ等 5/6(国4/6 県1/6)

平成23年度実績	14市町村	17法人	計49施設	76,942千円
平成24年度実績	1市町村	3法人	計 5施設	58,125千円
平成25年度実績	2市町村		計 5施設	12,183千円

2 子育て支援事業設備等復旧支援事業費補助金によるもの

○東日本大震災により事業の継続が困難となった事業者に対して、新たな活動場所の賃貸や従来の活動場所の修繕等の費用を支給することで、早期の事業再開を支援する。

※ 補助基準額 (補助率10/10) 新たに賃貸物件を借りて再開する場合 2,210千円
新たに賃貸物件を借りずに再開する場合 2,000千円

平成23年度実績	160施設	174,754千円
平成24年度実績	4施設	2,685千円

は、補助率が4分の3で、残りの4分の1は事業者の負担、あるいは市町村立であれば市町村のほうが負担しなければいけないことになります。

今回の事故は自分のせいではないのに全部補助がもらえないのかという話が出てくるのですが、限りある財政的なことを考え、ある程度自己負担をしてくださいということになっています。そこで補助率の話になるのですが、災害復旧の補助率は実は結構高いのです。通常の保育所などを建てる時は、2分の1ぐらいしか国や県からお金が出ないというのが普通です。ですが、災害復旧する場合には、国でもきちんと補助しなければいけないということで、補助率を高くして4分の3になっています。もし負担金、つまり国が法的に負担しなければいけないのであれば、国も県もそのお金は絶対負担しなければいけません。一方で、補助制度というのは、何かあったときにそれを応援しますということなので、予算の許す限り補助するという形になります。負担金と補助金でちょっと性格が違うというふうにお考えいただきたいと思います。

さて、具体的にスライドで見ますと、1番目が児童福祉施設の災害復旧補助金で、どちらかというと、建物のほうを直すときのお金です。

2番目の子育て支援事業設備等復旧事業の補助金というのは、園舎が壊れ、仮の場所を借りて子どもを預かるようにした場合等に、場所を借りるお金や緊急避難的に遊具等を準備場合に、こちらの補助金を出している格好になります。

年度ごとの実績を見ていただくとわかるように、平成23年度が一番実績が大きいです。それは当たり前で、震災直後で、一番早く復旧しなければいけないわけですから、お金もたくさんかかる。平成24、25年度になるにしたがってお金はだんだん少なくなってきています。

通常は自然災害などであれば、ここまでは災害復旧のお金で本当は済んでいるはずだったのです。例えば地震や津波によって園舎が壊れて、それを直します。何かもか完備できました、そこで運営を開始して子どもたちも預かるようになりましたと、それでいくはずだったのですけれども、今回は原子力災害の関係があったのでこれだけで済まなかったのです。

それで、子どもを守る緊急プロジェクトとして、前の県知事の佐藤雄平知事が緊急プロジェクトの宣言を出したのが平成23年7月です。7月ですから、皆さん、遅いと思いますか。3月11日にいろいろ事故が起きて、その後すぐに原子力災害が起きて、非常に困っていて、たぶん放射性物質が飛びました、では環境回復しなければなりません、除染もしなければいけない、もっと早くやってよ、という思いがあると思います。だから待ってられないから、例えば渡辺先生のところで、緊急避難だ、このプロジェクトが始まってしまう前に市と考えて早く除染しなければ、ということで済んだのかもかもしれませんが、ただ県のほうの立場か

らすると、全部の広域市町村というか、被災地域の市町村を集めて考えて、それからそれを保育所の状況がどうなっているか、あるいはどこまで除染をすればいいのか、どのぐらいお金を取ったらいいのかというのをまとめながら、最終的には国と調整をしないと行けなくなってしまうということになると、申し訳ないけれども、これぐらいの時間はかかってしまうことになります。

それで、この緊急プロジェクトの中で何をやるかをスライドに示しました(⑤)。まず、学校の安全・安心を守るという中で校庭等の表土改善の改良事業というのがあります。この中で保育所の表土改善事業をやっています。実際は各市町村にお金が出ていますので市町村で各保育所や幼稚園の表土の改善、はぎ取るとか、そういったことをしていただくことになります。

ただ、私学法人の場合には、市町村経由ではなくて、直接、県の私学法人を担当しているセクションがあり、そこから最終的には各幼稚園に補助を出しているケースもあるかもしれません。あるいは、市町村の経由で今回は全部一緒にやったというケースもあるかもしれません。

それから、線量を低減化しなければいけないということで、高圧洗浄機できれいに洗い流したりもしています。夏の暑い時期に外部被ばく、外のちりがどうなっているかわからないから窓を閉め切って生活しているような状況でした。そこで、子どもたちの生活を守り、環境を良くするために、エアコンや扇風機を緊急的に設置しました。その分も予算措置をしました。

補助金の場合には、「こういった事業が必要です」「わかりました。ではお金を使っていいですよ」と決まってから事業をスタートしてもらった分についてお金を出すというのが通常の流れです。なぜそんな順番になってしまうかというと、県や国から補助金に来て、それがあって初めてできることになります。その前にやってしまったものは、県や国からお金がなくともできるのではないかなってしてしまうのです。しかし、今回の原子力災害の場合には、場合によってはさかのぼりもある程度認めています。場合によってです。通常思っていたよりも相当お金をかけてしまった場合等、どこまで対応していいか基準をつくるのも非常に難しかったわけです。除染をするにしても、では、どこまできれいにすれば納得してもらえるのか、当時は、まだ国のほうでも除染の基準などを明確に示していない時期に始めてしまったところや、線量が低かったけれどもやってしまったとかということもあるわけです。そうすると、何か基準を決めなければいけないので、その基準をあてはめた場合、既にやって

⑤

IV 子どもを守る緊急プロジェクト	
1 学校の安全安心を守る	
○校庭等土壌緊急改良事業	学校、保育所、放課後児童クラブ、児童養護施設、障害児施設など679施設で表土除去等を実施済み。
○線量低減化機器等整備事業	学校、保育所、放課後児童クラブ、児童養護施設、障害児施設などに対して、高圧洗浄機について1,216施設、泥落としマットについて1,234施設実施済み。
○校内環境緊急改善事業	学校、保育所、放課後児童クラブ、児童養護施設、障害児施設などに対して、エアコンについて759施設、扇風機について711施設実施済み。
2 暮らしの安全安心を守る	
○モニタリングポスト緊急整備事業	平成24年4月2日より、可搬型モニタリングポスト(発電所周辺及び県内全域)525台、リアルタイム線量測定システム(学校、幼稚園、保育所等)2,700台の本格運用開始。
○線量低減化活動支援事業	通学路等の除染を行う町内会やPTA等3,107団体に対して執行済み。
○都市公園環境緊急改良事業	821公園について表土除去等を実施済み。
3 子どもの健康を守る	
○線量計等緊急整備支援事業	・個人線量計の配付・貸出及びサーベイメーターの整備について全市町村で実施。 ・子ども向けリーフレット26万部、大人向けリーフレット2万7千部を配付。
○ホールボディカウンタ整備事業	・ホールボディカウンタ5台を導入。 ・指定区域をはじめとして福島市、郡山市、いわき市、白河市、須賀川市、伊達市、鏡石町、天栄村を対象として検査実施しており、31,287人について実施済み。
○県民健康管理事業	・基本調査について、浪江町等の先行調査は54.9%、全県民調査は21.8%の回収率(3/22時点)。 ・詳細調査として甲状腺超音波検査については指定区域等の先行調査で32,511人に対して実施済み(3/22時点)
4 子どもの元気をを守る	
○ふくしまっ子体験活動応援事業	・ふくしまっ子体験活動応援 参加者総数39万7,881人(うち子ども32万3,601人) ・自然の家体験活動応援 参加者総数2,693人(うち日帰り1,723人、宿泊970人) ・移動教室体験活動応援 参加者総数6万5,842人(うち子ども6万1,120人)

しまっていて基準にははまらない分については、対象外にするほかない。ちょっとやり過ぎだったのですと言ったら怒られるのですけれども、せっかくやったのに、先んじて子どもたちのためにやったのに、国とか県からお金がもらえない、何なのかというご不満はあるかもしれませんが、どこかで基準を引いてやらなければいけないものなのです。

それから、健康調査のほうもいろいろやっていますけれども、緊急プロジェクト、これだけでも済まなかった。

その次が給食の安全・安心の確保の話です(⑥)。幼稚園のほうは、たぶんお弁当とかがある場合だったらまだよかったかもしれないですけれども、保育所は給食を出さなければいけないわけです。その安全をどうしたら確保することができるかです。

先ほど渡辺先生から、震災の対応で、文科省と厚生労働省のそんな枠組みは取り払って、なんで同じ子どもたちなのに一体的に対応してくれないのかというお話がありました。これは非常に行政側としては反省すべきというか、県としてももっとうまく対応できればよかったなと思っていますが、どうしてもこの国の予算のつくり方というのは省庁ごとなのです。したがって、教育法に基づいた学校教育・幼稚園教育については文科省の予算を取ります。それに伴い、学校給食の安全のために要する予算は文科省で取るのです。保育所については児童福祉法の世界なので厚生労働省の話になります。厚生労働省で予算を取るようになります。

それで足並みをそろえてくれればいいのですけれども、どうしても省庁間での時間のずれが出てきたりします。今回の場合は、先に文科省が予算措置をしました。平成23年12月22日に県から厚生労働大臣と文科大臣に要望を出しています。これは遅いのではないかと怒られるかもしれないですね。放射性物質が心配になっていて、お米の全袋検査などをする前です。野菜等はモニタリング調査していて、基準値を超えたものについては流通させないということにしていたから、行政側としては、流通している食品については一応安全でしょうということでした。給食で使っていただくのは、よほど地産地消で地場産品を使うとか、自分のところの野菜を使うとかというのでなければ、市場から出回っている野菜でしょう。それは、サンプリングや調査をしていて、放射性物質が出ていないものを使っていただいています。ですから大丈夫ですよというような原理原則といいましょうか、があったので、ここまで遅くなってしまったということです。

⑥

V 給食の安全・安心の確保	
1 給食食材検査体制整備に係る経過	<p>H23.12.22 厚生労働大臣、文部科学大臣に要望 H24.1.28 平野復興担当相が来県し知事と会談⇒学校給食検査整備は原子力災害応急対策基金で対応 H24.2.10 県は2月補正予算で学校給食検査体制整備事業に13億円計上 H24.3.27 厚生労働省から安心子ども基金の活用が可との連絡 H24.5月 市町村に意向調査実施。県は6月補正予算に16億1千2百万円計上</p>
2 事業の概要	<p>○ 保育所等の給食に使用する食材の検査を実施する市町村に対して、検査機器購入費、検査作業を行う要員の人員費、委託料、検査に使用する食材(試料)代、検査機器(県補助分)の公正・修理費用を補助</p> <p>※ 児童福祉施設等、障がい児施設等に対して同様な補助を実施している。 ※ 平成25年度までは「安心子ども基金」を財源として実施し、平成26年度からは国の「被災した子どもの健康・生活支援対策等総合支援事業」を財源として実施している。</p>
3 事業の実績	<p>○平成24年度 補助市町村:37 補助実績額:242,038千円 ○平成25年度 補助市町村:39 補助実績額 212,812千円 ○平成26年度見込み 補助市町村:38</p> <p>※ 残り19市町村の状況 7町村:独自検査を実施、2町:検査を実施する学校給食と同じ食材を使用、4町:保育所の再開の見込みが立たない、 2町村:保育所がない、4町村:放射線の影響が少ない地域で検査を実施していない。</p>

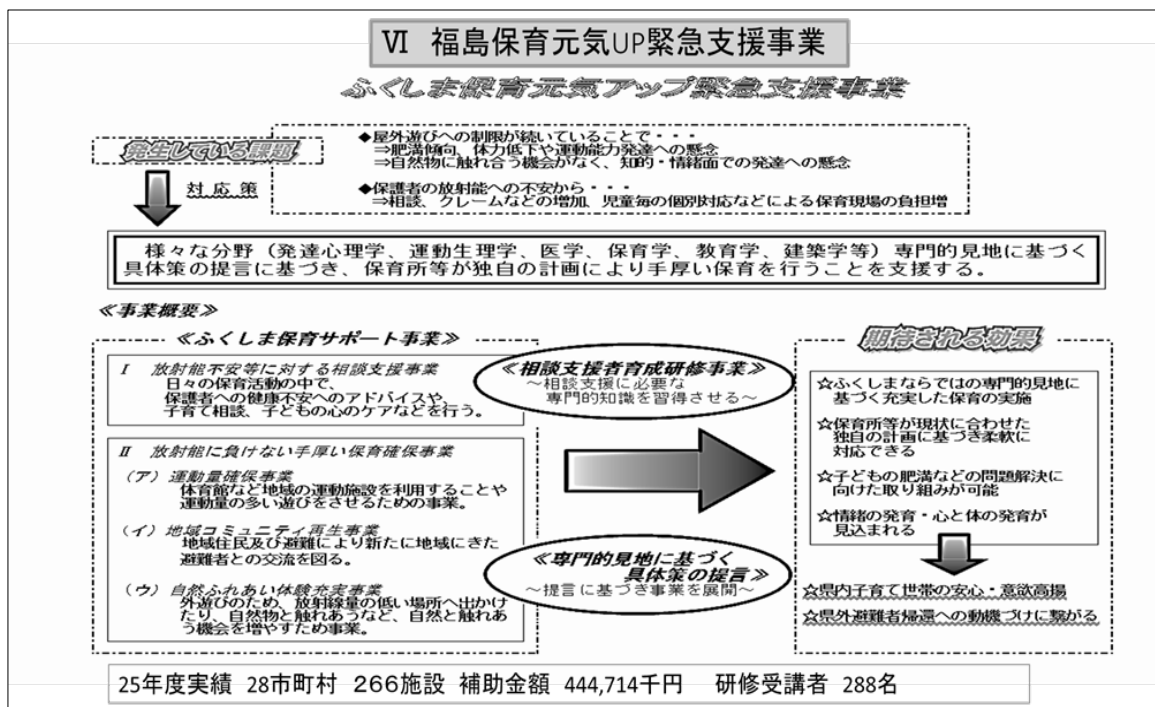
ただ、それでも保護者の方は納得しません。本当に大丈夫なのかという声が沢山上がりました。先に文科省で学校給食のモニタリング検査の予算は措置をしたと述べました。我々としては、文科省で認めたのだから、厚生労働省も早く保育所の給食の検査も認めてくださいと実は調整をしていました。

それで、平成24年3月になって厚生労働省から安心子ども基金というお金を使っていいとなったので、やっと県としても6月の補正予算を組んで、各市町村で保育所の給食を検査する場合には、その検査の機器や検査の試料代、その検査に携わる人のお金は出していいとなりました。これだけ時間がかかるのです。もっとスピーディにできなかったのかという反省はありますが、それでも限界だったのかなどというのはあります。こんな事故とか災害は起きてほしくないですが、たぶん、もし次に起きたときには、もっと速やかに対応しなければいけないという反省にはなるかと思えます。

次に、これは保育の現場の先生方から不満のでる事業だったかもしれませんが、福島県ならではの事業ということで「保育元気アップ緊急支援事業」というのを立ち上げて実施をしています(⑦)。このねらいは、まず放射線の健康影響とかの問題の健康不安が非常に強くてなかなか払拭されない、親御さんたちも心配で、いろいろな情報が専門家の方から飛び交うが、何を信用していいかわからないといったときに、一番スタンダードというか、世界的に認められた、極端なことも言わない先生のお話が、たぶん今だったら一番迷いなく聞いてもらえるだろうと思いました。保育士の皆さんにまず聞いてもらい、納得してもらえるのであれば、それを基に保護者も相談を受けてくださいということで、相談事業もやる。それから、外遊びもできない、自然に触れ合うこともできない、いろいろコミュニティ活動もできないという状況になっているので、相談支援活動をしながら、保護者にも納得してもらって、いろいろな外遊びをするとか運動不足を解消する事業をするとか、そういった事業をしていただくのであれば、通常かかる、通常やっている保育サービスにプラスしてやらなければいけない事業なわけだから、その分、お金がかかりますよね。それについては県としても準備しましょうということで始めた事業です。

ただ、これは役所からすると、やはり皆さんの税金とか何かから使わなければいけないお金なので、通常皆さんが思うよりも細かい事務手続をお願いしなければいけない。何にでも使えると思ったのに、こんな遊びをやってはだめなんですか、こんな遊具を買ってはだめな

⑦



んですか、という話が結構あつたりします。子どもたちにリフレッシュしてもらうための児童劇とかを見てもいいですよ、それにお金を使ってもいいですよといったのですけれども、すごくお金がかかってしまうタレントさんが来てしまうようなイベントに使っていいという話は勘弁してねとか、そういうのがありまして、我々としてもやはり税金を使わせていただいているという関係もあつたので、当初皆さんに言っていたよりも厳しめにお金の使い方を制限してやっております。たぶん市町村の担当者も現場の人とやりとりしながら県にお金を申請してくると、最初聞いていたのと話が違う、ずいぶんこんな細かい書類まで出さなければいけないの、というふうに非常に不評だったということもあるのですが、一応我々としても考えた事業だったので、そこはちょっとご理解をいただければと思います。

国の予算措置はまだ続きます。名前は変わりましたが、平成27年度以降もこういった自然体験活動やコミュニティ活動や運動量確保の事業はやれます。ただし、市町村経由でやるので、やりますと言ってくれた市町村でないのだめなのですが、まだこの事業を活用できるので、平成27年度以降も取り入れていただきたいと思います。

最後に、平成27年の4月から、子ども子育て支援制度への対応についてお話しします(⑧)。ざっくり言ってしまうと、新しい制度だと市町村が自分のところで今後5年間の保育所や認定こども園や幼稚園の必要量をまずニーズ調査をします。それで、今現在自分の市町村では幼稚園や認定こども園や保育所がどれだけあるかというのを把握しますから、足りる、足りないはわかりますよね。足りない場合には、今後5年間で整備しなければいけない。今後5年間のうちに何らかの形で整備して、待機児童等がないようにしなければいけないという形になります。

そうすると、きちんとした数字でもって計画をつくらなければいけないということになります。ところが、被災3県、特にうちの県の場合は、原発地域で避難した市町村はそんな数値目標など立てられるわけがありません。だっていつ避難地域の解除になって戻って来られるかわからないし、どれだけ保護者や子どもたちが戻って来てくれるかわからないわけですから、そんな数値目標というのは立てられるわけがありません。これは我々としても国とやりとりをして、法律の通った後の計画をつくる上での基本指針の中に東日本大震災で甚大な被害を受けた市町村の場合には、弾力的な取扱を行ってもいいとなっています。そこで、今後うちの町が何年後にはここに帰ってくる、そのときにはこういった保育サービスを提供するつもりですというような計画を立てていただければいいということになっています。

あともう一つ、県でやったのは、避難している市町村に、全国各地に、県内も合わせてで

⑧

VII 子ども子育て支援制度への対応	
1 「子ども子育て支援法に基づく基本指針(案)における配慮	<p>○ 「第三 子ども子育て支援事業計画策定に関する事項」の「六 その他」に「5 東日本大震災による被害が甚大であった地方公共団体における子ども子育て支援事業計画の作成等の取扱いについて」が盛り込まれている。</p> <p>※ 「東日本大震災により甚大な被害を受けた市町村であって、将来の見通しを立てることが極めて困難なものにおいては、市町村子ども子育て支援事業計画の作成に当たって、その実情に応じ、弾力的な取扱いを行っても差し支えないこととする。」</p>
2 「東日本大震災における原子力発電所の事故による災害に対処するための避難住民に係る事務処理の特別及び住所移転者に係る措置に関する法律」に基づく特定の事務に追加（平成26年10月15日付）	<ul style="list-style-type: none"> ○ 市町村の支給認定事務(子ども子育て支援法 第20条) ○ 施設型給付費及び地域型保育給付費の支給事務(同法 第27条及び第29条) ○ 特定地域型保育事業者の確認(同法 第43条) ○ 特定教育・保育施設及び特定地域型保育事業に関する市町村によるあせん及び要請(同法44条及び第54条) ○ 私立保育所にかかる委託費の支払等(同法附則第6条)

すけれども、子どもたちがどのくらい避難しているのか、把握をできるだけしてくださいとお願いしました。我々としてはそれを都道府県ごと、市町村ごとに集計をして、避難した先の市町村にデータをお送りしています。避難した先の市町村は、我々から提供させていただいたデータをもとに、それも加えてご自分のところの保育サービスの提供の計画をつくってくださいとお願いしてきました。そうしないと、被災した先で、もしかしたら保育サービスを受けられなくなってしまう可能性もあります。その推計から漏れてしまいます。そういった情報提供もやっています。

それからもう一つ、新しい制度が今度動き始めると市町村に新しい事務が増えてしまいます。例えば1号認定、2号認定、3号認定という形で、保育が必要なのか、あるいは幼稚園の教育を希望しているのか、認定しなければいけません。それを先ほどの原発被害者特例法の特例事務の中に入れておかないと、避難元の市町村が避難先に行ってそれぞれの住民の方のことをやらなければいけなくなってしまうわけです。そんなことは無理なので、新しい制度の中でも市町村単位でやる事務で必ずやらなければいけない事務を、ここに全部で5つほどあるのですけれども、そこについては、避難先の市町村にやってもらうという特例事務にしました。これで、一応新制度についても何とか事務の負担軽減にはなっているということです。

私が準備した資料はここまでですが、現場で子どもたち、保護者の皆さんと向き合って保育サービスなり幼稚園教育をされている皆さんからすると、行政の仕事というのはこんな堅苦しいのかなということになるかもしれません。しかしながら、システムを動かすためには財源のやりくりとか仕組みを整えるというようなことがあるということをご理解いただければと思います。ご清聴、ありがとうございました。

V 現場の実践者との交流・意見交換記録

4つの話題提供の後に7～8名からなるグループごとに、意見交換を行った。各グループは、福島県内の保育者や行政職、NPO職員、保育者養成校の教員、および県外からの参加者が均等になるように、参加者の名簿をもとに予めメンバーを決めておいた。以下に、各グループで出された意見のうち、特徴的なものや共通して出されたものを記したい。

1. 震災時の対応について

- ・避難する家庭が多く、園が成り立たないくらいだった。
- ・保育を続けるかどうか等、私立は行政指導がないため、私学課に問い合わせると、「私立なので自分達で判断してくれ」という回答だった。
- ・救援が来ず、電話もできなかった時は、TV局に直談判し、テロップを流してもらったり、パソコンから全職員、全保護者に連絡をとった。しかし、全保護者に発信する手段はなかった。
- ・危機管理は体験しないとわからない。
- ・避難所にいる子ども達は、最初のうちはよかったが、そのうち大人のストレスが大きくなり、子どもにぶつけるようになった。そこで、私立幼稚園で募集に行ったりした。
- ・クラスの中で、避難する子、残る子がいて、それぞれの思いを持っているようであった（残る子は複雑な思いをもっている子が多い）。
- ・除染を頼んでも間に合わないので、保育者自ら除染作業を行ったり、保護者に頼んで行ったりしていた。

2. 震災後の保育について

- ・放射線量が何マイクロシーベルトだから安心だというのではなく、それぞれの立場や状況で、安心や安全は違うのだとわかった。
- ・外遊びはできるようになった。散歩は線量をはかりながら行っている。
- ・平成26年9月から砂遊びを開始したが、保育者自身が砂遊びを忘れてしまっていた。子ども間での砂遊びの伝承が消えると危惧していたが、途絶えはしなかった。ただし、最初は砂に入ることを怖がる子どももいた。
- ・外遊びの伝承がなくなった。保育者が伝えていかねばと思っている。
- ・屋内遊びは様々な工夫もした。室内遊びの伝承はなされやすかったようだ。
- ・室内での保育であることにより、保育者がみる範囲が限られ、子どもをまとめやすかった。しかし、それがよいか悪いかは難しいところである。
- ・子どもの聞き分けがとてよくなった。室内遊びだけになり、ルールが多くなったり、保育者の話を聞くことが多くなったりしたことがあるのではないかな。
- ・外に出たいから、その前はちゃんと言うことを聞くというのはあった。
- ・家庭でも聞き分けがよいらしい。家庭での制約もあったのではないかな。
- ・外で遊ぶというのは、体力だけでなくいろんな感覚・感情を得ている。子ども達がすぐに「疲れた」というのも、これは体力の問題だけでなく、外でばーっと遊んで気持ちいいなと感じるような感覚を味わえないために、すぐに疲れたということになるのではないかなと思う。
- ・平成26年から運動会は外で行うことができた（まだ室内というところもある）。
- ・外に出られないときは、室内で体を動かすような保育を積極的に取り入れたが、その子ども達が小学生になって、運動会で転ぶ子が多いと言われた。外で走る経験が1年少ないからなのか。

- ・保護者の温度差は大きかった。しかし、今はその声も少なくなった。
- ・園の線量や散歩コースの線量掲示、給食も毎日モニタリングを行っている。外遊びやプールも保護者にアンケートをとり、全員が了承したので今は制限なしで外遊びを行っている。
- ・放射能のせいで外に出られないジレンマで落ち着かない男の子がいた。除染の方が、「おじちゃんが放射能やっつけてやるからな」と言ってくれてから、除線の方が彼のヒーローとなり、園生活の中で安定して過ごせるようになった。
- ・子ども達が地震ごっこや避難ごっこをしていて、やめさせた方がよいのかと思っていたが、胸の内をさらけだすためにどんどんやらせた方がよいと言われた。子ども達は自分の経験をもとに遊んでいたが、6月くらいで終わった。

3. 現在の子どもの育ちについて

- ・今受け持っている3歳児は、大人びた口調だが、おむつははずれていない等、心理面と身体面の育ちにアンバランスさがみられる。保護者の意識も、おむつは保育所がはずすものということがあるからなのか。
- ・親に守られすぎ、いざというときに判断できず、子ども同士の問題を保育者に言いつけに来る。
- ・これからの子ども達はだんだんと落ち着いているため、自然体験などもできるだろう。問題は震災と今との間に育った子ども達。この間に育った子ども達は体験、経験すらできていない。そのためこれから問題がみえてくるのではないか。
- ・放射能に対する父・母の言葉が子どもに影響を与えていると思う。

4. その他

- ・最近やっと普通の生活に戻りつつあるので気持ちが明るくなってきたが、こうして振り返りをするとどうしても元の気持ちに戻ってしまうところがある。
- ・こういう場に、行政から小川先生が来て、話をしてくれたことにすごさを感じた。こういったことが歩み寄っていることの1つだと思った。
- ・行政は簡単に動けないのはわかっているし、言いたいこともわかるが、震災時は型を破ってでも柔軟に対応できないのかと思った。
- ・他県から支援の1つでどんぐりをもらった。折角いただいたので使わせてもらったが、あげたどんぐりどう使っているかを先方から聞かれたときに、支援とは何なのかと考えてしまった。お礼状を催促されたり、使用している様子を写真で送ることを求められたところもあった。
- ・園では安全といわれているので子どもを外でも遊ばせている。しかし、2歳の娘がいる保護者の立場になると、何年か後に「やっぱり危なかった」といわれたらどうしようという不安はある。ずっとこの不安とつきあっていかなければならないのだろうか。
- ・マスコミは、必要な情報を流してくれるというより、視聴率がとれるような番組の作りになってしまっている。そこに踊らされないようにしなければならないと思う。
- ・福島放射線教育というのが必要になってくると思う。

なお、当日の参加者に自由記述で書いてもらった感想は以下のとおりであった。

- ・様々な立場の方々からの意見が聞けて、とても勉強になりました。
- ・いろんな立場の方がシンポジストになられ、各々に問題があったことを知ることができた。
- ・現場のご意見や現状を知ることができ、大変参考になりました。定期的にこのテーマで、意見交換会を開いていただければと思います。

- ・4人の先生方の話を受け、改めて3.11を考えさせられました。今後の保育の中でも3.11を忘れることなく、避難訓練等を大切にしていきたいと思います。
- ・今日はありがとうございました。「福島という土地・人々の力強さを感じながら報告を聞くことができ、意見交換の場がもてたことは参考となりました。
「子どもたちに放射線について」どのように伝えていくかが課題となると感じました。
- ・シンポジウムでは、様々お立場で話をさせていただきとても良かったのですが、どちらかというと、大人の立場からのお話だったので、もう少し子どもの実態をお聞きしたかったと思っていたところ、意見交換会でお聞きすることができました。時間が短かったのが、少し残念です。
- ・今後の日本保育学会の研究・研修に期待いたします。
- ・パネラーに保護者の方もいらっしゃると良かったと思いました。保護者の不安・心配・希望なども知りたかったです。
- ・自分の日頃の保育の話が少しでも参考になれば幸いです。次回も参加させて頂きたいと思います。
- ・今日は色々と参考になる話を聞いて良かったです。それぞれの熱い思いを大切にしたいなと改めて感じました。ありがとうございました。
- ・視野を広げる機会を得た。避難先の家族や園、行政などについて。
- ・途中から（意見交換会）参加いたしました。幼稚園・保育所の子どもたちのことは、新聞等で聞く程度でしたので、園長さんたちから直接、生の声が聞いて良かったと思います。
- ・福島県の子どもたちにとっての今後・・・というところで考えるところがあり、参加いたしました。放射線についての正しい知識を与えたいという考えをもっています。渡辺先生のお話、共感しました。幼児向けの絵本の活用、今後必要かと思います。福島県の現状から、この3年数か月の影響は、運動不足も大きな影響ですが、保育士が制限する保育に慣れてしまうことの影響は目に見えない怖さです。本来、主体的に遊んでいる子どもたちの遊びを、途中で中断してしまうことを継続して行ってきたことで、子どもたちの主体性に大きな影響を与えたことが事実だと思うのです。
- ・様々な視点から見ることで、それぞれを合わせて見られたら、理解が深まると思いました。大変勉強になりました。ありがとうございました。・現場から、避難先から、行政から、それぞれの場面・立場から震災についての状況・対応について知ることができた。また、各園についての状況を知り、自分の園との比較ができたり、放射能に対する保育の新たな視点が聞けた。本当にありがとうございました。
- ・4人の先生方より貴重なお話を聞かせていただき、ありがとうございました。意見交換会では、多くの先生方の「想い」を聞かせていただき、「また福島のお子さんのためにがんばるぞ！」という気持ちが変わってきました。さあ、月曜日から保育を楽しむぞ！！福島の子を日本一にしよう！！
- ・震災から3年以上経ち、今後私たちは現場でどう保育していくべきか、それを課題としていかなければと思います。震災からのお子さんの変化を知り、今比較しながら、以前よりももっと進化できる保育をしていきたいと思いました。
- ・今まで放射能災害における研修会に何度か参加しましたが、同じ地域の方の集まりが多かったので、今回は色々な地域の方から経験談をお聞きすることができ良かったです。放射能という見えない敵と戦いながら日々保育することは、3年経った今も大変ですが、お子さんたちの将来を考え、今できることを精一杯行っていきたいと改めて感じました。
- ・かしま幼稚園新妻先生、渡辺先生のお話は現場の当時の状況も含めてのお話で、必死だったあの時のことが思い出されました。でも、今前向きに進もうとする自分もいて・・・

改めて自分の周囲にある課題に気付かされたと思います。小川先生におかれましては、行政サイドのお話を本音(?)も含めお話しいただいたこと、このようなシンポジウムではとても貴重でした。ありがとうございました。

- ・ディスカッションでは、現場の保育士・園長先生の具体的な事例が聞けて大変良かった。パネラーの先生方の話は、震災から現在までの問題を今一度思い出すことができた。
- ・井上先生のお話を興味深く伺いました。被災者の思いを汲み取った支援をしていくことは、結果としてその事態のもたらす影響をきちんと浮き彫りにすることだと思います。しかし、現実には支援は支援する側の自己満足になっている場合も多いように思います。そこで何が求められているのかを的確につかむことこそが大事であり、そこから今後につながる学びを得ることができるのではないのでしょうか。問題を終わったことにせず、きちんと明らかにしていくためにも、先生には発信をお願いします。こういう支援ができるのは、北海道ならではでしょうか。よそ者を排除せず、広い気持ちで受け入れてくれる同志があればこそと思います。
- ・保育の現場の先生方だけでなく、大学の先生方や、行政で働いている方々の話を聞くことができ、大変勉強になりました。交流の時間では、経験のある先生方と直接お話できる機会となり、自分の中には無かった保育の視点や考え方に触れ、もっと努力していくこと、情報を得ることが必要だと感じました。ありがとうございました。
- ・福島県の保育現場の方々への生の声を、短時間であっても聞かせていただき、とても勉強になりました。本当はもっともっとお話をお伺いしたいと思いました。このような機会を設けて頂きまして、大変ありがとうございました。
- ・福島県であること、この震災と東京第一原子力発電に、こんなに(3年9か月)過ぎても当日の事に対して、自分の立場から幼い子等を守った教職員は涙が流れる。涙を流せるのは、心に余裕が出てきたからだろうと思う。未来の光の中で子を育てる事。それ以上に保護者とのコミュニティーが大切であること。今日の席は、皆同じ経験・体験をした仲間の話し合いは、よく心に響きました。
 - ・3.11の原発の影響の中で、この3年間、これから育っていく子どもたちの心や体のこれからの影響が心配です。段々、普通の生活に戻っているように見える日常で、忘れないでケアしていく必要があるのではないかと考えています。何が必要で、どんな援助・支援をすべきなのか、見えてくることを願っています。
- ・本日は貴重な機会を作ってくださいありがとうございました。ぜひ今後も継続して、このような研究集会を開催していただきたくお願い申し上げます。福島の保育の「今」を知ることの重要性を感じました。
- ・とても有意義な時間となりました。もっとじっくりグループとして話をしたいと思いました。
- ・4人の講師の先生方から、様々な視点からのお話が聞けて勉強になりました。お話の中で、現場でできることの限界、行政でできることの限界があるという話もあり、子どもにとって良い環境を作ることの難しさを感じました。保育所・幼稚園でできること、実践的な活動の事例等あれば、もっと日々の保育に活かせるかなと思いました。

(原野明子・堺 秋彦・佐藤菊子)

第2章 研究協力園保育実践調査報告

賀門康博・田中三保子・伴 浩美・渡邊 望

<調査概要>

福島県の中心方部（中通り地方）である福島市と郡山市から計7つの協力園（私立幼稚園<福島市3、郡山市4>）を抽出。アンケートによる回答を分析した。

調査時期 依頼：平成25年4月 回収：平成26年3月（一部平成27年3月）

アンケートの内容は以下の3点である。

- ①平成25年度の保育実践状況
- ②災害後4年間の保育実践状況の経過
- ③保育者の保育への取り組みと振り返り（今後への課題等）

①については園全体の保育の方向性を見るために、基本的なカリキュラムについて、記述方式での回答を依頼。

②、③については各保育者に記述方式で気づいた点を中心に回答を依頼。

<分析方法>

それらの回答を次の二つの方法で分析し、現状と今後の課題を分析した。

1. 読み取り … 内容を読み取り、記述について背景などの解釈を加えて整理し分析しつつ、各項目に対してラベル付け（コーディング）を行い、分析を行う
2. テキストマイニング … テキストマイニングについては同ソフトを使用)によるテキストマイニングを行い、解釈を行う。分析ソフト(使用ソフト：TRSUTIA MiningAssistant(ジャストシステム社))

最終的にそれらを総括し、それぞれの項目について考察を行う。

本調査の前に、平成23年度調査分析結果としての保育者の相関図を以下に記載する⁽¹⁾。

平成23年度調査分析結果による、保育についてのとらえ方の変化の概要図

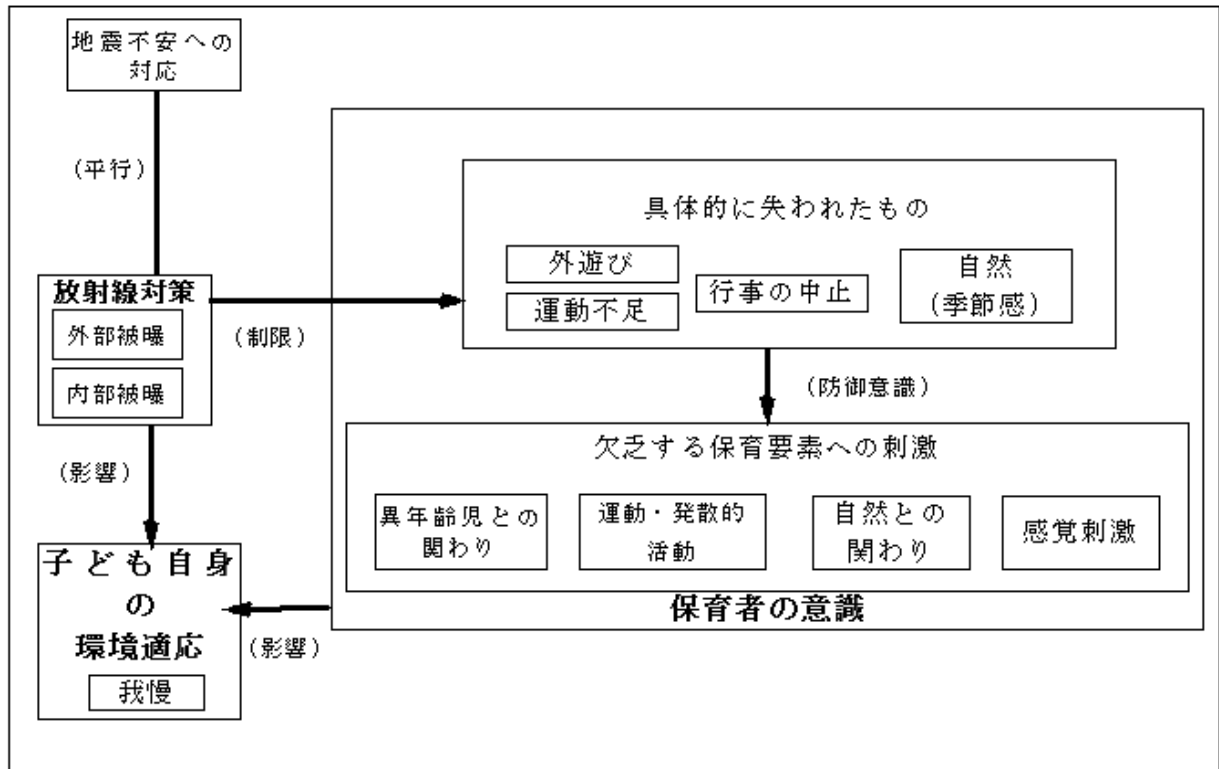


図1 平成23年度 1学期 (4～7月)

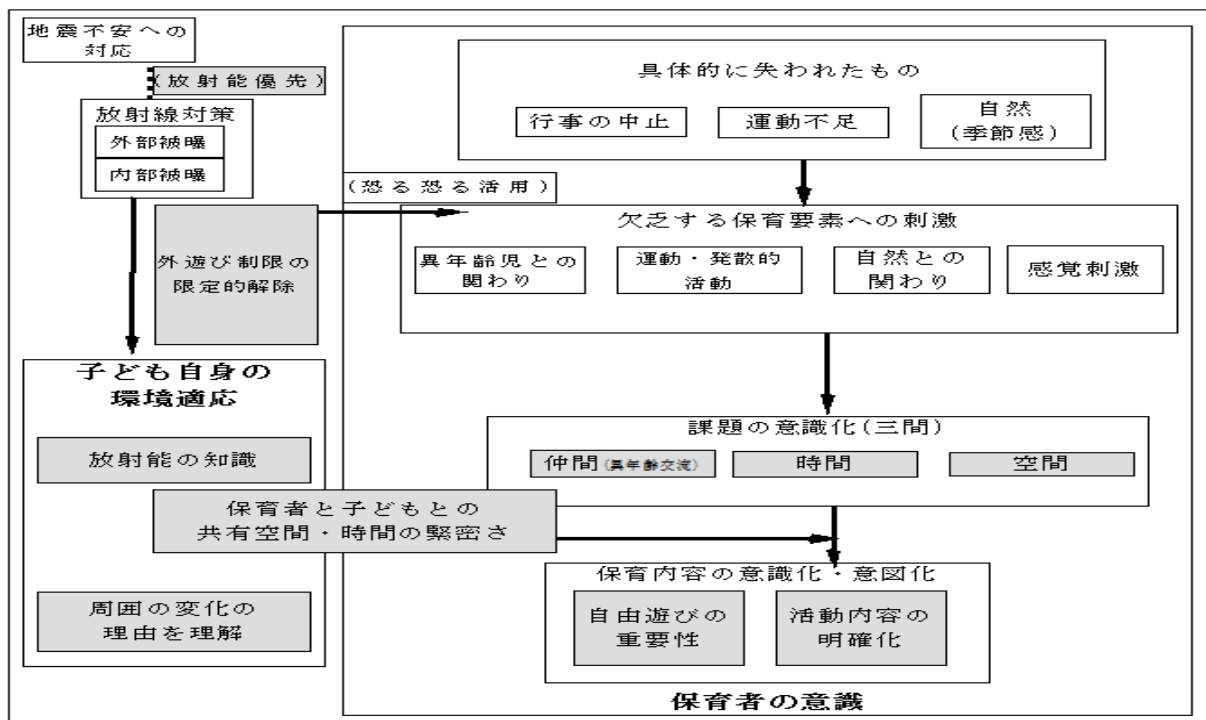


図2 平成23年度 2学期 (8～12月)

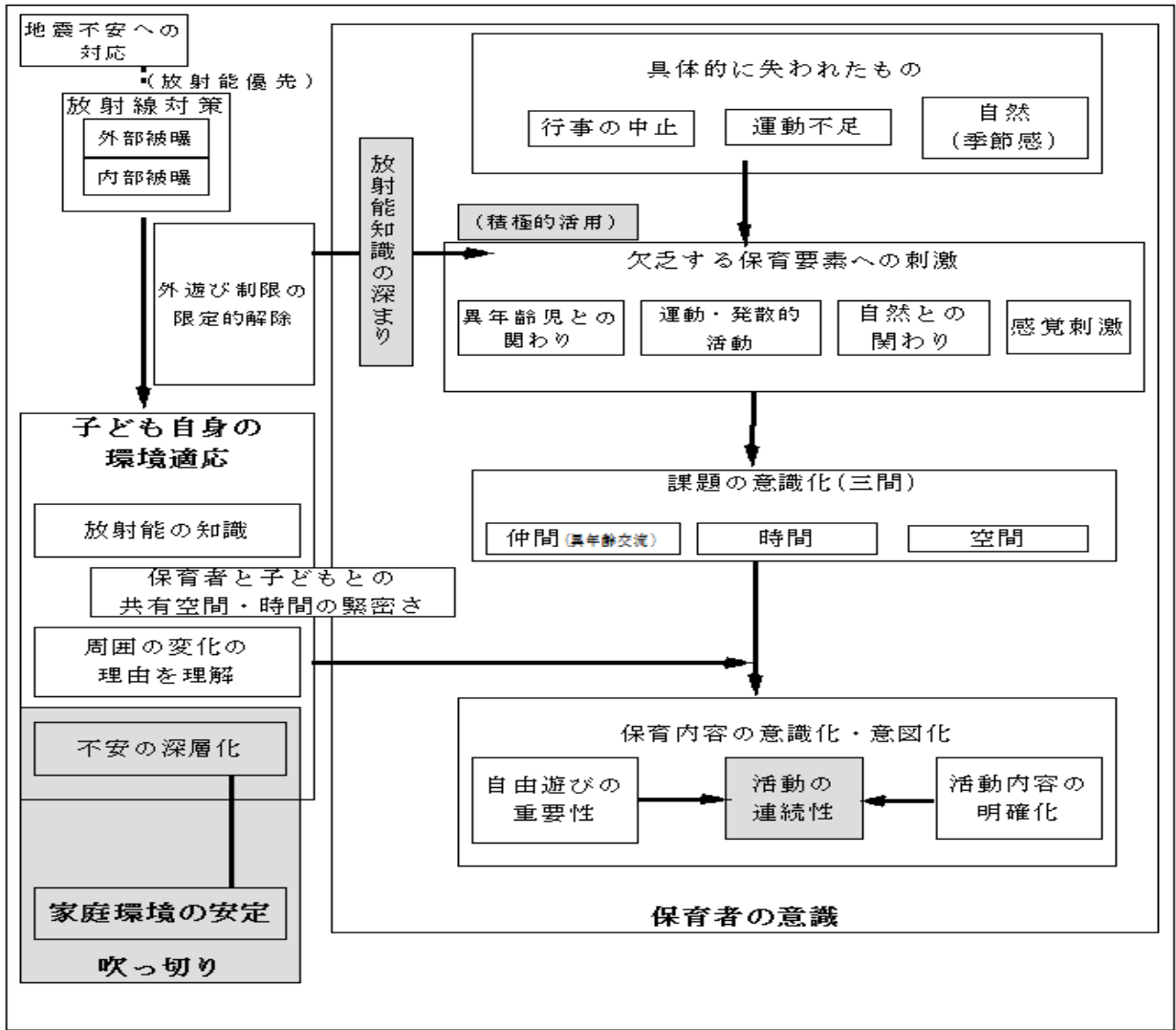


図3 平成23年度 3学期(1~3月)

※各詳細については先の報告書⁽¹⁾を参照されたい。

これらの状況を元にしつつ、平成25年度における状況について以下に考察していくこととする。

平成25年度調査結果

I 保育の基本的内容および子どもの状況について

まず最初に、協力各園の放射線への具体的対応について見てみることにする。線量については各地域により違いがあり、行政からも私立幼稚園には統一した指示などが出てきていなかった分、各園ごとの対応の差異が見られる結果となっている。

表1 各園の放射線量の状況

	郡山市地域					福島市地域			
	A幼稚園	B幼稚園	C幼稚園	D幼稚園	平均	A幼稚園	B幼稚園	C幼稚園	平均
・震災直後									
園庭	1.111	2.2	0.18	3.7	1.80	記述無し	2.35	1.083	1.7165
保育室	0.17	0.23	0.15	記述無し	0.18	〃	0.23	0.17	0.2
ホール	0.14	0.21	0.15	〃	0.17	〃	0.11	0.14	0.125
近隣の公園等	記述無し	2.6	記述無し	〃	2.60	〃	記述無し	0.63	0.63
平成25年度3期									
園庭	0.139	0.13	0.1	0.12	0.12	記述無し	0.18	0.09	0.135
保育室	0.09	0.11	0.09	0.08	0.09	〃	0.07	0.083	0.0765
ホール	0.19	0.11	0.09	0.08	0.12	〃	0.11	0.067	0.0885
近隣の公園等	0.217	0.26	記述無し	記述無し	0.24	〃	記述無し	0.2	0.2

※除染により撤去したものの一例(アンケートより)

芝生、マット、砂、砂利、花壇、表土、砂場の木枠、屋根、囲い、大型遊具のロープ、植木、大型固定遊具、三輪スクーター、外遊具、ログハウス、庭木、玄関のマット、ブランコ下のマット(実際には協力園以外の各園ごとに、それぞれ独自の遊具、備品などが廃棄(撤去)されている)

表2 平成25年度3期の各園の保育活動時間概要 ※全て単位は分

地域	幼稚園	学年	自由遊びの時間	一斉活動の時間	外遊び(最もしている子)	外遊び(最も少ない子)
郡山市地域	A 幼稚園	年少	180	10	60	60
		年中	180	20	60	60
		年長	180	30	60	60
	B 幼稚園	共通	180	40	90	30
	C 幼稚園	共通	180	60	120	60
福島市地域	A 幼稚園	年少	120	90	45	0
		年中	150	150	60	0
		年長	150	150	60	0
	B 幼稚園	年少	N/A	30	60	0
		年中	N/A	40	60	0
		年長	N/A	60	60	0
	C 幼稚園	年少	120	45	75	30
		年中	120	60	75	30
		年長	120	60	75	30

表3 外遊びの制限の推移

幼稚園	年月	平成23年												平成24年												平成25年												平成26年												平成27年		
		3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月														
郡山A		完全制限(外遊び0分)						30分~60分まで																		120分まで																										
郡山B		完全制限(外遊び0分)												30分まで						60分まで						(-制限解除)																										
郡山C		完全制限(外遊び0分)												(-制限解除)																																						
郡山D		完全制限(外遊び0分)												30分まで												60分程度(27年度も継続中)																										
福島A		完全制限(外遊び0分)						30分まで																		60分程度(27年度も継続中)																										
福島B		完全制限												30分まで						60分まで						(-制限解除)																										
福島C		完全制限(外遊び0分)						40分まで						60分まで						120分まで						(-制限解除)																										

同じ福島県の中通りと言っても一括りには出来ず、各園の放射線量やそれへの対応の意識差、保育内容などの要因もありによって子ども達の活動の様子には大きな差がある。表2を見ても、外遊びの時間が最も少ない子が0分、最も多い子が120分となっており、その差は2時間となる。この場合、外遊びの重要性は認識しつつも、その要素を室内での一斉活動において補填しようとしている様子のではないかと推測される。

また、表3の外遊びの時間の推移についても見ても、各園の対応の違いがはっきりと見られる。早い園では震災翌年の9月から制限を解除しているのに対し、2園については平成26年度末においても制限を解除していない。各園がそれぞれに置かれた状況において見えない影響への対応に苦慮している様子がうかがえる。

表4 砂場遊びについての制限の推移

幼稚園	年月	平成23年												平成24年												平成25年												平成26年												平成27年		
		3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月														
郡山A																										使用せず→使用開始																										
郡山B																										使用せず→使用開始																										
郡山C																										使用せず→使用開始																										
郡山D																																						(27年度も水の使用などで制限中)→														
福島A																										使用せず→												→使用開始														
福島B																										使用せず→												→使用開始														
福島C																										使用せず→												→使用開始														

表5 屋内砂場の設置

郡山A	×	
郡山B	×	
郡山C	×	
郡山D	×	(ホワイトサンド砂場を半屋内に設置)
福島A	×	
福島B	×	
福島C	×	

外遊びの制限によって大きな影響を受けているのが、砂場での活動である。子どもの遊びにおいて様々な発達要因を持ち合わせ、砂という自然物に触れる感覚運動という面も持つ活動に対して、協力7園についてはほぼ全園が平成25年度の半ば頃に制限の解除を行っている。(1園については水の制限を行っている)これは、砂の入れ替えなどによる除染が進み、砂に触れることへのリスクが弱くなり、それよりも先ほど述べた成長要因を重視しているのではないかと推察され

る。屋内砂場については全園設置はしていない。これは費用面などの要因も考えられるが、それとともに、“砂と水”という砂場での活動要素のうち、屋内では水を使っての体験が制限されることも関係しているのではないかと考えられる。

表6 水道水を飲用として利用しているか？

郡山A	×	水筒持参・ウォーターサーバー・ペットボトルの水
郡山B	○	
郡山C	○	任意で水筒持参
郡山D	○	浄水器を通した水・水筒持参
福島A	○	
福島B	○	任意で水筒持参・ウォーターサーバー
福島C	○	水筒持参(震災前より)

水道水については7園中6園が使用しているが、任意などで水筒を持参してもらっている園も多く、水道水へのある程度の安心を持ちつつも保護者の心情も大事にした対応をとっている様子が伺える。

表7 エアコンの設置について

郡山A	○	震災前より設置済み
郡山B	○	H23年8月設置
郡山C	○	H23年6月設置
郡山D	○	H23年6月設置
福島A	○	震災前より設置済み
福島B	×	
福島C	○	震災前より設置済み

表8 線量計の有無

郡山A	×	
郡山B	×	
郡山C	○	H23年5月導入
郡山D	○	H23年7月導入
福島A	○	H23年4月導入
福島B	×	
福島C	○	H23年5月導入

表9 食料用線量測定器の有無

郡山A	×	
郡山B	×	
郡山C	×	
郡山D	○	H23年4月導入
福島A	×	
福島B	×	
福島C	○	H24年7月導入

表7～9の各備品については、エアコンの設置率が目立つ。震災前から設置済みという園も多いが、3園は震災後に設置しており、室内での活動が多くなったことでの対応をとったものと考えられる。線量計や、食料用測定器については、エアコンよりは設置状況にばらつきが見られる。特に食料用測定器については設置率は低く、保育所とは違い自園での調理義務がない幼稚園では、給食の食材の線量についても外部(発注先)に任せている状況が伺える。

<子どもの変化について(自由記述の内容)>

震災からある程度の時間が過ぎたことで、保育者の中で子ども達の変化を実感している様子が伺える。例えば「運動面や生活習慣面での幼さ」「ダイナミックな姿の少なさ」といった点である。

(アンケートより)

- ・運動面の弱さ（子どもにより差が大きい）。集中力の低下、持続力がない。
- ・震災後3年が経ち、少しずつ心身への影響が見えてきた。ストレス(不安定)、運動能力の低下、保護者の不安。
- ・親や保育者の指示に従うことはスムーズな反面、「自分で考えない」。運動については、ボール投げ、まっすぐに走るなど、経験が少ない分、身につけていないところもあると感じている。
- ・外遊びの仕方（内容）が大きく異なる。年長でも、まず固定遊具に向かっていく。グループ遊びやダイナミックな遊びがない。
- ・社会的な変化もありますが、公園などでの交流の機会の低下もあってか、子どもたち全体の生活体験が少なくなっているように思えます。それが言葉や生活習慣や人間関係に悪影響だと感じています。
- ・地震などの災害に敏感。年長児は年少の時、制限が多く、外遊びが一切できなかったこともあるためか、全体的に幼い子が多く、落ち着きがない。
- ・自由遊びは外遊びが制限されて2年9ヶ月過ぎ。子ども保育者の制限に敏感に反応できるための室内遊びが充実する。

<保育実践における配慮点(自由記述の内容)>

内容を見ると、震災直後の混乱期から脱し、各園が各園の判断によって今の子ども達に必要なことをカリキュラムに入れ、実践している様子が伺える。保護者の心情に配慮しつつ、いかに失われた自然からの刺激を保育の中に取り込んでいくかを考えている。

(アンケートより)

- ・運動能力の向上のため、外遊びの制限を30分から1時間にのばした。遠方へ出向き自然との触れ合いを重視した。
- ・活動制限がなくなったことで、晴れた日には外で活動をするようになり、その中で子ども同士の縦のやり取りが出るようにしています。そして、その姿を職員間で共有しています。
- ・砂遊びを9月から実施しました。外遊びの2時間は外へ出る、入る時間制限のため、担任はカリキュラムの外遊びの内容を配慮しました。自然物を取り入れた保育（製作等）。いかに遊びに集中し、発展できる環境にするか。
- ・どこまで、どれだけ安全なのかの情報が震災当初より曖昧さが目立つので自分の園ではという観点で判断している。親たちの気持ちの変化は常に目配りをしている。
- ・自然体験、実体験の初段階からの取り組み。五感を刺激する遊びを多く取り入れる。
- ・なるべく天気の良いときは外遊びをし、体をたくさん動かすようにしている。

<保育者達が頑張っているところ(園長もしくはそれに準じる立場から)>

震災により変化した福島の保育環境の中で、保育者達が子ども達に対して大切なことを日々考え、それに対しての保育を考え、それを実践するために研鑽していると考え、それを評価している様子がアンケートから伺える。そうした中、保育者自身も福島という環境にいることでの葛藤や不安があることも察している。

(アンケートより)

- ・毎日の除染。放射線等の研修会への積極的な参加。

- きつい活動制限下から、かなり解除された今の保育環境まで、保育をする環境が刻々と変わる中で、その時の最善な関わりを子ども達にしてあげようと、よく考えていると思います。
- 室内遊び、外遊び、一斉活動に対して、カリキュラムの中で保育者の考えや子の様子に配慮していけること。
- 放射線対策と子どもの育ちにとって大切なことを見極めて保育内容を組み立てる。
- 限られた環境の中で、いかに運動量、質の向上を図るか考え、取り入れている点。
- 養成大で外遊びの経験をしてこなかった保育者が外遊びの見守りの意味を理解してきたこと。中堅以上の職員の知恵比べが嫌みなく続き、保育にメリハリがついたこと。常に防災を感じながら保育しているところ。子どもが少なくなった分、一人ひとりを丁寧に見て日々の保育を面白がってしているところ。
- 福島で仕事を続け生活していて、本当に大丈夫なのかと思いながらも保育を続けて日々頑張っているところ。この環境で子どもを保育していて良いのか不安もあるが、周り（保護者や子ども）に不安を与えないよう、保育に専念しているところ。

(賀門康博)

II 指導計画、実践上の内容、配慮およびその背景の内容から

前述のアンケートにも保育者達の保育内容での対応があがっていたが、ここでは実際に保育者達がどのような点について配慮していったのかをアンケートから見ていく。

図1は配慮点についての配慮順位を得点化し、グラフ化したものである。

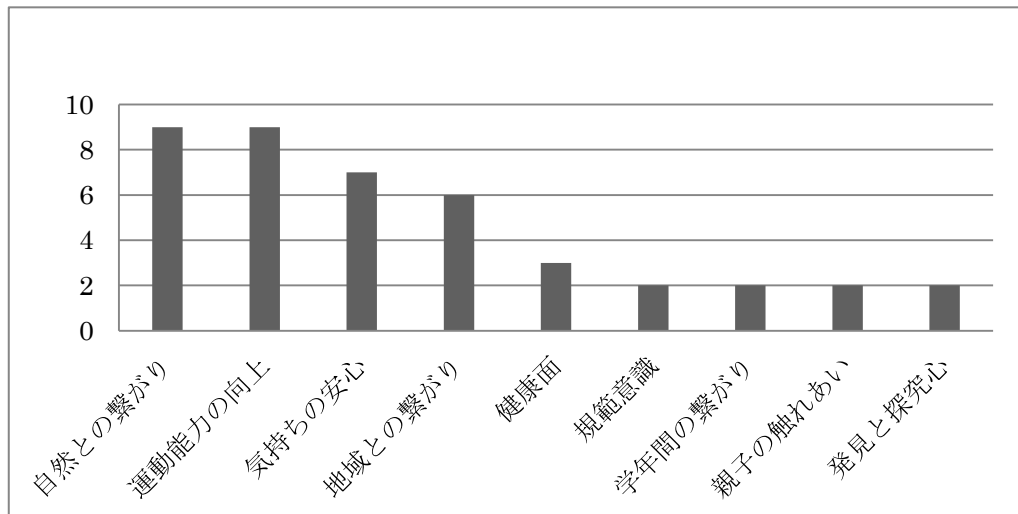


図1 カリキュラムの重点事項

(縦軸の単位はポイント。高いほど重要度が高い)

上位4項目と下位5項目との差が見られ、「自然とのふれあい」「運動能力の向上」「気持ちの安心」「地域との繋がり」を保育者が特に重視してきている姿が伺える。特に上位2項目は高く、震災から少し時間が経ったことで、気持ちの安心も考えつつ、今、目の前の子ども達が過ごしているかけがえのない「今の成長」に不可欠な内容を、いかに保育の中で与えていくかに対して苦慮している姿が見られる。(賀門康博)

次に、各年齢においての様子をそのアンケート内容から見ていく。

1. 3歳児（震災時、1歳児）

<アンケートより>

- ・園生活に慣れてくると子ども達の外への関心が高まってくるので、保護者に外遊びの可否についてアンケートをとり、一人ひとりに対応できるようにする。
- ・外遊びが十分にできないので、盆踊りや体操などを取り入れ室内でも身体を動かせるようにする。
- ・友だちとうまく関わらず、遊具を奪ったりいきなり遊びに入ったり、小さなケンカがみられる。相手の気持ちを伝え、経験を重ねながら分かっていくようにする。
- ・戸外に出たい気持ちが強くなり、高いところからジャンプしたり走り回ったりするので、気持ちを受け止め、中庭で遊べるようにしたり、ホールで走ったりジャンプしたりして楽しみ、達成感も得られるようにする。また、大型遊具やペップキッズ（屋内運動場）などの活用も考える。
- ・ホールなどの広い場所では、気持ちが高揚し動きが目立つ子と何をしたいかわからない子とがいる。高揚して興奮する子どもの気持ちのコントロールは難しく、常に悩みだった。
- ・転倒しやすく、大きな怪我をしやすいため、危険な行為はその都度注意をするが、制限しすぎて窮屈にならないように気をつける。転倒時に手をつけるように、ハイハイなど腕の筋肉

を鍛える遊びを取り入れる。一人ひとりの運動能力を理解し、欠如している部分を補えるように配慮していく。

- ・室内で、物の取り合いや場所を巡ってのトラブルが起こりやすい。友だちの様子が見えすぎてしまうようなので、戸外やホールなど好きな場所で遊べるように配慮していく。一人ひとりが自分で行動できるようになり、行動の幅や視野が広がってトラブルは減ってきた。
- ・室内、外共に元気に身体を動かす子どももいれば、室内にこもりがちな子どももいるので、こもりがちな子には誘いかけて戸外でのびのび遊べるように配慮する。
- ・砂遊びがしくて「お休みね」と言われても触ってしまう子もいるので、その都度できないことを伝え、別な部分で補えるよう考えていく。
- ・園庭が使えず異年齢と触れあう機会が少ないので、年長児への憧れが育ちにくく、怖がる子もいる。触れあうきっかけや遊ぶ機会を作るようにする。

3歳児は、そのほとんどがすでに満1歳を迎えていたころ震災に遭遇した。そして、一人歩きができるようになり、外に向かって興味が拡大し、自分の世界を広げていく入園までの2年間で、屋外活動が極度に制限された環境で過ごしてきた。通常であればこの時期に普通にできる、自分の身体や五感を駆使して周囲を探索し「世界観」を形作っていく、人としての原初的な体験を重ねることが叶わなかったことになる。

その結果、

- ① 外に出て同年齢の子どもと関わる経験の減少から、相手を知りこの年齢なりの社会性を身につけることが難しかった。
- ② 広い場所でのびのびと遊ぶことができなかつたため、広い場所や戸外では高揚して自分の動きをコントロールできない子どもと、どうしていいかわからず動けなくなる子がいる。
- ③ 存分に身体を動かすことができなかつたためか、自分の動きを調整できず、転倒したりして大きなケガにつながりやすい。
- ④ 外遊びができなかつたのでその楽しさを体験できずに、室内にこもりがちになる子がいる。
- ⑤ 異年齢交流の場でもあつた園庭が使えなかつたため、異年齢間の関わりが持てず、子どもの内に憧れとなるべきモデルが形成されにくいなど、今までとは違う子どもの状態が見受けられる。

保育者は、目の前の子どもたちの状態を見極めながら、経験できなかつたことを今からでもできるように、日々工夫を重ねている。

2. 4歳児（震災時、2歳児）

<アンケートより>

- ・新入園児は所持品の始末、服の着脱、靴の脱ぎ履きなどが難しい。戸外に出る機会が少なかつたせいかもしれない。手を貸しながらやり方を教えたり、できたことを認め、やろうとする気持ちを育てていく。
- ・外遊びの時間が十分でないので園庭をみんなで散歩するが、除染のため草木や花が少なく春の自然を感じるできない。
- ・生活に慣れ、室内活動だけでは満足できない子どもたちがいるので、活動の動と静のバランスを考慮し、室内でもできる運動遊びを取り入れていく。

- ・室内での遊びには集中力がある。友だちのつながりが広まり深まるよう支え、遊びが発展するようきっかけも時折教えていく。
- ・運動は得意な子とそうでない子がいるので、自分ができそうなところからやれるようにする。転びやすい子の安全には注意する。
- ・体力のない子がいてすぐに休んでしまう。毎日の積み重ねの大切さを保護者になかなか理解してもらえない。
- ・外遊びが40分では遊びが中途になるので1時間に延長し、遊びにじっくり取り組みようにする。
- ・経験不足かブランコを自分でこぐのが難しいので、そっと押してあげながら足の曲げ伸ばしのタイミングを伝えていく。
- ・秋の自然に触れる機会が少ないので、保育者が低線量地区で採取した木の実や落ち葉で製作をする。実際に触れることで子どもなりの発見は多かったが、なっていたり落ちている状態がイメージできない子が多い。絵本や図鑑や写真を見せたり話をして、イメージが広げられるようにする。
- ・運動会で踊ったダンスを遊びの中で楽しむが、「疲れた…」という子どもの姿がある。保育者も一緒に踊ったり、子どもの動きをじっくり見て意欲を引き出し、楽しさを感じられるようにする。
- ・運動能力測定で走り方がおぼつかない子が多く、手の振りや地面を蹴る力が弱い。
- ・鬼ごっこや障害物競走を取り入れ、走る跳ぶしゃがむなどを繰り返せるようにする。
- ・3m離れた捕球では目では確認できるが身体がついていかず捕球できない。遊びの中でボールに触れて慣れ、受けるのを怖がらず、投げたり受けたりできるようにする。
- ・砂遊びができないので、穴を掘る力がなく土の扱いもうまくない。雪遊びで掘る経験をしたり、腕から指先まで使う粘土遊びで経験を重ねていきたい。
- ・震災後初めての砂遊びに夢中になるが、しゃがむのが難しく、砂の扱いや遊具の使い方が未熟である。一人ひとりと関わりながら、遊具の使い方や周りへの配慮を伝え、経験を増やしていく。

4歳児は震災当時2歳だった。身体機能が発達し自由に動き回れるようになってきたところで、突然外に出る自由を奪われ、その後の2年間を制限された環境で過ごしてきている。

その結果、

- ① 広い戸外で身体を思い切り使って遊ぶことができず、ブランコをこぐ、砂を掘る、手を思い切り振って走るなどの運動の基本的動作が身につけていない子、体力が不十分な子が多い。
- ② 外に出る機会の減少により、衣服の着脱や靴の脱ぎ履きなどの日常体験が不足し、生活面での援助が必要である。
- ③ 戸外の自然物に触れる機会が乏しかったため、自然への興味関心が育ちにくい。
- ④ 室内での活動時間が増えじっくり遊びに取り組めるようになって、遊びへの集中力がついた、などの様子が見受けられる。

これまでの4歳児に比べるとできないことが多く、保育者はそれぞれの経験不足に応じ、その部分を補う援助を心がけている。また、活動が室内に限定された結果子どもも保育者もそれに傾注し、子どもたちの集中力が高まった様子も伺える。

3. 5歳児（震災時、3歳児）

<アンケートより>

- ・新入園児に話しかけたり優しく関わる子もいるが、どう関わるか戸惑い様子見の子どももいるので、異年齢児と関われる場を大切にし、一緒に遊んだり世話をしたりする中で自然に優しく接することができるようにする。
- ・園庭の除染によって自然物に触れる機会が少ないので、近くの広場まで出かけ散歩を楽しむ。
- ・まだ十分な時間外に出られないので、保育者自身が自然に関心を持ち、短時間でも子ども達が草花の開花やにおい、色や形の違いなどに気づけるようにしていく。
- ・バスが着いたら遊んでいいことになったが、保育者に「遊んでいい？」と確認を求める。今まで許可が必要だったため、今後は遊んでいいという感覚や習慣が身につくように、外遊びの楽しさが分かるようにしていく。
- ・ブランコや滑り台など我先に遊びたくて譲れず、いつまでもやっていたり、遊具の使い方が分からず順番も守れない様子が見られる。外への興味は個人差があるので、クラスごとに十分な外遊びの時間を設け、一斉活動で外遊びの魅力を伝えていく。
- ・外遊びをよくするようになったが転倒や落下の事故が増えてくる。自分の実力が分からず挑戦するようなので、ケガを恐れず手当を的確に行い、遊びの経験を増やしていく。
- ・5月の運動能力検査で平均値を下回りアンバランスでもあることが分かったので、園庭にタイヤを埋めたり築山を作ったりして、ジャンプや上る、下るなどの経験ができるように、またケンパ、両足ジャンプ、くぐるなどができる環境を作り、日常的に遊べるようにする。
- ・園庭で運動遊びや固定遊具を使って遊び、身体を動かす楽しさを感じているようなので、戸外で遊ぶ楽しさを伝え、遊びの中で挑戦する姿を認めたり励ましたりする。
- ・砂遊びができるようになるが、5歳児も3、4歳児と同様に掘る、水を汲む、裸足で感触を楽しむなどの感覚遊びをする。
- ・運動会を経験して身体を動かすことに自信が持てるようになったので、自分たちでできるように跳び箱や縄跳びを取り入れると、身体を動かすことに親しみを覚え他の活動にも意欲的になる子が増えた。
- ・土を蹴って走る経験が少なかったせいか、リレーではカーブで転ぶ様子が見られたので、できるだけ近くの公園に出かけ思い切り走る経験を増やし、基本的な動きの獲得ができるようにサーキットなどを取り入れていく。
- ・走る喜びを味わう中で競争意識が高まりにくかった。例年と比して個人的な満足感は強いが競争心は薄く、クラスの団結力につながらなかった。
- ・運動面は回復してきたが、感覚的な積み重ねや砂遊びは変化が少ない。取り戻すには時間がかかるのだろうか。
- ・秋の自然にも関心が高まってきたので、散策しながらドングリや落ち葉を拾い子どもの興味に合わせて楽しめるようにする。拾うことに抵抗を示す子どもには気持ちを受け止め安全であると伝えていく。
- ・園庭のドングリや落ち葉の線量を確認し、探検ごっこの中で自然物遊びを取り入れ子どもの気づきのきっかけにしたり、落ち葉のお風呂やブーケ作りなどを提案し、自然に興味を持てるようにきれいさや変化を言葉で伝えていく。

- ・11月の運動能力検査ではほぼ平均値まで回復したので、身体を動かして遊ぶことを喜ぶようにドッジボールなど集団ゲームをたくさん取り入れるが、自己主張が多くクラスとしてのまとまりがなかなかつきにくかった。
- ・子どもの動きからジャンプの欲求があるとわかり、転んだときに手をつかない姿が見られる。よじ登れるくらいの跳び箱を用意し、飛び降りた場所に手がつけるようにマットを敷くなど、寒い中、室内で思い切り身体を動かせるようにする。
- ・寒さに負けず戸外でドロケイなどルールのある遊びを楽しむ。その際ルールが共有できているか確認し、共有の必要性を伝え、ルールの理解が難しい時には気づけるように声をかけていく。

5歳児は災害時までには外で自由に遊んでいた子ども達である。それが3歳児入園直前に急に外に出ること自体を制限され、一日の大半を室内で過ごすことを余儀なくされてしまった。2歳時に芽生えた好奇心を戸外活動を通して広げ深化させたり、探究心を持って外遊びに打ち込む機会を満足に与えられないままに、5歳時を迎えたことになる。

その結果、そこにあるのに出られなかった園庭に出て外遊びを楽しむようになったが、

- ① 園庭で出会う年少児との関わりに戸惑う
- ② 走る、跳ぶ、上り下りる、蹴るなどの運動の基本動作に習熟できていない。
- ③ 遊び方や遊具の使い方、自分の実力程度が分からず、けがや転倒落下事故が多く、遊具を占有して譲れない。
- ④ 砂場では掘る、水を汲む、裸足の感触を楽しむなど3、4歳児のような感覚遊びをする。
- ⑤ 自然に触れる経験が少なかったため、虫を集めて殺すを繰り返したり死んでも平気など、関わり方が分からず、生命への気づきが希薄である。
- ⑥ プランターで野菜を栽培するが、生長や収穫を喜ぶ子どもと関心のない子どもとの差がある。
- ⑦ 2学期後半には運動面は回復し、力一杯身体を動かし自信が持てるようになったが、感覚遊びは残り砂遊びにも大きな変化はない。
- ⑧ 自然への興味も高まってきたが、高められるきっかけは必要である。
- ⑨ 転んだときに手をつかない子がいる。
- ⑩ 集団遊びをするようになったが、自己主張が多く、クラスとしてのまとまりがつきにくい。
- ⑪ 集団遊びのルールが分からず、共有できていないことがあるなど、全体的に今までより幼くその個人差も大きい姿が見られる。

保育者はそれぞれの育ちの違いを見極め受け止め、望ましい育ちが加速されるように、今まで以上に環境や援助を工夫していることが分かる。

(田中三保子)

Ⅲ カリキュラムの変更と評価についての記述内容

各記述内容に基づき＜遊び方＞＜発達＞＜人間関係＞＜砂場＞＜自然＞＜運動＞＜体験不足＞＜外遊び＞＜感情＞＜親の不安＞＜PTSD等の影響＞＜自立＞＜防災＞の13項目に分類しその傾向を分析した結果、以下の通りとなった。

1. 概要の分類から

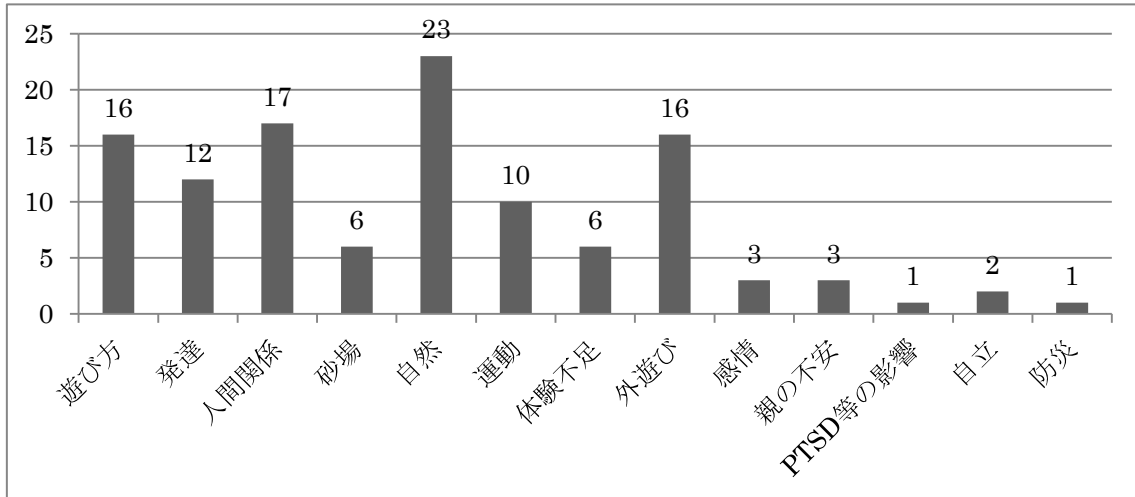


図1 記述内容（全体）

全学年をまず見ると、自然への意識が最も多く見られている。次いで人間関係、遊び方、外遊びと続く。その反面、感情面への意識は少なく、カリキュラム上では前回の報告であった失われた三つの“間”の中の「時間・空間・仲間」への対応が意識されており、感情面や親の不安、PTSDと言った心理面への具体的な対応は少なく見られる。

また、10ポイントと、そうでない項目がかなりはっきりと分かれており、対応については全体の傾向として、似たようなものになってきているのではないかと推測される。

次にこれらについて各学年ごとの傾向を見ていく。

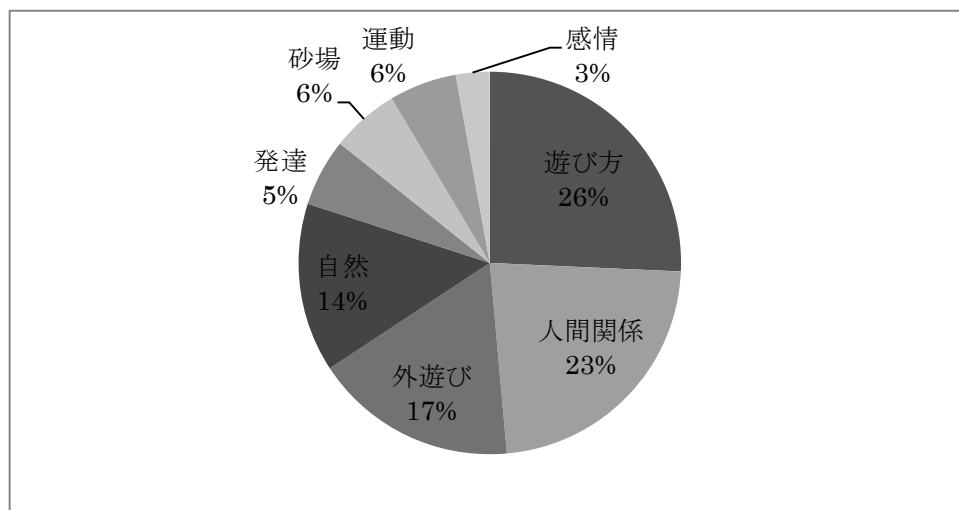


図2 記述内容（年少）

年少については「遊び方」「人間関係」の2項目で全体のほぼ半数を占めており、次いで「外遊び」「自然」と続く。その4項目で全体の3/4以上を占めており、全体の傾向が集中している様に見えることができる。

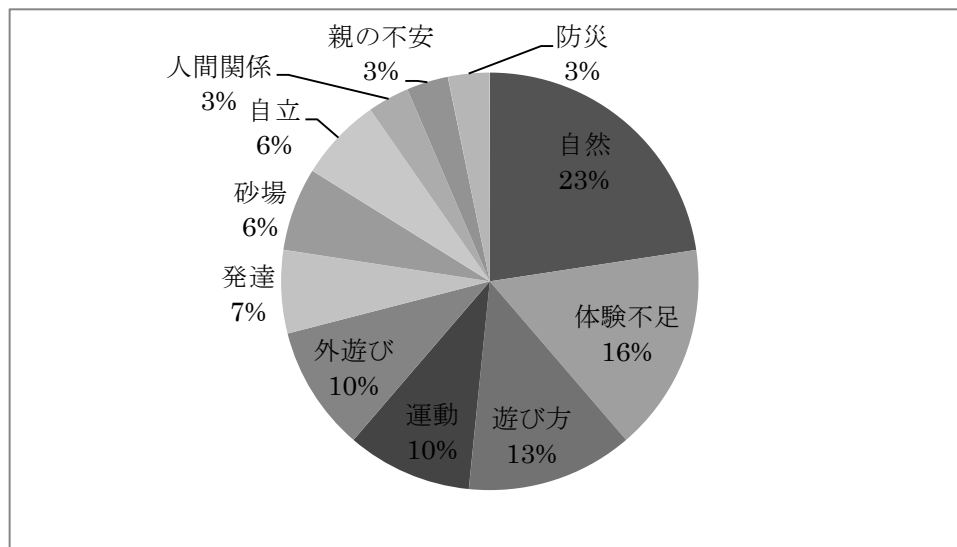


図3 記述内容（年中）

年中については、「自然」が第1項目で23%となっているが、年少よりも項目がばらついており、割合が10%以上の五項目を合わせても全体の3/4に満たない。項目数についても年少の八項目に比べ11項目と多くなっており、観点の拡がりが見える。

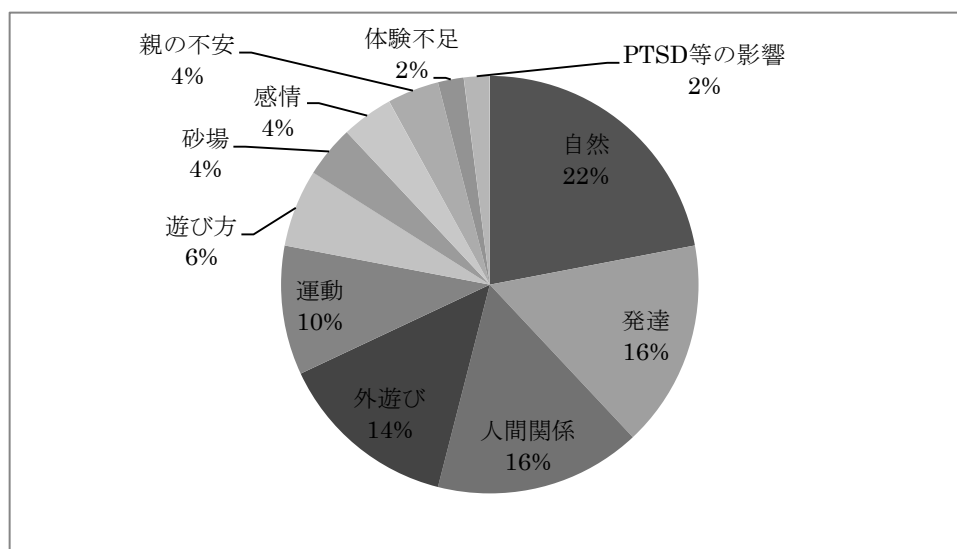


図4 記述内容（年長）

年長の全体的な傾向は、第1項目が「自然」となっているところや、項目数(11項目)となっている点など年中と似ている。しかし、「発達」への不安が第2項目(年少では5位(5%)、年中では6位(7%))になっており、小学校との接続期が間近になっている中で、発達の到達度への不安があるのではないかと推測される。

また、年中、年長の二つの学年について、自然についての内容が第1項目となっているのは、震災以降に入園して以来、集団生活に慣れた年中期以降、自然に触れる機会が極端に減少したことへの心配が増してきているのではないかと考えられる。
(賀門康博)

2. テキストマイニングの結果

表1 「保育のねらい」の統計情報

文書	1期			2期			3期			4期		
	最小	平均	最大	最小	平均	最大	最小	平均	最大	最小	平均	最大
総文書数	60			34			16			75		
1文書あたりの語句数	0語	10語	68語	0語	9語	44語	11語	24語	46語	0語	5語	72語
1文書あたりの文字数	0文字	16文字	98文字	0文字	14文字	64文字	17文字	36文字	68文字	0文字	7文字	98文字
単語	頻度	割合		頻度	割合		頻度	割合		頻度	割合	
名詞句	112	28%		66	30%		64	27%		67	27%	
形容詞句	19	5%		5	2%		10	4%		6	2%	
副詞句	3	1%		5	2%		3	1%		3	1%	
動詞句	92	23%		54	24%		60	26%		64	26%	
その他	167	43%		91	42%		97	42%		105	44%	

表2 「保育のねらい」の名詞・形容詞の係り受け

順位	1期			2期			3期			4期		
	名詞句	形容詞句	頻度	名詞句	形容詞句	頻度	名詞句	形容詞句	頻度	名詞句	形容詞句	頻度
1	子	小さい	2	感触	のびのび	1	秋	自然	2	行動	のびのび	1
2	春	身近	2	身体	のびのび	1	興味	自然	1	ルール	自然	1
3	興味	自然	1	水	のびのび	1	変化	自然	1	子ども	自由	1
4	春	自然	1	一緒	ダイナミック	1	活動	のびのび	1	遊び	十分	1
5	外遊び	楽しい	1	友だち	ダイナミック	1	大ホール	のびのび	1	気持ち	大切	1
6	実際	自然	1	遊び	ダイナミック	1	自分	好き	1	掘り方	丁寧	1
7	意味	よい	1	観察	間近	1	遊び	好き	1			
8	プール	楽しい	1	生長	間近	1	ゲーム	色々	1			
9	関係	よい	1	野菜	間近	1	運動	色々	1			
10	幼稚園生活	楽しい	1	中	様々	1	外遊び	長い	1			
11	かかわり	小さい	1	動き	様々	1	時間	長い	1			
12	感覚	よい	1	遊び	様々	1	運動遊び	様々	1			
13	許可	必要	1	一つ	じっくり	1	方法	様々	1			
14	習慣化	必要	1	砂遊び	楽しい	1	心身	安定	1			
15	一つ	じっくり	1	命	大切	1	遊び	新た	1			
16	水	気持ち良い	1	遊び	興味ある	1	気持ち	大切	1			
17	空間	広い	1	時間	長い	1						
18	意味	根気強い	1									
19	環境	新しい	1									

1期では「楽しい」「外遊び」や「プール」で「楽しい」「幼稚園生活」を送ってもらおうとしている姿勢、2期では「様々な」「楽しい」「興味ある」「遊び」を「友だち」と「一緒に」「ダイナミック」に行かせようとしている姿勢、3期では「様々な」「好き」な「遊び」という「活動」を「のびのび」とできるようにしようとしている姿勢、4期では「十分」な「遊び」を取り入れようとしている姿勢がうかがわれる。

表3 「保育のねらい」の名詞・動詞の係り受け

順位	1期			2期			3期			4期		
	名詞句	動詞句	頻度	名詞句	動詞句	頻度	名詞句	動詞句	頻度	名詞句	動詞句	頻度
1	外	遊ぶ	1	感触	楽しむ	2	力	合わせる	2	体	動かす	3
2	戸外	遊ぶ	1	関心	もつ	2	機会	動かす	2	身体	動かす	2
3	場所	遊ぶ	1	感触	味わう	2	体	動かす	2	なわとび	動かす	1
4	中庭	遊ぶ	1	水	味わう	2	興味	もつ	2	機会	動かす	1
5	トランポリン	楽しむ	1	収穫	楽しむ	1	機会	増やす	2	室内	動かす	1
6	散歩	楽しむ	1	プールあそび	楽しむ	1	収穫	楽しむ	1	てのびのび	遊ぶ	1
7	木製ジャングルジム	楽しむ	1	夏祭り	楽しむ	1	ゲーム	楽しむ	1	戸外	遊ぶ	1
8	意識	持つ	1	戸外遊び	楽しむ	1	身体	動かす	1	友だち	遊ぶ	1
9	関心	持つ	1	砂	味わう	1	遊び	楽しむ	1	関わり	持つ	1
10	興味	持つ	1	無関	楽しむ	1	リレー	楽しむ	1	興味	持つ	1
11	自信	持つ	1	親しみ	もつ	1	運動遊び	楽しむ	1	行動	持つ	1
12	使い方	知る	1	命	もつ	1	リレー	合わせる	1	子ども	持つ	1
13	遊び方	知る	1	野菜	もつ	1	ゲーム	挑戦	1	自信	持つ	1
14	安心性手園生活	過ごす	1	様子	もつ	1	ゲーム	合わせる	1	年長組	持つ	1
15	配慮	過ごす	1	関心	育てる	1	チーム	合わせる	1	なわとび	楽しむ	1
16	子	喜ぶ	1	野菜	育てる	1	鉄棒	挑戦	1	ボール運動	楽しむ	1
17	進級	喜ぶ	1	様子	育てる	1	遊び	挑戦	1	親子	楽しむ	1
18	意味	取り組む	1	一緒	合う	1	運動	挑戦	1	雪遊び	楽しむ	1
19	興味	伸ばす	1	仲間	合う	1	気持ち	挑戦	1	かかわり	できる	1
20	折り紙	伸ばす	1	友だち	合う	1	遊び	もつ	1	異年齢児	できる	1
21	足	伸ばす	1	興味	伸ばす	1	ボール	触れる	1	自分	できる	1
22	災害	付ける	1	身体	伸ばす	1	機会	触れる	1	一つ	向かう	1
23	場	付ける	1	折り紙	伸ばす	1	目標	もつ	1	目的	向かう	1
24	知識	付ける	1	生長	観察	1	サツマイモ	観察	1	基本的な生活習慣	付く	1
25	ベップキッズ	利用	1	野菜	観察	1	生長	観察	1	身	付く	1
26	施設	利用	1	生長	喜ぶ	1	自分	喜ぶ	1	遊び	not する	1
27	大ホール	利用	1	野菜	喜ぶ	1	秋	触れる	1	時間制限	なくなる	1
28	身	つける	1	興味	持つ	1	活動	持つ	1	子ども	加わる	1
29	運動遊び	できる	1	遊び	持つ	1	生活	取り入れる	1	歌	歌う	1
30	室内	できる	1	全身	動かす	1	遊び	取り入れる	1	ルール	確認	1
31	時間	決める	1	遊び	動かす	1	意欲	持つ	1	保育室	行き来	1
32	中庭	決める	1	経験	not 味わう	1	友だち	する	1	遊び	充実	1
33	かかわり	戸惑う	1	遊び	できる	1	気持ち	引き出す	1	雪	積もる	1
34	子ども	戸惑う	1	動き	獲得	1	機会	作る	1	機会	設ける	1
35	気持ち	受け止める	1	室内栽培	行う	1	自然物	使う	1	ルール	知る	1
36	時間	受け止める	1	考え	出し合う	1	力	試す	1	掘り方	伝える	1
37	周り	受け入れる	1	野菜	触れる	1	興味	示す	1	感覚	味わう	1
38	友だち	受け入れる	1	水	親しむ	1	活動	取り組む	1			
39	外	出る	1	特性	知る	1	経験	受け取る	1			
40	気持ち	出る	1				経験	重ねる	1			
41	固定遊具	触れる	1				体育館	利用	1			
42	園生活	分かる	1									
43	仕方	分かる	1									
44	充実感	味わう	1									
45	達成感	味わう	1									
46	実際	not 触れる	1									
47	外	not 遊ぶ	1									
48	相手	いる	1									
49	自分	やる	1									
50	気持ち	育てる	1									

1期では、「外」で「遊ばない」、「実際」に「触らない」と、注意を促しているが、2期以降では、「戸外遊び」や「プールあそび」、「夏祭り」を「楽しむ」（2期）、「身体」を「動かす」「遊び」を「取り入れる」（3期）、「なわとび」や「ボール運動」、「雪遊び」を「楽しむ」（4期）、「遊び」を「充実」させる（4期）と、どんどん子どもたちを遊ばせようとしている姿勢がうかがわれる。

表4 「保育方法」の統計情報

	1期			2期			3期			4期			
文書	総文書数	55			29			16			70		
		最小	平均	最大	最小	平均	最大	最小	平均	最大	最小	平均	最大
	1文書あたりの語句数	0語	16語	71語	0語	17語	72語	2語	26語	44語	0語	5語	45語
		0文字	24文字	125文字	0文字	26文字	110文字	4文字	42文字	73文字	0文字	8文字	73文字
単語		頻度	割合		頻度	割合		頻度	割合		頻度	割合	
	名詞句	166	30%		103	33%		88	35%		74	33%	
	形容詞句	21	4%		7	2%		9	4%		5	2%	
	副詞句	3	1%		4	1%		5	2%		1	0%	
	動詞句	125	23%		72	23%		49	19%		52	23%	
	その他	236	42%		125	41%		103	40%		94	42%	

表5 「保育方法」の名詞・形容詞の係り受け

順位	1期			2期			3期			4期		
	名詞句	形容詞句	頻度	名詞句	形容詞句	頻度	名詞句	形容詞句	頻度	名詞句	形容詞句	頻度
1	関心	自然	1	身体	十分	1	秋	自然	2	砂場遊び	必要	1
2	春	自然	1	遊具	十分	1	ゲーム遊び	簡単	1	遊具類	必要	1
3	身	自然	1	変化	楽しみ	1	ルール	簡単	1	天気	よい	1
4	学年	近い	1	スイミングスクール	近い	1	鬼ごっこ	簡単	1	片づけ	わかりやすい	1
5	広場	近い	1	のり	自由	1	身体	楽しい	1			
6	のり	自由	1	動き	色々	1	地域	低い	1			
7	戸外	自由	1	園バス	大きい	1	放射線量	低い	1			
8	とこ	大丈夫	1				公園	近い	1			
9	目安	大丈夫	1				タイミング	上手	1			
10	行い遊び	的確	1				集団遊び	新た	1			
11	手当	的確	1									
12	興味	様々	1									
13	自然物	様々	1									
14	天候	よい	1									
15	天候	悪い	1									
16	行為	危険	1									
17	活動	色々	1									
18	虫	身近	1									
19	機会	多い	1									
20	場	大切	1									

1期では、「戸外」で「自由」、「目安」が「大丈夫」と、事態の見方が以前より軽減されているととれる関係が表されている。3期でも、「地域」の「放射線量」が「低い」ので、保育方法の観点からは、過剰に怖がる必要はないと見ている姿勢がうかがわれる。

表6 「保育方法」の名詞・動詞の係り受け

1期				2期				3期				4期			
順位	係り受け関係			係り受け関係			係り受け関係			係り受け関係					
	名詞句	動詞句	頻度	名詞句	動詞句	頻度	名詞句	動詞句	頻度	名詞句	動詞句	頻度			
1	興味	持つ	3	身体	動かす	2	サーキット	取り入れる	1	外	遊ぶ	1			
2	子ども	持つ	2	体	動かす	2	鬼ごっこ	取り入れる	1	配慮	遊ぶ	1			
3	戸外	遊ぶ	2	お墓	つくる	2	自然物遊び	取り入れる	1	遊具類	遊ぶ	1			
4	かかわり	持つ	1	園バス	乗る	2	集団ゲーム	取り入れる	1	言葉かけ	できる	1			
5	意欲	持つ	1	室内	動かす	1	障害物競走	取り入れる	1	視診	できる	1			
6	関心	持つ	1	遊具	動かす	1	違い	楽しむ	1	自分	できる	1			
7	気持ち	持つ	1	中央	遊ぶ	1	興味	楽しむ	1	全体	できる	1			
8	場	持つ	1	保育室	遊ぶ	1	子ども	楽しむ	1	経験	掘る	1			
9	異年齢児	持つ	1	機会	つくる	1	秋	楽しむ	1	穴	掘る	1			
10	一緒	遊ぶ	1	話し合い	つくる	1	気付きのき	する	1	砂	掘る	1			
11	外	遊ぶ	1	興味	持つ	1	かっけ			交流	持つ	1			
12	滑り台	遊ぶ	1	場	動かす	1	子ども	する	1	行動	持つ	1			
13	固定遊具	遊ぶ	1	目的	持つ	1	落ち葉	する	1	自信	持つ	1			
14	保育者	遊ぶ	1	水遊び	楽しむ	1	外遊び	not 頼る	1	手	つける	1			
15	遊具	遊ぶ	1	店	楽しむ	1	室内	not 頼る	1	場所	つける	1			
16	ペップキッズ	行う	1	動き	楽しむ	1	興味	合わせる	1	言葉かけ	援助	1			
17	園外	行う	1	違い	気付く	1	子ども	合わせる	1						
18	許可申請	行う	1	味	気付く	1	顔	作る	1	ハバ	広がる	1			
19	経験	行う	1	のり	使う	1	形	作る	1	遊び	広がる	1			
20	散歩	行う	1	砂場	使う	1	タイミング	受け止める	1	そり滑り	取り入れる	1			
21	自分	行う	1	折り紙	使う	1	ボール	受け止める	1	運動遊び	取り入れる	1			
22	上り下り	行う	1	顔	つける	1	松ぼっくり	付ける	1	間	入る	1			
23	木製ジャングル	行う	1	水	つける	1	落ち葉	付ける	1	取り入れ保	入る	1			
24	一緒	楽しむ	1	タイヤ	ジャンプ	1	タイミング	つかむ	1	育者					
25	時間	楽しむ	1	子ども	持つ	1	意欲	引き出す	1	場	いる	1			
26	追いかけて	楽しむ	1	収穫	喜ぶ	1	動き	獲得	1	必要性	しる	1			
27	友だち	楽しむ	1	友だち	喜ぶ	1	動き	繰り返す	1	場所	ジャンプ	1			
28	タイミング	伝える	1	遊び	行う	1	一緒	行く	1	意欲	育てる	1			
29	保育者	伝える	1	プール	行く	1	自信	持つ	1	遊具	借りる	1			
30	目安	伝える	1	園外	行く	1	公園	出かける	1	遊具類	準備	1			
31	友だち	伝える	1	環境	作る	1	袖いも煮	食べる	1	遊具類	整える	1			
32	意欲	する	1	築山	作る	1	遊び	通じる	1	雪	積もる	1			
33	園庭めぐり	する	1	遊び	取り入れる	1	遊び	通じる	1	マット	置く	1			
34	声がけ	する	1	コーチ	受ける	1	ブーケ作り	提案	1	ボール	追いかける	1			
35	探検ごっこ	する	1	指導	受ける	1	身体	動かす	1	かまくら作り	通す	1			
36	話	する	1	ふるい	出す	1				掘り方	伝える	1			
37	絵本	見る	1	パイプ	出す	1				手紙	渡す	1			
38	気持ち	見る	1	園庭	ジャンプ	1				遊具	用意	1			
39	相手	見る	1	プールあそ	親しむ	1									
40	遊び	見る	1	び											
41	機会	設ける	1	水	親しむ	1									
42	時間	設ける	1	場所	選ぶ	1									
43	場面	設ける	1	遊具	選ぶ	1									
44	長め	設ける	1	場面	捉える	1									
45	外遊び	増やす	1	話し合い	捉える	1									
46	機会	増やす	1	一緒	入れる	1									
47	経験	増やす	1	全員	入れる	1									
48	行い遊び	増やす	1	生長	変化	1									
49	固定遊具	動かす	1	タイヤ	埋める	1									
50	場面	動かす	1	園庭	埋める	1									
				テラス	なす	1									

「戸外」で「遊ぶ」時間を「増やす」（1期）、「水」や「プールあそび」に「親しみ」、「水遊び」を「楽しむ」（2期）、「公園」に「出かけ」、「自然物遊び」を「取り入れる」（3期）、「砂」を「掘る」（4期）というように、事態の見方が以前より軽減されているととれる関係が表されている。

表7 「保育中の配慮点について」の統計情報

1期				2期			3期			4期			
文書	総文書数	47		21			16			14			
		最小	平均	最大	最小	平均	最大	最小	平均	最大	最小	平均	最大
	1文書あたりの語句数	0語	22語	91語	0語	32語	76語	17語	31語	55語	18語	39語	89語
	1文書あたりの文字数	0文字	34文字	144文字	0文字	49文字	118文字	23文字	48文字	78文字	24文字	57文字	124文字
単語		頻度	割合	頻度	割合	頻度	割合	頻度	割合	頻度	割合		
	名詞句	197	30%	111	28%	90	30%	94	29%				
	形容詞句	21	3%	16	4%	9	3%	14	4%				
	副詞句	13	2%	10	2%	3	1%	6	2%				
	動詞句	147	22%	92	23%	71	24%	67	21%				
	その他	287	43%	172	43%	126	42%	141	44%				

2期で、「手洗い」・「うがい」を「十分」にするように注意をしている。4期でも、「手洗い・うがい」を「丁寧」にするように促したり、「戸外」に「出にくい」とはいうものの、「地域」の「放射線」の「染量」が「低い」（3期、4期）となっており、震災直後に比べ状況が改善されてきていると思われる。

表8 「配慮点」の名詞・形容詞の係り受け

順位	1期			2期			3期			4期		
	名詞句	形容詞句	頻度	名詞句	形容詞句	頻度	名詞句	形容詞句	頻度	名詞句	形容詞句	頻度
1	面	悪い	2	プールあそび	十分	1	まとまり	つきにくい	1	冬	自然	2
2	確認	よい	1	事故	十分	1	クラス	つきにくい	1	気温	低い	1
3	面	よい	1	手洗い	十分	1	個人	強い	1	数値	低い	1
4	関わり	少ない	1	手洗い・うがい	十分	1	満足感	強い	1	放射線	低い	1
5	友だち	少ない	1	水	十分	1	興味	自然	1	手洗い・うがい	丁寧	1
6	プール	大きい	1	注意	十分	1	子ども	自然	1	ルール	難しい	1
7	水遊び	大きい	1	子	not スムーズ	1	染量	低い	1	理解	難しい	1
8	経験	少ない	1	着替え	not スムーズ	1	地域	低い	1	雪遊び	安心	1
9	時間	好き	1	子	悪い	1	自己主張	多い	1	戸外	自由	1
10	遊び	好き	1	体調	悪い	1	姿	大切	1	戸外	出にくい	1
11	機会	設けにくい	1	一緒	大切	1	競争心	薄い	1	友だち	小さい	1
12	散歩	設けにくい	1	命	大切	1	異年齢児	優しい	1			
13	子	ころびやすい	1	組み合わせ方	not 十分	1						
14	行為	危険	1	天気	よい	1						
15	子ども	窮屈	1	お家	安心	1						
16	空間	広い	1	子	苦手	1						
17	目	自然	1	保育室	見えやすい	1						
18	注意	十分	1	気温	高い	1						
19	カップケーキ	小さい	1	子	多い	1						
20	子ども同士	色々	1	プール	大きい	1						
21	変化	長い	1	変化	長い	1						
22	子	得意	1	内容	無理	1						
23	タイミング	難しい	1									

表9 「配慮点」の名詞・動詞の係り受け

順位	1期			2期			3期			4期		
	名詞句	動詞句	頻度	名詞句	動詞句	頻度	名詞句	動詞句	頻度	名詞句	動詞句	頻度
1	外	出る	3	時間	楽しむ	2	身体	動かす	2	砂	払う	2
2	子	いる	3	プール	入る	2	体	動かす	2	砂	つく	2
3	水	触れる	2	一緒	行う	2	何	持つ	1	衣服	つく	2
4	気持ち	持つ	2	子	いる	2	子	持つ	1	除染	する	1
5	気持ち	伝える	2	一緒	楽しむ	1	親しみ	持つ	1	掃除	する	1
6	目	向ける	2	動き	楽しむ	1	興味	持つ	1	言葉かけ	する	1
7	クラス	伝える	1	プールあそび	楽しむ	1	興味関心	持つ	1	テラス	行う	1
8	相手	伝える	1	室内	行う	1	扱い	慣れる	1	手洗い・うがい	行う	1
9	配慮	伝える	1	傍ら	行う	1	跳び箱	慣れる	1	遊戯室	行う	1
10	魅力	伝える	1	各自水やり	できる	1	機会	行く	1	砂	not かかる	1
11	保育者	遊ぶ	1	自分	できる	1	体育館	行く	1	配慮	not かかる	1
12	経験	遊ぶ	1	準備体操	できる	1	畑	行く	1	友だち	not かかる	1
13	子ども	遊ぶ	1	一緒	作る	1	サツマ芋入り	食べる	1	必要性	伝える	1
14	子ども同士	遊ぶ	1	飾り	作る	1	シチュー	食べる	1	お砂	する	1
15	自覚	持つ	1	体力	作る	1	クラス	not つながる	1	室内	払う	1
16	外遊び	伝える	1	クッキング	使用	1	団結力	not つながる	1	一緒	遊ぶ	1
17	習慣	なる	1	野菜	使用	1	異年齢児	かかわる	1	遊び方	遊ぶ	1
18	思いやり	持つ	1	指	not ぶつける	1	姿	かかわる	1	砂	not 持ち込む	1
19	立場	なる	1	経験	行う	1	藤堂	できる	1	室内	not 持ち込む	1
20	一緒	遊ぶ	1	プール	not 入る	1	配慮	できる	1	周り	いる	1
21	言葉	向ける	1	子	not 入る	1	意欲	わく	1	友だち	いる	1
22	相手	なる	1	じょうろ	できる	1	活動	わく	1	場所	関わる	1
23	一緒	行う	1	環境	やる	1	決まり	確認	1	全員	関わる	1
24	手洗い	行う	1	遊び	やる	1	集団遊び	確認	1	扱い	見る	1
25	習慣	行う	1	プール	移動	1	チーム対抗	楽しむ	1	様子	見る	1
26	面	向ける	1	生長	観察	1	活動	楽しむ	1	気持ち	合わせる	1
27	におい	知らせる	1	ハバ	広げる	1	気持ち	合わせる	1	友だち	合わせる	1
28	具体的	知らせる	1	経験	広げる	1	友だち	合わせる	1	テラス	受ける	1
29	草花	知らせる	1	ウエーブパランス平均台	刺激	1	いも煮	使う	1	遊戯室	受ける	1
30	保護者	知らせる	1	感覚	刺激	1	福島県外産	使う	1	戸外遊び	促す	1
31	子ども	not 分かる	1	水分	取る	1	湖南	借りる	1	保育者	促す	1
32	自分	not 分かる	1	足	not ぶつける	1	畑	借りる	1	形	伝わる	1
33	実力	not 分かる	1	戸外	遊ぶ	1	環境	整える	1	力加減	伝わる	1
34	何	する	1	ビーチサンダル	履く	1	大ホール	整える	1	声	かける	1
35	震災	する	1	プール	履く	1	経験	積み重ねる	1	身	つける	1
36	話	する	1	カラ帽	かぶる	1	最中	積み重ねる	1	冬	楽しむ	1
37	一緒	楽しむ	1	屋根	つく	1	経験	走る	1	声	気付く	1
38	空間	楽しむ	1	意識	芽生える	1	子ども	測定	1	雪	降る	1
39	意識	持つ	1	見直し	改善	1	有無	測定	1	石けん	使う	1
40	自然物	触れる	1	お家	見る	1	図鑑	調べる	1	姿	受け止める	1
41	一緒	つなぐ	1	子	受ける	1	名前	調べる	1	気持ち	出る	1
42	手	つなぐ	1	汗	拭く	1	ドングリ	抵抗	1	外遊び	準備	1
43	面	違う	1	トマト	植える	1	落ち葉拾い	抵抗	1	冬	親しむ	1
44	友だち	違う	1	時間	設ける	1	配慮	not 怖がる	1	親子活動	設ける	1
45	安全面	気をつける	1	ロッククライミング	設置	1	言葉	する	1	場所	設定	1
46	写真	見せる	1	姿	挑戦	1	興味	もてる	1	習慣	洗う	1
47	図鑑	見せる	1	体	動かす	1	活動	違う	1	かわり	増える	1
48	一緒	作る	1	姿	認める	1	野菜	購入	1	子	体験	1
49	飾り	作る	1	野菜	買う	1	機会	作る	1	遊具	貸し借り	1
50	一斉活動	取り入れる	1	注意	払う	1	子ども	示す	1	かわり	通じる	1

1期では「手洗い」を「行う」、「安全面」に「気をつける」と、少し配慮をしており、2期では「プール」に「入らない」、「注意」を「払う」と、1期と同程度の配慮をしている様子が見られる。3期で、「ドングリ」「落ち葉拾い」に「抵抗」があるという他、わざわざ「野菜」を「購入」したり、「福島県外産」を「使う」ようになっており、警戒心が強まってきたと思われる。4期で、「砂」を「払う」、「砂」が「かからない」ようにする、「除染」「する」、「手洗い・うがい」を「行う」、「洗う」「習慣」をつける等、子どもにかなりいろいろな配慮が実際に行われてきていることがわかる。

(伴 浩美)

IV エピソード記録内容から

1. 概要の分析から

アンケートにあった“保育中に印象に残ったエピソード”の内容に応じてラベルを付け、その傾向を示したものが以下の表である。

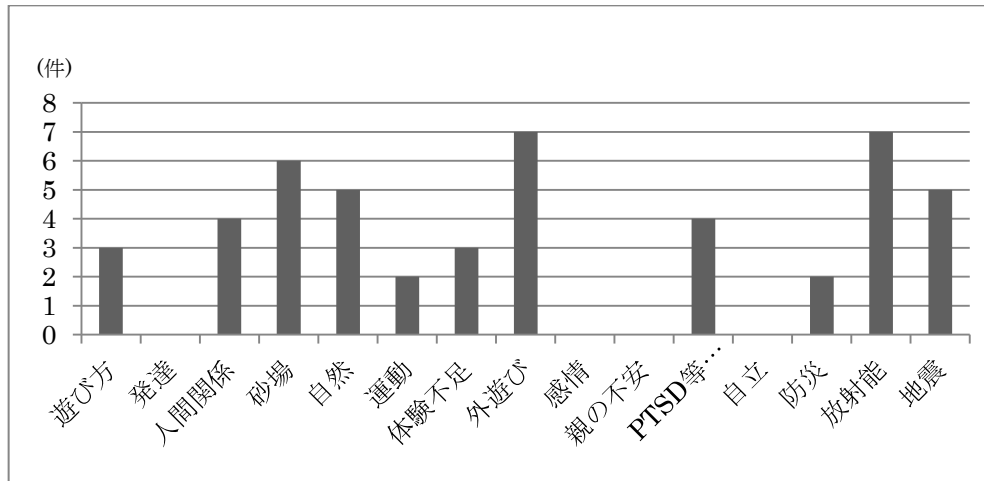


図1 エピソード内容(全学年)

エピソードの内容に関して、最も多い内容は「外遊び」と「放射能」についての内容であり、次いで「砂場」「自然」「地震」となっている。広い意味で言えば外遊びの中には砂場・自然も含まれており、保育者の感覚に引っかかるエピソードとしては、平成25年度の段階でも自然についての懸念からくるものが多いように思える。例えば次の様なエピソードが見られた。

<年中組>

「冷たい」「気持ちいい」「さらさらしてる」

「掘っても掘っても砂だ!!」「貝殻見つけた」

実際に砂が砂場に入ったことにより、山になっていること、砂の質として粒子が細かいこと、冷たいなど裸足で砂の感触を味わっていた。

砂場の砂と土の質感の違いを感じていた。

「旗を付けてお店屋さんができるようにしよう」とA子が言う。と同時に紙を準備しあつという間に作ってしまう。かわいい絵柄のついた旗が完成する。「あーおさいふがない」とR子が探してくる。お店屋さんにもなるし、お客さんにもなるので前に作っていた財布があったがなくなってしまう。「今度はリボンをつけて首から下げていけばなくならないから」と言って作り出す。大きさも少し考えて作っている。それは自分のものだという目印を一つに考えていた。お金も作ってお店屋さんが始まる。年少児も買いに来るが、お金が必要だと分かり、クラスに戻り担任と共に作って再びやってくる。

年長児も買いに来てくれたことで、子ども達は喜ぶ。また、男児も仲間に入ること、クラス全体としてのつながりが出てくる。

ごっこ遊びを通して、会話のやり取り、書いての気持ちがわかってくればいいと思っている。とても楽しい活動(遊び)になっている。

このエピソードでは自然(砂)と体が触れる事で子ども達の感性が刺激されたことも含め、その嬉し

さや雰囲気を共有しようとしながら遊びが発展していく様子が見られる。保育中に楽しいと思うことは多くあるのは確かであるが、自然物(砂)がきっかけとなり、それぞれのお子さんの感性自体からわき上がるものであったからこそ、遊び自体が活発化し、より広がりのある遊びへと展開したと感じとっているように見ることが出来る。

<年長組>

歩きながら、木々の葉が色づき始めた様子などを見たり、落ちている自然物を拾おうとしている友だちに

A男:「どんぐり(緑)とか枝とか、葉っぱは拾っちゃダメなんだよ。」

B男:「どうして?」

A男:「放射線とかP. M2. 5とかくっついて大変なんだよ」

とあわてて話す。

このエピソードでは放射線の他に、子どもの口からPM2.5という単語が発せられており、子どもにとっても環境に対して“気をつける”事が自然なこととして受け止められて率様子が伺える。そう考えると、子ども達が無条件で周囲の自然を受け入れ、関わるという自然な行為に対しての一種の見えない壁のようなものが、子ども達の心の中に出来ているのではないかと考えられる。

では、こうした傾向は各学年共通しているのでしょうか? 次のグラフは先の結果を学年ごとに分類したものである。

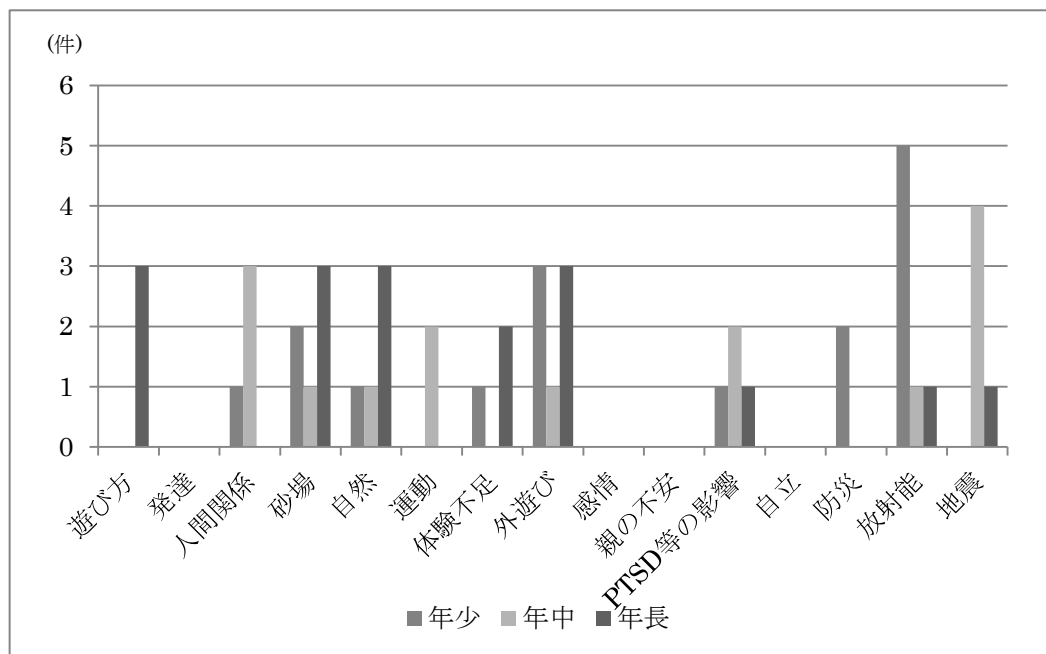


図2 エピソード内容(学年比較)

各学年について、多く見られた上位4つのエピソード項目は以下の通りとなっている。

年少 … 「放射能」「外遊び」「砂場」「防災」

年中 … 「地震」「人間関係」「運動」「PTSDの影響」

年長 … 「遊び方」「砂場」「自然」「外遊び」

年少は“放射能・防災”、年中で“地震”といった項目があるが、年長では上位4つの中では見ら

れない。この傾向から考えると、年齢が小さいうちにはそうした直接の原因(放射能など)から子ども達がどのような影響を受けるのかが分からない不安があり、そうした出来事に保育者の感覚が向くのではないかと推測される。例えば次の様なエピソードである。

<年少組>

外遊びでのこと。Sくんが砂を持って友達にかけようとしたので、保育者がとめた。

Sくんは保育者に注意されても首を振るばかりだった。Sくんを見ると、転びジャンパー、ズボンが砂だらけで、着替えを促しても大泣きしてしばらく抵抗するばかりだった。

泣くばかりのSくんに、砂遊びがしたかった気持ちを受け止め伝えた。そのうえで、今はなぜできないか知らせ、納得したうえで着替えをした。

震災後は、園庭の砂に触らないことを約束ごととして子ども達に知らせている。しかし、本来(震災前)ならば砂を触って注意されることはなかったのだと考えると、Sくんに申し訳ない気持ちだった。

砂遊びができない分、外で楽しめる遊びを提案し、配慮すべきだと感じる。

子ども達が砂を触るのは感覚を刺激する上でも重要かつ自然なことであるはずなのに、保育者はそれを、その(放射能からの)影響がはっきりしない中で制止しなければならない。保育者であるならば、子ども達が周囲の自然環境に触れる事の重要性を熟知しているはずであり、だからこそそこにこのエピソードのような苦悩が生まれるのではないだろうか。

<年少組>

礼拝は普段通り、落ち着いて心を静めて行う

「今日火事になるんでしょ？」と意味がまだよくわからずに言ってくる子がいるため、「火事になった時の逃げ方の練習をするんだよ」とわかりやすく話をする。

交換する上靴を持ってきているため、いつもと何かが違うことを子ども達なりに気付いているようである。

大きなベルに驚いているが、保育者の話を聞き速やかに行動する。ふざけたりする子はほとんどなく、まじめに参加している姿が見られる。

例年では、年少クラスの子は、大きなベルの音を聞き驚いて泣いてしまう姿が見られたが、今年は泣いてしまう子は全然いなかった。

警報のベルや避難の際の慌しい状況に慣れてしまっているからなのか、疑問に残る。

以前だと未知なる音刺激であった“非常ベル”の音なども、震災を経験した子ども達にとっては普段からある音の一つとして認知されているのかもしれない。しかし、そうした非日常が日常として子ども達の中に入っていることに対して、戸惑いを禁じ得ない保育者の気持ちが読み取れる。そしてそれは、保育者自らの子ども観(この時期の子どもはこうした様子のはずといった感覚)とのズレから生まれ、自らの感覚に無い状況にある子ども達に対して、違和感、不安、そして申し訳ないという気持ちを生じさせているように考えられる。

それに対して、年長は“遊び方”から“砂場”“自然”という項目が多くなっており、より具体的な子ども達の姿に対して感覚が働いている。例えば次の様なエピソードである。

<年長組>

1月より砂遊びを実施する。時間も無制限になったため、子ども達がやりたいと思った時を大切にしていく。

もくもくと砂遊びをする。

「富士山作ろうよ」「うん、そうしよう」「ケーブルカー走っているようにしよう」「僕は車が走れる世にするからね」

3回目の砂遊びとなり、ずいぶんと役割を決めて、遊び方も上手になってきた。

夢中になって、砂の扱いに注意ができず、友達に砂をかけてしまったり、靴の中にたくさん砂が入っていたり、周囲に注意しながら、砂が衣服につかないように、などができにくいため、その都度知らせた。

砂遊びのルールや砂の扱いがわからず、友達に間違えて書けてしまう面があるので、一緒に行いながら声をかけるようにする。

<年長組>

秋に収穫するためのサツマイモの苗植えを行う。園児と保護者だけで遠方の畑へ行き、手植えを行った。年長なので、出かける準備は自ら進んでおこない、スムーズに出発、活動に移ることができた。

一人1本ずつ苗を受け取り、穴を掘って苗を差し入れて土をかぶせる。1人ずつ場所を知らせて、話を聞いてから活動に移るようにした。また、集中して聴けるように、こちらで声をかける。スモックを着ていたが、砂が入らないようにズボンに入れた。

「穴を掘る」と言われた際によくわからない子が多数おり、「どうやるの?」と手で土を張る行動を行う様子が見られた。穴は空かず、土が周りによけられるだけだった。

一人ずつ手本を見せたり、一緒に行くことによって理解できた子もいたが、「先生やって」とあきらめてしまう子もいた。

大人にとって穴を掘ることは当たり前でできることだが、震災があつてから、砂遊びの機会が減ったために経験不足で今回の出来事があつたように思う。年長児でも苦労したので、このような体験は幼いうちからしておくべきだと感じた。

準備など、保育者からの指導もあり日常から行われていることに関してはスムーズであった子ども達も、従来であれば普通に行うことが出来たであろう穴掘りが上手く出来ない。穴掘りといった行為は、教わることもあるがそれは周囲に砂を散らかさないといった配慮についてのことがほとんどで、掘り方などは自らが経験の中で習得していくものである。全身運動でもある穴掘りなどの砂遊びという経験が不足していることで、子ども達の心身両面への影響について不安を感じている様子を見取ることが出来る。

(賀門康博)

2. テキストマイニング結果から

表1 「子どもの状態」の統計情報

文書	1期			2期			3期			4期		
	最小	平均	最大	最小	平均	最大	最小	平均	最大	最小	平均	最大
総文書数	26			25			14			14		
1文書あたりの語句数	11語	28語	47語	0語	17語	71語	11語	30語	59語	9語	30語	75語
1文書あたりの文字数	14文字	39文字	66文字	0文字	24文字	99文字	15文字	44文字	91文字	12文字	42文字	100文字
単語	頻度	割合			頻度	割合			頻度	割合		
名詞句	130	30%	85	34%	84	33%	76	30%				
形容詞句	21	5%	5	2%	11	4%	7	3%				
副詞句	6	1%	3	1%	2	1%	3	1%				
動詞句	88	20%	53	21%	52	21%	63	25%				
その他	193	44%	102	42%	104	41%	106	41%				

表2 「子どもの状態」の名詞・形容詞の係り受け

順位	1期			2期			3期			4期		
	名詞句	形容詞句	頻度	名詞句	形容詞句	頻度	名詞句	形容詞句	頻度	名詞句	形容詞句	頻度
1	かかわり	少ない	1	状態	アンパラン	1	秋	自然	2	日々	寒い	1
2	活動	少ない	1	日々	暑い	1	せい	少ない	1	外	元気	1
3	機会	少ない	1	喧嘩	小さい	1	機会	少ない	1	室内	元気	1
4	大ホール	少ない	1	姿	平気	1	経験	少ない	1	体	元気	1
5	関心	自然	1				子ども	おぼつかない	1	仲	よい	1
6	春	自然	1				走り方	おぼつかない	1	友だち	よい	1
7	活動	多い	1				振り方	力強い	1	気持ち	安定	1
8	時間	多い	1				地面	力強い	1	冬	自然	1
9	保育室内	多い	1				キャッチ	not 上手	1	山	大きい	1
10	着脱	難しい	1				力	弱い	1	手洗い・うがい	丁寧	1
11	経験	not 少ない	1				子ども	多い	1			
12	子ども	not 満足	1									
13	トラブル	起こりやす	1									
14	気持ち	強い	1									
15	友だち	新しい	1									
16	姿	精一杯	1									

1期で、「活動」が「少ない」もあれば、「多い」もあり、放射能や自信に対して、あまり関心がないのではないと思われる。4期で、「手洗い・うがい」を「丁寧」に行うようになっており、手洗いやうがいをしましうと、保育者からの指示があったものと思われる。

表3 「子どもの状態」の名詞・動詞の係り受け

位	1期			2期			3期			4期		
	名詞句	動詞句	頻度	名詞句	動詞句	頻度	名詞句	動詞句	頻度	名詞句	動詞句	頻度
1	姿	見る	3	喧嘩	見る	1	しっぽり	楽しむ	1	子	いる	3
2	外	遊ぶ	2	姿	見る	1	ハンカチ落とす	楽しむ	1	姿	見る	2
3	戸外	出る	2	集中力	見る	1	活動	楽しむ	1	砂	not 触れる	2
4	子ども	いる	2	飾り作り	見る	1	大ホール	楽しむ	1	子ども	遊ぶ	1
5	生活	慣れる	2	様子	見る	1	姿	見る	1	友だち	遊ぶ	1
6	室内	遊ぶ	1	園庭	育つ	1	子ども	見る	1	時間	出る	1
7	家庭	遊ぶ	1	畑	育つ	1	様子	見る	1	年長組	出る	1
8	時間	遊ぶ	1	野菜	育つ	1	移り変わり	持つ	1	つながり	出る	1
9	集中力	見る	1	おもちゃ作り	楽しむ	1	関心	持つ	1	一緒	楽しむ	1
10	飾り作り	見る	1	感触	楽しむ	1	自信	持つ	1	砂	not 持ち込む	1
11	様子	見る	1	収集	楽しむ	1	振り方	蹴る	1	室内	not 持ち込む	1
12	子ども	見る	1	40分	好む	1	地面	蹴る	1	戸外	出る	1
13	場	いる	1	戸外	好む	1	土	蹴る	1	衣服	つく	1
14	友だち	いる	1	遊び	好む	1	様子	走る	1	砂	つく	1
15	こと	遊ぶ	1	プール遊び	通す	1	力	走る	1	子ども	ジャンプ	1
16	外	出る	1	栽培	通す	1	ボール	確認	1	動き	ジャンプ	1
17	気持ち	出る	1	生長	通す	1	目	確認	1	戸外遊び	解除	1
18	時間	出る	1	七夕	ちなむ	1	関心	高まる	1	時間制限	解除	1
19	力	遊ぶ	1	飾り作り	ちなむ	1	競争意識	高まる	1	感覚	掘る	1
20	園生活	慣れる	1	途中	なる	1	自分	試す	1	砂	掘る	1
21	年長組	慣れる	1	結果	下回る	1	力	試す	1	サッカー	楽しむ	1
22	開花	喜ぶ	1	平均	下回る	1	ドングリ	拾う	1	手洗い・うがい	行う	1
23	進級	喜ぶ	1	生長	観察	1	落ち葉	拾う	1	開放	始まる	1
24	草花	喜ぶ	1	野菜	観察	1	機会	触れる	1	砂場	始まる	1
25	けが	増える	1	周り	向ける	1	秋	触れる	1	日々	続く	1
26	異年齢	増える	1	目	向ける	1	種目	達す	1	戸外	中断	1
27	関わり	増える	1	プール	行く	1	平均	達す	1	遊び	中断	1
28	かかわり方	not できる	1	意識	行く	1	運動会	通す	1	子	動かす	1
29	友だち	not できる	1	友だち	合わせる	1	経験	通す	1	体	動かす	1
30	子ども	not 記憶	1	力	合わせる	1	カーブ	転ぶ	1	砂	払う	1
31	震災	not 記憶	1	3~5歳	再開	1	様子	転ぶ	1	室内	払う	1
32	使い方	not 分かる	1	砂遊び	再開	1	身体	動かす	1	手	not つく	1
33	遊具	not 分かる	1	おもちゃ作り	使う	1	体	動かす	1	戸外遊び	not 行う	1
34	七夕	ちなむ	1	浮力	使う	1	一緒	動く	1	感覚	not 味わう	1
35	飾り作り	ちなむ	1	運動遊び	使用	1	友だち	動く	1	砂場	not 遊ぶ	1
36	こと	できる	1	固定遊具	使用	1	喜び	味わう	1	ドロケイ	する	1
37	習慣	できる	1	興味	持つ	1	段階	味わう	1	自分	やる	1
38	園庭	取り入れる	1	水	持つ	1	ダンス	踊る	1	室内	過ぎず	1
39	活動	取り入れる	1	外遊び	制限	1	運動会	踊る	1	外遊び	喜ぶ	1
40	登園	出迎える	1	時間	制限	1	身体	not ついていく	1	山	作る	1
41	友だち	出迎える	1	積み木	遊ぶ	1	半年	過ぎる	1	興味	持つ	1
42	ブランコ	乗る	1	〇る	not 分かる	1	園生活	過ぎず	1	外遊び	触れる	1
43	経験	乗る	1	物	のる	1	平均値	回復	1	時間	制限	1
44	機会	触れる	1	友だち	関わる	1	せい	滑る	1	園生活	送る	1
45	自然物	触れる	1	収穫	喜ぶ	1	興味	示す	1	戸外	戻る	1
46	園庭	親しむ	1	水	汲む	1	遊び	取り入れる	1	砂	落とす	1
47	活動	親しむ	1	日々	続く	1	ボール	取る	1			
48	ブランコ	漕ぐ	1	物	貸し借り	1	園生活	充実	1			
49	自分	漕ぐ	1	身体	動かす	1	指示	聞く	1			
50	友だち	奪う	1	プール	入る	1	ボール	離れる	1			

1期では、「震災」の「記憶」がない、「外」に「出」て、「遊ぶ」、とあり、放射能や地震を事態の見方が以前より軽減されているととれる関係が表されているが、2期で、「外遊び」を「制限」するが1件あり、やはり未だに環境に対して危ないと保育者が感じている様子が見られる。4期では、「戸外遊び」の「時間制限」が「解除」されたものの、「戸外遊び」を「行わない」、「砂」に「触れない」、「砂」を「落とす」、「砂」を「室内」に「持ち込まない」ように、また、「手洗い・うがい」を「行う」ように等、保育者がいろいろと指導している様子が見られる。

表4 「クラス状況」の統計情報

		1期			2期			3期			4期		
文書	総文書数	5			11			6			7		
		最小	平均	最大	最小	平均	最大	最小	平均	最大	最小	平均	最大
	1文書あたりの語句数	34語	89語	141語	0語	42語	165語	4語	45語	78語	2語	47語	79語
	1文書あたりの文字数	48文字	127文字	196文字	0文字	57文字	225文字	7文字	62文字	106文字	4文字	68文字	108文字
単語		頻度	割合		頻度	割合		頻度	割合		頻度	割合	
	名詞句	79	31%		81	30%		57	39%		58	32%	
	形容詞句	5	2%		6	2%		3	2%		5	3%	
	副詞句	3	1%		6	2%		1	1%		5	3%	
	動詞句	62	24%		57	21%		23	16%		37	21%	
	その他	107	42%		116	45%		62	42%		75	41%	

表5 「クラス状況」の名詞・形容詞の係り受け

順位	1期			2期			3期			4期		
	名詞句	形容詞句	頻度	名詞句	形容詞句	頻度	名詞句	形容詞句	頻度	名詞句	形容詞句	頻度
1	方法	よい	1				仕方	わかりやすい	1	天気	よい	1
2	棒	丈夫	1				説明	わかりやすい	1	道路	近い	1
3							避難	わかりやすい	1			
4							場所	好き	1			
5							遊び	好き	1			
6							材料	必要	1			

3期で、「避難」の「仕方」の「説明」が「わかりやすい」となっており、「わかりやすい」という表現より、災害から時間が経って落ち着いてきて、具体的な行動を考えているのではないかと思われる。

表6 「クラス状況」の名詞・動詞の係り受け

1期				2期				3期				4期					
順位	係り受け関係			頻度	係り受け関係			頻度	係り受け関係			頻度	係り受け関係			頻度	
	名詞句	動詞句	頻度		名詞句	動詞句	頻度		名詞句	動詞句	頻度		名詞句	動詞句	頻度		
1	棒	使う		2	現象	似る		2	子ども	する		2	一緒	遊ぶ		1	
2	音楽	かける		1	姿	似る		2	遊び	する		2	数名	遊ぶ		1	
3	声	かける		1	本能	似る		2	お集まり	する		1	保育室	遊ぶ		1	
4	絵	丸める		1	砂場	する		2	避難訓練	する		1	遊び方	遊ぶ		1	
5	紙	丸める		1	使用不可	する		2	話	する		1	声	かける		1	
6	棒	丸める		1	泥水	作る		2	お誕生会	楽しむ		1	友だち	かける		1	
7	担任	かける		1	子ども	触れる		2	椅子とりゲーム	楽しむ		1	かいりよし	行く		1	
8	カレンダー	使う		1	土	触れる		2	地震	起こる		1	遊び	行く		1	
9	使い方	知らせる		1	姿	持ち込む		2	避難訓練	起こる		1	砂	持つ		1	
10	場所	知らせる		1	水	持ち込む		2	お誕生会	行う		1	友だち	持つ		1	
11	棒	知らせる		1	10t	届く		2	子ども	行う		1	トラック	走る		1	
12	リボン	聞く		1	砂	送る		2	園長先生	聞く		1	道路	走る		1	
13	色	聞く		1	砂	届く		2	話	聞く		1	パス	到着		1	
14	話	聞く		1	保育	取り入れる		2	ベル	鳴る		1	子ども	到着		1	
15	ズボン	not 入る		1	5~6人	作る		1	火災警報	鳴る		1	かご	用意		1	
16	砂	not 入る		1	1袋	送る		1	お店	やる		1	電車	用意		1	
17	一人	not 落ち着く		1	砂場	送る		1	遊び	違う		1	迎え	来る		1	
18	保育児	not 落ち着く		1	基地	作る		1	dvd	見る		1	保護者	来る		1	
19	こいのぼり	泳ぐ		1	5~6人	遊ぶ		1	相談	始める		1	扱い	not 分かる		1	
20	空	泳ぐ		1	子ども	遊ぶ		1	散歩	出かける		1	保育者	とめる		1	
21	穴	掘る		1	空	眺める		1	お店屋	続く		1	戸外活動家 制限なし	なる		1	
22	苗	掘る		1	窓	眺める		1	椅子	並べる		1	友だち	間違える		1	
23	手植え	行う		1	園庭	あふれる		1					を玄関先	迎える		1	
24	遠方	行く		1	水	あふれる		1					一緒	行う		1	
25	畑	行く		1	姿	眺める		1					砂遊び	実施		1	
26	土	差し入れる		1	手	帰る		1					パス	待つ		1	
27	苗	差し入れる		1		9 降る		1					保育者	働きかける		1	
28	棒	作る		1	大雨	降る		1					音	聞く		1	
29	マット	準備		1	外	帰る		1									
30	跳び箱	準備		1	園庭	鳴る		1									
31	バス	乗る		1	雷	鳴る		1									
32	園	乗る		1	外遊び	行う		1									
33	中央	設置		1	手	洗う		1									
34	保育室	設置		1	積木	並べる		1									
35	絵	描く		1													
36	自分	描く		1													
37	こいのぼり	揚げる		1													
38	園庭	揚げる		1													
39	子ども	欲しがる		1													
40	他	欲しがる		1													
41	土	かぶせる		1													
42	棒	する		1													
43	リボン	つける		1													
44	活動	移る		1													
45	外遊び	介す		1													
46	リズム	合わせる		1													
47	苗	受け取る		1													
48	外	出る		1													
49	一人	植える		1													
50	出発手	洗う		1													

1期では、「保育児」が「一人」だと「落ち着かない」、「砂」が「入らない」ようにする、「出発（の時に）手」を「洗う」というふうに、子ども達が怖がっている様子が見えかわれるが、2期では、「泥水」を「作る」、「土」に「触れる」、「外遊び」を「行う」など、自然に対して積極的に働きかけていこうとする様子が見えかわれる。3期で、「避難訓練」が行われており、「地震」が「起こる」という意識はあるものの、怖がっている様子が見受けられない。4期になると、「砂遊び」が「実施」され、「戸外活動が制限なし」と「な」り、安心感が強まった様子が見えかわれる。

表7 「子どもの行動」の統計情報

1期				2期			3期			4期			
文書	総文書数	5			14			6			7		
		最小	平均	最大	最小	平均	最大	最小	平均	最大	最小	平均	最大
	1文書あたりの語句数	103語	181語	325語	0語	48語	190語	83語	192語	382語	56語	145語	255語
	1文書あたりの文字数	135文字	246文字	439文字	0文字	64文字	253文字	117文字	264文字	522文字	68文字	202文字	357文字
単語		頻度	割合		頻度	割合		頻度	割合		頻度	割合	
	名詞句	130	27%		110	29%		178	28%		161	29%	
	形容詞句	13	3%		15	4%		25	4%		18	3%	
	副詞句	18	4%		8	2%		18	3%		19	3%	
	動詞句	111	23%		65	17%		130	21%		108	19%	
	その他	201	43%		176	48%		279	44%		252	46%	

表8 「子どもの行動」の名詞・形容詞の係り受け

順位	1期			2期			3期			4期		
	名詞句	形容詞句	頻度	名詞句	形容詞句	頻度	名詞句	形容詞句	頻度	名詞句	形容詞句	頻度
1	何色	よい	1	質	細か	2	ベル	大きい	2	体	悪い	2
2	地震	グラグラする	1	粒子	細か	2	音	大きい	1	天気	よい	1
3	出発	スムーズ	1	アンケート	しっかりする	1	質	細か	1	砂遊び	もくもく	1
4	園庭	気持ち良い	1	手洗い	しっかりする	1	粒子	細か	1	雪	寒い	1
5	絵	大切	1	友だち	安心	1	絵柄	かわいい	1	子ども	小さい	1
6	配慮	必要	1	男児	不安	1	参加	まじめ	1	遊び方	上手	1
7				表情	不安	1	話	わかりやすい	1	気持ち	申し訳ない	1
8				砂遊び	楽しい	1	室内	ザワザワする	1	子ども	多い	1
9							環境	安全	1	言葉	難しい	1
10							活動	楽しい	1	状況	悲しい	1
11							出来事	急	1			
12							状況	慌ただしい	1			
13							知識	正しい	1			
14							保育室内	静か	1			
15							行動	速やか	1			
16							対応	難しい	1			
17							お金	必要	1			

2期で、「手洗い」を「しっかりする」、「男児」の「表情」が「不安」とあり、子どもが現実の危険性を見ているものと思われる。3期では、「環境」が「安全」、「状況」が「慌ただしい」、「知識」が「正しい」とあり、子ども達が大分落ち着いてきているように思われる。4期で、「遊び方」が「上手」の他に、「申し訳ない」「気持ち」、「悲しい」「状況」とあり、時間が経ちより一歩距離を置いて振り返る中で、現在の大変さを認識しているものと思われる。

表9 「子どもの行動」の名詞・動詞の係り受け

順位	1期			2期			3期			4期		
	名詞句	動詞句	頻度	名詞句	動詞句	頻度	名詞句	動詞句	頻度	名詞句	動詞句	頻度
1	様子	見る	2	山	なる	2	買い	来る	2	様子	見る	2
2	棒	作る	2	子	いる	2	火事	なる	2	言葉	伝える	2
3	子	いる	2	感触	味わう	2	姿	見る	2	砂	触る	2
4	色	見つける	2	砂	入る	2	お金	作る	1	室内	見る	1
5	2年	見る	1	砂場	入る	2	紙	作る	1	場面	見る	1
6	子ども	見る	1	雨	降る	2	前	作る	1	ビデオ	見る	1
7	棒	見る	1	雷	なる	1	お店屋	作る	1	姿	見る	1
8	こいのぼり	見る	1	外	見る	1	山	なる	1	not 注意	触る	1
9	リボン付	作る	1	様子	見る	1	r	遊ぶ	1	r	触る	1
10	色	作る	1	表情	なる	1	同時	作る	1	世	する	1
11	アンケート	受ける	1	友だち	いる	1	財布	作る	1	姿	話す	1
12	リボン	見る	1	言葉	知る	1	年少児	来る	1	場面	話す	1
13	食事	受ける	1	子	知る	1	年長児	来る	1	予定	話す	1
14	診断	受ける	1	放射線	知る	1	ベル	驚く	1	外	楽しむ	1
15	肥満	受ける	1	男児	降る	1	砂	入る	1	遊び	楽しむ	1
16	保護者	受ける	1	積木	ぶつかる	1	砂場	入る	1	雪	吹雪く	1
17	関わりかた	not 分かる	1	足	ぶつかる	1	男児	入る	1	様子	吹雪く	1
18	子	not 分かる	1	床	外れる	1	仲間	入る	1	車	走る	1
19	代弁	not 分かる	1	板積木	外れる	1	音	聞く	1	世	走る	1
20	友だち	not 分かる	1	外	帰る	1	保育者	聞く	1	2人	入る	1
21	ピンク	作る	1	爪ブラシ	帰る	1	話	聞く	1	砂	入る	1
22	フリー	いる	1	見通し	持つ	1	親	する	1	面持ち	入る	1
23	先生	いる	1	今年度	持つ	1	話	する	1	衣服	not つく	1
24	こいのぼり	泳ぐ	1	思い	受け止める	1	地震	来る	1	砂	not つく	1
25	栄養指導	受ける	1	保護者	受け止める	1	様子	見る	1	pm	not 見える	1
26	ほか	見つける	1	子	怖がる	1	ピアノ	止まる	1	目	not 見える	1
27	リボン	見つける	1	雷	怖がる	1	椅子	止まる	1	園庭	not 触る	1
28	一緒	行う	1	部分	not 足りる	1	つながり	出る	1	砂	not 触る	1
29	行動	行う	1	s男	not 認める	1	クラス全体	出る	1	砂	かける	1
30	様子	行う	1	ばい菌	not 落ちる	1	煙	出る	1	友だち	かける	1
31	リボン	座る	1	地震	くる	1	木々	色付く	1	地震	なる	1
32	引きずりおろし自分	座る	1	自分	する	1	様子	色付く	1	話	なる	1
33	行動	張る	1	お母さん	会う	1	業	色付く	1	お互い	ほほえむ	1
34	手	張る	1	積木	壊れる	1	気持ち	分かる	1	顔	ほほえむ	1
35	土	張る	1	自分	言い聞かせる	1	r	遊ぶ	1	ビデオ	過ごす	1
36	お友だち	聞く	1	隣	行く	1	固定遊具	遊ぶ	1	室内	過ごす	1
37	空	not くる	1	皮膚感覚	刺激	1	戸外	遊ぶ	1	言葉	掛ける	1
38	地震	not くる	1	爪ブラシ	洗う	1	y男	not 座る	1	声	掛ける	1
39	色	not 尋ねる	1	皮膚感覚	増やす	1	椅子	not 座る	1	穴	掘る	1
40	担任	not 尋ねる	1	積木	並べる	1	ごみ	not 入る	1	砂	掘る	1
41	棒	たたく	1	床	落ちる	1	口	not 入る	1	お互い	見合う	1
42	友だち	たたく	1				子	いる	1	顔	見合う	1
43	周り	よける	1				親	いる	1	空	降る	1
44	土	よける	1				絵柄	つく	1	砂	取る	1
45	絵	扱う	1				旗	つく	1	手	取る	1
46	気持ち	扱う	1				リボン	つける	1	言葉	譲る	1
47	自分	違う	1				首	つける	1	場所	譲る	1
48	引きずりおろし自分	押す	1				うち	やる	1	首	振る	1
49	友だち	押す	1				お母さん	やる	1	注意	振る	1
50	リボン	使う	1				何	違う	1	トラック	聞く	1

1期で、「地震」が「こない」と、自分の所は直接的な被害を受けている所ではない、という分析が出ているが、2期では、「放射線」について「知る」、「地震」が「くる」のではないかと、「子ども」達が「怖が」っており、地震や放射能について、怖さを知るようになってきている事を感じとっている。3期で、「火事」に「なる」、「ベル」に「驚く」、「地震」が「来る」、「ピアノ」が「止まる」等、子ども達に恐怖感が残っていることがわかる。4期では、「砂」に「触る」、「外」で「遊び」を「楽しむ」という一方で、「地震」に「なる」とあり、全体的には納まってきたけれども、中には警戒をしている人もいることがうかがわれる。

表10 「考察」の統計情報

1期				2期			3期			4期		
文書	総文書数	2			(2期は、該当するデータが無かった)	3			5			
		最小	平均	最大		最小	平均	最大	最小	平均	最大	
	1文書あたりの語句数	74語	120語	167語		79語	119語	169語	53語	98語	169語	
	1文書あたりの文字数	108文字	172文字	236文字		119文字	172文字	234文字	78文字	141文字	239文字	
単語		頻度	割合			頻度	割合		頻度	割合		
	名詞句	39	27%			61	30%		82	31%		
	形容詞句	6	4%			8	4%		11	4%		
	副詞句	0	0%			7	3%		11	4%		
	動詞句	30	21%			30	15%		49	19%		
	その他	71	48%			95	48%		108	42%		

表11 「考察」の名詞・形容詞の係り受け

順位	1期			2期			3期			4期		
	係り受け関係			係り受け関係			係り受け関係			係り受け関係		
	名詞句	形容詞句	頻度	名詞句	形容詞句	頻度	名詞句	形容詞句	頻度	名詞句	形容詞句	頻度
1	関わり	少ない	1	(2期は該当するデータが無かった)	影響	大きい	1	外	トップリ	1		
2	経験	少ない	1		子ども	大きい	1	遊び	トップリ	1		
3	交わり方	少ない	1		室内	ザワザワする	1	活動	少ない	1		
4	友だち	少ない	1		認識	危ない	1	戸外	少ない	1		
5	言葉	幼い	1		出来事	急	1	やり取り	色々	1		
6	体験	幼い	1		保育室内	静か	1	会話	色々	1		
7								雪	not 怖い	1		
8								天候	よい	1		
9								子ども	フラフラ	1		
10								遊び方	安心	1		
11								友だち	楽	1		
12								様子	鮮明	1		
13								子ども	多い	1		
14								印象	怖い	1		
15								子ども	満足	1		

4期で、「様子」が「鮮明」、「怖い」という「印象」とあり、今すぐの現実ではなく、過去のことを思い出すようになってきていることがわかる。

表 12 「考察」の名詞・動詞の係り受け

1期				2期			3期			4期					
順位	係り受け関係			順位	係り受け関係			順位	係り受け関係			順位	係り受け関係		
	名詞句	動詞句	頻度		名詞句	動詞句	頻度		名詞句	動詞句	頻度		名詞句	動詞句	頻度
1	m子	違う	1				父親	聞く	2	子ども	いる	1			
2	棒	違う	1				ピアノ	止まる	1	時間帯	いる	1			
3	一緒	過ごす	1				メディア	受け取る	1	自宅	いる	1			
4	兄	過ごす	1				子ども	受け取る	1	砂	気付く	1			
5	穴	掘る	1				情報	受け取る	1	特性	気付く	1			
6	大人	掘る	1				椅子	止まる	1	遊び	気付く	1			
7	機会	減る	1				話	聞く	1	印象	持つ	1			
8	砂遊び	減る	1				y男	not 座る	1	子ども	持つ	1			
9	m子	使う	1				椅子	not 座る	1	役割	持つ	1			
10	棒	使う	1				言葉	not 出る	1	姿	遊ぶ	1			
11	兄	離れる	1				放射能	not 出る	1	友だち	遊ぶ	1			
12	年	離れる	1				興味	持つ	1	外	not する	1			
13	リボン	つける	1				物事	持つ	1	言葉	not する	1			
14	表情	オーバー	1				結び付き	出来る	1	天候	覚える	1			
15	やり取り	見せる	1				放射能	出来る	1	様子	覚える	1			
16	友だち	持つ	1				椅子	倒す	1	震災時	思い出す	1			
17	物	貸し借り	1				放射能	not 飛ぶ	1	様子	思い出す	1			
18	場面	貸す	1				声	かける	1	バケツ	入れる	1			
19	気持ち	伝わる	1				放射線	含む	1	砂	入れる	1			
20							静けさ	察知	1	時間	変わる	1			
21							我	返る	1	流れ	変わる	1			
22							地震	来る	1	砂遊び	not 行う	1			
23										水	not 使う	1			
24										集中	not 続く	1			
25										遊び	つかる	1			
26										放射能	影響	1			
27										時間	掛かる	1			
28										室内遊具施 設	含む	1			
29										姿	見る	1			
30										子ども	見受ける	1			
31										姿	戸惑う	1			
32										水	使う	1			
33										遊び	取り入れる	1			
34										経験	重なる	1			
35										遊び	通す	1			
36										会話	伝わる	1			
37										遊び方	理解	1			

(2期は該当するデータが無かった)

(※ 2期の部分は、その時期に相当するデータが無かったので空けている)

3期では、「放射能」が「出ない」、「放射能」「できる」、「放射能」が「飛ばない」、「放射線」を「含む」とあり、放射能に対する意識が強いが、4期になると、「震災時」を「思い出す」、「放射能」の「影響」となっており、3期での直接的な脅威から、4期では、思い出すと影響を感じるに変わってきていることがうかがわれる。

表 13 「反省評価」の統計情報

文書	1期				2期			3期			4期		
	総文書数	最小	平均	最大	最小	平均	最大	最小	平均	最大	最小	平均	最大
	53				35			17			62		
1文書あたりの語句数	0語	23語	213語	0語	33語	174語	0語	58語	117語	0語	10語	144語	
1文書あたりの文字数	0文字	35文字	319文字	0文字	49文字	244文字	0文字	85文字	171文字	0文字	15文字	195文字	
単語	頻度	割合		頻度	割合		頻度	割合		頻度	割合		
名詞句	222	29%		192	28%		171	29%		112	29%		
形容詞句	33	4%		32	5%		22	4%		13	3%		
副詞句	19	3%		20	3%		7	1%		13	3%		
動詞句	136	18%		143	21%		117	20%		73	19%		
その他	350	46%		301	43%		265	46%		173	46%		

表14 「反省評価」の名詞・形容詞の係り受け

順位	1期			2期			3期			4期		
	名詞句	形容詞句	頻度	名詞句	形容詞句	頻度	名詞句	形容詞句	頻度	名詞句	形容詞句	頻度
1	春	自然	2	プール	高い	1	子	多い	2	機会	よい	1
2	友だち	小さい	2	意識	高い	1	トラブル	多い	1	機会	多い	1
3	関心	自然	1	染量	高い	1	リピーター	多い	1	粘土遊び	多い	1
4	流れ	自然	1	土地	高い	1	発見	多い	1	砂	べったり	1
5	かわり	少ない	1	砂遊び	うれしい	1	工夫	必要	1	膝	べったり	1
6	機会	少ない	1	再開	うれしい	1	道具	必要	1	観察	必要	1
7	心	自然	1	お家	安心	1	遊具	必要	1	子供	細やか	1
8	子供	少ない	1	姿	安心	1	子	おぼつかない	1	扱い方	not うまい	1
9	身支度	少ない	1	空間	広い	1	走り方	おぼつかない	1	場面	大切	1
10	同年齢	少ない	1	プールあそび	十分	1	歩き方	おぼつかない	1	姿勢	難しい	1
11	言葉	少ない	1	戸外	十分	1	場所	身近	1	室内遊び	余儀ない	1
12	イメージ	悪い	1	戸外遊び	少ない	1	一方	安心	1			
13	子	悪い	1	体験	少ない	1	かけ	意地悪	1			
14	繰り返し	強い	1	活動	新しい	1	女兒	意地悪	1			
15	突発的	少ない	1	場所	新しい	1	子供	少ない	1			
16	仲間意識	強い	1	雨	多い	1	変化	少ない	1			
17	方法	強い	1	月	多い	1	線量	低い	1			
18	経験	大切	1	対応	not 十分	1	地域	低い	1			
19	互い	強い	1	環境	いち早い	1	一方	不安	1			
20	積み重ね	大切	1	土	ダイナミック	1	湖南	遠い	1			
21	外遊び	不安	1	栽培	大規模	1	製作	楽しい	1			
22	表情	不安	1	外	長い	1	場所	早い	1			
23	子供	大切	1	水	怖い	1	けが	大きい	1			
24	保護者	過敏	1	経験	様々	1	気持ち	大切	1			
25	意欲的	活発	1									
26	保育児	活発	1									
27	震災	過敏	1									
28	子	多い	1									
29	仕方	難しい	1									
30	身支度	難しい	1									
31	援助	not しっかり	1									
32	スペース	安心	1									
33	外遊び	楽しい	1									
34	遊び	好き	1									
35	喜び	十分	1									
36	刺激的	新鮮	1									
37	友だち	親切	1									
38	姿	精一杯	1									
39	言葉かけ	丁寧	1									

1期では、「イメージ」が「悪い」の他、「保護者」が「震災」に「過敏」に反応していると、やや冷静に見ている姿勢がうかがわれる。2期になると、「線量」が「高い」、「戸外遊び」が「少ない」とあり、この辺りで、子ども達の置かれている状況についてより深く認識してきているのではないかと思われる。3期では、「変化」が「少ない」、「地域」の「線量」が「低い」ということから、自分たちが居る所への不安が以前より軽減されていると思われる。4期で、「砂」が「べったり」とあり、かなり安心している様子が見られる。

表 15 「反省評価」の名詞・動詞の係り受け

順位	1期			2期			3期			4期		
	名詞句	動詞句	頻度	名詞句	動詞句	頻度	名詞句	動詞句	頻度	名詞句	動詞句	頻度
1	機会	出る	2	子ども	喜ぶ	2	子	いる	3	外	遊ぶ	2
2	アンケート	取る	2	興味	合わせる	2	興味	持つ	2	きっかけ	なる	1
3	イメージ	持つ	2	体	動かす	2	姿	見る	2	こもりがち	なる	1
4	外	遊ぶ	2	感覚遊び	楽しむ	1	木	なる	1	姿	なる	1
5	頼り	する	2	砂遊び	楽しむ	1	気持ち	なる	1	子	なる	1
6	場面	見る	1	水しぶき	楽しむ	1	手助け	なる	1	室内	なる	1
7	個人差	見る	1	段階	楽しむ	1	相手	なる	1	機会	なる	1
8	姿	見る	1	遊び	楽しむ	1	自信	持つ	1	室内	遊ぶ	1
9	おうち	持つ	1	外	行う	1	虫	持つ	1	積極的	遊ぶ	1
10	様子	見る	1	行事	行う	1	関心	持つ	1	意見	掘る	1
11	思いやり	持つ	1	栽培	行う	1	好奇心	持つ	1	砂	掘る	1
12	自覚	持つ	1	指導	行う	1	11月	向ける	1	機会	見る	1
13	かかわり	見る	1	手洗い	行う	1	作戦	向ける	1	姿	見る	1
14	お互い	する	1	バタ足	楽しむ	1	次回	向ける	1	保護者	見る	1
15	交流	する	1	戸外	遊ぶ	1	トラブル	見る	1	プランター	植える	1
16	実態	する	1	環境	楽しむ	1	気持ち	味わう	1	経験	植える	1
17	目の当たり	する	1	経験	楽しむ	1	勝敗	味わう	1	植物	植える	1
18	巢型	見る	1	発達	合わせる	1	達成感	味わう	1	時	not 逃す	1
19	外	出る	1	テラス	出る	1	祖父母参観	向ける	1	自然現象	not 逃す	1
20	戸外	出る	1	ホース	出る	1	クラス	not 入れる	1	環境設定	いかす	1
21	一緒	いる	1	栽培	出る	1	子	not 入れる	1	遊び	いかす	1
22	意識	持つ	1	水	出る	1	集団活動	not 入れる	1	活動	つなげる	1
23	気持ち	持つ	1	栽培物	触れる	1	連帯感	味わう	1	次	つなげる	1
24	4月	取る	1	子ども	触れる	1	ハバ	広がる	1	環境設定	できる	1
25	保護者	取る	1	水	触れる	1	活動	広がる	1	場面	関わる	1
26	仕方	知らせる	1	遊び	触れる	1	視野	広がる	1	指先	使う	1
27	避難	知らせる	1	外	遊ぶ	1	トラブル	出る	1	粘土遊び	使う	1
28	方法	知らせる	1	水	喜ぶ	1	家族間	出る	1	園行事	取り入れる	1
29	遊び方	知らせる	1	アンケート	行く	1	外	出る	1	狙い	取り入れる	1
30	プレゼント	もらう	1	子ども	合わせる	1	ボール	触れる	1	内容	出る	1
31	喜び	もらう	1	けが	増える	1	実際	触れる	1	明るみ	出る	1
32	手作り	もらう	1	トラブル	増える	1	手	触れる	1	砂	抵抗	1
33	一緒	過ごす	1	姿	増える	1	感情コント	not 効く	1	手	抵抗	1
34	預かり保育	過ごす	1	興味	対応	1	ロール			機会	動かす	1
35	子	いる	1	子ども	対応	1	男児	not 効く	1	体	動かす	1
36	活動	行う	1	7月	入る	1	自分	する	1	部分	補う	1
37	姿	行う	1	今年度	入る	1	遊び	する	1	別	補う	1
38	年長児	行う	1	大型ピール	入る	1	時間	楽しむ	1	子	誘いかける	1
39	5月	行く	1	感覚遊び	not 見る	1	収穫	楽しむ	1	体	誘いかける	1
40	実際	行く	1	協同的遊び	not 見る	1	トラブル	見える	1	意見	not できる	1
41	避難訓練	行く	1	水	not 抵抗	1	様子	見える	1	姿勢	しゃがむ	1
42	アンケート	出す	1	腹ばい	not 抵抗	1	写真	使う	1	育ち	する	1
43	外遊び	出す	1	園外	行く	1	図鑑	使う	1	育ち	する	1
44	結果	出す	1	時期	not 遊ぶ	1	一緒	取り組む	1	砂	つける	1
45	あこがれ	聞く	1	大半	する	1	実際	取る	1	機会	もてる	1
46	歌	聞く	1	漬物	する	1	手	取る	1	外遊び	限る	1
47	年長児	聞く	1	愛着	わく	1	sos	出す	1	保育内容	考慮	1
48	様子	過ごす	1	興味	わく	1	姿	出す	1	そり滑り	行う	1
49	クラス全員	遊ぶ	1	園生活	慣れる	1	植物	植える	1	粘土遊び	行く	1
50	反面使い方	not 分かる	1	保育者	慣れる	1	畑	植える	1	子ども	示す	1
							仲	深まる	1	姿	触る	1

「外」に「出る」、「外遊び」に「出す」（1期）、「砂遊び」や「水しぶき」を「楽しむ」、「栽培物」に「触れる」（2期）、「虫」を「持つ」、「収穫」を「楽しむ」、「植物」を「植える」（3期）、「砂」を「掘る」（4期）となっており、全体として、保育者が子どもを遊ばせるということに関しては、地震や放射能への不安が以前より軽減されていると思われる。

（伴 浩美）

<最後に>

以下のグラフは、アンケートの中で各園に「今の状況で子ども達の健康の保証が来ていますか？」という質問に対する回答内容である。

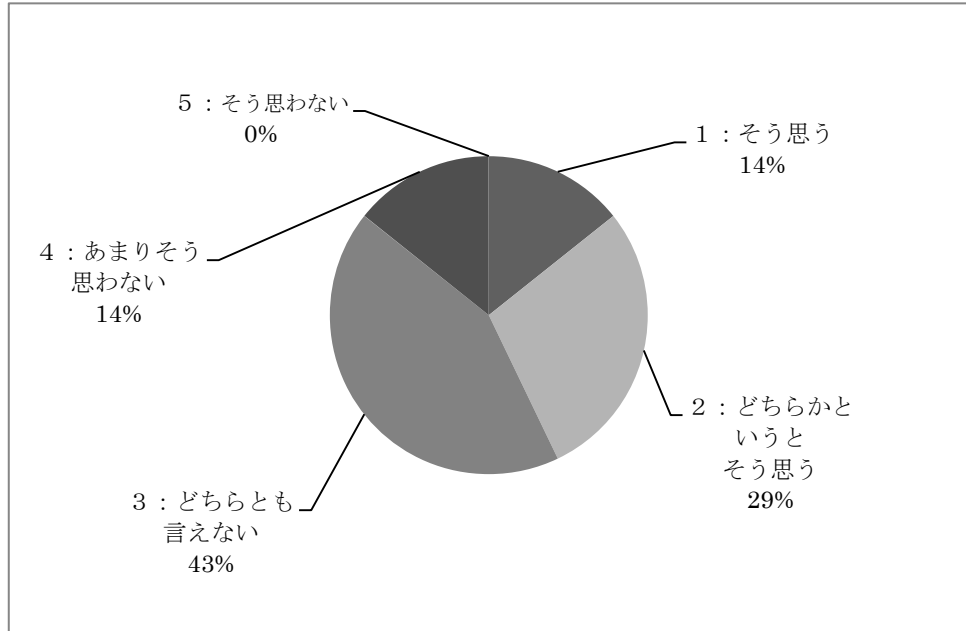


図3 子ども達の健康の保証が来ているか？

この結果から見えるものとして、

- ①「そう思わない」という園はない
- ②「どちらとも言えない」という園が半数近くを占めている
- ③「そう思う」「どちらかというと思う」のプラス評価の合計(40%)が、「そう思わない」「あまりそう思わない」のマイナス評価の合計(14%)を大きく上回っている

という点があげられる。将来にわたる影響が危惧され、見えない被害でもある東京電力福島第1発電所による放射線被害。これまでにあげた様々な不安要素を感じ、まだまだ放射能問題による子ども達の発達への影響を計りかねているものの、目の前の子ども達の姿と、その成長、そして自分たちの保育に向けての努力によって、子ども達自身の成長を信じている姿が浮かんでくる。

最後に前回調査と同様の心理相関概要図を示す。前回調査に比べより明確に経験不足や、異年齢との関わり不足からの憧れとなるモデルの未形成、発達の差などが顕著になってきて、“申し訳ない思い”もどこかで感じつつ、除線等による状況の変化を少しずつ日々の保育の工夫の中に取り入れ、保育者一人ひとりが感じている“今、必要な経験”を得させようとしているのが、福島の保育者達である。

とかく、放射能問題に健康被害や、外遊びが出来ないという点に注意が行きがちな福島という環境であるが、環境に甘んじて「仕方ない」と思っているだけではなく、そこに必要な経験の必要を強く感じているからこそ、日々の工夫が生まれているのではないだろうか。様々な生活経験の不足や自然との関わり不足などは、福島特有の問題ではなく、待機児童問題などで保育環境が悪化しやすい首

第3章 発達調査報告

関口はつ江・長田瑞恵・山崎 晃

本章では、平成25年度報告書『震災を生きる子どもと保育』第2部「放射能災害と保育問題 第1章 3. 協力園幼児の発達調査」に記載した調査結果の継続調査結果を報告する。前回は震災後1年を経過した平成24年3月の調査結果を、震災前の同地区の調査結果（平成17年度）とのコホート差を中心に報告した。本報告書では、その後同一の方法で実施した平成25年3月、平成26年3月の調査によってとらえられた、3年間の発達の状態の違いを報告する。

調査対象は研究協力園7幼稚園の全園児（満3歳児を除く）とし、下表の項目について5件法で、担任保育者が記入した。本報告書においては以下の点について分析したデータを中心に報告する。

I 各年度の領域、年齢、地域別結果 II クラスター分析による発達のパターン III 領域別性別結果 IV 園別結果。

調査対象園は、環境条件（放射能線量等）、保育方法等を異にしており、結果の解釈は諸条件を踏まえることおよび、さらに継続的な資料収集も必要であると考え、ここでは結果の報告のみとする。平成27年度の調査結果も含めて、最終報告書において考察を述べる予定である。

領域	項目 番号	質 問
知的	A1	かなで自分の姓名を書く
	A2	“右”と“左”の区別ができる、または、自分の左と右がわかる
	A3	“きのう”と“あした”の区別がわかる
	A4	“たて”と“よこ”の区別ができる
	A5	かなで書かれた自分の姓名を読む
	A6	両方の指が何本あるか、見ないで正しく言う
	A7	両方の指の数を正しく数える
	A8	黄色や緑など主な色の名前と実際の色がほぼ一致する
	A9	100円玉がわかる
	A10	自分の誕生日がわかる
	A11	四角形のお手本をまねしてかく
	A12	人数を数えて物を配ることができる
	A13	サイコロの出た目の数がわかる
	A14	カレンダーで何日というとその数字を指す
	A15	絵本やお話のあらすじを人に話す
	A16	今日は、何曜日か分かる
	A17	粘土で“～らしく”動物、乗り物、野菜など、かたちのあるものを作ろうとする
	A18	頭、胴体、四肢のそろった人物画を描く
	A19	時計がわかる(12時、3時など)
	A20	相手の(友達)の言葉を理解しながら会話が成立する
	A21	クラス全員への先生の話をも自分のこととして受け止め、理解する
	A22	動植物など自分の関心のあるものを本(図鑑)などでみる
	A23	自然現象(例えば雨が降るわけなど)の理由を尋ねたりする
	A24	ひらがなを読む
	A25	ひらがなを書く
運動的	B1	しきいの上(あるいは平均台)をまっすぐに両脚をかわりばんに踏み出して歩く
	B2	片足とび(ケンケン)をする、20センチぐらい
	B3	片足立ちをする
	B4	ブランコをこいでのる
	B5	でんぐり返しをする
	B6	スキップをする
	B7	相手が投げたボールを両手で受け止める
	B8	バットや棒でボールを打つ
	B9	ボールをつづけて10回くらいつく
	B10	ひとりなわとびをする(数回つづける)
	B11	子ども同士でリレーをして遊ぶ
	B12	鉄棒で前まわりをする
	B13	うんでいでぶら下がって渡る
	B14	箸で食べる
	B15	はさみを使って簡単な形(紙)を切る
	B16	服の前のボタンをひとりでかける
	B17	ひもをかた結びに結ぶ(たて結びでもよい)
	B18	片目だけつむる
	B19	200mぐらい続けて走る
	B20	60cmの高さからとび下りる

領域	項目番号	質問
情緒的	C1	友達の喜ぶことを自分から喜んでする
	C2	話を聞きながら想像して楽しむ
	C3	自分でよくしたいのに、できないとくやしがる
	C4	積み木を積んで、もう少しでできあがるところでくずれるとくやしがる
	C5	かなしい話を聞いて、かなしがる
	C6	遠足をたのしみに準備していて、中止になるとかなしがる
	C7	友達みんなのなかからはずれると、かなしがる
	C8	草や木をだいじにする
	C9	動物をかわいがる
	C10	小さい子をかわいがる
	C11	絵本や登場人物の、そのときどきの気持ちが言える
	C12	きれいなものを見て“きれい”という
	C13	風の音、雨の音などを感じ、言葉で表現をする
	C14	飼育していた小動物が死ぬとかわいそうがる
	C15	困っている子どもにやさしくする
	C16	自分から気がついて全体の役にたつ
	C17	友達の病気やけががよくなると喜ぶ
	C18	相手の気持ちを理解しようと、聞いたり考えたりする
	C19	必要なときは保育者の助けを(援助)を求める
	C20	自分の要求が通らなくても自分なりに気持ちをおさめる
	C21	自分の目標までやりとげようと、がんばる
	C22	ころんですりむいた膝(または手など)が痛くても泣かなくなる
	C23	おとな(先生や親)が喜ぶことをしようとする
	C24	相手や周りの人の気持ちを考えて自分の行動を変える
	C25	自分の大切なものが損なわれると悲しがる
社会的	D1	友達と遊んでいるとき、ほかの子の承諾や同意をもとめる
	D2	助けが必要なとき、ほかの子に助けを求める
	D3	ほかの子どもを援助したり、守ったりする
	D4	ほかの子どもたちに玩具をもってくる
	D5	ほかの子どもにめいわくをかけたら、おわびを言う。
	D6	競争心がある(他の子どもとの間で)
	D7	数人がいっしょになって、子どもの発案した遊びをいっしょにする
	D8	自分のしたことを保育者に話して聞かせる
	D9	自分のしたことに責任を負う(自分のあやまちを謝るなど)
	D10	まかされたことを責任をもってする
	D11	保護者がいてもいなくても、きまったことはちゃんとする
	D12	“わたし”とか“ぼく”とかいう言葉で自分と呼ぶ
	D13	自分より小さい子ができるまで待つてあげる
	D14	友達が何かしているとき、じゃまをしない
	D15	お店屋さんごっこで、おつりのやりとりをする
	D16	信号を見て、正しく渡る
	D17	じゃんけんで勝ち負けがわかる
	D18	共同の物を順番に使うことができる
	D19	けんかなどのとき、自分の考えを相手にはっきりいう
	D20	友達同士のトラブルの間に入って收拾しようとする
	D21	保育者が掃除など子どもの生活のための仕事をしているのを見て、手伝おうとする
	D22	いやなときは相手にはっきり「いや」という
	D23	悪いことや困ることをしている子に「いけない」と止める
	D24	クラスみんなで何かするときなど、みんなに合わせて行動する(遅れないなど)
	D25	助けられたり、して貰ったとき「ありがとう」と感謝する

領域	項目番号	質 問
生活習慣	E1	ソックス(短い靴下)をひとりではく
	E2	ひとりで鼻をかむ、または、自分で気がついて鼻をかむ
	E3	大便をひとりでする(全く手がかからない)
	E4	うがいをする
	E5	ひとりで歯ブラシを動かして歯をみがく
	E6	嫌いなものでも、がんばって食べようとする
	E7	汗をかいたら自分で着替える
	E8	水をこぼしたり、こぼれていたら、自分からぞうきんでふく
	E9	自分から、遊んだあとの自分の遊具をかたずける
	E10	自分から、遊んだあとの皆の遊具をかたずける
	E11	手ぬぐいやぞうきんをしぼる
	E12	自分から“いただきます”や“ごちそうさま”をいう
	E13	いわれなくても食事の前に手を洗う
	E14	脱いだものを一応たたんで(きちんとでなくてもよい)決まった場所に置く
	E15	食事の片づけを自分でする
	E16	所持品の始末をきちんとする
	E17	挨拶(おはよう、さようならなど)を自分からする
遊び	F1	自分から遊びを見つけて遊び込む
	F2	遊びのなかで、新しいことを考えだしたり、新しいやりかたを工夫したりする
	F3	周囲の物を積極的に遊びに活用する
	F4	身辺のものや出来事に関心を持って、遊びを取り入れたり、発展させる
	F5	いっしょに遊ぼうと積極的に仲間に誘う
	F6	遊びに欲しいものがあるとき、順番に待ったり貸してといて、何とかして達成しようとする
	F7	遊びがうまくいかないとき、自分達で協力して解決しようとする
	F8	遊びに集中し、周りが騒いでも妨げられない
	F9	積み木やブロックで、遊びの場所をつくる
	F10	ごっこ遊びのとき、そのものになりきって遊ぶ
	F11	友達とおもしろいアイデアを出しあって遊ぶ
	F12	積極的に泥遊びや砂遊びを楽しむ(どちらか片方でよい)
	F13	遊びの中で新しい役割を考え出したり、自由に役割を交換したりして遊ぶ
	F14	友達の遊びに進んで加わったり、友達の提案に乗って協調して遊ぶ
	F15	同じ遊びを数日間継続して発展させながら遊ぶ
	F16	遊びのルール(陣地ではつかまらないなど)を理解して遊ぶ

(関口はつ江)

I 各年度の領域、年齢、地域別調査結果

1. 時点ごとに地域×学年×領域の反復測定分散分析

(0) 対象 表1参照

表1 調査協力園児の内訳(人)

子ども学年			地域		
			郡山	福島	合計
3歳児	時期	2012年3月	163	60	223
		2013年3月	125	90	215
		2014年4月	154	105	259
	合計		442	255	697
4歳児	時期	2012年3月	203	88	291
		2013年3月	244	113	357
		2014年4月	190	129	319
	合計		637	330	967
5歳児	時期	2012年3月	239	101	340
		2013年3月	197	118	315
		2014年4月	249	113	362
	合計		685	332	1,017
合計	時期	2012年3月	605	249	854
		2013年3月	566	321	887
		2014年4月	593	347	940
	合計		1,764	917	2,681

(1) 2012年3月

*地域(2)×学年(3)×領域(6)の反復測定分散分析(地域と学年は被験者間要因、領域は被験者内要因)を行った。(図1-1～図1-6)

その結果、下記の主効果、交互作用が有意であった。

領域の主効果($F(5, 4230)=64.64, p<.01$)

生活習慣>知的領域 生活習慣>運動的領域
 生活習慣>情緒的領域 遊び>情緒的領域
 生活習慣>社会的領域 遊び>社会的領域
 遊び>生活習慣

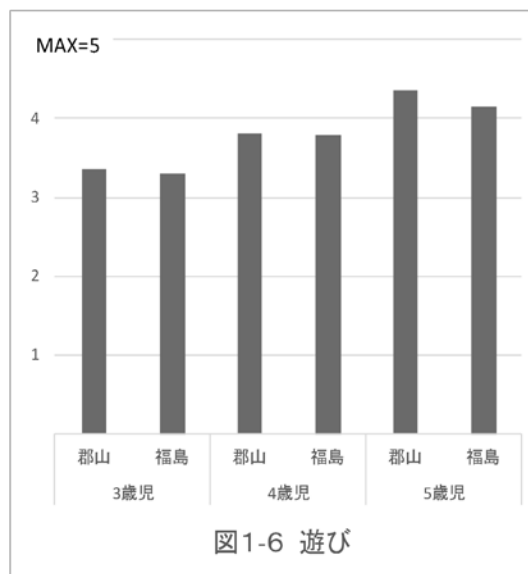
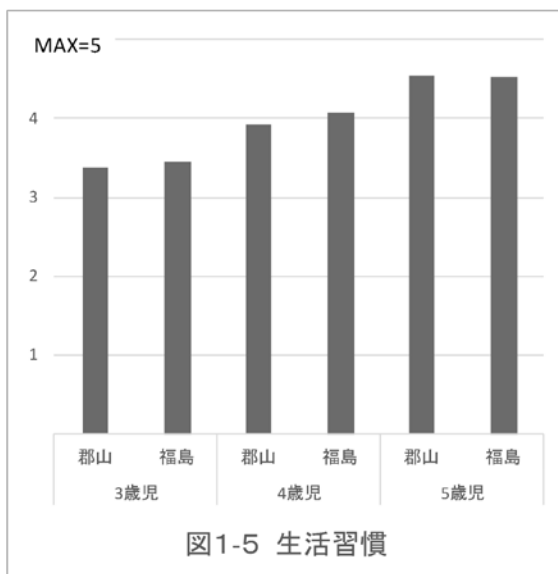
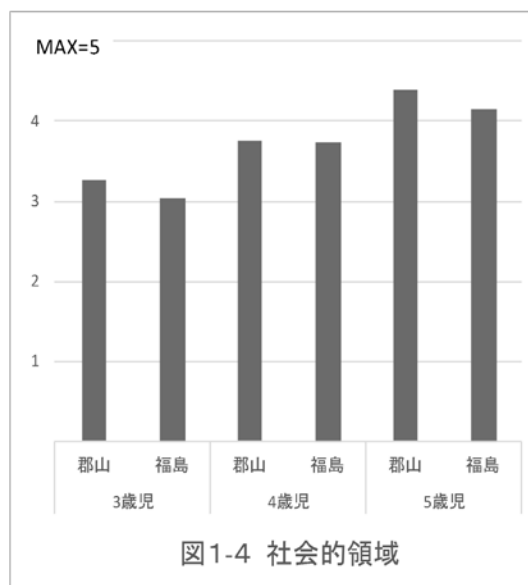
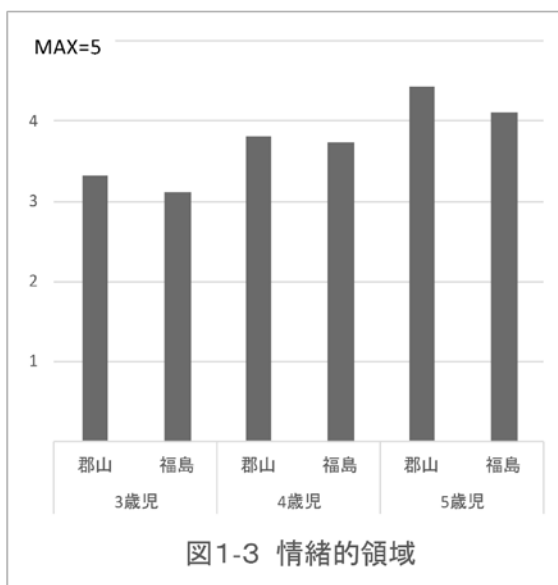
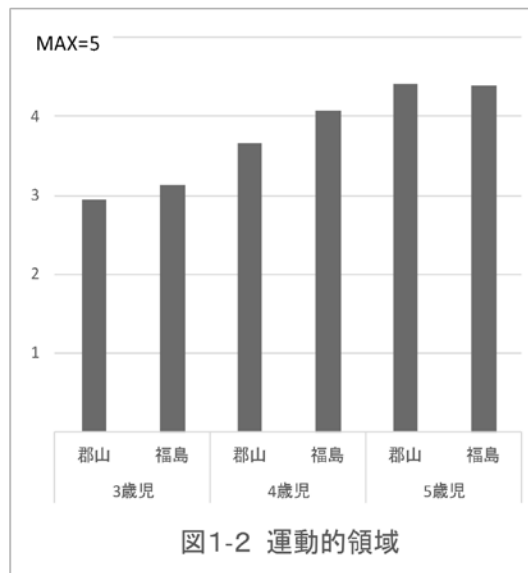
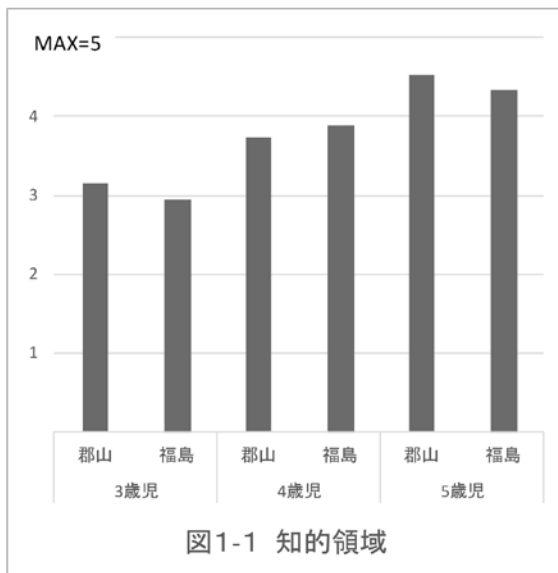
以上の領域の主効果から、全体としては生活習慣や遊びが他の領域よりも発達が進んでいることが示された。

領域×地域の交互作用($F(5, 4230)=39.50, p<.01$)

領域×学年の交互作用($F(10, 4230)=19.86, p<.01$)

領域×学年×地域の交互作用($F(10, 4230)=3.40, p<.01$)

子ども学年の主効果($F(2, 846)=343.06, p<.01$) 5歳児>4歳児>3歳児



地域×子ども学年の交互作用 ($F(2, 846)=5.71, p<.01$)
 地域の主効果は有意ではなかった ($F(1, 846)=1.63, n. s.$)

*最も高次の交互作用である領域×学年×地域の交互作用が有意であったため、2012年3月時点で学年ごとに地域(2)×領域(6)の反復測定分散分析(地域は被験者間要因、領域は被験者内要因)を行った。

- ・3歳児は以下の主効果、交互作用が有意であった。

領域の主効果 ($F(5, 1100)=31.74, p<.01$)

情緒的領域 > 知的領域	社会的領域 > 知的領域
生活習慣 > 知的領域	遊び > 知的領域
情緒的領域 > 運動的領域	生活習慣 > 運動的領域
遊び > 運動的領域	生活習慣 > 情緒的領域
遊び > 情緒的領域	生活習慣 > 社会的領域
遊び > 社会的領域	

領域×地域の交互作用 ($F(5, 1100)=10.75, p<.01$)

領域×地域の交互作用について、領域ごとに地域を従属変数に下位検定を行ったところ、以下の領域で地域による違いが有意であった。

知的領域 ($p<.05$)	運動的領域 ($p<.05$)
情緒的領域 ($p<.05$)	社会的領域 ($p<.05$)
生活習慣 n. s.	遊び n. s.

- ・4歳児は以下の主効果、交互作用が有意であった。

領域の主効果 ($F(5, 1400)=22.27, p<.01$)

生活習慣 > 知的領域	運動的領域 > 社会的領域
生活習慣 > 運動的領域	生活習慣 > 情緒的領域
生活習慣 > 社会的領域	生活習慣 > 遊び

領域×地域の交互作用 ($F(5, 1400)=20.19, p<.01$)

領域×地域の交互作用について、領域ごとに地域を従属変数に下位検定を行ったところ、以下の領域で地域による違いが有意であった。

知的領域 ($p<.05$)	運動的領域 ($p<.01$)
情緒的領域 n. s.	社会的領域 n. s.
生活習慣 ($p<.05$)	遊び n. s.

- ・5歳児は以下の主効果、交互作用が有意であった。

領域の主効果 ($F(5, 1690)=53.71, p<.01$)

知的領域 > 情緒的領域	知的領域 > 社会的領域
生活習慣 > 知的領域	遊び > 知的領域
運動的領域 > 情緒的領域	運動的領域 > 社会的領域
生活習慣 > 運動的領域	運動的領域 > 遊び
生活習慣 > 情緒的領域	生活習慣 > 社会的領域
生活習慣 > 遊び	

領域×地域の交互作用 ($F(5, 1690)=14.18, p<.01$)

領域×地域の交互作用について、領域ごとに地域を従属変数に下位検定を行ったところ、以下の領域で地域による違いが有意であった。

知的領域 ($p<.01$)	運動的領域 n. s.
------------------	-------------

情緒的領域 (p<.01) 社会的領域 (p<.01)
生活習慣 n. s. 遊び (p<.01)

領域×学年×地域の交互作用についての下位分析をまとめると、3歳児クラス末では遊びと生活習慣が他の領域よりも発達が進んでいたものが、4歳児クラス末になると生活習慣の発達が目立つようになり、5歳児クラス末ではそれらに加えて知的領域、運動的領域の発達が進んでいく様子が示された。しかし、5歳児クラス末になっても、情緒的領域、社会的領域の発達が他領域よりも低く評価されていた。かつ、知的領域に加えて情緒的領域、社会的領域では地域差も有意であった。

(2) 2013年3月

* 地域(2)×学年(3)×領域(6)の反復測定分散分析(地域と学年は被験者間要因、領域は被験者内要因)を行った(図2-1～図2-6)。

その結果、下記の主効果、交互作用が有意であった。

領域の主効果(F(5, 4390)=65.65, p<.01)

情緒的領域>知的領域	生活習慣>知的領域
情緒的領域>運動的領域	生活習慣>運動的領域
遊び>運動的領域	生活習慣>情緒的領域
生活習慣>社会的領域	遊び>社会的領域
生活習慣>遊び	

領域×地域の交互作用(F(5, 4390)=27.89, p<.01)

領域×学年の交互作用(F(10, 4390)=28.41, p<.01)

領域×学年×地域の交互作用(F(10, 4390)=2.19, p<.05)

地域の主効果(F(1, 878)=12.08, p<.01) 郡山>福島

子ども学年の主効果(F(2, 878)=215.08, p<.01) 5歳児>4歳児>3歳児

地域×子ども学年の交互作用(F(2, 878)=11.41, p<.01)

* 領域×学年×地域の交互作用が有意であったため、2013年3月時点で学年ごとに地域(2)×領域(6)の反復測定分散分析(地域は被験者間要因、領域は被験者内要因)を行った。

・ 3歳児は以下の主効果、交互作用が有意であった。

領域の主効果(F(5, 1060)=36.65, p<.01)

情緒的領域>知的領域	社会的領域>知的領域
生活習慣>知的領域	遊び>知的領域
情緒的領域>運動的領域	社会的領域>運動的領域
生活習慣>運動的領域	遊び>運動的領域
情緒的領域>社会的領域	生活習慣>社会的領域

領域×地域の交互作用(F(5, 1060)=4.56, p<.01)

領域×地域の交互作用について、領域ごとに地域を従属変数に下位検定を行ったところ、以下の領域で地域による違いが有意であった。

知的領域 n. s.

運動領域 (p<.05)

情緒的領域 n. s.

社会的領域 n. s.

生活習慣 (p<.10)

遊び n. s.

・ 4歳児は以下の主効果、交互作用が有意であった。

領域の主効果 ($F(5, 1765)=35.84, p<.01$)

知的領域 > 情緒的領域	知的領域 > 社会的領域
生活習慣 > 知的領域	知的領域 > 遊び
生活習慣 > 運動的領域	生活習慣 > 情緒的領域
社会的領域 > 遊び	生活習慣 > 遊び

地域の主効果 ($F(1, 153)=30.01, p<.01$)

郡山 > 福島

領域×地域の交互作用 ($F(5, 1765)=10.22, p<.01$)

領域×地域の交互作用について、領域ごとに地域を従属変数に下位検定を行ったところ、以下の領域で地域による違いが有意であった。

知的領域 ($p<.01$)	運動領域 ($p<.05$)
情緒的領域 ($p<.01$)	社会的領域 ($p<.01$)
生活習慣 ($p<.01$)	遊び ($p<.01$)

- ・ 5歳児は以下の主効果、交互作用が有意であった。

領域の主効果 ($F(5, 1565)=43.57, p<.01$)

知的領域 > 運動的領域	知的領域 > 情緒的領域
知的領域 > 社会的領域	知的領域 > 遊び
運動的領域 > 社会的領域	生活習慣 > 運動的領域
情緒的領域 > 社会的領域	生活習慣 > 情緒的領域
生活習慣 > 社会的領域	社会的領域 > 遊び
生活習慣 > 遊び	

地域の主効果 ($F(1, 313)=12.77, p<.01$)

郡山 > 福島

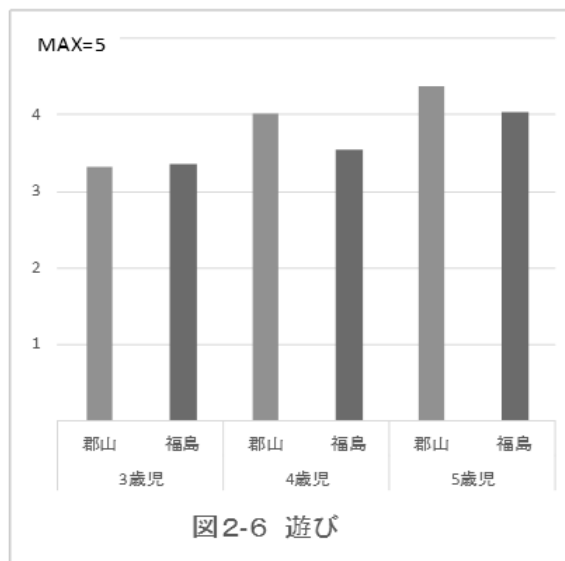
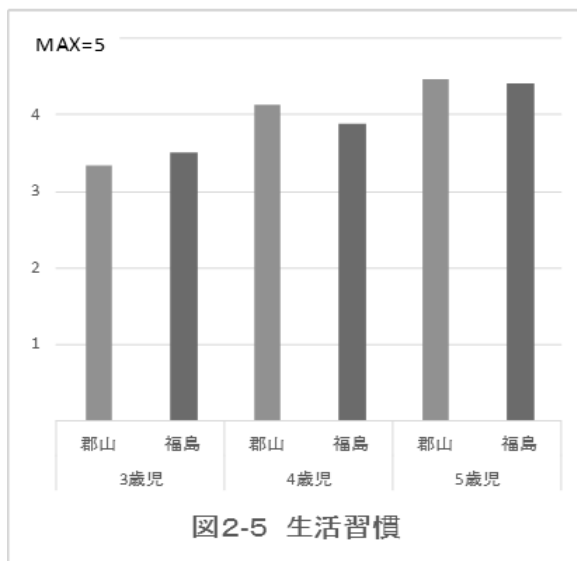
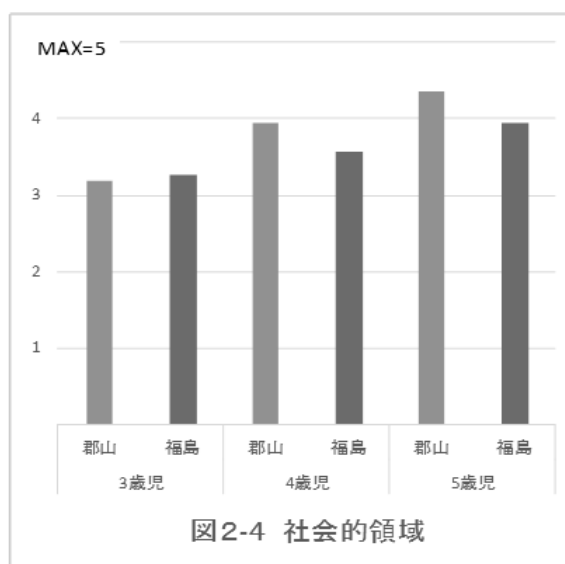
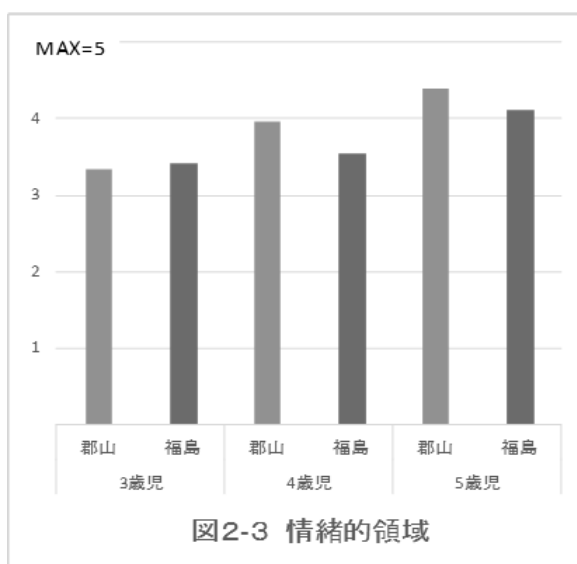
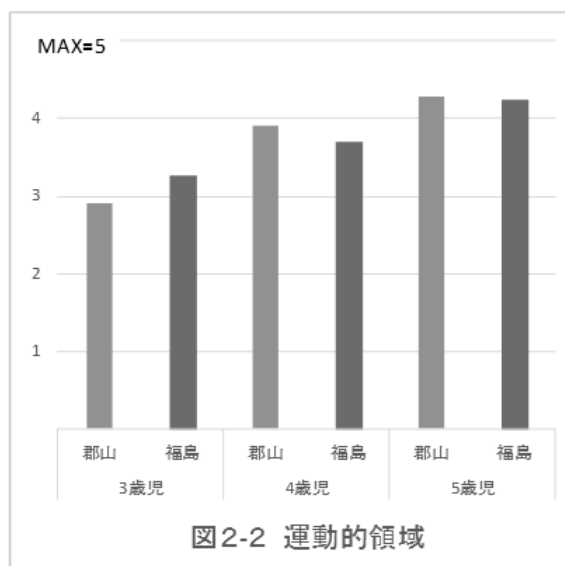
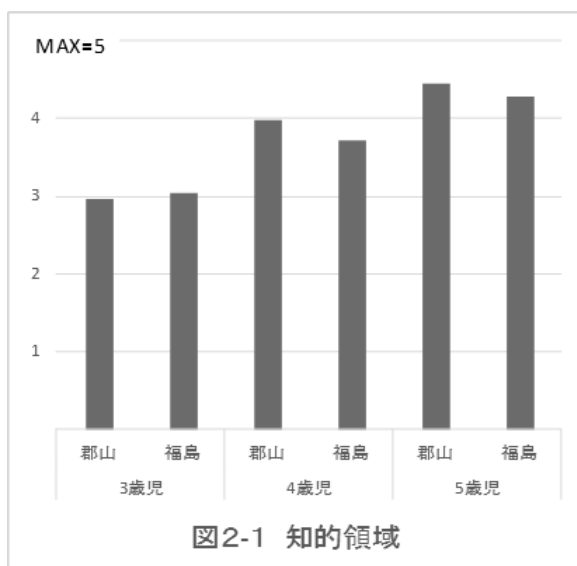
領域×地域の交互作用 ($F(5, 1565)=23.64, p<.01$)

領域×地域の交互作用について、領域ごとに地域を従属変数に下位検定を行ったところ、以下の領域で地域による違いが有意であった。

知的領域 ($p<.05$)	運動領域 n. s.
情緒的領域 ($p<.01$)	社会的領域 ($p<.01$)
生活習慣 n. s.	遊び ($p<.01$)

2013年3月の結果における領域×学年×地域の交互作用についての下位分析をまとめると、2012年3月の結果とは異なる結果が得られた。3歳児クラス末では遊びと生活習慣に加えて既に情緒的領域や社会的領域の発達が知的領域と運動的領域よりも進んでいた。4歳児クラス末になると、さらに知的領域の発達が目立つようになる一方で情緒的領域の相対的な低さが示された。5歳児クラス末では2012年3月同様、情緒的領域、社会的領域の発達が他領域よりも低く評価されていた。かつ、知的領域に加えて情緒的領域、社会的領域では地域差も有意であった。

2012年3月の結果と合わせて考えても、発達の領域によって発達の進む速度に違いがあること、また発達の進む速度に違いのある領域では地域差もみられることが示唆される。このような結果が得られた原因については、慎重に検討が必要であると考えられる。



(3) 2014年3月

*地域(2)×学年(3)×領域(6)の反復測定分散分析(地域と学年は被験者間要因、領域は被験者内要因)を行った(図3-1～図3-6)。

その結果、下記の主効果、交互作用が有意であった。

領域の主効果($F(5, 4665)=90.41, p<.01$)

生活習慣>知的領域	遊び>知的領域
生活習慣>運動的領域	遊び>運動的領域
情緒的領域>社会的領域	生活習慣>情緒的領域
遊び>情緒的領域	生活習慣>社会的領域
遊び>社会的領域	生活習慣>遊び

領域×地域の交互作用($F(5, 4665)=11.65, p<.01$)

領域×学年の交互作用($F(10, 4665)=31.19, p<.01$)

領域×学年×地域の交互作用($F(10, 4665)=10.11, p<.05$)

地域の主効果($F(1, 933)=8.76, p<.01$) 郡山>福島

子ども学年の主効果($F(2, 933)=253.01, p<.01$)

地域×子ども学年の交互作用($F(2, 933)=70.20, p<.01$)

*領域×学年×地域の交互作用が有意であったため、2014年3月時点で学年ごとに地域(2)×領域(6)の反復測定分散分析(地域は被験者間要因、領域は被験者内要因)を行った。

- ・3歳児は以下の主効果、交互作用が有意であった。

領域の主効果($F(5, 1280)=44.06, p<.01$)

情緒的領域>知的領域	生活習慣>知的領域
遊び>知的領域	情緒的領域>運動的領域
生活習慣>運動的領域	遊び>運動的領域
情緒的領域>社会的領域	遊び>情緒的領域
生活習慣>社会的領域	遊び>社会的領域

地域の主効果($F(1, 256)=66.58, p<.01$) 福島>郡山

領域×地域の交互作用($F(5, 1280)=10.67, p<.01$)

領域×地域の交互作用について、領域ごとに地域を従属変数に下位検定を行ったところ、以下の領域で地域による違いが有意であった。

知的領域 ($p<.01$)	運動的領域 ($p<.01$)
情緒的領域 ($p<.10$)	社会的領域 ($p<.01$)
生活習慣 ($p<.01$)	遊び ($p<.01$)

- ・4歳児は以下の主効果、交互作用が有意であった。

領域の主効果($F(5, 1585)=51.78, p<.01$)

生活習慣>知的領域	生活習慣>運動的領域
生活習慣>情緒的領域	遊び>情緒的領域
生活習慣>社会的領域	生活習慣>遊び

地域の主効果はなし

領域×地域の交互作用($F(5, 1585)=9.33, p<.01$)

領域×地域の交互作用について、領域ごとに地域を従属変数に下位検定を行ったところ、以下の領域で地域による違いが有意であった。

知的領域 ($p<.01$)	運動的領域 n. s.
情緒的領域 ($p<.01$)	社会的領域 n. s.

生活習慣 (p<.10)

遊び n. s.

- ・ 5歳児は以下の主効果、交互作用が有意であった。

領域の主効果 (F(5, 1800)=51.52, p<.01)

- | | |
|---------------|---------------|
| 知的領域 > 運動的領域 | 知的領域 > 情緒的領域 |
| 知的領域 > 社会的領域 | 知的領域 > 遊び |
| 運動的領域 > 情緒的領域 | 運動的領域 > 社会的領域 |
| 生活習慣 > 運動的領域 | 運動的領域 > 遊び |
| 生活習慣 > 情緒的領域 | 生活習慣 > 社会的領域 |
| 遊び > 社会的領域 | 生活習慣 > 遊び |

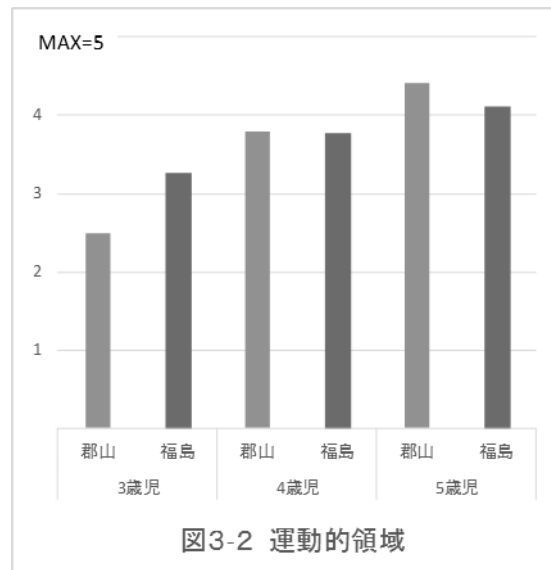
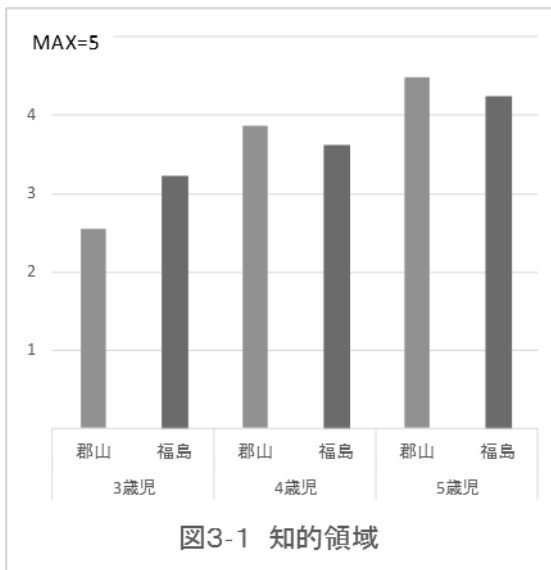
地域の主効果 (F(1, 360)=33.58, p<.01) 郡山 > 福島

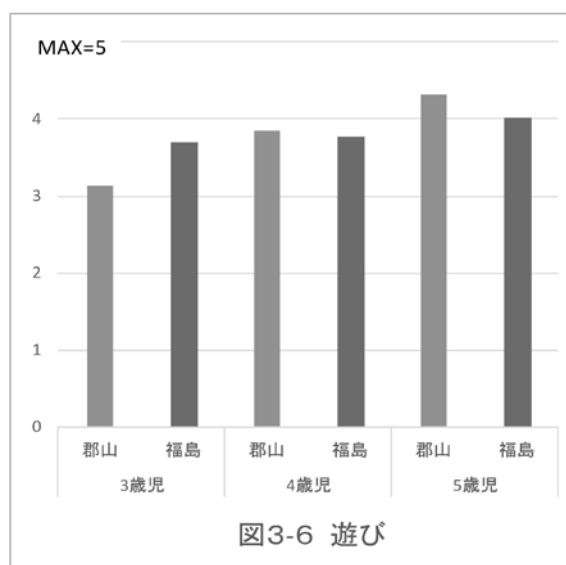
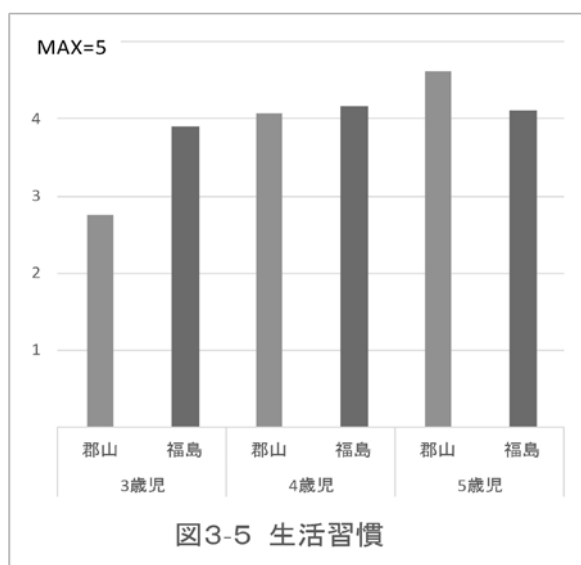
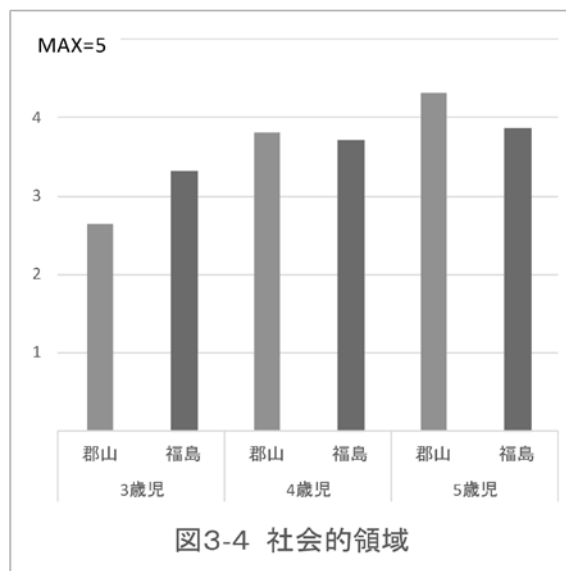
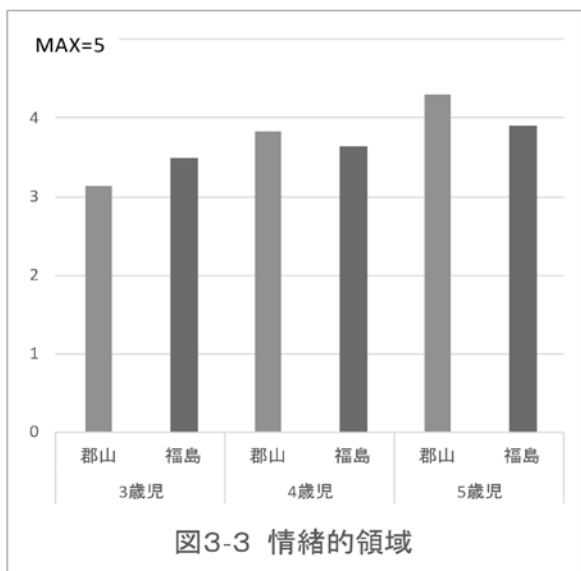
領域×地域の交互作用 (F(5, 1800)=7.95, p<.01)

領域×地域の交互作用について、領域ごとに地域を従属変数に下位検定を行ったところ、以下の領域で地域による違いが有意であった。

- | | |
|---------------|---------------|
| 知的領域 (p<.01) | 運動的領域 (p<.01) |
| 情緒的領域 (p<.01) | 社会的領域 (p<.01) |
| 生活習慣 (p<.01) | 遊び (p<.01) |

2014年3月の結果は、2012年3月の結果と2013年3月の結果との中間に近いものとなった。領域×学年×地域の交互作用についての下位分析をまとめると、3歳児クラス末では遊びと生活習慣が他の領域よりも発達が進んでいたものが、4歳児クラス末になると生活習慣の発達が目立つようになり、5歳児クラス末ではそれらに加えて知的領域、運動的領域の発達が進んでいく様子が示された。しかし、5歳児クラス末になっても、情緒的領域、社会的領域の発達が他領域よりも低く評価されていた。かつ、知的領域に加えて情緒的領域、社会的領域では地域差も有意であった。





これらの結果から、発達の領域によって発達の進む速度に違いがあること、また発達の進む速度に違いのある領域では地域差もみられることが示唆される。このことがコーホートによる違いによるものか、評価者による違いによるものか、それ以外の要因によるものかについては、未だ結論を出すにはデータが不十分であり、慎重に検討が必要であると考えられる。

(長田瑞恵)

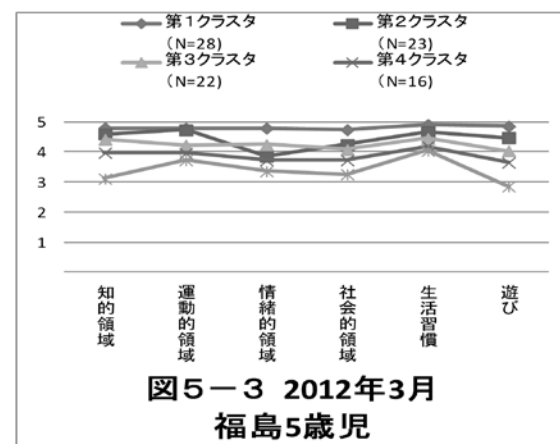
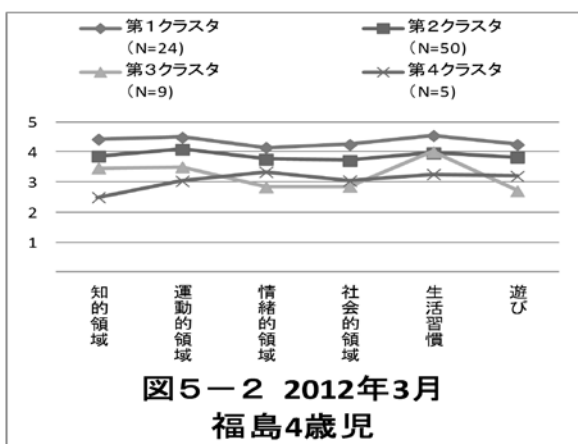
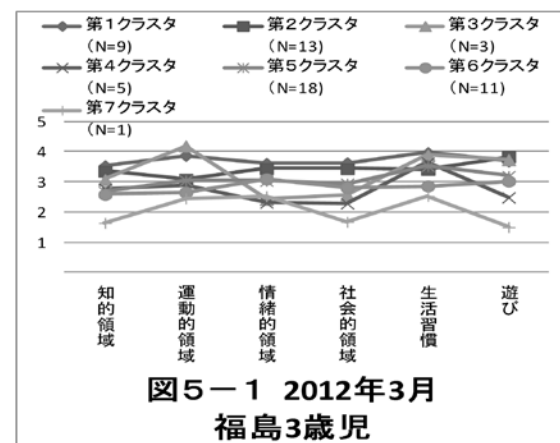
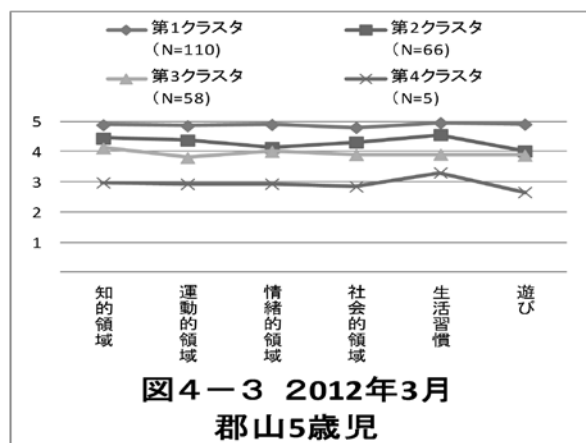
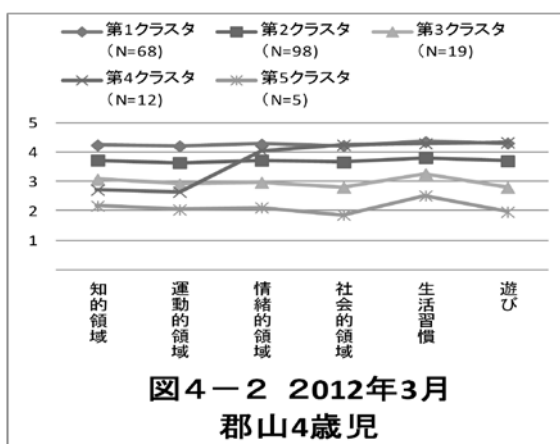
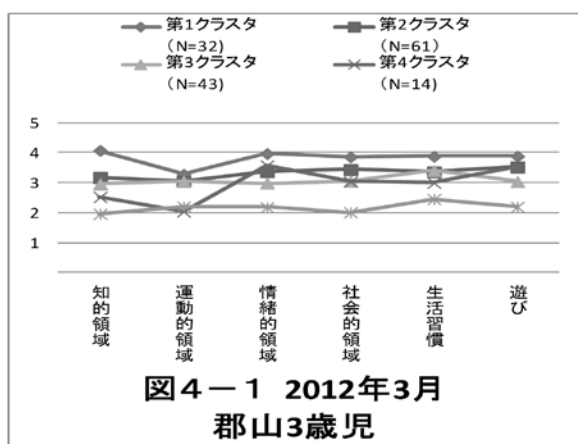
II クラスタ分析による発達のパターン

地域別に各時点の各年齢クラスごとに平均得点をZ得点に標準化したものを従属変数としたWard法による階層クラスタ分析を行った。各時点で抽出されたクラスタごとの達成率の平均値を図4-1から図9-3に示す。

(1) 2012年3月時点 (図4-1～図5-3)

2012年3月時点では以下のクラスタが抽出された。

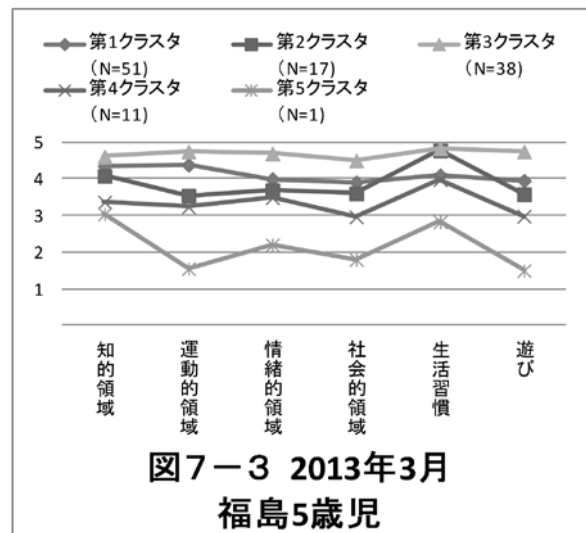
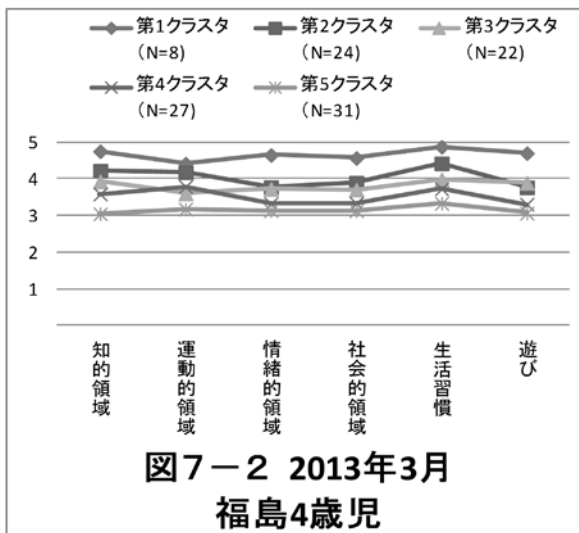
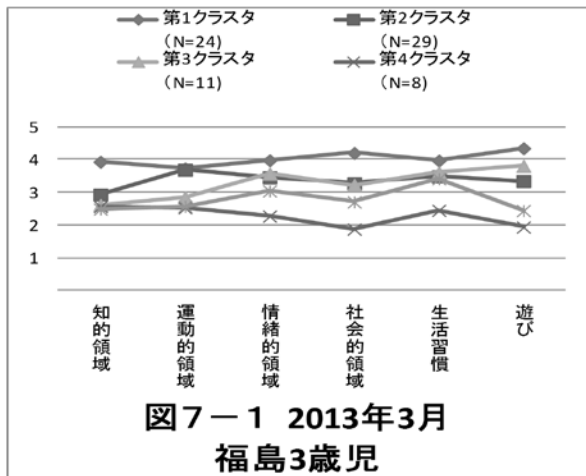
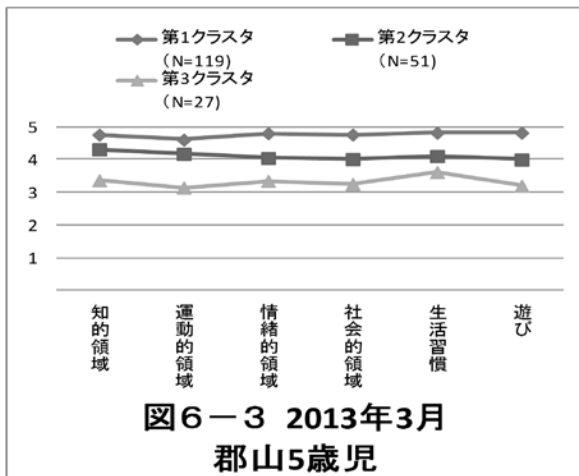
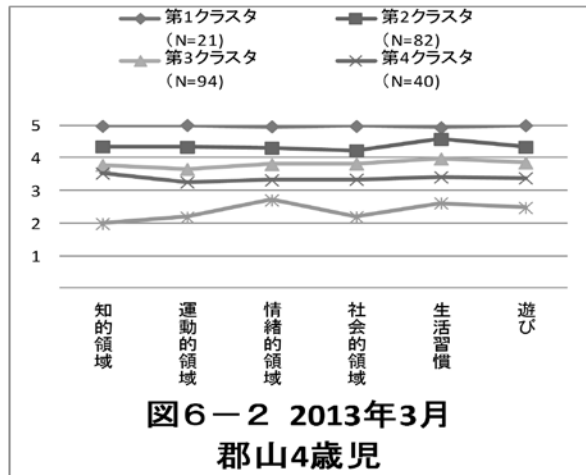
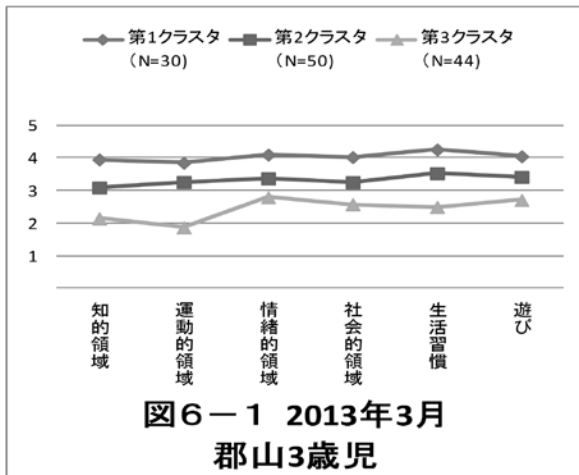
- ① 3歳児 郡山 下位クラスタ数5
- ② 3歳児 福島 下位クラスタ数7
- ③ 4歳児 郡山 下位クラスタ数5
- ④ 4歳児 福島 下位クラスタ数4
- ⑤ 5歳児 郡山 下位クラスタ数4
- ⑥ 5歳児 福島 下位クラスタ数5



(2) 2013年3月時点 (図6-1～図7-3)

2013年3月時点では以下のクラスタが抽出された。

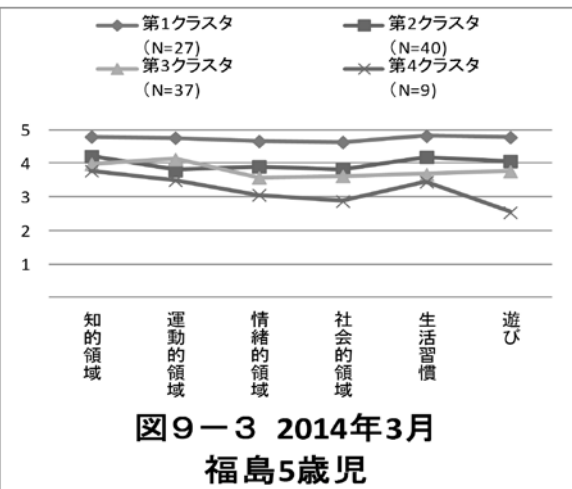
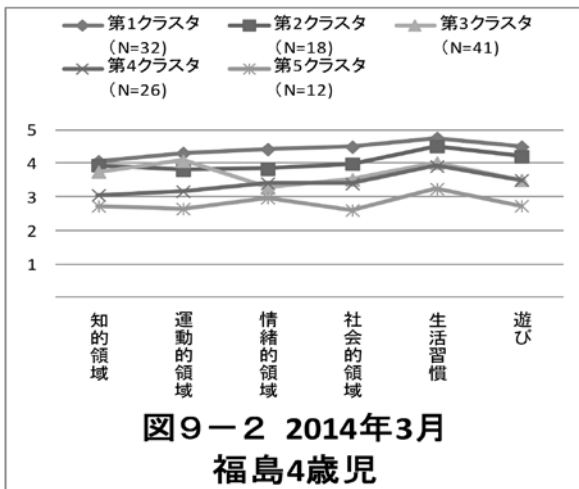
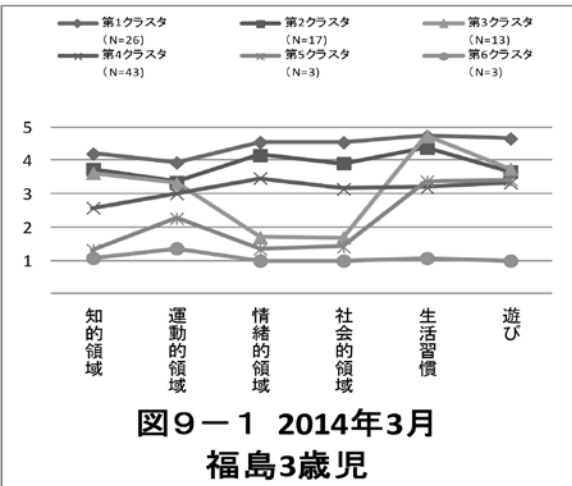
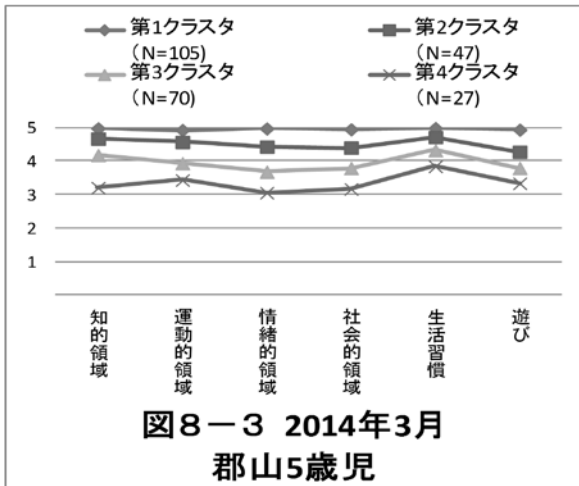
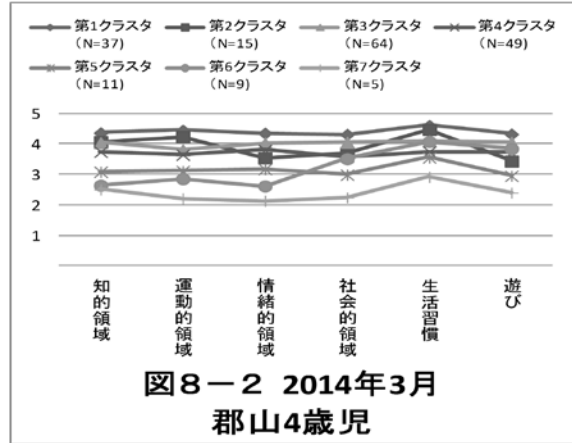
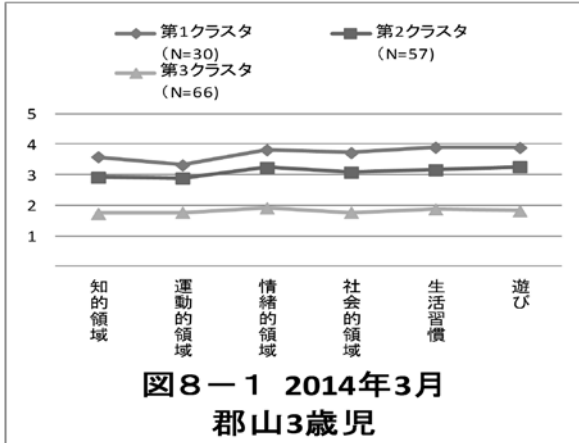
- ① 3歳児 郡山 下位クラスタ数3
- ② 3歳児 福島 下位クラスタ数5
- ③ 4歳児 郡山 下位クラスタ数5
- ④ 4歳児 福島 下位クラスタ数5
- ⑤ 5歳児 郡山 下位クラスタ数3
- ⑥ 5歳児 福島 下位クラスタ数5



(3) 2014年3月時点 (図8-1～図9-3)

2013年3月時点では以下のクラスタが抽出された。

- ① 3歳児 郡山 下位クラスタ数3
- ② 3歳児 福島 下位クラスタ数6
- ③ 4歳児 郡山 下位クラスタ数7
- ④ 4歳児 福島 下位クラスタ数5
- ⑤ 5歳児 郡山 下位クラスタ数4
- ⑥ 5歳児 福島 下位クラスタ数4



(4) クラスタ分析 まとめ

全体的な傾向としては、3歳児クラスでは比較的クラスタ数が多く抽出され、それが得点の低い位置にあったものが、4歳児クラスでは一旦クラスタ数が増加し、5歳児に再度クラスタ数が減少して得点の高い位置に収束するという傾向が見られた。

このような発達の傾向は震災前にも見られたものであるが、震災前との違いとして、全体的に抽出されるクラスタ数が少ないことが挙げられる。

これらの結果から、発達の領域によって、発達の進む速度や進み方に個人差があることや、発達の進む速度に違いのある領域では地域差もみられることが示唆される。さらに震災前と後とでクラスタ数の減少が見られた原因として、保育環境の変化が影響していた可能性が考えられよう。

しかし、このことがコーホートによる違いによるものか、評価者による違いによるものか、それ以外の要因によるものかについては、未だ結論を出すにはデータが不十分であり、慎重に検討が必要であると考えられる。

(長田瑞恵)

Ⅲ 3年間の園別発達調査結果（2012年度、2013年度、2014年度）

【園別分析】

1. 対象となった園

郡山 A、郡山 B、郡山 C、郡山 D、福島 A、福島 B、福島 C の 7 園であった。

2. 調査結果

質問紙の内容は、「知的領域」、「運動的領域」、「情緒的領域」、「社会的領域」、「生活習慣領域」、「遊び領域」の 6 領域からなる。園別に結果を記述する。

（1）郡山 A

1) 知的領域について

表 1 に、調査年ごとの学年別・男女別平均値と標準偏差及び度数を示している。

このデータについて、調査年（3：2012年・2013年・2014年）×学年（3：3歳児・4歳児・5歳児）×性別（2：男・女）の 3 要因を独立変数として分散分析を行った結果、表 2 に示すような結果となった。調査年、学年、性別の各要因の主効果が有意であり、調査年による知的領域の評定値が異なっていること、学年により評定値が異なっていること、さらに男子よりも女子が高くなっていることが示されている。

調査年×学年の交互作用が有意であり、図 1 に示すように、調査年によって学年差が異なっており、2013 年がもっとも高く、次いで 2012 年であり、2014 年が最も低かった。さらに学年の主効果が有意であり、学年が上がると共に評定値が高くなっていた。調査年×学年の交互作用については、3 歳児と 4 歳児の差が 2012 年や 2013 年に比べて 2014 年は大きかった。また、3 歳児、4 歳児、5 歳児とも 2012 年及び 2013 年に比べて、2014 年では知的領域の評定値が低く、特に 3 歳児においてその傾向が顕著であった。2014 年の学年による評定値の差は著しかった。

表 1 知的領域における調査年ごとの平均値、標準偏差及び度数

調査年月	学年	性別	平均値	標準偏差	度数
2012年3月	3歳児	女	3.086	0.612	7
		男	2.960	0.659	10
	4歳児	女	3.993	0.710	23
		男	3.913	0.488	34
	5歳児	女	4.551	0.324	22
		男	4.388	0.437	23
2013年3月	3歳児	女	3.642	0.780	16
		男	3.680	0.665	13
	4歳児	女	4.323	0.399	29
		男	4.165	0.517	32
	5歳児	女	4.694	0.363	23
		男	4.392	0.635	34
2014年3月	3歳児	女	2.629	1.003	19
		男	1.995	0.400	8
	4歳児	女	3.588	0.776	23
		男	3.421	0.868	23
	5歳児	女	4.051	0.625	26
		男	3.864	0.565	33

表2 知的領域における調査年×学年×性別の分散分析結果

ソース	タイプ III 平方和	自由度	平均平方	F 値	有意確率
修正モデル	128.075 ^a	17	7.534	19.893	.000
切片	4462.298	1	4462.298	11782.635	.000
調査年月	47.091	2	23.545	62.171	.000
学年	80.039	2	40.019	105.671	.000
性別	3.115	1	3.115	8.225	.004
調査年月 * 学年	5.713	4	1.428	3.772	.005
調査年月 * 性別	.700	2	0.350	0.924	.398
学年 * 性別	.190	2	0.095	0.251	.778
調査年月 * 学年 * 性別	1.415	4	0.354	0.934	.444
誤差	143.913	380	0.379		
総和	6379.820	398			
修正総和	271.987	397			

a. R2 乗 = .471 (調整済み R2 乗 = .447)

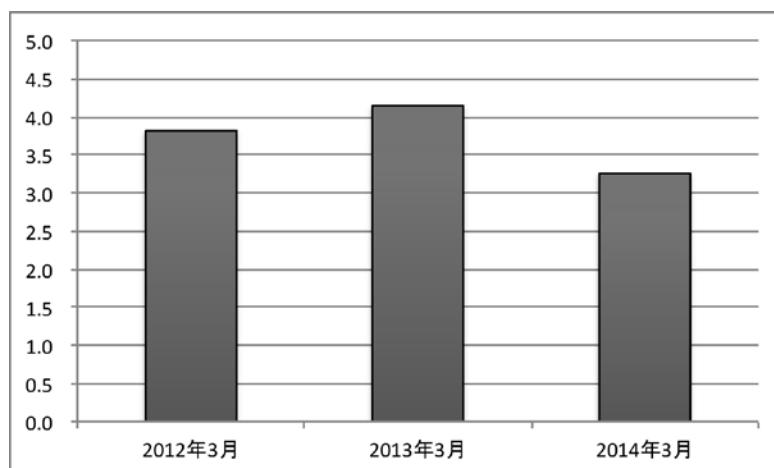


図1 知的領域における調査年に関する評定値

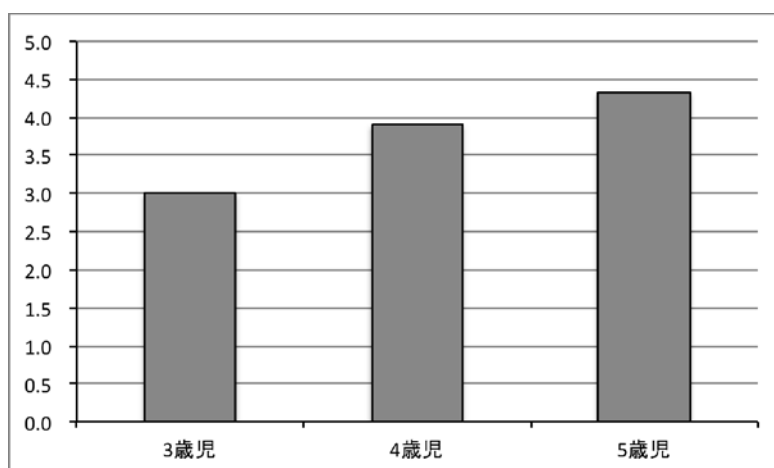


図2 知的領域における学年に関する評定値

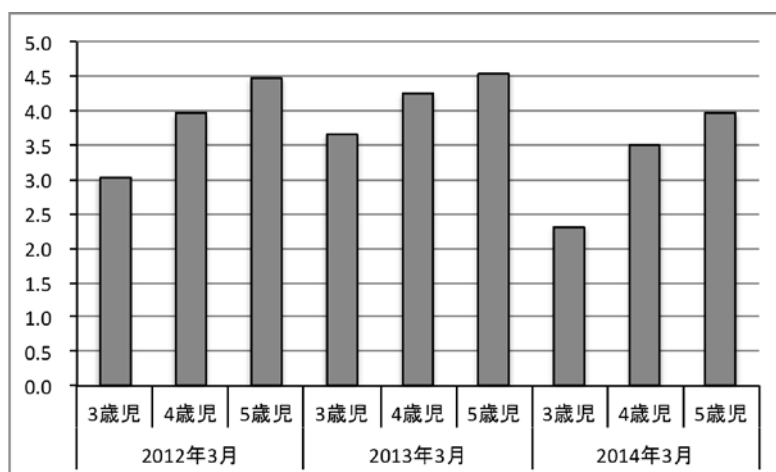


図3 知的領域における調査年×学年に関する評定値

2) 運動的領域について

表3に、調査年ごとの学年別・男女別平均値と標準偏差及び度数を示している。

このデータについて、調査年（3：2012年・2013年・2014年）×学年（3：3歳児・4歳児・5歳児）×性別（2：男・女）の3要因を独立変数として分散分析を行った（表4）。その結果、調査年、学年の各要因の主効果が有意であり、調査年と学年によって評定値が異なっていることが示されている。さらに、学年×性別及び調査年×学年×性別の交互作用が有意であった。

表3 運動的領域における調査年ごとの平均値、標準偏差及び度数

調査年月	学年	性別	平均値	標準偏差	度数
2012年3月	3歳児	女	2.921	0.287	7
		男	3.300	0.510	10
	4歳児	女	3.715	0.589	23
		男	3.991	0.496	34
	5歳児	女	4.439	0.443	22
		男	4.241	0.740	23
2013年3月	3歳児	女	3.934	0.818	16
		男	3.581	0.542	13
	4歳児	女	4.248	0.435	29
		男	4.197	0.496	32
	5歳児	女	4.420	0.325	23
		男	4.356	0.604	34
2014年3月	3歳児	女	3.219	0.873	18
		男	2.619	0.777	8
	4歳児	女	3.746	0.796	23
		男	3.309	0.865	23
	5歳児	女	3.756	0.417	26
		男	3.943	0.620	33

表4 運動的領域における調査年×学年×性別の分散分析結果

ソース	タイプ III 平方和	自由度	平均平方	F 値	有意確率
修正モデル	71.922 ^a	17	4.231	11.463	.000
切片	4529.127	1	4529.127	12271.005	.000
調査年月	28.069	2	14.340	38.024	.000
学年	39.515	2	19.757	53.530	.000
性別	.728	1	0.728	1.973	.161
調査年月 * 学年	3.005	4	0.751	2.036	.089
調査年月 * 性別	2.404	2	1.202	3.256	.040
学年 * 性別	.318	2	0.159	0.431	.650
調査年月 * 学年 * 性別	5.261	4	1.315	3.563	.007
誤差	139.886	379	0.369		
総和	6306.324	397			
修正総和	211.808	396			

a. R2 乗 = .340 (調整済み R2 乗 = .310)

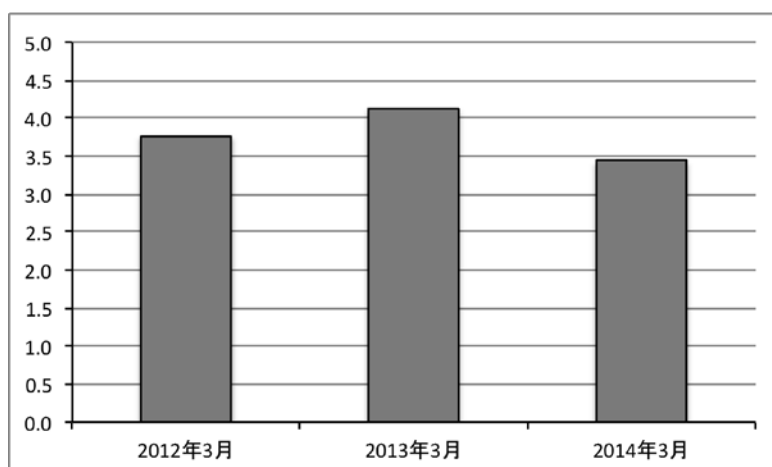


図4 運動的領域における調査年に関する評定値

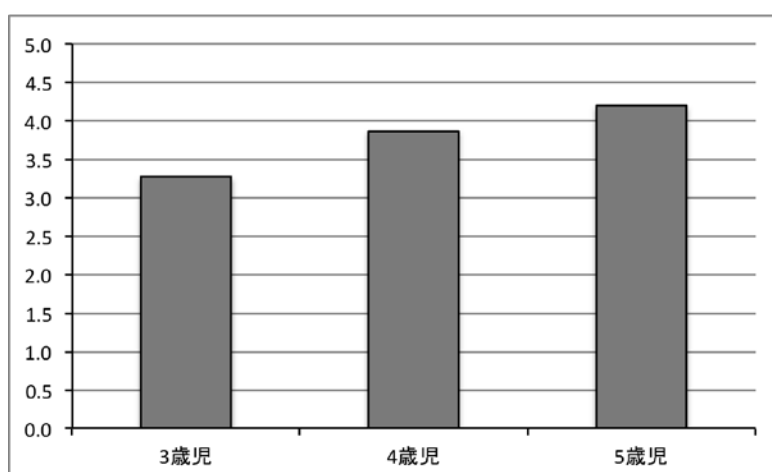


図5 運動的領域における学年に関する評定値

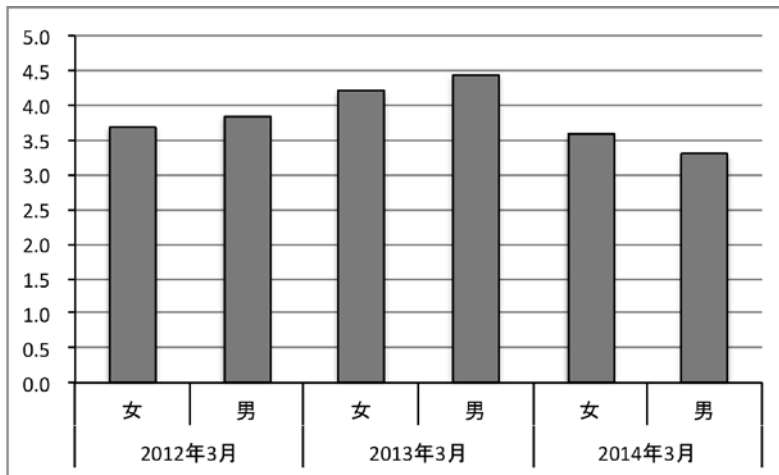


図6 運動的領域における調査年×性別に関する評定値

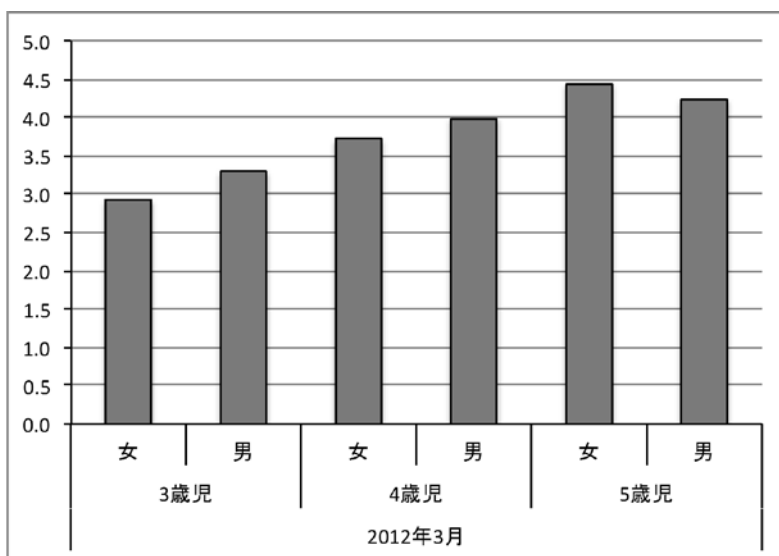


図7 2012年の運動的領域における調査年×性別に関する評定値

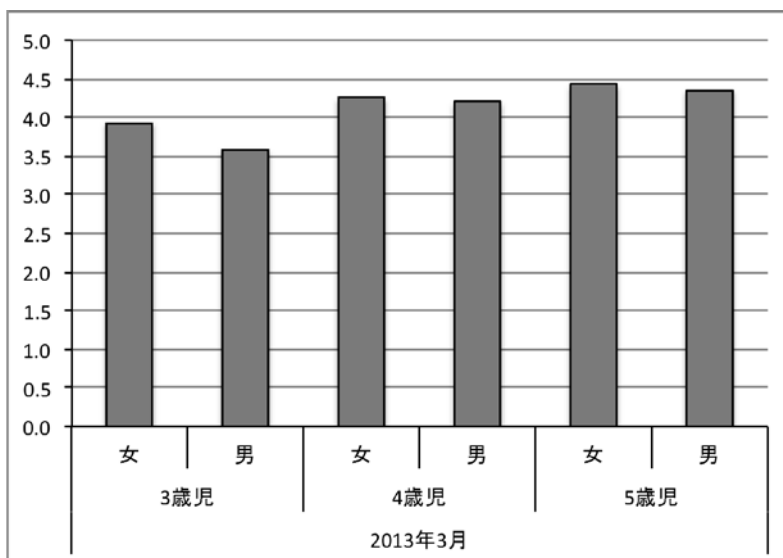


図8 2013年の運動的領域における調査年×性別に関する評定値

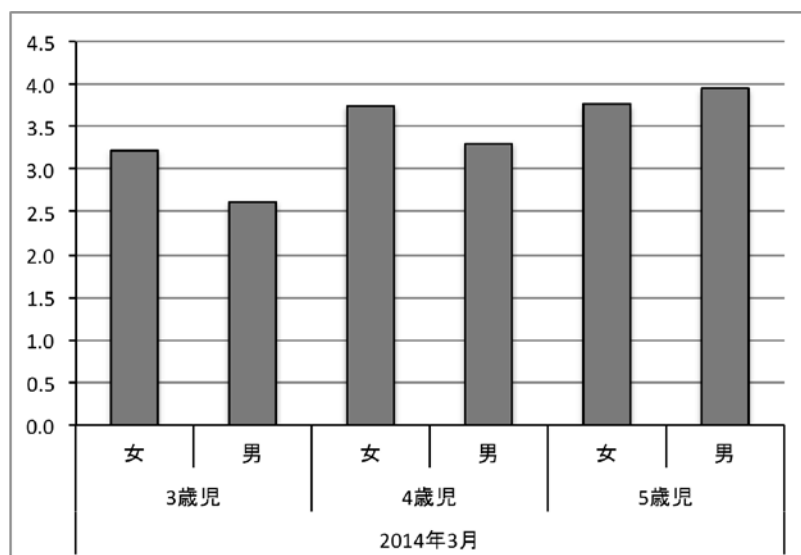


図9 2014年の運動的領域における調査年×性別に関する評定値

調査年×性別の交互作用について(図6)、2012年及び2013年は女子より男子が高く、2014年は女子が男子より高くなっていた。

しかし、2次の交互作用がみられたので、その傾向は調査年と学年によって性別による評定値が異なっていることが分かる(図7、図8、図9)。また、学年ごとに調査年×学年の相互作用を図示したものが図10、図11、図12である。2012年の3歳児と4歳児では男子が女子よりも高かったが、5歳児では反対に女子が男子よりも高くなっていた。2013年では、3歳児では女子が男子より評定値が高くなっていたが、4歳児及び5歳児では性差がみられなくなっていた。さらに、2014年では、3歳児では女子が男子より高く、4歳児では男子が女子より高く、5歳児で女子より男子が高くなっていた。3歳児が調査年による違いが大きく、男子では2014年の評定値が最も低くなっている。同様の傾向は4歳児にもみられる。4歳児、5歳児と学年が上がるにつれて、年度による違いが小さくなっているようである。

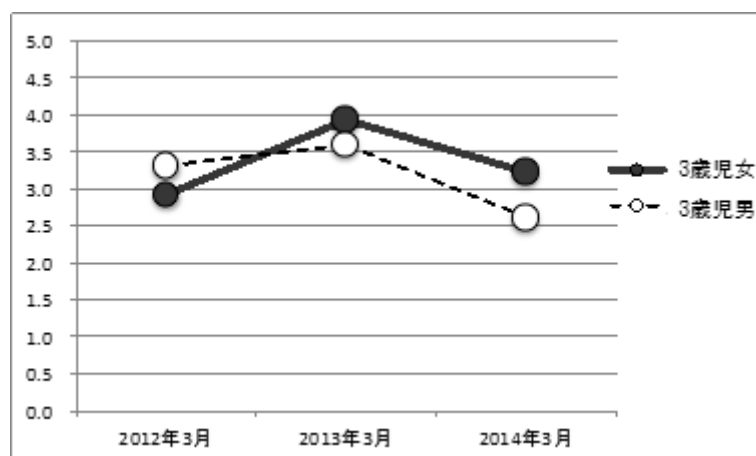


図10 運動的領域における3歳児の調査年×性別に関する評定値

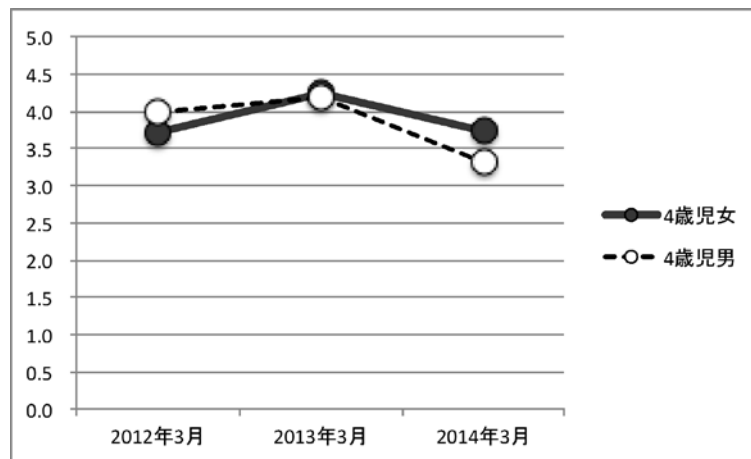


図 11 運動的領域における 4 歳児の調査年×性別に関する評定値

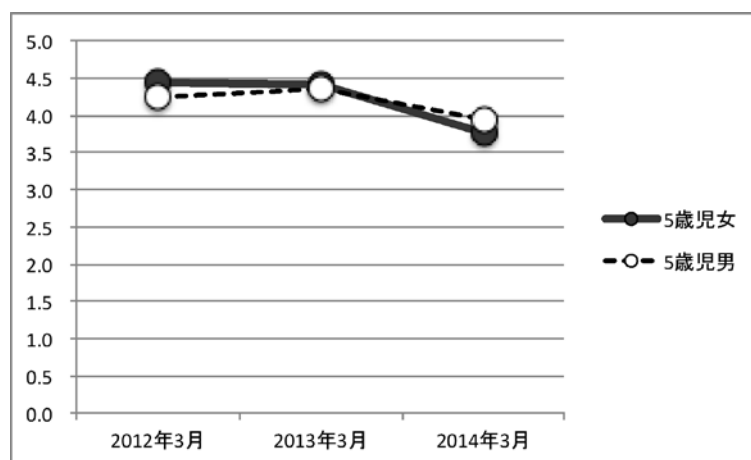


図 12 運動的領域における 5 歳児の調査年×性別に関する評定値

3) 情緒的領域について

表 5 に、調査年ごとの学年別・男女別平均値と標準偏差及び度数を示している。

このデータについて、調査年（3：2012年・2013年・2014年）×学年（3：3歳児・4歳児・5歳児）×性別（2：男・女）の3要因を独立変数として分散分析を行った。その結果(表6)、調査年の主効果(図13)、学年の主効果(図14)及び性別の主効果(図15)が有意であり、調査年と学年により評定値が異なっていることが示されている。調査年の主効果については、2013年が最も高く、次いで2012年、2014年が最も低く評定されていた。いずれの調査年においても女子が男子より高かった。さらに、調査年×学年の交互作用が有意であった(図15)。その他の交互作用は有意ではなかった。

また、調査年×学年の交互作用が有意であった。図にみられるように、2014年の評定値が2012年及び2013年よりも、すべての学年において低くなっていた。各調査年における学年による違いは、2012年及び2014年における3歳児と4歳児及び5歳児との差に比べて、2013年の差が小さかった。すなわち、他の子どもを援助したり守ったりする、他の子どもたちに玩具をもって来る、まかされたことに責任をもってやり遂げるなどの項目から構成される社会的領域の評定値が低いことが明らかになった。

表5 情緒的領域における調査年ごとの平均値、標準偏差及び度数

調査年月	学年	性別	平均値	標準偏差	度数
2012年3月	3歳児	女	2.771	0.297	7
		男	2.800	0.337	10
	4歳児	女	4.205	0.589	23
		男	4.174	0.469	34
	5歳児	女	4.349	0.315	22
		男	4.189	0.487	23
2013年3月	3歳児	女	3.823	0.719	16
		男	3.751	0.483	13
	4歳児	女	4.204	0.318	29
		男	4.105	0.414	32
	5歳児	女	4.675	0.353	23
		男	4.461	0.407	34
2014年3月	3歳児	女	3.400	0.720	19
		男	3.350	0.731	8
	4歳児	女	3.487	0.809	23
		男	3.487	0.708	23
	5歳児	女	3.821	0.545	26
		男	3.487	0.779	33

表6 情緒的領域における調査年×学年×性別の分散分析結果

ソース	タイプ III 平方和	自由度	平均平方	F 値	有意確率
修正モデル	98.106 ^a	17	5.771	18.908	.000
切片	4522.255	1	4522.255	14816.936	.000
調査年月	37.005	2	18.503	60.623	.000
学年	37.002	2	18.501	60.618	.000
性別	2.792	1	2.792	9.147	.003
調査年月 * 学年	13.948	4	3.487	11.425	.000
調査年月 * 性別	1.496	2	0.748	2.451	.088
学年 * 性別	.120	2	0.060	0.196	.822
調査年月 * 学年 * 性別	.248	4	0.062	0.203	.937
誤差	115.979	380	0.305		
総和	6282.443	398			
修正総和	214.857	397			

a. R2 乗 = .458 (調整済み R2 乗 = .434)

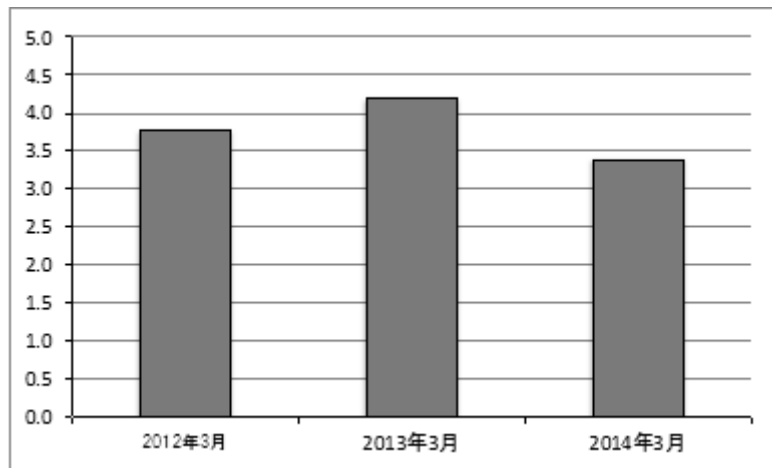


図 13 情緒的領域における調査年に関する評価値

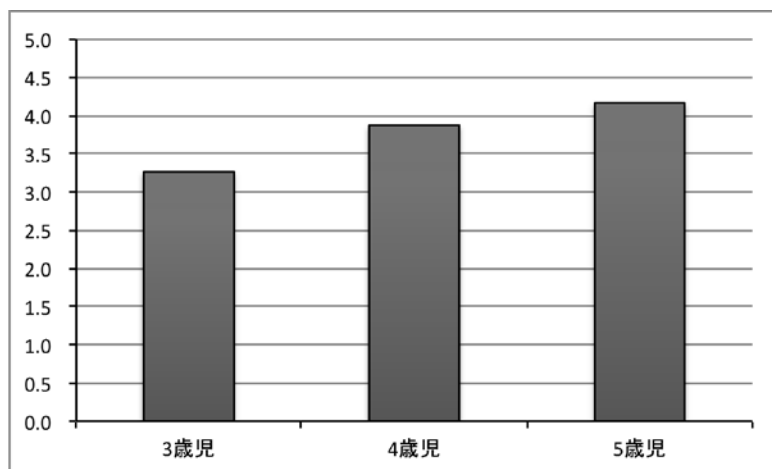


図 14 情緒的領域における学年に関する評価値

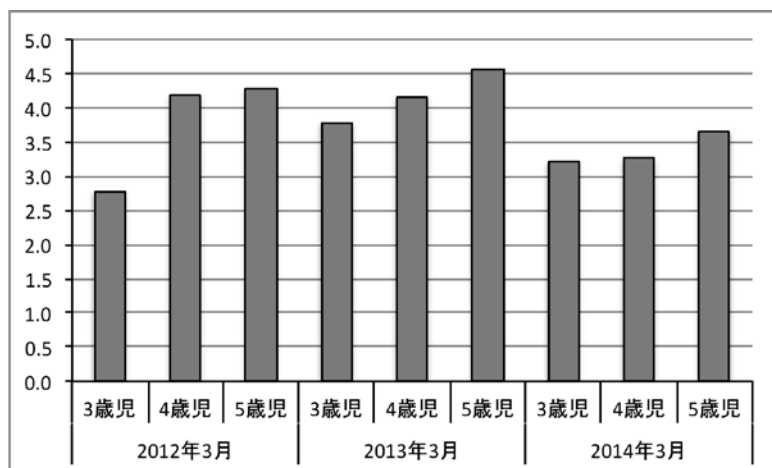


図 15 情緒的領域における調査年×性別の交互作用に関する評価値

調査年×学年の交互作用については、図 15 にみられるように、2014 年時点では、特に 2013 年 3 月時点と比べて、どの学年においても情緒的領域の評価値が低くなっていた。すなわち、友達の喜ぶことを自分から喜んでする、話を聞きながら想像して楽しむなどの項目から構成される情緒的領域の評価値が低いことが明らかになった。このような結果は、調査年×性別に有意な傾向がみられ、2014 年において男子にも女子にもみられるが、特に男子においてその傾向が顕著になっていることが示されている。

4) 社会的領域について

表7に、調査年ごとの学年別・男女別平均値と標準偏差及び度数を示している。

このデータについて、調査年（3：2012年・2013年・2014年）×学年（3：3歳児・4歳児・5歳児）×性別（2：男・女）の3要因を独立変数として分散分析を行った（表7）。その結果、調査年（図16）、学年（図17）及び性別（図18）の各要因の主効果が有意であり、調査年と学年と性別により評定値が異なっていることが示されている。調査年の主効果については、2012年及び2014年より2013年が高く、2012年が2014年より高くなっていた。学年の主効果については、学年が上がるにつれて評定値も高くなっていた。

その他の交互作用は有意ではなかった。

表7 社会的領域における調査年ごとの平均値、標準偏差及び度数

調査年月	学年	性別	平均値	標準偏差	度数
2012年3月	3歳児	女	3.211	0.489	7
		男	3.097	0.395	10
	4歳児	女	4.000	0.615	23
		男	3.999	0.482	34
	5歳児	女	4.413	0.303	22
		男	4.282	0.493	23
2013年3月	3歳児	女	3.905	0.762	16
		男	3.652	0.438	13
	4歳児	女	4.269	0.252	29
		男	4.850	0.430	32
	5歳児	女	4.638	0.344	23
		男	4.349	0.516	34
2014年3月	3歳児	女	2.756	0.982	19
		男	2.655	1.065	8
	4歳児	女	3.544	0.771	23
		男	3.614	0.567	23
	5歳児	女	3.886	0.457	26
		男	3.709	0.606	33

表8 社会的領域における調査年×学年×性別の分散分析結果

ソース	タイプ III 平方和	自由度	平均平方	F 値	有意確率
修正モデル	89.404 ^a	17	5.259	16.877	.000
切片	4547.876	1	4547.876	14594.660	.000
調査年月	36.711	2	18.356	58.905	.000
学年	46.894	2	23.447	75.245	.000
性別	1.581	1	1.581	5.734	.025
調査年月 * 学年	3.112	4	0.778	2.497	.042
調査年月 * 性別	.482	2	0.241	0.773	.462
学年 * 性別	.568	2	0.284	0.911	.403
調査年月 * 学年 * 性別	.108	4	0.027	0.086	.987
誤差	118.413	380	0.312		
総和	6297.539	398			
修正総和	207.817	397			

a. R2 乗 = .430 (調整済み R2 乗 = .405)

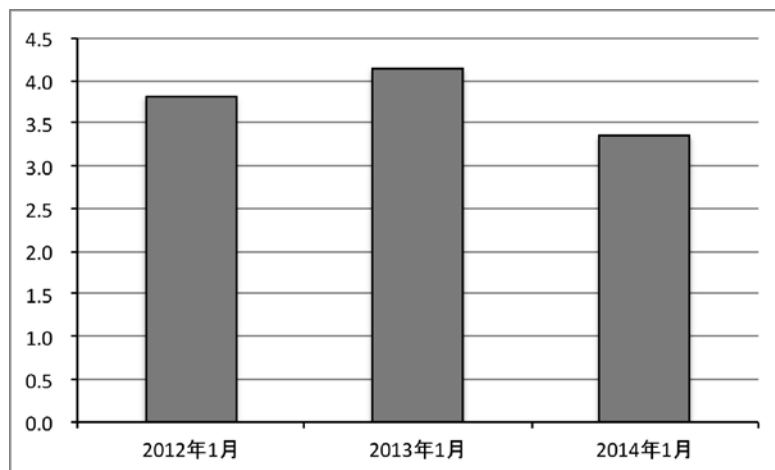


図 16 社会的領域における調査年に関する評価値

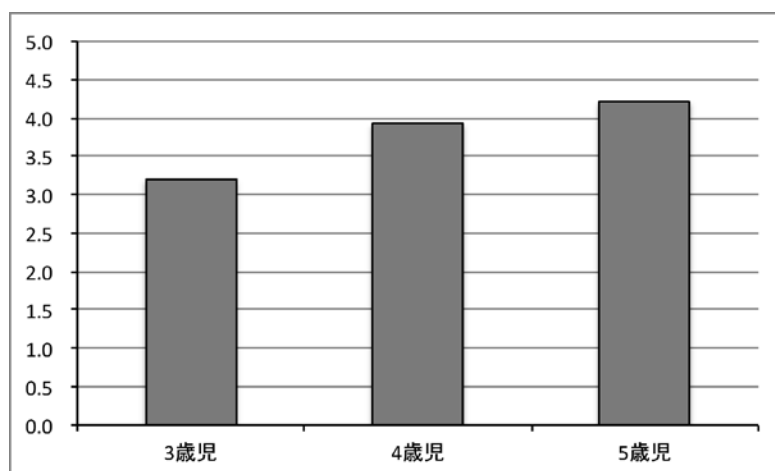


図 17 社会的領域における学年に関する評価値

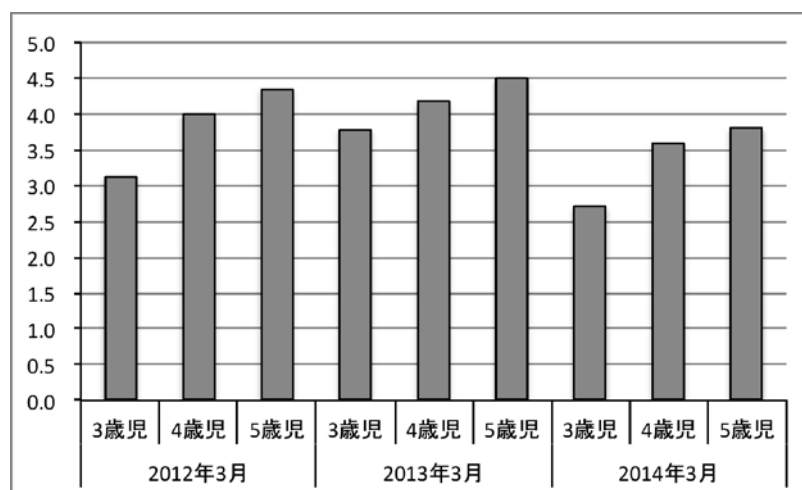


図 18 社会的領域における調査年×学年の交互作用に関する評価値

5) 生活習慣領域について

表 9 に、調査年ごとの学年別・男女別平均値と標準偏差及び度数を示している。

このデータについて、調査年（3：2012年・2013年・2014年）×学年（3：3歳児・4歳児・5歳児）×性別（2：男・女）の3要因を独立変数として分散分析を行った結果、表 10 に示すような結果となった。

調査年(図 19)、学年(図 20)及び性別の各要因の主効果が有意であり、調査年と学年と性別により評定値が異なっていることが示されている。すなわち、調査年の主効果については(図 19)、2013年の評定値は2012年及び2014年より高かった。2012年と2014年との間に差はみられなかった。学年の主効果については(図 20)、3歳児より4歳児、4歳児より5歳児の評定値が高かった。調査年×学年の交互作用については(図 21)、2012年及び2013年では3歳児と4歳児・5歳児の間での差は小さかったが、2014年では3歳児と4歳児及び5歳児の差が大きくなっていた。3歳児では2014年が2012年及び2013年よりも低く、5歳児及び4歳児については調査年による差がみられなくなっていた。

表9 生活習慣領域における調査年ごとの平均値、標準偏差及び度数

調査年月	学年	性別	平均値	標準偏差	度数
2012年3月	3歳児	女	3.580	0.376	7
		男	3.524	0.496	10
	4歳児	女	4.128	0.593	23
		男	3.997	0.394	34
	5歳児	女	4.655	0.331	22
		男	4.498	0.413	23
2013年3月	3歳児	女	4.276	0.713	16
		男	3.982	0.610	13
	4歳児	女	4.438	0.338	29
		男	4.526	0.378	31
	5歳児	女	4.673	0.371	23
		男	4.363	0.486	34
2014年3月	3歳児	女	3.407	0.800	19
		男	2.801	0.667	8
	4歳児	女	4.174	0.659	23
		男	4.793	0.528	23
	5歳児	女	4.348	0.451	26
		男	4.492	0.361	33

表10 生活習慣領域における調査年×学年×性別の分散分析結果

ソース	タイプ III 平方和	自由度	平均平方	F 値	有意確率
修正モデル	58.836 ^a	17	3.461	14.270	.000
切片	5358.649	1	5358.649	22094.630	.000
調査年月	15.070	2	7.503	30.938	.000
学年	37.827	2	18.914	77.984	.000
性別	1.666	1	1.666	6.870	.009
調査年月 * 学年	10.249	4	2.562	10.565	.000
調査年月 * 性別	.170	2	0.085	0.350	.705
学年 * 性別	1.108	2	0.554	2.284	.103
調査年月 * 学年 * 性別	2.391	4	0.598	2.464	.045
誤差	91.920	379	0.243		
総和	7239.834	397			
修正総和	150.756	396			

a. R2 乗 = .390 (調整済み R2 乗 = .363)

さらに、調査年×学年×性別の交互作用が有意であった(表 10)。2 次の交互作用が有意であったので、調査年ごとに学年×性別の評定値を図示した(図 22; 2012 年、図 23; 2013 年、図 24; 2014 年)。調査年により、学年ごとの性別による評定値の違いに一貫した傾向はみられていない。

その他の交互作用は有意ではなかった。

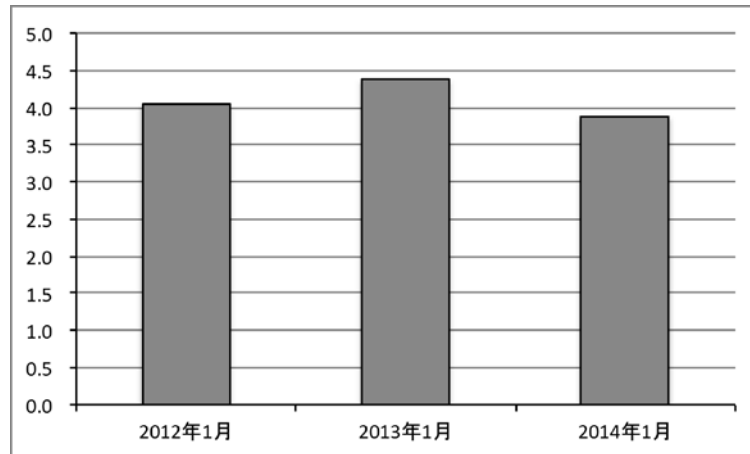


図 19 生活習慣領域における調査年に関する評定値

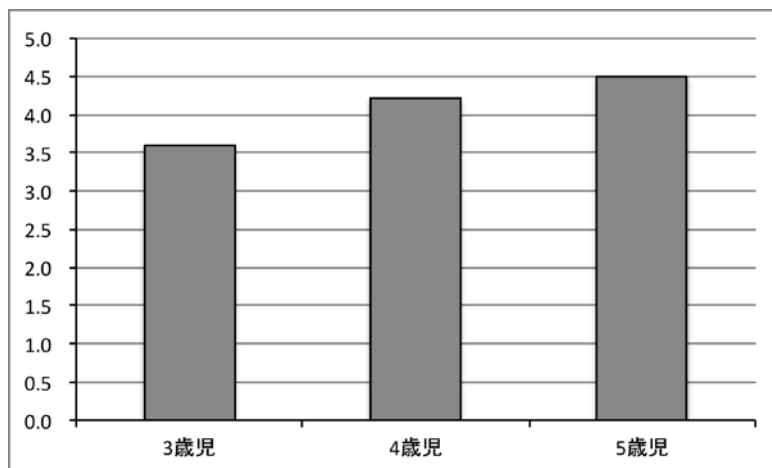


図 20 生活習慣領域における学年に関する評定値

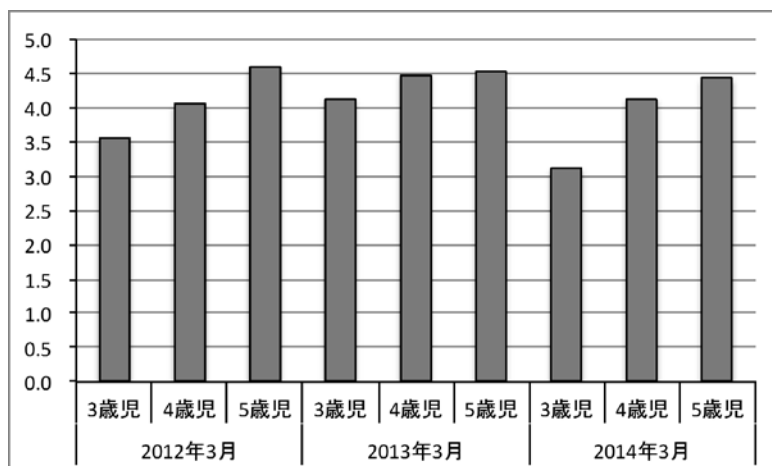


図 21 生活習慣領域における調査年×学年に関する評定値

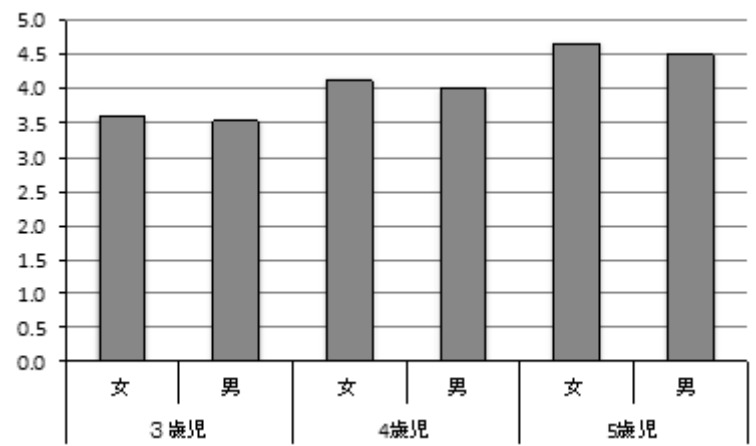


図 22 2012年の生活習慣領域における学年×性別に関する評価値

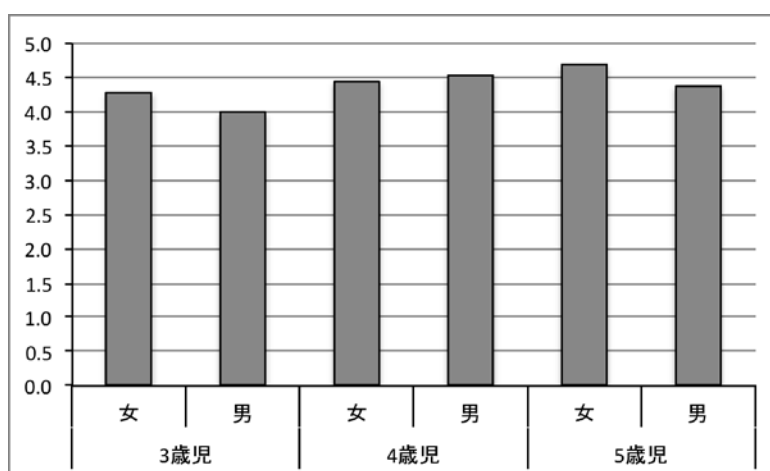


図 23 2013年の生活習慣領域における学年×性別に関する評価値

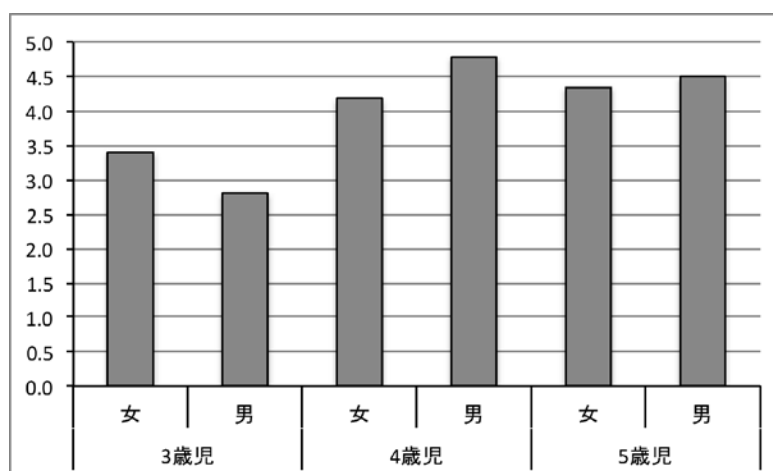


図 24 2014年の生活習慣領域における学年×性別に関する評価値

6) 遊び領域について

表 11 に、調査年ごとの学年別・男女別平均値と標準偏差及び度数を示している。

表 11 遊び領域における調査年ごとの平均値、標準偏差及び度数

調査年月	学年	性別	平均値	標準偏差	度数
2012年3月	3歳児	女	3.336	0.591	30
		男	3.312	0.599	40
	4歳児	女	4.193	0.257	40
		男	4.494	0.286	26
	5歳児	女	4.949	0.099	55
		男	4.878	0.223	42
2013年3月	3歳児	女	2.667	0.373	24
		男	2.693	0.319	18
	4歳児	女	4.359	0.541	41
		男	4.264	0.671	50
	5歳児	女	4.810	0.249	35
		男	4.822	0.211	25
2014年3月	3歳児	女	2.126	0.843	31
		男	2.192	0.730	36
	4歳児	女	4.125	0.221	43
		男	4.970	0.218	26
	5歳児	女	4.911	0.261	41
		男	4.778	0.382	48

このデータについて、調査年（3：2012年・2013年・2014年）×学年（3：3歳児・4歳児・5歳児）×性別（2：男・女）の3要因を独立変数として分散分析を行った結果、表 12 に示すような結果となった。調査年、学年の各要因の主効果が有意であり、調査年（図 25）と学年（図 26）により評定値が異なっていることが示されている。2013年が最も高く、次に2012年、最も低かったのが2014年であった。また、学年が上がるにつれて遊びの評定値は高くなっていることが明らかになった。具体的には、遊びのなかで新しいこと考えだしたり新しいやりかたを工夫したりする、自分から遊びを見つけて遊び込む、友達の遊びに進んで加わったり友達の提案に乗って協調して遊ぶなどが出来るようになることを示している。

表 12 遊び領域における調査年×学年×性別の分散分析結果

ソース	タイプ III 平方和	自由度	平均平方	F 値	有意確率
修正モデル	55.207 ^a	17	3.247	9.145	.000
切片	4622.380	1	4622.380	13016.620	.000
調査年月	19.644	2	9.822	27.659	.000
学年	34.734	2	17.367	48.905	.000
性別	.341	1	0.341	0.961	.327
調査年月 * 学年	2.663	4	0.666	1.875	.114
調査年月 * 性別	.774	2	0.387	1.090	.337
学年 * 性別	.427	2	0.213	0.601	.549
調査年月 * 学年 * 性別	.432	4	0.108	0.304	.875
誤差	134.588	379	0.355		
総和	6332.416	397			
修正総和	189.795	396			

a. R2 乗 = .291 (調整済み R2 乗 = .259)

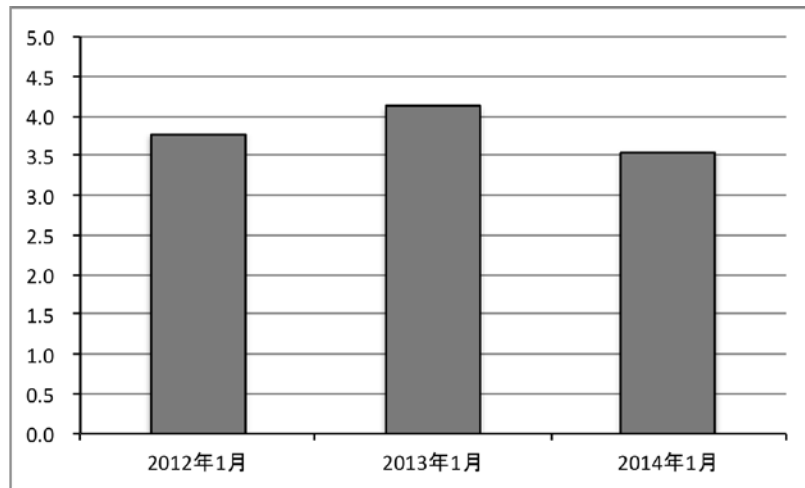


図 25 生活習慣領域における調査年に関する評価値

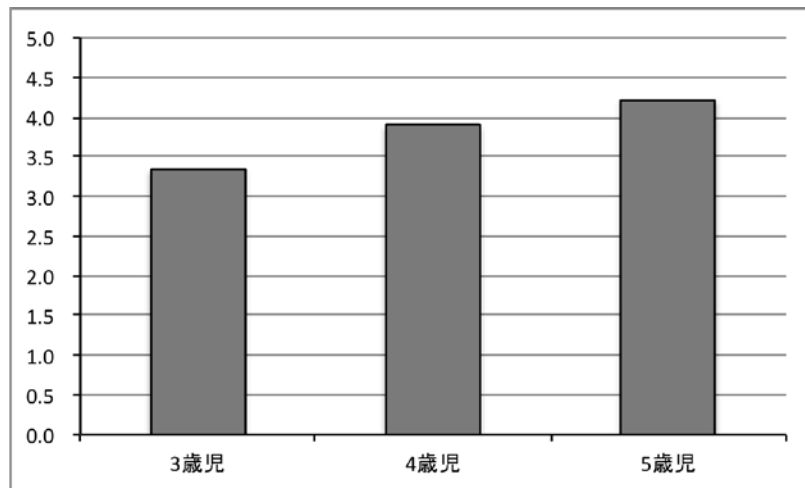


図 26 生活習慣領域における学年に関する評価値

(2) 郡山 B

1) 知的領域について

表 1 に、調査年ごとの学年別・男女別平均値と標準偏差及び度数を示している。

このデータについて、調査年（3：2012年・2013年・2014年）×学年（3：3歳児・4歳児・5歳児）×性別（2：男・女）の3要因を独立変数として分散分析を行った（表2）。

その結果、調査年、学年、性別の各要因の主効果が有意であり、調査年により評定値が異なっており、2014年は2012年よりも高く評定されていた。その他の調査年間に差はみられなかった（図1）。また、学年により評定値が異なっており、3歳児より4歳児、4歳児より5歳児が高くなっていた（図2）。さらに男子よりも女子が高くなっていることが明らかになった。

表 1 知的領域における調査年ごとの平均値、標準偏差及び度数

調査年月	学年	性別	平均値	標準偏差	度数
2012年3月	3歳児	女	2.956	0.558	19
		男	2.746	0.653	23
	4歳児	女	3.935	0.361	24
		男	3.565	0.623	15
	5歳児	女	4.446	0.153	25
		男	4.195	0.261	16
2013年3月	3歳児	女	3.271	0.665	14
		男	2.778	0.760	11
	4歳児	女	3.642	0.207	17
		男	3.621	0.532	19
	5歳児	女	4.687	0.246	24
		男	4.443	0.406	13
2014年3月	3歳児	女	3.266	0.892	21
		男	2.763	0.524	26
	4歳児	女	3.929	0.094	13
		男	3.597	0.350	14
	5歳児	女	4.798	0.237	18
		男	4.802	0.699	23

表 2 知的領域における調査年×学年×性別の分散分析結果

ソース	タイプ III 平方和	自由度	平均平方	F 値	有意確率
修正モデル	175.487 ^a	17	10.323	39.983	.000
切片	4372.689	1	4372.689	16936.624	.000
調査年月	1.808	2	0.904	3.502	.031
学年	145.616	2	72.808	282.005	.000
性別	4.604	1	4.604	17.834	.000
調査年月 * 学年	3.518	4	0.879	3.406	.010
調査年月 * 性別	.093	2	0.046	0.179	.836
学年 * 性別	.341	2	0.171	0.661	.517
調査年月 * 学年 * 性別	1.261	4	0.315	1.221	.302
誤差	81.843	317	0.258		
総和	4969.936	335			
修正総和	257.330	334			

a. R2 乗 = .682 (調整済み R2 乗 = .665)

調査年×学年の交互作用が有意であり、3歳児、4歳児、5歳児とも2012年及び2013年に比べて、2014年では知的領域の評定値が低かった。特に3歳児においてその傾向が強くみられた。5歳児では2012年、2013年、2014年と評定値が高くなっている。4歳児では調査年による評定値の違いはほとんどみられない。5歳児では調査年と共に次第に上昇する傾向がみられた（図3）。その他の交互作用は有意ではなかった。

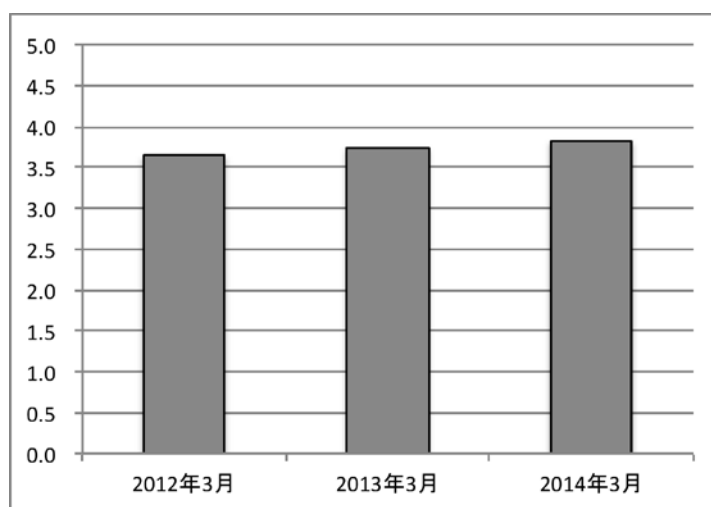


図1 知的領域における調査年に関する評定値

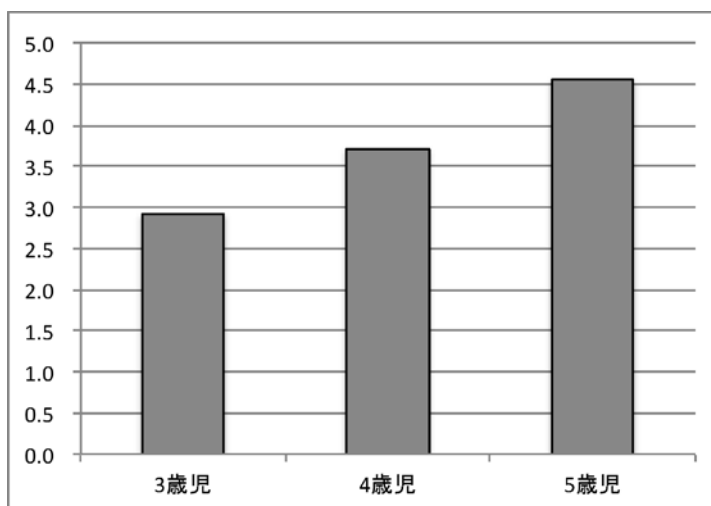


図2 知的領域における学年に関する評定値

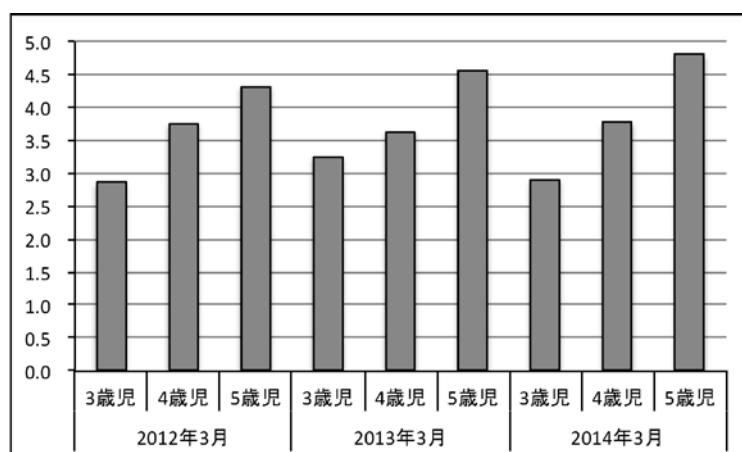


図3 知的領域における調査年×学年に関する評定値

2) 運動領域について

表3に、調査年ごとの学年別・男女別平均値と標準偏差及び度数を示している。

このデータについて、調査年（3：2012年・2013年・2014年）×学年（3：3歳児・4歳児・5歳児）×性別（2：男・女）の3要因を独立変数として分散分析を行った。その結果、調査年、学年及び性別の各要因の主効果が有意であり、調査年（図4）、学年（図5）及び性別により評定値が異なっていることが示されている。調査年の主効果について、2012年より2013年及び2014年が高かった。2013年と2014年との間に差はみられなかった。学年の主効果について、3歳児より4歳児、4歳児より5歳児の評定が学年と共に高くなっていた。

さらに、調査年×学年の交互作用が有意であった。調査年×学年の交互作用について、図6に示すように、3歳児の2013年の評定値は2012年や2014年よりも高かった。すなわち、3歳児では2012年より2013年に評定値が上昇し、2014年に低下していることが明らかになった。

表3 運動領域における調査年ごとの平均値、標準偏差及び度数

調査年月	学年	性別	平均値	標準偏差	度数
2012年3月	3歳児	女	2.880	0.548	19
		男	2.875	0.513	23
	4歳児	女	3.619	0.287	24
		男	3.487	0.473	15
	5歳児	女	4.124	0.336	25
		男	3.899	0.635	16
2013年3月	3歳児	女	3.150	0.473	14
		男	2.945	0.624	11
	4歳児	女	3.635	0.251	17
		男	3.518	0.839	19
	5歳児	女	4.471	0.262	24
		男	4.338	0.493	13
2014年3月	3歳児	女	3.119	0.644	21
		男	2.767	0.487	26
	4歳児	女	3.735	0.212	13
		男	3.564	0.167	14
	5歳児	女	4.683	0.260	18
		男	4.663	0.899	23

表4 運動領域における調査年×学年×性別の分散分析結果

ソース	タイプ III 平方和	自由度	平均平方	F 値	有意確率
修正モデル	135.538 ^a	17	7.973	30.086	.000
切片	4137.012	1	4137.012	15611.116	.000
調査年月	4.573	2	2.029	7.655	.001
学年	110.427	2	55.214	208.350	.000
性別	1.517	1	1.517	5.726	.017
調査年月 * 学年	5.422	4	1.355	5.115	.001
調査年月 * 性別	.014	2	0.007	0.026	.974
学年 * 性別	.009	2	0.004	0.017	.984
調査年月 * 学年 * 性別	.546	4	0.136	0.515	.725
誤差	84.063	317	0.265		
総和	4659.006	335			
修正総和	219.544	334			

a. R2 乗 = .617 (調整済み R2 乗 = .597)

4歳児については調査年による違いはみられていないが、5歳児では2012年より2013年、2013年より2014年の評定値が高くなっていた。その他の交互作用は有意ではなかった。

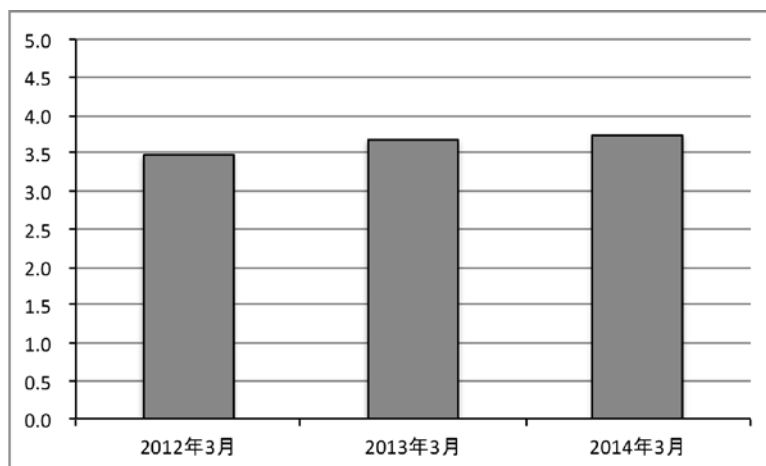


図4 運動的領域における調査年に関する評定値

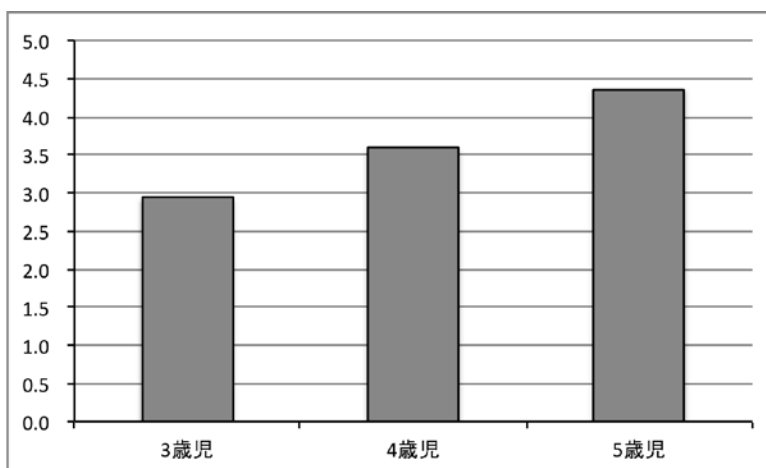


図5 運動的領域における学年に関する評定値

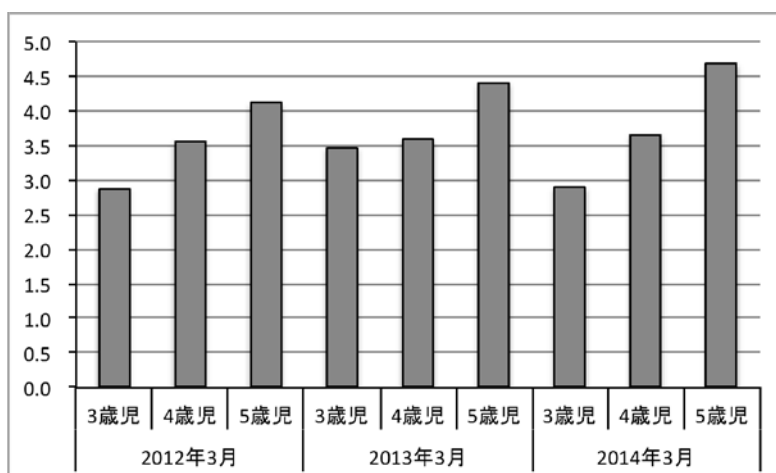


図6 運動的領域における調査年×学年に関する評定値

3) 情緒的領域について

表5に、調査年ごとの学年別・男女別平均値と標準偏差及び度数を示している。

このデータについて、調査年（3：2012年・2013年・2014年）×学年（3：3歳児・4歳児・5歳児）×性別（2：男・女）の3要因を独立変数として分散分析を行った（表6）。その結果、調査年、学年及び性別の各要因の主効果が有意であり、調査年と学年により評定値が異なっていることが示されている。調査年の主効果について、2012年より2013年及び2014年が高かった。2013年と2014年との間に差はみられなかった（図7）。学年の主効果について、3歳児より4歳児、4歳児より5歳児の評定が学年と共に高くなっていた（図8）。

表5 情緒的領域における調査年ごとの平均値、標準偏差及び度数

調査年月	学年	性別	平均値	標準偏差	度数
2012年3月	3歳児	女	3.494	0.505	19
		男	3.103	0.518	23
	4歳児	女	3.702	0.306	24
		男	3.531	0.546	15
	5歳児	女	3.918	0.291	25
		男	3.849	0.235	16
2013年3月	3歳児	女	3.977	0.439	14
		男	3.495	0.324	11
	4歳児	女	3.515	0.244	17
		男	3.417	0.609	19
	5歳児	女	4.680	0.196	24
		男	4.378	0.628	13
2014年3月	3歳児	女	3.179	0.843	21
		男	3.145	0.422	26
	4歳児	女	3.938	0.053	13
		男	3.797	0.184	14
	5歳児	女	4.518	0.543	18
		男	4.445	0.851	23

表6 情緒的領域における調査年×学年×性別の分散分析結果

ソース	タイプ III 平方和	自由度	平均平方	F 値	有意確率
修正モデル	81.346 ^a	17	4.785	19.811	.000
切片	4487.814	1	4487.814	18579.845	.000
調査年月	5.709	2	2.854	11.817	.000
学年	46.947	2	23.474	97.182	.000
性別	3.058	1	3.058	12.444	.000
調査年月 * 学年	13.146	4	3.287	13.606	.000
調査年月 * 性別	.571	2	0.286	1.183	.308
学年 * 性別	.448	2	0.224	0.927	.397
調査年月 * 学年 * 性別	.746	4	0.187	0.772	.544
誤差	76.569	317	0.242		
総和	4923.875	335			
修正総和	157.915	334			

a. R2 乗 = .515 (調整済み R2 乗 = .489)

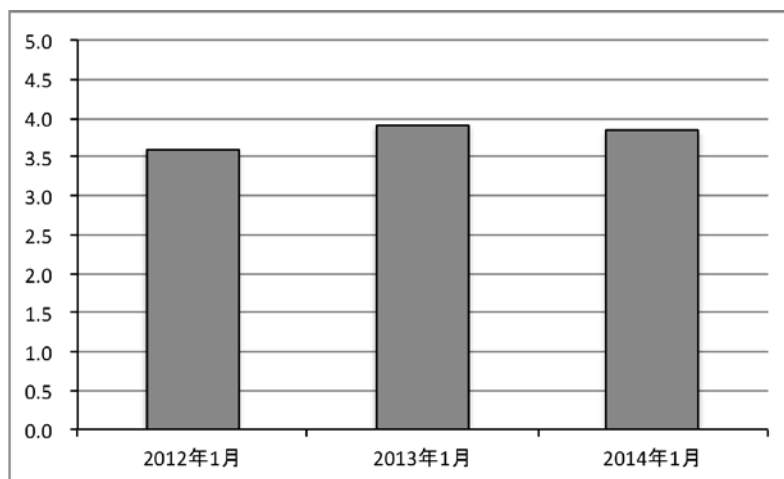


図7 情緒的領域における調査年に関する評価値

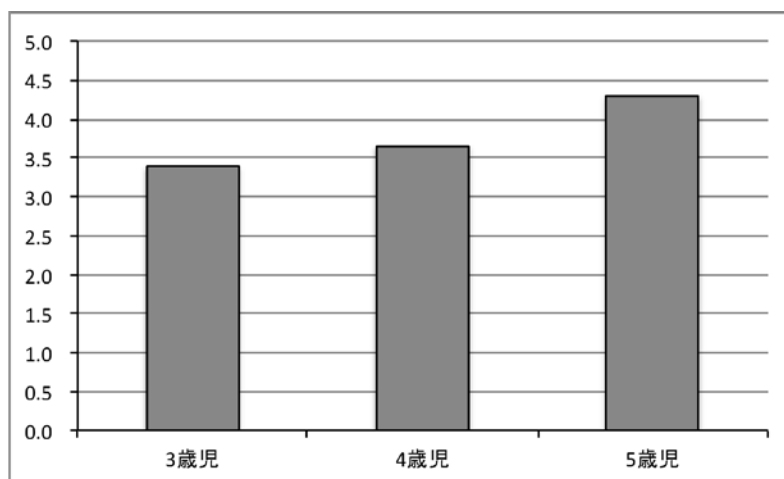


図8 情緒的領域における学年に関する評価値

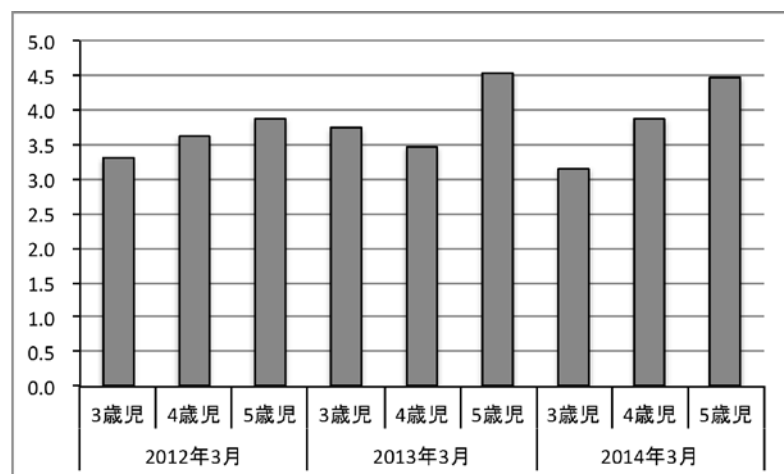


図9 情緒的領域における調査年×学年の交互作用に関する評価値

さらに、調査年×学年の交互作用が有意であった（表6）。その他の交互作用は有意ではなかった（表6）。図9にみられるように、3歳児については、2012年から2013年にかけて上昇しているが、2014年は低下していた。4歳児では、調査年による違いはほとんどなく、5

歳児では、2012年より2013年及び2014年の評定値が高くなっている。調査年による違いは3歳児で大きく、2012年と2013年に比べて2014年は評定値が低いことが示された。

4) 社会的領域について

表7に、調査年ごとの学年別・男女別平均値と標準偏差及び度数を示している。

表7 社会的領域における調査年ごとの平均値、標準偏差及び度数

調査年月	学年	性別	平均値	標準偏差	度数
2012年3月	3歳児	女	3.269	0.337	19
		男	3.111	0.570	23
	4歳児	女	3.685	0.273	24
		男	3.544	0.616	15
	5歳児	女	4.080	0.348	25
		男	3.958	0.243	16
2013年3月	3歳児	女	3.466	0.406	14
		男	3.200	0.425	11
	4歳児	女	3.629	0.320	17
		男	3.415	0.656	19
	5歳児	女	4.542	0.188	24
		男	4.382	0.680	13
2014年3月	3歳児	女	3.077	0.897	21
		男	2.742	0.424	26
	4歳児	女	3.588	0.105	13
		男	3.400	0.302	14
	5歳児	女	4.375	0.612	18
		男	4.382	0.908	23

表8 社会的領域における調査年×学年×性別の分散分析結果

ソース	タイプ III 平方和	自由度	平均平方	F 値	有意確率
修正モデル	96.954 ^a	17	5.703	20.998	.000
切片	4179.548	1	4179.548	15387.902	.000
調査年月	2.187	2	1.093	4.259	.019
学年	72.792	2	36.396	134.002	.000
性別	1.997	1	1.997	7.352	.007
調査年月 * 学年	7.160	4	1.790	6.590	.000
調査年月 * 性別	.122	2	0.061	0.225	.799
学年 * 性別	.377	2	0.188	0.693	.501
調査年月 * 学年 * 性別	.102	4	0.025	0.094	.984
誤差	86.101	317	0.272		
総和	4649.756	335			
修正総和	183.556	334			

a. R2 乗 = .530 (調整済み R2 乗 = .504)

このデータについて、調査年（3：2012年・2013年・2014年）×学年（3：3歳児・4歳児・5歳児）×性別（2：男・女）の3要因を独立変数として分散分析を行った（表8）。その結果、調査年、学年及び性別の各要因の主効果が有意であり、調査年と学年と性別により評定値が異なっていることが示されている。調査年の主効果について2014年が2012年及

び2013年よりも低かった（図10）。2012年と2013年との間に差はみられなかった。また、学年の主効果について、3歳児より4歳児、4歳児より5歳児の評定値が高くなっていった（図11）。女子が男子より高く評定されていた。

さらに、調査年×学年の交互作用が有意であった（図12）。図12にみられるように、5歳児については2012年より2013年及び2014年の評定値が高くなっているが、3歳児については、2012年から2013年にかけて上昇しているが、2014年は低下していた。2012年と2014年では学年と共に評定値が高くなっているが、2013年においては、3歳児よりも4歳児の評定値が低くなっており、2012年や2014年の結果と異なっていることが示された。友達の喜ぶことを自分から喜んでする、話を聞きながら想像して楽しむなどの項目から構成される情緒的領域について、学年に対応した傾向が調査年によって異なることを示している。

その他の交互作用は有意ではなかった。

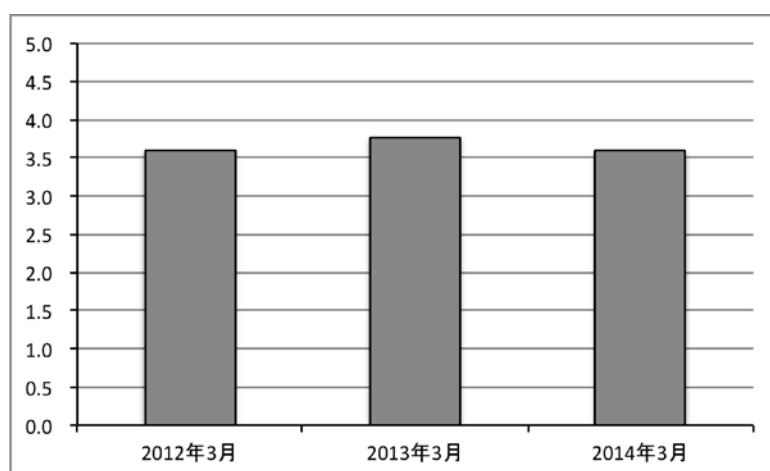


図10 社会的領域における調査年の主効果に関する評定値

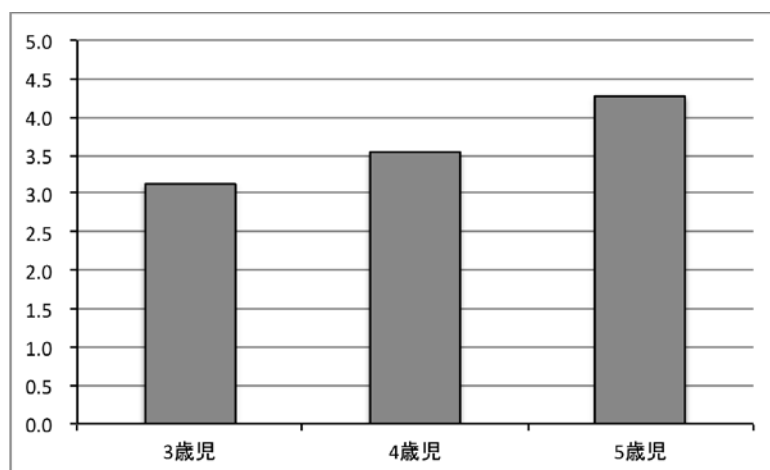


図11 社会的領域における学年の主効果に関する評定値

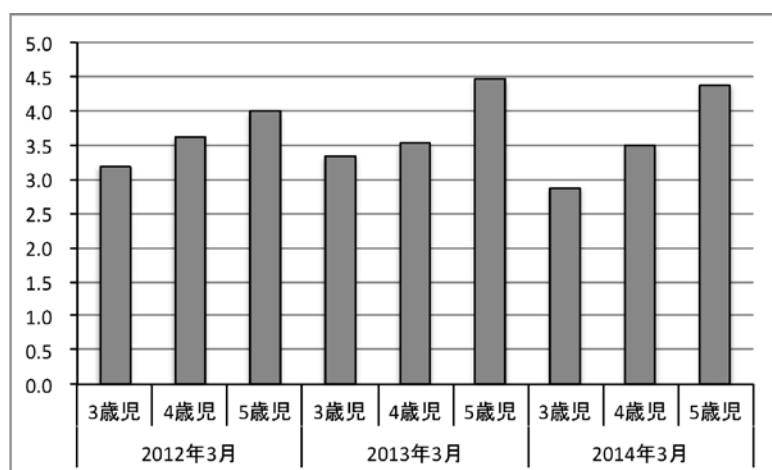


図 12 社会的領域における調査年×学年の交互作用に関する評定値

5) 生活習慣領域について

表 9 に、調査年ごとの学年別・男女別平均値と標準偏差及び度数を示している。

表 9 生活習慣領域における調査年ごとの平均値、標準偏差及び度数

調査年月	学年	性別	平均値	標準偏差	度数
2012年3月	3歳児	女	3.192	0.476	19
		男	2.963	0.561	23
	4歳児	女	3.756	0.149	23
		男	3.604	0.408	15
	5歳児	女	4.186	0.340	25
		男	4.173	0.385	16
2013年3月	3歳児	女	3.479	0.498	14
		男	3.128	0.193	11
	4歳児	女	4.107	0.454	17
		男	3.638	0.787	19
	5歳児	女	4.600	0.149	24
		男	4.407	0.473	13
2014年3月	3歳児	女	2.997	0.811	21
		男	2.679	0.463	26
	4歳児	女	3.620	0.106	13
		男	3.634	0.118	14
	5歳児	女	4.765	0.341	18
		男	4.701	0.806	23

このデータについて、調査年（3：2012年・2013年・2014年）×学年（3：3歳児・4歳児・5歳児）×性別（2：男・女）の3要因を独立変数として分散分析を行った（表 10）。その結果、調査年、学年及び性別の各要因の主効果が有意であった。調査年の主効果について、調査年による生活習慣の違いがみられ、2012年、2014年より2013年が高かった（図 13）。2012年と2014年及び2013年と2014年の間に違いはみられなかった。性別の主効果については、女子が男子より高く評定されていた。

表 10 生活習慣領域における調査年×学年×性別の分散分析結果

ソース	タイプ III 平方和	自由度	平均平方	F 値	有意確率
修正モデル	140.229	17	8.249	34.711	.000
切片	4420.680	1	4420.680	18602.439	.000
調査年月	3.189	2	1.594	6.710	.001
学年	106.360	2	53.180	223.783	.000
性別	3.468	1	3.468	12.821	.000
調査年月 * 学年	7.994	4	1.999	8.410	.000
調査年月 * 性別	.723	2	0.362	1.522	.220
学年 * 性別	.595	2	0.298	1.253	.287
調査年月 * 学年 * 性別	.450	4	0.113	0.474	.755
誤差	75.942	316	0.238		
総和	4929.591	334			
修正総和	215.323	333			

a. R2 乗 = .651 (調整済み R2 乗 = .632)

さらに、調査年×学年の交互作用が有意であり、図 14 に示されているように、2012 年は 3 歳児と 4 歳児の差がみられず、2013 年と 2014 年では学年が上がるにつれて高く評定されている。また、3 歳児については、2012 年、2013 年よりも 2014 年において低く評定されていた。4 歳児については調査年による違いはほとんどみられず、5 歳児については 2012 年から 2014 年にかけて次第に高く評定されている。その他の交互作用は有意ではなかった。

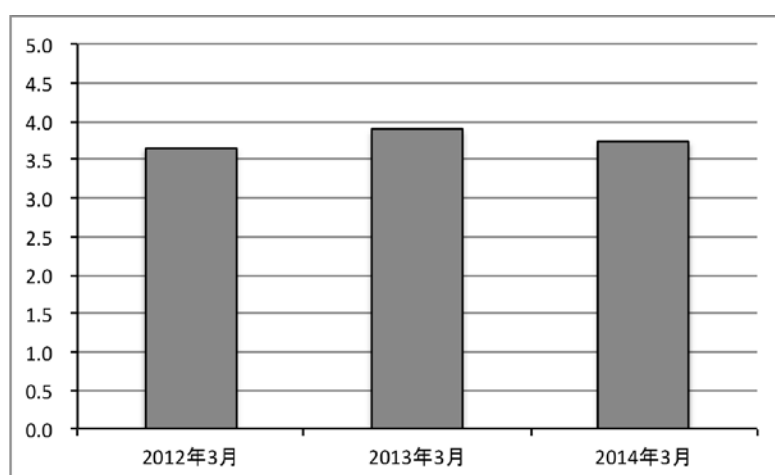


図 13 生活習慣領域における調査年の主効果に関する評定値

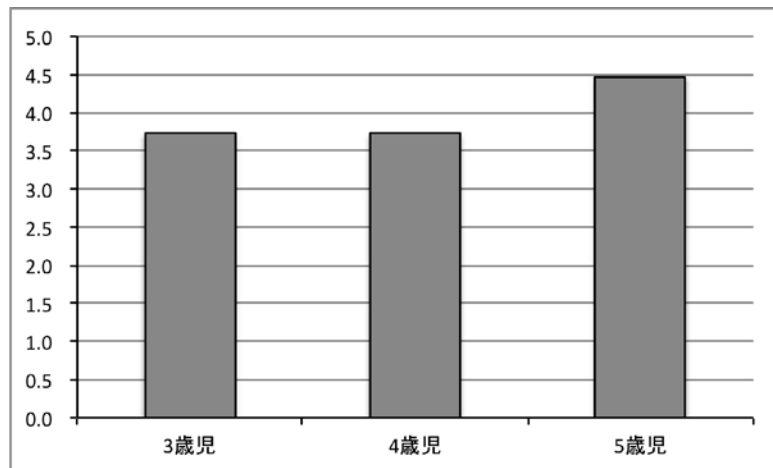


図 14 生活習慣領域における学年の主効果に関する評価値

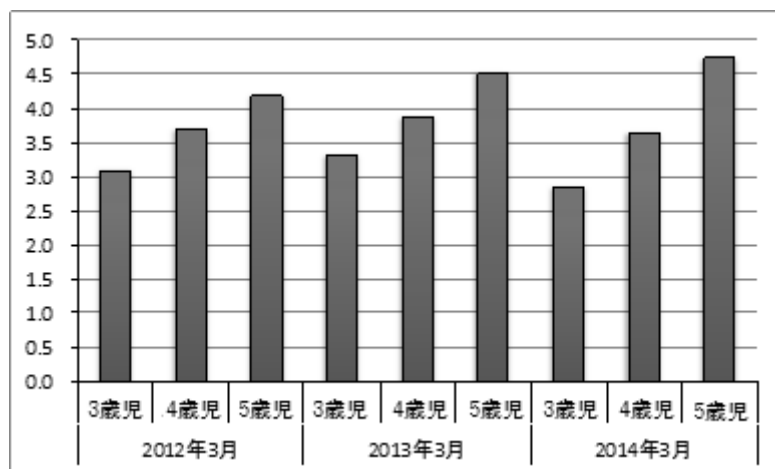


図 15 生活習慣領域における調査年×学年の主効果に関する評価値

6) 遊び領域について

表 11 に、調査年ごとの学年別・男女別平均値と標準偏差及び度数を示している。

このデータについて、調査年（3：2012年・2013年・2014年）×学年（3：3歳児・4歳児・5歳児）×性別（2：男・女）の3要因を独立変数として分散分析を行った（表 12）。その結果、表 12 に示すように調査年、学年の各要因の主効果が有意であり、調査年と学年により評価値が異なっていることを示唆している。調査年の主効果について、2012年及び2014年より2013年が高く評価されていた。2012年と2013年との間には差はみられなかった。

調査年×学年の相互作用については、図 18 にみられるように、2013年が最も高く、次に2014年、最も低かったのが2012年であった。また、3歳児と4歳児の差ほとんどないが、5歳児は最も高く評価されて、全体としては学年が上がるにつれて遊びの評価値は高くなっていることが明らかになった。具体的には、学年が上がるにつれて、遊びのなかで新しいこと考えだしたり新しいやりかたを工夫したりする、自分から遊びを見つけて遊び込む、友達の遊びに進んで加わったり友達の提案に乗って協調して遊ぶなどが出来るようになることを示している。

表 11 遊び領域における調査年ごとの平均値、標準偏差及び度数

調査年月	学年	性別	平均値	標準偏差	度数
2012年3月	3歳児	女	3.390	0.384	19
		男	3.252	0.564	23
	4歳児	女	3.705	0.362	24
		男	3.652	0.560	15
	5歳児	女	3.745	0.476	25
		男	3.876	0.362	16
2013年3月	3歳児	女	3.778	0.351	13
		男	3.515	0.284	11
	4歳児	女	3.582	0.389	17
		男	3.408	0.627	19
	5歳児	女	4.705	0.370	24
		男	4.502	0.792	13
2014年3月	3歳児	女	3.923	1.004	21
		男	3.649	0.542	26
	4歳児	女	3.754	0.078	13
		男	3.727	0.152	14
	5歳児	女	4.191	0.726	18
		男	4.476	0.954	23

表 12 遊び領域における調査年×学年×性別の分散分析結果

ソース	タイプ III 平方和	自由度	平均平方	F 値	有意確率
修正モデル	78.030 ^a	17	4.590	13.983	.000
切片	4377.115	1	4377.115	13334.384	.000
調査年月	4.994	2	2.497	7.607	.001
学年	45.792	2	22.896	69.750	.000
性別	.212	1	0.212	0.647	.422
調査年月 * 学年	13.771	4	3.443	10.488	.000
調査年月 * 性別	1.059	2	0.530	1.613	.201
学年 * 性別	.660	2	0.330	1.006	.367
調査年月 * 学年 * 性別	.282	4	0.071	0.215	.930
誤差	103.729	316	0.328		
総和	4840.432	334			
修正総和	181.760	333			

a. R2 乗 = .429 (調整済み R2 乗 = .399)

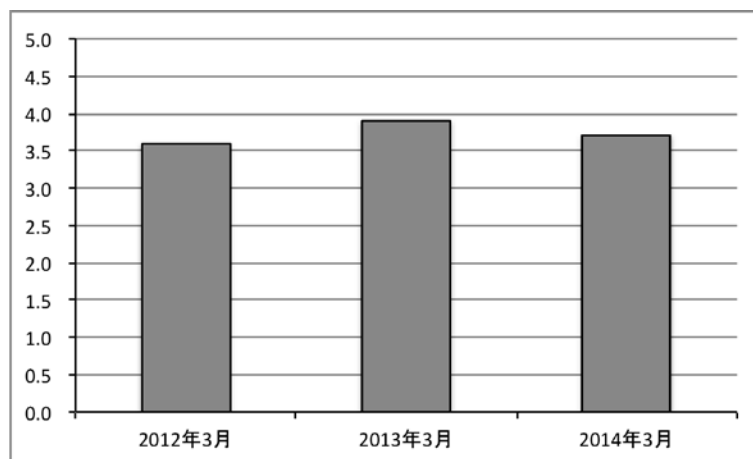


図 16 遊び領域における調査年の主効果に関する評定値

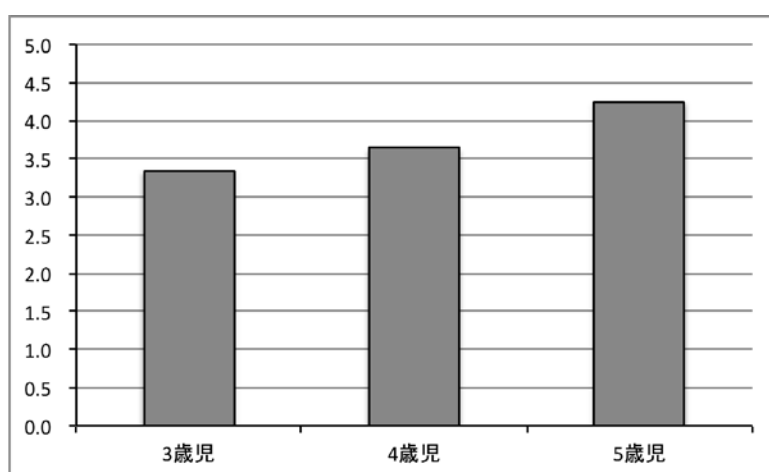


図 17 遊び領域における学年の主効果に関する評定値

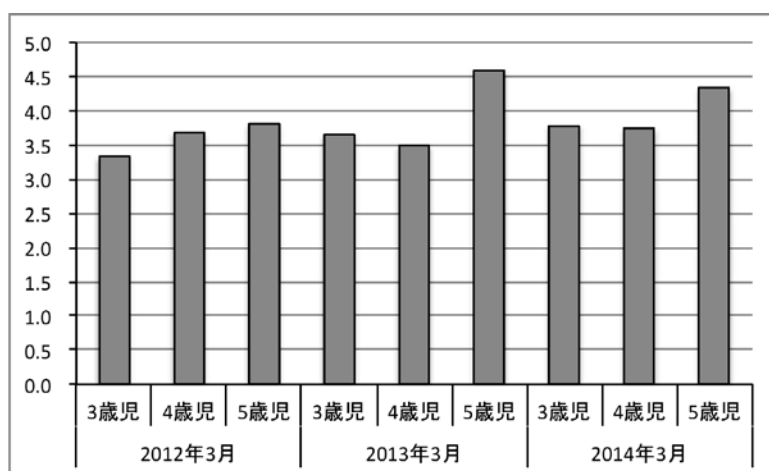


図 18 遊び領域における調査年×学年の交互作用に関する評定値

(3) 郡山 C

1) 知的領域について

表1に、調査年ごとの学年別・男女別平均値と標準偏差及び度数を示している。

このデータについて、調査年（3：2012年・2013年・2014年）×学年（3：3歳児・4歳児・5歳児）×性別（2：男・女）の3要因を独立変数として分散分析を行った（表2）。その結果、調査年、学年、性別の各要因の主効果が有意であった。調査年の主効果について（図1）、調査年による評定値が異なり、2012年が最も高く、次いで2014年であり、2013年が最も低かった。また、3歳児、4歳児、5歳児と学年が上がるにつれて高く評定されている（図2）。

表1 知的領域における調査年ごとの平均値、標準偏差及び度数

調査年月	学年	性別	平均値	標準偏差	度数
2012年3月	3歳児	女	3.459	0.686	30
		男	3.890	0.665	40
	4歳児	女	3.978	0.576	40
		男	3.551	0.686	26
	5歳児	女	4.937	0.142	55
		男	4.798	0.336	42
2013年3月	3歳児	女	2.093	0.355	24
		男	2.204	0.382	18
	4歳児	女	4.274	0.625	41
		男	4.039	0.765	50
	5歳児	女	4.741	0.292	35
		男	4.678	0.423	25
2014年3月	3歳児	女	2.166	0.709	33
		男	2.221	0.772	37
	4歳児	女	4.114	0.250	43
		男	3.994	0.355	26
	5歳児	女	4.925	0.263	41
		男	4.789	0.395	48

表2 知的領域における調査年×学年×性別の分散分析結果

ソース	タイプⅢ平方和	自由度	平均平方	F 値	有意確率
修正モデル	591.173 ^a	17	34.775	128.896	.000
切片	8595.167	1	8595.167	31858.787	.000
調査年月	11.365	2	5.682	21.062	.000
学年	506.833	2	253.417	939.312	.000
性別	3.429	1	3.429	12.711	.000
調査年月 * 学年	48.822	4	12.206	45.241	.000
調査年月 * 性別	2.061	2	1.031	3.821	.022
学年 * 性別	1.162	2	0.581	2.153	.117
調査年月 * 学年 * 性別	1.313	4	0.328	1.216	.303
誤差	171.586	636	0.270		
総和	10833.321	654			
修正総和	762.759	653			

a. R2 乗 = .775 (調整済み R2 乗 = .769)

さらに男子よりも女子が高くなっていることが示されている。調査年×学年の交互作用が有意であり、3歳児では、2012年に比べて2013年、2014年の評定値が低くなっていた（図3）。4歳児については、2012年より2013年、さらに2014年と評定値が高くなっていた。5歳児において調査年による違いはほとんどみられなかった。

また、調査年×性別の交互作用が有意であった。2012年では、女子が男子よりも高く評定され、2013年、2014年は性別による違いはほとんどみられなかった。

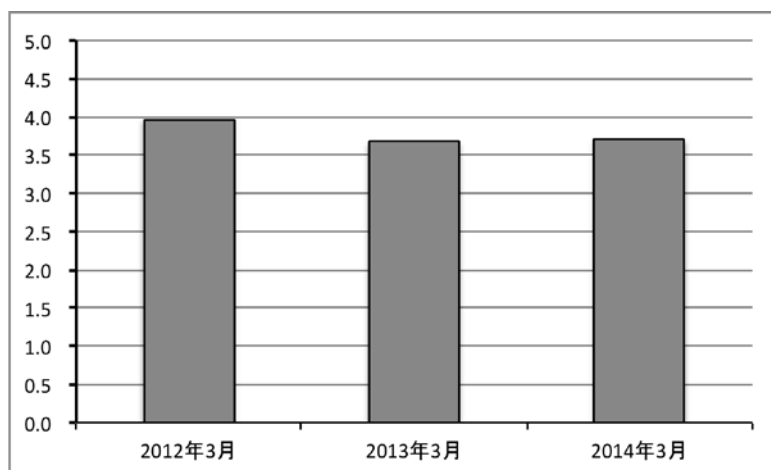


図1 知的領域における調査年に関する評定値

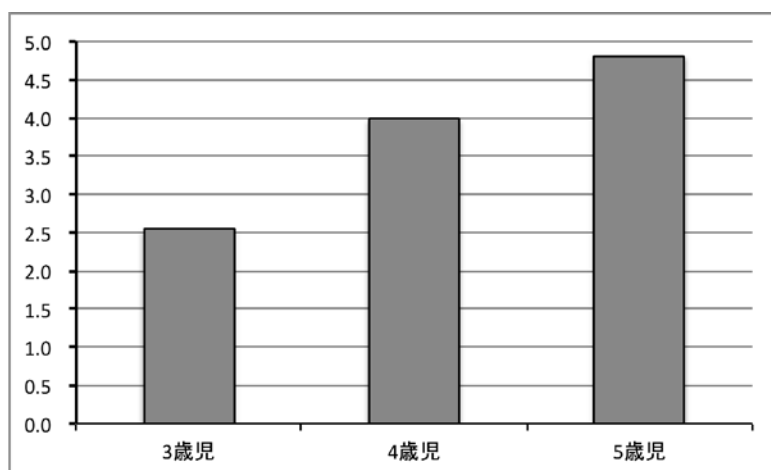


図2 知的領域における学年に関する評定値

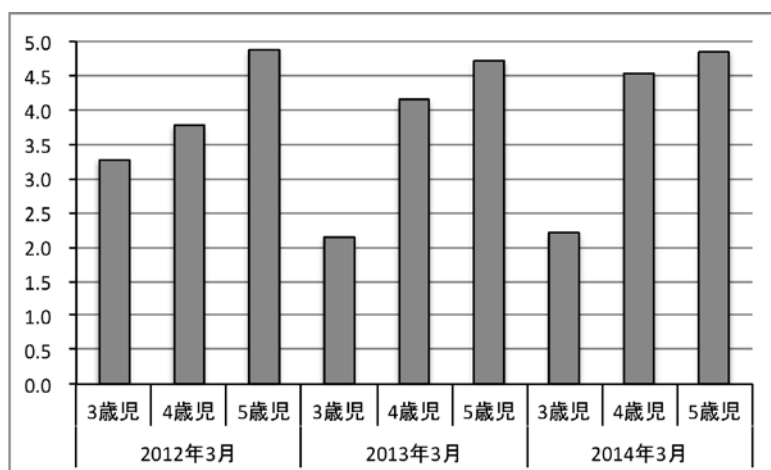


図3 知的領域における調査年×学年に関する評定値

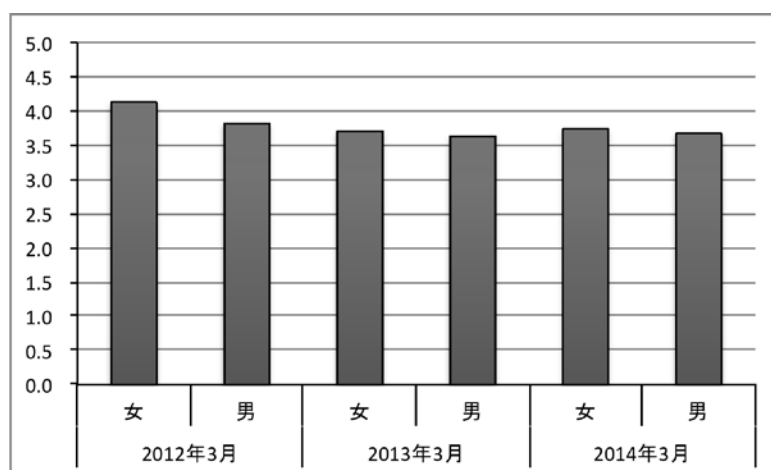


図4 知的領域における調査年×性別に関する評定値

2) 運動的領域について

表3に、調査年ごとの学年別・男女別平均値と標準偏差及び度数を示している。

このデータについて、調査年（3：2012年・2013年・2014年）×学年（3：3歳児・4歳児・5歳児）×性別（2：男・女）の3要因を独立変数として分散分析を行った。その結果、調査年、学年及び性別の各要因の主効果が有意であり、調査年と学年及び性別により評定値が異なっていることが示されている。さらに、調査年×学年の交互作用が有意であった。

その他の交互作用は有意ではなかった（表4）。

表3 運動的領域における調査年ごとの平均値、標準偏差及び度数

調査年月	学年	性別	平均値	標準偏差	度数
2012年3月	3歳児	女	3.459	0.686	30
		男	3.890	0.665	40
	4歳児	女	3.978	0.576	40
		男	3.551	0.686	26
	5歳児	女	4.937	0.142	55
		男	4.798	0.336	42
2013年3月	3歳児	女	2.093	0.355	24
		男	2.204	0.382	18
	4歳児	女	4.274	0.625	41
		男	4.039	0.765	50
	5歳児	女	4.741	0.292	35
		男	4.678	0.423	25
2014年3月	3歳児	女	2.166	0.709	33
		男	2.221	0.772	37
	4歳児	女	4.114	0.250	43
		男	3.994	0.355	26
	5歳児	女	4.925	0.263	41
		男	4.789	0.395	48

表 4 運動的領域における調査年×学年×性別の分散分析結果

ソース	タイプ III 平方和	自由度	平均平方	F 値	有意確率
修正モデル	665.112 ^a	17	39.124	131.885	.000
切片	8008.015	1	8008.015	26994.399	.000
調査年月	11.339	2	5.669	19.111	.000
学年	600.919	2	300.460	1012.826	.000
性別	2.113	1	2.113	7.124	.008
調査年月 * 学年	27.754	4	6.938	23.389	.000
調査年月 * 性別	1.262	2	0.631	2.127	.120
学年 * 性別	.443	2	0.222	0.747	.474
調査年月 * 学年 * 性別	.595	4	0.149	0.502	.734
誤差	188.672	636	0.297		
総和	10330.145	654			
修正総和	853.784	653			

a. R2 乗 = .779 (調整済み R2 乗 = .773)

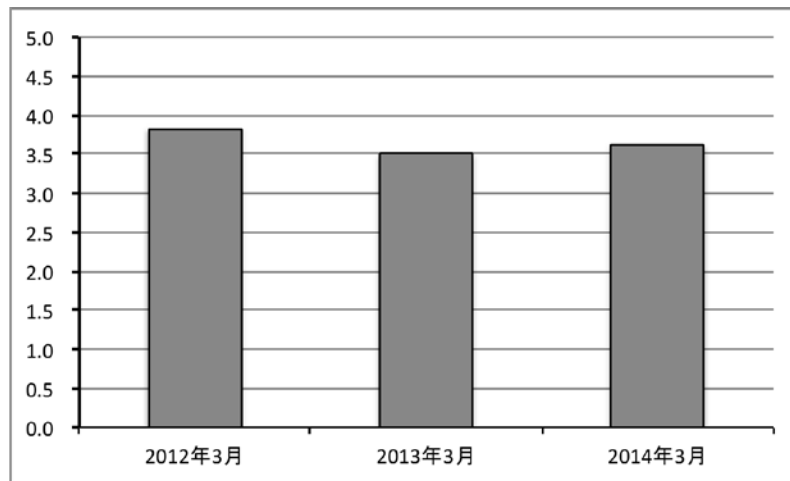


図 5 運動的領域における調査年に関する評定値

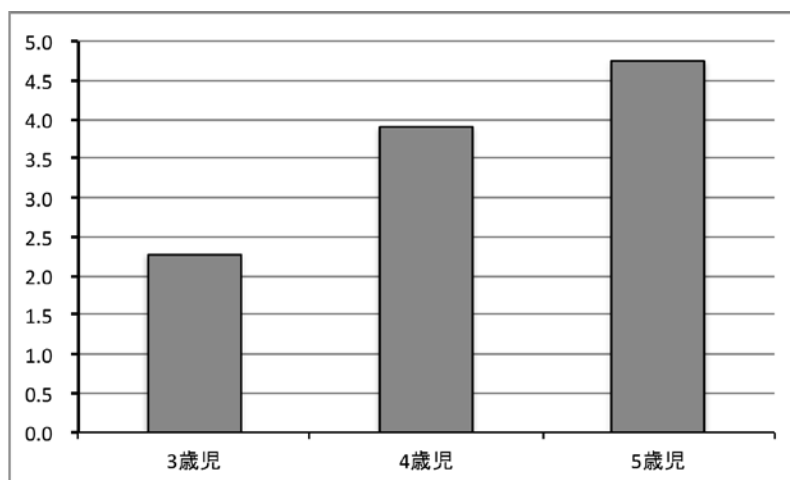


図 6 運動的領域における学年に関する評定値

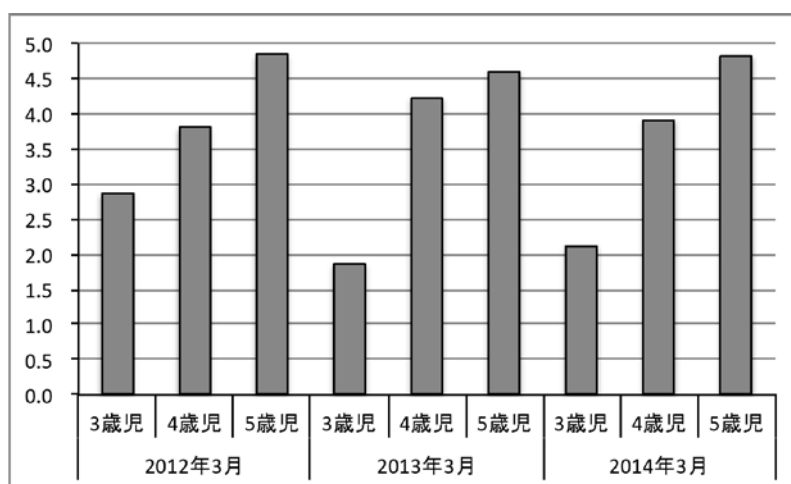


図7 運動的領域における調査年×学年に関する評定値

図5に示されるように、調査年の主効果については、2012年が最も高く、次いで、2014年、2013年が最も低かった。また、学年の主効果については、3歳児より、4歳児、4歳児より5歳児の評定値が高かった(図6)。調査年×学年の交互作用について、図7に示すように、3歳児の2012年の評定値は2013年や2014年よりも高かった。他の学年については調査年による違いはみられなかった。2012年の3歳児と4歳児、5歳児との差よりも、2013年と2014年での3歳児と4歳児、5歳児の差が大きいことが示された。

3) 情緒的領域について

表5に、調査年ごとの学年別・男女別平均値と標準偏差及び度数を示している。

このデータについて、調査年(3:2012年・2013年・2014年)×学年(3:3歳児・4歳児・5歳児)×性別(2:男・女)の3要因を独立変数として分散分析を行った。その結果、調査年、学年の各要因の主効果が有意であり、調査年の主効果が有意であり、2012年より2013年が低く、2013年より2014年が低くなっていた。また、学年の主効果が有意であり、3歳児より4歳児、4歳児より5歳児の評定値が高くなっていることが示されている。

表5 運動的領域における調査年×学年×性別の分散分析結果

調査年月	学年	性別	平均値	標準偏差	度数
2012年3月	3歳児	女	3.419	0.638	30
		男	3.405	0.570	40
	4歳児	女	4.063	0.223	40
		男	3.897	0.350	26
	5歳児	女	4.960	0.094	55
		男	4.871	0.242	42
2013年3月	3歳児	女	2.687	0.202	24
		男	2.873	0.244	18
	4歳児	女	4.239	0.439	41
		男	4.145	0.569	50
	5歳児	女	4.823	0.192	35
		男	4.712	0.280	25
2014年3月	3歳児	女	2.054	1.081	27
		男	2.194	0.710	36
	4歳児	女	4.104	0.147	43
		男	4.385	0.185	26
	5歳児	女	4.924	0.264	41
		男	4.803	0.377	48

さらに、調査年×学年の交互作用(図 10)、学年×性別の交互作用が有意であった(図 11)。その他の交互作用は有意ではなかった。調査年×学年の交互作用については、図 10 にみられるように、5 歳児では調査年による違いはみられなかったが、3 歳児では調査年による違いがみられた。すなわち、3 歳児では 2012 年よりも 2013 年、さらに 2014 年と評定値が低くなっていた。

調査年×性差の交互作用については、図 11 にみられるように、2013 年と 2014 年においては、性差はみられないが、2012 年では男子が女子よりも高く評定されており、話を聞きながら想像して楽しむ、自分でよくしたいのに、できないとくやしがる、積み木を積んでもう少しでできあがるところでくずれるとくやしがるなどの行動が多いと評定されている。

表 6 情緒的領域における調査年ごとの平均値、標準偏差及び度数

ソース	タイプ III 平方和	自由度	平均平方	F 値	有意確率
修正モデル	496.475 ^a	17	29.204	152.807	.000
切片	9018.859	1	9018.859	47189.764	.000
調査年月	17.804	2	8.902	46.579	.000
学年	413.702	2	206.851	1082.316	.000
性別	.143	1	0.143	0.746	.388
調査年月 * 学年	41.781	4	10.445	54.653	.000
調査年月 * 性別	.125	2	0.062	0.326	.722
学年 * 性別	1.229	2	0.615	3.215	.041
調査年月 * 学年 * 性別	.268	4	0.067	0.351	.844
誤差	120.214	629	0.191		
総和	11144.980	647			
修正総和	616.689	646			

a. R2 乗 = .805 (調整済み R2 乗 = .800)

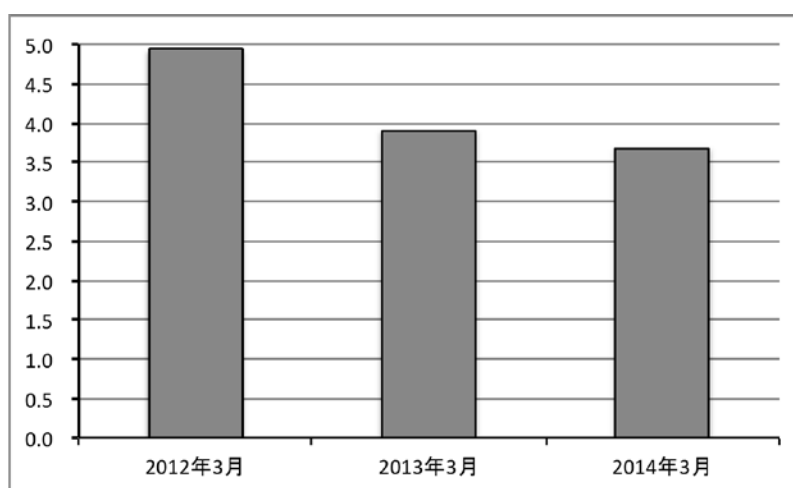


図 8 情緒的領域における調査年に関する評定値

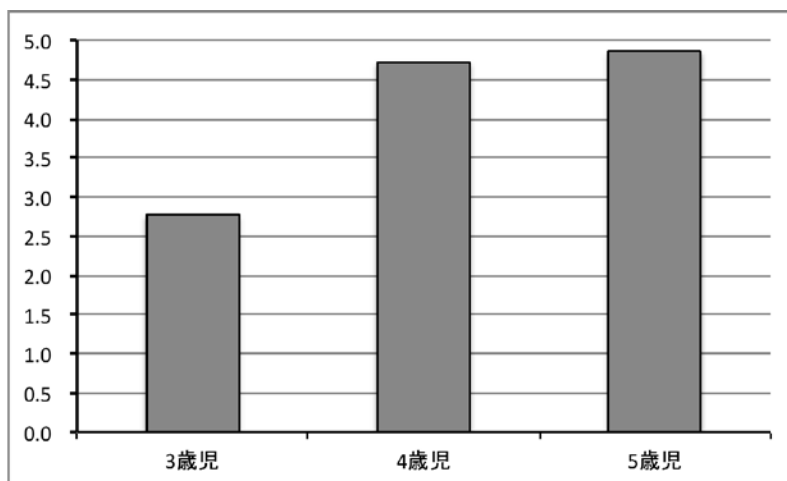


図9 情緒的領域における学年に関する評価値

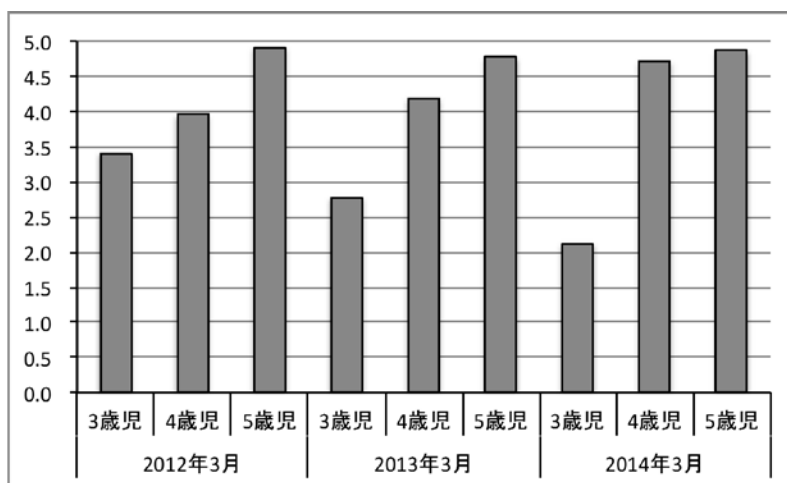


図10 情緒的領域における調査年×学年に関する評価値

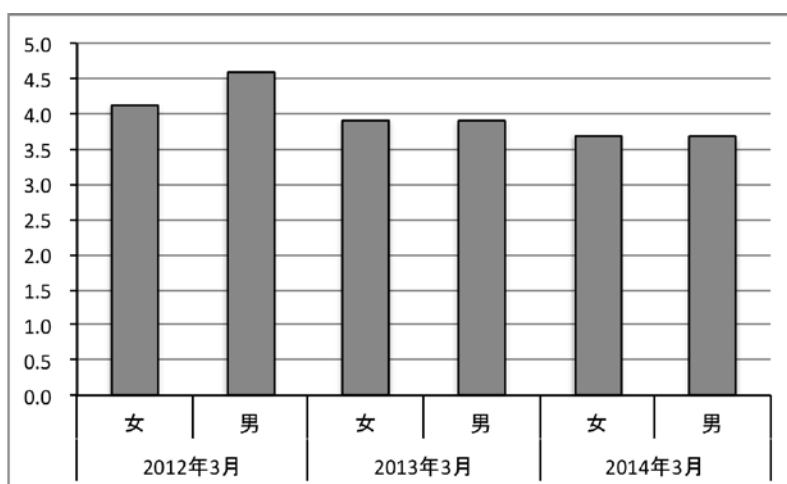


図11 情緒的領域における調査年×性別に関する評価値

4) 社会的領域について

表7に、調査年ごとの学年別・男女別平均値と標準偏差及び度数を示している。

このデータについて、調査年（3：2012年・2013年・2014年）×学年（3：3歳児・4歳児・5歳児）×性別（2：男・女）の3要因を独立変数として分散分析を行った（表8）。その結果、調査年、学年及び性別の各要因の主効果が有意であり、調査年と学年と性別により評定値が異なっていることが示されている。すなわち、2012年が最も高く、次に2013年、そして2014年が最も低く評定されていた。さらに、調査年×学年の交互作用が有意であった（図14）。その他の交互作用は有意ではなかった。

図14にみられるように、5歳児については2012年が2013年及び2014年よりも低く、2013年と2014年との差はみられなかった。4歳児については2013年が最も低く、次いで2012年、2014年が最も高かった。3歳児については2013年が最も高く、次いで2012年、2014年が最も評定値が低くなっていた。助けが必要なとき、他の子に助けを求める、他の子どもを援助したり守ったりする、けんかなどのとき自分の考えを相手にはっきりいうなどの項目から構成される社会的領域について、学年による対応傾向が調査年によって異なることを示している。

表7 社会的領域における調査年ごとの平均値、標準偏差及び度数

調査年月	学年	性別	平均値	標準偏差	度数
2012年3月	3歳児	女	3.342	0.632	30
		男	3.232	0.574	40
	4歳児	女	4.975	0.233	40
		男	3.970	0.321	26
	5歳児	女	4.915	0.207	55
		男	4.645	0.396	42
2013年3月	3歳児	女	2.505	0.170	24
		男	2.653	0.161	18
	4歳児	女	4.239	0.449	41
		男	4.672	0.551	50
	5歳児	女	4.803	0.174	35
		男	4.741	0.287	25
2014年3月	3歳児	女	2.183	0.687	33
		男	2.218	0.689	37
	4歳児	女	4.986	0.208	43
		男	4.538	0.313	26
	5歳児	女	4.898	0.260	41
		男	4.762	0.372	48

表8 社会的領域における調査年×学年×性別の分散分析結果

ソース	タイプ III 平方和	自由度	平均平方	F 値	有意確率
修正モデル	513.695 ^a	17	30.182	173.641	.000
切片	8954.113	1	8954.113	51513.580	.000
調査年月	12.192	2	6.096	35.722	.000
学年	437.379	2	218.690	1258.149	.000
性別	1.017	1	1.017	5.852	.016
調査年月 * 学年	32.089	4	8.022	46.153	.000
調査年月 * 性別	.597	2	0.299	1.718	.180
学年 * 性別	.840	2	0.420	2.416	.090
調査年月 * 学年 * 性別	.494	4	0.123	0.710	.585
誤差	110.549	636	0.174		
総和	10950.774	654			
修正総和	623.644	653			

a. R2 乗 = .823 (調整済み R2 乗 = .818)

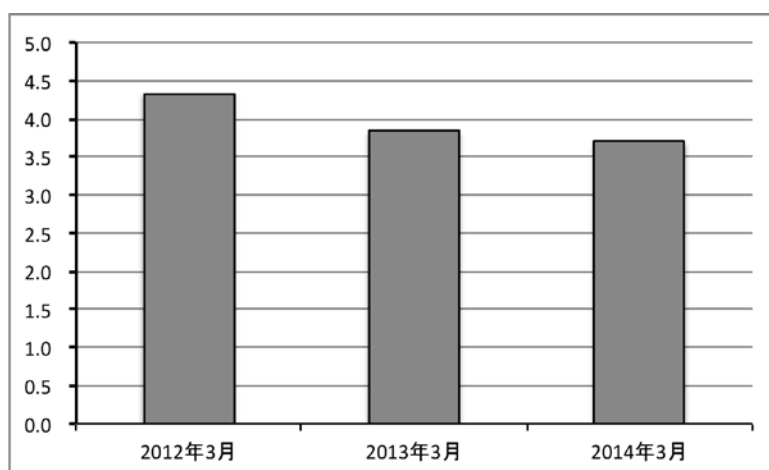


図12 社会的領域における調査年に関する評定値

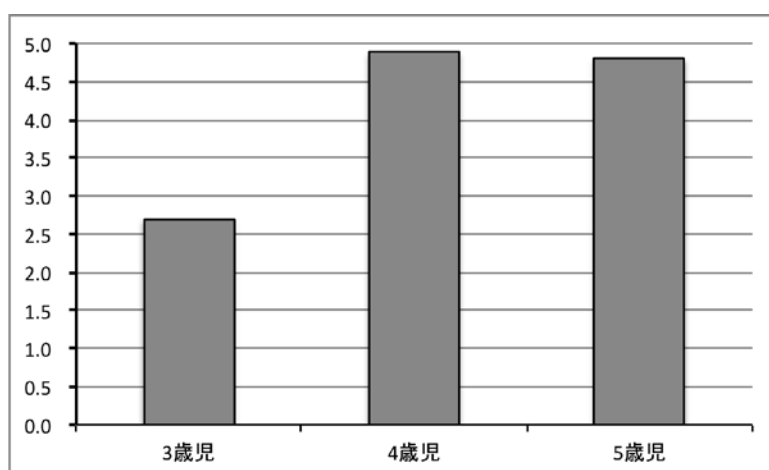


図13 社会的領域における学年に関する評定値

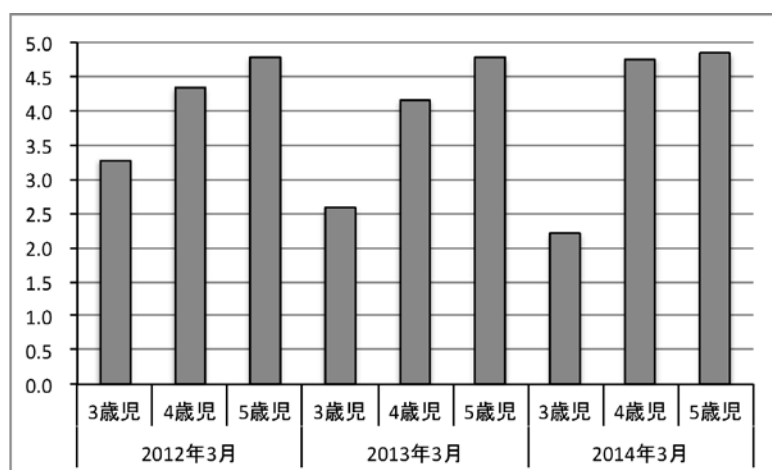


図 14 社会的領域における調査年×学年の交互作用に関する評定値

5) 生活習慣領域について

表 9 に、調査年ごとの学年別・男女別平均値と標準偏差及び度数を示している。このデータについて、調査年（3：2012年・2013年・2014年）×学年（3：3歳児・4歳児・5歳児）×性別（2：男・女）の3要因を独立変数として分散分析を行った（表 10）。その結果、調査年、学年及び性別の各要因の主効果が有意であり、調査年と学年と性別により評定値が異なっていることが示されている。さらに、調査年×学年の交互作用が有意であった。その他の交互作用は有意ではなかった。

調査年の主効果が有意であり、2012年より2013年、2013年より2014年の評定値が低かった（図 15）。また、学年の主効果については、3歳児より、4歳児や5歳児が高く、4歳児より5歳児が高く評定されていた（図 16）。

表 9 生活習慣領域における調査年ごとの平均値、標準偏差及び度数

調査年月	学年	性別	平均値	標準偏差	度数
2012年3月	3歳児	女	3.596	0.474	30
		男	3.432	0.497	40
	4歳児	女	4.353	0.228	40
		男	4.222	0.186	26
	5歳児	女	4.975	0.054	55
		男	4.938	0.088	42
2013年3月	3歳児	女	2.493	0.201	24
		男	2.487	0.147	18
	4歳児	女	4.395	0.569	41
		男	4.174	0.508	50
	5歳児	女	4.849	0.223	35
		男	4.852	0.175	25
2014年3月	3歳児	女	2.300	0.953	33
		男	2.202	0.882	37
	4歳児	女	4.189	0.284	43
		男	4.564	0.282	26
	5歳児	女	4.927	0.264	41
		男	4.831	0.376	48

表 10 生活習慣領域における調査年×学年×性別の分散分析結果

ソース	タイプ III 平方和	自由度	平均平方	F 値	有意確率
修正モデル	540.592 ^a	17	31.800	167.627	.000
切片	9437.275	1	9437.275	49747.416	.000
調査年月	29.630	2	14.815	78.096	.000
学年	456.854	2	228.427	1204.124	.000
性別	1.448	1	1.448	7.635	.006
調査年月 * 学年	36.117	4	9.029	47.597	.000
調査年月 * 性別	.039	2	0.020	0.103	.902
学年 * 性別	.390	2	0.195	1.027	.359
調査年月 * 学年 * 性別	.347	4	0.087	0.457	.767
誤差	120.652	636	0.190		
総和	11573.443	654			
修正総和	661.244	653			

a. R2 乗 = .818 (調整済み R2 乗 = .813)

調査年×性別の交互作用については、図 17 にみられるように、4 歳児、5 歳児については調査年による違いはみられなかったが、3 歳児については調査年による違いがみられた。すなわち、3 歳児については 2012 年よりも 2013 年、さらに 2014 年と評定値が低くなっていた。ソックス（短い靴下）をひとりではなく、ひとりで歯ブラシを動かして歯をみがく、自分から遊んだあとの自分の遊具を片づけるなどの項目から構成される社会的領域について、学年に対応した傾向が調査年によって異なることを示している。

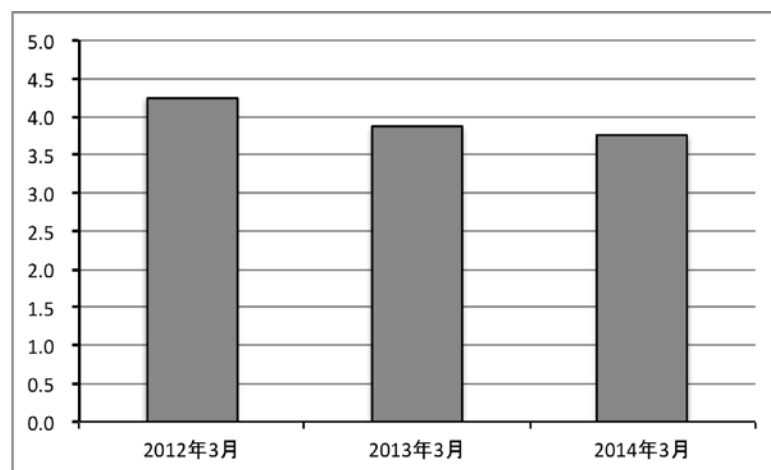


図 15 生活習慣領域における調査年に関する評定値

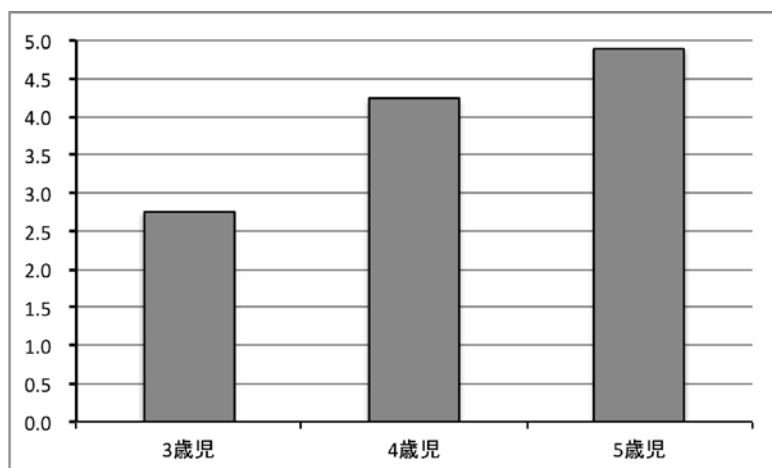


図 16 生活習慣領域における学年（に関する評価値

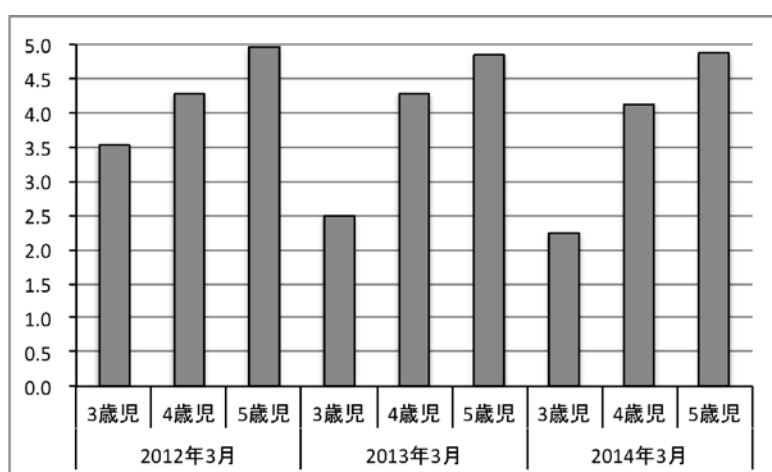


図 17 生活習慣領域における調査年×性別の交互作用に関する評価値

6) 遊び領域について

表 11 に、調査年ごとの学年別・男女別平均値と標準偏差及び度数を示している。

このデータについて、調査年（3：2012年・2013年・2014年）×学年（3：3歳児・4歳児・5歳児）×性別（2：男・女）の3要因を独立変数として分散分析を行った（表 12）。その結果、調査年の主効果、学年の主効果が及び調査年×学年の交互作用がみられた。その他の主効果及び交互作用は有意ではなかった。調査年の主効果については、2012年より2013年、2014年の評価値が低かった（図 18）。また、学年の主効果については、3歳児より4歳児、5歳児が高く、4歳児よりも5歳児が高く評価されていた（図 19）。

交互作用については、図 20 にみられるように、4歳児、5歳児については調査年による違いはみられなかったが、3歳児については調査年による違いがみられた。すなわち、3歳児については2012年よりも2013年、さらに2014年と評価値が低くなっていた。いっしょに遊ぼうと積極的に仲間に誘う、遊びに欲しいものがあるとき、順番を待ったり、貸したりして、何とかして達成しようとする、友達とおもしろいアイデアを出しあって遊ぶ、遊びのルール（陣地ではつかまらないなど）を理解して遊ぶなどの項目から構成される社会的領域について、学年に対応した傾向が調査年によって異なることを示している。

表 11 遊び領域における調査年ごとの平均値、標準偏差及び度数

調査年月	学年	性別	平均値	標準偏差	度数
2012年3月	3歳児	女	3.336	0.591	30
		男	3.312	0.599	40
	4歳児	女	4.193	0.257	40
		男	4.494	0.286	26
	5歳児	女	4.949	0.099	55
		男	4.878	0.223	42
2013年3月	3歳児	女	2.667	0.373	24
		男	2.693	0.319	18
	4歳児	女	4.359	0.541	41
		男	4.264	0.671	50
	5歳児	女	4.810	0.249	35
		男	4.822	0.211	25
2014年3月	3歳児	女	2.126	0.843	31
		男	2.192	0.730	36
	4歳児	女	4.125	0.221	43
		男	4.970	0.218	26
	5歳児	女	4.911	0.261	41
		男	4.778	0.382	48

表 12 遊び領域における調査年×学年×性別の分散分析結果

ソース	タイプ III 平方和	自由度	平均平方	F 値	有意確率
修正モデル	526.684 ^a	17	30.981	155.541	.000
切片	9203.593	1	9203.593	46206.345	.000
調査年月	18.779	2	9.390	47.141	.000
学年	449.418	2	224.709	1128.145	.000
性別	.281	1	0.281	1.413	.235
調査年月 * 学年	31.593	4	7.898	39.652	.000
調査年月 * 性別	.105	2	0.052	0.263	.769
学年 * 性別	.313	2	0.157	0.786	.456
調査年月 * 学年 * 性別	.286	4	0.072	0.359	.838
誤差	126.084	633	0.199		
総和	11320.619	651			
修正総和	652.768	650			

a. R2 乗 = .807 (調整済み R2 乗 = .802)

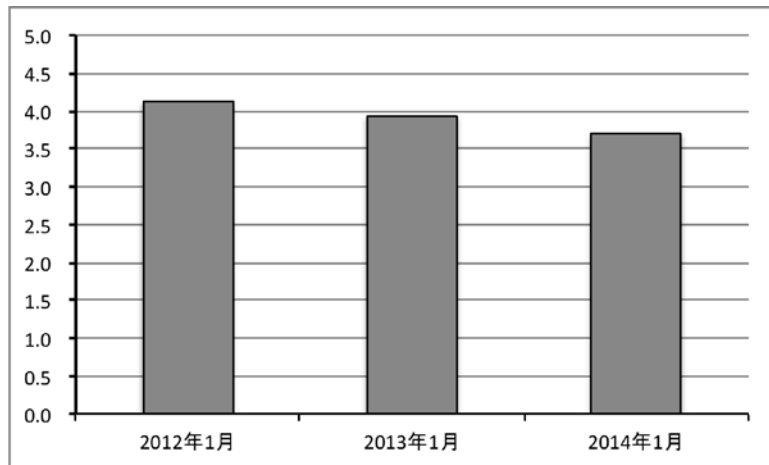


図 18 遊び領域における調査年に関する評価値

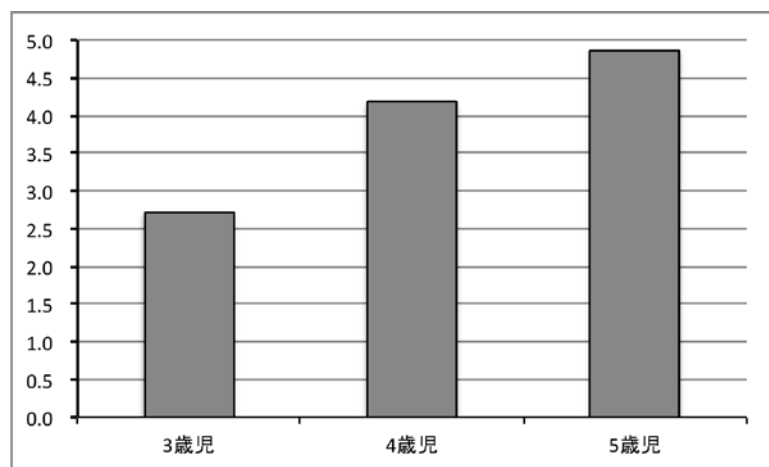


図 19 遊び領域における学年に関する評価値

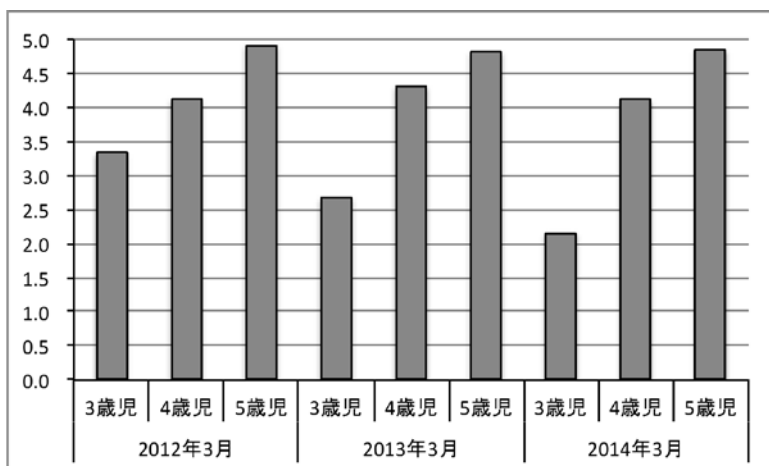


図 20 遊び領域における調査年×性別の交互作用に関する評価値

(4) 郡山D

1) 知的領域について

表1に、調査年ごとの学年別・男女別平均値と標準偏差及び度数を示している。

このデータについて、調査年（3：2012年・2013年・2014年）×学年（3：3歳児・4歳児・5歳児）×性別（2：男・女）の3要因を独立変数として分散分析を行った（表2）。その結果、学年、性別の各要因の主効果が有意であり、3歳児より4歳児、4歳児より5歳児と学年が上がるにつれて知的能力が高くなっていることを示している。性差については、女子が男子より高く評定されている。

調査年×学年の交互作用と調査年×性別の交互作用が有意であった（表2、図3）。3歳児では、2012年や2013年に比べて、2014年の評定値が低くなっていた。4歳児については、2012年より2013年、2014年が高く、5歳児については調査年による違いはみられなかった。

表1 知的領域における調査年ごとの平均値、標準偏差及び度数

調査年月	学年	性別	平均値	標準偏差	度数
2012年3月	3歳児	女	3.589	0.594	15
		男	3.212	0.393	17
	4歳児	女	3.341	0.386	21
		男	3.171	0.543	20
	5歳児	女	4.125	0.494	22
		男	4.121	0.539	34
2013年3月	3歳児	女	3.432	0.177	10
		男	3.398	0.474	19
	4歳児	女	3.976	0.448	25
		男	3.538	0.552	31
	5歳児	女	3.998	0.559	21
		男	3.709	0.586	22
2014年3月	3歳児	女	3.528	0.693	15
		男	2.480	0.577	12
	4歳児	女	4.285	0.494	17
		男	3.803	0.638	31
	5歳児	女	4.154	0.288	14
		男	3.888	0.657	16

表2 知的領域における調査年×学年×性別の分散分析結果

ソース	タイプ III 平方和	自由度	平均平方	F 値	有意確率
修正モデル	57.492 ^a	17	3.382	12.053	.000
切片	4362.267	1	4362.267	15546.946	.000
調査年月	.611	2	0.306	1.089	.338
学年	26.015	2	13.008	46.359	.000
性別	9.759	1	9.759	34.781	.000
調査年月 * 学年	16.964	4	4.241	15.115	.000
調査年月 * 性別	2.543	2	1.271	4.532	.011
学年 * 性別	1.166	2	0.583	2.077	.127
調査年月 * 学年 * 性別	2.581	4	0.645	2.300	.059
誤差	96.522	344	0.281		
総和	5115.584	362			
修正総和	154.014	361			

a. R2 乗 = .373 (調整済み R2 乗 = .342)

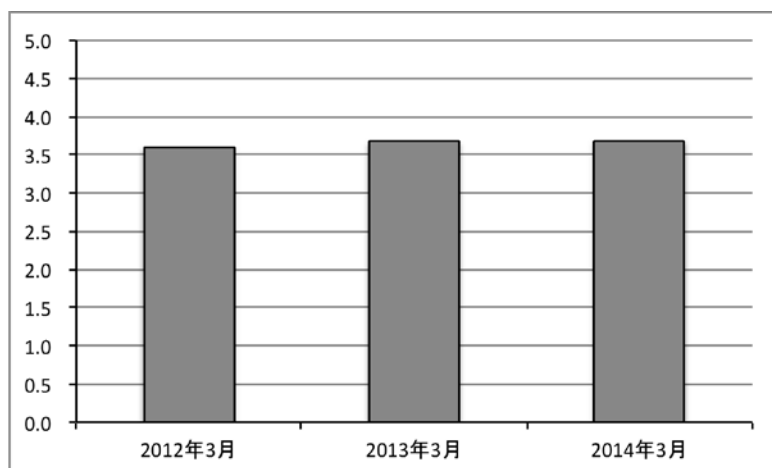


図1 知的領域における調査年の主効果に関する評価値

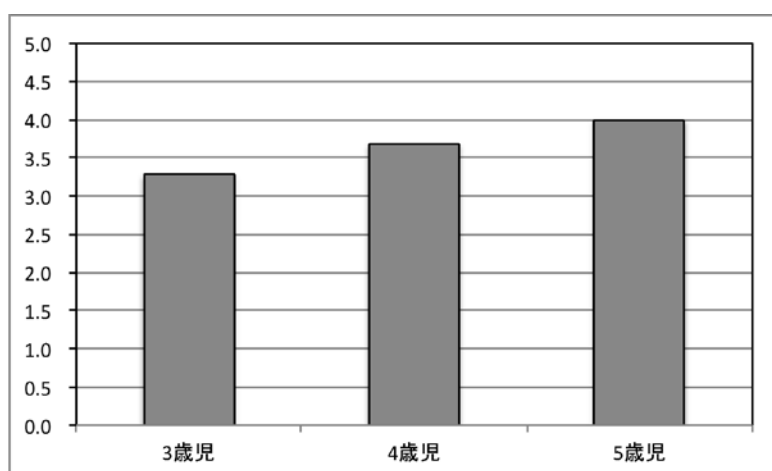


図2 知的領域における学年の主効果に関する評価値

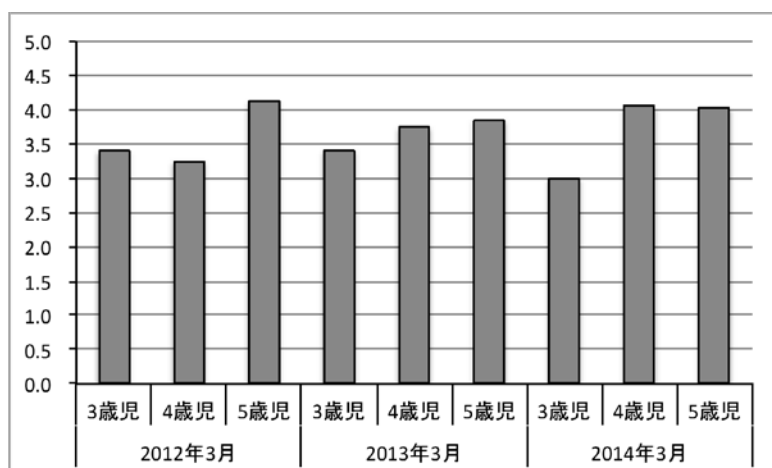


図3 知的領域における調査年×学年に関する評価値

また、調査年×性別の交互作用が有意であった（表2、図4）。2014年では、女子が男子よりも高く評価され、2012年と2013年では性別による違いはほとんどみられなかった（図4）。

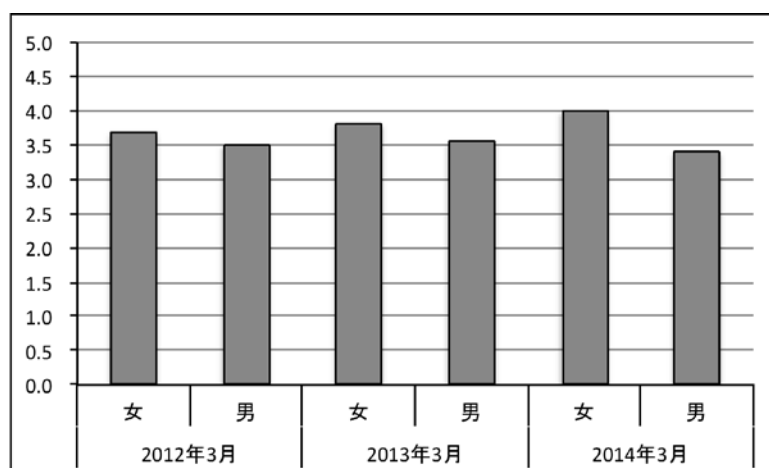


図4 知的領域における調査年×性別に関する評定値

2) 運動的領域について

表3に、調査年ごとの学年別・男女別平均値と標準偏差及び度数を示している。

このデータについて、調査年（3：2012年・2013年・2014年）×学年（3：3歳児・4歳児・5歳児）×性別（2：男・女）の3要因を独立変数として分散分析を行った（表4）。その結果、調査年、学年及び性別の各要因の主効果が有意であり、調査年と学年及び性別により評定値が異なっていることが示されている（順に図5、図6、図7）。2013年は2012年及び2014年より高く評定されていたが、2012年と2014年との間に評定値の差はみられなかった。3歳児より4歳児が高く、4歳児より5歳児が高く評定されていた。また、女子が男子よりも高く評定されていた。

表3 運動的領域における調査年ごとの平均値、標準偏差及び度数

調査年月	学年	性別	平均値	標準偏差	度数
2012年3月	3歳児	女	3.373	0.412	15
		男	2.871	0.384	17
	4歳児	女	3.150	0.547	21
		男	3.189	0.487	20
	5歳児	女	4.098	0.454	22
		男	4.027	0.621	34
2013年3月	3歳児	女	3.680	0.600	10
		男	3.355	0.354	19
	4歳児	女	3.810	0.405	25
		男	3.380	0.542	31
	5歳児	女	3.629	0.533	21
		男	3.573	0.506	22
2014年3月	3歳児	女	2.819	0.543	15
		男	2.117	0.646	12
	4歳児	女	4.124	0.451	17
		男	3.815	0.561	31
	5歳児	女	3.846	0.108	14
		男	3.688	0.465	16

表 4 運動的領域における調査年×学年×性別の分散分析結果

ソース	タイプ III 平方和	自由度	平均平方	F 値	有意確率
修正モデル	74.135	17	4.361	17.365	.000
切片	3947.133	1	3947.133	15717.687	.000
調査年月	1.633	2	0.816	3.250	.040
学年	30.188	2	15.094	60.105	.000
性別	6.389	1	6.389	25.441	.000
調査年月 * 学年	33.624	4	8.406	33.473	.000
調査年月 * 性別	.600	2	0.300	1.194	.304
学年 * 性別	2.143	2	1.072	4.267	.015
調査年月 * 学年 * 性別	1.259	4	0.315	1.254	.288
誤差	86.388	344	0.251		
総和	4691.050	362			
修正総和	160.523	361			

a. R2 乗 = .462 (調整済み R2 乗 = .435)

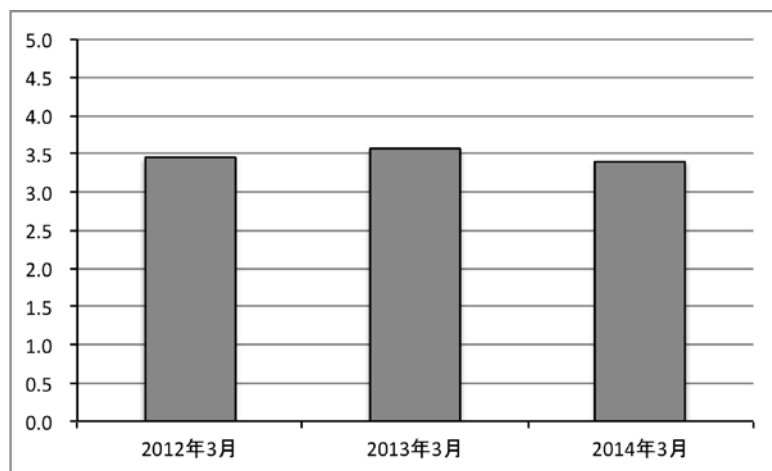


図 5 運動的領域における調査年の主効果に関する評定値

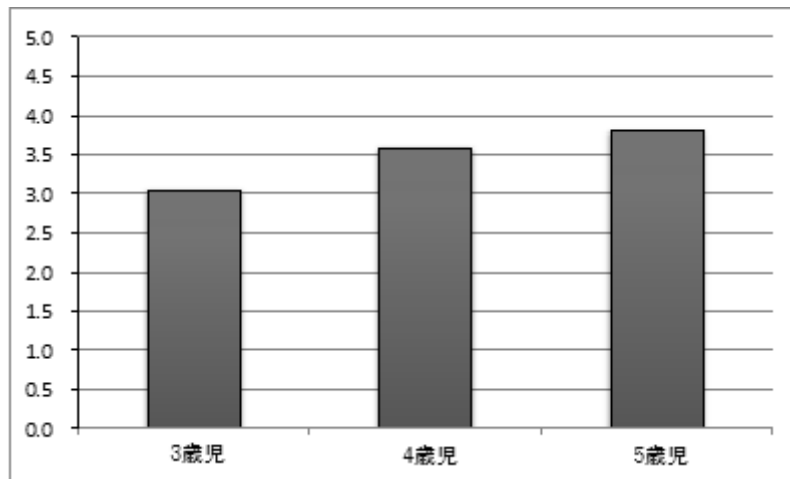


図 6 運動的領域における学年の主効果に関する評定値

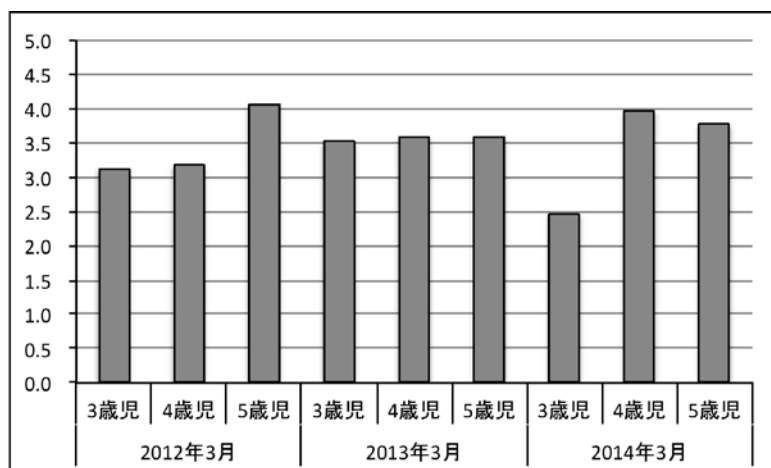


図7 運動的領域における調査年×学年に関する評定値

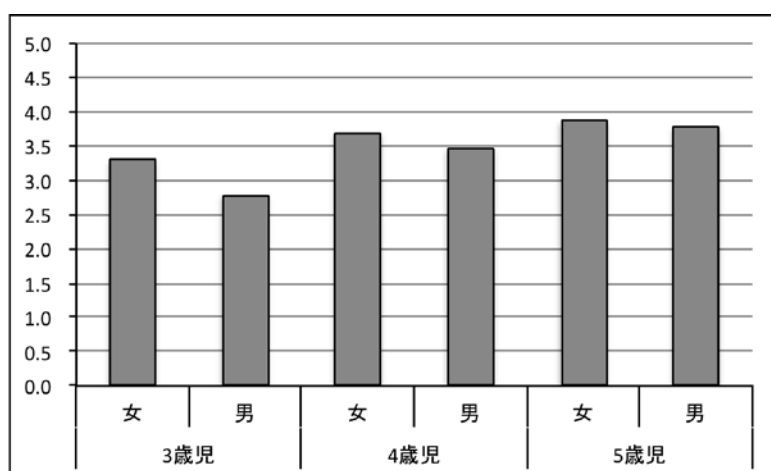


図8 運動的領域における学年×性別の主効果に関する評定値

さらに、調査年×学年の交互作用及び学年×性別の交互作用が有意であったが、その他の交互作用は有意ではなかった。調査年×学年の交互作用について、図7に示すように、3歳児の2014年の評定値は2012年や2013年よりも低かった。4歳児は2012年より2013年さらに2014年と、調査が進むにつれて高く評定されていた。学年×性別の交互作用について、すべての調査年で女子が男子よりも高く評定されていたが、特に2012年において女子が男子よりも高く評価される強い傾向がみられた。

学年×性別の交互作用については、3歳児では女子が男子よりも高くなっていたが、4歳児と5歳児ではその傾向が小さくなっていた（図8）。

3) 情緒的領域について

表5に、調査年ごとの学年別・男女別平均値と標準偏差及び度数を示している。

このデータについて、調査年（3：2012年・2013年・2014年）×学年（3：3歳児・4歳児・5歳児）×性別（2：男・女）の3要因を独立変数として分散分析を行った。その結果、学年と性別の各要因の主効果が有意であり、学年と性別により評定値が異なっていることが示されている（表6）。学年の主効果について、3歳児より4歳児及び5歳児が高く評定されていた（図9）。4歳児と5歳児の間には差がみられなかった。性別の主効果については、女子が男子より高く評定されていた。

さらに、調査年×学年の交互作用が有意であり（図10）、また調査年×学年×性別の交互作用が有意であった（図11、図12、図13）が、その他の交互作用は有意ではなかった。

表5 運動的領域における調査年×学年×性別の分散分析結果

調査年月	学年	性別	平均値	標準偏差	度数
2012年3月	3歳児	女	3.621	0.353	15
		男	3.256	0.283	17
	4歳児	女	3.263	0.460	21
		男	3.122	0.490	20
	5歳児	女	4.175	0.460	22
		男	4.021	0.396	34
2013年3月	3歳児	女	3.380	0.102	10
		男	3.411	0.247	19
	4歳児	女	4.021	0.549	25
		男	3.510	0.529	31
	5歳児	女	3.638	0.333	21
		男	3.431	0.354	22
2014年3月	3歳児	女	3.603	0.332	15
		男	2.920	0.607	12
	4歳児	女	4.108	0.401	17
		男	3.909	0.391	31
	5歳児	女	3.503	0.172	14
		男	3.295	0.209	16

表6 情緒的領域における調査年ごとの平均値、標準偏差及び度数

ソース	タイプ III 平方和	自由度	平均平方	F 値	有意確率
修正モデル	43.125 ^a	17	2.537	15.339	.000
切片	4157.554	1	4157.554	25139.800	.000
調査年月	.022	2	0.011	0.066	.936
学年	5.741	2	2.871	17.359	.000
性別	5.994	1	5.994	36.247	.000
調査年月 * 学年	27.368	4	6.842	41.372	.000
調査年月 * 性別	.331	2	0.165	1.000	.369
学年 * 性別	.298	2	0.149	0.901	.407
調査年月 * 学年 * 性別	2.500	4	0.625	3.779	.005
誤差	56.890	344	0.165		
総和	4846.885	362			
修正総和	100.015	361			

a. R2 乗 = .431 (調整済み R2 乗 = .403)

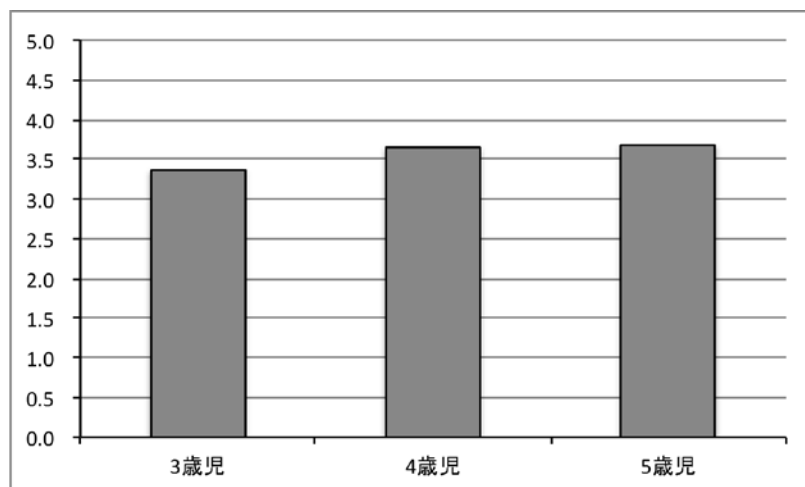


図9 情緒的領域における学年の主効果に関する評定値

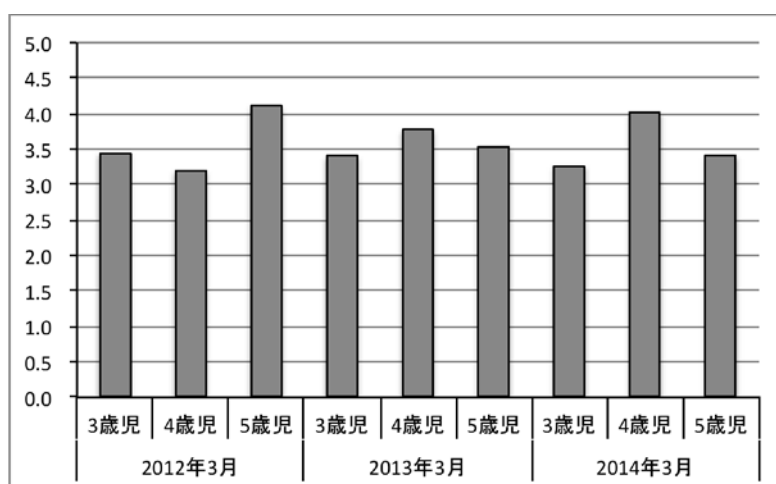


図10 情緒的領域における調査年×学年の交互作用に関する評定値

調査年×学年の交互作用が有意であり、図10にみられるように2012年では4歳児が最も低く、次いで3歳児、最も高く評定されているのが5歳児であった。2013年では4歳児が最も高く次いで5歳児、3歳児が最も低く評定されていた。2014年では2013年と同様の傾向であった。すなわち、4歳児が最も高く次いで5歳児、3歳児が最も低く評定されていた。学年ごとの調査年による違いについては、3歳児では2012年と2013年より2014年の評定値が低くなっていた。4歳児については、2012年より2013年、2013年より2014年と次第に高く評定されていた。5歳児については、4歳児と反対に、2012年が最も高く、2013年、2014年と次第に低くなっていた。

2次の交互作用については、図11、図12、図13にみられるように、2012年においては3歳児は女子が男子より高く、4歳児及び5歳児については女子が男子よりわずかに高くなっていたが、2013年において3歳児の性別による差はみられなくなり、4歳児では女子が男子より高く、5歳児においては女子がわずかに高くなっていた。2014年において3歳児の女子と男子の間の差（女子>男子）は大きいですが、4歳児、5歳児については3歳児ほど性差はみられないことが示された。全体として女子は男子に比べて、話を聞きながら想像して楽しむ、自分でよくしたいのにできないとくやしがる、積み木を積んでもう少しでできあがるところでくずれるとくやしがるなどの行動が多いと評定されている。

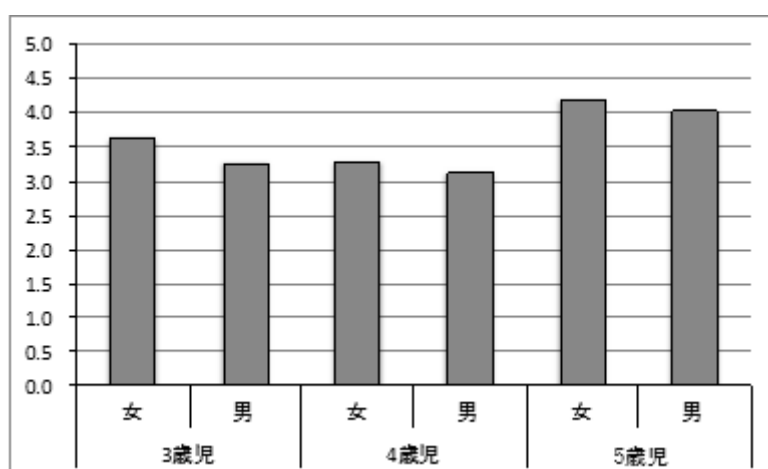


図11 2012年の情緒的領域における学年×性別の交互作用に関する評定値

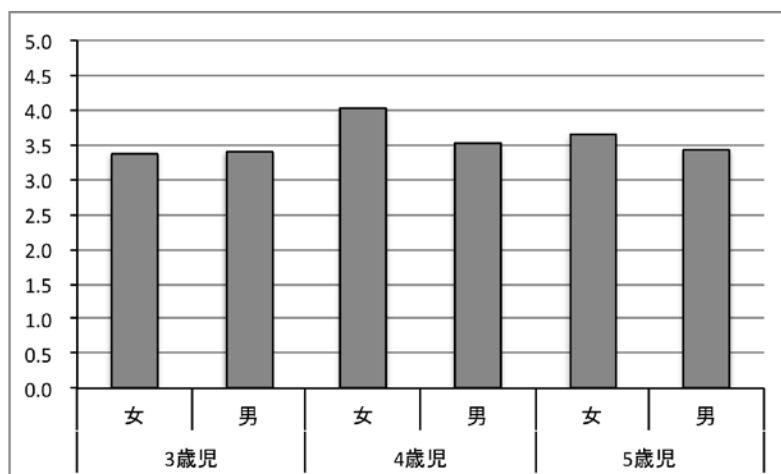


図 12 2013 年の情緒的領域における学年×性別の交互作用に関する評定値

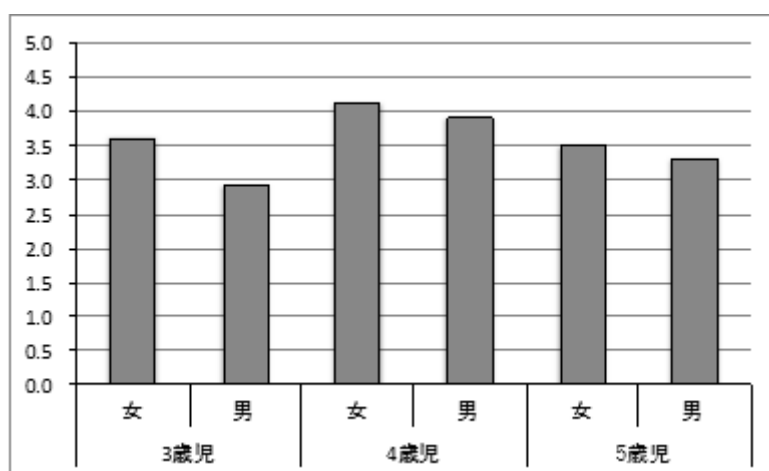


図 13 2014 年の情緒的領域における学年×性別の交互作用に関する評定値

4) 社会的領域について

表 7 に、調査年ごとの学年別・男女別平均値と標準偏差及び度数を示している。このデータについて、調査年（3：2012 年・2013 年・2014 年）×学年（3：3 歳児・4 歳児・5 歳児）×性別（2：男・女）の 3 要因を独立変数として分散分析を行った結果、表 8 に示すように学年の主効果及び性別の主効果が有意であった。また、調査年×学年の交互作用が有意であった。（図 15）。

表7 社会的領域における調査年ごとの平均値、標準偏差及び度数

調査年月	学年	性別	平均値	標準偏差	度数
2012年3月	3歳児	女	3.603	0.304	15
		男	3.369	0.354	17
	4歳児	女	3.112	0.556	21
		男	3.000	0.452	20
	5歳児	女	4.035	0.528	22
		男	4.085	0.451	34
2013年3月	3歳児	女	3.378	0.156	10
		男	3.446	0.312	19
	4歳児	女	3.822	0.442	25
		男	3.463	0.571	31
	5歳児	女	3.573	0.430	21
		男	3.462	0.400	22
2014年3月	3歳児	女	3.539	0.399	15
		男	3.110	0.884	12
	4歳児	女	4.038	0.244	17
		男	3.750	0.496	31
	5歳児	女	3.700	0.232	14
		男	3.330	0.354	16

学年の主効果については、図14に示すように、学年が上がると共に社会的領域の評定値も高くなっていった。また、調査年×学年の交互作用については、図15にみられるように、2012年は4歳児が3歳児、5歳児よりも低く評定されているが、2013年、2014年は4歳児が3歳児や5歳児よりもいくらか高く評定されており、調査年と学年との一貫した関係はみられなかった。

表8 社会的領域における調査年×学年×性別の分散分析結果

ソース	タイプⅢ平方和	自由度	平均平方	F値	有意確率
修正モデル	36.556 ^a	17	2.150	10.395	.000
切片	4109.482	1	4109.482	19864.604	.000
調査年月	.165	2	0.083	0.399	.671
学年	4.323	2	2.161	10.447	.000
性別	3.213	1	3.213	15.533	.000
調査年月 * 学年	24.600	4	6.150	29.728	.000
調査年月 * 性別	1.053	2	0.527	2.546	.080
学年 * 性別	.191	2	0.096	0.463	.630
調査年月 * 学年 * 性別	1.107	4	0.277	1.338	.255
誤差	71.165	344	0.207		
総和	4762.282	362			
修正総和	107.721	361			

a. R2 乗 = .339 (調整済み R2 乗 = .307)

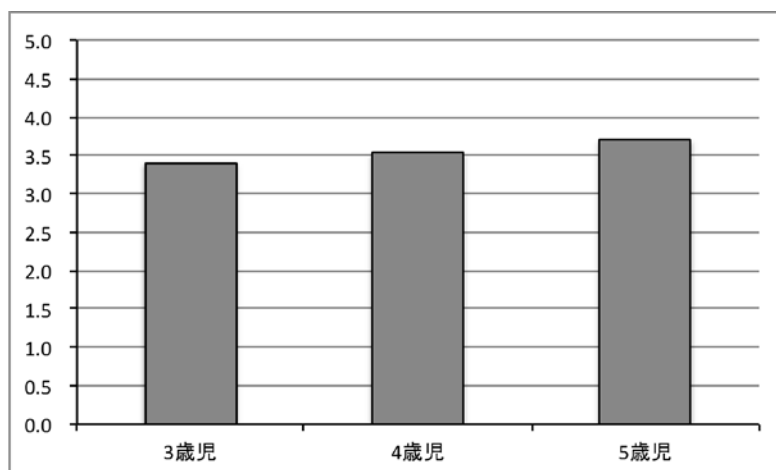


図 14 社会的領域における学年の主効果に関する評定

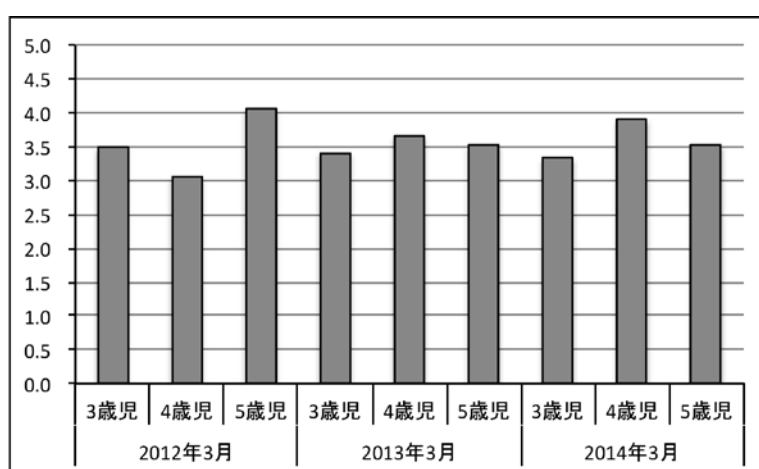


図 15 社会的領域における調査年×学年の交互作用に関する評定値

5) 生活習慣領域について

表 9 に、調査年ごとの学年別・男女別平均値と標準偏差及び度数を示している。

表 9 生活習慣領域における調査年ごとの平均値、標準偏差及び度数

調査年月	学年	性別	平均値	標準偏差	度数
2012年3月	3歳児	女	3.431	0.386	15
		男	3.356	0.170	17
	4歳児	女	3.488	0.335	21
		男	3.426	0.421	20
	5歳児	女	4.160	0.475	22
		男	4.071	0.440	34
2013年3月	3歳児	女	3.718	0.138	10
		男	3.854	0.374	19
	4歳児	女	3.936	0.484	25
		男	3.529	0.418	31
	5歳児	女	3.882	0.303	21
		男	3.866	0.566	22
2014年3月	3歳児	女	3.525	0.516	15
		男	3.446	0.652	12
	4歳児	女	4.367	0.436	17
		男	4.034	0.520	31
	5歳児	女	4.008	0.100	14
		男	3.971	0.344	16

表 10 生活習慣領域における調査年×学年×性別の分散分析結果

ソース	タイプ III 平方和	自由度	平均平方	F 値	有意確率
修正モデル	29.517 ^a	17	1.736	9.507	.000
切片	4676.051	1	4676.051	25603.378	.000
調査年月	3.091	2	1.546	8.463	.000
学年	9.479	2	4.740	25.951	.000
性別	.935	1	0.935	5.120	.024
調査年月 * 学年	11.997	4	2.999	16.422	.000
調査年月 * 性別	.077	2	0.039	0.212	.809
学年 * 性別	1.172	2	0.586	3.208	.042
調査年月 * 学年 * 性別	.895	4	0.224	1.225	.300
誤差	62.826	344	0.183		
総和	5339.727	362			
修正総和	92.344	361			

a. R2 乗 = .320 (調整済み R2 乗 = .286)

このデータについて、調査年（3：2012年・2013年・2014年）×学年（3：3歳児・4歳児・5歳児）×性別（2：男・女）の3要因を独立変数として分散分析を行った（表10）。その結果、調査年、学年及び性別の各要因の主効果が有意であり、調査年と学年と性別により評定値が異なっていることが明らかになった。調査年の主効果について（図16）、2012年より2013年及び2014年の評定値が高かった。2013年と2014年との間に評定値の差はみられなかった。学年の主効果について（図17）、3歳児より4歳児、4歳児より5歳児の評定値が高かった。

さらに、調査年×学年の交互作用、学年×性別の交互作用が有意であった。調査年×学年の交互作用については、図18に示すように、調査年によって生活習慣領域の評定値に違いがみられ、2012年では3歳児、4歳児よりも5歳児が高く、2013年は学年差がほとんどみられず、2014年では3歳児より4歳児、5歳児が高く評定されていた。

また、学年×性差の交互作用については（図19）、3歳児と5歳児に性差はみられないが、4歳児では女子が男子よりも高く評定されていた。

その他の主効果及び交互作用は有意ではなかった。

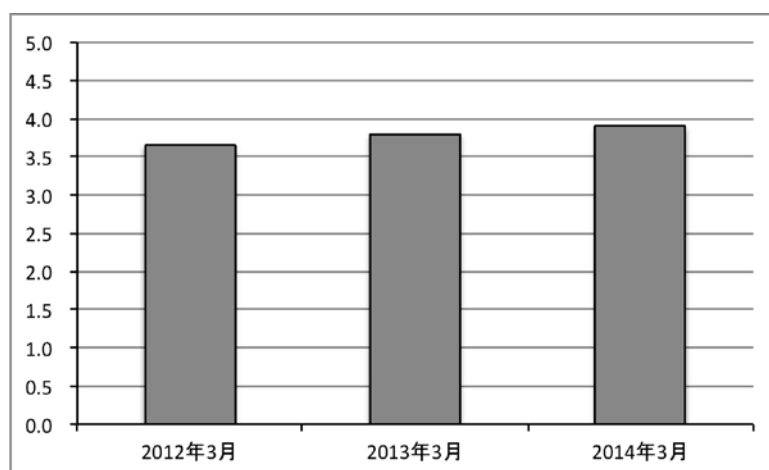


図 16 生活習慣領域における調査年の主効果に関する評定値

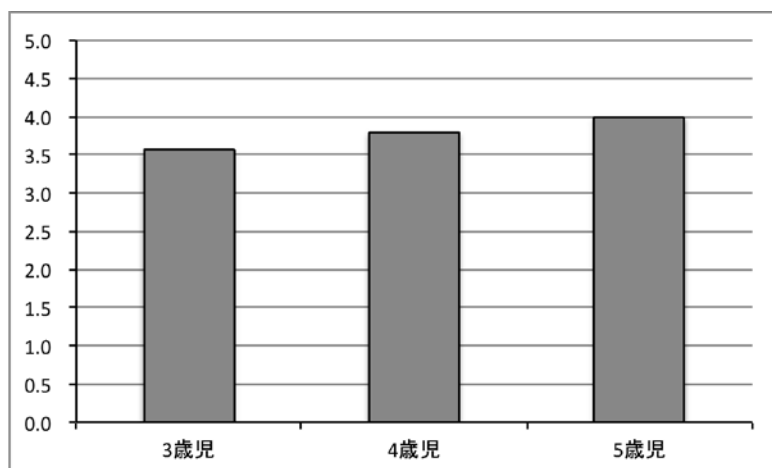


図 17 生活習慣領域における学年の主効果に関する評価値

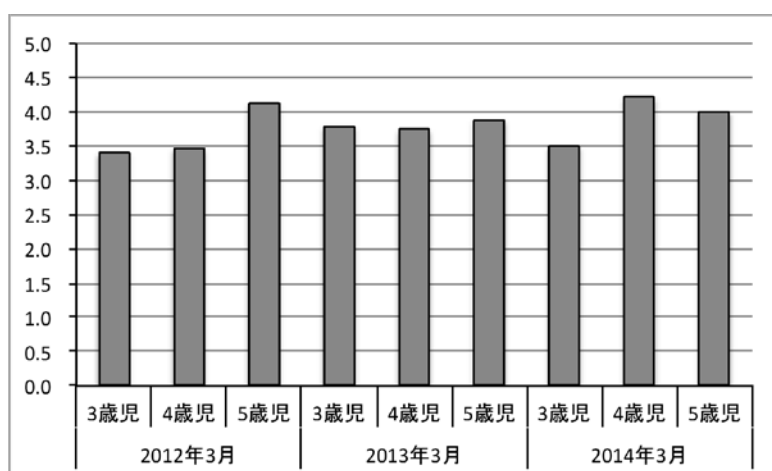


図 18 生活習慣領域における調査年×学年の交互作用に関する評価値

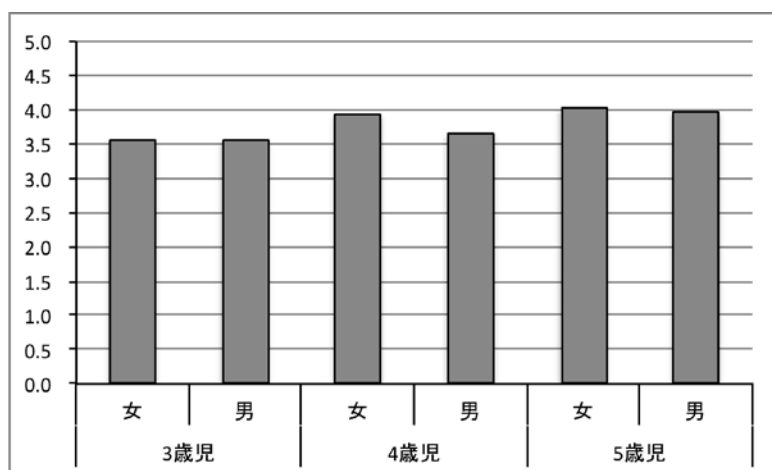


図 19 生活習慣領域における学年×性別の交互作用に関する評価値

6) 遊び領域について

表 11 に、調査年ごとの学年別・男女別平均値と標準偏差及び度数を示している。

このデータについて、調査年（3：2012年・2013年・2014年）×学年（3：3歳児・4歳児・5歳児）×性別（2：男・女）の3要因を独立変数として分散分析を行った（表 12）。その結果、性別の主効果が有意であり、女子は男子よりも高く評価されていた。調査年×学年の交互作用（図 20）及び調査年×性別の交互作用（図 21）が有意であった。2012年では

4歳児の評定値が最も低く、反対に、2013年と2014年では4歳児の学年より評定値が高くなっていた。調査年×性別については、2012年では性差はみられないが、2013年と2014年では男子に比べて女子の評定値が高くなっていた。

遊び領域の項目は、いっしょに遊ぼうと積極的に仲間に誘う、遊びに欲しいものがあるとき、順番を待ったり、貸したりして、何とかして達成しようとする、友達とおもしろいアイデアを出しあって遊ぶ、遊びのルール（陣地ではつかまらないなど）を理解して遊ぶなどであった。

その他の主効果及び交互作用は有意ではなかった。

表 11 遊び領域における調査年ごとの平均値、標準偏差及び度数

調査年月	学年	性別	平均値	標準偏差	度数
2012年3月	3歳児	女	3.708	0.313	15
		男	3.618	0.291	17
	4歳児	女	3.152	0.489	21
		男	3.200	0.653	20
	5歳児	女	3.864	0.501	22
		男	3.888	0.464	34
2013年3月	3歳児	女	3.463	0.162	10
		男	3.484	0.267	19
	4歳児	女	3.950	0.461	25
		男	3.635	0.434	31
	5歳児	女	3.560	0.403	21
		男	3.344	0.522	22
2014年3月	3歳児	女	3.654	0.279	15
		男	2.964	0.849	12
	4歳児	女	3.908	0.333	17
		男	3.633	0.506	31
	5歳児	女	3.661	0.176	14
		男	3.406	0.258	16

表 12 遊び領域における調査年×学年×性別の分散分析結果

ソース	タイプ III 平方和	自由度	平均平方	F 値	有意確率
修正モデル	24.154 ^a	17	1.421	7.066	.000
切片	4144.981	1	4144.981	20612.553	.000
調査年月	.080	2	0.040	0.199	.819
学年	.971	2	0.486	2.415	.091
性別	3.083	1	3.083	15.333	.000
調査年月 * 学年	17.324	4	4.331	21.538	.000
調査年月 * 性別	2.150	2	1.075	5.345	.005
学年 * 性別	.138	2	0.069	0.343	.710
調査年月 * 学年 * 性別	1.357	4	0.339	1.687	.152
誤差	69.175	344	0.201		
総和	4763.633	362			
修正総和	93.329	361			

a. R2 乗 = .259 (調整済み R2 乗 = .222)

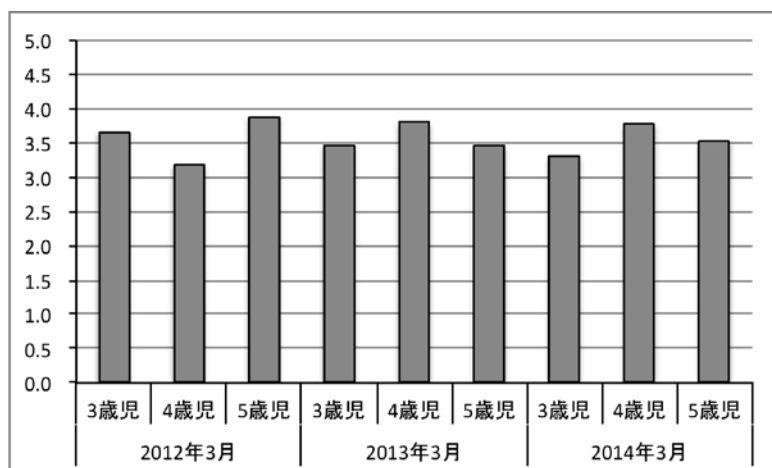


図 20 生活習慣領域における調査年×学年の交互作用に関する評価値

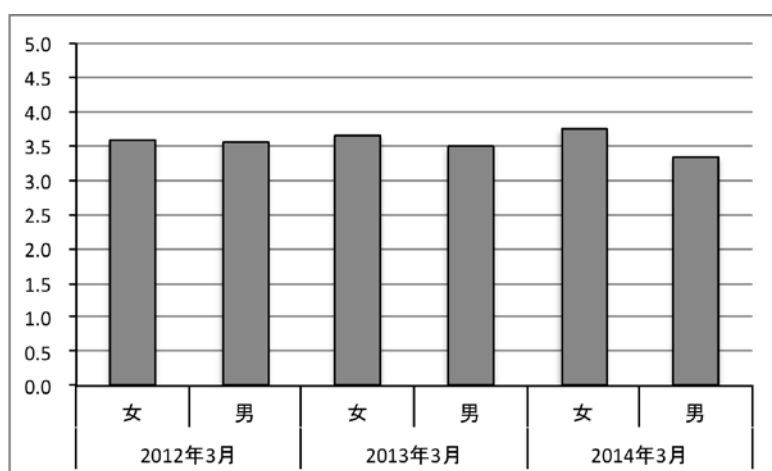


図 21 生活習慣領域における調査年×性別の交互作用に関する評価値

(5) 福島 A

1) 知的領域について

表1に、調査年ごとの学年別・男女別平均値と標準偏差及び度数を示した。

このデータについて、調査年（3：2012年・2013年・2014年）×学年（3：3歳児・4歳児・5歳児）×性別（2：男・女）の3要因を独立変数として分散分析を行った（表2）。

その結果、調査年、学年及び性別の各要因の主効果が有意であった（表2）。調査年の主効果については、2013年が最も高く、次いで2014年、そして2012年の順であった（図1）。また、学年の主効果については、3歳児より4歳児、4歳児より5歳児と学年が上がるにつれて高く評定されていた（図2）。

調査年×学年の交互作用及び調査年×学年×性別の交互作用に有意傾向がみられた（表2）。

表1 知的領域における調査年ごとの平均値、標準偏差及び度数

調査年月	学年	性別	平均値	標準偏差	度数
2012年3月	3歳児	女	2.876	0.625	17
		男	3.126	0.568	19
	4歳児	女	3.863	0.667	21
		男	3.550	0.479	20
	5歳児	女	4.364	0.456	27
		男	3.951	0.718	29
2013年3月	3歳児	女	3.510	0.762	16
		男	3.059	0.650	17
	4歳児	女	3.710	0.649	30
		男	3.686	0.730	26
	5歳児	女	4.635	0.367	22
		男	4.488	0.420	21
2014年3月	3歳児	女	3.046	0.836	13
		男	2.938	0.791	24
	4歳児	女	3.906	0.812	33
		男	3.677	0.755	29
	5歳児	女	4.290	0.389	28
		男	4.228	0.409	24

表2 知的領域における調査年×学年×性別の分散分析結果

ソース	タイプIII平方和	自由度	平均平方	F値	有意確率
修正モデル	107.167 ^a	17	6.304	15.656	.000
切片	5409.100	1	5409.100	13433.663	.000
調査年月	3.505	2	1.753	4.352	.013
学年	93.061	2	46.530	115.559	.000
性別	2.706	1	2.706	6.721	.010
調査年月 * 学年	3.258	4	0.815	2.023	.090
調査年月 * 性別	.094	2	0.047	0.116	.890
学年 * 性別	.177	2	0.089	0.220	.802
調査年月 * 学年 * 性別	3.509	4	0.877	2.178	.071
誤差	160.256	398	0.403		
総和	6204.812	416			
修正総和	267.423	415			

a. R2 乗 = .401 (調整済み R2 乗 = .375)

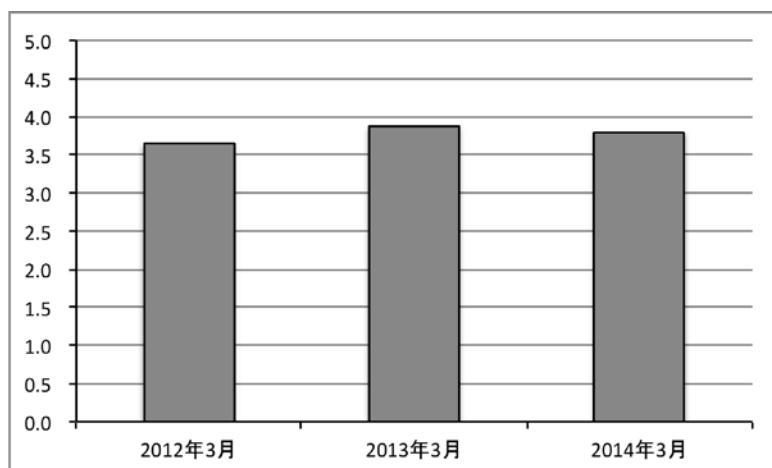


図1 知的領域における調査年の主効果に関する評定値

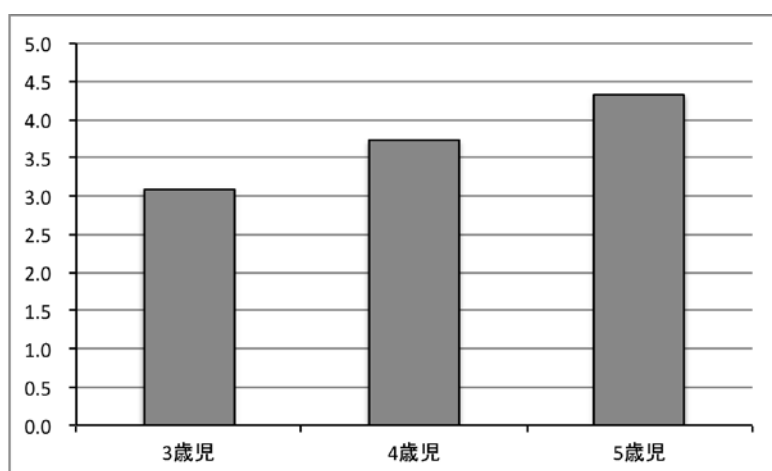


図2 知的領域における学年の主効果に関する評定値

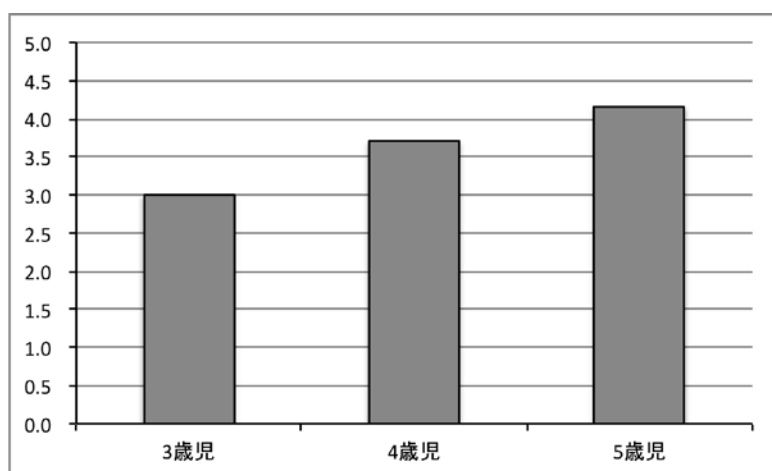


図3 知的領域の2012年における学年に関する評定値

有意傾向がみられた2次の交互作用については、3歳児の性差が2012年、2013年、2014年において違いがみられる(図6)。すなわち、3歳児については、男子は2012年、2013年、2014年の間に評価値に違いはみられないが、女子は2013年の評価値が他の調査年よりも高い。4歳児については性別及び調査年による違いはみられない(図7)。5歳児については、男子は2012年が他の調査年よりも低い、女子は調査年による評価値の差ほとんどみられな

い（図6）。性別による評定値の差は3歳児では2013年で女子が男子より高いが、5歳児では2012年に女子が男子より高く、4歳児では年度による違いはほとんどみられなかった。

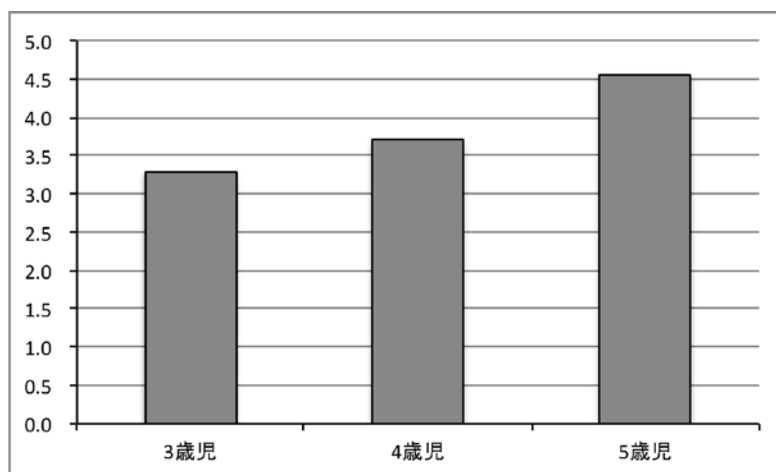


図4 知的領域の2013年における学年に関する評定値

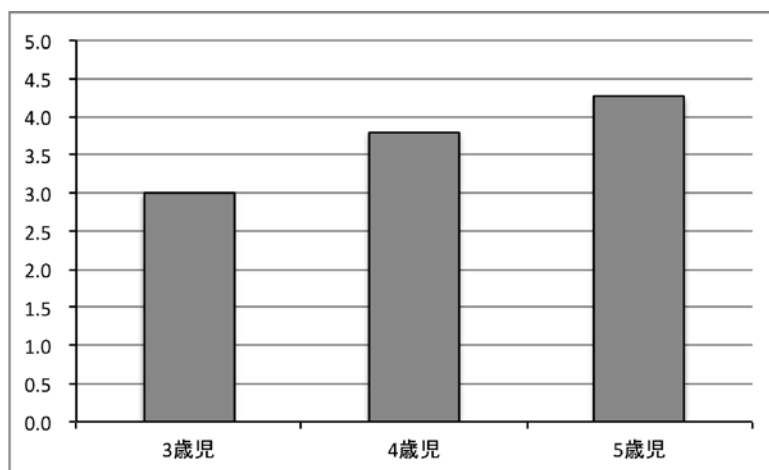


図5 知的領域の2014年における学年に関する評定値

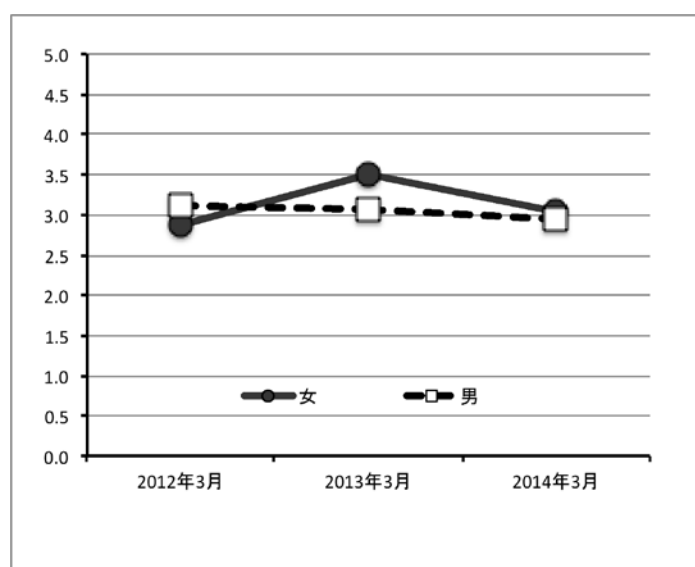


図6 3歳児の調査年×性別の評定値

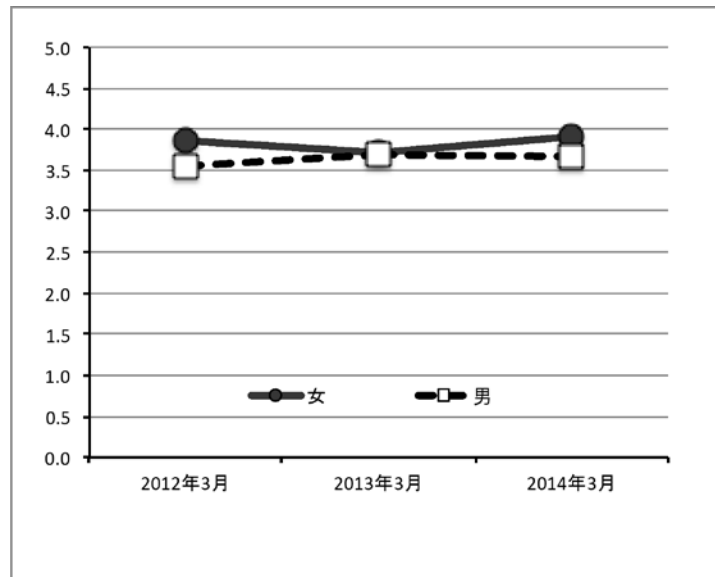


図7 4歳児の調査年×性別の評定値

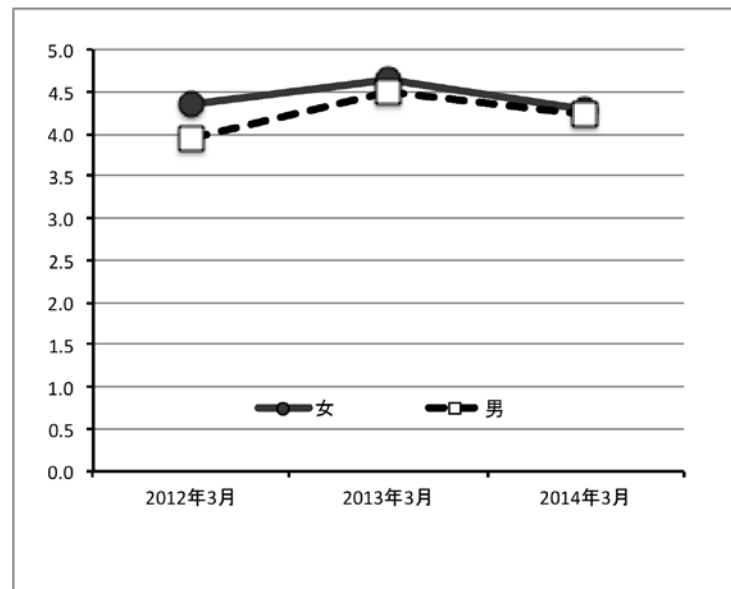


図8 5歳児の調査年×性別の評定値

2) 運動領域について

表3に、調査年ごとの学年別・男女別平均値と標準偏差及び度数を示している。

このデータについて、調査年（3：2012年・2013年・2014年）×学年（3：3歳児・4歳児・5歳児）×性別（2：男・女）の3要因を独立変数として分散分析を行った（表4）。その結果、調査年、学年の各要因の主効果が有意であり、調査年と学年により評定値が異なっていることが示されている。調査年の主効果では、2012年及び2013年の評定値は2014年よりも高くなっていた（図9）。2012年と2013年の間に差はみられなかった。また、学年の主効果では、3歳児より4歳児、4歳児より5歳児の評定値が高くなっていた（図10）。

さらに、調査年×学年の交互作用が有意であったが、2012年と2013年との間に差はみられず、2012年と2013年より2014年の評定値は低くなっていた。2012年及び2013年においては3歳児より4歳児、4歳児より5歳児の評定値が低くなっていたが、2014年では3歳児より4歳児、5歳児が高く評定されていた（図11）。

表3 運動領域における調査年ごとの平均値、標準偏差及び度数

調査年月	学年	性別	平均値	標準偏差	度数
2012年3月	3歳児	女	3.165	0.560	17
		男	3.273	0.709	19
	4歳児	女	4.052	0.411	21
		男	3.668	0.322	20
	5歳児	女	4.283	0.394	27
		男	4.053	0.459	29
2013年3月	3歳児	女	3.234	0.522	16
		男	3.211	0.749	17
	4歳児	女	3.702	0.524	30
		男	3.669	0.542	26
	5歳児	女	4.430	0.394	22
		男	4.364	0.480	21
2014年3月	3歳児	女	3.004	0.623	13
		男	2.988	0.426	24
	4歳児	女	3.983	0.603	33
		男	3.764	0.770	29
	5歳児	女	3.953	0.450	28
		男	3.894	0.346	24

表4 運動領域における調査年×学年×性別の分散分析結果

ソース	タイプⅢ 平方和	自由度	平均平方	F 値	有意確率
修正モデル	74.611a	17	4.389	15.758	.000
切片	5374.626	1	5374.626	19297.489	.000
調査年月	2.350	2	1.175	4.219	.015
学年	63.068	2	31.534	113.223	.000
性別	1.026	1	1.026	3.683	.056
調査年月 * 学年	5.992	4	1.498	5.379	.000
調査年月 * 性別	.263	2	0.131	0.472	.624
学年 * 性別	.846	2	0.423	1.520	.220
調査年月 * 学年 * 性別	.676	4	0.169	0.607	.658
誤差	110.849	398	0.279		
総和	6073.255	416			
修正総和	185.460	415			

a. R2 乗 = .402 (調整済み R2 乗 = .377)

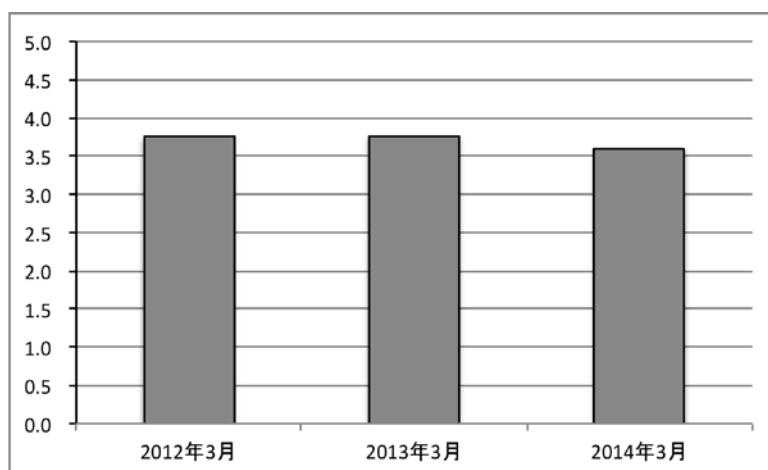


図9 運動領域における調査年に関する評定値

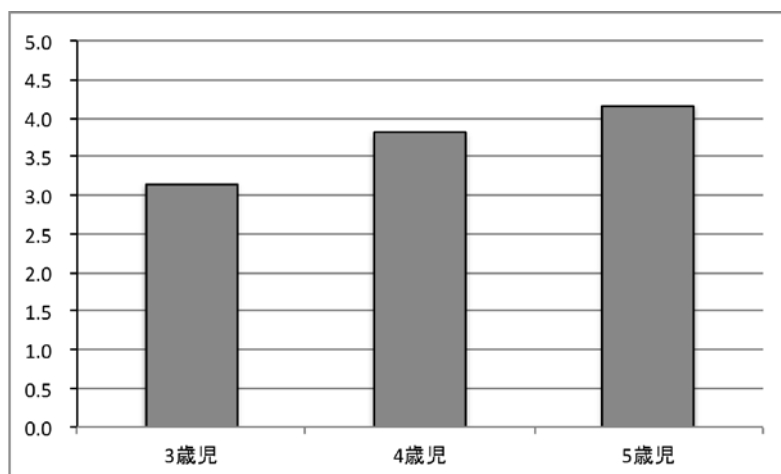


図 10 運動領域における学年に関する評定値

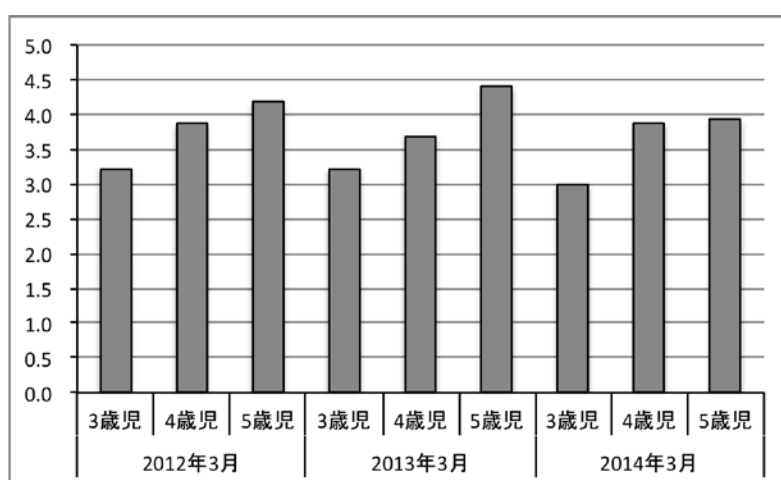


図 11 運動領域における調査年×学年に関する評定値

3) 情緒的領域について

表 5 に、調査年ごとの学年別・男女別平均値と標準偏差及び度数を示している。

このデータについて、調査年（3：2012年・2013年・2014年）×学年（3：3歳児・4歳児・5歳児）×性別（2：男・女）の3要因を独立変数として分散分析を行った（表6）。

表5 情緒的領域における調査年ごとの平均値、標準偏差及び度数

調査年月	学年	性別	平均値	標準偏差	度数
2012年3月	3歳児	女	3.193	0.564	17
		男	2.934	0.495	19
	4歳児	女	3.744	0.548	21
		男	3.606	0.487	20
	5歳児	女	4.336	0.512	27
		男	3.957	0.585	29
2013年3月	3歳児	女	3.625	0.330	16
		男	3.485	0.553	17
	4歳児	女	3.558	0.450	30
		男	3.485	0.504	26
	5歳児	女	4.405	0.335	22
		男	4.284	0.466	21
2014年3月	3歳児	女	2.923	1.295	13
		男	2.887	1.035	24
	4歳児	女	4.038	0.488	33
		男	3.860	0.713	29
	5歳児	女	3.898	0.268	28
		男	3.807	0.402	24

表6 情緒的領域における調査年×学年×性別の分散分析結果

ソース	タイプ III 平方和	自由度	平均平方	F 値	有意確率
修正モデル	78.820 ^a	17	4.636469664	13.76266166	.000
切片	5267.453	1	5267.453	15635.640	.000
調査年月	3.987	2	1.993	5.917	.003
学年	53.651	2	26.825	79.627	.000
性別	2.424	1	2.424	7.196	.008
調査年月 * 学年	17.454	4	4.363	12.952	.000
調査年月 * 性別	.498	2	.249	.739	.478
学年 * 性別	.093	2	.046	.137	.872
調査年月 * 学年 * 性別	.414	4	.104	.307	.873
誤差	134.081	398	0.337		
総和	5965.841	416			
修正総和	212.901	415			

^a.370 (調整済み R2 乗 = .343)

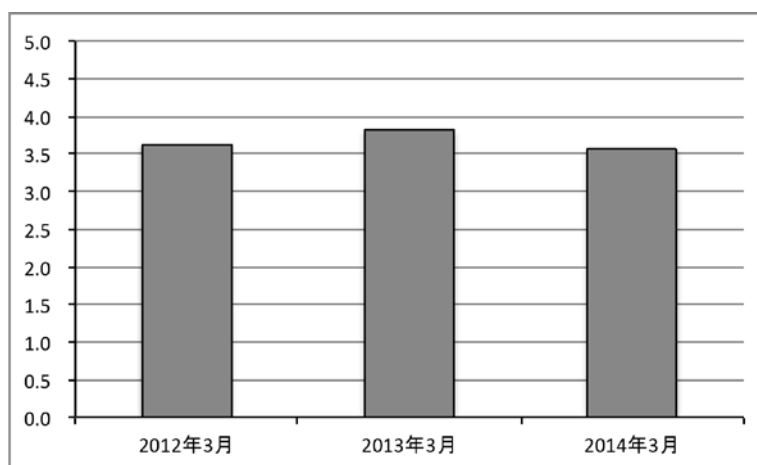


図12 情緒的領域における調査年に関する評定値

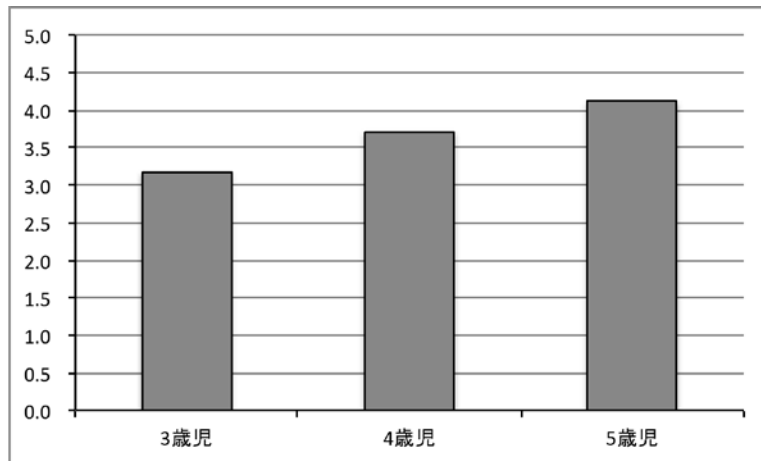


図 13 情緒的領域における学年に関する評価値

その結果、調査年、学年及び性別の各要因の主効果が有意であり、調査年、学年及び性別により評価値が異なっていることが示されている。性別の主効果については、女子は男子より高く評価されている。また、調査年の主効果については、2013年が最も高く、次いで2012年、2014年の順であった（図 12）。また、学年の主効果については、3歳児より4歳児、4歳児より5歳児が高くなっており、学年が上がると共に情緒的領域が発達していることを示している（図 13）。

さらに、調査年×学年の交互作用が有意であった。図 14 にみられるように、2012年においては学年が上がるにつれて評価値も高くなっているが、2013年においては3歳児と4歳児の間には差はみられず、5歳児が高くなっていた。2014年においては3歳児と4歳児、5歳児との間に差がみられ、4歳児と5歳児との間に差はみられなかった。2012年においては3歳児より4歳児、4歳児より5歳児と評価値が高くなっていた。2013年においては3歳児と4歳児との間に差はみられず、5歳児は3歳児及び4歳児より評価値が高くなっていた。2014年において3歳児より4歳児、5歳児の値が高く、4歳児と5歳児との間に差はみられなかった。

その他の交互作用は有意ではなかった。

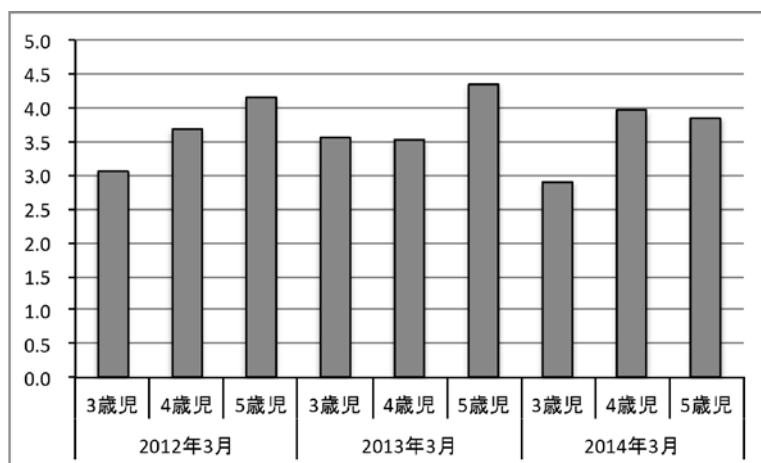


図 14 情緒的領域における調査年×学年の交互作用に関する評価値

4) 社会的領域について

表7に、調査年ごとの学年別・男女別平均値と標準偏差及び度数を示している。

このデータについて、調査年（3：2012年・2013年・2014年）×学年（3：3歳児・4歳児・5歳児）×性別（2：男・女）の3要因を独立変数として分散分析を行った（表8）。

その結果、調査年（図15）、学年（図16）及び性別の各要因の主効果が有意であった。調査年の主効果の分析では、2012年が2013年及び2014年より高く、2013年と2014年との間に差はみられなかった。性別の主効果については、女子が男子より評定値が高かった。

さらに調査年×学年の交互作用が有意であった（図17）。2012年においては学年が上がるにつれて評定値も高くなっているが、2013年においては3歳児と4歳児の間には差はみられず、5歳児が高くなっていた。2014年においては3歳児と4歳児、5歳児との間に差があったが、4歳児と5歳児との間に差はみられなかった。3歳児においては2012年、2013年に比べて2014年が低くなっていた。4歳児においては2012年と2013年に差はないが、2014年は高く評定されていた。

表7 社会的領域における調査年ごとの平均値、標準偏差及び度数

調査年月	学年	性別	平均値	標準偏差	度数
2012年3月	3歳児	女	3.144	0.648	17
		男	2.889	0.531	19
	4歳児	女	3.750	0.528	21
		男	3.523	0.462	20
	5歳児	女	4.187	0.442	27
		男	3.877	0.480	29
2013年3月	3歳児	女	3.628	0.643	16
		男	3.620	1.189	17
	4歳児	女	3.745	0.393	30
		男	3.606	0.593	26
	5歳児	女	4.215	0.431	22
		男	4.177	0.525	21
2014年3月	3歳児	女	2.772	1.049	13
		男	2.585	0.834	24
	4歳児	女	3.984	0.512	33
		男	3.863	0.964	29
	5歳児	女	3.823	0.354	28
		男	3.793	0.597	24

表8 社会的領域における調査年×学年×性別の分散分析結果

ソース	タイプ III 平方和	自由度	平均平方	F 値	有意確率
修正モデル	81.629	17	4.802	11.971	.000
切片	5134.140	1	5134.140	12799.821	.000
調査年月	9.175	2	4.588	11.437	.000
学年	50.730	2	25.365	63.237	.000
性別	2.086	1	2.086	5.201	.023
調査年月 * 学年	16.584	4	4.146	10.336	.000
調査年月 * 性別	.709	2	0.355	0.884	.414
学年 * 性別	.026	2	0.013	0.032	.968
調査年月 * 学年 * 性別	.256	4	0.064	0.159	.959
誤差	159.642	398	0.401		
総和	5859.980	416			
修正総和	241.271	415			

a. R2 乗 = .338 (調整済み R2 乗 = .310)

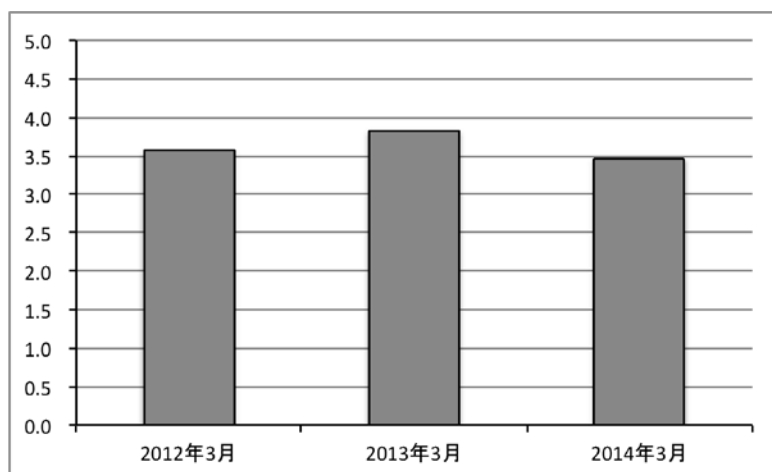


図 15 社会的領域における調査年に関する評価値

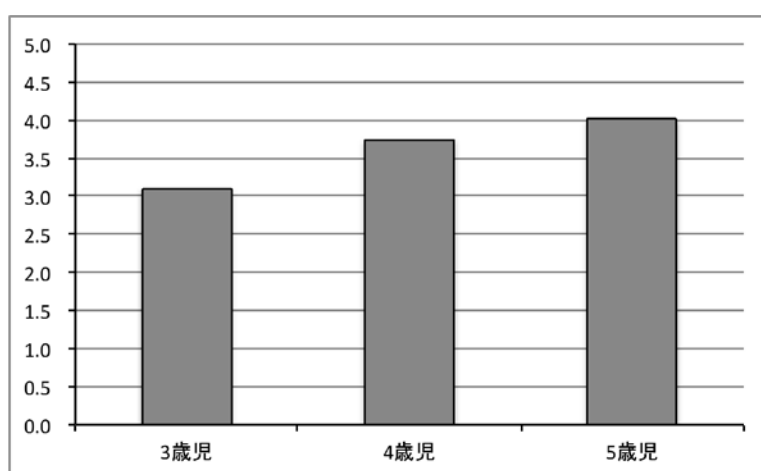


図 16 社会的領域における学年に関する評価値

5歳児においては2013年が最も高く、次に2012年が高く、2014年が最も低く評価されており、3歳児と5歳児については、2014年が最も低くなっていた。2013年は2012年及び2014年よりも評価値が高かった。2012年と2014年との間に差はみられなかった。

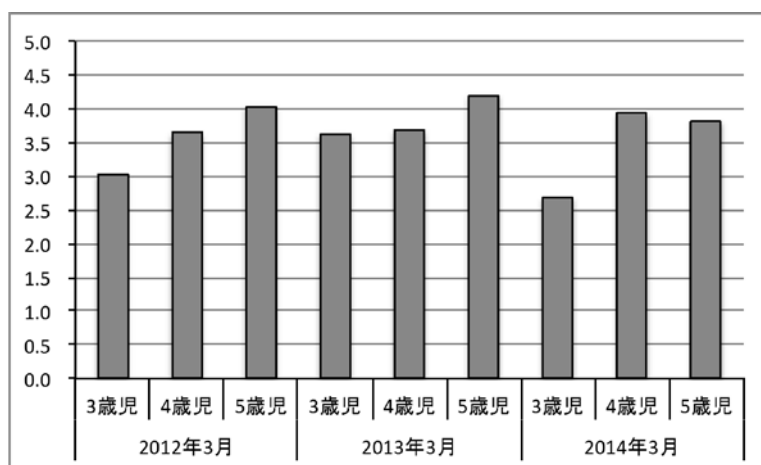


図 17 社会的領域における調査年×学年の交互作用に関する評価値

5) 生活習慣領域について

表9に、調査年ごとの学年別・男女別平均値と標準偏差及び度数を示している。

このデータについて、調査年（3：2012年・2013年・2014年）×学年（3：3歳児・4歳児・5歳児）×性別（2：男・女）の3要因を独立変数として分散分析を行った（表10）。

その結果、学年及び性別の各要因の主効果が有意であり、学年と性別により評定値が異なっていることが示されている。学年の主効果については、3歳児より4歳児、4歳児より5歳児の評定値が高かった（図18）。女子が男子より低く評定されていた。

表9 生活習慣領域における調査年ごとの平均値、標準偏差及び度数

調査年月	学年	性別	平均値	標準偏差	度数
2012年3月	3歳児	女	3.792	0.293	17
		男	3.591	0.380	19
	4歳児	女	4.216	0.325	21
		男	3.859	0.366	20
	5歳児	女	4.497	0.335	27
		男	4.311	0.388	29
2013年3月	3歳児	女	3.864	0.362	16
		男	3.651	0.643	17
	4歳児	女	3.875	0.488	30
		男	3.709	0.468	26
	5歳児	女	4.422	0.512	22
		男	4.403	0.483	21
2014年3月	3歳児	女	3.765	1.092	13
		男	3.826	0.786	24
	4歳児	女	4.426	0.461	33
		男	4.258	0.782	29
	5歳児	女	4.216	0.345	28
		男	4.076	0.392	24

さらに、調査年×学年の交互作用が有意であった。図19にみられるように、2012年においては学年が上がるにつれて評定値も高くなっているが、2013年において4歳児は3歳児よりも低く、5歳児が3歳児、4歳児よりも高くなっていた。2014年においては3歳児と4歳児、5歳児との間に差がみられ、4歳児が5歳児より高く評定されていたが、4歳児と5歳児の間に差はみられなかった。4歳児においては2012年と2013年に違いはみられず2014年が高かった。

その他の主効果及び交互作用は有意ではなかった。

表10 生活習慣領域における調査年×学年×性別の分散分析結果

ソース	タイプ III 平方和	自由度	平均平方	F 値	有意確率
修正モデル	35.293 ^a	17	2.076	7.790	.000
切片	6396.475	1	6396.475	24001.694	.000
調査年月	.755	2	0.378	1.417	.244
学年	20.013	2	10.007	37.548	.000
性別	2.333	1	2.333	8.753	.003
調査年月 * 学年	9.869	4	2.467	9.258	.000
調査年月 * 性別	.474	2	0.237	0.890	.411
学年 * 性別	.310	2	0.155	0.582	.559
調査年月 * 学年 * 性別	.425	4	0.106	0.399	.810
誤差	106.067	398	0.267		
総和	7066.528	416			
修正総和	141.361	415			

a. R2 乗 = .250 (調整済み R2 乗 = .218)

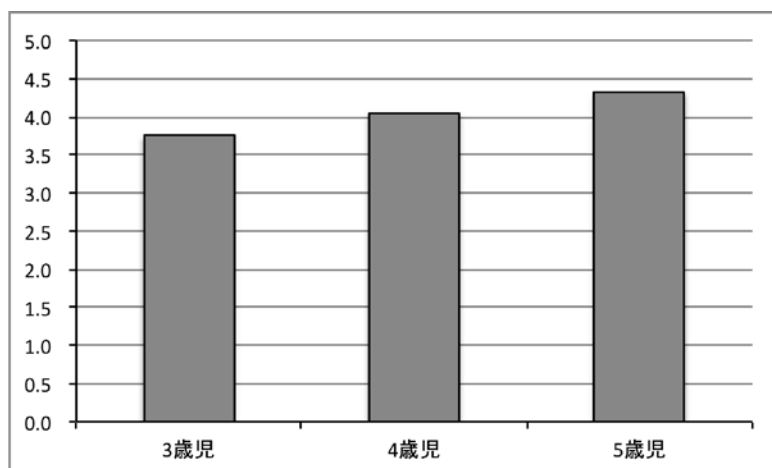


図 18 生活習慣領域における学年に関する評価値

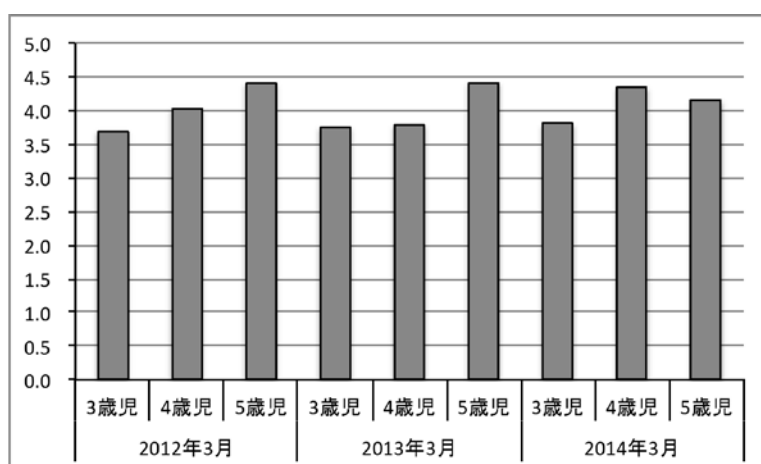


図 19 生活習慣領域における調査年×学年の交互作用に関する評価値

6) 遊び領域について

表 11 に、調査年ごとの学年別・男女別平均値と標準偏差及び度数を示している。このデータについて、調査年（3：2012年・2013年・2014年）×学年（3：3歳児・4歳児・5歳児）×性別（2：男・女）の3要因を独立変数として分散分析を行った（表 12）。

その結果、調査年、学年の主効果が有意であった。調査年の主効果については、2013年は2012年及び2014年との間に差がみられたが、2012年と2014年との間には差はみられなかった（図 20）。また学年の主効果については、3歳児より4歳児及び5歳児が高く評価されていたが、4歳児と5歳児に差はみられなかった（図 21）。

調査年×学年の交互作用が有意であった（表 12、図 22）。調査年の主効果については、2012年では3歳児が4歳児、5歳児と比べて評価値が低く、2013年では4歳児が3歳児及び5歳児より評価値が低く、2014年では3歳児が4歳児、5歳児より評価値が低くなっていた。3歳児については、調査年2012年及び2014年より2013年が高かった。4歳児については、2012年及び2013年に比べて2014年が高かった。

さらに、5歳児については2013年が2012年及び2014年に比べて高かった（図 22）。

表 11 遊び領域における調査年ごとの平均値、標準偏差及び度数

調査年月	学年	性別	平均値	標準偏差	度数
2012年3月	3歳児	女	3.370	0.587	17
		男	3.318	0.735	19
	4歳児	女	3.568	0.695	21
		男	3.703	0.438	20
	5歳児	女	4.139	0.594	27
		男	3.789	0.662	29
2013年3月	3歳児	女	3.914	0.411	16
		男	3.684	0.683	17
	4歳児	女	3.669	0.336	30
		男	3.507	0.644	26
	5歳児	女	4.273	0.588	22
		男	4.203	0.595	21
2014年3月	3歳児	女	3.332	0.808	13
		男	3.552	0.444	24
	4歳児	女	4.083	0.497	33
		男	3.925	0.752	29
	5歳児	女	3.935	0.526	28
		男	3.992	0.744	24

表 12 遊び領域における調査年×学年×性別の分散分析結果

ソース	タイプ III 平方和	自由度	平均平方	F 値	有意確率
修正モデル	32.301 ^a	17	1.900	5.241	.000
切片	5580.372	1	5580.372	15393.919	.000
調査年月	3.443	2	1.721	4.749	.009
学年	17.755	2	8.877	24.489	.000
性別	.450	1	0.450	1.242	.266
調査年月 * 学年	9.273	4	2.318	6.395	.000
調査年月 * 性別	.643	2	0.322	0.887	.413
学年 * 性別	.161	2	0.080	0.222	.801
調査年月 * 学年 * 性別	2.212	4	0.553	1.526	.194
誤差	144.277	398	0.363		
総和	6199.144	416			
修正総和	176.578	415			

a. R2 乗 = .183 (調整済み R2 乗 = .148)

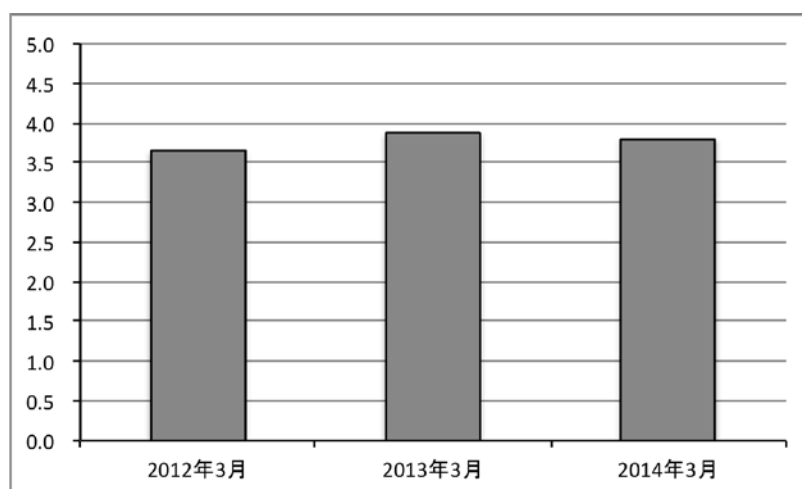


図 20 遊び領域における調査年に関する評定値

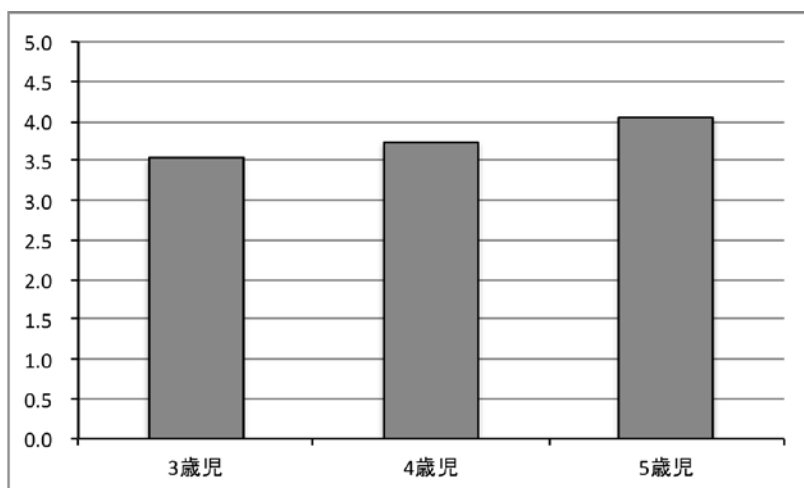


図 21 遊び領域における学年に関する評価値

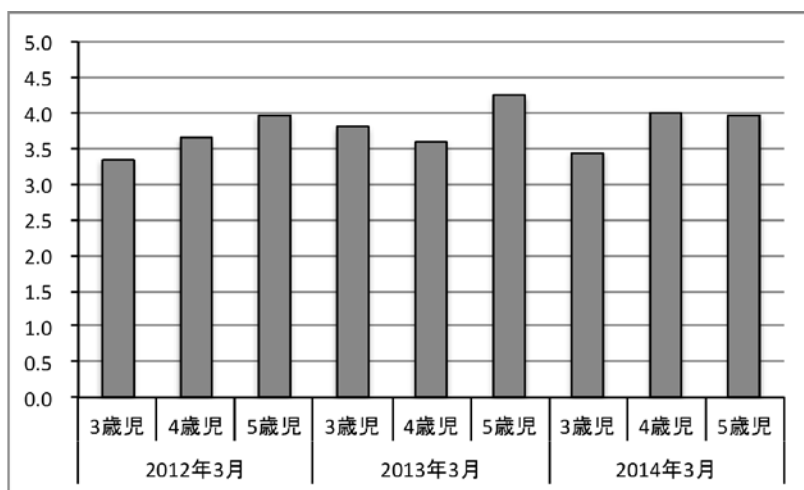


図 22 遊び領域における調査年×学年の交互作用に関する評価値

(6) 福島 B

データは2013年と2014年であったので、2年分のデータを分析対象とした。

1) 知的領域について

表1に、調査年ごとの学年別・男女別平均値と標準偏差及び度数を示している。このデータについて、調査年（2：2013年・2014年）×学年（3：3歳児・4歳児・5歳児）×性別（2：男・女）の3要因を独立変数として分散分析を行った（表2）。その結果、調査年、学年及び性別の各要因の主効果が有意であり、2013年より2014年が高かった（図1）。また、3歳児、4歳児、5歳児と学年が上がるにつれて知的能力の評定値が高くなった（図2）。性差については、女子が男子より高く評定されている。

表1 知的領域における調査年ごとの平均値、標準偏差及び度数

調査年月	学年	性別	平均値	標準偏差	度数
2013年3月	3歳児	女	2.570	0.345	8
		男	2.440	0.544	9
	4歳児	女	4.085	0.642	13
		男	4.067	0.621	6
	5歳児	女	4.027	0.270	19
		男	3.736	0.404	12
2014年3月	3歳児	女	4.535	0.273	11
		男	4.053	0.660	9
	4歳児	女	3.156	0.348	9
		男	2.977	0.589	12
	5歳児	女	4.913	0.024	13
		男	4.867	0.021	6

表2 知的領域における調査年×学年×性別の分散分析結果

ソース	タイプ III 平方和	自由度	平均平方	F 値	有意確率
修正モデル	72.547 ^a	11	6.595	34.164	.000
切片	1643.284	1	1643.284	8512.506	.000
調査年月	10.174	1	10.174	52.705	.000
学年	22.219	2	11.110	57.550	.000
性別	1.047	1	1.047	5.421	.022
調査年月 * 学年	38.322	2	19.161	99.257	.000
調査年月 * 性別	.057	1	0.057	0.294	.588
学年 * 性別	.203	2	0.101	0.525	.593
調査年月 * 学年 * 性別	.459	2	0.230	1.189	.308
誤差	22.200	115	0.193		
総和	1946.442	127			
修正総和	94.747	126			

a. R2 乗 = .766 (調整済み R2 乗 = .743)

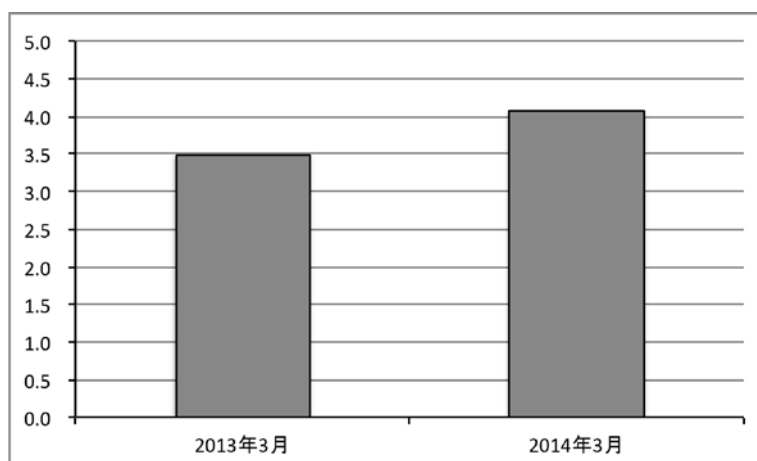


図1 知的領域における調査年に関する評定値

調査年×学年の交互作用がであった。図3に示すように、2013年と2014年では大きな違いがみられる。すなわち、2013年は3歳児より4歳児、5歳児の評定値が高いが、2014年は4歳児が3歳児より、また5歳児より評定値が低くなっている。また、4歳児は2013年より2014年が低くなっているが、3歳児と5歳児は2014年が2013年より高くなっており、4歳児は3歳児や5歳児と異なった傾向を示していた。

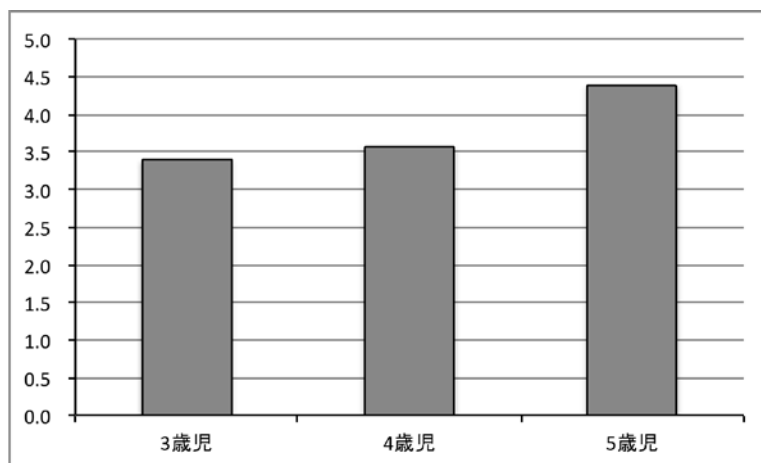


図2 知的領域における学年に関する評定値

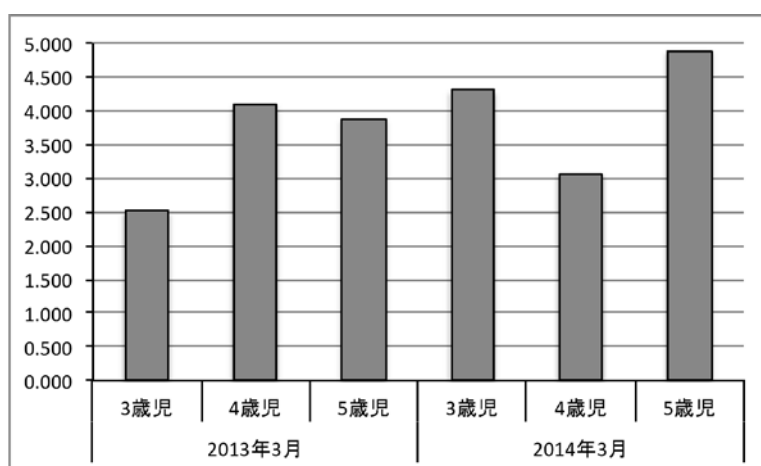


図3 知的領域における調査年×学年に関する評定値

2) 運動領域について

表3に、調査年ごとの学年別・男女別平均値と標準偏差及び度数を示している。

このデータについて、調査年（2：2013年・2014年）×学年（3：3歳児・4歳児・5歳児）×性別（2：男・女）の3要因を独立変数として分散分析を行った（表4）。

その結果、調査年、学年及び性別の各要因の主効果が有意であり、2013年が最も高く、次いで2014年であった。また、調査年×学年の交互作用と調査年×学年×性別の交互作用が有意であった。

運動的領域の評定値は、調査年の主効果について2013年よりも2014年が高く（図4）、学年の主効果について3歳児、4歳児、5歳児と学年が上がるにつれて有意に高くなっていた（図5）。性差については、女子が男子より高いと評定されていた。調査年×学年の交互作用が有意であったことについては、2013年は3歳児が最も低く、次いで5歳児、最も高かったのは4歳児であったが、2014年は4歳児が最も低く、次いで3歳児、5歳児は最も高く評定されていた（図6）。

調査年×学年×性別の交互作用については、図7に示すように、2013年と2014年では大きな違いがみられた。すなわち、2013年は3歳児より4歳児、5歳児の評定値が高いが、2014年は4歳児が3歳児より、5歳児より評定値が低くなっていた。また、2013年の5歳児では女子が男子より高く評定されていたが、2014年5歳児では性差はみられなくなっていた。2013年の3歳児に性別による差はみられないが、2014年の3歳児では女子が男子より高く評定されていた(図7)。このように調査年、学年、性別の要因の組み合わせにより傾向が異なっていることが明らかになった。

表3 運動領域における調査年ごとの平均値、標準偏差及び度数

調査年月	学年	性別	平均値	標準偏差	度数
2013年3月	3歳児	女	2.556	0.150	8
		男	2.554	0.232	9
	4歳児	女	3.815	0.402	13
		男	3.927	0.656	6
	5歳児	女	3.595	0.450	19
		男	3.246	0.611	12
2014年3月	3歳児	女	4.255	0.402	11
		男	3.533	0.456	9
	4歳児	女	3.111	0.127	9
		男	3.113	0.274	12
	5歳児	女	4.842	0.079	13
		男	4.933	0.026	6

表4 運動領域における調査年×学年×性別の分散分析結果

ソース	タイプ III 平方和	自由度	平均平方	F 値	有意確率
修正モデル	61.731 ^a	11	5.612	38.578	.000
切片	1505.512	1	1505.512	10349.448	.000
調査年月	13.350	1	13.350	91.773	.000
学年	18.240	2	9.120	62.695	.000
性別	.601	1	0.601	4.129	.044
調査年月 * 学年	29.377	2	14.689	100.975	.000
調査年月 * 性別	.121	1	0.121	0.829	.365
学年 * 性別	.804	2	0.402	2.762	.067
調査年月 * 学年 * 性別	1.641	2	0.820	5.640	.005
誤差	16.729	115	0.145		
総和	1747.080	127			
修正総和	78.459	126			

a. R2 乗 = .787 (調整済み R2 乗 = .766)

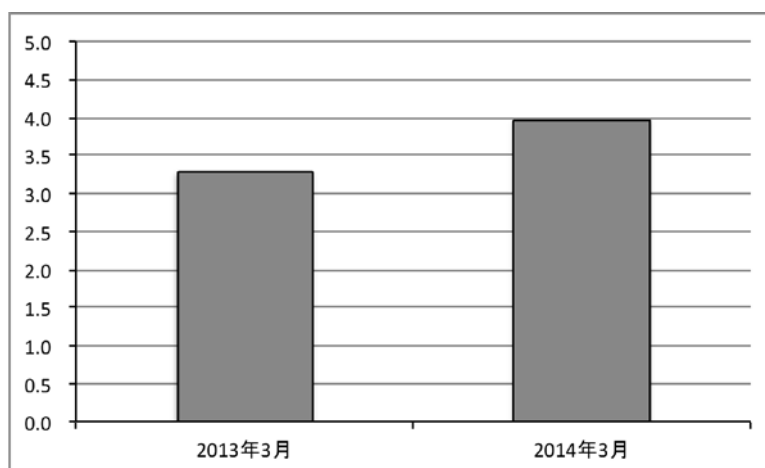


図4 運動領域における調査年に関する評定値

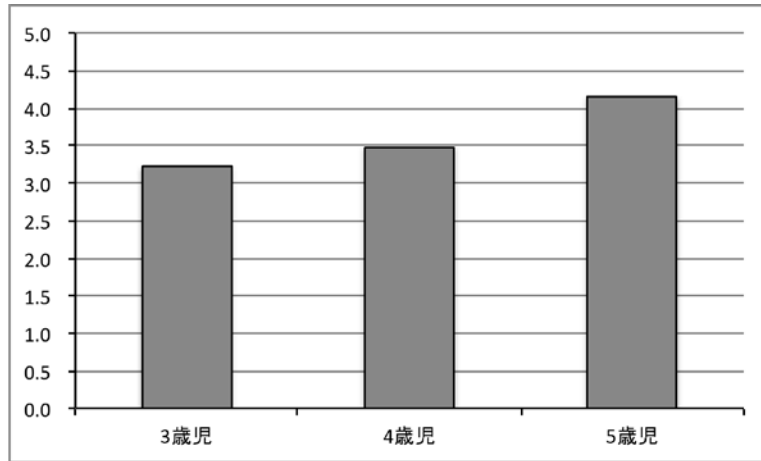


図5 運動領域における学年に関する評価値

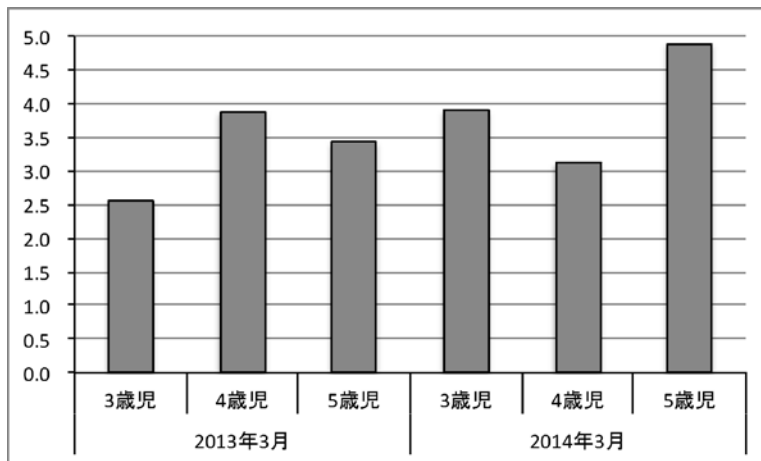


図6 運動領域における調査年×学年に関する評価値

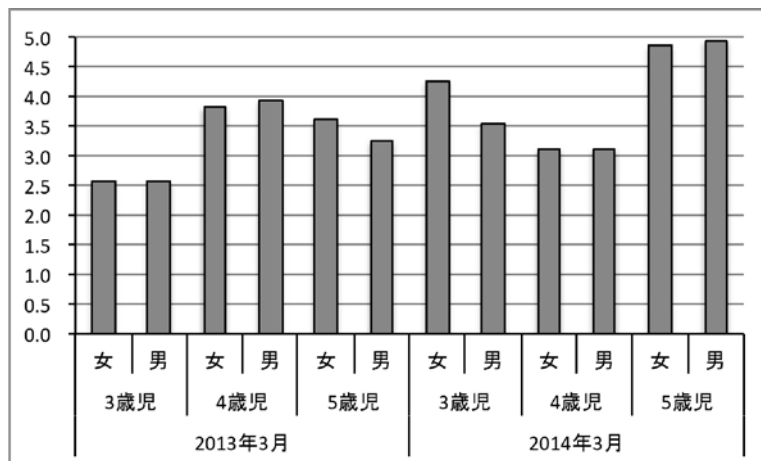


図7 運動領域における調査年×学年×性別に関する評価値

2次の交互作用について学年別に調査年×性別の交互作用を図8、図9、図10に示した(順に3歳児、4歳児、5歳児)。3歳児と5歳児は2013年より2014年の評価値が男女とも高くなっていたが(それぞれ図8、図10)、反対に4歳児は2014年度に低くなっていた(図9)。

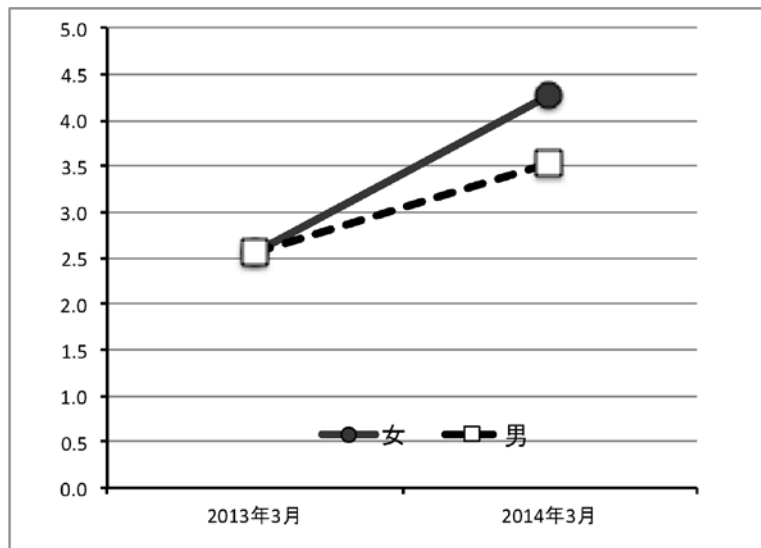


図8 3歳児の運動領域における調査年×性別の評定値

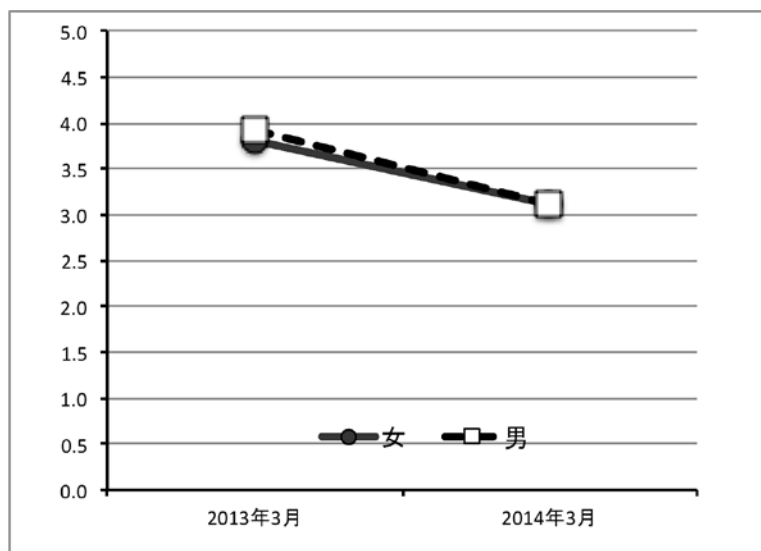


図9 4歳児の運動領域における調査年×性別の評定値

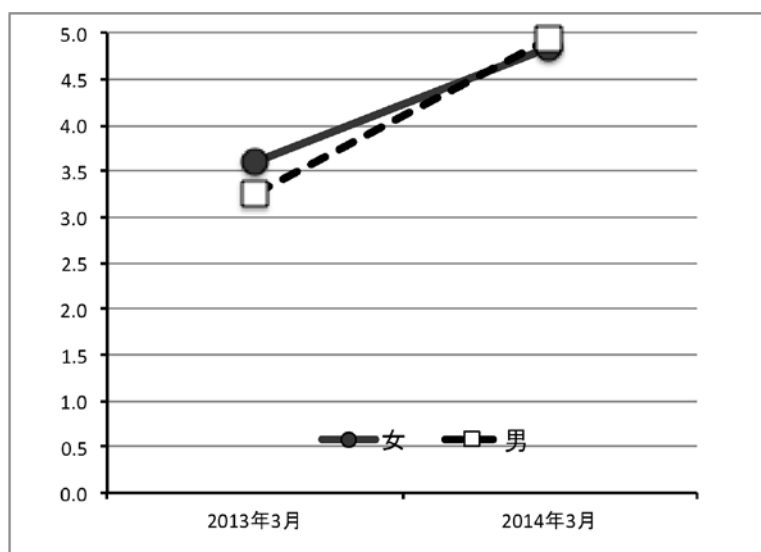


図10 5歳児の運動領域における調査年×性別の評定値

3) 情緒的領域について

表5に、調査年ごとの学年別・男女別平均値と標準偏差及び度数を示している。

このデータについて、調査年（2：2013年・2014年）×学年（3：3歳児・4歳児・5歳児）×性別（2：男・女）の3要因を独立変数として分散分析を行った（表6）。

その結果、調査年、学年及び性別の各要因の主効果が有意であり、調査年、学年及び性別により評定値が異なっていた。調査年の主効果について、2013年より2014年の評定値が高くなっていた（図11）。また、学年の主効果について、5歳児が3歳児、4歳児よりも高く、3歳児と4歳児の間には差がみられなかった（図12）。

表5 情緒的領域における調査年ごとの平均値、標準偏差及び度数

調査年月	学年	性別	平均値	標準偏差	度数
2013年3月	3歳児	女	3.024	0.363	8
		男	2.791	0.443	9
	4歳児	女	4.083	0.577	13
		男	3.860	0.509	6
	5歳児	女	3.686	0.336	19
		男	3.553	0.591	12
2014年3月	3歳児	女	4.415	0.305	11
		男	3.979	0.695	9
	4歳児	女	3.422	0.269	9
		男	3.270	0.421	12
	5歳児	女	4.905	0.124	13
		男	4.820	0.123	6

表6 情緒領域における調査年×学年×性別の分散分析結果

ソース	タイプ III 平方和	自由度	平均平方	F 値	有意確率
修正モデル	47.162 ^a	11	4.287	23.212	.000
切片	1671.070	1	1671.070	9046.914	.000
調査年月	11.576	1	11.576	62.671	.000
学年	11.005	2	5.502	29.789	.000
性別	1.267	1	1.267	6.858	.010
調査年月 * 学年	22.279	2	11.139	60.307	.000
調査年月 * 性別	.006	1	0.006	0.030	.863
学年 * 性別	.253	2	0.126	0.684	.507
調査年月 * 学年 * 性別	.107	2	0.054	0.290	.749
誤差	21.242	115	0.185		
総和	1923.040	127			
修正総和	68.404	126			

a. R2 乗 = .689 (調整済み R2 乗 = .660)

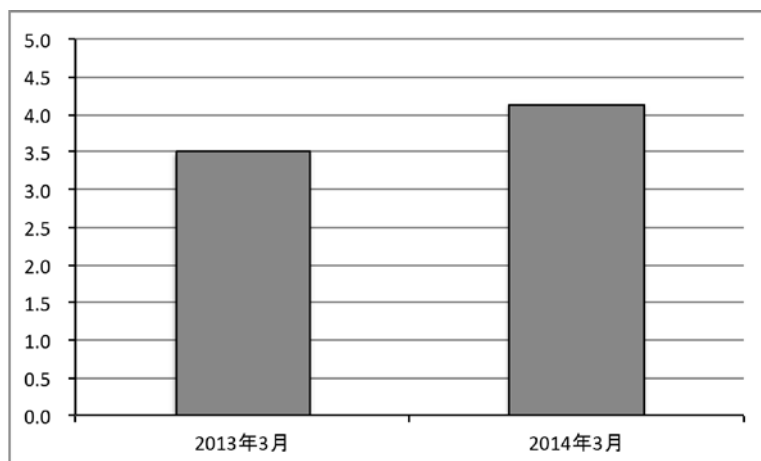


図11 情緒的領域における調査年に関する評定値

さらに、調査年×学年の交互作用が有意であった。図 13 にみられるように、2013 年においては 3 歳児が最も低く、次いで 5 歳児、4 歳児は最も高く、一方、2014 年においては 4 歳児が最も低く、次いで 3 歳児、5 歳児が最も高く評定されていた。2013 年から 2014 年に関して、3 歳児は上がり、4 歳児は下がり、5 歳児は上がっていた。その他の交互作用は有意ではなかった。

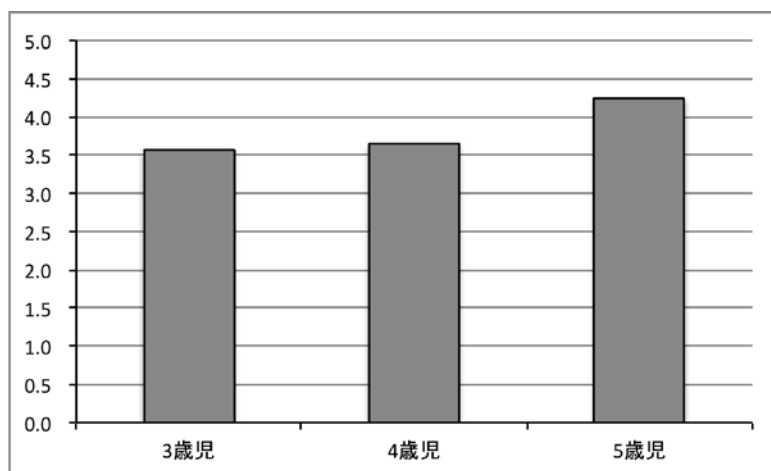


図 12 情緒的領域における学年に関する評定値

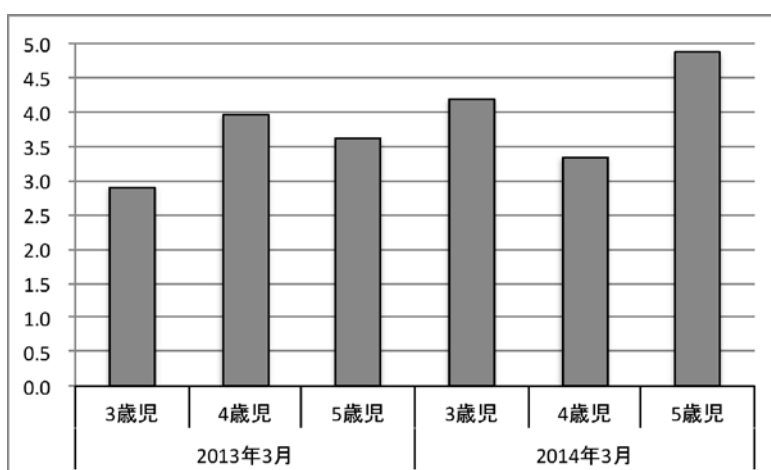


図 13 情緒的領域における調査年×学年の交互作用に関する評定値

4) 社会的領域について

表 7 に、調査年ごとの学年別・男女別平均値と標準偏差及び度数を示している。

このデータについて、調査年（2：2012 年・2013 年・2014 年）×学年（3：3 歳児・4 歳児・5 歳児）×性別（2：男・女）の 3 要因を独立変数として分散分析を行った（表 8）。

その結果、表 8 に示すように、調査年、学年及び性別の各要因の主効果が有意であり、調査年×学年の交互作用が有意であった。調査年の主効果について 2013 年より 2014 年の評定値が高かった（図 14）。学年の主効果について 3 歳児と 4 歳児には差はみられず、3 歳児及び 4 歳児と 5 歳児との間に差がみられた（図 15）。

調査年×学年の相互作用について、2013 年においては 3 歳児が最も低く、次いで 5 歳児、4 歳児は最も高く、一方、2014 年においては 4 歳児が最も低く、次いで 3 歳児、5 歳児が最も高く、2013 年から 2014 年に関して、3 歳児は上がり、4 歳児は下がり、5 歳児は上がっていた（図 16）。その他の交互作用は有意ではなかった。

表7 社会的領域における調査年ごとの平均値、標準偏差及び度数

調査年月	学年	性別	平均値	標準偏差	度数
2013年3月	3歳児	女	2.685	0.390	8
		男	2.431	0.574	9
	4歳児	女	3.795	0.617	13
		男	3.593	0.545	5
	5歳児	女	3.499	0.501	19
		男	3.199	0.551	12
2014年3月	3歳児	女	4.364	0.358	11
		男	3.831	0.817	9
	4歳児	女	3.413	0.320	9
		男	3.233	0.474	12
	5歳児	女	4.729	0.168	13
		男	4.727	0.053	6

表8 社会的領域における調査年×学年×性別の分散分析結果

ソース	タイプ III 平方和	自由度	平均平方	F 値	有意確率
修正モデル	54.516 ^a	11	4.956	20.486	.000
切片	1467.932	1	1467.932	6067.970	.000
調査年月	20.136	1	20.136	83.235	.000
学年	10.833	2	5.416	22.389	.000
性別	1.679	1	1.679	6.940	.010
調査年月 * 学年	19.854	2	9.927	41.034	.000
調査年月 * 性別	.001	1	0.001	0.005	.942
学年 * 性別	.318	2	0.159	0.656	.521
調査年月 * 学年 * 性別	.406	2	0.203	0.838	.435
誤差	27.578	114	0.242		
総和	1742.347	126			
修正総和	82.094	125			

a. R2 乗 = .664 (調整済み R2 乗 = .632)

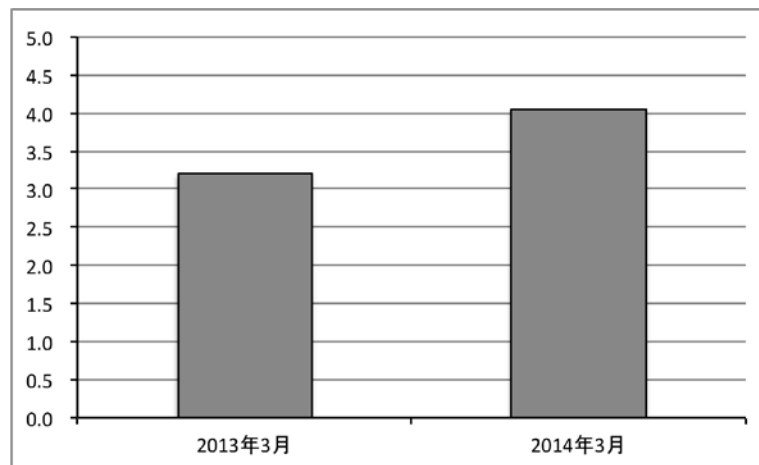


図14 社会的領域における調査年に関する評定値

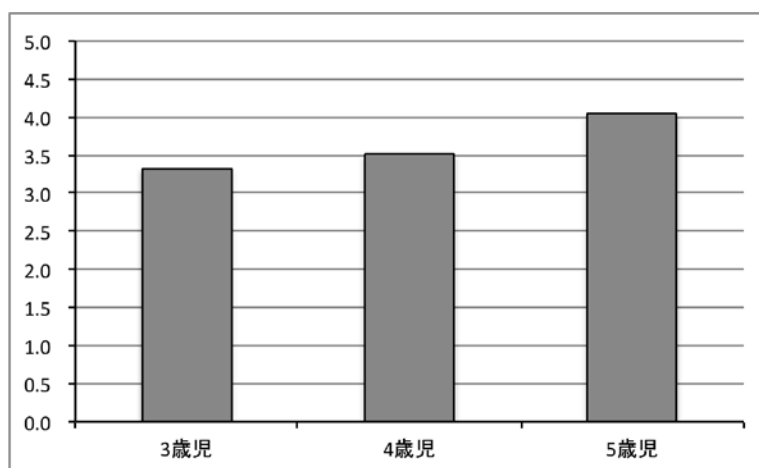


図 15 社会的領域における学年に関する評定値

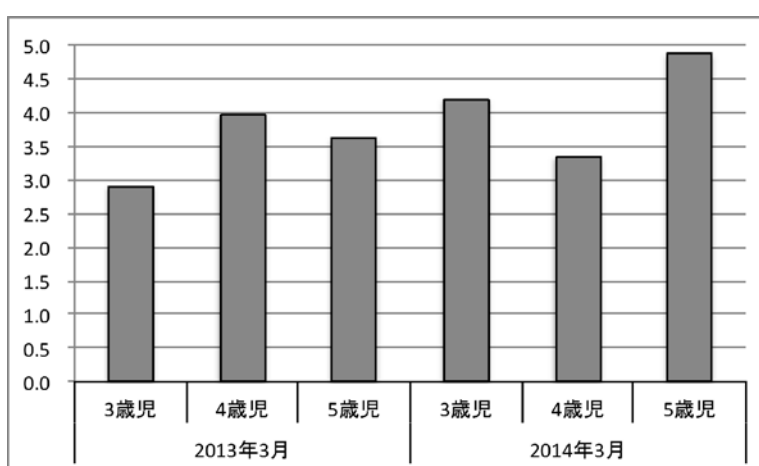


図 16 社会的領域における調査年×学年の交互作用に関する評定値

5) 生活習慣領域について

表 9 に、調査年ごとの学年別・男女別平均値と標準偏差及び度数を示している。

このデータについて、調査年（2：2013年・2014年）×学年（3：3歳児・4歳児・5歳児）×性別（2：男・女）の3要因を独立変数として分散分析を行った（表 10）。

表 9 生活習慣領域における調査年ごとの平均値、標準偏差及び度数

調査年月	学年	性別	平均値	標準偏差	度数
2013年3月	3歳児	女	3.338	0.334	8
		男	3.301	0.465	9
	4歳児	女	4.620	0.436	13
		男	4.618	0.338	6
	5歳児	女	4.574	0.486	19
		男	4.221	0.533	12
2014年3月	3歳児	女	4.674	0.348	11
		男	4.444	0.630	9
	4歳児	女	3.850	0.110	9
		男	3.794	0.245	12
	5歳児	女	4.995	0.016	13
		男	4.990	0.024	6

その結果、調査年、学年の要因の主効果が有意であり、調査年については2013年より2014年が高く評定されていた（図17）。また、3歳児より4歳児、4歳児より5歳児が高く評価されていた（図18）。

さらに、調査年×学年の交互作用が有意であった。2013年より2014年の評定値が高くなっている。調査年×学年の交互作用に関して、2013年で3歳児が4歳児、5歳児と比べて評定値が低い、2014年では4歳児が3歳児、5歳児よりも低くなっていた。4歳児は2013年よりも2014年が低くなっていたが、3歳児、5歳児は反対に高くなっていた（図19）。その他の主効果及び交互作用は有意ではなかった。

表10 生活習慣領域における調査年×学年×性別の分散分析結果

ソース	タイプ III 平方和	自由度	平均平方	F 値	有意確率
修正モデル	35.561 ^a	11	3.233	20.776	.000
切片	2105.499	1	2105.499	13531.182	.000
調査年月	3.433	1	3.433	22.065	.000
学年	11.563	2	5.781	37.154	.000
性別	.372	1	0.372	2.393	.125
調査年月 * 学年	19.870	2	9.935	63.849	.000
調査年月 * 性別	.009	1	0.009	0.055	.816
学年 * 性別	.115	2	0.057	0.368	.693
調査年月 * 学年 * 性別	.392	2	0.196	1.261	.287
誤差	17.894	115	0.156		
総和	2419.831	127			
修正総和	53.456	126			

a. R2 乗 = .665 (調整済み R2 乗 = .633)

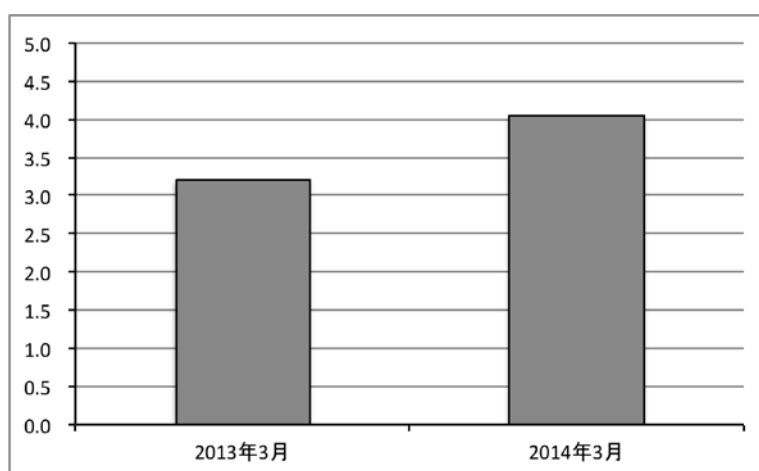


図17 生活習慣における調査年に関する評定値

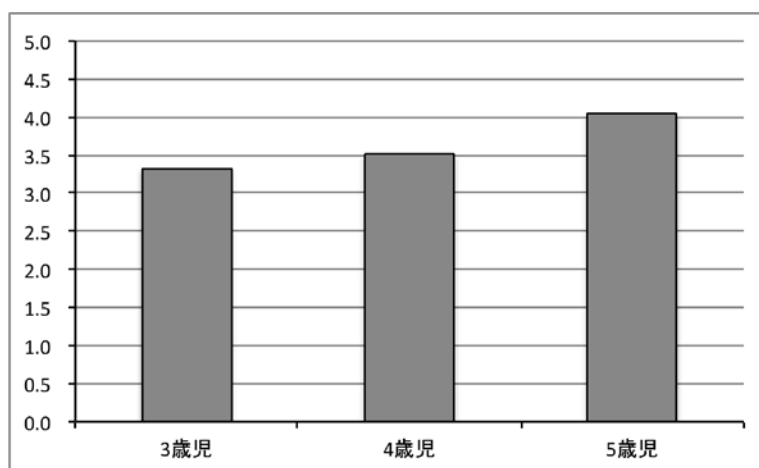


図 18 生活習慣における学年に関する評定値

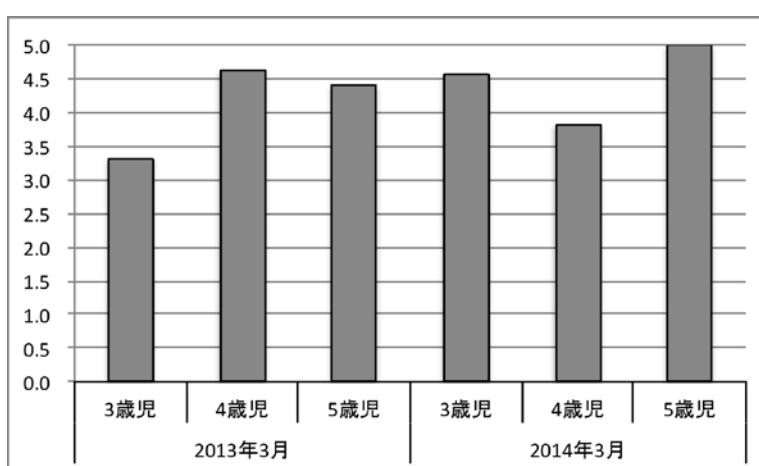


図 19 生活習慣領域における調査年×学年の交互作用に関する評定値

6) 遊び領域について

表 11 に、調査年ごとの学年別・男女別平均値と標準偏差及び度数を示している。

このデータについて、調査年（2：2013年・2014年）×学年（3：3歳児・4歳児・5歳児）×性別（2：男・女）の3要因を独立変数として分散分析を行った（表 12）。

表 11 遊び領域における調査年ごとの平均値、標準偏差及び度数

調査年月	学年	性別	平均値	標準偏差	度数
2013年3月	3歳児	女	2.391	0.115	8
		男	2.146	0.418	9
	4歳児	女	4.067	0.645	13
		男	4.073	0.754	6
	5歳児	女	3.601	0.549	19
		男	3.057	0.637	12
2014年3月	3歳児	女	4.335	0.543	11
		男	3.785	0.850	9
	4歳児	女	3.583	0.228	9
		男	3.370	0.565	12
	5歳児	女	4.856	0.109	13
		男	4.854	0.123	6

表 12 遊び領域における調査年×学年×性別の分散分析結果

	タイプ III 平方和	自由度	平均平方	F 値	有意確率
修正モデル	74.436	11	6.767	24.267	.000
切片	1550.000	1	1550.000	5558.481	.000
調査年月	23.640	1	23.640	84.775	.000
学年	17.160	2	8.580	30.768	.000
性別	1.909	1	1.909	6.845	.010
調査年月 * 学年	31.718	2	15.859	56.872	.000
調査年月 * 性別	.000	1	0.000	0.001	.977
学年 * 性別	.397	2	0.198	0.712	.493
調査年月 * 学年 * 性別	1.089	2	0.544	1.953	.147
誤差	32.068	115	0.279		
総和	1827.695	127			
修正総和	106.504	126			

a. R2 乗 = .699 (調整済み R2 乗 = .670)

その結果、表 12 に示すように、調査年、学年及び性別の各要因の主効果が有意であり、調査年×学年の交互作用が有意であった。調査年の主効果については、2013 年より 2014 年が高かった（図 20）。学年の主効果については、3 歳児より 4 歳児、4 歳児より 5 歳児の評定値が高かった（図 21）。

調査年×学年の交互作用がみられた。その内容は、2013 年では 3 歳児が最も低く、次いで 5 歳児、4 歳児が最も高かったが、2014 年では 4 歳児が最も低く、次いで 3 歳児、5 歳児と高くなっていた（図 22）。

その他の交互作用は有意ではなかった。

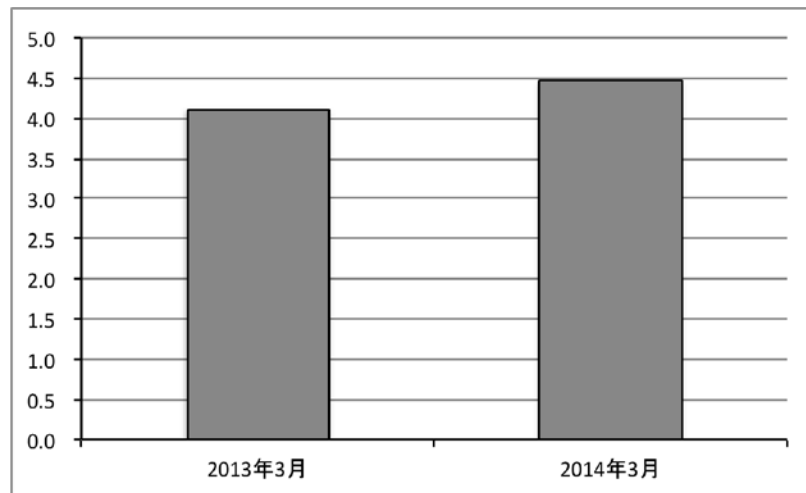


図 20 遊び領域における調査年に関する評定値

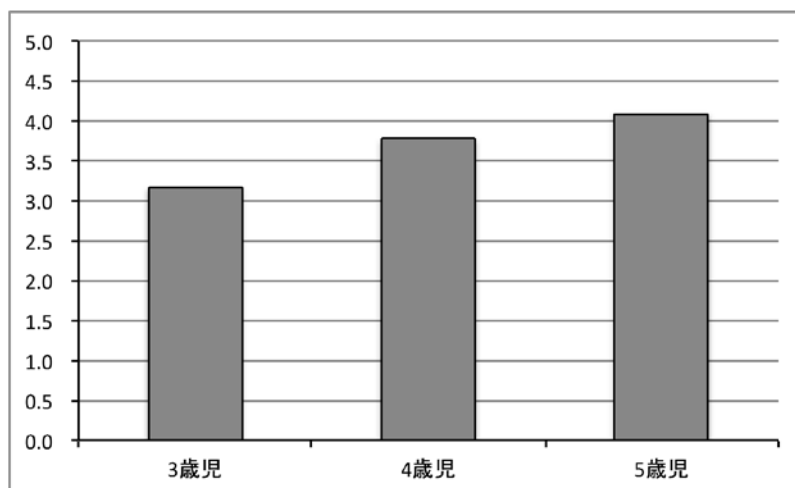


図 21 遊び領域における学年に関する評定値

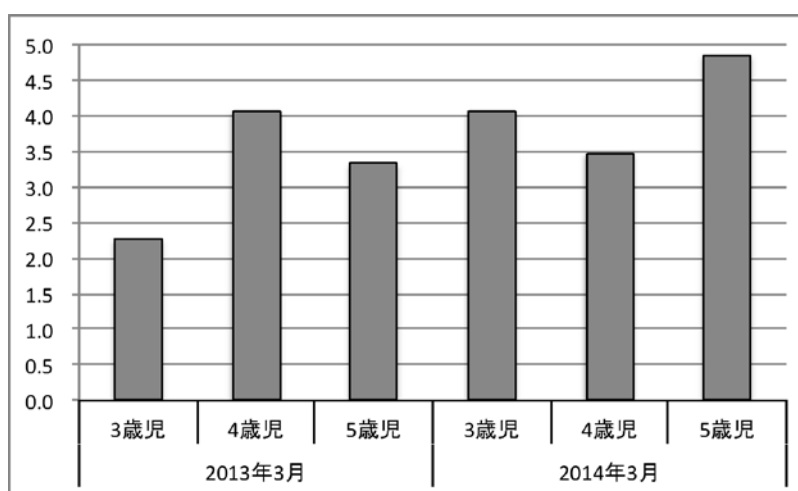


図 22 遊び領域における調査年×学年の交互作用に関する評定値

(7) 福島 C

1) 知的領域について

表 1 に、調査年ごとの学年別・男女別平均値と標準偏差及び度数を示している。

このデータについて、調査年（3：2012年・2013年・2014年）×学年（3：3歳児・4歳児・5歳児）×性別（2：男・女）の3要因を独立変数として分散分析を行った（表2）。

その結果、調査年、学年の各要因の主効果が有意であった（表2）。調査年の主効果についての分析では、2012年が最も高く、次いで2013年、そして2014年の順であった（図1）。また、学年の主効果の分析では、3歳児より4歳児、4歳児より5歳児と学年が上がるにつれて知的能力が高まっていることを示している（図2）。

調査年×学年の交互作用が有意であった（図3）。すなわち、3歳児について2012年より2013年、2014年が高く、4歳児について2012年が2013年、2014年より高く、2013年と2014年は違いがみられなかった。5歳児について2012年、2013年、2014年の順に低かった。性別の主効果とその他の交互作用については有意ではなかった。

表 1 知的領域における調査年ごとの平均値、標準偏差及び度数

調査年月	学年	性別	平均値	標準偏差	度数
2012年3月	3歳児	女	2.868	0.607	10
		男	2.811	0.529	14
	4歳児	女	4.252	0.402	27
		男	3.794	0.595	19
	5歳児	女	4.571	0.533	25
		男	4.557	0.466	20
2013年3月	3歳児	女	2.970	0.842	19
		男	3.145	0.608	21
	4歳児	女	3.594	0.600	18
		男	3.566	0.512	20
	5歳児	女	4.335	0.358	26
		男	4.187	0.708	18
2014年3月	3歳児	女	3.173	0.792	24
		男	3.027	0.617	20
	4歳児	女	3.645	0.507	21
		男	3.662	0.544	27
	5歳児	女	3.931	0.332	19
		男	3.877	0.350	21

表 2 知的領域における調査年×学年×性別の分散分析結果

ソース	タイプ III 平方和	自由度	平均平方	F 値	有意確率
修正モデル	109.167 ^a	17	6.422	20.414	.000
切片	4691.366	1	4691.366	14913.894	.000
調査年月	3.854	2	1.927	6.126	.002
学年	86.245	2	43.123	137.087	.000
性別	.550	1	0.550	1.750	.187
調査年月 * 学年	8.886	4	2.222	7.063	.000
調査年月 * 性別	.436	2	0.218	0.694	.500
学年 * 性別	.310	2	0.155	0.492	.612
調査年月 * 学年 * 性別	1.678	4	0.419	1.334	.257
誤差	110.412	351	0.315		
総和	5343.952	369			
修正総和	219.578	368			

a. R2 乗 = .497 (調整済み R2 乗 = .473)

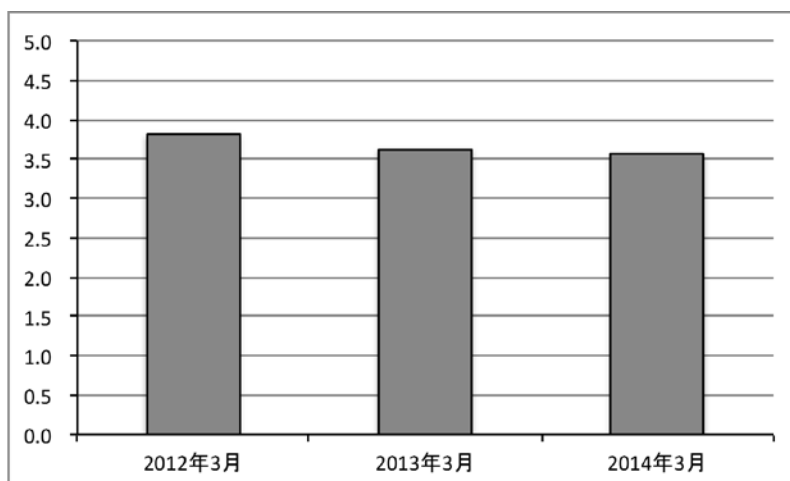


図1 知的領域における調査年に関する評価値

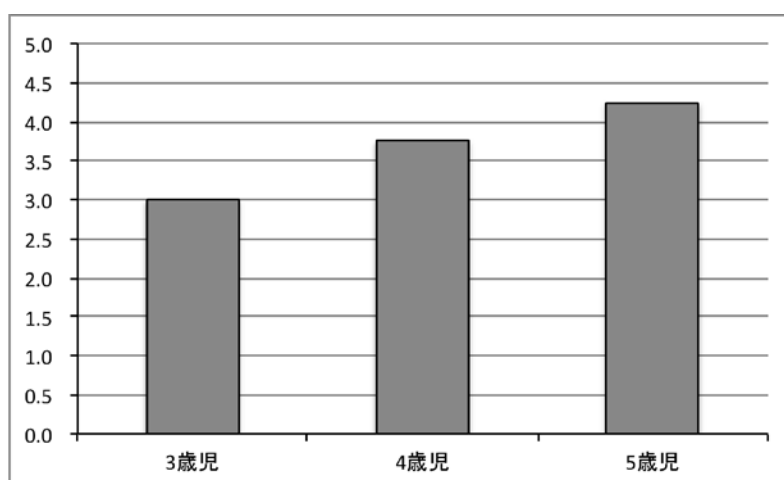


図2 知的領域における学年に関する評価値

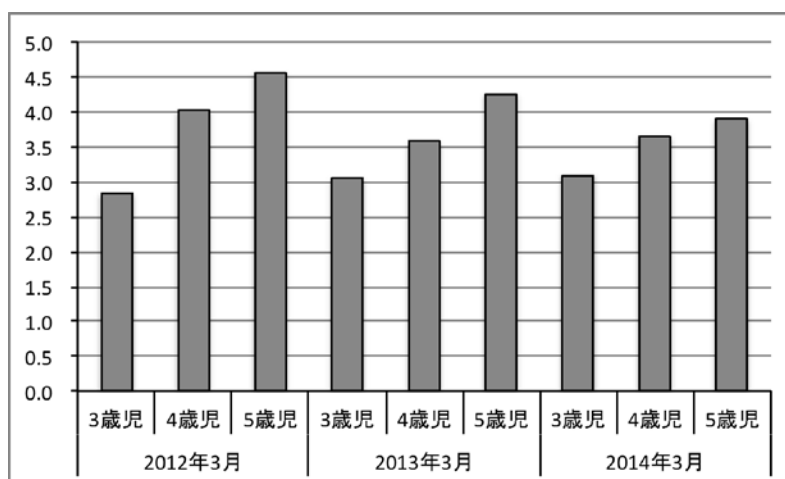


図3 知的領域における調査年×学年に関する評価値

2) 運動領域について

表3に、調査年ごとの学年別・男女別平均値と標準偏差及び度数を示している。

このデータについて、調査年（3：2012年・2013年・2014年）×学年（3：3歳児・4歳児・5歳児）×性別（2：男・女）の3要因を独立変数として分散分析を行った（表4）。

その結果、調査年、学年、性別の各要因の主効果が有意であり、調査年と学年及び性別によって評定値が異なっていることが示された。調査年の主効果については、2012年と2013との間に差はみられず、2012年と2013年に比べて2014年の評定値は低くなっていた(図4)。学年の主効果については、3歳児より4歳児、4歳児より5歳児が高く評定されていた(図5)。

さらに、調査年×学年の交互作用が有意であった(図6)。2012年においては3歳児より4歳児、4歳児より5歳児と評定値が高くなっていた。2013年において、3歳児と4歳児との間に差はみられず、5歳児は3歳児及び4歳児より評定値が高くなっていた。2014年において3歳児と4歳児、5歳児との間で差がみられ、4歳児と5歳児との間に差はみられなかった。その他の交互作用は有意ではなかった。

表3 運動領域における調査年ごとの平均値、標準偏差及び度数

調査年月	学年	性別	平均値	標準偏差	度数
2012年3月	3歳児	女	3.100	0.463	10
		男	2.936	0.352	14
	4歳児	女	4.394	0.258	27
		男	4.085	0.676	19
	5歳児	女	4.730	0.314	25
		男	4.598	0.359	20
2013年3月	3歳児	女	3.561	0.614	19
		男	3.650	0.398	21
	4歳児	女	3.689	0.485	18
		男	3.681	0.480	20
	5歳児	女	4.686	0.245	26
		男	4.569	0.463	18
2014年3月	3歳児	女	3.425	0.352	24
		男	3.250	0.442	20
	4歳児	女	4.067	0.478	21
		男	3.804	0.602	27
	5歳児	女	4.070	0.310	19
		男	3.967	0.462	21

表4 運動領域における調査年×学年×性別の分散分析結果

ソース	タイプ III 平方和	自由度	平均平方	F 値	有意確率
修正モデル	96.801 ^a	17	5.694	29.249	.000
切片	5322.413	1	5322.413	27338.942	.000
調査年月	3.607	2	1.803	9.263	.000
学年	69.281	2	34.640	177.933	.000
性別	1.503	1	1.503	7.720	.006
調査年月 * 学年	17.252	4	4.313	22.154	.000
調査年月 * 性別	.636	2	0.318	1.633	.197
学年 * 性別	.184	2	0.092	0.473	.623
調査年月 * 学年 * 性別	.340	4	0.085	0.436	.782
誤差	68.334	351	0.195		
総和	5964.716	369			
修正総和	165.135	368			

a. R2 乗 = .586 (調整済み R2 乗 = .566)

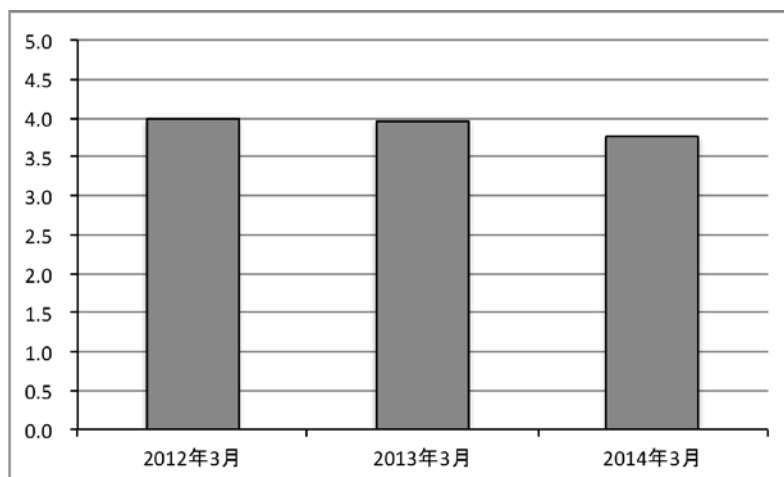


図4 運動的領域における調査年に関する評価値

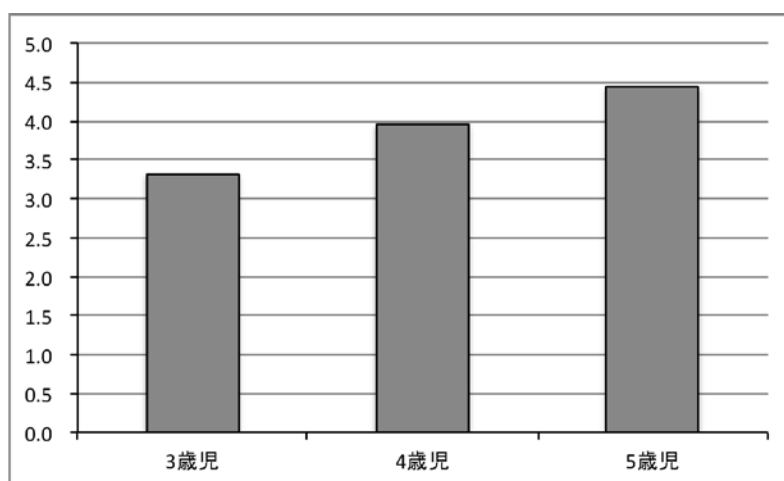


図5 運動的領域における学年に関する評価値

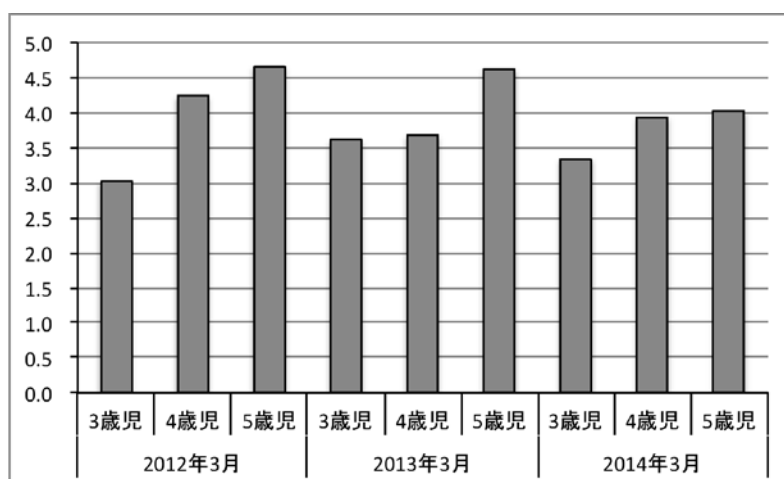


図6 運動領域における調査年×学年に関する評価値

3) 情緒的領域について

表5に、調査年ごとの学年別・男女別平均値と標準偏差及び度数を示している。

このデータについて、調査年（3：2012年・2013年・2014年）×学年（3：3歳児・4歳児・5歳児）×性別（2：男・女）の3要因を独立変数として分散分析を行った（表6）。

その結果、学年及び性別の各要因の主効果が有意であり、学年及び性別により評定値が異なっていた。学年の主効果については、3歳児より4歳児、4歳児より5歳児の評定値が高くなり、学年が上がるにつれて情緒的領域での評定値が高くなっていた（図7）。性別に関しては、女子が男子より高くなっていた。

表5 情緒的領域における調査年ごとの平均値、標準偏差及び度数

調査年月	学年	性別	平均値	標準偏差	度数
2012年3月	3歳児	女	3.272	0.177	10
		男	3.166	0.123	14
	4歳児	女	3.907	0.227	27
		男	3.684	0.339	19
	5歳児	女	4.190	0.480	25
		男	3.953	0.392	20
2013年3月	3歳児	女	3.596	0.591	19
		男	3.459	0.630	21
	4歳児	女	3.356	0.211	18
		男	3.302	0.226	20
	5歳児	女	4.309	0.455	26
		男	4.053	0.316	18
2014年3月	3歳児	女	3.860	0.643	24
		男	3.900	0.580	20
	4歳児	女	3.375	0.404	21
		男	3.351	0.407	27
	5歳児	女	3.709	0.179	19
		男	3.370	0.259	21

表6 情緒的領域における調査年×学年×性別の分散分析結果

ソース	タイプ III 平方和	自由度	平均平方	F 値	有意確率
修正モデル	42.081 ^a	17	2.475	14.343	.000
切片	4669.844	1	4669.844	27058.817	.000
調査年月	.715	2	0.357	2.071	.128
学年	14.124	2	7.062	40.919	.000
性別	1.926	1	1.926	11.159	.001
調査年月 * 学年	20.806	4	5.201	30.139	.000
調査年月 * 性別	.094	2	0.047	0.273	.761
学年 * 性別	.764	2	0.382	2.213	.111
調査年月 * 学年 * 性別	.388	4	0.097	0.563	.690
誤差	60.576	351	0.173		
総和	5129.728	369			
修正総和	102.657	368			

a. R2 乗 = .410 (調整済み R2 乗 = .381)

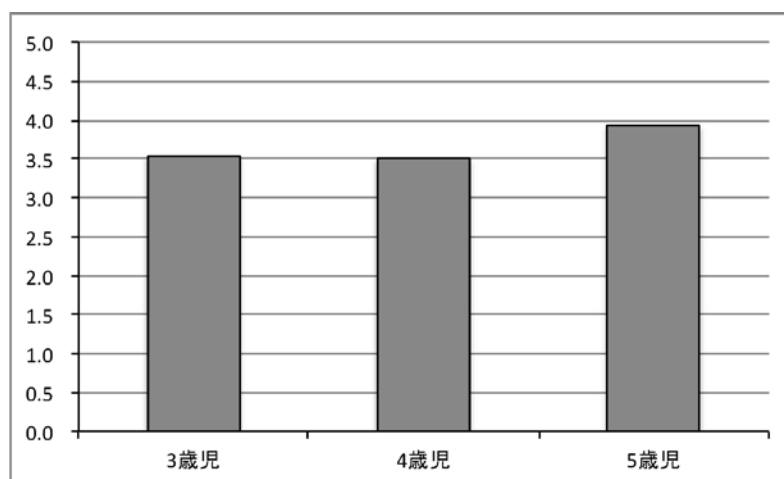


図7 情緒的領域における学年に関する評定値

さらに、調査年×学年の交互作用が有意であった（図8）。2012年では3歳児、4歳児、5歳児と学年が上がるにつれて評定値は高くなり、2013年では5歳児が最も高く、3歳児より4歳児が低くなっているようであるがほとんど差はみられず、2014年では3歳児が最も高く、また4歳児が最も低く、5歳児は3歳児と5歳児との間であった。5歳児については2012年と2013年が2014年に比べて高かった。また、3歳児は2012年、2013年、2014年と順に高くなっていたが、4歳児では2012年が最も高く、2013年と2014年との間に差はみられなかった。その他の交互作用は有意ではなかった。

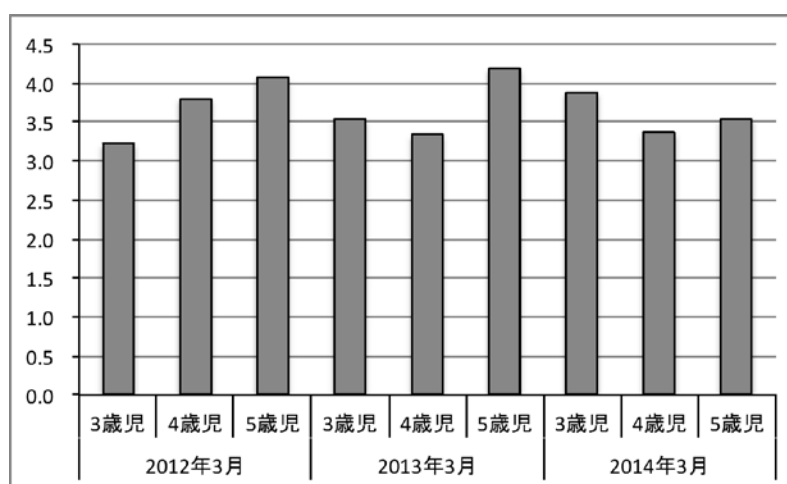


図8 情緒的領域における調査年×学年の交互作用に関する評定値

4) 社会的領域について

表7に、調査年ごとの学年別・男女別平均値と標準偏差及び度数を示している。

このデータについて、調査年（3：2012年・2013年・2014年）×学年（3：3歳児・4歳児・5歳児）×性別（2：男・女）の3要因を独立変数として分散分析を行った（表8）。その結果、調査年、学年及び性別の各要因の主効果が有意であった（図9、図10）。調査年の主効果の分析では、2012年が2013年及び2014年より高く、2013年と2014年との間に差はみられなかった。性別の主効果については、女子が男子より評定値が高かった。

表 7 社会的領域における調査年ごとの平均値、標準偏差及び度数

調査年月	学年	性別	平均値	標準偏差	度数
2012年3月	3歳児	女	3.172	0.318	10
		男	2.980	0.299	14
	4歳児	女	3.939	0.354	27
		男	3.667	0.489	19
	5歳児	女	4.360	0.515	25
		男	4.191	0.483	20
2013年3月	3歳児	女	3.284	0.802	19
		男	3.295	0.664	21
	4歳児	女	3.336	0.296	18
		男	3.246	0.335	20
	5歳児	女	4.131	0.366	26
		男	4.033	0.351	18
2014年3月	3歳児	女	3.725	0.697	24
		男	3.720	0.644	20
	4歳児	女	3.646	0.449	21
		男	3.592	0.438	27
	5歳児	女	3.692	0.154	19
		男	3.442	0.276	21

さらに調査年×学年の交互作用が有意であった(図 11)。図 11 に示されているように 2012 年においては学年が上がるにつれて評定値も高くなっているが、2013 年においては 3 歳児と 4 歳児の間には差はみられず、5 歳児が高くなっていた。2014 年においては学年による差はみられなかった。

3 歳児については 2012 年、2013 年、2014 年と順に高くなっていた。4 歳児については 2012 年が 2013 年、2014 年よりも高く、2013 年と 2014 年との間に差はみられなかった。5 歳児については 2012 年が最も高く、次に 2013 年が高く、2014 年が最も低く評定されていた。その他の交互作用は有意ではなかった。

表 8 社会的領域における調査年×学年×性別の分散分析結果

ソース	タイプ III 平方和	自由度	平均平方	F 値	有意確率
修正モデル	49.059 ^a	17	2.886	12.674	.000
切片	4618.720	1	4618.720	20284.596	.000
調査年月	1.492	2	0.746	3.276	.039
学年	22.324	2	11.162	49.021	.000
性別	1.346	1	1.346	5.913	.016
調査年月 * 学年	20.806	4	5.202	22.844	.000
調査年月 * 性別	.335	2	0.167	0.735	.480
学年 * 性別	.174	2	0.087	0.381	.683
調査年月 * 学年 * 性別	.285	4	0.071	0.313	.869
誤差	79.921	351	0.228		
総和	5131.316	369			
修正総和	128.981	368			

a. R2 乗 = .380 (調整済み R2 乗 = .350)

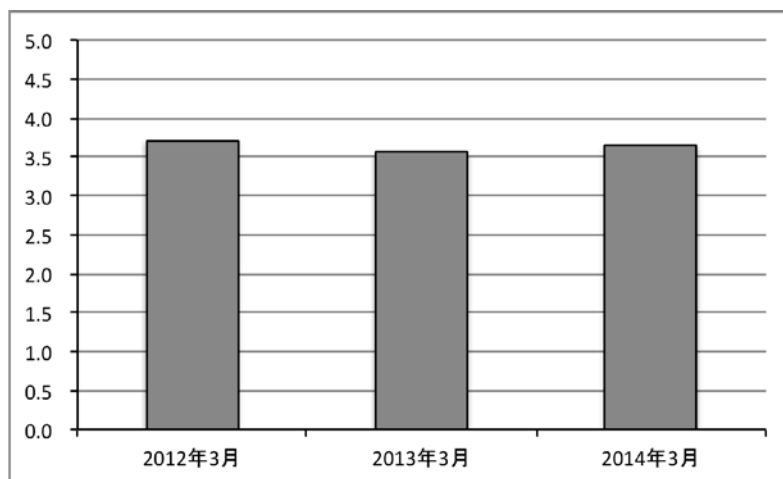


図9 社会的領域における調査年に関する評価値

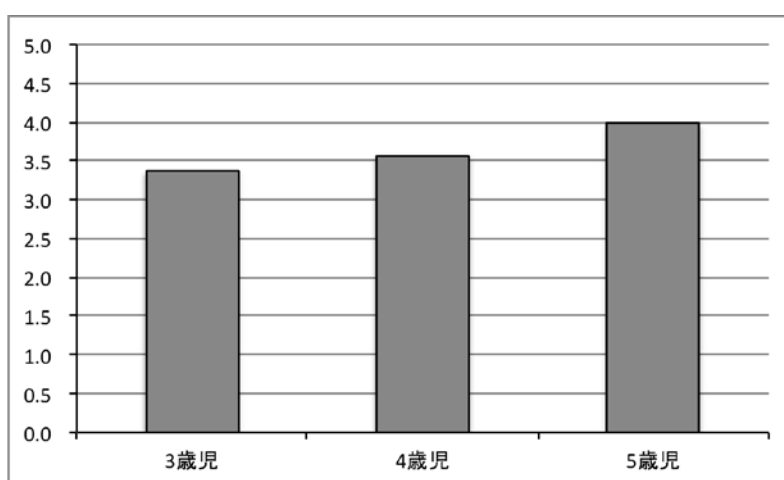


図10 社会的領域における学年に関する評価値

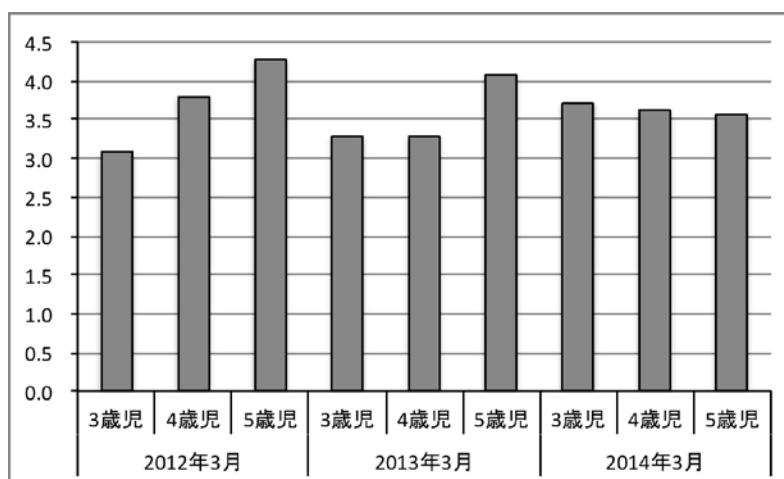


図11 社会的領域における調査年×学年の交互作用に関する評価値

5) 生活習慣領域について

表9に、調査年ごとの学年別・男女別平均値と標準偏差及び度数を示している。

このデータについて、調査年（3：2012年・2013年・2014年）×学年（3：3歳児・4歳児・5歳児）×性別（2：男・女）の3要因を独立変数として分散分析を行った（表10）。

表 9 生活習慣領域における調査年ごとの平均値、標準偏差及び度数

調査年月	学年	性別	平均値	標準偏差	度数
2012年3月	3歳児	女	3.259	0.278	10
		男	2.987	0.264	14
	4歳児	女	4.224	0.412	27
		男	4.040	0.378	19
	5歳児	女	4.765	0.129	25
		男	4.624	0.253	20
2013年3月	3歳児	女	3.407	0.398	19
		男	3.412	0.426	21
	4歳児	女	3.784	0.483	18
		男	3.624	0.472	20
	5歳児	女	4.441	0.459	26
		男	4.284	0.307	18
2014年3月	3歳児	女	3.816	0.728	24
		男	3.856	0.739	20
	4歳児	女	4.252	0.580	21
		男	3.993	0.330	27
	5歳児	女	3.762	0.118	19
		男	3.510	0.232	21

表 10 生活習慣領域における調査年×学年×性別の分散分析結果

ソース	タイプ III 平方和	自由度	平均平方	F 値	有意確率
修正モデル	75.517 ^a	17	4.442	23.907	.000
切片	5289.032	1	5289.032	28464.543	.000
調査年月	1.470	2	0.735	3.955	.020
学年	34.105	2	17.053	91.774	.000
性別	2.049	1	2.049	11.029	.001
調査年月 * 学年	34.104	4	8.526	45.885	.000
調査年月 * 性別	.126	2	0.063	0.339	.712
学年 * 性別	.249	2	0.124	0.669	.513
調査年月 * 学年 * 性別	.468	4	0.117	0.629	.642
誤差	65.220	351	0.186		
総和	5896.618	369			
修正総和	140.736	368			

a. R2 乗 = .537 (調整済み R2 乗 = .514)

その結果、調査年（図 12）、学年（図 13）及び性別の各要因の主効果が有意であり、調査年と学年と性別により評定値が異なっていることが示された。調査年の主効果について、2012年は2013年や2014年より高く評定されていたが、2013年と2014年に差はみられなかった。また、学年の主効果について、すべての学年間で有意に異なっており、3歳児より4歳児、4歳児より5歳児が高く評定されていた。性別の主効果については女子が男子より評定値が高かった。

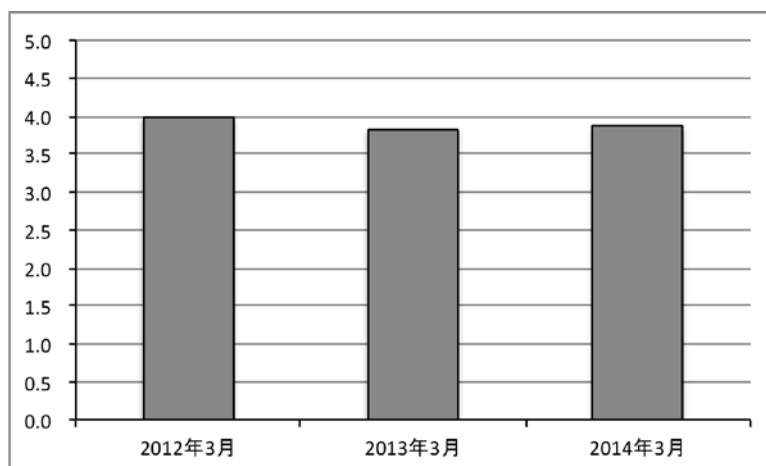


図 12 生活習慣領域における調査年に関する評価値

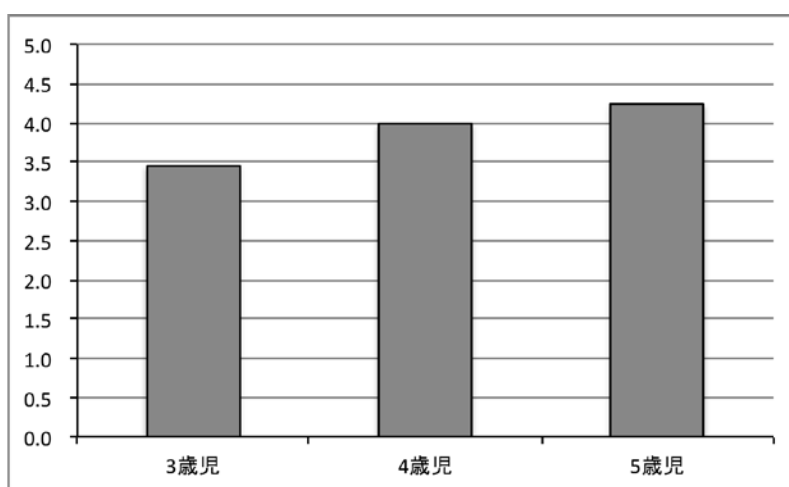


図 13 生活習慣領域における学年に関する評価値

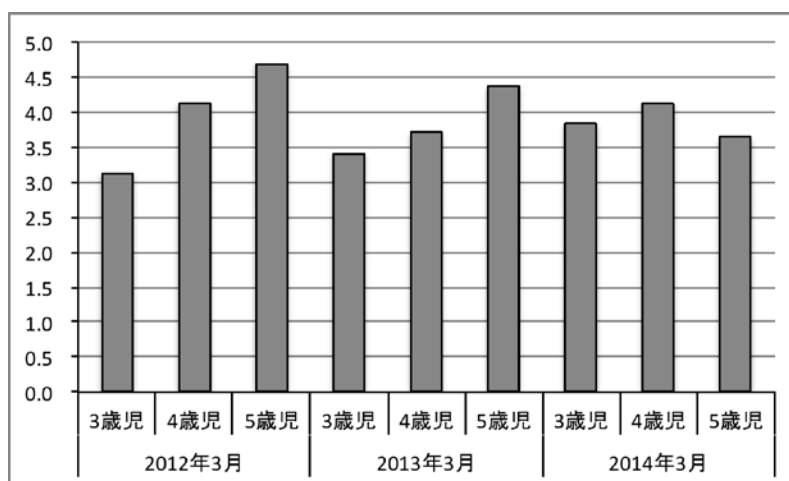


図 14 生活習慣領域における調査年×学年の交互作用に関する評価値

さらに、調査年×学年の交互作用が有意であった（図 14）。図 14 にみられるように、2012 年及び 2013 年においては学年が上がるにつれて評価値も高くなっていった。2014 年においては 3 歳児よりも 4 歳児が高く、4 歳児よりも 5 歳児が低く評価されていた。3 歳児については 2012 年、2013 年、2014 年と順に高く評価されていた。4 歳児については 2012 年と 2014

年より 2013 年が低く評定されていた。5 歳児については、2012 年、2013 年、2014 年の順に低くなっていた。その他の交互作用は有意ではなかった。

6) 遊び領域について

表 11 に、調査年ごとの学年別・男女別平均値と標準偏差及び度数を示している。

このデータについて、調査年（3：2012 年・2013 年・2014 年）×学年（3：3 歳児・4 歳児・5 歳児）×性別（2：男・女）の 3 要因を独立変数として分散分析を行った（表 12）。

その結果、調査年、学年及び性別の各要因の主効果が有意であり、調査年と学年と性別により評定値が異なっていることが示されている。調査年の主効果については 2012 年が最も高く、次いで 2014 年、2013 年が最も低く評定されていた。学年の主効果については、3 歳児及び 4 歳児よりも 5 歳児が高かったが、3 歳児と 4 歳児に違いはみられなかった。性別の主効果については、女子が男子より高く評定されていた。

表 11 遊び領域における調査年ごとの平均値、標準偏差及び度数

調査年月	学年	性別	平均値	標準偏差	度数
2012年3月	3歳児	女	3.425	0.423	10
		男	3.143	0.423	14
	4歳児	女	4.002	0.335	27
		男	3.816	0.529	19
	5歳児	女	4.553	0.767	25
		男	4.225	0.601	20
2013年3月	3歳児	女	3.293	0.980	19
		男	3.616	0.886	21
	4歳児	女	3.306	0.319	18
		男	3.209	0.298	20
	5歳児	女	4.375	0.428	26
		男	4.184	0.518	18
2014年3月	3歳児	女	3.911	0.633	24
		男	3.772	0.629	20
	4歳児	女	3.777	0.740	21
		男	3.514	0.474	27
	5歳児	女	3.819	0.108	19
		男	3.536	0.543	21

表 12 遊び領域における調査年×学年×性別の分散分析結果

ソース	タイプ III 平方和	自由度	平均平方	F 値	有意確率
修正モデル	58.534 ^a	17	3.443	10.236	.000
切片	4908.801	1	4908.801	14593.101	.000
調査年月	2.231	2	1.115	3.316	.037
学年	24.497	2	12.248	36.413	.000
性別	2.254	1	2.254	6.701	.010
調査年月 * 学年	22.234	4	5.559	16.525	.000
調査年月 * 性別	1.326	2	0.663	1.971	.141
学年 * 性別	.770	2	0.385	1.145	.319
調査年月 * 学年 * 性別	.776	4	0.194	0.576	.680
誤差	118.069	351	0.336		
総和	5478.301	369			
修正総和	176.602	368			

a. R2 乗 = .331 (調整済み R2 乗 = .299)

さらに、調査年×学年の交互作用が有意であったが、その他の交互作用は有意ではなかった。2012 年においては学年が上がるにつれて評定値も高くなっているが、2013 年においては

3歳児より4歳児が低く、5歳児は3歳児、4歳児よりも高くなっていった。2014年では3歳児が高く、4歳児と5歳児の差はなかった(図17)。その他の交互作用は有意ではなかった。

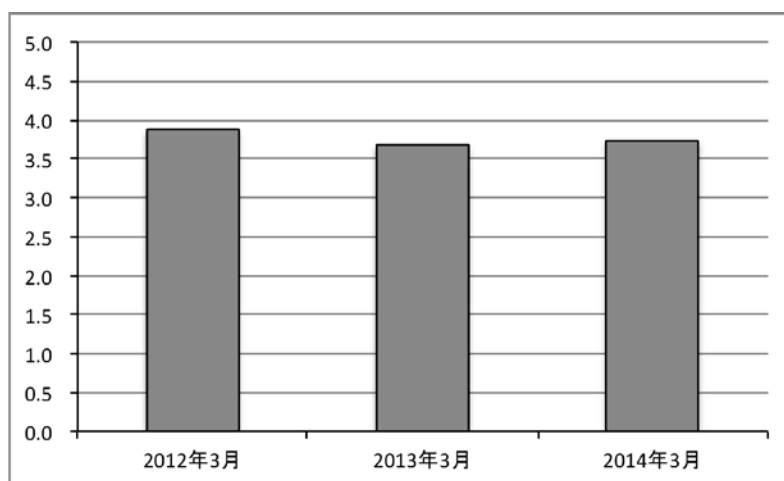


図15 遊び領域における調査年に関する評価値

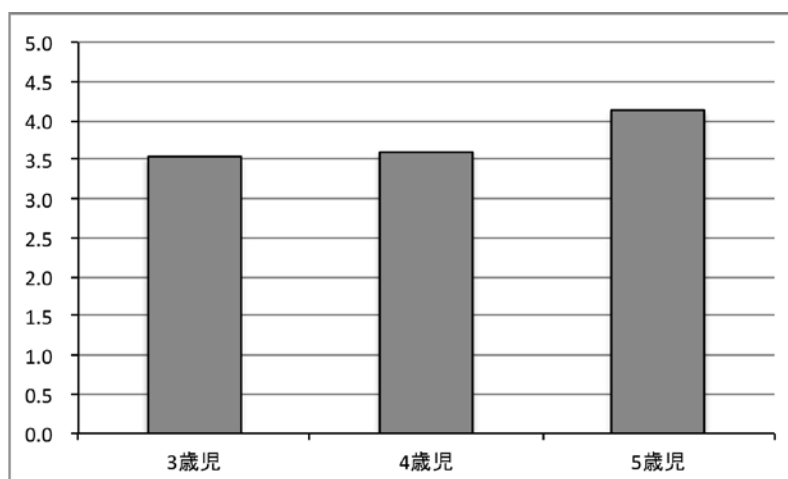


図16 遊び領域における学年に関する評価値

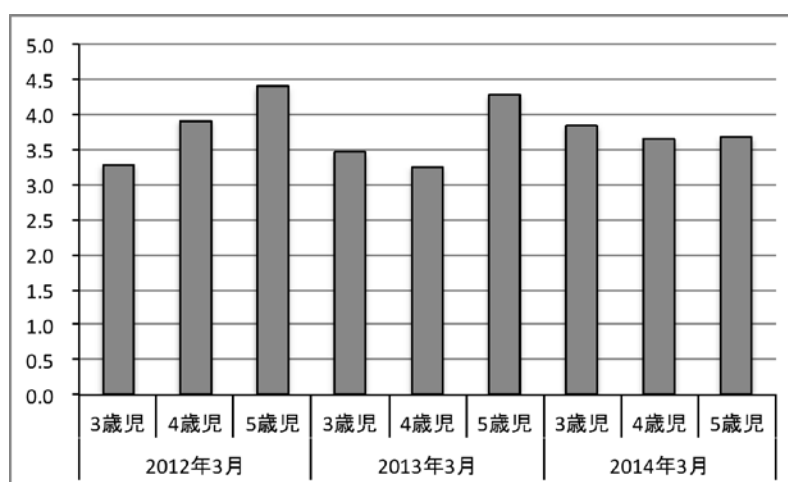


図17 遊び領域における調査年×学年の交互作用に関する評価値

(山崎 晃)

IV 3年間の領域別性別調査結果

調査に協力してくださった園は、郡山市の4園（郡山A、郡山B、郡山C、郡山D）と福島市の3園（福島A、福島B、福島C）の7園であった。ここでは7園のデータを一つにまとめて分析対象とした。

1) 知的領域について

表1に条件ごとの人数を、表2に調査年ごとの学年別・男女別平均値と標準偏差及び度数を示している。

このデータについて、調査年（3：2012年・2013年・2014年）×学年（3：3歳児・4歳児・5歳児）×性別（2：男・女）の3要因を独立変数として分散分析を行った（表3）。その結果、調査年、学年、性別の各要因の主効果が有意であり、調査年×学年の交互作用が有意であった。その他の交互作用は有意ではなかった。

2012年及び2013年は、2014年より評定値が高かった。2012年と2013年との間に差はみられなかった。3歳児より4歳児、5歳児が高く、4歳児は5歳児より評定値が高いこと、女子が男子より高いことが示された。

表1 知的領域における各条件の人数（度数）

被験者間因子		度数
調査年	2012年3月	851
	2013年3月	887
	2014年3月	923
学年	3歳児	708
	4歳児	968
	5歳児	985
性別	女	1334
	男	1327

表2 知的領域における調査年ごとの平均値、標準偏差及び度数

調査年	学年	性別	平均値	標準偏差	度数
2012年3月	3歳児	女	3.193	0.676	98
		男	3.005	0.613	123
	4歳児	女	3.920	0.587	156
		男	3.622	0.608	134
	5歳児	女	4.578	0.444	176
		男	4.362	0.576	164
2013年3月	3歳児	女	3.007	0.843	107
		男	2.987	0.739	108
	4歳児	女	3.994	0.604	173
		男	3.823	0.670	184
	5歳児	女	4.480	0.456	170
		男	4.276	0.630	145
2014年3月	3歳児	女	2.967	1.006	136
		男	2.701	0.823	136
	4歳児	女	3.882	0.617	159
		男	3.654	0.667	162
	5歳児	女	4.468	0.540	159
		男	4.340	0.655	171

表3 知的領域における調査年×学年×性別の分散分析結果

ソース	タイプ III 平方和	自由度	平均平方	F 値	有意確率
修正モデル	918.469 ^a	17	54.028	126.281	0.000
切片	35936.626	1	35936.626	83995.880	0.000
調査年	6.273	2	3.137	7.331	0.001
学年	845.556	2	422.778	988.174	0.000
性別	23.439	1	23.439	54.784	0.000
調査年 * 学年	9.130	4	2.283	5.335	0.000
調査年 * 性別	1.189	2	0.594	1.389	0.249
学年 * 性別	.605	2	0.302	0.707	0.493
調査年 * 学年 * 性別	1.879	4	0.470	1.098	0.356
誤差	1130.776	2643	0.428		
総和	40793.579	2661			
修正総和	2049.245	2660			

a. R2 乗 = .448 (調整済み R2 乗 = .445)

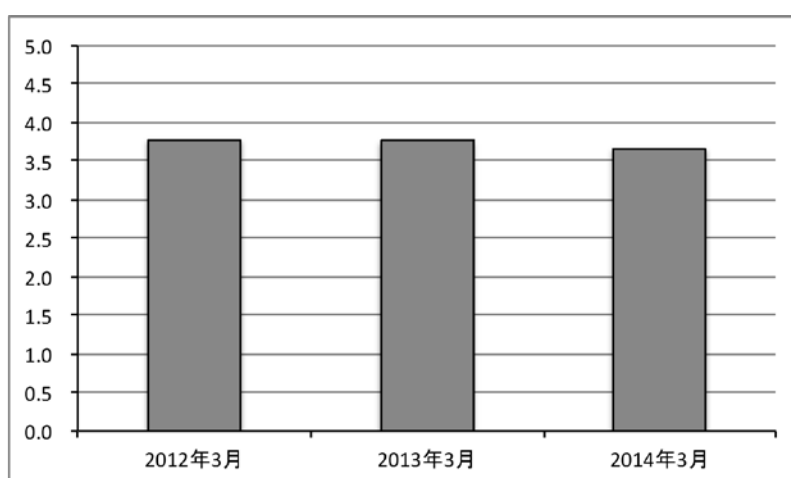


図1 知的領域における調査年別の評価値

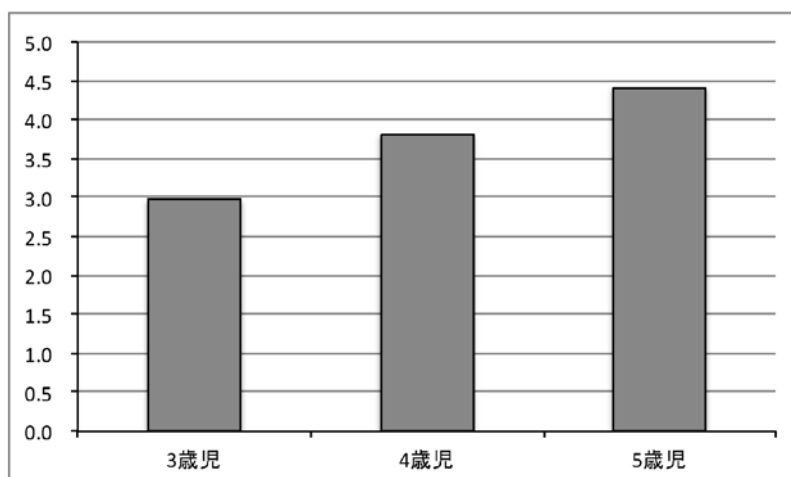


図2 知的領域における学年別の評価値

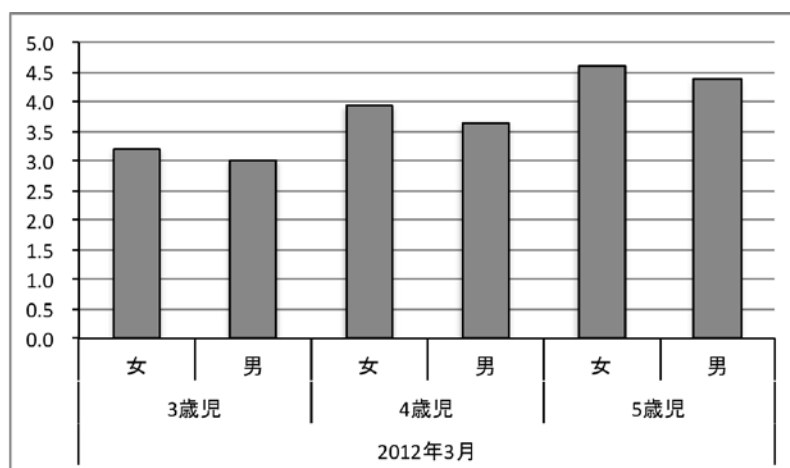


図3 知的領域における調査年×学年の評定値

2) 運動領域について

表4に条件ごとの人数を、表5に調査年ごとの学年別・男女別平均値と標準偏差及び度数を示した。

このデータについて、調査年（3：2012年・2013年・2014年）×学年（3：3歳児・4歳児・5歳児）×性別（2：男・女）の3要因を独立変数として分散分析を行った（表6）。その結果、調査年、学年、性別の各要因の主効果が有意であり、調査年×学年の交互作用が有意であった。その他の交互作用は有意ではなかった。

2012年と2013年は、2014年より評定値が高かった。2012年と2013年との間に差はみられなかった。また、3歳児より4歳児、5歳児が高く、4歳児は5歳児より評定値が高いこと、女子が男子より高いことが示された。

表4 運動領域における各条件の人数（度数）

		度数
調査年	2012年3月	851
	2013年3月	887
	2014年3月	922
学年	3歳児	707
	4歳児	968
	5歳児	985
性別	女	1333
	男	1327

表5 運動領域における調査年ごとの平均値、標準偏差及び度数

調査年	学年	性別	平均値	標準偏差	度数
2012年3月	3歳児	女	3.071	0.462	98
		男	2.925	0.584	123
	4歳児	女	3.848	0.624	156
		男	3.712	0.614	134
	5歳児	女	4.510	0.461	176
		男	4.309	0.611	164
2013年3月	3歳児	女	3.066	0.943	107
		男	3.063	0.787	108
	4歳児	女	3.895	0.578	173
		男	3.792	0.709	184
	5歳児	女	4.320	0.546	170
		男	4.211	0.679	145
2014年3月	3歳児	女	2.968	0.861	135
		男	2.690	0.725	136
	4歳児	女	3.912	0.550	159
		男	3.659	0.639	162
	5歳児	女	4.317	0.572	159
		男	4.277	0.687	171

表6 運動領域における調査年×学年×性別の分散分析結果

ソース	タイプ III 平方和	自由度	平均平方	F 値	有意確率
修正モデル	812.838 ^a	17	47.814	113.471	0.000
切片	35160.150	1	35160.150	83441.404	0.000
調査年	4.743	2	2.371	5.628	0.004
学年	754.745	2	377.373	895.574	0.000
性別	12.796	1	12.796	30.367	0.000
調査年 * 学年	7.707	4	1.927	4.573	0.001
調査年 * 性別	1.652	2	0.826	1.960	0.141
学年 * 性別	.272	2	0.136	0.323	0.724
調査年 * 学年 * 性別	2.993	4	0.748	1.776	0.131
誤差	1113.274	2642	0.421		
総和	39771.578	2660			
修正総和	1926.111	2659			

a. R2 乗 = .422 (調整済み R2 乗 = .418)

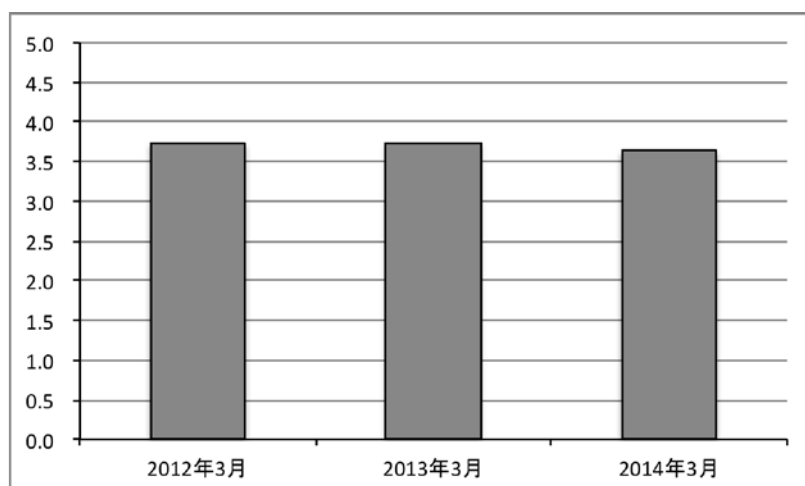


図4 運動領域における調査年ごとの運動的領域の評定値

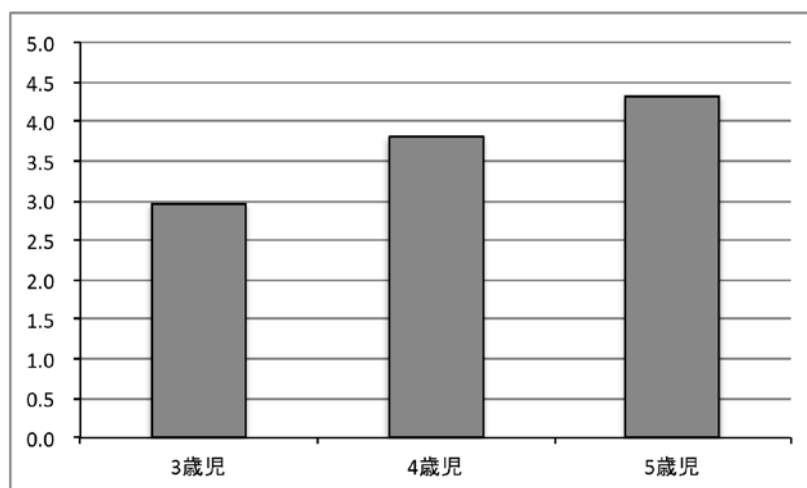


図5 運動領域における学年ごとの運動的領域の評価値

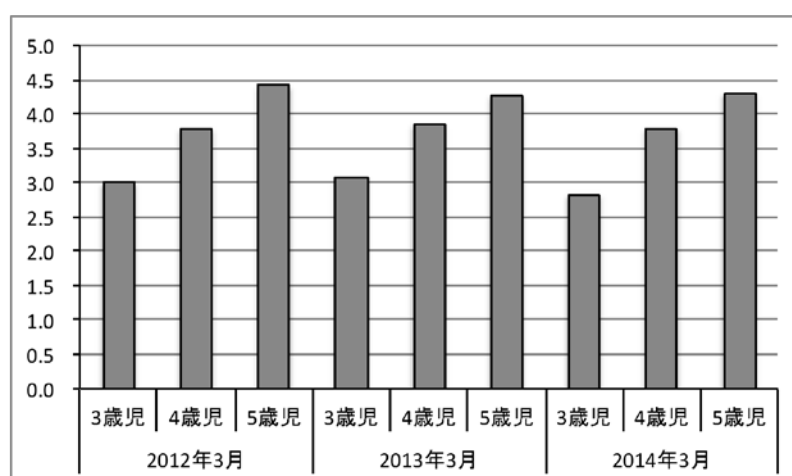


図6 運動領域における調査年×学年に関する評価値

3) 情緒的領域について

表7に条件ごとの人数を、表8に調査年ごとの学年別・男女別平均値と標準偏差及び度数を示した。

このデータについて、調査年（3：2012年・2013年・2014年）×学年（3：3歳児・4歳児・5歳児）×性別（2：男・女）の3要因を独立変数として分散分析を行った。その結果、調査年、学年、性別の各要因の主効果が有意であり、調査年×学年の交互作用が有意であった。その他の交互作用は有意ではなかった。2012年と2013年は2014年より評価値が高く、2012年と2013年との間に差はみられなかった（図7）。また、3歳児より4歳児、5歳児が高く、4歳児は5歳児より評価値が高く（図8）、女子が男子よりも評価値が高かった。調査年×学年の交互作用について、いずれの調査年においても学年と共に評価値は高くなっていったが、2014年が3歳児と4歳児および5歳児との差が大きくなっているようであった（図9）。

表7 情緒的領域における各条件の人数（度数）

		度数
調査年	2012年3月	851
	2013年3月	887
	2014年3月	916
学年	3歳児	701
	4歳児	968
	5歳児	985
性別	女	1328
	男	1326

表8 情緒的領域における調査年×学年×性別の分散分析結果

調査年	学年	性別	平均値	標準偏差	度数
2012年3月	3歳児	女	3.364	0.542	98
		男	3.179	0.499	123
	4歳児	女	3.836	0.477	156
		男	3.737	0.558	134
	5歳児	女	4.433	0.516	176
		男	4.226	0.559	164
2013年3月	3歳児	女	3.417	0.633	107
		男	3.340	0.531	108
	4歳児	女	3.909	0.533	173
		男	3.762	0.603	184
	5歳児	女	4.377	0.536	170
		男	4.189	0.603	145
2014年3月	3歳児	女	3.231	1.086	130
		男	2.986	0.922	135
	4歳児	女	3.853	0.528	159
		男	3.649	0.597	162
	5歳児	女	4.245	0.643	159
		男	4.045	0.815	171

表9 情緒的領域における調査年ごとの平均値、標準偏差及び度数

ソース	タイプ III 平方和	自由度	平均平方	F 値	有意確率
修正モデル	462.819 ^a	17	27.225	67.208	0.000
切片	36375.920	1	36375.920	89799.108	0.000
調査年	13.784	2	6.539	16.143	0.000
学年	406.641	2	203.320	501.925	0.000
性別	19.092	1	19.092	47.132	0.000
調査年 * 学年	4.432	4	1.011	2.495	0.041
調査年 * 性別	.717	2	0.359	0.885	0.413
学年 * 性別	.282	2	0.141	0.348	0.706
調査年 * 学年 * 性別	.703	4	0.176	0.434	0.784
誤差	1067.794	2636	0.405		
総和	40216.792	2654			
修正総和	1530.613	2653			

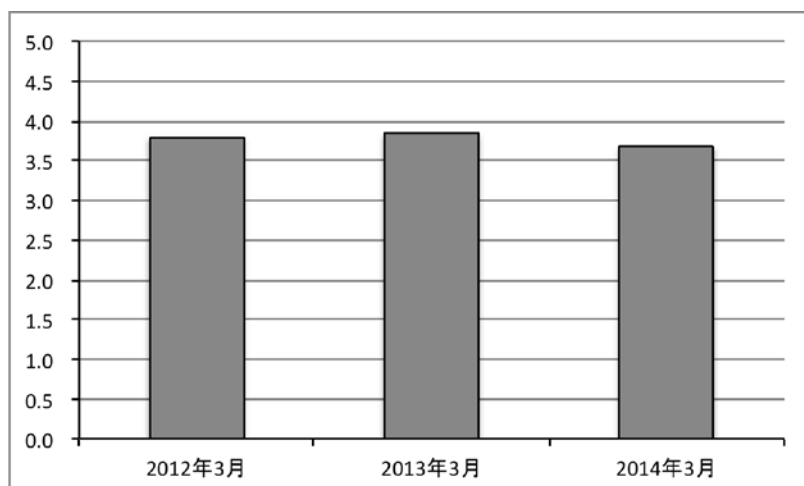


図7 情緒的領域における調査年ごとの評定値

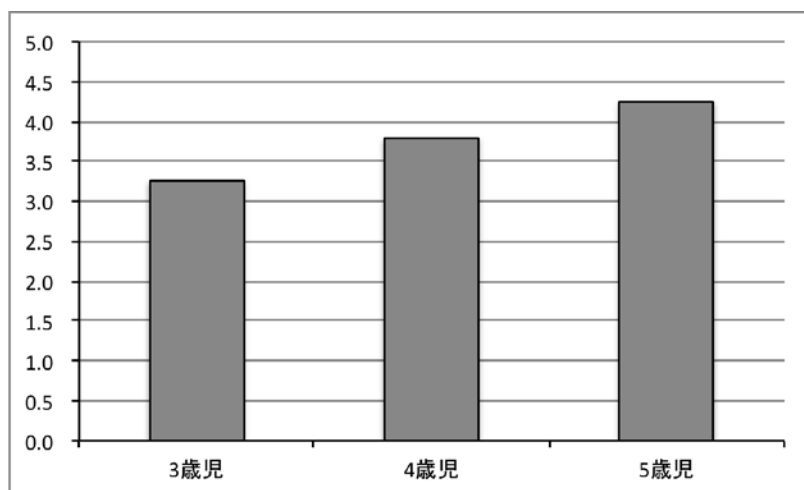


図8 情緒的領域における学年ごとの評定値

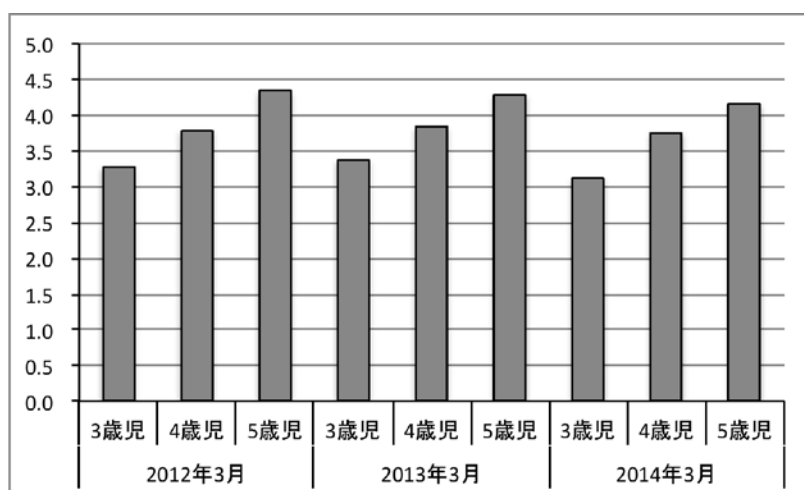


図9 情緒的領域における調査年×学年の交互作用に関する評定値

4) 社会的領域について

表 10 に条件ごとの人数を、表 11 に調査年ごとの学年別・男女別平均値と標準偏差及び度数を示した。

表 10 社会的領域における各条件の人数（度数）

		度数
調査年	2012年3月	851
	2013年3月	886
	2014年3月	923
学年	3歳児	708
	4歳児	967
	5歳児	985
性別	女	1334
	男	1326

表 11 社会的領域における調査年ごとの平均値、標準偏差及び度数

調査年	学年	性別	平均値	標準偏差	度数
2012年3月	3歳児	女	3.307	0.518	98
		男	3.129	0.517	123
	4歳児	女	3.813	0.523	156
		男	3.675	0.572	134
	5歳児	女	4.423	0.518	176
		男	4.220	0.514	164
2013年3月	3歳児	女	3.241	0.730	107
		男	3.227	0.736	108
	4歳児	女	3.911	0.502	173
		男	3.732	0.617	183
	5歳児	女	4.267	0.580	170
		男	4.126	0.661	145
2014年3月	3歳児	女	3.045	1.009	136
		男	2.815	0.898	136
	4歳児	女	3.848	0.495	159
		男	3.705	0.611	162
	5歳児	女	4.220	0.607	159
		男	4.074	0.763	171

このデータについて、調査年（3：2012年・2013年・2014年）×学年（3：3歳児・4歳児・5歳児）×性別（2：男・女）の3要因を独立変数として分散分析を行った。その結果、調査年、学年、性別の各要因の主効果が有意であり、調査年×学年の交互作用が有意であった。その他の交互作用は有意ではなかった。

2012年と2013年は2014年より評定値が高かった。2012年と2013年との間に差はみられなかった。3歳児より4歳児、5歳児が高く、5歳児は4歳児より評定値が高く、女子が男子よりも評定値が高かった。

表 12 社会的領域における調査年×学年×性別の分散分析結果

ソース	タイプ III 平方和	自由度	平均平方	F 値	有意確率
修正モデル	552.390 ^a	17	32.494	79.241	0.000
切片	35412.898	1	35412.898	86360.230	0.000
調査年	11.286	2	5.643	13.761	0.000
学年	488.191	2	244.095	595.267	0.000
性別	14.958	1	14.958	36.478	0.000
調査年 * 学年	11.115	4	2.779	6.777	0.000
調査年 * 性別	.536	2	0.268	0.654	0.520
学年 * 性別	.054	2	0.027	0.066	0.936
調査年 * 学年 * 性別	1.429	4	0.357	0.871	0.480
誤差	1083.379	2642	0.410		
総和	39393.995	2660			
修正総和	1635.769	2659			

a. R2 乗 = .338 (調整済み R2 乗 = .333)

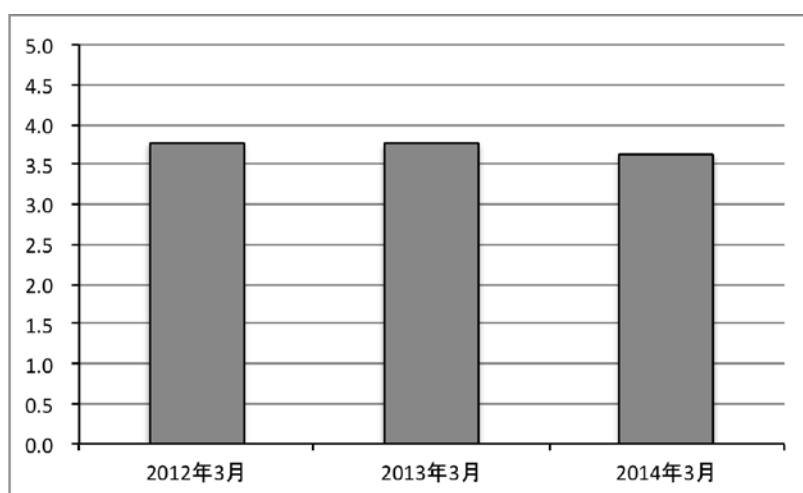


図 10 社会的領域における調査年に関する評定値

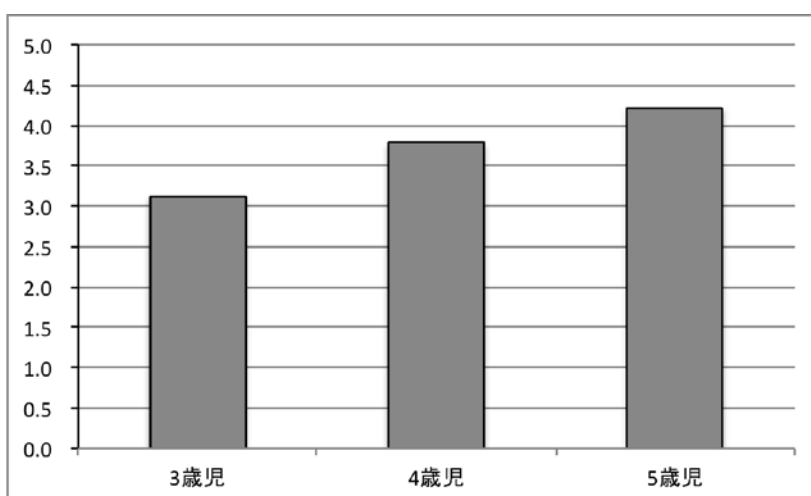


図 11 社会的領域における学年に関する評定値

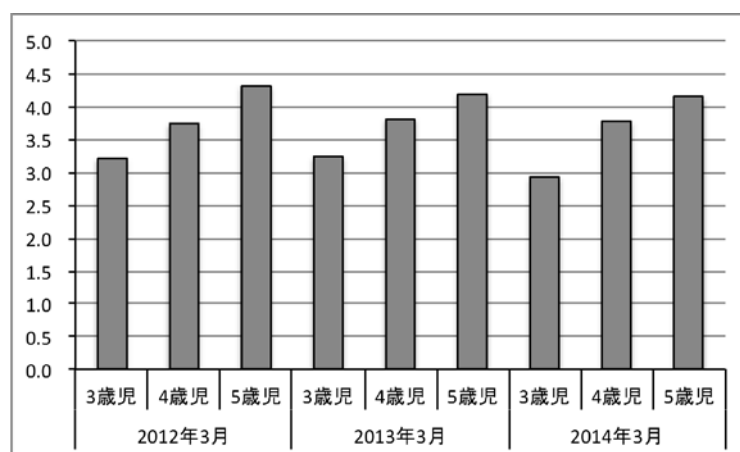


図 12 社会的領域における調査年×学年に関する評定値

5) 生活習慣領域について

表 13 に条件ごとの人数を、表 14 に調査年ごとの学年別・男女別平均値と標準偏差及び度数を示した。

表 13 生活習慣における各条件の人数（度数）

		度数
調査年	2012年3月	850
	2013年3月	886
	2014年3月	923
学年	3歳児	708
	4歳児	966
	5歳児	985
性別	女	1333
	男	1326

このデータについて、調査年（3：2012年・2013年・2014年）×学年（3：3歳児・4歳児・5歳児）×性別（2：男・女）の3要因を独立変数として分散分析を行った。その結果、調査年、学年、性別の各要因の主効果が有意であり、調査年×学年の交互作用が有意であった。その他の交互作用は有意ではなかった。

2012年と2013年は、2014年より評定値が高く、2012年と2013年との間に差はみられなかった。また、3歳児より4歳児、5歳児が高く、5歳児は4歳児より評定値が高く、女子が男子よりも評定値が高かった。

表 14 生活習慣領域における調査年ごとの平均値、標準偏差及び度数

調査年	学年	性別	平均値	標準偏差	度数
2012年3月	3歳児	女	3.491	0.452	98
		男	3.315	0.492	123
	4歳児	女	4.056	0.461	155
		男	3.897	0.442	134
	5歳児	女	4.618	0.418	176
		男	4.473	0.466	164
2013年3月	3歳児	女	3.433	0.714	107
		男	3.404	0.648	108
	4歳児	女	4.171	0.548	173
		男	3.957	0.620	183
	5歳児	女	4.522	0.458	170
		男	4.360	0.521	145
2014年3月	3歳児	女	3.297	1.058	136
		男	3.116	1.039	136
	4歳児	女	4.198	0.487	159
		男	4.025	0.508	162
	5歳児	女	4.474	0.515	159
		男	4.405	0.628	171

表 15 生活習慣領域における調査年×学年×性別の分散分析結果

ソース	タイプ III 平方和	自由度	平均平方	F 値	有意確率
修正モデル	574.803 ^a	17	33.812	93.608	0.000
切片	40259.269	1	40259.269	111457.429	0.000
調査年	1.819	2	0.909	2.518	0.081
学年	524.847	2	262.042	725.462	0.000
性別	13.585	1	13.585	37.610	0.000
調査年 * 学年	10.940	4	2.735	7.572	0.000
調査年 * 性別	.070	2	0.035	0.097	0.907
学年 * 性別	.458	2	0.229	0.634	0.530
調査年 * 学年 * 性別	1.312	4	0.328	0.908	0.458
誤差	953.949	2641	0.361		
総和	44465.573	2659			
修正総和	1528.752	2658			

a. R2 乗 = .376 (調整済み R2 乗 = .372)

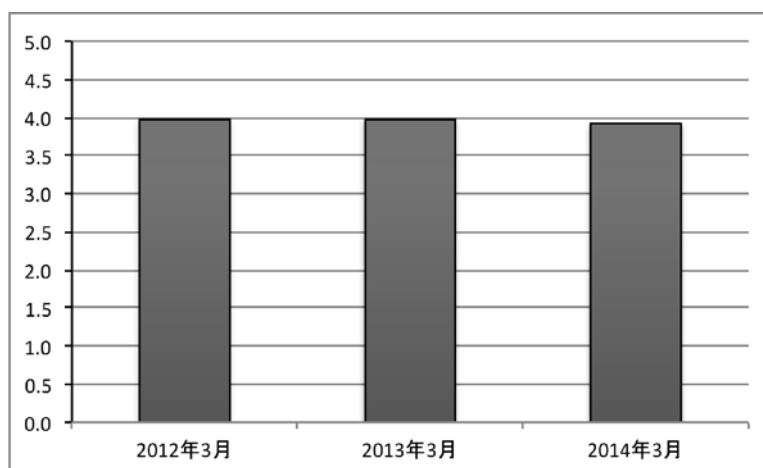


図 13 生活習慣領域における調査年に関する評定値

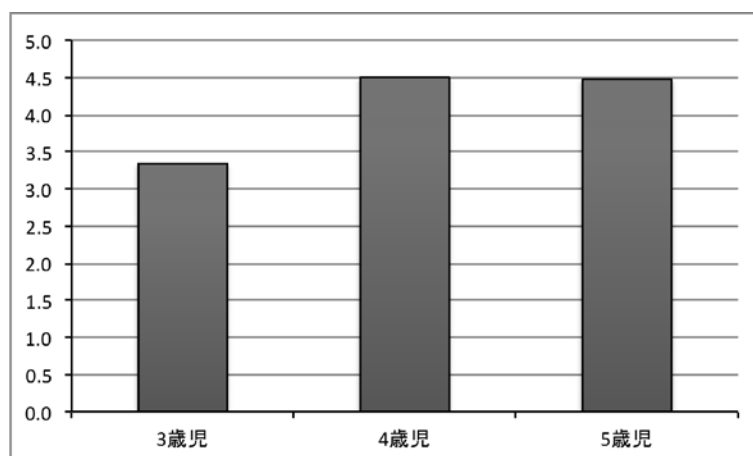


図 14 生活習慣領域における学年に関する評定値

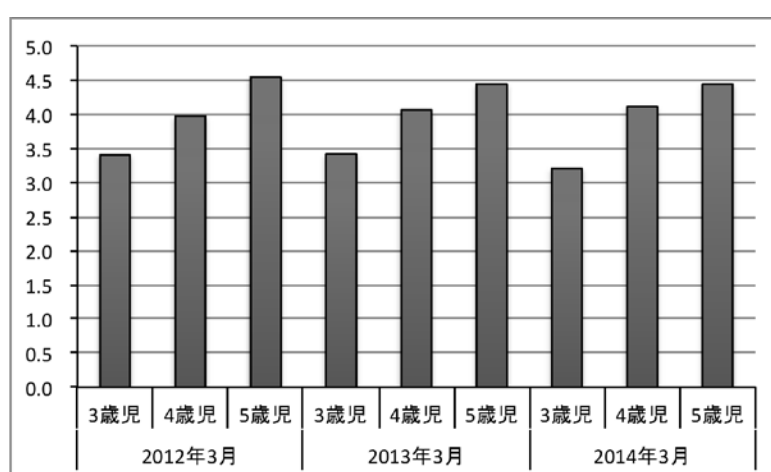


図 15 生活習慣領域における調査年×学年の交互作用に関する評定値

6) 遊び領域について

表 16 に条件ごとの人数を、表 17 に調査年ごとの学年別・男女別平均値と標準偏差及び度数を示した。

表 16 遊び領域における各条件の人数（度数）

		度数
調査年	2012年3月	851
	2013年3月	885
	2014年3月	920
学年	3歳児	704
	4歳児	967
	5歳児	985
性別	女	1331
	男	1325

このデータについて、調査年（3：2012年・2013年・2014年）×学年（3：3歳児・4歳児・5歳児）×性別（2：男・女）の3要因を独立変数として分散分析を行った。その結果、調査年、学年、性別の各要因の主効果が有意であり、調査年×学年の交互作用が有意であった。その他の交互作用は有意ではなかった。

2012年と2013年の評定値が2014年より高かった。2012年と2013年との間に差はみられなかった。また、3歳児より4歳児、5歳児が高く、5歳児は4歳児より評定値が高く、女子が男子よりも評定値が高かった。

表 17 遊び領域における調査年ごとの平均値、標準偏差及び度数

調査年	学年	性別	平均値	標準偏差	度数
2012年3月	3歳児	女	3.400	0.510	98
		男	3.309	0.568	123
	4歳児	女	3.813	0.578	156
		男	3.786	0.595	134
	5歳児	女	4.374	0.668	176
		男	4.221	0.636	164
2013年3月	3歳児	女	3.339	0.767	106
		男	3.326	0.727	108
	4歳児	女	3.927	0.541	173
		男	3.810	0.677	183
	5歳児	女	4.336	0.614	170
		男	4.151	0.774	145
2014年3月	3歳児	女	3.234	1.043	134
		男	3.055	0.891	135
	4歳児	女	3.922	0.545	159
		男	3.723	0.546	162
	5歳児	女	4.243	0.624	159
		男	4.172	0.773	171

表 18 遊び領域における調査年×学年×性別の分散分析結果

ソース	タイプ III 平方和	自由度	平均平方	F 値	有意確率
修正モデル	420.870 ^a	17	24.757	53.588	0.000
切片	36799.534	1	36799.534	79655.327	0.000
調査年	4.896	2	2.448	5.299	0.005
学年	384.267	2	192.133	415.887	0.000
性別	8.507	1	8.507	18.414	0.000
調査年 * 学年	4.560	4	1.140	2.468	0.043
調査年 * 性別	.421	2	0.210	0.455	0.634
学年 * 性別	.183	2	0.092	0.198	0.820
調査年 * 学年 * 性別	2.180	4	0.545	1.180	0.318
誤差	1218.715	2638	0.462		
総和	40762.240	2656			
修正総和	1639.585	2655			

a. R2 乗 = .257 (調整済み R2 乗 = .252)

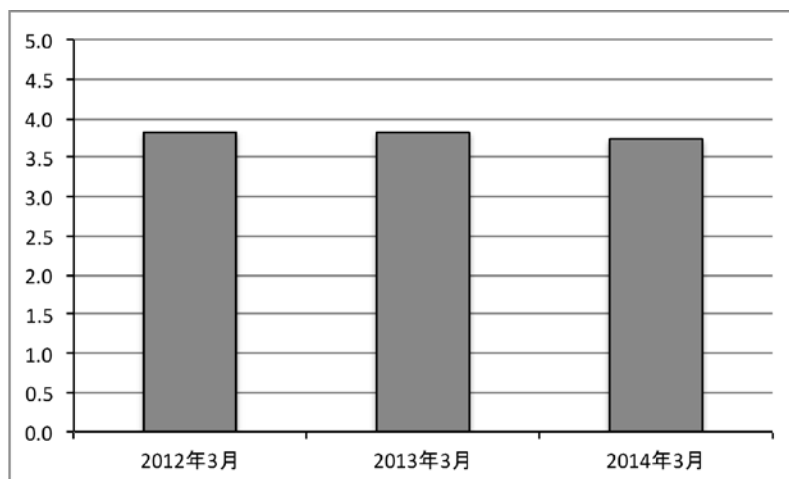


図 16 遊び領域における調査年に関する評定値

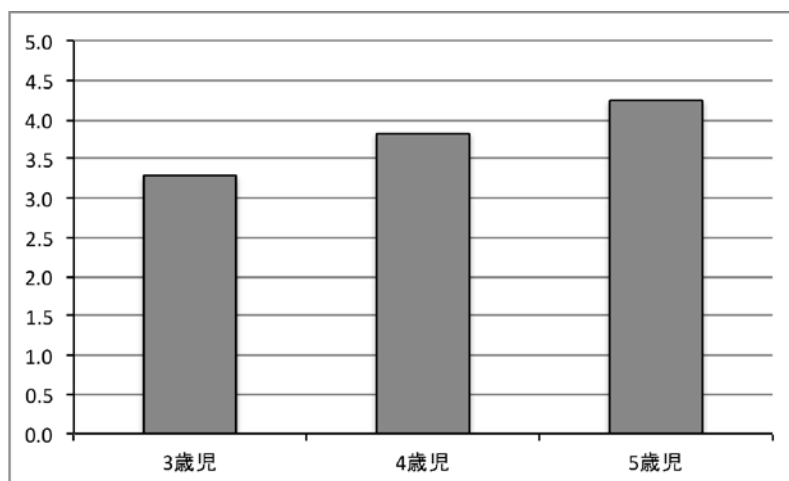


図 17 遊び領域における学年の主効果に関する評定値

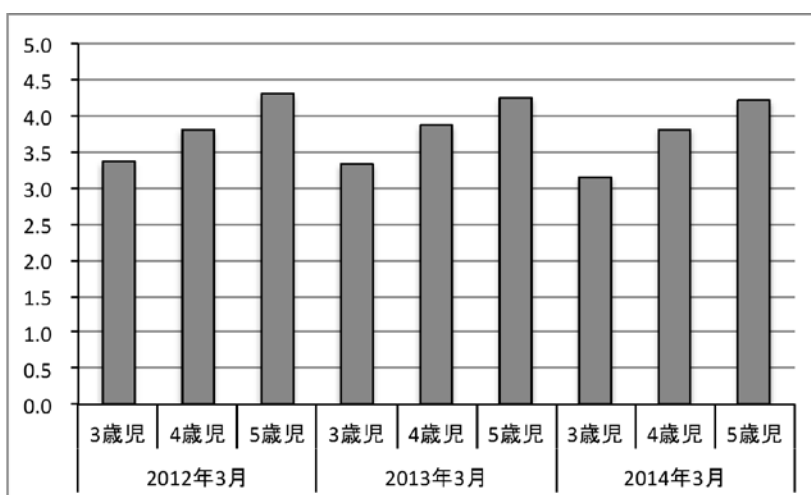


図 18 遊び領域における調査年×学年の交互作用に関する評定値

図 18 にみられるように、4 歳児、5 歳児については調査年による違いはみられなかったが、3 歳児については調査年による違いがみられた。すなわち、3 歳児については 2012 年よりも 2013 年、さらに 2014 年と評定値が低くなっていた。いっしょに遊ぼうと積極的に仲間に誘

う、遊びに欲しいものがあるとき、順番に待ったり貸したりとって、何とかして達成しようとする、友達とおもしろいアイデアを出しあって遊ぶ、遊びのルール（陣地ではつかまらないなど）を理解して遊ぶなどの項目から構成される社会的領域について、学年に対応した傾向が調査年によって異なることを示している。

（山崎 晃）

第4章 協力園保護者調査

加藤孝士

東日本大震災後、福島県下では、放射能汚染により長期的に戸外活動や食に対する制限が続いた。4年が過ぎる現在において、主要部の除染が進み放射線量は徐々に低下しており、保育所・幼稚園では戸外遊びの制限がなくなる園も増加している。しかしながら、すべての場所で除染が進んだわけではなく、多く継続的支援が必要である。また、この状況に至るまでに保護者がどのような気持であったのか、保護者がどのような視点で子どもを見ていたのかを明らかにしていくことは非常に重要である。具体的には、制限の中で、子どもの様子や養育環境をどのように捉えていたのか、その移り変わりはどうだったのかを明らかにすることで、支援の可能性を検討していく必要がある。

また、徐々に震災前の状況に戻りつつあるが、実際に震災前の状況に戻れているわけではない。県内の至るところにモニタリングポスト（リアルタイムに放射線量を測定する機器）があり、その日の天候により出かけ先や外遊びを考え、こまめに手を洗う。放射能による風評被害や、子ども達の将来の健康等、様々なことに不安を持ち続けるなど、「福島ならではの苦労や活動の制限」が日常の中に埋もれている。そのような中で子育てや保育を強いられている現状は、震災前に戻ったと解釈することはできない。更に、時が経つにつれて、新たな問題を孕む可能性もある。例えば、放射能に関する保護者間の意識の違いが、調査を重ねるたびに広がりを見せる可能性が指摘されている⁽¹⁾。

これらの状況を想定し、「災害時における保育問題検討委員会 福島ワーキンググループ」では、平成23年7月、平成24年1月（以下；2012年調査）に郡山市、福島市の協力園の養育者対象調査を行い、その結果を報告した（災害時における保育問題検討委員会、2013）。その後、これらの調査を引き継いだ放射能災害にかかる保育問題研究委員会 養育環境研究ワーキンググループにおいても同様の協力園を対象に、平成25年1月（以下；2013年調査）、平成26年1月（以下；2014年調査）に調査を行い、養育者の意識の把握に努めた。そこで、第1節では、これらの継続調査により得られたデータを基に、2012年調査、2013年調査、2014年調査の比較を行う。

また、本委員会の取り組みの一環として、協力園の保育者との意見交換を複数回行った。その中で、平成25年の意見交換会では、「今年の新入園児は、少し様子が違う」という意見が保育者から挙がった。これらの意見を踏まえ、委員会で検討した結果、出産直後に震災を経験し、自宅で過ごす時間が多くなった子どもが幼稚園に入園した際に、困難な状況を示している可能性が指摘された。そこで、養育環境研究ワーキンググループでは、調査協力園の平成25年、平成26年の新入園児の保護者を対象に意識調査を行った（「子どもへの心配」「生活の心配」「子どもへの関わり」「子育てでの心がけ」「ストレス」）。本章第2節では、新入生対象調査の結果を示し、新入園児養育者の意識の推移の明らかにすることを目的とした。また、県外の養育者との比較を行うため、徳島県でも同様の調査を行った。本報告では、徳島調査との比較を行い、県外の養育者との意識の差も検討する。

I 協力園継続調査について

1. 目的

本節では、平成 24 年 1 月、平成 25 年 1 月、平成 26 年 1 月に協力園の 7 園の保護者を対象に行った意識調査の中から、3 つの調査で共通して尋ねた質問項目（「子どもの活動について」「子どもに関する不安」「子育ての心がけ」「生活への心配ごと」「子どもへの関わり」）について、得点の推移を示し、震災後の子どもに対する意識や保護者の生活に関する意識の変化について明らかにすることを目的とした。

2. 方法

期間：平成 24 年 1 月、平成 25 年 1 月、平成 26 年 1 月

調査協力者：福島市、郡山市の協力幼稚園に子どもを通園させている保護者を対象とした。

調査協力者は、2012 年調査は 506 名、2013 年調査は 633 名、2014 年調査は 685 名であった。

調査手続き：園長、学級担任が保護者に質問紙を配布し、回収した。

フェイスシート：回答者の性別、年齢、子どもの出生順の記入を求めた。

調査内容

子どもの活動について：12 項目で構成され、5 件法で回答を求めた。

（1＝非常に減少した～5＝非常に増加した、表 1）

子どもに対する不安について：3 項目で構成され、5 件法で回答を求めた。

（1＝全く心配でない～5＝非常に心配、表 2）

子育てでの心がけ：子育ての心配に関しては、調査によって項目数が異なっていたため、ここでは、共通して調査を行った 9 項目の結果を報告する。5 件法で回答を求めた。

（1＝しない～5＝強く心がけた、表 3）

生活への心配：13 項目で構成され、5 件法で回答を求めた。

（1＝全く心配でない～5＝非常に心配、表 4）

子どもへの関わり：13 項目で構成されており、5 件法で回答を求めた。

（1＝まったくない～5＝よくある、表 5）

量的データの分析には、SPSS 22.0(for windows)を用いた。

3. 結果

(1) 子どもの活動について

震災後の子どもの生活や様子がどのように変化したのかを検討するため、各調査において頻度の増減を尋ね、得点を比較した（表1）。

その結果、すべての項目において有意差が確認された。ここでは、1)子ども生活の変化、2)子どもの様子の変化に分類し以下に説明する。

1) 生活の変化

生活の変化では、「1. 友達と遊ぶ機会」「2. 外遊びの時間」において、2013年、2014年は2012年よりも得点が高く、震災後1年は友達との遊びや外遊びが減少したが、2年目、3年目は増加していたことが示された。また、「3. テレビの視聴時間」に関しては、年々得点が低くなっていることが示された。これらの結果により、震災後1年目は行うことができなかった、友達との交流や、外遊びが2年目以降できるようになったこと、テレビの視聴の増加が軽減されていたことが示された。

表1 子どもの活動についての平均値（標準偏差）

質問項目	2012年	2013年	2014年	F値	多重比較
1 友達と遊ぶ機会	2.63 (0.84)	3.32 (0.91)	3.34 (0.90)	112.29 ***	12<13,14
2 外遊びの時間	1.90 (1.01)	3.10 (1.15)	3.21 (0.98)	259.32 ***	12<13,14
3 テレビの視聴時間	3.85 (0.79)	3.45 (0.85)	3.14 (0.73)	114.51 ***	12>13>14
4 手伝い	3.45 (0.63)	3.66 (0.63)	3.73 (0.61)	30.86 ***	12<13,14
5 睡眠時間	2.96 (0.45)	3.03 (0.51)	3.04 (0.56)	3.31 *	12<14
6 情緒不安定な言動	3.15 (0.63)	3.00 (0.64)	3.01 (0.60)	9.75 ***	12>13,14
7 わがままな言動	3.43 (0.69)	3.30 (0.75)	3.29 (0.76)	5.50 **	12>13,14
8 活発な言動	3.33 (0.67)	3.64 (0.71)	3.75 (0.68)	55.17 ***	12<13<14
9 自立的な言動	3.50 (0.73)	3.89 (0.65)	3.89 (0.64)	61.91 ***	12<13,14
10 放射能に関する発言	3.33 (0.92)	2.77 (0.90)	2.73 (0.79)	81.35 ***	12>13,14
11 思いやり	3.44 (0.62)	3.70 (0.64)	3.73 (0.64)	36.07 ***	12<13,14
12 幼稚園での出来事を話す回数	3.45 (0.73)	3.91 (0.81)	3.87 (0.79)	58.01 ***	12<13,14

* $p<.05$, ** $p<.01$, *** $p<.001$

2) 子どもの様子の変化

子どもの様子の変化では、「4. 手伝い」「9. 自立的な言動」「11. 思いやり」「12. 幼稚園での出来事を話す回数」において、2013年、2014年は2012年よりも得点が高く、震災後1年目に比べ、2年、3年目はこれらの行動の増加が確認された。また、「8. 活発な活動」に関しては、それぞれの年に有意差が確認され、年を追うごとに活発な行動が増えていることが示された。更に「5. 睡眠時間」については、2014年は、2012年よりも得点が高く、よく眠れていることが示された。このように得点が高くなった行動は、子どものポジティブな行動についてのものであり、時間が経過することで、子どもの行動をポジティブにとらえるようになってきたことが示された。

一方で、「6. 情緒不安定な言動」「7. わがままな言動」「10. 放射能に関する発言」においては、2013年、2014年は2012年よりも得点が低く、震災後1年目に比べ、2年目、3年目はこれらの行動が少なくなっていることが示された。ここで挙げられたものは、子どものネガティブな行動や、放射能に関することであり、震災が導いた子どもの行動と考えられる。よって、1年目には、ネガティブな行動の増加が目立ったが、2年目以降はそれらの行動の増加が少なくなったことが確認された。

以上の様に、保護者は年を追うごとに子ども達の環境や様子に対しポジティブな要素が増え、ネガティブな要素が減少したとの認識であることが分かった。しかしながら、今回の調査では、2013年の子どもの様子と比較して評価していることから（「増加した」など）、震災前と比較しどの程度環境が回復したのかは明らかにされていない。そのため、今後の推移にも注目する必要があるだろう。

(2) 子どもに対する不安について

続いて、子どもに対する不安に関する項目の得点を調査年ごとに比較した(表2)。

その結果、すべての項目において有意差が確認された。具体的には、「1. 子どもの外遊び」「2. 子どもの友達との交流」は、それぞれの調査ごとに有意な差が確認され、2012年の調査が最も得点が高く、2013年、2014年と徐々に得点が低くなり、年を追うごとに不安が減少したことが確認された。また、「3. 子どもの学力」については、2014年は2012年、2013年よりも得点が低く、震災後3年目で不安の増加が減少したことが示された。

以上のように年を追うごとに不安は低減していることが示された。しかしながら、平均値から推測すると、外遊びについて未だに高い不安が確認されており、今後の推移にも注目する必要があるだろう。

表2 子どもに対する不安についての平均値（標準偏差）

質問項目	2012年	2013年	2014年	F値	多重比較
1 子どもの外遊びについて	4.20 (0.84)	3.74 (0.97)	3.24 (1.16)	130.35 ***	12>13>14
2 子どもの友達との交流について	3.38 (0.99)	3.23 (0.95)	2.70 (1.06)	77.38 ***	12>13>14
3 子どもの学力	3.19 (0.95)	3.30 (0.96)	2.66 (1.12)	69.01 ***	12,13>14

*** $p<.001$

(3) 子育ての心がけ

子育てをする上での心がけの項目得点を調査年ごとに比較した。(表3)。

その結果、「1. 家族での近所への外出」「5. 近所の人との交流」「6. 他の保護者との付き合い」といった、普段の生活圏内の活動や人とのつながりについて2013年、2014年は2012年よりも得点が高く、震災後2年を経過した後に、近所との交流が盛んになったことが伺えた。また、「4. 家の中で家族一緒に過ごす時間」「9. 子どもの将来についての会話」において、2013年、2014年は、2012年よりも得点が低く、震災後2年を経過した後に、家族で過ごす時間や子どもの将来への会話の増加に陰りがみえたことが示された。更に、「7. 家族でテレビを見る時間」は、増加が、年々少なくなっていることも示された。加えて、「8. 家族で食事をする回数」は、2014年が2012年よりも得点が低く、家族での食事の回数の増加が少なくなっていることが示された。

以上のように、家族外での関わりの増加が、震災後2年を一つの区切りとして広がりを見せたことが示された。また、家庭内の関わりの増加少なくなっているが、平均点からは、年々繋がりは微増しており、関わり自体は増えていることも明らかとされている。また、テレビの視聴に関しても、年々増加が少なくなっており、震災後の急激なテレビ視聴の増加が落ちていることが示された。

表3 子育ての心がけの平均値 (標準偏差)

質問項目	2012年	2013年	2014年	F値	多重比較
1 家族での近所への外出	2.63 (0.91)	3.21 (0.79)	3.30 (0.72)	112.40 ***	12<13,14
2 家族での遠方への外出	3.10 (1.04)	3.13 (0.88)	3.15 (0.77)	0.44	
3 家族の会話	3.25 (0.54)	3.29 (0.58)	3.34 (0.62)	2.79	
4 家の中で家族一緒に過ごす時間	3.48 (0.74)	3.26 (0.66)	3.20 (0.66)	25.47 ***	12>13,14
5 近所の人との交流	2.81 (0.66)	3.07 (0.66)	3.10 (0.58)	34.89 ***	12<13,14
6 他の保護者との付き合い	3.02 (0.67)	3.35 (0.74)	3.27 (0.75)	30.87 ***	12<13,14
7 家族でテレビを見る時間	3.56 (0.70)	3.26 (0.65)	3.14 (0.54)	66.52 ***	12>13>14
8 家族で食事をする回数	3.13 (0.50)	3.11 (0.51)	3.06 (0.48)	3.93 *	12>14
9 子どもの将来についての会話	3.55 (0.69)	3.45 (0.64)	3.40 (0.59)	8.15 ***	12>13,14

* $p<0.05$, *** $p<0.001$

(4) 生活への心配ごと

生活に関する心配事の項目の得点を調査年ごとに比較した。(表4)。

その結果、すべての項目で有意差が確認された。具体的には、「2. 知人の避難」「3. 支援が継続するか」「8. 自分や家族の健康」「12. 地域の放射線量」において、調査ごとに有意差が確認され、年を追うごとに不安が低下していることが示された。また、「4. 食材の放射線量」「5. 他者との交流の不足」「11. 幼稚園の放射線量」「13. 原発事故の問題の風化」については、2013年、2014年は、2012年に比べ得点が低く、震災後2年経ったところに、不安が減少したことが示された。更に、「1. 風評被害」「6. 他の人との意見の違い」「7. 今後の経済面や仕事」「9. 地域の活性化」「10. 子育てや教育の方法」については、2014年は、2012年、2013年よりも得点が低く、震災後3年たってから、不安が減少に向かったことが示された。このように、時間が経つにつれ保護者の不安は低減していることが示された。

しかしながら、平均値をみると“4”を超える非常に心配度が高い項目もいくつもあり、“3.5”前後の項目も存在する。よって、いまだに高い不安状態にあることがみてとれる。

表4 生活への心配ごとの平均値(標準偏差)

質問項目	2012年	2013年	2014年	F値	多重比較
1 風評被害	3.88 (0.94)	3.77 (0.90)	3.55 (0.98)	19.06 ***	12,13>14
2 知人の避難	3.29 (0.90)	3.06 (0.96)	2.81 (0.99)	36.78 ***	12>13>14
3 支援が継続するか	4.08 (0.80)	3.89 (0.99)	3.51 (1.07)	51.54 ***	12>13>14
4 食材の放射線量	4.22 (0.84)	3.97 (0.92)	3.90 (0.97)	18.00 ***	12>13,14
5 他者との交流の不足	3.19 (0.79)	2.91 (0.80)	2.98 (0.89)	15.81 ***	12>13,14
6 他の人との意見の違い	3.12 (0.80)	3.01 (0.88)	2.85 (0.87)	15.60 ***	12,13>14
7 今後の経済面や仕事	3.74 (0.92)	3.63 (0.99)	3.48 (1.03)	9.97 ***	12,13>14
8 自分や家族の健康	4.44 (0.77)	4.23 (0.81)	4.08 (0.84)	28.51 ***	12>13>14
9 地域の活性化	3.54 (0.86)	3.53 (0.89)	3.22 (0.89)	26.56 ***	12,13>14
10 子育てや教育の方法	3.73 (0.85)	3.70 (0.88)	3.50 (0.86)	12.58 ***	12,13>14
11 幼稚園の放射線量	3.50 (1.02)	2.89 (1.08)	2.79 (1.04)	71.90 ***	12>13,14
12 地域の放射線量	3.88 (0.93)	3.57 (0.98)	3.26 (1.00)	58.19 ***	12>13>14
13 原発事故の問題の風化	4.41 (0.76)	3.98 (0.93)	3.96 (0.94)	44.68 ***	12>13,14

*** $p<.001$

(5) 子どもへの関わり

次に、子どもへの関わり方についての項目の得点を調査年ごとに比較した。(表5)。

その結果、「3. 友だちとどのように遊ぶか、付き合うかは子どもに任せている」「10. 子どもは小さいうちにしっかりとしつけなくてはいけない」という項目において、2014年は2012年に比べて得点が高く、友だち選を自由にさせる反面、しつけに対する意識が増していることが示された。また、「6. 子どものためにやってやれることは、多少犠牲になってもやってやりたい」の項目において、2014年は2013年に比べ得点が低く、意識が低くなっていることが示された。「8. 自分のことで頭がいっぱいで、子どものことに関心を向ける余裕がない」において、2014年に得点が高くなっており徐々に親自身の余裕がなくなっていることが示された。また、「13. 子どものことを誇りに思う」に関しては、2014年に得点が低くなっており、子どもを誇りとの思いが減っていることが示された。

表5 子どもへの関わりの平均値(標準偏差)

質問項目	2012年	2013年	2014年	F値	多重比較
1 子どもが外で何をしているのか、 気にならない	2.25 (1.15)	2.32 (1.16)	2.37 (0.95)	1.59	
2 夫(妻)は、もう少し子どものことを 考えてほしい	2.66 (1.13)	2.77 (1.19)	2.78 (1.10)	1.81	
3 友だちとどのように遊ぶか、付き合うかは 子どもに任せている	3.31 (0.96)	3.40 (0.90)	3.47 (0.82)	4.70 **	12<14
4 子どもに対して、自分は何れほど力に なれるか自信がない	2.81 (0.95)	2.79 (0.94)	2.78 (0.89)	0.14	
5 子どもとゆっくり話をする機会はあまりない	2.18 (0.93)	2.23 (1.02)	2.26 (0.89)	1.03	
6 子どものためにやってやれることは、 多少犠牲になってもやってやりたい	3.93 (1.02)	4.02 (0.91)	3.81 (0.90)	7.70 ***	13>14
7 親が厳しくしつけなくても、子どもは自然に 育っていく	2.81 (0.92)	2.82 (0.88)	2.78 (0.86)	0.37	
8 自分のことで頭がいっぱいで、子どものこと に関心を向ける余裕がない	1.95 (0.87)	1.93 (0.88)	2.13 (0.83)	10.11 ***	12,13<14
9 子どものことが気になるが、どうしてよいか 分からない	2.46 (1.05)	2.44 (0.99)	2.42 (0.92)	0.18	
10 子どもは小さいうちにしっかりとしつけなくて はいけない	3.40 (0.97)	3.46 (0.85)	3.53 (0.84)	3.25 *	12<14
11 子どもには、社会的に尊敬される職業や 地位についてほしい	2.89 (0.91)	2.92 (0.89)	2.87 (0.93)	0.58	
12 子どもの良いところをほめるようにしている	4.24 (0.72)	4.25 (0.70)	4.18 (0.63)	1.84	
13 子どものことを誇りに思う	4.37 (0.78)	4.43 (0.72)	4.26 (0.74)	9.11 ***	12,13>14

* $p<0.05$, ** $p<0.01$, *** $p<0.001$

4. まとめ

(1) 生活・子どもの変化

加藤⁽²⁾は、震災後半年間は、多くの家庭で友達との遊びや外遊びが減少し、テレビの視聴が増加するなどの生活の変化を報告している。一方、家族との関わりは、増加傾向にあり、家族で過ごす時間や会話、子どもの将来について話す回数などが増えていた。

本調査でも、2012年は友達との遊び、外遊びの時間が減少した子どもが多かった。しかし、2013年以降は友達との交流が増え、外遊びが増加するなど生活が徐々に改善されている。特に今回の調査では、震災後2年（2012年調査）と3年（2013年調査）の調査間で差が確認された項目が多かった（具体的には、「友達と遊ぶ機会」「外遊びの時間」「情緒不安定な言動」「近所への外出」「他の保護者との付き合い」等）。これらの項目をみると、友達と遊ぶ機会や、近所への外出、他の保護者との付き合い等で、震災後の高放射線量によって生じた問題と関連するものだった。したがって、除染や室内施設の増加、食の放射線量の開示等が進むことで、震災後2年～3年の間に外出への抵抗が減った可能性がある。特に生活への心配において、「幼稚園の放射線量」について、2012年と2013年、2014年の調査間に有意差が確認されている。この結果から、幼稚園は他の場所に比べ早い段階から除染が進み、早期から不安度の低い子どもの活動の拠点となったと考えられる。そして、友人との関わりや近所への外出が増えることで、家族での会話や子どもについての将来の会話が比率的には減少している。とはいえ、家族と一緒に過ごす時間、将来についての会話等に関しても、平均値が高く、多くの家庭での関わり合いの強い結びつきが損なわれたわけではないことが推測される。

(2) 未だに高い不安

もう一つの特徴として挙げられるのが、未だに高い不安が継続しているということである。具体的には、「食材の放射線量（3.90）」「自分や家族の健康（4.08）」といった、放射能災害による健康被害を不安視する項目や、「原発事故の問題風化（3.96）」といった原発事故が忘れ去られることへの不安は、2014年の平均が非常に高い状態が続いている。これは、モニタリングポスト等で把握しやすい空間線量に比べ、数値を示すことが難しい食材の放射性物質への心配や、それによって、どのような健康被害が示されるかが不透明な状況が継続的に続くことへの不安が影響していると考えられる。また、震災後4年が過ぎたことで、問題が収束したとされることへの不安が高いと考えられる。

また、「風評被害（3.55）」「支援が継続するか（3.51）」「今後の経済面や仕事（3.48）」といった生活に関する不安や「子育てや教育の方法（3.50）」といった子育てに関する項目でも高い不安が続いていることが示された。これらの数値も、調査を重ねるごとに減少はしているが、先に挙げた「原発問題の風化」といった社会認識のもと、経済的部分への不安が大きくなっているであろう。

一方で、加藤⁽¹⁾においては、保護者同士の意見の違い等が大きくなる可能性が指摘されていたが、他の人との意見の違いに関する項目は、減少しており、平均値の数値からも、意見の相違がなくなってきたことが示された。これは、第6章にも述べられているように、保護者の避難等も関係していると考えられる。すなわち、外遊び等の制限がない状況が一般的になり始めた福島において、その状況になじめない親は、生活へのストレスを感じやすく、避難へと向かいやすいと考えられる。よって、避難等により意見が集約された可能性もある
(加藤孝士)

Ⅱ 2013年、2014年、新入園児保護者調査

1. 目的

本節では、2013年、2014年の新入園児の保護者の意識（「子どもへの心配」「生活の心配」「子どもへの関わり」「子育てでの心がけ」「ストレス」）の推移の明らかにすることを目的とした。また、徳島県でも同様の調査を行い県外の保護者との比較も行った。

本目的と達成するため、ここでは福島県のデータを中心に報告する。

2. 方法

期間：平成25年7月、平成26年9月

調査協力者：2013年福島市、郡山市、徳島市の幼稚園新入園児の保護者（合計：281名）、2014年福島市、郡山市、徳島市の幼稚園新入園児の保護者（回答者数：246名）を対象とした。2013年の福島県の調査対象者は209名、2014年度の福島県の調査対象者192名、徳島県の調査協力者は126名であった。

調査手続き：園長、学級担任が保護者に質問紙を配布し、回収した。

フェイスシート：回答者の性別、年齢、子どもの出生順の記入を求めた。

調査内容（量的データ）

子どもへの心配：24項目で構成され、5件法で回答を求めた。

（1＝全く心配でない～5＝非常に心配）現在の心配の評定と合わせ、回想法により入園前の心配の評定も求めた（表6、表7）

子育ての心がけ：22項目で構成され、5件法で回答を求めた。

（1＝しない～5＝強く心がけた、表8）

生活の心配ごと：13項目で構成され、5件法で回答を求めた。

（1＝全く心配でない～5＝非常に心配、表9）

保護者のストレス：8項目で構成されており、4件法で回答を求めた。

（1＝まったくない～4＝よくある、表10）

子どもへの関わり：13項目で構成されており、5件法で回答を求めた。

（1＝まったくない～5＝よくある、表11）

量的データの分析には、SPSS 22.0(for windows)を用いた。

自由記述

「子どもの発達について気になっていること」「大変だと感じていること」「喜びや充実感を関していること」「幼稚園に入園したことでの変化」について自由に記述してもらった。

自由記述の分析には、樋口^③を参考に、KH Coderを使用した。

3. 結果

(1) 子どもへの心配について（入園前）

入園前に抱いていた子どもへの心配の違いを検討するため、2013年調査、2014年調査、徳島調査の得点を比較した（表6）。

その結果、「3. 外遊びが十分に出来ていない」との心配事はすべての調査間に有意差が確認された。具体的には2014年は2013年に比べ得点が低く、徳島は2014年に比べ得点が低いことが示され、外遊びについては徐々に心配は減少しているが、他県と比べると依然と高い状態が続いていることが示された。また、「6. 自分のことが出来ない」との心配事は、2014年と徳島は2013年よりも得点が低く、自律性に関しては、徐々に心配が少なくなっていることが示された。「12. フォークなどが使えない」「23. 学力」については、2014年は2013年に比べ得点が低く、心配が減少していることが示された。続いて、「16. おもちゃなどを独り占めする」といった友達との遊びに関する項目は、2013年は、徳島よりも得点が高く、心配が強いことが示された。

以上の様に、2014年は2013年に比べると全体的に得点が低く、徐々に心配が減少していることが示された一方で、他県と比べると依然として心配が高い状態であることが示された。

表6 入園前の子どもへの不安の平均値（標準偏差）

質問項目	2013年	2014年	徳島	F値	多重比較
1 おむつが取れない	2.80 (1.50)	2.72 (1.48)	2.56 (1.47)	0.98	
2 聞き分けが悪い	3.17 (1.14)	3.05 (1.18)	2.94 (1.13)	1.64	
3 外遊びが十分に出来ていない	3.74 (1.16)	3.35 (1.28)	2.96 (1.29)	15.75 ***	13>14>徳島
4 友達と遊んでいない	3.25 (1.28)	3.07 (1.25)	3.06 (1.31)	1.27	
5 よく転ぶ	2.36 (1.20)	2.14 (1.14)	2.20 (1.18)	1.90	
6 自分のことが出来ない	2.88 (1.22)	2.57 (1.18)	2.55 (1.09)	4.63 **	13>14, 徳島
7 言葉の発達が遅い	2.09 (1.30)	2.09 (1.25)	1.96 (1.20)	0.51	
8 すぐ泣く	2.67 (1.19)	2.62 (1.17)	2.53 (1.20)	0.56	
9 親から離れるのを嫌がる	2.66 (1.31)	2.68 (1.42)	2.74 (1.39)	0.12	
10 食が細い	2.59 (1.34)	2.64 (1.36)	2.53 (1.41)	0.23	
11 好き嫌いが多い	3.19 (1.30)	2.99 (1.30)	2.97 (1.37)	1.52	
12 フォークなどが使えない	1.87 (1.05)	1.64 (0.85)	1.89 (1.04)	3.54 *	13>14
13 こだわりがある	2.89 (1.06)	2.69 (1.11)	2.60 (1.21)	2.95	
14 すぐに疲れる	2.22 (1.11)	2.24 (1.13)	2.05 (1.01)	1.33	
15 じっとしていられない	2.77 (1.22)	2.80 (1.29)	2.51 (1.18)	2.47	
16 おもちゃなどを独り占めする	2.98 (1.13)	2.80 (1.22)	2.64 (1.16)	3.33 *	13>徳島
17 滑り台やブランコなどで遊ばない	1.78 (1.10)	1.71 (0.99)	1.75 (1.05)	0.27	
18 人見知りなどをする	2.39 (1.19)	2.42 (1.32)	2.49 (1.31)	0.27	
19 新しい場になかなか慣れない	2.65 (1.23)	2.80 (1.29)	2.60 (1.38)	1.13	
20 虫などを怖がる	2.58 (1.14)	2.63 (1.21)	2.55 (1.25)	0.22	
21 寒さ、暑さに弱い	2.25 (0.96)	2.18 (0.98)	2.16 (1.00)	0.46	
22 夜泣きをする	2.03 (1.20)	1.84 (1.18)	1.75 (1.07)	2.50	
23 学力	2.60 (1.10)	2.30 (1.11)	2.40 (1.07)	3.78 *	13>14
24 怒ったり、かんしゃくをおこす	2.91 (1.21)	2.76 (1.15)	2.73 (1.28)	1.17	

* $p<.05$,** $p<.01$,*** $p<.001$

(2) 子どもへの心配について（調査時）

続いて、調査時の心配についての得点を入学前と同様に比較した（表7）。

その結果、「3. 外遊びが十分に出来ていない」については、入園前と同様に2014年は2013年に比べ得点が低く、徳島は2014年に比べ得点が低いことが示され、外遊びについては徐々に心配は減少しているが、他県と比べると依然と高い状態が続いていることが示された。また、「1. おむつが取れない」「2. 聞き分けが悪い」「11. 好き嫌が多い」「13 こだわりがある」といった項目で2013年は徳島に比べ得点が高いことが示された。そして、「20. 虫などを怖がる」については、2014年に比べ徳島の得点が低いことが示された。更に、「6. 自分のことが出来ない」「22. 夜泣きする」「23. 学力」に関して、2013年は、2014年、徳島に比べ得点が高いことが示された。続いて、「15. じっとしてられない」に関して、福島の前保護者は徳島に比べて得点が高く、心配が大きいことが示された。加えて、「12. フォークなどが使えない」に関して、2014年は、2013年に比べ得点が低いことが示された。

以上のように、入学前と比較して多くの項目で有意差が確認された。実際に心配の得点は入園前と比較するとおおよそ低下しているため、入園による園活動によって心配は減少しているとは考えられる。しかしながら、福島の前保護者はその不安の低下が低いと考えられる。よって、今後は他の項目との関係を検討し、福島において心配が低下しにくかった要因を探っていくことも必要になるだろう。

表7 調査時の子どもへの不安の平均値（標準偏差）

質問項目	2013年	2014年	徳島	F値	多重比較
1 おむつが取れない	1.95 (1.34)	1.67 (1.10)	1.56 (1.05)	4.96 **	13>徳島
2 聞き分けが悪い	2.99 (1.12)	2.85 (1.09)	2.65 (1.09)	3.62 *	13>徳島
3 外遊びが十分に出来ていない	2.85 (1.16)	2.53 (1.11)	1.76 (1.00)	38.01 ***	13>14>徳島
4 友達と遊んでいない	2.25 (1.02)	2.23 (1.01)	2.00 (1.11)	2.62	
5 よく転ぶ	2.22 (1.14)	1.98 (1.02)	1.98 (1.03)	2.95	
6 自分のことが出来ない	2.48 (1.04)	2.02 (0.91)	2.01 (0.93)	14.51 ***	13>14, 徳島
7 言葉の発達が遅い	1.80 (1.03)	1.79 (0.96)	1.70 (0.98)	0.43	
8 すぐ泣く	2.59 (1.16)	2.46 (1.06)	2.41 (1.17)	1.10	
9 親から離れるのを嫌がる	2.18 (1.05)	2.21 (1.09)	2.08 (1.14)	0.58	
10 食が細い	2.43 (1.24)	2.40 (1.27)	2.17 (1.22)	1.95	
11 好き嫌が多い	3.07 (1.27)	2.84 (1.26)	2.67 (1.31)	4.20 *	13>徳島
12 フォークなどが使えない	1.73 (0.93)	1.50 (0.72)	1.71 (0.95)	4.11 *	13>14
13 こだわりがある	2.77 (1.03)	2.59 (1.08)	2.37 (1.09)	5.83 **	13>徳島
14 すぐに疲れる	2.12 (1.03)	2.10 (1.06)	2.01 (1.00)	0.51	
15 じっとしてられない	2.63 (1.13)	2.57 (1.19)	2.21 (1.01)	5.84 **	13, 14>徳島
16 おもちゃなどを独り占めする	2.77 (1.05)	2.65 (1.17)	2.48 (1.06)	2.66	
17 滑り台やブランコなどで遊ばない	1.53 (0.80)	1.54 (0.79)	1.48 (0.84)	0.19	
18 人見知りなどをする	2.11 (1.08)	2.18 (1.10)	2.07 (1.09)	0.39	
19 新しい場になかなか慣れない	2.33 (1.08)	2.39 (1.08)	2.13 (1.12)	2.19	
20 虫などを怖がる	2.45 (1.12)	2.53 (1.18)	2.18 (1.16)	3.55 *	14>徳島
21 寒さ、暑さに弱い	2.15 (0.94)	2.12 (0.95)	2.06 (0.97)	0.42	
22 夜泣きをする	1.88 (1.09)	1.58 (0.92)	1.56 (0.85)	6.33 **	13>14, 徳島
23 学力	2.59 (1.08)	2.25 (1.09)	2.30 (1.01)	5.54 **	13>14, 徳島
24 怒ったり、かんしゃくをおこす	2.94 (1.24)	2.83 (1.16)	2.63 (1.27)	2.42	

* $p<.05$, ** $p<.01$, *** $p<.001$

(3) 子育ての心がけ

子育ての心がけについて検討するため、調査時期、地域ごとに比較した(表8)。

その結果、「2. 出来るだけ子どもの外出を控える」について、2014年は2013年に比べ得点が低く、徳島は2014年に比べ得点が低いことが示され、外出を控えるといった意識は減少しているが、他県と比べると依然と高い状態が続いていることが示された。それ以外の項目では、福島と徳島間のみには差が確認された。具体的には、「4. 家周辺の除染に努める」「5. 室内で遊べる遊具をそろえる」「12. 屋内競技場に連れて行く」「13. 放射線量を確認しながら線量の低いところに行く」「15. 外の土や植物に触れさせないようにする」といった放射能に直接関係する項目に関して2013年、2014年ともに徳島に比べ意識されていることが示された。また、「9. 身体活動(運動)を多くする」「11. 近所への外出を増やす」「20. 近所の人との交流を増やす」という日常の何気ない活動について2013年、2014年ともに、徳島に比べ意識が低いことが示された。更に、「1. 食材(産地)に気をつける」「8. 親子の時間を楽しく過ごす」「14. 子どもの生活習慣を早く自立させる」「16. 習い事、塾などを早めに始める」「17. 地域の行事などふれあいの場に参加する」「21. 家族で過ごす時間を増やす」といった項目において、2013年は徳島よりも得点が低く、意識が低いことが示された。

表8 子育ての心がけの平均値(標準偏差)

質問項目	2013年	2014年	徳島	F値	多重比較
1 食材(産地)に気をつける	3.66 (1.02)	3.65 (1.03)	3.92 (0.81)	3.63 *	13<徳島
2 出来るだけ子どもの外出を控える	3.02 (1.02)	2.73 (1.11)	1.97 (0.92)	41.17 ***	13>14>徳島
3 子どもの嫌がることはしない	2.97 (0.76)	2.98 (0.80)	2.86 (0.81)	1.07	
4 家周辺の除染に努める	3.00 (1.09)	2.92 (1.13)	1.61 (0.84)	79.03 ***	13,14>徳島
5 室内で遊べる遊具をそろえる	3.18 (1.15)	3.11 (1.05)	2.43 (1.06)	20.90 ***	13,14>徳島
6 子どもの要求を否定しない	3.00 (0.73)	3.04 (0.77)	3.03 (0.76)	0.12	
7 しつけはきちんとする	3.93 (0.65)	4.01 (0.65)	4.02 (0.67)	1.19	
8 親子の時間を楽しく過ごす	3.95 (0.70)	4.09 (0.62)	4.18 (0.57)	5.20 **	13<徳島
9 身体活動(運動)を多くする	3.17 (1.02)	3.27 (0.94)	3.77 (0.80)	16.96 ***	13,14<徳島
10 遠方に行って戸外で遊ばせる	3.50 (1.12)	3.56 (1.03)	3.27 (0.98)	2.98	
11 近所への外出を増やす	2.87 (0.79)	2.97 (0.79)	3.61 (0.81)	36.90 ***	13,14<徳島
12 屋内競技場に連れて行く	3.72 (0.93)	3.74 (0.91)	2.85 (1.07)	40.73 ***	13,14>徳島
13 放射線量を確認しながら、線量の低いところに行く	3.34 (1.08)	3.40 (1.10)	1.54 (0.85)	148.42 ***	13,14>徳島
14 子どもの生活習慣を早く自立させる	3.18 (0.74)	3.19 (0.77)	3.40 (0.89)	3.71 *	13<徳島
15 外の土や植物に触れさせないようにする	3.54 (1.05)	3.36 (1.05)	1.69 (0.90)	145.04 ***	13,14>徳島
16 習い事、塾などを早めに始める	2.01 (1.05)	2.09 (0.96)	2.34 (1.21)	3.84 *	13<徳島
17 地域の行事などふれあいの場に参加する	2.64 (1.21)	2.81 (1.12)	3.10 (1.16)	5.97 **	13<徳島
18 外出後の手洗いがい、着替えなどをしっかりする	3.97 (0.76)	3.83 (0.90)	3.91 (0.91)	1.30	
19 家の中で植物を育てたり、生き物を飼ったりする	2.68 (1.18)	2.63 (1.21)	2.86 (1.27)	1.39	
20 近所の人との交流を増やす	2.93 (0.94)	2.93 (0.99)	3.17 (0.98)	3.12 *	13,14<徳島
21 家族で過ごす時間を増やす	3.71 (0.75)	3.79 (0.81)	3.94 (0.82)	3.27 *	13<徳島
22 育児書などの図書を頻繁に読む	2.52 (1.14)	2.61 (1.04)	2.79 (1.16)	2.36	

* $p<.05$, ** $p<.01$, *** $p<.001$

(4) 生活の心配事

子育てに限らず、生活全般における心配事を調査時期、地域ごとに比較した（表9）。

その結果、福島調査（2013年、2014年）と徳島間でのみ有意差が確認され、いずれも福島の保護者の不安が高いことが示された。具体的には、2013年、2014年ともに、徳島に比べ、「1. 風評被害」「7. 今後の経済面や仕事」「8. 自分や家族の健康」「12. 地域放射線量」の不安が高いことが示された。また、「3. 支援が継続するのか」「4. 食材の放射線量」については、2013年と徳島間で、「6. 他人との意見の違い」「11. 幼稚園の放射線量」については2014年と徳島間で差が確認され、福島の保護者は不安が高いことが示された。

以上の様に、全般的に生活への心配事が高い状態であることが示された。特に、風評被害や経済的な面といった生活に直結した問題、健康や放射線量といった健康被害についての不安はいまだ高い状態であることが示された。そのことは、有意差の確認された項目の平均値の高さからも伺える。

また、他人との意見の違い、幼稚園の放射線量というのは、2014年と徳島の間でのみ差が確認されており、心配が増加した可能性が示唆された。これは継続調査と異なる結果であった。これにより、時間の経過とともに、保護者の意見の違いや、放射能に関する考えに変化があり、時間の経過によって新たな問題が浮き彫りになっている可能性もある。しかしながら平均値からは、心配の度合いは低いことが推測されることから、現在のところ大きな問題は含んでいないと考えられる。

表9 生活への心配ごとの平均値（標準偏差）

質問項目	2013年	2014年	徳島	F値	多重比較
1 風評被害	3.64 (0.93)	3.41 (1.02)	2.72 (1.18)	32.17 ***	13,14>徳島
2 知人の避難	2.88 (1.07)	2.69 (1.06)	2.74 (1.14)	1.59	
3 支援が継続するのか	3.57 (1.04)	3.41 (1.20)	3.18 (1.24)	4.40 *	13>徳島
4 食材の放射線量	4.15 (0.92)	3.99 (0.94)	3.77 (1.16)	5.84 **	13>徳島
5 他者との交流の不足	2.93 (0.90)	2.81 (0.97)	2.83 (1.14)	0.81	
6 他人との意見の違い	2.80 (0.90)	2.86 (0.99)	2.58 (0.96)	3.43 *	14>徳島
7 今後の経済面や仕事	3.41 (1.16)	3.28 (1.15)	2.91 (1.17)	7.44 **	13,14>徳島
8 自分や家族の健康	4.25 (0.79)	4.19 (0.92)	3.65 (1.05)	18.99 ***	13,14>徳島
9 地域の活性化	3.20 (0.90)	3.09 (0.95)	3.06 (1.05)	0.99	
10 子育てや教育の方法	3.53 (0.89)	3.44 (0.94)	3.34 (1.00)	1.59	
11 幼稚園の放射線量	2.83 (1.12)	3.03 (1.11)	2.60 (1.13)	5.87 **	14>徳島
12 地域放射線量	3.45 (1.03)	3.38 (1.09)	2.67 (1.23)	21.77 ***	13,14>徳島
13 原発事故の問題の風化	4.13 (0.92)	4.05 (0.96)	3.94 (0.96)	1.53	

* $p<0.05$,** $p<0.01$,*** $p<0.001$

(5) 保護者のストレス

保護者のストレスに関しても調査時期、地域ごとに比較した（表10）。

その結果、「5. 突然に震災のことが思い出されることがありますか」において、2013年は徳島に比べ得点が高く、地震に対するストレス傾向が高いことが示された。震災直後は、保護者自身が震災を経験したことによるストレスを多く感じていたことが推測される結果となった。

表10 保護者のストレスの平均値（標準偏差）

質問項目	2013年	2014年	徳島	F値	多重比較
1 いらいらしたり、すぐに腹が立つことがありますか？	2.93 (0.70)	2.85 (0.72)	2.85 (0.78)	0.67	
2 物音にビクッとおどろくことがありますか？	2.01 (0.87)	2.04 (0.90)	1.90 (0.73)	1.06	
3 気分が落ち込んでしまうことがありますか？	2.45 (0.84)	2.36 (0.87)	2.40 (0.80)	0.54	
4 日頃やっている仕事に集中しにくいことがありますか？	2.12 (0.75)	2.06 (0.78)	2.06 (0.72)	0.31	
5 突然に震災のことが思い出されることがありますか？	2.19 (0.81)	2.06 (0.82)	1.90 (0.79)	4.85 **	13>徳島
6 食欲がない、あるいは食欲がおさえられないことがありますか？	2.01 (0.79)	2.02 (0.81)	2.06 (0.85)	0.11	
7 疲れやすく、身体がだるいことがありますか？	2.81 (0.82)	2.73 (0.88)	2.74 (0.88)	0.43	
8 寝つきが悪くなった、あるいは夜中に目が覚めることがありますか？	2.57 (1.00)	2.34 (0.95)	2.44 (0.92)	2.91	

* $p<.05$, ** $p<.01$, *** $p<.001$

(6) 子どもへの関わり

子どもへの関わり意識の変化について調査年度、徳島の得点を比較した（表11）。

結果、「11. 子どもには社会的に尊敬される職業や地位についてほしい」という項目で、徳島の得点が高く、意識が高いことが示された。福島の保護者は、健康に関する不安が高いため、社会的地位といった事柄への意識が低いのではないかと考えられる。

表11 子どもへの関わり平均値（標準偏差）

質問項目	2013年	2014年	徳島	F値	多重比較
1 子どもが外で何をしているのか、気にならない	2.18 (1.00)	2.18 (1.11)	2.14 (0.97)	0.06	
2 夫(妻)は、もう少し子どものことを考えてほしい	2.64 (1.09)	2.75 (1.28)	2.56 (1.20)	1.13	
3 友だちとどのように遊ぶか、付き合い方は、子どもに任せている	3.51 (0.86)	3.47 (0.88)	3.46 (0.94)	0.14	
4 子どもに対して、自分は何れほど力になれるか自信がない	2.66 (0.89)	2.59 (0.98)	2.57 (0.88)	0.42	
5 子どもとゆっくり話をする機会はあまりない	2.28 (0.99)	2.17 (1.02)	2.08 (0.98)	1.61	
6 子どものためにやってやれることは、多少犠牲になってもやってやりたい	3.85 (0.95)	3.95 (1.01)	3.80 (0.90)	1.00	
7 親が厳しくしつけなくても、子どもは自然に育っていく	2.87 (0.93)	2.74 (0.90)	2.79 (0.86)	1.04	
8 自分のことで頭がいっぱいで、子どものことに関心を向ける余裕がない	2.09 (0.89)	1.95 (0.97)	2.00 (0.89)	1.17	
9 子どものことが気になるが、どうしてよいか分からない	2.41 (0.99)	2.27 (1.04)	2.27 (0.90)	1.25	
10 子どもは、小さいうちにしっかりしつけなくてはならない	3.49 (0.89)	3.44 (0.94)	3.50 (0.88)	0.21	
11 子どもには、社会的に尊敬される職業や地位についてほしい	2.75 (0.91)	2.80 (0.98)	3.23 (0.86)	11.87 ***	13,14<徳島
12 子どもの良いところをほめるようにしている	4.28 (0.72)	4.32 (0.74)	4.40 (0.55)	1.22	
13 子どものことを誇りに思う	4.25 (0.79)	4.28 (0.78)	4.37 (0.73)	0.98	

* $p<.05$, ** $p<.01$, *** $p<.001$

(7) 子どもに対する心配の自由記述

まず、子どもに対する心配についての自由記述を分析対象ファイルとし、前処理を行った。単純集計の結果、877文が確認され、総抽出語は4,461であった。その後、異なり語や助詞、助動詞を除外し、1,973語を分析対象とした。次に茶釜を利用し、複合語の検出を行い、出現数5以上を最終的に分析対象とした。

次に、使用傾向を探るため2013年、2014年、徳島を外部変数とし、Jaccardの類似性測度が大きい順にリストアップした(表12)。結果、2013年、2014年では「少し」「心配」「言葉」が特徴語として挙がった。さらに、語と外部変数の関係を検討するため、共起ネットワークを用い図式化した(図1)。結果、「オムツ」「外」が2013年、2014年の共通語であった。

次に語同士の関係を可視化するために外部変数を除いた共起ネットワークを行った。(図2)。結果、「少し」「心配」は「子ども」「影響」との関係が示され、子どもへの影響に関することを心配していることが伺えた(例:「今までの放射線の影響が大きくなってから子どもに残らないか心配(2013年、41歳女性)」)。「少し気が強い(2013年、26歳女性)」)。また、「言葉」については、「遅い」「遅れ」との関係が示され、語の遅れを心配していることも示唆された(例:「言葉の遅れ(2014年、34歳女性他8名)」)。

「オムツ」は、「トイレ」「取れる」といったトイレトレーニングとの関係(例:「オムツがなかなか取れない。(2013年、28歳女性)」)や、「身長」「体重」といった身体的な発達との関係も示された(例:「身長や体重が平均より下(2014年、32歳女性)」)。この様に、心身の発達の遅れを気にしている傾向が強いことが示された。

更に「外」は、「運動」「遊び」「遊ぶ」「体力」「友達」といった外遊びの制限を連想させるごとの関係が示された(例:「外遊びの機会が少なく今後の発達が心配(2013年、28歳女性)」)。よって、福島の子育てを取り巻く環境として放射能による影響に付随する心配事が根強く残っており、量的なデータで示されたことが自由記述からも浮き彫りになった。

2013年		2014年		徳島	
少し	.119	心配	.117	特に	.235
心配	.119	少し	.106	気	.078
言葉	.117	言葉	.104	泣く	.064
オムツ	.117	気	.088	食事	.050
運動	.094	思う	.063	生活	.041
トイレ	.081	遅れ	.055	家	.041
無い	.063	体重	.055	困る	.041
出来る	.063	子ども	.055	良い	.040
転ぶ	.063	子	.054	好き嫌い	.040
言う	.061	遊び	.054	幼稚園	.040

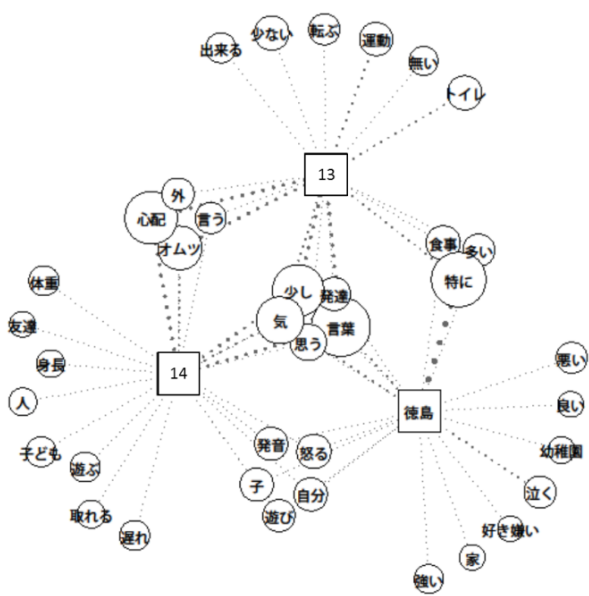


図1 「子どもに対する心配」に関する2013・2014・徳島を外部変数とした共起ネットワーク

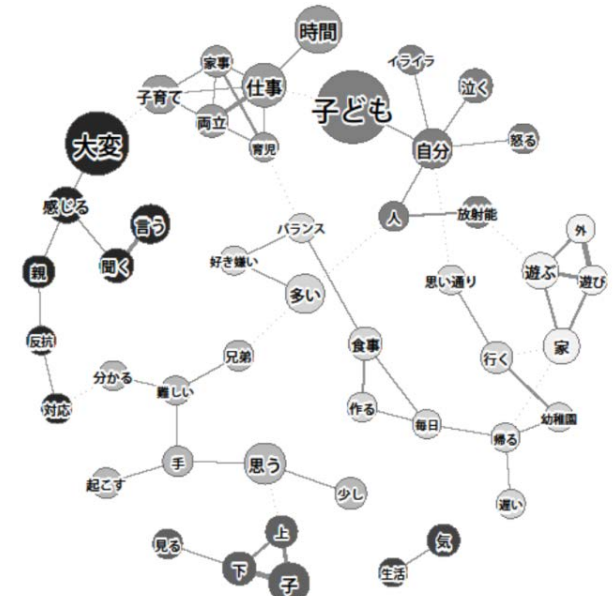


図2 「子どもに対する心配」に関する外部変数とを除いた共起ネットワーク

(8) 大変なことの自由記述

まず、大変なことについての自由記述を分析対象ファイルとし、前処理を行った。単純集計の結果、932の文が確認され、総抽出語は6,368であった。その後、異なり語や助詞、助動詞を除外し、2,642語を分析対象とした。次に茶釜を利用し、複合語の検出を行い、出現数7以上を最終的に分析対象とした。

次に、使用傾向を探るため2013年、2014年、徳島を外部変数とし、Jaccardの類似性測度が大きい順にリストアップした(表13)。さらに、語と外部変数の関係を検討するため、共起ネットワークを用い図式化した(図3)。結果、2013年は「家」、2014年は「大変」、徳島は「子ども」が特徴語であった。共通語に関しては、全体として「子ども」「大変」が特に挙げられたが、2013年、2014年の共通語は「聞く」のみであった。

語同士の関係を可視化するために外部変数を除いた共起ネットワークを行った。(図4)。結果、「自分」は「子ども」「人」「放射能」等との関係が示された。特に福島においては、放射能に関する記述が多かった(例:「自由にのびのび遊ばせてやりたいが、自分の仕事や放射能などあって子どもの好きにはなかなか遊ばせられないから大変です(2014年、34歳女性)」「祖父母(別居)が可愛がっているのはありがたいが、子どもにたくさんのお菓子、ジュース等を与える。地の野菜(放射能測定していない)を食べさせようとする。意識の低下」(2013年、42歳女性))。また、「福島で子育てをすることです。放射能を気にしながらの子育てを子どもが生まれて生後7か月から3年以上続けていますが、この先もずっとなので、大変です。気にされていない家庭と放射能を気にしている人との感覚が全然違うので、本当に困っています。気にしない方の考えでマスコミや学校や国や市などが何事も決めるので、気にする方は我慢ばかりです。自分の子どもを守りたいのに、国や県が足を引っ張ります。(2014年、28歳女性)」、「避難したり、放射能のことで自分とは違う考えの人と話すことは大変だし苦痛だと感じる(2014年、28歳女性)」といったように、「生活への不安」でも示唆された。

	2013年	2014年	徳島
家	.101	大変	.210
遊ぶ	.084	子ども	.172
言う	.081	多い	.118
特に	.074	仕事	.099
泣く	.058	子育て	.096
行く	.050	思う	.095
聞く	.049	自分	.084
対応	.042	感じる	.079
下	.041	気	.062
外出	.035	強い	.061
		子ども	.149
		時間	.118
		仕事	.096
		自分	.078
		悪い	.076
		言う	.068
		兄弟	.063
		手	.063
		食事	.061
		特に	.058

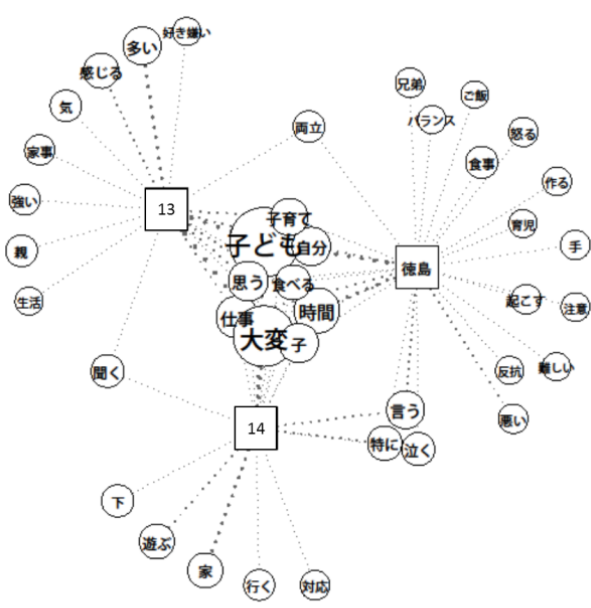


図3 「大変なこと」に関する2013・2014・徳島を外部変数とした共起ネットワーク

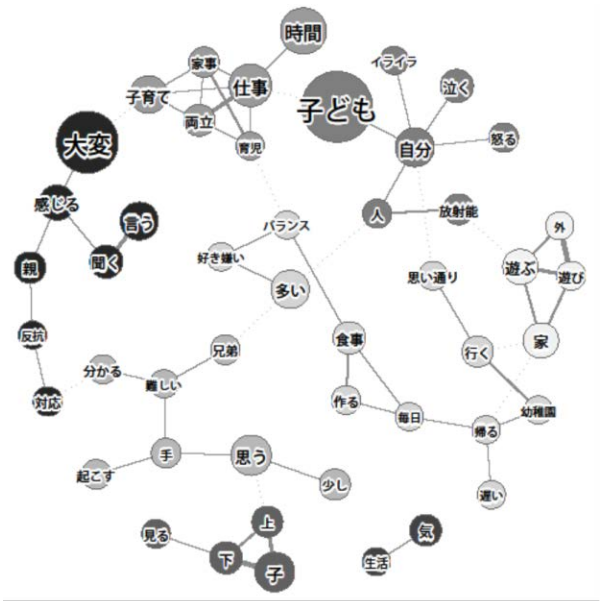


図4 「大変なこと」に関する外部変数とを除いた共起ネットワーク

4. まとめ

(1) 子どもに対する意識

子どもに対する不安において、2014年は2013年よりも得点が低くなっている項目が多く、改善が進んでいることが確認された。しかしながら、徳島との比較では明らかに得点が高く、依然として生活に大きな制限がある状況が示された。特に外遊びは、徳島と比べ心配が大きいことが示された。また虫などを怖がるといったように、外遊びの減少による影響と考えられることがらへの不安が示された。

また、子育ての心がけでは、福島のパロ護者は「外出を控える」「室内で遊べる遊具をそろえる」「家周辺の除染に努め」「放射線量を確認しながら外出し」「外の土や植物に触れさせないようにする」といった放射能対策を行っていた。このように、未だに多くの苦勞（配慮）を行いながら、福島のパロ護者は子育てを行っていることが示された。

(2) 福島での生活することの困難さ

多くの項目で、福島と徳島において差は確認されたが、2013年、2014年の差が示されなかった。また、子どもに対する心配事は、入園前と後を比較すると得点自体は減少しているが、入園後の心配は多くの項目で徳島との間に有意差が確認されている。これは、徳島と比較して幼稚園入学後の能力の伸びにくかったといえる。この理由として、入園前の外遊びの有無等も関係している可能性がある。また、入園前に同世代の子ども（親）と関わった経験の少なさ等が関係しているとも考えられる。今回の調査は保護者からみた子どもの心配をたずねているため、入園前に同世代の関わりが少ない場合は、他の子どもとの比較が難しく、入園後に不安が高まった可能性もある。これらを含みながら、単に数値の変化だけでなく、入園前の地域交流の程度や、外遊びの程度といった生活環境にも注目しながら、子どもがどのように成長したのか（不安が減少したのか）を検討しなければならないだろう。

(3) 時間の経過とともに起きる問題

時間の経過とともに問題が新たな噴出している可能性がある。本章1節で報告した継続調査では、保護者の意識の違いは、改善されているとの結果であったが、本節では保護者同士の意見の違いが示された。具体的には、新入園児の場合2014年の不安が高くなっており、新入生においては意見の違いが顕著になってきていることが示された。この理由として、調査時期が関係している可能性がある。協力園との意見交換会などでは「震災前に比べ、保護者への説明会や情報公開をより積極的に行うようになった」との声が多く聞かれた。入園後間もない新入園児調査は、入園前の生活様式の違いや考え方のばらつきが影響し、意見の食い違いが大きいとも考えられる。しかし継続調査は、1月に調査を行っているため、園側の積極的な取り組みによって、意見の食い違いが少なくなったとも考えることが出来る。

(4) 保護者のストレス

保護者の震災後のストレスについては、有意差が確認されたものが非常に少なかった。しかしながら、生活や子育ての心配事を具体的に聞いてみると多くの項目で有意差が確認されており、環境要因には大きなストレスがあると考えられる。この結果の理由としては、多くのストレスをうまく解消しているという見方もある。しかし、自由記述に、「不安を口に出来ない状況がある」との記載もあり、本来は不安が大きにも関わらず、それを口に

すこと（不安が高いと評定する）を憚り、我慢しているとも考えられる。しかしながら、不安をしまい込み、累積させていくことは、保護者に大きな負担をかけてしまう。そのため、このような危険性を含んでいることも念頭におき、今後も見守っていくことが必要である。

(5) 子育ての喜び

自由記述の子育ての喜びについては、すべての調査において、共通に子どもの成長や幼稚園での様子を話す姿が挙げられた。また、養育態度についても調査ごとの大きな違いは示されていない。よって、どのような状況であれ、地域であれ、子育てを行う上での子どもの成長に関する意識は同様であり、子どもの成長が養育者の大きな心の支えになっていることが示された。福島で子育てをしている親は、先に挙げたよう多くの不安や制約の中で子育てをしている。そのため、不安な部分、困難な部分に目が行きがちである。しかしながら、負の部分だけでなく、子育てには様々な側面がある。これらのことを踏まえ、福島と他県の違いだけでなく、共通部分を含め議論していくことが、福島での子育てを理解するためには必要なのではないだろうか。

(6) 今後の課題

新入園児調査は、協力園の保育者からの「新入園児における発達の違い」といった意見によって開始された。その結果、他県と比べると様々な制約はあるものの、全般的に徐々にネガティブな要素は減少し、ポジティブな要素が増加しているとの結果が導き出された。

しかしながら、これらの得点だけで、新入園児の問題が減少しているとは言いきれない。例えば、本報告書第3章では保育者が評定した子どもの発達検査の結果が示されている。ここでは、「知的領域」「運動領域」「社会的領域」「生活習慣領域」「遊び領域」において、調査と子どもの年齢で相互作用が確認されており、いずれも2014年の3歳児の得点が低くなっている。この様に、震災前の状況や、様々な園児との比較が可能な保育者の評定において差異が出ていることには注目する必要がある。そのため今後は、保護者が子どもに対する認識の変化にも言及していきつつ、生まれた直後から制限が必要であった子ども達の発達についても検討し続けることも必要ではないだろうか。

本調査にご協力いただきました保護者の方々に深く感謝申し上げます。調査用紙は、放射能災害下における保育問題検討委員会⁽¹⁾の尺度を基に検討しました。調査票の入力作業は、本ワーキンググループ浜崎隆司、岡本弘子、永井知子、加藤孝士が行いました。

【役割分担】 調査用紙の作成・配布・回収：加藤孝士・永井知子

文章構成チェック：浜崎隆司

データ入力：浜崎隆司・岡本弘子・永井知子・加藤孝士

<引用文献>

- (1)『震災に生きる子どもと保育』, 日本保育学会 災害時における保育問題検討委員会報告書 (2013) 加藤孝士 p:197-206.
- (2)同上 p93-125.
- (3)『社会調査のための計量テキスト分析 ―内容分析の継承と発展を目指して―』樋口耕一 (2014) ナカニシヤ出版. (加藤孝士)

第5章 広域調査結果

加藤孝士・永井知子

災害時における保育問題検討委員会 福島ワーキンググループでは、平成23年度の活動として、平成24(2012)年1~3月に福島県伊達市、福島市、二本松市、本宮市、郡山市のすべての保育所・幼稚園の所長・園長(以下;園長)、保育者・保護者を対象に広域調査を行った(以下:2012年調査)。同時に、関東圏の保育所・幼稚園にもご協力いただき、同様の調査をし、関東との比較を通じて、震災後1年を迎えた園長がどのように園の保育を捉えているのか、保育者が保育内容の変化や放射能への対策を行っているのか、保護者の子どもや子育ての意識について明らかにした。

この2012年調査は、当初、平成24(2012)年7月を目途に予定をしていた。しかしながら、東日本大震災直後の混乱により保育者の異動がなかったことや早期退職の増加といった背景から、平成24年度に調査を行うと、震災前の保育を知る園長が少なく比較が難しくなるとのことが予測された。そのため調査時期を早め、平成23年度内に調査を完了させた。

その継続調査として、放射能災害にかかる保育問題検討委員会 養育環境研究ワーキンググループでは、平成26(2014)年2~3月(以下;2014年調査)、平成27(2015)年2~3月(以下;2015年調査)に同様の調査を行い、震災1年後、3年後、4年後に福島の保育がどのようになっているのかを記録に残す試みをしてきた。

その中から本報告では、園長の調査に注目し、震災1年後、3年ないし4年が経過した時、園長は「保育内容の変化をどのように捉えていたのか」「保育時間はどのように変化したのか」「活動や取り組みはどのように変化したのか」「保育に対する考え方はどのように変化したのか」といったことを中心にその推移を示していく。

また、前回の報告では、関東地区での調査との比較を行ったが、本報告書では、福島の保育所・幼稚園を継続的に調査することで、福島県内の園長の意識の変化を明らかにすることを目指した。

これらの調査にあたっては学会の方を含め非常に多くの方々にご協力いただいた。また、震災直後は、本調査以外にも園長、保育者、保護者を対象とした非常に多くの調査があり、子育てのお忙しい中、非常に多くの時間を使って回答をいただいた。今回の調査に際しても多くの園長、保育者、保護者の方からご回答をいただいた。記して感謝を申し上げます。

(加藤孝士)

I 2014年、2015年調査 園長調査

1. 目的

福島県では、福島第一原子力発電所事故の影響により、制限された中での保育に労を費やす幼稚園や保育所が多くあった。東日本大震災から4年が過ぎた現在、除染作業が進み、徐々に園外活動の制限も解除されつつある園所の一方で、いまだ解消されぬ不安を抱き、新たな悩みや問題意識に頭を悩ませる保育者や保護者は少なくない。そこで本節では、福島県内の園長の意識の変化（震災前後の保育状況や子どもの様子、園長が感じている心配事など）について、2014年、2015年を中心に報告する。

2. 方法

調査時期：平成26（2014）年2～3月、平成27（2015）年2～3月

調査対象者：調査対象者は、表1の通りである。調査対象地域は、伊達市、福島市、二本松市、本宮市、郡山市等である。調査対象者は、2014年は、幼稚園及び保育所の園長57名、2015年は、幼稚園及び保育所の園長69名である。本稿では、幼稚園と保育所を分析対象とし、検討する。

表1 調査対象者の属性

	調査年	2014年	2015年		調査年	2014年	2015年	
	対象地域	伊達市	2		3	園種	公立	7
福島市		13	15	私立	9		18	
二本松市		6	6	不明	7		3	
本宮市		7	8	保育所	公立		14	20
郡山市		28	37	私立	16		14	
その他		1	0	不明	0		3	
計		57	69	その他(こども園)	3		4	

調査手続き：伊達市、福島市、二本松市、本宮市、郡山市の128園に、園長調査、保育者調査、保護者調査を同封し調査依頼書と合わせて送付した。回答後は、同封した返信用レターパックにより回収を行った。

調査項目：質問紙は、フェイスシート（園環境、園種、クラスの在籍人数、保育時間）に加え、以下の①～④、⑤自由記述で構成されており、それぞれに回答を求めた。

- ①震災前後の保育内容の変化：13項目で構成され、「悪くなった（1点）」～「向上した（5点）」の5段階で回答を求めた。
- ②震災前後の時間配分の変化：13項目で構成され、「30分以上減った（1点）」～「30分以上増えた（5点）」の5段階で回答を求めた。
- ③震災前後の活動や取り組みの変化：13項目で構成され、「減っている（1点）」～「増えている（5点）」の5段階で回答を求めた。
- ④現在の保育に対する考え：13項目で構成され、「そう思わない（1点）」～「そう思う（5点）」の5段階で回答を求めた。
- ⑤自由記述：「外遊びの際の配慮」、「今、保育に必要な支援は何か」、「子どもたちにとって重要なかわりは何か」、「子どもの発達に影響があるとすればどのような面か」、「震災以降、保育者の専門能力はどのように発揮されたか。また、さらに必要

とされるのはどのようなことか」について自由記述による回答を求めた。

①から④の分析には、SPSS for Windows ver.22.0 を使用した。また、⑤自由記述の分析には、樋口⁽¹⁾を参考に、KH Coder を使用した。

3. 結果

(1) 年度と園種による「保育内容の変化」の差

年度と園種により、「保育内容の変化」に差があるか確認するため、「震災前後の保育内容の変化」に関する各得点を従属変数とし、「年（2014・2015）」×「園種（幼稚園・保育所）」の二要因の分散分析を行った（表2）。その結果、有意な交互作用は見られなかったが、「1. 教育課程の作成、指導計画の立案・確認」、「3. 保育内容（5領域）のバランスよい実践」については年度と園種に主効果が確認された。これらの項目についてはすべて、2014年に比べて2015年の得点が高く、また、幼稚園よりも保育所の方が少し向上したという認識があることが示された。また、「2. 保育環境の安全・衛生点検」、「5. 行事の適正な配置」については年度に主効果があり、2014年に比べて2015年の得点が高くなっていた。遊びの制限が少なくなる中で、行事を適切な時期に行うことができたり、バランスの良い実践につながったりすることがうかがえる。「9. 園外研修への参加」、「12. 給食における安全・衛生対策」、「13. 危機管理体制」については園種の主効果が確認され、どの項目も幼稚園より保育所の方が少し向上したと感じていることが示された。また「13. 危機管理体制」については、園種に差はあるものの、どちらも平均値自体が高く、園長の意識の高さがうかがえる。

表2 調査年と園種による「保育内容の変化」に関する各得点と分散分析結果

調査年	2014年		2015年		主効果(F値)		交互作用	
	園種	幼稚園 (n=17)	保育所 (n=28)	幼稚園 (n=25)	保育所 (n=34)	年度		園種
1. 教育課程の作成、指導計画の立案・確認		3.12 (0.99)	3.46 (0.92)	3.44 (0.65)	3.91 (0.75)	5.35*	6.04*	0.14
2. 保育環境の安全・衛生点検		3.59 (1.37)	3.75 (1.08)	3.96 (0.93)	4.41 (0.56)	7.04*	2.48	0.55
3. 保育内容（5領域）のバランスよい実践		2.53 (1.01)	2.93 (0.98)	3.08 (0.86)	3.71 (1.03)	11.32*	6.75*	0.33
4. 教職員間での子どもの共通理解・発達の確認		3.59 (0.94)	3.96 (0.74)	3.92 (0.57)	3.94 (0.81)	0.99	1.64	1.31
5. 行事の適正な配置		2.88 (1.27)	3.18 (0.98)	3.64 (1.08)	3.56 (0.75)	8.06*	0.29	0.89
6. 子どもとの信頼関係		3.65 (0.79)	3.79 (0.79)	3.48 (0.59)	3.74 (0.83)	0.50	1.65	0.14
7. 日常保育の適切な環境構成		3.06 (1.25)	3.50 (1.14)	3.56 (0.92)	3.79 (0.81)	3.79	2.74	0.26
8. 保育記録の実践への活用		3.47 (0.94)	3.64 (0.78)	3.44 (0.71)	3.59 (0.70)	0.07	1.06	0.01
9. 園外研修への参加		3.06 (1.03)	3.89 (0.96)	3.12 (0.97)	3.68 (0.81)	0.17	13.76*	0.55
10. 保護者の要望への取り組み		3.47 (0.94)	3.68 (0.72)	3.72 (0.54)	3.79 (0.73)	1.53	0.92	0.21
11. 情報公開		3.88 (0.70)	3.79 (0.63)	3.76 (0.66)	3.91 (0.67)	0.00	0.04	0.86
12. 給食における安全・衛生対策		3.71 (1.05)	4.54 (0.51)	4.12 (0.67)	4.47 (0.71)	1.44	16.47*	2.71
13. 危機管理体制		4.18 (0.64)	4.46 (0.58)	4.12 (0.44)	4.41 (0.61)	0.22	6.34*	0.00

上段：平均値、下段（ ）内：標準偏差

* $p < .05$

(2) 年度と園種による「時間配分の変化」の差

年度と園種により、「時間配分の変化」に差があるか確認するため、「震災前後の時間配分の変化」に関する各得点を従属変数とし、「年（2014・2015）」×「園種（幼稚園・保育所）」の二要因の分散分析を行った（表3）。その結果、有意な交互作用は見られなかった。「2. 一斉での運動遊びの時間」、「8. 今年行ったプール遊びの時間」については年度に主効果、「11. 自由遊びの時間」、「12. 保育者の記録や書類作成時間」については園種の主効果が確認された。

一斉での運動遊びやプール遊びなどは2014年に比べて2015年の得点が高く、やや増加傾向にあるが、平均値からは、ほぼ震災前と変化がないことが示された。少しずつ震災前と同程度のことができるようになってきていることがうかがえる。また、自由遊びの時間や保育者の記録・書類作成時間は、幼稚園よりも保育所の方が増えたと感じていた。平均値からは自由遊びの時間は震災前に比べてあまり変化がなく、記録・書類作成時間については震災前に比べて増加していることが示された。

表3 調査年と園種による「時間配分の変化」に関する各得点と分散分析結果

調査年 園種	2014年		2015年		主効果(F値)		交互作用
	幼稚園 (n=21)	保育所 (n=26)	幼稚園 (n=28)	保育所 (n=34)	年度	園種	
1. 職員の勤務時間	3.62 (0.97)	3.38 (0.75)	3.39 (1.13)	3.53 (0.86)	0.05	0.07	1.04
2. 一斉での運動遊びの時間	2.48 (1.12)	2.69 (1.54)	3.07 (0.90)	3.26 (1.21)	6.10*	0.75	0.00
3. 知育にかかわる活動の時間	3.14 (0.57)	3.31 (0.74)	3.07 (0.38)	3.35 (0.69)	0.01	3.48	0.24
4. クラス単位での掃除（除染）の時間	3.62 (0.74)	3.58 (0.95)	3.57 (0.69)	3.38 (0.60)	0.70	0.64	0.26
5. 園単位での掃除（除染）の時間	3.67 (0.80)	3.81 (0.98)	3.68 (0.72)	3.50 (0.83)	0.83	0.01	0.97
6. 会議の時間	3.48 (0.75)	3.73 (0.87)	3.54 (0.79)	3.47 (0.75)	0.42	0.38	1.08
7. 保護者への対応の時間	3.81 (0.68)	3.69 (0.79)	3.68 (0.72)	3.50 (0.66)	1.36	1.14	0.05
8. 今年行ったプール遊びの時間	2.29 (1.38)	2.38 (1.27)	3.00 (0.90)	3.24 (0.96)	13.03*	0.59	0.10
9. 朝やお帰りの集会時間	2.95 (0.38)	3.08 (0.39)	2.96 (0.43)	3.00 (0.00)	0.25	1.52	0.47
10. 異年齢交流活動	3.05 (0.50)	3.35 (0.80)	3.36 (0.62)	3.24 (0.74)	0.55	0.44	2.49
11. 自由遊びの時間	2.86 (0.79)	3.27 (0.60)	2.96 (0.69)	3.26 (0.71)	0.14	6.88*	0.17
12. 保育者の記録や書類作成時間	3.57 (0.75)	4.12 (0.82)	3.43 (0.79)	3.74 (0.79)	2.91	7.70*	0.60
13. 保育者の教材研究や保育の準備時間	3.67 (0.73)	3.73 (0.87)	3.39 (0.83)	3.50 (0.75)	2.64	0.30	0.02

上段：平均値、下段（ ）内：標準偏差

* $p < .05$

(3) 年度と園種による「活動や取り組みの変化」の差

年度と園種により、「活動や取り組みの変化」に差があるか確認するため、「震災前後の活動や取り組みの変化」に関する各得点を従属変数とし、「年（2014・2015）」×「園種（幼稚園・保育所）」の二要因の分散分析を行った（表4）。その結果、有意な交互作用は確認されなかった。「10. 新しい保育方法の取り入れ」については、年度の主効果が確認され、2014年に比べて2015年の得点が有意に低いことが示された。「2. 遠方への園外保育の実施」については、園種の主効果が確認され、幼稚園に比べて保育所の得点が有意に高いことが示された。

新しい保育方法の取り入れについては、2014年より2015年の方が減少しているものの、平均値を見ると震災前よりは得点が高いことがうかがえる。現在でも、震災前に比べると新しい保育方法の取り入れはされているが、年月が経ち、新しい保育方法を積極的に取り入れざるをえなかった状況は少しずつ落ち着き、その実践の定着がなされつつあるのかもしれない。また、遠方への園外保育の実施については、保育所の方が子どもを預かる時間が長いことから、子どもの心身の健全な発達のための様々な体験や活動をより意識しているのかもしれない。安心して活動できる環境を考え、遠方に出向き、園外保育を実施している可能性が考えられる。

表4 調査年と園種による「活動や取り組みの変化」に関する各得点と分散分析結果

調査年 園種	2014年		2015年		主効果(F値)		交互作用
	幼稚園 (n=21)	保育所 (n=28)	幼稚園 (n=26)	保育所 (n=33)	年度	園種	
1. 日ごろの園児の欠席者数	2.81 (0.68)	2.89 (0.79)	3.00 (0.28)	2.79 (0.60)	0.13	0.29	1.51
2. 遠方への園外保育の実施	3.05 (1.36)	3.64 (1.31)	3.23 (1.27)	3.61 (0.93)	0.10	4.24*	0.22
3. 保護者への園活動や環境整備への協力要請	3.24 (0.83)	3.21 (0.74)	3.38 (0.57)	3.27 (0.57)	0.61	0.27	0.11
4. 生活環境保全のための設備・備品の新規設定	3.76 (0.77)	4.07 (0.72)	4.00 (0.69)	4.00 (0.66)	0.37	1.27	1.27
5. 地域との連携活動	3.19 (0.68)	3.32 (0.72)	3.46 (0.65)	3.58 (0.75)	3.64	0.79	0.00
6. 専門機関等外部関係者との交流	3.57 (0.75)	3.75 (0.75)	3.69 (0.62)	3.82 (0.77)	0.45	1.16	0.03
7. 在園児の保護者への情報提供や相談活動	3.76 (0.62)	3.75 (0.52)	3.77 (0.59)	3.82 (0.73)	0.10	0.02	0.06
8. 在園児以外の家庭への子育て支援活動	3.29 (0.78)	3.36 (0.73)	3.46 (0.81)	3.39 (0.70)	0.52	0.00	0.22
9. 新しい遊具、教材の購入や活用	4.05 (0.67)	4.46 (0.69)	4.04 (0.60)	4.12 (0.70)	1.83	3.68	1.64
10. 新しい保育方法の取り入れ	3.81 (0.68)	4.18 (0.67)	3.77 (0.59)	3.67 (0.74)	4.41*	1.03	3.22
11. 園長の保育への参加や子どもとのかかわり	3.43 (0.51)	3.79 (0.83)	3.54 (0.71)	3.52 (0.80)	0.31	1.35	1.75
12. 園長自身の園環境整備や点検	4.00 (0.77)	4.21 (0.63)	4.04 (0.60)	3.85 (0.62)	1.67	0.01	2.54
13. 避難訓練	3.62 (0.86)	3.46 (0.69)	3.92 (0.69)	3.55 (0.67)	1.88	3.59	0.63

上段：平均値、下段（ ）内：標準偏差

* $p < .05$

(4) 年度と園種による「保育に対する考え」の差

年度と園種により、「保育に対する考え」に差があるか確認するため、「現在の保育に対する考え」に関する各得点を従属変数とし、「年（2014・2015）」×「園種（幼稚園・保育所）」の二要因の分散分析を行った（表5）。その結果、「12. 子どもの将来の発達の偏りが心配」について、交互作用が有意であった。単純主効果を確認したところ、保育所において、2014年の方が、2015年に比べて得点が高かった。また、「9. 今回の災害の影響は保育所と幼稚園の違いが大きい」、「13. 園児の減少が大きい問題である」については園種の主効果が確認され、幼稚園に比べて保育所の得点が有意に低いことが示された。

保育所では、子どもと関わる時間が長いうえに、2015年より2014年の方が一斉の運動遊びやプール遊びができないと感じている（表2）など、外遊びを自由にできない日々が現状として続いていた2014年は、子どもの発達により目がいきやすく、不安感を高く感じていたことが考えられる。少しずつ、外遊びの時間的な制限が解消され始めたことや、保育の工夫が定着してきたことから、2015年ではその不安感が落ち着きを見せているのかもしれない。ただし、外遊びの制限等については、震災直後と現在では大きく状況が変わっていることから、2014年、2015年だけでなく、その前の年度の状況や影響も検討する必要がある。また、災害の影響に関する違いや園児の減少については、幼稚園の園長の方がより意識していることが示唆された。

表5 調査年と園種による「保育に対する考え」に関する各得点と分散分析結果

調査年	2014年		2015年		主効果(F値)		交互作用	
	園種	幼稚園 (n=23)	保育所 (n=27)	幼稚園 (n=26)	保育所 (n=28)	年度		園種
1. 建物への被害が大きい問題である		3.00 (1.31)	2.93 (1.04)	3.38 (1.30)	3.04 (1.10)	1.12	0.82	0.35
2. 行政の対応は保育の実態への理解がない		3.39 (1.16)	3.63 (1.04)	3.58 (1.03)	3.54 (1.23)	0.04	0.20	0.40
3. 行政の対応は保育の実態への理解がない		4.09 (0.85)	4.19 (0.74)	3.88 (1.07)	3.86 (0.93)	2.22	0.04	0.12
4. 災害によって園の役割は大きくなった		4.00 (0.95)	3.74 (0.71)	3.85 (0.88)	3.50 (0.96)	1.30	3.05	0.06
5. 保護者からの要求が大きくなっている		3.00 (0.95)	2.85 (1.03)	2.96 (0.96)	3.21 (0.74)	0.80	0.08	1.22
6. 保育者はよくやっている		4.83 (0.49)	4.74 (0.53)	4.69 (0.47)	4.79 (0.42)	0.22	0.00	0.91
7. 地域は保育所や幼稚園に対して協力的		4.09 (0.79)	4.11 (0.80)	4.08 (0.74)	4.36 (0.78)	0.59	0.99	0.70
8. 幼稚園・保育所は小学校と比べて配慮されない		3.13 (1.39)	3.48 (1.09)	3.65 (1.13)	3.14 (1.18)	0.15	0.12	3.37
9. 今回の災害の影響は保育所と幼稚園の違いが大きい		3.65 (0.98)	3.00 (1.21)	3.69 (0.97)	2.93 (1.25)	0.01	10.40**	0.06
10. 職員の労働が過重になっている		4.17 (1.07)	4.26 (0.98)	4.35 (0.69)	4.21 (0.99)	0.12	0.02	0.34
11. 放射能の災害下でも工夫すればほぼ適切な保育ができる		3.39 (1.34)	3.04 (1.26)	3.54 (1.17)	3.57 (1.35)	1.83	0.41	0.59
12. 子どもの将来の発達の偏りが心配		3.78 (1.17)	4.26 (0.81)	4.00 (0.57)	3.57 (1.29)	1.43	0.01	5.3*
13. 園児の減少が大きい問題である		3.96 (1.15)	2.63 (1.11)	4.35 (1.06)	2.29 (1.15)	0.01	59.41**	2.79

上段:平均値、下段()内:標準偏差

** $p < .01$, * $p < .05$

(5) 「外遊びの際の配慮」に関する自由記述について

まず、自由記述データを分析対象ファイルとして前処理を行った。文章の単純集計の結果、356文が確認され、総抽出語は2,788語であった。その後、異なり語や助詞、助動詞を除外し、3,495語を分析対象とした。次に、茶筌を利用し、複合語の検出、語の取捨選択等を行い、最終的には出現数5以上を分析対象とした。

次に、文章への使用傾向を探るため、2014年、2015年を外部変数とし、Jaccardの類似性速度が大きい順に

2014年		2015年	
うがい	.317	制限	.188
手洗い	.305	時間	.173
外遊び	.214	線量	.149
外	.183	行う	.143
遊び	.136	風	.130
保護者	.129	特に	.121
遊ぶ	.129	強い	.119
顔洗い	.125	除染	.119
土	.123	砂	.114
配慮	.119	場所	.113

特徴語をリストアップした(表6)。その結果、2014年では「うがい」や「手洗い」が特徴語として挙がり、2015年では「制限」や「時間」が特徴語として挙げられた。さらに、語と外部変数の関係を検討するため、共起ネットワークを用い図式化した(図1)ところ、「うがい」「手洗い」「外遊び」等が2014年、2015年の共通語であった。次に、語同士の関係を可視化するために外部変数を除いた共起ネットワークを行った(図2)。その結果、「うがい」「手洗い」は、「外遊び」「徹底」との関係が示され、外遊びの際には、衛生面を徹底していることがうかがえた(例:「遊ぶ前の除染、遊んだあとの手洗い、うがいの徹底などを職員に伝えている(2014)」、「砂場の砂以外は触らない。外遊びの後、手洗い、うがいをしっかりと(2015)」)。また、「制限」や「時間」は「特に」「現在」と関係が示され、「線量」については「高い」「禁止」「散歩」などと関係が示された。震災から4年がたち、現在は外遊びに制限を設けていないところも増えてきているよう(例:「現在は時間的に以前と変わらないが、帰ってきた時の手洗いうがいは気を付けている(2015)」)だが、常に線量を意識し、高いところへの立ち入り禁止や、散歩コースの選定など、配慮は継続していることがうかがえる(例:「日々のお散歩時にはお散歩コースをあらかじめ線量を測り、安全なコースを選んでいる(2015)」、「線量の高いところへの立ち入り禁止(2015)」)。2014年が外遊びに関して多くの配慮のもとで行われていたことに比べ、2015年では少しずつ制限が少なくなっていることが示唆される。とはいえ、意識の変化があるわけではなく、天候や線量を常に考慮し、遊び場所の選定や工夫、遊んだあとの手洗い、うがいの徹底など、与えられた環境の中で最善の保育を心がけていることが自由記述から示された。

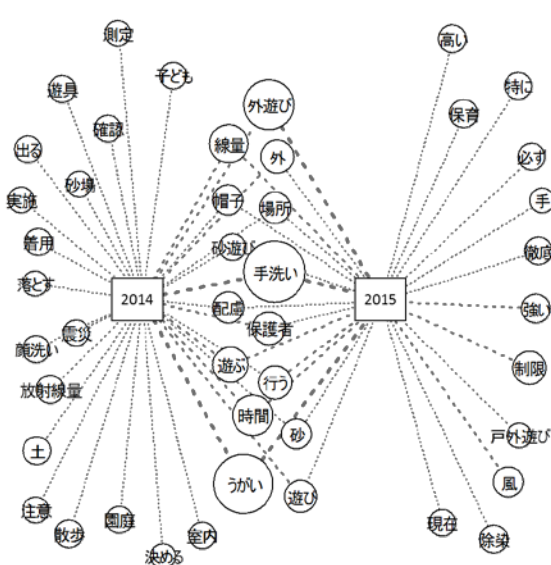


図1 「外遊びへの配慮」に関する2014年調査・2015年調査を外部変数とした共起ネットワーク

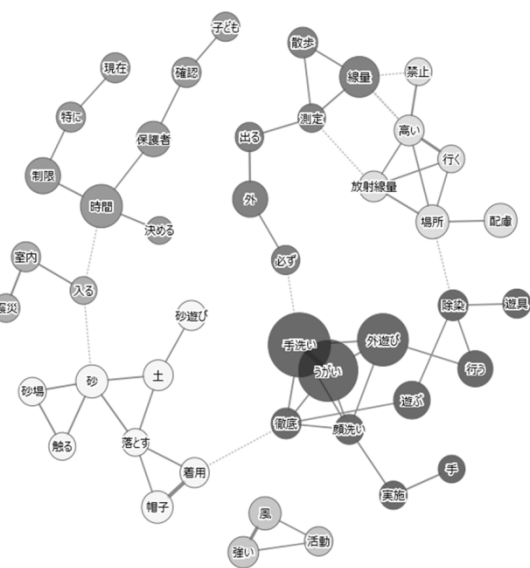


図2 「外遊びへの配慮」に関する外部変数とを除いた共起ネットワーク

(6) 「保育に必要な支援」に関する自由記述について

まず、自由記述データを分析対象ファイルとして前処理を行った。文章の単純集計の結果、308 文が確認され、総抽出語は 2,788 語であった。その後、異なり語や助詞、助動詞を除外し、2,712 語を分析対象とした。

次に、茶釜を利用し、複合語の検出、語の取捨選択等を行い、最終的には出現数 5 以上を分析対象とした。

次に、文章への使用傾向を探るため、2014 年、2015

表7 2014年、2015年調査の特徴語

2014年		2015年	
思う	.172	支援	.246
活動	.135	保育	.233
除染	.135	環境	.177
保護者	.107	安全	.167
保育者	.096	保育士	.155
外遊び	.093	必要	.136
自然	.091	遊べる	.123
関わる	.080	安心	.121
遊び	.078	子どもたち	.103
線量	.077	確保	.102

年を外部変数とし、Jaccardの類似性速度が大きい順に特徴語をリストアップした(表7)。

その結果、2014年では「思う」「活動」「除染」が特徴語として挙がり、2015年では「支援」「保育」「環境」が特徴語として挙がった。さらに、語と外部変数の関係を検討するため、共起ネットワークを用い図式化した(図3)ところ、「支援」「保育」「思う」「環境」等、多くの語が2014年、2015年の共通語として挙がった。次に、語同士の関係を可視化するために外部変数を除いた共起ネットワークを行った(図4)。その結果、「活動」と「自然」、「除染」と「外遊び」、「環境」と「安全」や「保育」との関係が示され、保育を行う際、除染を意識した外遊び、自然の中での活動や多様な経験を、安全な環境のもとで行う必要があるといった意識がうかがえる(例:「自然と関わりができるような機会と場所が必要(2014)」、「所庭および地域の再除染と定期的な測定を行うことにより、安心した外遊びを保障すること(2014)」、「豊かな経験を保障できる環境の整備(2015)」。また、「支援」と「保護者」、「保育士」と「確保」に関係が示された。物的な保育環境を整えるだけでなく、保護者や保育者が安心して子どもたちと関われるよう、人的環境の整備が求められていることが示唆された(例:「状況の変化に対応し、保護者のニーズに応えられるような支援、環境作り(2014)」、「保育士の人材確保(2015)」)。

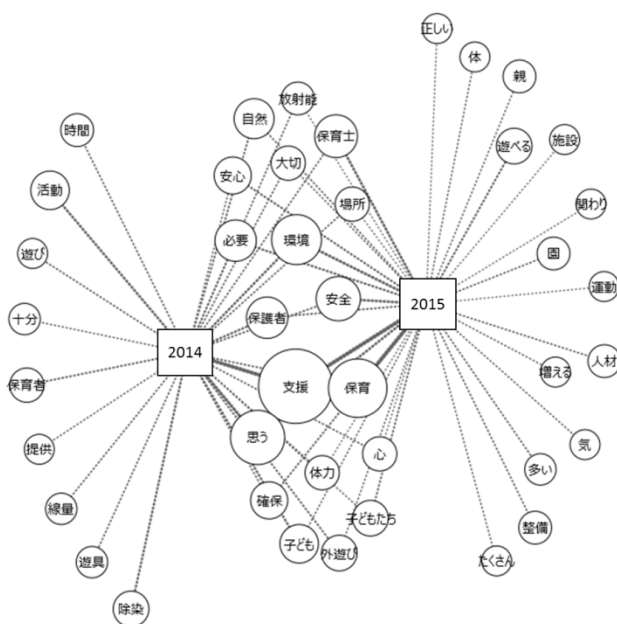


図3 「保育に必要な支援」に関する
2014年調査・2015年調査を外部変数とした共起ネットワーク

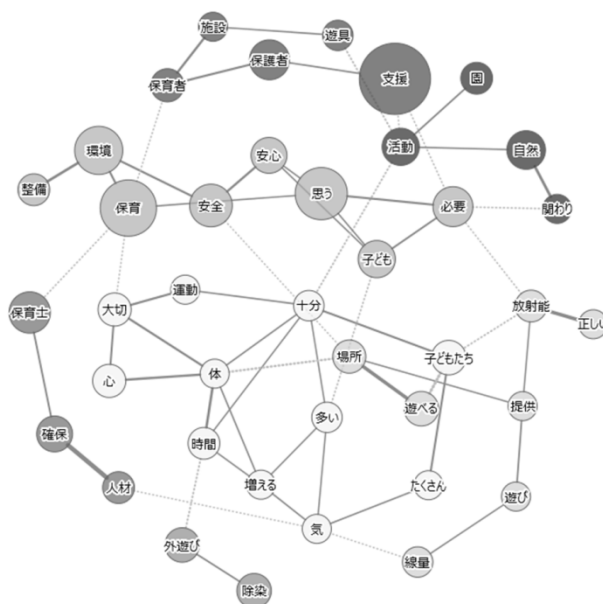


図4 「保育に必要な支援」に関する
外部変数を除いた共起ネットワーク

(7) 「子どもたちにとって重要な関わり」に関する自由記述について

まず、自由記述データを分析対象ファイルとして前処理を行った。文章の単純集計の結果、291 文が確認され、総抽出語は 2,782 語であった。その後、異なり語や助詞、助動詞を除外し、2,717 語を分析対象とした。

次に、茶釜を利用し、複合語の検出、語の取捨選択等を行い、最終的には出現数 6 以上を分析対象と

2014年		2015年	
自然	.167	関わり	.221
保育	.164	体力	.136
子ども	.158	遊び	.133
関わる	.154	友だち	.121
思う	.151	重要	.121
環境	.132	考える	.121
保護者	.130	必要	.119
心	.125	自分	.102
大切	.113	一人一人	.098
十分	.113	コミュニケーション	.086

した。次に、文章への使用傾向を探るため、2014年、2015年を外部変数とし、Jaccardの類似性速度が大きい順に特徴語をリストアップした(表8)。その結果、2014年では「自然」「保育」が特徴語として挙がり、2015年では「関わり」「体力」「遊び」が特徴語として挙がった。

さらに、語と外部変数の関係を検討するため、共起ネットワークを用い図式化した(図5)ところ、「心」「自然」「関わり」「環境」等、多くの語が2014年、2015年の共通語として挙がった。次に、語同士の関係を可視化するために外部変数を除いた共起ネットワークを行った(図6)。その結果、「自然」は「体験」「戸外」と関係が示され、「環境」は「安全」「体力」との関係が示された。自然体験を多くすること、安全な環境で体力をつけること等、外遊びの制限により、本来、保育の中で当たり前に行っていたことをより重要な関わりとして意識していることがうかがえる(例:「いろいろな自然体験が4年目を迎えても不足しているように感じる(2015)」、「安全で安心して遊べる環境作りと体力作り(2015)」。また、「心」と「寄り添う」の関係からも、子どもたちが心身ともに安心して過ごせるよう環境の配慮をしていることがうかがえる(例:「子どもの気持ちに寄り添って、安定した生活が送れるように配慮する(2015)」。さらに、「コミュニケーション」と「育てる」や、「友だち」と「関わり」に関係が示されており、社会性の発達を重要と感じているようである(例:社会性や自主性、コミュニケーション力が育つように、クラス関係なく、異年齢同士の人(友だち)との関わり、各保育者との関わりを重要視している(2015)」。)

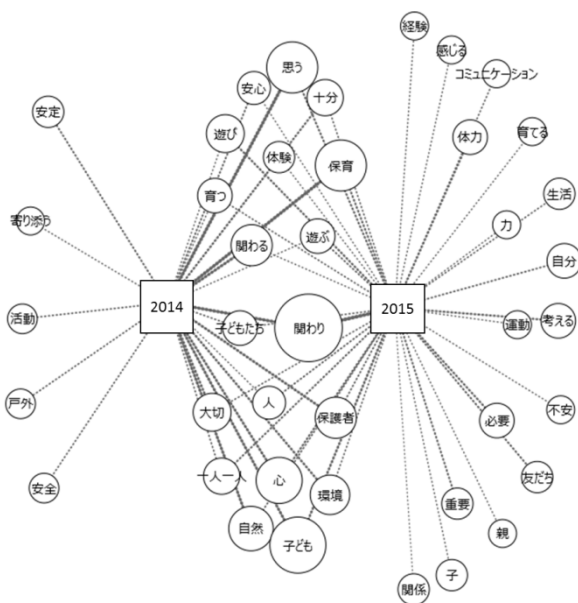


図5 「子どもたちにとって重要な関わり」に関する2014年調査・2015年調査を外部変数とした共起ネットワーク

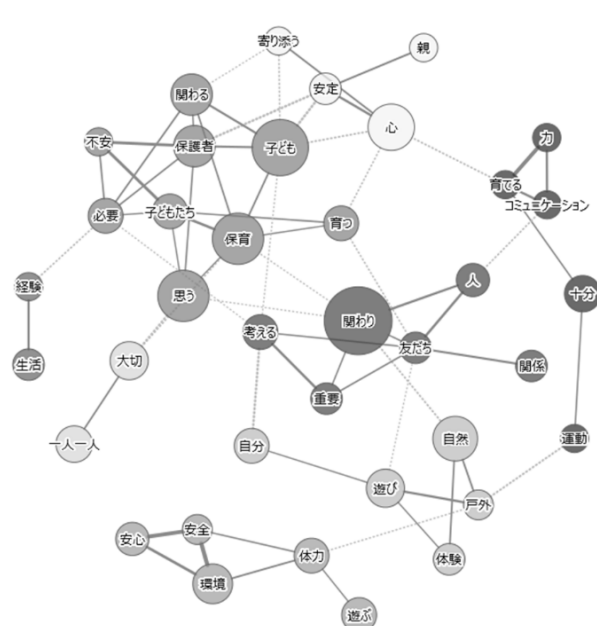


図6 「子どもたちにとって重要な関わり」に関する外部変数を除いた共起ネットワーク

(9) 「保育者の専門能力」に関する自由記述について

まず、自由記述データを分析対象ファイルとして前処理を行った。文章の単純集計の結果、337文が確認され、総抽出語は4,187語であった。その後、異なり語や助詞、助動詞を除外し、4,117語を分析対象とした。

次に、茶筌を利用し、複合語の検出、語の取捨選択等を行い、最終的には出現数6以上を分析対象とした。次に、文章への使用傾向を探るため、2014年、2015年を外部変数とし、Jaccardの類似性速度が大きい順に特徴語

2014年		2015年	
工夫	.323	子ども	.325
保護者	.191	保育	.267
対応	.164	室内	.179
環境	.158	活動	.161
保育者	.140	必要	.159
考える	.133	専門	.150
放射能	.127	思う	.139
震災	.121	能力	.131
守る	.113	不安	.100
行う	.111	実践	.085

をリストアップした(表10)。その結果、2014年では「工夫」「保護者」が特徴語として挙げられ、2015年では「子ども」「保育」が特徴語として挙げられた。さらに、語と外部変数の関係を検討するため、共起ネットワークを用い図式化した(図9)ところ、「室内」「保護者」「保育」等、多くの語が2014年、2015年の共通語として挙げられた。また、2014年に比べ、2015年の方が多くの語が挙げており、保育者の専門能力に対して視点が多様化していることが示唆される。次に、語同士の関係を可視化するために外部変数を除いた共起ネットワークを行った(図10)。その結果、「室内」は「工夫」「活動」と関係が示された。運動機能の低下を防ぐため、室内でできる活動ができるよう、工夫していることがうかがえる(例:「室内、外での活動の組み合わせ(活動の流し方)方や運動遊びや体力増進のための教材研究(2014)」、「室内でも運動機能を高められる運動遊びを考え、実施し、その後も工夫をして体を使った運動遊びを取り入れた(2015)」)。また、「保護者」は「不安」「寄り添う」と関係が示され、子どもだけでなく、様々な不安をもつ保護者に対しても保育者の専門性が求められていることがうかがえる(例:「保護者に寄り添い支援する部分については大いに発揮された(2014)」、「保護者の方の表に出せない不安を感じ取り、声をかけたり、相談に乗ったりしている(2015)」)。さらに、「放射能」と「勉強」に關係が示され、放射能に関する正しい知識を研修等で学ぶことも保育者の専門性のひとつとなっているようである(例:「放射能に関する勉強している(2014)」)。

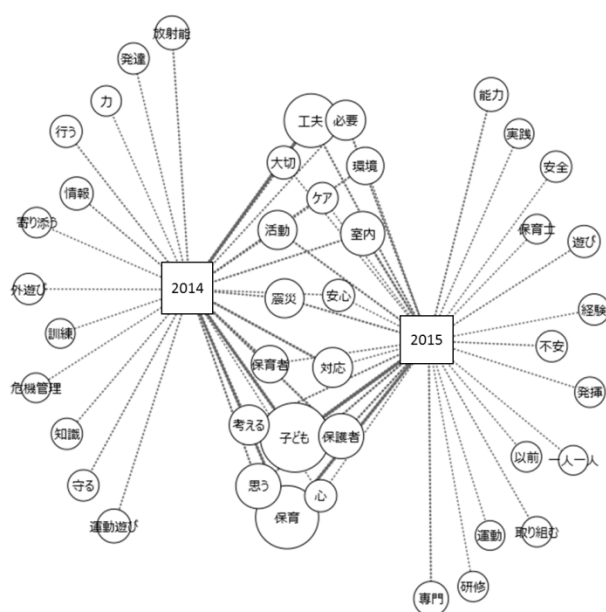


図9 「保育者の専門能力」に関する2014年調査・2015年調査を外部変数とした共起ネットワーク

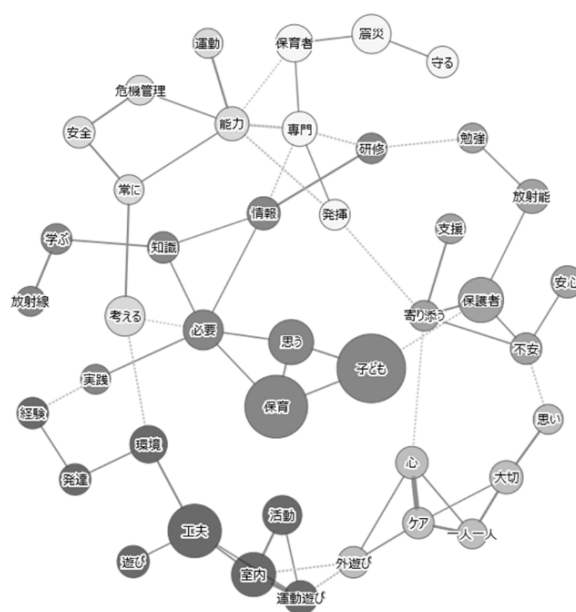


図10 「保育者の専門能力」に関する外部変数を除いた共起ネットワーク

4. まとめ

本稿では、2014年、2015年に実施された福島県内の幼稚園および保育所の園長の意識（震災前後の保育状況や子どもの様子、保育者が感じている心配事など）について、質問紙調査結果をもとに報告した。

震災から3～4年がたった今、「保育内容のバランス良い実践」や「行事の適正な配置」、「一斉での運動遊び」、「プール遊びの時間」の得点について、2014年より2015年の得点が高くなっていた。遊びの制限が少なくなるなかで、少しずつできることが増えている、あるいは、震災前と変わらない程度にできる等、保育環境が向上しつつあるという園長の認識がうかがえる。このことは、子どもの健全な心身の発達にとっても、子どもを取り巻く保護者や保育者にとっても大変喜ばしいことである。実際に、外遊びの制限を設けないところも増えてきており、保育内容や活動が震災前に近づいてきたことも影響しているのかもしれない。

一方、「記録・書類作成時間」といった得点については、園種に差はあるものの、震災前に比べて増加しているという園長の認識が確認された。上述したようなポジティブな変化が見られる一方で、震災に関わる書類も含め、日々の業務に過大な負担がかかっていることがうかがえる。また、保育所において、「遠方への園外保育」得点が高く、「子どもの将来の発達の偏りが心配」得点が2015年に比べて2014年の方が高いといった認識も確認された。保育環境が向上しつつある一方で、保育時間が長い分、子どもの健全な心身の発達をより意識して不安感が生じやすく、安心できる環境での様々な活動を実践していたことが示唆される。

また、自由記述の「ここまで来るのに大変な悩みと取り組みの連続でした。以前と変わらないように示されていますが、今なお不安とストレスは続いています」、「低線量被ばくによる健康被害が今後出るのかどうか心配」という言葉からも示唆されるように、線量に対する意識、衛生面の徹底、自然活動の不足等、震災の影響は色濃く残っていることが確認された。さらに、「現場は一生懸命に子どもたちの将来を考え、努力してきました」や、「先生方の子どもへの思いや責任感の高さに頭が下がった」というように、共に働く保育者の意識の高さを実感していると同時に、「震災に関わる業務量が増え、大変だと思います」や「がんばりすぎが保育者をおいつめないかと心配である」というような、心配の声も確認された。加えて、「すべての項目について震災の有無にかかわらず常に向上すべきと考えています」という言葉にあるように、どのような状況においても、今おかれている状況の中で、子どもにとって最善の環境を整えようとする専門家としての保育者の誇り高い姿は、これまでずっと子どもや家族を支えてきたことがうかがえる。しかし、目に見えないものに対する不安と今後もつきあっていくことを考えると、保育者が現在も多大なストレスを抱えているという事実を見逃してはならない。また、期待されることが増えるなかで、保育者の負担が大きくなっていることに対して、人的環境の整備や、労働条件の改善などが強く求められているといえる。

震災後の状況を被災地以外に発信し、共有していくことは、保育者にとって、目の前の子どもたちを守る責任の再認識となり、保育の質を考えるうえでもとても重要になると考えられる。保育の質について多く議論が交わされる中、質を高めるための制度の充実や保育者のメンタルヘルスなど、震災を通して改めて見える課題について、今後もさらに検討を重ねることが大切であろう。

(永井知子)

Ⅱ 4年間の園長調査を振り返って

ここでは、本章1節の報告と2012年調査の結果、福島の保育者との意見交換会で出てきた意見を総合し、福島の保育について考察する。

1. 保育の回帰と深化

音山⁽²⁾によって報告された2012年調査では、福島県の園長は、関東圏の園長に比べ保育環境が「悪くなった」との回答が多く（例、「保育内容（5領域）のバランスよい実践（関東：3.3%＜福島：65.8%）」「行事の適正な配置（関東：0.0%＜福島：53.7%）」「日常保育の適切な環境構成（関東：0.0%＜福島：42.6%）」「教育課程の作成、指導計画の立案・確認（関東：3.3%＜福島：28.3%）」）、放射能災害により、多くの保育現場は苦境に晒されていたことが示された。

そして、今回の報告では、震災後の放射能災害に代表される劣悪な環境からの回帰が示された。具体的には、震災1年後は「一斉での運動遊び」について50%近くの園が減少したと回答し、「プール遊び」にいたっては90%近くが減少したと回答していた。震災後の協力園との意見交換会でも「外遊びの制限の大変さやプールや砂場の再開の難しさ」が多く語られていた。今回報告した2014年調査では、これらの活動に関して震災前と比較して減少したという回答が多かったが、2015年調査では、震災前とほぼ変わらない状態まで回復している（詳細は第5章1節(2)）。これは、保育者による園舎やプール等の度重なる除染や日々の努力の結果と捉えることが出来る。このことは外遊びの配慮に関する自由記述の分析でも示されているように、様々な気配りや配慮が震災直後から継続されていることにより、震災前の状況への回帰が進んだと考えられる。

それに加え、徐々にではあるが新たな保育の深まりも示唆された。2012年調査では、保育内容について、「日常保育の適切な環境構成（45.4%）」「教育課程の作成、指導計画の立案・確認（38.7%）」といった項目に関しては、震災前と比較して「向上した」と認識した園長も多く、震災後の取り組みをどのように捉えるかには意見のばらつきが示された。このことは、災害時における保育問題検討委員会⁽³⁾によりまとめられた『災害時における子どもと保育』の事例に記載されている内容からも推測されるように、震災後1年の取り組みは園の置かれた環境ごとに、手探りの状態で進んでいったことが、このような意見のばらつきに繋がっていったと考えられる。このようなばらつきはあるものの、自然豊かな福島を襲った放射能被害という外部からの刺激により、震災を分岐点としてこれまでの保育の見直しが必要であったことは間違いない。賀門⁽⁴⁾は、「震災・事故以前は日常の流れの中でつい埋もれてしまいがちだった保育のねらいや内容への意識や見方が、3.11を境に一旦崩れ去ったことで、一人ひとりの保育者が「自分の保育をどうするか」を強く意識するようになった。」と述べている。このように、今ある環境を踏まえ、子どもの発達にどのような環境が望ましいのかを議論していく場や機会が増加したと考えられる。

それから、4年が経過する中で、少しずつではあるが環境は改善し、外遊びの自由化やプールの再開、行事の適切な配置等へと繋がっている。また、「会議時間の増加」や「保育記録や書類作成時間の増加」「教材研究や準備時間の増加」「地域との連携の増加」「専門機関等外部関係者との交流」「新しい遊具や教材、保育方法の取入れの増加」等、これまでの保育を見直すために必要な取り組みも盛んに行われている。これらの変化には、保育者が自らの力で

今ある環境に働きかけ、子どもが安全に過ごせる状況を作り出すことに繋がり、保育についてより深く検討していると捉えることができる。

2012年調査においても、「放射能災害下でも工夫をすれば適切な保育ができる」という質問について「そう思う」と回答したのは、46.8%とほぼ半数を占めた。そして、本調査においても、2015年調査では平均値が3.5を超えており、現在に至るまで、放射能災害下においてどのような保育を展開していくことが必要なのかを検討し続けたことがうかがえる。このような姿勢が、第5章1節(1)で報告した2015年調査では保育所、幼稚園とも保育内容の変化について、すべての項目で平均が3を超え、向上したと回答した園長が多かったことからもうかがえる。具体的な保育内容の変化については、第2章で取り上げられているが、本調査の結果により、この変化(取り組み)は特定の園にのみでなく、福島の多くの幼稚園、保育所で行われていることが示された。

2. 保護者との信頼感の強まり

調査から浮き彫りになった特徴として、震災による保護者対応の増加が挙げられる。それは、震災後1年の園長調査において「保護者の要望への取り組み」に関しては、70%以上の園で向上したと回答があり、「情報公開」についても75%以上が向上したと回答していたことからもうかがえる⁽²⁾。協力園の意見交換会の際も震災を機に「保護者対応の時間が非常に多くなった」や「外遊びの再開に際して、何度もアンケートで意見を求めたり、保護者会で意見交換を行ったりも頻繁に行う」等を通じて保護者の理解に努めつつ、専門家を呼び、放射能に関する勉強会も多く開催したとのことであった。さらに、保護者のニーズへの対応もきめ細やかに行っており、外遊びを再開した際には、親の要望が様々だったため、「マスクを着用する園児」「外遊びをさせない園児」「外遊びを自由にさせる園児」等、園児ごとの保護者の要求に応え保育していた。

このような園の姿勢や保護者対応が、保育者と保護者との信頼感を強固なものにしていったのだと推測される。加藤⁽⁵⁾によって報告された福島市、郡山市の協力園を対象とした保護者調査(以後2011年調査)の自由記述には、「幼稚園の対応はとても早く、親として大変心強いです。」「園には、本当によくやっていただき感謝しております。大きな不安を抱えながらの新学期でしたが、1つ1つ不安なことを解消して下さり、今は安心して幼稚園に通わせることが出来ています。今のところ、避難せずやっといこうと家族で話しています。」といった感謝の気持ちが多く述べられていた。

今回の2015年調査でも、「保護者の要望への取り組み」「保護者への対応時間」「座園児の保護者への情報提供や相談活動」といった保護者に関する質問項目の平均が3.5を超えるなど継続した支援が行われている。このような継続的な保護者へ関わりが、4章で取り上げた新入園児の保護者への信頼感へと繋がっていると考えられる。

また、保護者への対応だけでなく、子どもの命や発達への真摯な取り組みが信頼感の構築にも力を発揮している。2011年調査⁽⁵⁾の自由記述でも、「4~5月の2ヶ月間、昼間自宅にいて〇〇と2人で悶々と過ごしていましたが、6月に入園してからは、〇〇がとても生き生きとした表情で生活できるようになり感謝しております。」「子どもにとって、今1番の楽しみは幼稚園です。園で遊んでいる子ども達をみると本当にうれしそうで、やっぱりここにいたいと思います。家庭では食事等、気を付けて生活するようにしていますので、園ではのびのびと遊ばせていただくこと、うれしく思います。」等の意見があり、園に通うことで、子ども

の成長の姿が認識できたことも大きな要因だろう。

加えて意見交換会等で話を聞くと、ほとんどの園で毎日、除染のために保育後の室内の丁寧な拭き掃除と朝の園庭の掃除を行い、放射線量の低下を図っているとのことだった。このような毎日の地道な取り組みを通園、降園時に目の当たりにしていくことで、保育者の真剣さが保護者に伝わり、信頼感の構築へとつながったのではないだろうか。

3. 保育者の頑張りとストレス

このような保育の回帰と深化、保護者との信頼感の強まりは、保育者の努力の上に成り立っていることも忘れてはいけない。音山⁽²⁾にもあるように、2012年調査でも、園長は「保育者はよく頑張っている」との回答が多かった。その傾向は、今回の報告にも引き継がれており、保育者は震災後の4年間、過酷な状況の中で頑張り続けている。このような状況は本章1節のまとめにも挙げられているように、これは保育者の高い意識の反面、大きな負担がかかっていることを忘れてはいけない。

震災直後、自らの家族と連絡が取れない中、在園児の命を最優先し、保育所で一夜を過ごした保育者の姿は、まさに命を守るべき存在としての社会的役割を果たした。放射線量の高い地域では、国や自治体の行った除染では十分な線量低下がなされなかったため、保護者と共に園庭の大規模な除染に加え、毎日、保育が終わってから1時間以上かけ室内を除染し、翌日の朝には1時間前から出勤し、園庭の除染に努め、子どもが少しでも安全に過ごせるように環境を整えていた。加えて、内部被爆の危険から子どもを守るべく、食べ物の放射線量を測定したり、食材の産地を特定・選定したりするなど多くの労力を割き子どもの健康を第一に努めた。このように、子どもの不安や健康を守るため、日常の業務以上に多くの労を尽くし子どもの命を守り続けた。

このような取り組みが本章1節(2)でも示されているような「職員の勤務時間」「クラス単位での掃除」「会議の時間」「保育者の記録や書類作成時間」「教材研究や保育の準備時間」等の保育にかかる時間の増加に繋がり、その状態が継続している。

福島での意見交換会や OMEP フォーラムに参加し現場の保育者と話をしていると、震災後1年半頃から、「今ある環境の中でどう保育していくかを考えていくことが出来るはずだ」「原発事故を言い訳にしない」といった声を頻りに耳にするようになった。これらの言葉は困難な状況に立ち向かい、子どもの発達を支えるという高い専門意識であり感心すると同時に、幾分の不安を感じた。

野村・杉山⁽⁶⁾は、「今回のような大規模な災害は、「みなが経験していること」「みんな大変なのだから、不満をいってはいけない」という空気になりやすい」と述べている。また、近年では、教師・保育者は感情労働（自分の感情を制御して、相手の感情に合わせたり、職務用必要な感情を相手に喚起させたりすることで対価を得る労働）を必要とする職業ともいわれており⁽⁷⁾、自らの感情を抑制することが求められる職種と考えられる。これらのことから、ただでさえ自分の感情を押し殺しやすい状況において、教師・保育者特有の感情制御により、ストレスを想像以上にため込んでいることが推測される。また、「忍耐強く、我慢強い。」という言葉に代表されるような福島の県民性もこの傾向を高めている可能性もある。

更に、保育者自身にも多くの葛藤があると推測される。田中⁽⁸⁾は保育者について、「福島の保育者たちの大変さは、状況が好転する見通しが立たないことと、子どもの現状の捕捉の難しさにあるのではないだろうか。いつまでと期限が見えず、子どもが適応しているのか我慢

しているのかもつかみにくい状況の中で、どうすればよりよい保育になるのかを模索し続けなければならない。目標が明確であれば、覚悟と気力で進むことができる。目標が定まらないままでは走り続けることは難しい。」と述べている。実際に、1節のまとめには、「ここまで来るのに大変な悩みと取り組みの連続でした。以前と変わらないように示されていますが、今なお不安とストレスは続いています」、「低線量被ばくによる健康被害が今後出るのかどうか心配」といった記述が挙げられており、不安状態が続いていることがうかがえる。

4. 園種の違い

本ワーキンググループにおける広域調査の特徴として、保育所と幼稚園を対象に調査を行っていることが挙げられる。そこで、園種類ごとの課題を述べる。

まず、保育所では、幼稚園に比べて、震災後に保育内容や活動が向上したと答える傾向が高かった。また、「給食における安全・衛生対策」「危機管理体制」といった生活に密着した項目での得点も高かった。加えて、「遠方への園外保育の実施」についても多く設定されていた。これは、1節でもまとめられたように、生活時間の長いこと等が関係していると考えられる。更に、記録や書類の作成についても増えていた。これは、給食や午睡などの長時間保育により、多くの連絡事項があることから、保護者との連絡のための書類の作成時間の増加が考えられる。また意見交換会では、放射能災害にかかる助成金等の請求に関する書類作成が増えているとの話も聞かれ、震災に関する書類の増加も考えられる。このように、保育所では、多くの項目についての作業量が、幼稚園に比して増えてきていることが大きな問題といえるだろう。

一方、幼稚園では、園児の減少が大きな問題となっていることが示された。これは、放射能災害により、多くの子どもが避難をしていることが関係しているだろう。共働きの世帯の場合は、両親ともに仕事をしているため子どもを避難させることが出来ないが、専業主婦等の場合は、母親が子どもを連れて避難し、父親が単身赴任することも出来るため、幼稚園での園児の減少が顕著になっていると考えられる。

以上の様に園種ごとに不安に感じるようになるように、各園の置かれている状況によっても、その不安や子どもの発達に関するデータを累積させることが必要となるだろう。

5. まとめ

ここでは、2012年、2014年、2015年のデータを比較し、4年間の園長の意識の変化を挙げた。それにより、震災後の復興に向けた動きと、それに関わる保育者の頑張りや努力が背景にあることが浮かび上がってきた。また、保育者が凄まじい努力と時間をかけて子どもに関わっているにも関わらず、未だに多くの不安を抱えている現状も浮き彫りとなった。それは、「子どもの発達への影響」に関する自由記述の分析にも述べられていた「運動不足による、体力低下や発達の偏りに対する不安」などである。また、保育者への頑張りによって、支えられている現状は、保育者に多大な負担を強いていると考えられる。

以上のことから考えると、本報告の中で何度となく使用した「震災後」という表現に違和感を覚える。すなわち、福島の子育てを取り巻く環境は、徐々に改善されてはいるが、未だ「震災中・災害中」という言葉が当てはまるのが現状であることを再認識する必要がある。それと同時に、本調査では、福島の子育てに組み込みが高まっているとの結果も導き出されている。よって、福島を取り巻く環境を災害中と認識し、福島の子育て・保育者を支えていくという視

点と、福島の子育の現状を自分の目で見、学んでいくという姿勢が必要である。

これらのことを踏まえつつ、次回報告書では、本報告に加え、現在、集計分析中の保育者対象調査、保護者対象調査の報告を行い、保育者・保護者の意識の推移と本報告との関連を検討する。

本調査にご協力いただきました所長・園長先生に感謝申し上げます。また、調査用紙の作成は、放射能災害下における保育問題検討委員会 福島ワーキンググループの作成したものを基に検討しました。調査用紙の配布・回収には郡山女子大学附属幼稚園の保育者の方々ご協力いただきました。回収調査票の入力作業は、本ワーキンググループ永井知子が行いました。

【役割分担】 調査用紙の作成：加藤孝士

配布・回収：郡山女子大学附属幼稚園の保育者

データ入力：永井知子

(加藤孝士)

<引用文献>

- (1) 『社会調査のための計量テキスト分析 一内容分析の継承と発展を目指して一』, 樋口耕一 (2014) ナカニシヤ出版.
- (2) 『震災に生きる子どもと保育』, 日本保育学会 災害時における保育問題検討委員会報告書 (2013) 音山若穂 p168-196.
- (3) 『災害時における子どもと保育』, 日本保育学会 災害時における保育問題検討委員会報告書 (2011)
- (4) 『震災に生きる子どもと保育』, 日本保育学会 災害時における保育問題検討委員会報告書 (2013) 賀門康博 p79-92.
- (5) 『震災に生きる子どもと保育』, 日本保育学会 災害時における保育問題検討委員会報告書 (2013) 加藤孝士 p93-125.
- (6) 『発達 「特集」 震災後を生きる子ども』, 子どもの心身を守るために必要なこと 野村和代・杉山登志郎 (2013) ミネルヴァ書房. p18-25.
- (7) 『幼年教育研究年報 33』, 保育者のストラテジーとしての感情労働ー幼稚園の3歳児クラスの分析から 中坪史典・金子嘉秀・中西さやか・富田雅子 (2011) p5-13.
- (8) 『震災に生きる子どもと保育』 日本保育学会 災害時における保育問題検討委員会 報告書 (2013) 田中三保子 p162-167.

資料 I (2014 年園長調査自由記述)

幼稚園

保育に必要な支援	子どもたちにとって重要な関わり	子どもの発達への影響	保育者の専門性
安全な環境を整備するための資金若し先生方が安定した状況で働くための支援。	必ず、大人がそばにいてくれるという安心感と、話をきいてもらえるから大丈夫という信頼関係がもてるような関わり。	身体のバランス。食の偏り。心の不安定。体重増加。	ハッキリとした正しい情報が入らなかったことで、戸惑いが多かった。そのため、心身の発達の部分では、うまく対応できたが、放射能に関しては難しかった。
園児が急激に減少したため、平成22年度並の補助を平成27年度以降続ける支援が必要。砂場の砂や園庭の砂などの定期的入れ替えをしてほしい。	屋外での様々な体験。泥んこ遊びや虫取り、芋ほりなどの自然体験。	現在は、ほぼ震災前と同じような保育をしている。しかし、家庭に帰ってからの生活で、外での活動の減少があったり、親のストレスによる子どもへの影響。	外遊びができないときに、室内や遊戯室で工夫して運動遊びを行った。
自然のなかで思い切り遊んだり、土にさわったり、自然物を使用して遊んだり、自然と関わりができるような機会と場所が必要かと思われる。	子どもが安心して安全に過ごすことができる環境と、ひとりひとり子どもをとりまく環境が違うので、その子に合った関わり方が大切と思われる。	身体を十分に動かして遊ぶことができなかったことで、体力面において、また、普段の生活でいろいろ指示されることが多かったため、積極的に動いたり、自分で考えたり、探求したりというような知的な面において、少々、心配である。	思い切り動き回ることができなかったので、身近な物や場所を利用して不足する部分を補うような環境設定を考えたり、工夫したりしていた。一人一人の様子を把握して、不安な子やストレスのある子に安心できるようなことばかけやスキンシップをはかっていたりして、精神的なケアを行っていた。
自然の中で感じ取れる心の育ちや直接体験が欠如していることを補っていく支援。	園児の気持ちに寄り添いながら関わっていく。幼児理解と心のよりどころとなるような愛情。	園児をとりまく人的影響の心の安定ができていくかということ(保護者、祖父母、保育者、社会全体としても)それにより、園児の心理状態に影響があると思う。	何が起きても保育者として子どもを守るという意識や臨機応変に行動する力。情操教育や自然環境教育の保育力。
保育施設設備の除染および遊具の交換などの経済的な支援。保護者や保育者の精神的なケア。子どもの長期的な健康管理。	親の心が安定し、子どもに穏やかに接すること。	この時期に水や土、自然物に触れることなく室内遊びしかできなかったため、感性や豊かな情操は育まれにくい。	震災時とつき子どもを守る判断。サバイバルの体験や知識。
放射線被害に対する正しい知識の伝達。放射線に対するスティグマ。	コミュニケーション能力の育成。幼稚園と保護者との連携。今後の生活での福島県人としての生き方。	放射線PTSD。放射線に対する偏見の存在。	研修会での学び、情報収集、保護者との連携。放射線PTSDや放射線に対するスティグマへの学び。
体力の低下の傾向が見られるので、向上させるための体力作り。	精神的な面での配慮。	震災時に受けた衝撃が地震などの災害が起きたときにフラッシュバックして精神的に不安定になること。	子どもたちを守るための配慮。危機管理。災害時の避難方法。
自然との関わりができるような活動。	保護者の心の安定。	体力の低下。親の不安感が子どもに伝わり、安心して過ごせない。	放射線の知識を得ながら、保護者に寄り添う。家庭ではできないことを、幼稚園という集団生活の場で経験させている。
もつと線量を下げ、自然に触れさせる遊びや、散歩を充実させたい。定数の見直し。クラスとして25人程度。1年生が小学校で30人なので30人にしてほしい。できれば25人を望んでいる。	あまり神経質にならないで接すること。発達過程をしっかりと個々に捉えて関わる。一人一人をしっかりサポートする力。	体力低下。体力の低下。持久力がない。鬼ごっこなどが、なかなか続かない。	放射能について専門知識。講演会等。自然物など使えなくても工夫して保育することができた。ないものでなくある物で今までのようにやる工夫をした。
質の高い保育の内容だと思います。	職員も園児の中に親密に関わりをもつように意識を高めることだと思います。		放射能のことで、保護者を安心していただくために外遊びの時は帽子をかぶる。手洗い、うがいを実施。保育室の床の清掃は職員で頑張りました。
周りの除染ができていないため、散歩へいけない。園での野菜作りができない。	きちんとした情報を正しく伝える。	運動不足。体力がない。	室内での遊びに工夫が見られた。放射線に対する専門知識。
精神的な安定、安心。	直接体験が大事だと思う。	食べ物関係、安心して食べられない。体力面でも運動不足になってしまい、健康が維持できるかどうか。自然体験がほとんどできない。	子どもが成長するうえで必要な体験をのびのびとできない面を工夫して、補ったり、確かな情報を得て、援助にあたること。
保育環境としての母親への子どもの育て方の指針を教えること。家庭と幼稚園が目的をもって心身ともに健やかな子どもを育てるための連携・機会作り。どんな子に育ててほしいか、育てたいかを明確にして、何ができないからできない、という思いを捨て、環境を最大限に生かす子育ての最良の方法を教える。提供することができるよと思えます。私たち保育者がそういう勉強する機会を増やしてほしいです。	人でも音楽でも絵画でも、様々な環境とふれあうことだと思います。大家にや感覚を通して、心と脳が育つと感じます。一番身近な両親、保育者と一緒に感じることも大切だと思います。	するべき時にしてこなかった経験、体験、感情(感じてこなかった)が多い子の発達に心配点が見えます。たとえば、運動遊びのように幼稚園で取り戻せるものもありますが、戻せないものも多々あるように感じています。	いままでの環境がないからできない、無理、かわいそう、と思うのではなく、じゃあもつとおもしろいこと、いいことを考えようという思いにたつて保育をすることが大切です。イメージングする力が必要で、それを実践する知識と行動力も大事です。また、情報のチョイスを的確に行うこと、その提供を保護者にしていくにも必要だと思います。そういった勉強の場もあると助かります。
外遊び(山々との除染)の安全性。砂遊びの確保。	自然との関わり。安全な環境。戸外活動の展開。	体力づくりや戸外体験が少ない。遊びの縮小による交わりの減少。	保育者自身の健康管理。保育者自身の待遇管理。
外遊びプロジェクトを引き続き行ってほしい。バス代無料。自然と関わるプログラムを組んでほしい。講演会ではなく、話し合いができる場(講師を変えて)。	自然、動物、人(家族、地域、友だち等)	運動機能。自然への興味・関心・驚き・感動・探求心・愛情。食べ物を口にしてよいか、自然物に触れてよいか確認。	行事、放射線対策、環境整備、保護者への対応等の勉強会と工夫。緊急対応マニュアル、非常食と防災グッズ。正しい知識と情報。緊急時の対応力。
屋内運動場の確保。屋外活動のために遠くまで出かけるための交通費。		運動不足による運動能力の低下。	せまい屋内でも活動を中心に保育を行ってきた。
保護者に対する支援(不安をとりのぞき、安全な場所まで送るよう)	日常の関わり。気軽に出かけられる環境(遠足中、園外保育が遠い場所になってしまう)	運動不足による体力や運動能力の低下。過保護や過干渉による体験不足や指示待ち。	震災による経験不足や発達を阻害する要因を探り、環境構成を工夫したり、指導・内容を検討した。
体力増進のための運動教育に対する補助。園外保育のための近くの公園、道路の除染、清掃。	一人一人の園児が、自分らしさを発揮し、自己主張できるような学級経営を行いつつ、共同で進める活動に進んで参加できるようにするための支援。	現在在籍しているすべての園児が、震災後、家庭でも地域でものびやかに外での活動できなかった。室内の中だけで、生活のためのルールを学ばざるをえなかった。しかし、外の空間、中での活動、それぞれの場で見につくことか、保育室という一つの空間で学んだことで、基本的な生活習慣やルールなどについて、ごちゃごちゃした感覚で身につけているように受け止められる。	室内、外での活動の組み合わせ(活動の流し)方や運動遊びや体力増進のための教材研究が進んでいる。
大人の感覚で規制しないで(心をしばらない)子どもたちが望むことに応えられるための努力をする(身体、精神の両面の育ちを考えて)。	明るい笑顔で接すること。	2011年3月当時、何歳であったかによるが、以前のような活動ができなくなっている部分で発達に影響があるとすれば、戸外での活動(散歩、砂、水、どろんこ遊び等)が制限されたことに伴う、運動能力、判断力、着替えの仕方など、自主自発ができない状況によって低下している。	戸外でできないことを室内で可能にできる方法を考える。危機感を常に持ち、子どもの安全を考える。そのための訓練や研修。

保育所

保育に必要な支援	子どもたちにとって重要な関わり	子どもの発達への影響	保育者の専門性
昔から変わらない五感を大切に保育。遊びの中から学び育ちを見出せる環境だと思います。		発散できない環境。心身ともに存分に動かせない環境。父母家族の安定した家庭環境。	放射能を正しく知り、怖がら過ぎず、保護者へ対し、質問や不安な思いを受け止め、対応していくこと。
各園で十分に活動できる支援。室内遊具に重要視されているが、戸外での活動もできるので、遊具等の支援があると良い。	運動は室内でも十分できるんだよ。安心できる場所の確保。	3年目になるので、当時と比べるとだいぶ落ち着いてきた。自分たちの健康面等にこんなに大人の人たちは考えてくれている、自分たちも気をつけようと思えるような関わり。	子どもたちを安心させ、楽しい、嬉しいと感じさせられる喜びを与えられる保育技術、工夫次第でできることが増える。お互いの思いが共有できることの大切さ。
施設への人的加配をして保育者の負担の軽減。	信頼関係	自然体験から育つ情緒的な部分。	子どもへの養護や保護者に寄り添い支援する部分については大いに発揮されたと思う。
保育士の確保(関東方面に流出している)。保育士の処遇改善。	体験活動が大切である。	テレビに子守をさせないこと。	子どもに寄り添うという心。震災とは関係なく、保育の質の向上。
年中、年長さんたちが外でのあそびや行動ができるように近くにある公園の整備してほしい。草木がきちんとなくなっているように。	保育園では保育士がいろいろな面について関わっていますが、保護者がこどもたちに関わる時間が少ない(休みでも子どもを預けるため)	外での経験が少ない家で過ごすことが多いような気がする。保護者と一緒に活動してもらいたい。	環境を整えるために保育士はいろいろと工夫しています。現場はとても忙しいです。
	保育者と園児が戸外で楽しく遊ぶこと。	戸外遊びができなかったことによる身体的・精神的不安。	
屋外活動を安心して行える環境(園内だけでなく、県全体において)。	十分に、自然に関わり、安心して、自主的に遊べる環境を整えること。親や、保育士自身が精神的にも安定した状態で子どもに関わる。	運動量や食品検査よりもそういったことを大人が気にしすぎていることが、影響(不安)されるのではないかと。	保護者への対応、子どもへの保育の工夫など、いろいろ発揮してきたが、がんばりすぎが保育者をおいつめいかと心配である。震災以前のように、自然体での保育が必要。
支援でなく、風評の撲滅、偏見をもつ輩たちへの優遇・配慮をなくす。	おもしろい。大人たちが子どもたちのために一生懸命に関わるしぐさ。	家族環境、食生活、運動のバランス。ハード面の安全、ソフト面の安心な環境。	当たり前になっていたことが、当たり前でできなくなった。知恵を絞って、現状でなにができるか話し合えるか、やれない理由でなく、やる議論。
震災前と同じようにのびのびと戸外活動ができるように、固定遊具や砂場の充実を支援してほしい。(3歳未満児用の遊具がなくなったので)。	自分で工夫して遊べる環境(特に戸外)をつくり、体力が自然とつくような関わりが重要である。	体力面が全体的に下がっている。特に、木に登ったり、腕や指先の力が衰えている。また、バランス感覚、反射能力、筋力等の低下が考えられる。	室内においての運動遊びを年齢別に計画的に保育に取り入れた。毎日必ず運動能力が高まるように工夫し、やらせにならないようにゲーム感覚を大切にしたい。
人材の確保			室内での運動遊びを工夫し、外に出られなくても体を動かすことができるよう努力を続けた。心のケアを含めて、震災のせいでも何とできないと思うのではなく、保育者として資質を高めることの努力を惜しまないことではないかと思う。
過ぎた時間は取り戻せないで、過ぎた時間を補えるよう、保育者が保育の工夫、また保育者自身もゆとりをもって保育できる環境(人的も含め)	保護者が十分に関わってほしいと思う。保護者への安心、安全、気持ちのゆとりが必要。あわせて、保育士も同じように思う。	やはり、体力の低下や、自然とのふれあいで得られる五感などが心配(年齢にもよるが)。そのときに獲得しなければならぬものが、獲得できなかった。	子どもたちに対する関わり、保育面、保育の工夫を行う。これからはさらに、工夫を重ねていく必要がある。
子どもの発達に必要なこと、正しい放射能の知識、これからのことを専門的に教えていただきたい。子ども一人一人にしっかりと関わられるよう、保育者の育成と配置が必要だと思います。	子どものもつ能力を引き出してあげられるように手助けをすること。	3年前の時期に習得すべきであった運動能力やコミュニケーションが十分でないで、発達に影響があるのではないかと思います。	限られた環境のなかで、子どもたちが今までのように発達できるよう、積み重ねてきた経験を活かし、保育を工夫してきたと思います。子どもの発達を手助けするために何が必要かを考え、自分の保育を振り返り、専門性を高めることが必要だと思います。
親の情緒が安定するような援助、支援。	情緒の安定が図れるよう十分なスキンシップや人との関わりを学べる場の提供。	運動能力の低下。経験不足による適応力低下。	コミュニケーション力。
状況の変化に対応し、保護者のニーズに応えられるような支援、環境作り。	子どもと大人の関わり、子ども同士の関わり等、精神面、ストレスにならないように課程、保育所との関わりを大切にしたい。	情緒の発達、健康、体力運動能力の低下、肥満傾向等。	室内運動遊びの工夫等、これからは外での活動ができるので、のびのびと身体を動かして活動できるようカリキュラム作成。様々な情報を取り入れ、さらに保育者の専門能力を発揮していかなければならない。災害時の対応の重要性。
放射能を考えなくて良い環境		その年齢で行うべき運動ができていないため、それを果たしてこれからのように取り戻せるのか、持久力の低下。	放射能に関しての専門知識のなさを痛感し、いろいろな研修で勉強している。
遊びの大切さ	保護者の不安解消	保護者の不安が一番影響すると思う。	生命を守る。生命をあずかる責任の重さです。正しい危機管理、判断力です。
個別に関わるべき子どもたち。保護者はたくさんいるので、じっくりと個別に関わるような人員の配置をお願いしたい。また、心配な時にいつでも相談できる専門の機関があれば良いと思います。	一人一人の子どもたちの育ちを理解し、必要な関わりを行うとともに、保護者に不安を与えないよう保育士が関わっていることが大切だと思います。運動能力の低下についても心配なので、保育所と家庭とが協力して取り組むことも大切だと思います。	食事面、運動面(少し遊ぶと疲れたを連発したりする)	日々の保育で、培われた信頼関係があり、安心して指示に従って遊べたこと、子どもたちにとって良いと思われることに積極的に取り組んだこと。まだまだ原発は安心できないので、行政機関がしっかりと対応してほしいと思います。
元気アップ事業のように安全な場所での遊びの援助(バス提供、場所の提供)。保育士への心のケア。	保護者の心の安定が子どもにも影響するものと思う。	運動面において、体力低下が心配。運動不足からくる肥満、病氣。	しほらく外遊びができず、室内での運動遊びに力を入れ、また、絵本の読み聞かせも心のケアの面から力を入れた。保育所建物の耐震度の調査、耐震設備の設置。
心に寄り添った肯定的な支援。保護者に対しても同様思う。	どんな状況でも楽しみ、喜びを見出し、たくましく生きることのできるような、前向き、肯定的な言葉と態度、思考。	マイナスばかりに視点をあてるのではなく、この現実を受け入れて(受け入れるしかない)、今できる最大のことをすることだろうと思う。	受容、傾聴と言った、カウンセリングの部分と丁寧な説明と対応。今後同じ。私たち大人は、未来の子どもたちの将来を思うとき、原発、震災、環境問題など、いろいろ考えるべきだと強く思っています。
自然に対する活動等。	子どもの心に寄り添うこと。	体力、病氣に対する抵抗力。	危機管理、保育者間の意思統一。
線量を気にせず遊べる場所が近くにほしい。	自然との関わり、戸外での運動量。	自然への関心の薄さ、植物に触れる不安。運動能力の低下(バランスがとりにくい、持久力、肥満度)	室内遊びの工夫。
砂遊びを含めた戸外遊びを、存分に行うための安全確認作業。	保育所としての放射能への考え方。保育所がどのようにとらえているかによって、子どもたちの活動も制限されたり、育つべきものが育たなくなる。	自然とのふれあいが得られる感動体験が少ないための心の育ち。	はじめのうちは、戸外に出られなかったことで、いかに室内でストレスを発散させることができるかを考えた。今は、なるべく戸外遊びも取り入れて、事後、きちんとケアをする方向に変えていった。保護者の協力、説明は大切。
成長期にある現在、だいたい外へ行く機会も増えてきましたが、やはり外遊びができなかった時間が大きく、体の発達に関わっていると思います。幼児体操など、身体を十分に動かす時間をできるだけ多く増やしているところですが、まだまだ十分とは言えません。1〜2年は、専門的な方からのアドバイス等が必要だと思います。	外へ行けない、自由に遊ぶことができない、と様々な面で我慢をしていた時期がありましたので、スキンシップを十分に心がけ、常にそばにいて、どんなことがあっても守ってあげる、我慢はしなくていいんだよ、たくさん甘えていいんだよと愛情を持ち接することをしています。	体力、運動機能の面です。	外で発散していたことができないストレスを保育の活動の中で、集団で遊んでいた部分を何回かに分けてたっぷり関わりを持って時間を作って。また、読み聞かせにも工夫をし、楽しく想像力をかきたてるよう工夫した。

母親支援と子ども支援が大切です。母親が子育てに喜びを感じるよう、子どもの成長などを伝える、また、仕事と子育ての悩み、健康に対する不安などきちんと話し、伝えることで、子育てへの安心につながると思います。できるだけ、親と話す時間を作り、ともに歩んでいく姿勢が大切。あたりまえのことですが、当たり前の支援をキチンと関わって行っていく。	子どもたちの笑顔が輝くためには、日々の子どもたちのスキンシップ、話しかけ、子どもの心に寄り添えるよう、毎日の保育に楽しくなるような保育園、いいこと、悪いこと、お手伝い、感謝の心(思いやり)が育つような保育です。体力向上、心の育ちには、まずはいっぱい、思い切り遊ぶこと。	体力面。親の不安が子どもにどう影響するか。食料などの不安はどうなのか。	非常時における非難の仕方、子どもの誘導など常に危機感をもって、ほいくするなど、以前より避難訓練の仕方、考え方など、身につけてきた。緊急連絡、通報など、より確実により早くするなど、訓練を重ね、継続して行う。
積算線量計を付け続けること。毎日の線量計測を怠らないこと。ホットスポットの除染などそれに対応する人件費の支援。	線量が低下したことでのあいまいさがでてきている。計測を大事にして、安全な環境をあたえつづけること。自然が十分に得られなくなったことでの五感を育てる保育カリキュラムの充実と、歩く力、運動能力の向上など。	豊かな自然との関わりを失われたことによる精神的苦痛。完成。歩く力。仲間との探求心など、限りなくあると思います。体力、運動能力の低下です。	危機に直面したときの判断能力、備え、放射線を学ぶこと等。学んだ知識、子ども、職員、保護者と共有していく手立ては、苦しんだ分、精一杯伝える努力と職員としての自覚が育った。今後、子どもたちの運動能力を高めていくためのカリキュラムの検討など、具体的に求められていくと思われます。
保育士の資質の向上と保育定数の見直し。	一人一人の個性に寄り添うこと、社会の一員として育てること。	散歩や自然環境が豊かな場所に自由に行けないため、自分で判断ができない。	精神的な面での保護者支援も含めて、ひとりひとりの子どもの個性に寄り添う保育。
通学路の除染(散歩道)。体力作り、強化。	のびのびとあそぶこと、草花などにふれること、五感を使つての遊び。		
所産および地域の再除染と定期的な測定を行うことにより、安心して外遊びを保障すること。	自然物とのふれあい。外での開放的な遊びが何より大切だと思います。	運動面、自然の理解等	遊びの創意工夫が大切。保育者自身が楽しい遊びを発見し、子どもにも波及していくこと。
子どもたちに放射能だからと言う考えを植え付けないようにすること。県外等に出かけなくても、所産で十分に活動できるようにすること、また、植物、小動物などに触れあうことを日常の生活でできるようにすること。	当たり前のことが当たり前でなくなっている。いかに震災前の状態と同じ生活を経験させてあげるかを考えていかなければならない。	除染も進み、以前よりは戸外あそびができるようになってきた。しかし、まだのびのびと走る等の活動が十分でないことから体力面が一番心配である。	どのような状況が起きようとも、まず子どもたちを守り、安全に保護者の方々にお返しすること。直後の度重なる余震でも常に子どもの安全を考えていた。また、限られた状況の中で子どもたちにとって、よりよい保育が提供できるよう、努めた。

その他(こども園など)

保育に必要な支援	子どもたちにとって重要な関わり	子どもの発達への影響	保育者の専門性
	自然との関わり。	保護者の考え方。	子ども一人一人にあった対応。発達にあった対応。心にひびく対応。
		運動能力や体力の低下。放射線による健康被害。	屋内での保育の工夫。災害時の幼児の安全確保(危機管理)。恐怖への対応。
体力増進。保護者へ放射能についての情報提供。緊急時の避難訓練、保護者への連絡体制。	自身に敏感な子もいるので、保育者がその子の思いを受け止め、全面的に守ってあげようとする意識付け。	健康面、ストレス。	12名の園児たちがいるので、いつ、どんな時に震災が起こるか分からないので、あらゆる場、時を配慮し、訓練を重ね、全保育者で全園児を守ろう、助けようとする協力体制や意識付け。
以前、行っていた近場への園外保育を控えています(線量の問題から)。いくつか県外への出かける支援はありますが、継続してほしいと思っています。	震災前と変わりません。	震災以降、まったく土に触れていない。栽培したものを食べる機会が全くなかった。	制限された中でも、いろいろ工夫しながら環境を整え、園児を受け入れました。以前よりも教師同士、話し合ったり、楽しい企画を考えたりするようになりました。前向きに、前向きに、みんな頑張っています。

資料Ⅱ (2015年園長調査自由記述)

幼稚園

保育に必要な支援	子どもたちにとって重要な関わり	子どもの発達への影響	保育者の専門性	その他
地域との行事も再開され、園児への関わりを求められるようになってきた。お互いに積極的な関わりができるために交通機関の支援の必要性でしょうか。	友だちの家に行って遊ぶことで、様々な人との関わりをし、社会性が育成されること。家族間だけで行動することが多く、人との関わりが減少しているため、コミュニケーションが良好でない。	事故によって神経質になってしまったために、行動力が不足になっている。体力・運動能力低下にもかかわっていると考えられる。大人がもっとのびやかになって子育てしていくことが大事である。	避難訓練等に本気でとり組み、良い方法について学ぼうとするようになった。あまり考えすぎないで計画することも必要かな。	
質の高い保育を維持できる人材の確保。豊かな経験を保障できる環境の整備。	周囲の事象としっかり向き合い、考えたり、試したり、工夫したりしながら、自分の力で物事を解決しようとする姿を引き出していく。	思い切り遊ぶ経験が不足しており、その中で育つべき情緒(やってみたいことにチャレンジする、できたときの喜び、できない悔しさ等の感情)面での発達。「まあいいか」とあきらめやすい。最初から、チャレンジしない。	保護者の様々な不安に寄り添い、相談に応じてきた。不足しがちな体験を補うためのカリキュラム改善に努めてきた。カウンセリング的な関わりが求められる。	
住居地の放射線量に関する詳しい情報の提供。健康診断についての説明。	保護者の中で不安を抱えている者どうしが子どもの発達に必要な遊びについて知らず知らずの内に制限を加えているため、子ども自身が本来やりたいものとうまく関われないことがある。	甲状腺がんについて十分な分析がされていないため、どうしても外遊びが控えめになってしまい、自然の本来の姿(良さ)を理解できない。	不安が幼児(特別支援を必要と思われる子どもも含めて)への対応において、その子の思いを大切にしようとするようになった。	
安全、安心。	一人一人の発達に添った平常心。	大人や相手の思いが主で、自分の感性不足。	常に学び続けること、繰り返し学ぶことで自信をもって活動できている。	必要であると思うが、アンケートを含め、書類提出が過多です。
保育者も保護者も安心して保育できる預けられる施設へ。	思い切り戸外遊びができること。	食の変化、室内活動が多い。	子どもたちが伸び伸びと遊べる環境づくり、保護者の理解等。	
先生方の不足。若い先生(有資格者)の確保。少しでも放射線量が下がり、安全な保育環境。	思い切り、伸び伸びと活動すること。身体を動かし、体力をつけること。	体験の少ない戸外活動不足からの体力不足。人と人との関わりの中での。	子どもたちもさながら、保護者に寄り添い、心のケアを発揮したように思う。	
保育する方(幼稚園教諭)の不足。人材の確保が必要。	生活経験が必要。守られるばかりで、年齢に必要な経験をしないまま入園してくる子が多く、そのあとで意図的に経験を積ませることをしています。	年齢なりの生活経験をしてこなかったこと、親の過大な心配、間違った知識の中で育ったことによる心身への影響により、必要な想像力が働かない(生きる力に乏しい)、子が増えるのではないかと心配しています。	年齢に必要な経験をさせるための保育計画を立て実践してきました。環境のせいではないことに目をむけるのではなく、ではどうすればもっとやれるかを常に考え、正しい情報、知識とともに保育に活かす能力が必要です。	遊具への補助金もありがたいことではありましたが、人的な助け(体育教師を週に1回派遣してくれるなど)が、もっと必要でした。
外で遊べないことで体力不足になりがち。体育館で補っている。自然体験ができない。				
安全、安心に力をいれたいと思う。				
震災前、当たり前と思っていた豊かな自然環境での保育を現在できることから見直し、実現していくこと。特に、園外散歩ができていくので、線量が安心できる場に行き、様々な経験ができると良いと思う。	安全で安心して遊べる環境作りと体力作り。	外遊びの時間が家庭でも少なく、体力、自然への興味や関心、試すなどの経験不足からくる偏りが心配である。	防災への取り組みで、真剣に話し合ったり、意見を出したりし、積極的に訓練等に関わっている。目に見えない放射線への知識を学び、保育活動での注意すること等、組織で話し合い、取り組んでいく過程(保育の計画など)	食育を推進しているが、食べ物に関しては、県内産への抵抗を感じている保護者もあり、言葉に出さずいる方もおおいと思われる。栽培した野菜はまだ口にするにはできないと残念に思う。
園外保育(散歩)ができるように園周辺すべての除染		体力の低下。戸外遊び(自然体験)の不足。室内でも身体を動かす活動を取り入れること。		
		体力低下が心配される。自然とのかかわりがある時期、まったくなかったことの影響が大きい。	保護者が安心してできるような関わり、専門的な情報をわかりやすく発信し、実践してみせる。	現場は一生懸命に子どもたちの将来を考え、努力してきました。震災に関わる業務量が増え、大変だと思います。このようなアンケートも「思い出さなから」という声も聞かれました。
心と体の成長を大切に保育。	コミュニケーション能力と思いやりの心を育てることに力を注いでいる。	心と体の成長とバランス。	一人一人の心のケアと家庭との連携を大切に保育をしている。	
教育環境の整備。	人間関係。		室内遊び、室内での体育活動に力を入れる。室内遊具の自作。	
教職員の給料(教員の資質向上が保育の支援に関係ある)。親が震災後、安全安心に育てたことで、保育の中で子ども同士のトラブルに、待ってられない親がいるための保育は一斉で実施した方が親の納得が得られると思う反面、核家族的な生活より幼稚園集団生活の中で相手を思いやる社会性のルール・マナーが見についていく保育は必要である。	家庭の個性が十分な人間性を育てる中が少ないために、子が自分中心でない生活が自分にとって、苦痛になり、幼稚園の生活は我慢して、家へ帰って、親子の会話で、幼稚園がつまらない、休みたいを親は受け入れし、一人っ子がおおい。二人兄弟であるための家庭内、社会性を吸収できる環境が幼稚園入園してからなので、関わりを考えて保育する。	自分の思いを通す頑固な面が強い子。つねに保護されて育っているために、自ら挑戦する力の弱さから、自ら判断できる、自ら考える、自ら動くのに時間がたくさん必要。	震災の時、高校3年、2年、1年で経験後、短大まで就職してきた方は、保育の専門として経験は生かされての専門能力は薄いと感じている。幼稚園教諭として、体力、気力・想像力等の発揮をし、幼い子供の基本的人間性を尊重しながら育ててほしいと願っています。	保育者の専門担当に対して、給料面も考えなければ、人材が遠のくのみになるので、教員の資質向上とおなじく、給料等を考慮していただける援助が必要と考える。
今は、心を開いてくれる子どもが多く、心の問題はなくなってきている。思い切り外で遊べる環境を作りたい。	父母だけが生活環境ではなく、祖父母との居住がこれから重要ではないか。	核家族化が進み、母子との交流が少なくなっているのは大変な問題である。母だけで子育てするのは、地域との関わりが大切。	先生方の子どもへの思いや責任感の高さに頭が下がった。子どもと正面から向き合うことが大切。	当時や今、この福島県に残って子育てをしていた父母にご苦労様と言いたい。ここに残った親子さんは放射線の恐ろしさに耐えながら、力強く覚悟を決めていた方があるがゆえに子どもたちのために保育する側として、一杯の力を尽くしてあげたいと思う。
		子どもたちの運動が少ない		
	社会性や自主性、コミュニケーション力が育つように、クラス関係なく、異年齢同士の人(友だち)との関わり、各保育者との関わりを重要視している。	スマホによる子育てや依存症が懸念されている現代、生活習慣や食生活の乱れや睡眠障害などから引き起こされる社会性の欠如やコミュニケーション力の低下など。	限られた環境の中で、子どもたち自身が様々なストレスを抱えているため、それらを室内外で発散できる遊びの工夫に能力を発揮した。	低線量被ばくによる健康被害が今後出るとの心配。
保育環境の整備(除染等)支援。健康状態を常に確認できるシステム構築。	家族との関わり(親の就労による長時間保育の増加)			
たくさんの情報。自分の園だけでは分からないところもたくさんあるため、変化に気を付けたい。	まずはその子、その子の理解から運動面が不足なのか。人との関わりが不足なのか。母に委ねすぎているのか。母が心配になりすぎたのか。そこを援助できるように。	広い場所での活動不足。たくさんの人との関わり不足。	子どもを理解しようとする力。足りないものへの配慮の勉強。	援助を必要とする園児が年々増えているように思うが、どこに原因があるのか、手探りでよくわからない。事実の提供はどうしたら良いのか。

子どもたちが安心して遊べる環境の整備。	子ども一人一人がのびのび過ごせるように精神面、体力面のケア。	ホールボディカウンターをそれぞれ行ってはいるものの、体の内面的なものは見えないので、健康面については影響が出てこないというのだが…	子どもたちの体力が低下しないよう、細心の注意を心がけ、室内の空間をうまく利用しながら、活動を行った。自然物に触れる機会が多く、くっ減ったため、保育内容を考え、代わりになるものの工夫を心がけた。	
心と体の成長を大切に保育。	コミュニケーション能力と思いやりの心を育てることに力を入れている。	心と体の成長とバランス。	一人一人の心のケアと家庭との連携を大切に保育をしている。	
ここ最近になり、時間に制限を設けず、外遊びをしたり、自然物や砂も使用して遊ぶようになってきたので、震災前の生活に戻りつつあるので、必要な支援はというと、あまり思いつかない。	何に対しても困難なことがあるとすぐにあきらめてしまうことが多いので、たくましく育ってほしいので、一人一人に丁寧な関わりをしていく。自分で考えたり、行動したりできるように、関わり方が必要かと思われる。	震災後2～3年は、十分な運動をしなかった小学生。中学生になって、運動があまりすきではなくなるのではないかと、そのため、肥満な子がおおくなるのではないかと。	子どもたちの発達の様子を見ながら、バランスの良い育ちをしているかどうか見極め、必要な遊びを提供したりすることができた。遊びを工夫して楽しく取り組むことができるようにする。	子どもたちは、外で遊ぶのが大好きなので、室内やホールにのびのびと遊ぶことができるような設定や、遊具等、工夫しても外に勝ることはできないようだ。甲状腺がんにならないとも限らないので、その影響がどうなのか、これからずっと心配である。
今までいろいろな面で支援をしていただきました。子どもたちが伸び伸び遊べるようになったのも大勢の方の努力のおかげだと思っています。今後の支援は福島は郡山は安全で依然と同じだと理解していただき、ひとりでも多く入園希望者が増えることだと思います。	親子関係、友だち関係、保育者との関係など、対人関係が大事だと思います。自分は愛されている。必要とされている。受け入れられているという安心感が育っていくと、思いやりの心が育つのではないかと思いません。	外での活動を小さい頃から制限された中で育っているので、室内遊びの安心感があるのではないかと。長い間、自分で遊びを見つけて集中するのが苦手な子も見受けられます。	保育者の専門能力というより、人としてやなければならないことは頑張っていたと思います。これからは行動力が必要だと思います。	子どもたちのために精一杯頑張っている保育者のことも考えてほしい。園児が減るということは、先生方の給料も少なくなるということです。そんな中でも子どもたち、保護者の方々に不便さを感じさせないように働いている先生方が大勢いることを理解してほしい。
	身体を動かす楽しさ、十分に身体を動かすことの大切さを教えていきたい。	鉄棒、水泳等、他の県よりも運動能力が劣っていると思う。		
外遊びの中での体力をつける遊具。園外保育にかかる費用等。	健康面での変化を見逃さないことが重要だと考える。	体力の低下。身長と体重のバランス。	子どもたちの心のケアと身体を使った遊びを充実して取り組めた。	
砂遊び用の砂、用具。	自然を感じられる場。体力の向上(リズム、運動)	運動能力の低下。肥満。	活動制限がある中、限られた場を有効的に活用し、保育にあたることができた。どのような環境でも子どもの成長を考え保育する姿勢が必要。	
	子どもが自らやりたい遊びを見つけ、自分で考えたり、友だちと相談したり、判断できる主体性を養えるようにしたい。そのため、低年齢から様々なことに興味・関心を持たせられるような働きかけや子どもと一緒に考え、共感し、取り組めた過程をほめ、失敗したら原因を一緒に考えたりしながら関わっていくことが必要。	運動機能に偏りが生じていること。生活の面で自ら人や物に関わろうとするコミュニケーション能力や自らで考えて行動すること。	子どもの育ちから、今必要な学びが何か、また補うために工夫できることは何かと試行錯誤しながら実践してきたこと。与えるだけでなく、子どもの言動から見極めて、保育を展開させていけるような保育者の柔軟な対応、技術だと思われま	

保育所

保育に必要な支援	子どもたちにとって重要な関わり	子どもの発達への影響	保育者の専門性	その他
保育所には絵本、おもちゃなど、たくさんありますし、外遊びも制約せずにできる環境になりました。今一番必要な支援は福島の子どもたちに対する偏見(放射能をたくさん浴びて身体が危ないのではないかと、汚染された食べ物を食べて大丈夫かとか)を持たないでいただくことです。今、このようなアンケートを出すこと自体、どうなのでしょう。	今まで通りの関わりをしていくだけです。	全国の皆さんの福島に対する偏見が子どもの将来にどのように影響するか非常に心配です。	目に見えないが、様々な害を及ぼすと言われている放射能に対する恐怖で、不安になっている保護者をしっかり伝え、子どもたちが幸せな将来を迎えられるようになるための基礎を培うこと。	
危険なことを正しく知らせていくこと。積極的に自ら運動に取り組むことが大切だと知らせること。バランス良い和食中心の食事を進めていく。	親の愛情をしっかりと伝えること。専門家の継続的な支援やアドバイス、地域力の結果、人の力が大切。	放射能よりもネットとの関わりが大変難しくなっていると思う。人と人のつながりが希薄にならないように。	子どもにとっての最善な道をさぐっていくこと。親の不安に寄り添うこと。	
思い切り遊べる場所に出かけたい(起伏のあるところ)できれば、プレーリーダーがついているとありがたい。	地域の人との関わり。	体方面。運動面。	いろいろな研修会に出かけ、情報を収集し、保護者や地域の家庭に保育について知らせることができたと思う。今後とも自国だけでなく、地域の核となるように専門性を高めたい。	地域全体で子どもに関わることのできる社会にしたい。
放射能に対しての正しい知識。保育士に対する支援が大切(勉強会や研修会、運動、実技など)	正しい知識のもと、子どもたちが不安にならないように、健康な体と心を育てるために、大人も元気であること。	福島の子どもの肥満傾向を心配する声がかかるが、私はあまりそのことについては心配していない。むしろ、子どもたちが「自分は福島の子」と過敏にならず、堂々と大らかに成長してほしいと思っています。	自分たちのことは顧みず、保護者対応にも真摯に向き合っていた。園内で放射能についての勉強会を独自に開催し、カリキュラム作成にも役立った。	
	たくさん歩くこと。園周辺の散歩には行っているが、以前は行っていた神社や公園までは行けておらず、コースが限られている。いつになったら遠くまで散歩できるのか判断しきれずにいる。		放射線の影響。何をどのように気を付けて生活すればよいか、等、具体的な話、説明があると良い。	
保育士の加配。給量や食物測定への人件費。食材への支援。	一人一人、大切にされることの実感。親子で感じること。	外活動ができなかった3年間の運動不足と自然との関わりや五感の発達に不十分な部分があると考えられる。	専門家を呼んでの講演、実技、研修を繰り返し行ってきた。計測し、その数字をどう見るかは今でも続いている。職員自らがその役割を担い続けている。子どもたちの健康面の追跡、原発が危険なものであることの認識。	2の項目について、①で少し書きましたが、ここまで来るのに大変な悩みと取り組みの連続でした。以前と変わらないように示されていますが、今なお不安とストレスは続いています。その意図が組み立てられるようなまともをさせていただきたいと思えます。
親の支援。放射能に対する正しい知識。	子どもの育ちを考えると、遊び、食事等はとても重要です。今まで通りに安心、安全を確認し、子どもたちがのびのびと成長してくれるよう、思いやりを持った保育を全職員で取り組んでいます。	子どもたちの健康。	外遊びができないときは、室内に於いても体力向上、心の育ちを考えて、工夫するほかに職員で話し合い、実践。専門的な勉強会、研修。	
子どもたちが自由に遊べる施設。幼児体操教室を各園に定期的に利用できるようにしていただきたい。	親子との触れ合いの時間。	家庭での食事(特に朝ごはん)。お休み中、ごろごろせずに郊外へ出て、外であそぶこと(親子で一緒に)。	室内での保育が中心となるので、身体を使ったダンスや歌や、絵本の読み聞かせ。日々行うことができる幼児体操など年齢に合った体を使つてのあそび。	
環境は本当に安全なのかを信じられるような支援。	自然や自然物との直接体験。	自然の偉大さに触れたり、親しみを持ったち、小さな種や苗を育てて収穫の喜びを味わうなど、自然に関することが丸々抜けてしまっている。	せめて子どもたちの口に入る食材は安全なものを使うことを徹底した。これは市の取り組みに感謝である。安全な環境とすることで園庭の表土除染や砂場の砂の毎年の入れ替えをおこなった結果、給量は0.0台に下がっている。しかし、震災前のように存分に遊ばせるには保護者も保育者も抵抗がある。これはいつになったらなくなるのかわからない。	
子どもたちが思い切り体を動かして遊べる場所と時間。		運動不足による影響(肥満、運動機能の低下とそのためのけがの増加)。	室内遊びの工夫(保育者間内でのじょうほうのやりとりが増してきている)。	記入にあたり、異動してきたので、以前の状況が分からず、書き込めない部分がある。また、放射線量の数値もだいぶ下がってきたことで、結果として「変化なし」や「どちらでもない」が増してきている部分もある。
食の安全、身体を動かすこと。		体力。遊び方を知らないことがある。	一人一人に応じた保育。遊びの工夫。友だちとの関わり。	
安心、安全な給食、食材。	戸外遊び等の体力作り。	運動面(意識して室内外で身体を動く遊びを取り入れている)。	個々により保育。	
震災後外遊びを十分に経験できなかった子どもたちの運動能力を回復していくためのプログラム。	震災の経験を、子どもたちにも語り継いでいくこと。不安の内容に、毎年3月11日は語り継ぐ日にしたい。	外で栽培する野菜や自然に思う存分触れさせられない、気持ちはまだあること。大丈夫とは思っているが、保護者の中には不安のある人もいるかもしれない。	限られた中でも思う存分、遊ばせてあげられるようにするにはどうしたらよいか経験をもとに考え、話し合い、実践できた。	
	親との関わり。	家庭での外遊びが不足しがちであるが、体力の低下が見られる。安心して子どもん外に出て遊ばせるよう働きかけていく。	子ども、保護者への安心、安全の啓蒙。	
	見た目元気でも、子どもをよくみて、子どもの心に寄り添って関わっていくことではないか。	運動能力面、成長していく中で、震災を経験しない子に比べてどんな影響があるか心配である。心にトラウマとして残っていて、大人になった時、何かで現れるのではないか。	保育の日常の中で、さまざまな制約の中でできることを精一杯行った。室内での運動遊びなど。	
	心のケア。子どもの気持ちに寄り添って、安定した生活が送れるように配慮する。	体力の低下。	外遊びが制限されていたころは、室内でも運動機能を高められる運動遊びを考え、実施し、その後も工夫をして体を使った運動遊びを取り入れた。	緊急災害時の保護者への周知の仕方など、マニュアルを整備した対応に備えることが大事だと改めて感じた。
ゆとりある保育をするための保育士の配置。事務量も多い中、気持ちに余裕がないと子どもへいい保育ができないときもある。	体を動かして遊ぶ中で体力、ルールなど、スキップを深めながら遊ぶ。大人と友だちとわかること。	ゲーム等が増えていること。	災害時の対応で一致団結する。結束力が生まれた。いかなる時もその場に即した対応がとれるようにシミュレーション、判断力を養う。	
震災後、保育所の仕事量が増えていて、保育士にかかる負担も大きいので、ゆとりのある人員配置を望みます。休みをとることなかなかできないので。保育士にゆとりがあると、元気な保育ができると思っています。	震災時に、保護者の方が不安に思った分、子どもたちが受けた傷も大きいと思う。じっくりと子育てできなかった分、すべての児童ではあませんが、甘えの欲求があるように思っています。ゆとりの中で個別の関わりと、必要な関わりができるよう、専門の職員を定期的に派遣していただきたい。	運動不足と精神的な不安で育てにくい子どもたちが増えている。	子どもを守っていききたいと思う保育士の強い気持ちは高まっていると感じますが、震災後、いろいろな業務が増え、現場は大変な状況です。業務にふりまわされることなく、じっくりと子どもたちに関わられるよう。震災に関わる職員の増員をお願いしたいです。保育士不足もあり、保育士は休めない状況が続いています。	予算の関係もあり、戸外、ゴムチップの交換ができず、戸外のプールが使用できない状態です。震災前の保育所に早く戻してほしいと思います。

保育士の質の向上も必要だと思うが、保護者の子どもに対してのしつけや接し方について考慮しなければならない点があると思う。	子どもたちにあたたい関わり、丁寧な保育が必要だと思う。愛情をもち、接しながらい、良い悪いを知らせることも重要だと思う。			
気になる子が多い。震災の影響との違いもあると思うが、多い。支援が必要。	自分で遊びも含め自分で遊ぶ、作りだす、そのための経験が不足している。友だちや保護者、地域の方との関わりが重要と考える。	体力面での心配はあるが、震災前より心配な声はあったように思います。	震災の影響は保育士1人1人、確かにあると思います。震災時、他面で保育士の力は発揮してされた。さらに必要とされることとしては、本来の保育をさせてあげたいと思います。	直接学会でも伺ってきました。本来の保育をさせてあげたい。保育士は夢ある仕事です。夢ももてるような保育士になってほしいと願っております。このアンケートが、保育改善に役立つよう、お願い申し上げます。
仕事量(事務的にも)増えているので人員の増が必要。	心に寄り添った保育をすること。自然の中(庭)で遊ぶことの大切さをよく理解して保育すること。運動・・・体を動かして遊ぶことの楽しさを十分味わうこと。	運動量が少なく育っているため、今後も運動面は保育士が意識して取り組むこと。	以前は、外遊び(に)に取り組むことを意識してきていたが、一度、室内での保育に慣れたことで、保育士が外遊びへの取り組みがスムーズにできていないと思われる。実際に少なく見えているが、本人としては、多く取り組んでいると思ってしまうている。少し外に出ただけで、十分出ていると勘違いをしてしまっていることは問題かと。	外遊びは、それだけで得るものは計り知れないものがあります。しかし、大人が外遊びを十分に行ったらと思える時間は、実際に遊ぶ子どもたちにとっては短いものではないでしょうか。外遊びの価値と時間については、再確認すべきではないでしょうか。
気になるお子さん、情緒不安定な保護者の増加により、人材の補充が不可欠と思う。	情緒の安定が図れるような心のゆとりを保護者も職員も持っていたい。	運動機能の低下(つまり、転びやすい)。	親の不安が減少するよう安心感を与えること。	
		この4年間で外遊びの経験が少ない子供が多く、戸外で遊ぶことの楽しさや、体を動かす経験が原体験として残らずに成長してしまうのではないかと。テレビでDVDを繰り返し見たり、ゲームする機会や時間が増えていることも感じる。	活動を組み立てていく中で、不足していることは何か(特に運動的な面)を探り、それを補うために様々な工夫をしてきた。今後は以前の生活に戻りつつあるが、子ども一人一人の姿に注意深く目をむけて関わっていくことが大切だと思う。	
保育士支援。	安全、安心な環境のもとに体力をつけることが大事。		体力低下が一番心配されたので、室内でできる運動遊びの工夫。しかし、室内での限界がある。	
保護者支援。	愛着。	大人との関わり。		
	おうちの方(特にお母さん)との関わりが重要である。	休日や帰宅からの外遊び、運動遊びが減ってきていると思う。遊びの中での運動量が発達的には影響すると思う。	保護者の方の表に出せない不安を感じ取り、声をかけたり、相談に乗ったりしている。さらに、地域の子育て家庭への支援もできるような考慮していきたい。	
保育士の人材確保。そのための給料制度の見直し(臨時職員に対しても)古い施設の環境の安全化。	遊びを充実→戸外遊び→友だちとの関わり→全身運動の活発な動き→自然に親しみ、情操も育つ。	室内で過ごすことが家庭でも保育所でも以前より多い。運動遊びもあそびきるといふほどではないと感じる。	子ども発達を年齢ごとに把握し、戸外、室内での活動にどれだけ生かせるか、他の施設や専門の方の研修に参加し、情報交換しながら取り組むこと。	
保護者支援。気になる子の支援(ここ数年で増えてきています)。	一人一人のきもちを大切にすること。一人一人にあった保育。	家庭環境や母親の子育てに対する意識が低い。	室内での活動の中で、子どもたちの運動の雨量の低下が心配したので、遊びの中で保育者の共通理解で活動していました。	保健所で実施される健診の時に、少しでも気になる児童に対して医療機関をすすめてほしいと思っています(現在、3歳児健診で再検査を勧められていても、健診の再、きちんと伝えていないので、軽く受け止めているか、再検査を受けていない。)
自然体験が以前よりも少なくなってきたので、もっとふれあえるように整備してほしい。	いろいろな自然(水や土や木などの植物)に自由にふれあひ、五感が豊かになるような関わりが大事だと思う。	素足になって地面を歩くこと等以前はできたが、今は不足しています。そのため、バランスをとることや体力の低下が考えられます。	震災後は、戸外での活動ができない日が続いたが、室内に於ける運動遊びを年齢別に計画を立てて日々の保育に取り入れることができた。そのため、子どもたちの運動能力の低下をある程度は防止できた。	
安全な環境。保育士。	十分に体を使って、いろいろな遊びの体験。保護者の精神的安定と、子どもの愛着体験。	風評被害。体力。	子どもを支援するだけでなく、保護者支援も行ってきたが、さらに必要とされている。	保育士は、一生懸命、やっているが、期待されることが多く、重労働になっている点も、離職率につながっているようにある。とても残念である。
	いろいろな自然体験が4年目を迎えても不足しているように感じる。保護者と子どもとの休日の過ごし方が心配になる。外での活動が減少しているのではないかと。	運動能力、体力作りが不足しているのでは、思い切り走る、ボールを投げる。受け止める(跳ぶ、等を取り入れた遊びの不足が考えられる)。	保育中の安全についての専門的な知識に加えているような場合を想定しての危機管理能力がさらに必要とされるのでは。	
人材育成、人材確保。	外遊びが楽しいと感じられる。規則正しい生活習慣を身につける。	運動能力(持久力、バランスなど)。忍耐力、集団行動。	子どもたちとのつながり、安心できる関係作りができています。	
保育士の確保。	大きな集団中での活動。気になる子やアレルギーへの対応。	保育士のスキル。家庭での基本的な基本的な生活習慣。	子どもへの危機管理能力が高かったことで、事故が1件もおきなかった。放射性物質や放射能の人体の影響について現在の線量の害が少ないという認識をもつこと。	4歳児と5歳児を一緒にして保育する保育所が多いが、発達が全く違うことを意識して、別立てにする必要があると思う。
体を十分に動かせる場所への誘いでしようか。	コミュニケーションを十分にとる。	体力面。	保護者の方々の思いを十分に受け止め、聞き入れる。	
心身ともに健全なる保育。そして、親のメンタル支援。	一人一人丁寧に関わる。子どもが主体的に育つための保育。	スマホ育児。DVD育児。保育園のよいところを家庭に。家庭のよいところを保育園に合わせる一つの提案をしながら、家庭育児に共感させ、大切なことを育てていくこと。	震災からもうすぐ4年。日々の保育では、震災前の生活に戻りつつあります。散歩が以前のコースがまだ線量が高く行けないところがあります。ルートを変更し、より充実した屋外活動ができることが課題です。	

その他(こども園など)

保育に必要な支援	子どもたちにとって重要な関わり	子どもの発達への影響	保育者の専門性	その他
保護者とのさらなる信頼関係、教育・保育不信の共通理解、発達支援(疑い含む)の保育者の理解。	常に安心できる環境の提供。	保護者の考え。	震災の有無にかかわらず、保育者は常に専門能力を発揮し、ベストを尽くすものと考えます。	幸いにも当園は大きな物的被害がなく、放射能災害については常に保護者の理解を得ながら、運営しています。被害者意識をなくし、自分たちでできることは何かを常に考え、足踏みすることなく前に進むことが大切だと考えています。
園外活動の支援があると、活動の幅が広がる。			以前の保育にとらわれず、子どもたちに何を体験させたいから保育を考えていった。ポジティブに、また、臨機応変に、が、キーワードでした。	
体力増進。自然への関わり。		季節の変化を自然の中から感じ取ったり土に触れたり、草や小動物、自然物など保育の中に取り入れられない。	子どもたちを放射能から守りながら環境を工夫しながら子どもの発達に応じた教育をしなければならないこと。	
日々の信頼関係。発達に沿った活動や遊びの経験の積み重ね。親子の愛着関係。	体力、運動能力。災害に対する恐怖。	子供や保護者の不安な気持ちを受け止め、共感したり、一緒に考えたりしながら、この地で子育てする自信と安心感につながっていった。		

第6章 子どもの居住と支援

太田光洋・原野明子・新山伸一・堺 秋彦

本章では、福島県の震災前後の子どもの数や幼稚園、保育所の数や在籍児数の動態および保育現場に対する災害後の行政等の対応、地域住民の支援の具体例について述べる。

I 災害後の福島県内保育所、幼稚園、子どもに関する動態

1. 子どもの数の変遷

福島県の推計人口・福島県現住人口調査月報から平成20～27年の総人口と0～4歳、5～9歳の人口、子ども数を地域ごとにまとめた(図1、表1)。ここでは、0～9歳の子どもに焦点を当ててその実態を示しておきたい。

福島県の0～4歳、5～9歳の子ども数の推移を図1に、それぞれの年齢の子どもの増減率を表1に示した。いずれも各年5月1日のデータである。¹

震災の起きた平成23年から減少幅が大きくなり、平成24年をピークに漸減してきている。0～4歳では平成23年に前年比△5.2%、平成24年には△7.6%と大きく減り、平成25年には△2.4%、平成26年には△0.3%と減少率は小さくなり、平成27年に0.2%増加に転じている。他方、5～9歳では平成23年に△4.6%、平成24年に△5.7%と減少率に若干の違いはあるが同様の傾向を示している。しかし、平成25年以降の推移は△3.6%(平成25年)、△3.1%(平成26年)、△2.4%(平成27年)と緩やかになっている。4歳以下の転出がほぼ下げ止まったとみることができるとともに、5歳以上は小学校入学などを機にした転出なども理由として考えられるが、理由は明らかではない。平成27年には5～9歳も平成22年の減少率まで戻っているが、こうした傾向が続くかどうかは今後の推移を見守る必要がある。

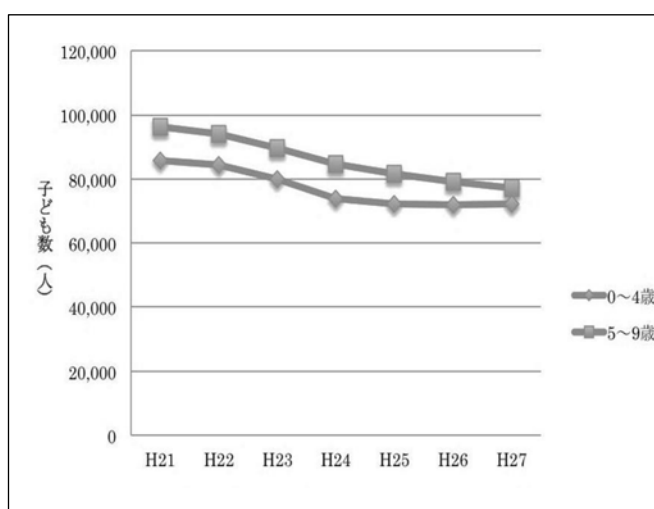


図1 福島県の子どもの数の推移 (0～9歳)

表1 子ども数の推移と増減率

	0～4歳		5～9歳	
	子ども数	増減率	子ども数	増減率
平成21年	85,892		96,415	
平成22年	84,404	△1.7	94,079	△2.4
平成23年	80,056	△5.2	89,716	△4.6
平成24年	73,991	△7.6	84,592	△5.7
平成25年	72,185	△2.4	81,574	△3.6
平成26年	71,950	△0.3	79,057	△3.1
平成27年	72,088	0.2	77,179	△2.4

¹ このデータベースは以下のデータを改変して利用しています。

福島県の推計人口 福島県現住人口調査月報平成20年～27年5月1日現在、福島県、クリエイティブ・コモンズ・ライセンス 表示 2.1 日本 (<http://creativecommons.org/licenses/by/2.1/jp/>)

さらに、地域別の0～4歳および5～9歳の子ども数の推移をそれぞれ図2、図3に示した。

地域別に見るといずれの年齢においても、避難指示区域となった相双管内（飯舘村、南相馬市、川俣町、葛尾村、浪江町、双葉町、大熊町、富岡町、川内村、楢葉町など）とその南側に隣接するいわき管内の子ども数の減少が平成23年、24年にかけて他地域に比べて多く、現在も漸減傾向である。避難指示解除等の今後の行政のあり方や後述する避難先地域や親の就労などの条件などによって左右されると考えられるが、そのあり方や回復が順調に図られるかは今後の推移を見届ける必要がある。

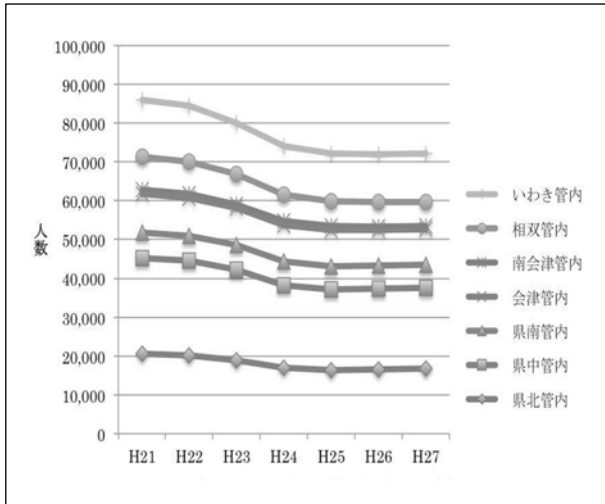


図2 地域別子ども数の推移 (0～4歳)

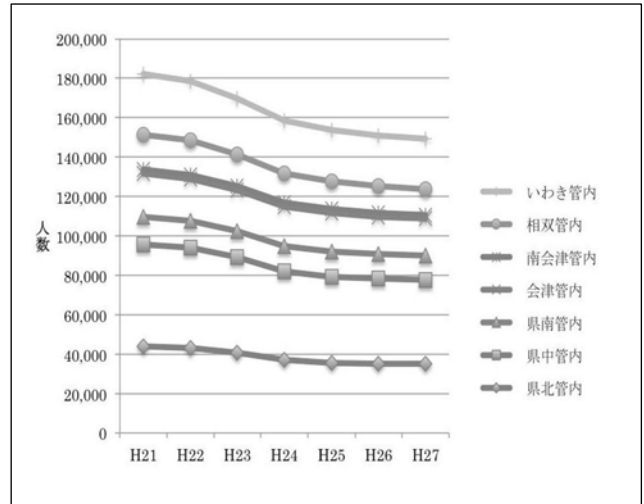


図3 地域別子ども数の推移 (5～9歳)

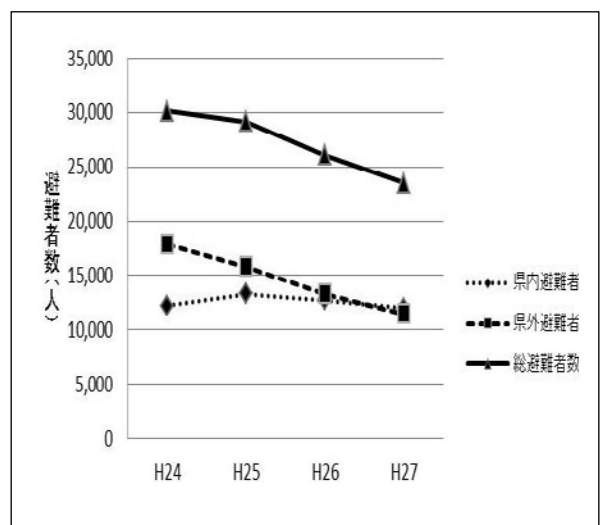
(太田光洋)

2. 避難者数

東日本大震災に係る子どもの避難者数を福島県が平成24年4月1日以降のデータとして公開している。² 18歳未満の避難者数であり、幼児・児童数ではないが、平成24年以降の推移について紹介したい。

図4に示したように、東日本大震災に係る18歳未満の避難者数は23,498名もいる。平成24年4月1日には3万人余りが避難していたことからすると、減ってはいるが震災から4年経ち、まだ家に帰ることができない子ども達が数多くいることがわかる。県内避難者と県外避難者を比べると、県外避難者は徐々に減ってきているが、県内避難者数は変わらない。これは、何による違いなのであろうか？

そこで、次に地域による避難状況の違いについて検討してみたい。先に述べた子どもの避難者数は、市町村毎の把握数として県ではまとめている。ここではそれらのデータをもとに、避難指示区域として指定されている市町村とそうでない市町村の避難者数をまとめた。



² このデータベースは以下のデータを改変して利用しています。東日本大震災に係る子どもの避難者数調べ 平成24年5月1日現在・平成25年5月1日現在・平成26年5月1日現在・平成27年5月1日現在、福島県、クリエイティブ・コモンズ・ライセンス 表示 2.1 日本 (<http://creativecommons.org/licenses/by/2.1/jp/>)



図5 避難指示区域の概念図(平成26年10月1日時点)

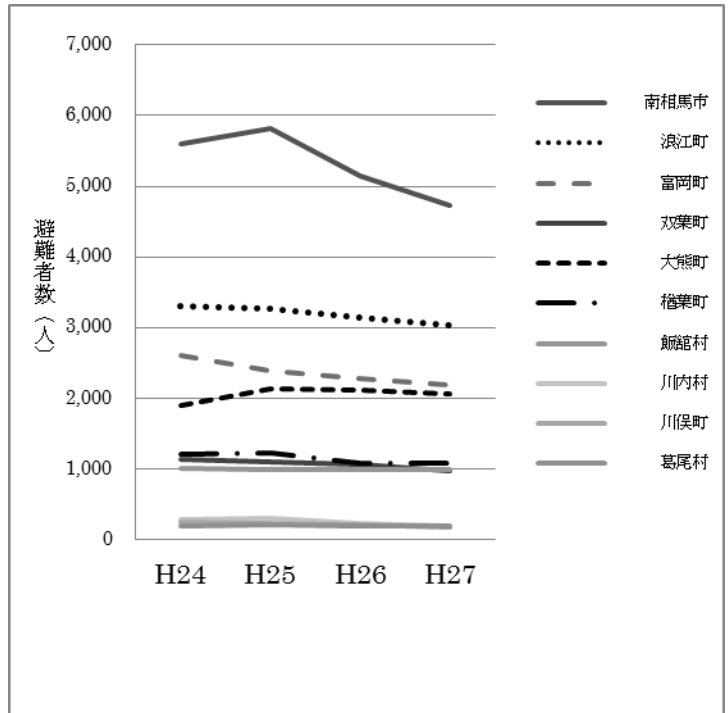


図6 避難指示区域に指定されている市町村の子どもの避難者数

なお、避難指示区域は平成26年10月1日以降、「帰還困難区域」、「居住制限区域」、「避難指示解除準備区域」となっており、飯館村、南相馬市、川俣町、葛尾村、浪江町、双葉町、大熊町、富岡町、川内村、楢葉町の一部あるいは全部が上記3つの区域に指定されている(図5)。

これら10市町村の18歳未満の避難者数は、図6のとおりである。震災から4年が経ち、南相馬市をのぞき避難者数にはあまり変化はない。南相馬市については、表2のとおり、年度をおうごとに避難者数のうち、県外や南相馬市外への避難が減り、南相馬市内への避難が増加している。このことから、元の居住地に戻るができるようになったら、戻る家庭が増えているのではないかと推測される。

表2 南相馬市の子どもの避難者数と避難先別避難者数の推移

	平成24年			平成25年			平成26年				平成27年				
	避難者数	県内	県外	避難者数	県内避難元市町村内	県内避難元市町村外	県外	避難者数	県内避難元市町村内	県内避難元市町村外	県外	避難者数	県内避難元市町村内	県内避難元市町村外	県外
南相馬市	5,606	1,969	3,637	5,820	1,338	1,621	2,861	5,155	1,598	1,315	2,242	4,729	1,769	1,086	1,874

次に、県外避難者数から地域ごとの特徴をみてみたい。平成27年4月1日現在で、100人以上の子どものが県外に避難している市町村は表3のとおりである。これら14市町村のうちの半分は、避難指示区域ではない市である。これら7つの市は避難指示区域の子ども達の避難を受け入れている市でもある。

さて、これら7市町村の総避難者数における県外避難者数(いずれも18歳未満)の割合の平成24年から27年の推移を表したのが図7である。このグラフからもわかるように、福島市、郡山市、二本松市は、避難した子どものほぼ全てが県外に避難している。これら3つの市は、原発事故後、放射線量が高かったところでもあり、もともと県外からの居住者が他よりも比較的多い地域でもある。す

なわち、放射線量の不安から、県内ではなく、県外への避難を決めた人が多い地域といえる。いわき市は、震災後の放射線量が低かったこともあり、これら3つの市とは避難の状況が異なっているといえよう。

一方、平成27年4月1日に、避難者数0の市町村は18あり、多くが会津や南会津地方で、原発からも遠くに位置し、放射線量の低い地域である。

このように福島県は、避難者の数からみると、避難指示区域に指定されている地域、指定されていないが放射線量の不安を抱えている地域、放射線量が低く不安も低い地域と分けることができよう。

表3
県外への子どもの避難者数

福島市	2,034
郡山市	2,001
南相馬市	1,874
浪江町	1,180
いわき市	1,138
富岡町	582
大熊町	548
双葉町	470
二本松市	267
伊達市	208
白河市	182
檜葉町	172
須賀川市	149
飯舘村	100

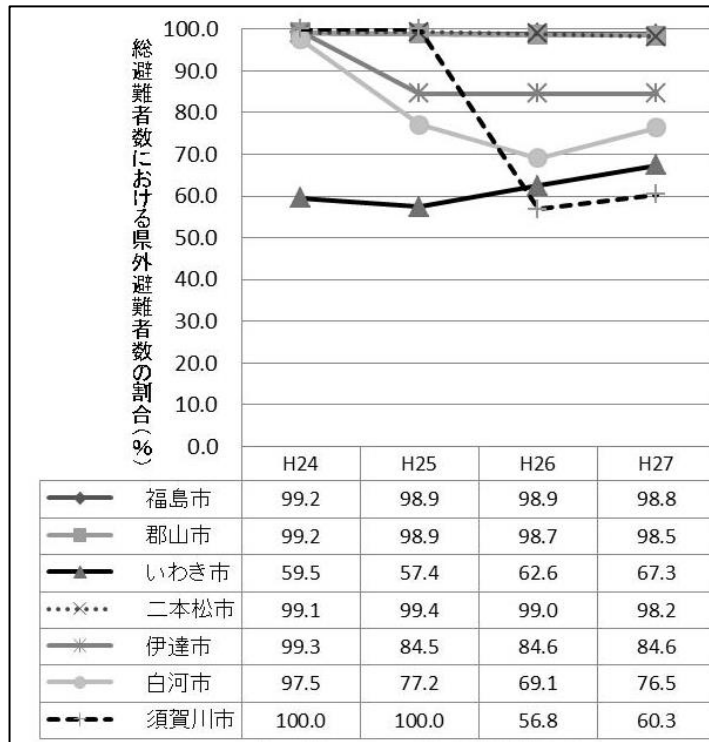


図7 7市町村にみる県外避難者数比(%)

3. 幼稚園・保育所の数

次に、福島県内の幼稚園と保育所の数および園児数の変化についてみていきたい。幼稚園については、学校基本統計³から、保育所については、厚生労働省「保育所の状況等について」～都道府県・政令指定都市・中核市別 保育所待機児童数集約表から、震災前の平成22年4月1日から平成26年4月1日分をまとめた。なお、保育所については、福島県、郡山市、いわき市の合算をして、福島県の数とした。

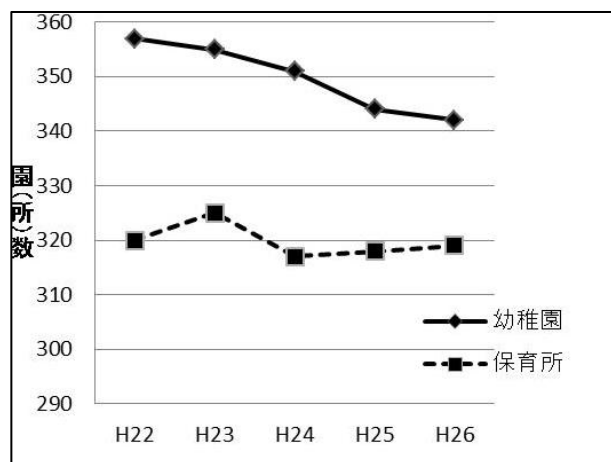


図8 福島県内の幼稚園・保育所数

³このデータベースは以下のデータを改変して利用しています。平成22年度学校基本調査報告書・平成23年度学校基本調査報告書・平成24年度学校基本調査報告書・平成25年度学校基本調査報告書・平成26年度学校基本調査報告書、福島県、クリエイティブ・コモンズ・ライセンス 表示 2.1 日本 (<http://creativecommons.org/licenses/by/2.1/jp/>) 平成23年度学校基本調査報告書

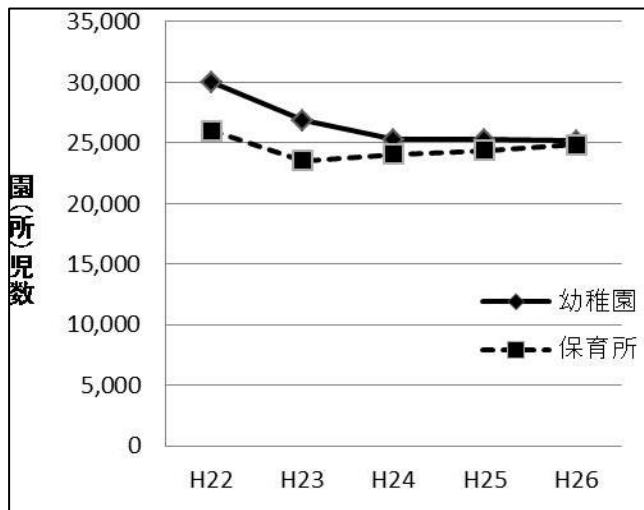


図9 福島県内の幼稚園・保育所の在籍児数

まずは、幼稚園と保育所の数だが、震災前に漸増傾向にあった保育所は、震災後に減り、その後少しずつではあるが増えている(図8)。幼稚園については減少傾向にあるが、私立幼稚園の数は平成22年度から26年度までほぼ150園と変わらず、公立幼稚園が平成22年度207園あったものが、平成26年度には192園というように、毎年数園ずつ閉鎖されている。一方、在籍児数をみると、平成24年度に減少し、その後はあまり変わらない(図9)。

これらのうち、避難指示区域内にある幼稚園や保育所の状況についてみてみたい。平成26年4月1日において、公立幼稚園はこの区

域内に23園あり、そのうち9園は休園、9園が避難先に移転して開園している。このうち6園は2園ずつが統合もしくは同じ敷地内で開園しており、実質は6園となる。一方、私立幼稚園は福島県私立幼稚園連合会に加盟している幼稚園のうち、この域内に7園あったが1園が閉鎖、2園が休園、1園が避難先で開園となっている。保育所については、公立15所のうち、9所が休園、3所が避難先で開所(うち2所はさらに2所にわかれ、計4所として開所)している。民間の保育所については、2所が休所、1所が避難先で開所している。幼稚園も保育所も避難先での開園(所)には、園児の募集や既存の園との関係等、様々なご苦労があるようである。

以上、福島県の人口、子どもの避難者数および幼稚園、保育所の園(所)数および在籍児数の推移について述べてきた。避難指示区域に指定されている地域では、震災前とは居住地域も変わり、幼稚園や保育所の開園(所)状況も震災から4年経っても元に戻れることはない。まだまだ先がみえない状況である。また、避難指示区域に指定されていない地域でも、避難者のほとんどが県外へ避難しているという市ではまだまだ帰還者はいないというように、放射線への不安はぬぐいきれない状態である。避難している人がいるということは、避難できずに不安を抱えている人も少なからずいるということである。震災直後は、こうした地域の保育現場では保護者の不安への対応がとくに難しいようであった⁽¹⁾。現在は、保育現場での様々な努力により、震災直後のような大きな不安や保護者間での温度差は少ないようであるが、それだけ声に出せなくなっている人もいないのかという保育者の声も聞かれる。このように保育現場では、子どもや保護者の様子を気にかけて、通常保育に加え、震災に伴う様々な問題に対応してきた。そこで、次ではこういった対応をする際に保育現場で活用された県や国の施策について紹介したい。

(原野明子)

II 災害後の保育に対する支援について～保育現場に対する災害後の行政等の対応

研究集会の報告の中にもあったように、震災後、保育現場では国や県、市町村のほか、個人や団体から様々な支援を受けてきた。ここでは、福島県内の幼稚園や保育所の園長、所長に対して実施したアンケート調査から、保育現場で受けた支援内容について述べていきたい。なお、この調査は福島大学人間発達文化学類子育て支援クラス教員（大宮勇雄・白石昌子・西内裕一・原野明子）が平成27年3月に実施したものであり、集計途中のものである。したがって統計的処理などは施していないことを予めご承知おきいただきたい。

さて、この調査では254名の幼稚園・保育所の園（所）長からの回答を得た。本稿では震災後に受けた支援のうち、建物や園庭・固定遊具などのハード面、保育の活動に関すること、除染に関すること等について尋ねた。以下でどのような支援があったかについて述べたい。

1. 建物や園庭・固定遊具に関係した支援

ハード面で受けた支援内容として最もあがっていたのが、固定遊具の交換であった。これは「子ども元気復活交付金」（福島定住等緊急支援交付金）によるものである。これは、原発事故の影響により人口が流出し、地域の復興に支障が生じていると認められる地域に交付されるもので、例えば運動機会の確保に係る事業として、遊具の更新があげられている。国から市町村に1/2が交付される。

その他には、砂場の砂や園庭の土があげられていた。これらは個人やNPO法人、民間の企業や団体による支援のようであった。

2. 保育の活動に関する支援

保育活動に関する支援で最もあげられていたのが、福島県による「ふくしまっ子体験活動応援事業」とユニセフによる「外遊びプロジェクト」であった。いずれも放射線量が高く外での遊びが制限されている中で、放射線量が低い地域に行くためのバス代の補助をしてくれる支援である。その他の団体や企業からもバス代の補助や県外への招待の事業の支援があったようである。また、子どもの心のケア事業や親子運動遊び教室、室内での楽しい遊びを教えてもらったり、外の土を使わずにすむ栽培活動を教えてもらったりするプロジェクトがあげられた。これらはいずれも外で遊べない子どもの保育に悩む保育者を支援するものであったと考えられる。これらも県や市町村に加え、保育関連の団体、NPO法人、民間の企業や団体、大学、個人による支援があった。

3. 除染に関する支援

これは、除染作業そのものに加え、線量の測定機の貸与や寄附などがあげられた。支援者は国や自治体である。ただし、除染を待つ間に、園（所）の職員や保護者による作業をしたところも少なくないようであった。

4. 物資に関する支援

水や紙おむつ、食料、おもちゃ等の細やかな支援が各所から寄せられたようであった。これらは自治体というより、園（所）と関係のある地域の企業や個人、県外の個人等から寄せられたものが多いようであった。

5. 人的支援

これについては、緊急スクールカウンセラー派遣事業の他、音楽の演奏や演劇などでの支援があったようである。他には園庭の表土除去や除染の人的支援もあり、個人による支援の割合が高いようであった。中には、線量を測定する人的支援がほしかったという記述もあった。

6. 金銭的支援

金銭的支援を受けた園(所)は、その園(所)が所属する団体を通じての支援が多いようであった。

以上、簡単ではあるが、震災後に保育現場が受けた支援の概要である。なお、行政の対応については、本報告書第1章の研究集会報告における小川武氏の報告に全てが紹介されているので、あわせて参照されたい。

なお、アンケートの中で、支援に対して配慮してほしかった点を尋ねたが、「支援を受けて有り難かったが」と前置きがある上で、「お礼状を求められる」、「私用している状況を写真等で知らせるよう求められる」、「報告書を求められる」等があげられていた。しかし、何より心に留めねばならないのが、「アンケートが多すぎる」ということであった。日常業務に加え、震災関連業務の多い保育現場にとって、どこでどう使われるかわからない(自分たちへのフィードバックがあるのかもわからない)アンケートに時間をとられることがいかに負担であるかを我々は肝に銘じねばならないと思う。そのためにも、保育現場に資する研究をしていかねばならないと考えている。

(原野明子)

Ⅲ 地域住民への支援

本節では、東日本大震災以来地域住民への支援、子どもや家庭への支援を行っている2つの団体の活動を紹介したい。

まず1つめは、「うつくしまふくしま子ども未来応援プロジェクト県北地域事務所」(NPO 法人ピーンズふくしま)の活動である。これは、主に浪江町から福島市内および近郊の仮設住宅に避難している子どもや保護者ひいてはコミュニティの再形成まで支援している事例である。そして、もうひとつは南相馬市健康福祉部健康課母子保健係が地域住民への支援とした取り組みとして行っている「母子愛育会」の活動の事例である。

1. 浪江町などから避難している子ども達への支援

～うつくしまふくしま子ども未来応援プロジェクト県北地域事務所の取り組みから

(1) はじめに

東日本大震災とそれに伴う原発事故後4年以上たった現在でも、子どもは、慣れない地域での学校生活、友人や家族との分断、親の失業、仮設住宅の不自由な居住環境(狭く静かに過ごさなければならぬ状況、遊び場や集う場の不足その他)などにより、ストレスフルな状況はほとんど変わっていない。

このような中、うつくしまふくしま子ども未来応援プロジェクト県北地域事務所(以下県北事務所)では、浪江町から避難している、3つの仮設住宅で暮らす子どもへ、平成23年9月から現在まで、帰宅後の学習支援を軸として、遊びやレクリエーション等を加え、支援を続けてきた。平成26年12月からは、さらにもう1つの仮設住宅でも支援を開始している。これまで「帰宅後の学習支援」に登録した子どもの数は、延べ200名を超えた。また、各種事業に参加した子ども・保護者・仮設住民等は、延べ10,000名に迫る。

活動の特徴として、「避難している子どもが、安全、かつ安心して集える帰宅後の居場所づくりをしながら、一年間を通じて、『帰宅後の学習支援』を中心として、行っていること」、さらに「折々にレクリエーションなどを、保護者、仮設住民等と一緒にしていること」、そして、「それらを4年間継続していること」であろう。

また、このような支援を開始してから現在まで、仮設住宅から他地域へ転居した家庭は、12家族子ども24名となり、全家庭数の約3割で、まだ約7割の家庭が以前のまま仮設での暮らしを余儀なくされている。これから、少しずつ転居は進むにしても復興住宅の整備の遅れ等から、子どもによっては今の生活は、少なくとも数年は続くと予測される。

この状況下、子どもや保護者等の本活動に対する支援ニーズは高く、さらに、浪江町教育委員会から支援継続の要請がある。「いつまで、どのような支援を続けるか。」などの議論をしているが、子どもが、本活動の支援を必要としてくれる限り、様々な支援の在り方に反省、改善を加えながら、必要とされる支援を続けていくと決め、取り組んでいる。

さらには、子どもへの支援は、その保護者や仮設住民と一緒に活動へと発展して、子どもを大事にした仮設コミュニティの形成や維持につながっていくことを望んでいる。

(2) 支援活動の目的

子どもの帰宅後の居場所を確保しながら、次のことを目指す。

- 1) 子どもの帰宅後の居場所を確保しながら行う、帰宅後の学習と遊びの支援
 - 現在学校で学習している内容を学習させ、基礎的な学力の向上を図る。
 - 高校受験を目指した内容、本人の興味・関心に合った内容に対応した学習をさせ、自分の将来に向けた希望を持たせる。
 - 友達と一緒に約束を守りながら、助け合って学習したり楽しく遊んだりして、自分も友達も大事にし、支え合って困難に負けないで進もうとする元気な子どもへとはぐくむ。
 - 子どもも大人も一緒に楽しい活動をして、元気な仲間づくり、楽しい地域コミュニティづくりをする。
- 2) 大人が子ども達に寄り添う地域をつくる
住民が子ども達に寄り添う地域とは
 - 子どもが安心して活動できる環境を地域の大人が考え、整える。
 - 地域の子どものと一緒に大人が活動する行事がある。
 - 地域の大人が、困っている子どもを見逃さず、支えるために取り組む。
- 3) 大人同士もつながり合える地域をつくる
子ども会育成会の結成や、自治会の結成化など子ども・子育てを軸にした地域コミュニティの形成。

上記の目的に基づき、県北事務所では、様々な活動を行っている。

(3) 活動内容

ここでは、上の1)～3)を目的とした活動の内容と実際の様子の一部を紹介し、あわせて今後の課題について述べたい。なお、上記の活動目的は、目的に対して活動が1つというわけではなく、1つの活動でいくつかの目的をもっているものもある。したがって、以下で紹介する活動内容も、重複して紹介しているものもあるので、あらかじめご承知おき願いたい。

1) 子どもの帰宅後の居場所を確保しながら行う、帰宅後の学習と遊びの支援

子どもの学習と遊びを支援し、子どもの元気を取り戻す活動としては、年間を通じた「帰宅後の学習支援」や「夏休みの学習支援」などを行っている。ここでは、「帰宅後の学習支援」を中心に紹介したい。

① 「帰宅後の学習支援」

県北事務所の活動の中心は、年間を通じたこの「帰宅後の学習支援」であり、その時間の中にも遊びの要素を取り入れている。

a 対象

浪江町などから避難して、先に述べた4つの仮設住宅に避難している小中学生、もしくはこれらの仮設住宅の近隣の借上げ住宅に居住し、保護者の責任での送迎が可能な小中学生（未就学児も含む。）また、浪江町以外の小中学生が参加を希望する場合も認めている。



b 場所、回数、時間など

活動場所は、各仮設住宅内の集会所である。1つの仮設住宅で週に2回実施している。1仮設住宅あたり、1年間で70数回になる。学習支援の時間としては、小学生が17時から18時30分、中学生が18時から20時である。勉強に一区切りついたら、おやつを食べ、他に勉強している人の邪魔にならないで遊んだりしている。特に小学生以下の子どもについては、このおやつ以降の活動も県北事務所では大事にしている、遊びを取り入れながら友達との触れ合いができる。

c 活動の様子

学習支援コーディネーター1～2名と学習支援ボランティア、アルバイト1～2名があたっている。1回の流れはルーティン化し、子ども達が安心して学習にのぞめるようにしている。最後にはスタッフが保護者用連絡ファイルに記入している。

子どもの様子をみると、これまでに比べて人の話をきちんと聞けるようになってきているし、スタッフに対しての挨拶など、基本的な態度も同様である。また、特別な対応が必要な子どもには特定のボランティア、アルバイトに対応してもらっている。分からないところは、自分で調べる姿勢が見られ、気軽にスタッフに質問することも多い。これまでこの活動を続けてきたことで、子ども達が安心してスタッフとかかわり、学習に取り組むようになってきていると思われる。

しかしながら、宿題がなければ来ない、宿題以外しない、苦手な学習には取り組まないなどの課題はあるが、これはこちら（支援者側）にも欲がでてきての課題ともいえなくもない。一方、保護者の参観は増えていて、ある仮設では、自治会の方々が、学習中でも気軽に入ってこられる雰囲気ができている。また、集会所の予約・変更など、優先してもらったりと、3年間活動を継続していることにより、信頼が得られていることがわかる。

d 「帰宅後の学習支援」以外の学習支援

この他に、夏休みには夏休みの宿題や自由研究の指導・支援を行っている。これは、日中の活動になり、仮設住宅各7回、1回2時間行う。また、8月後半には、5日間程度、東京新聞・静岡の大学生ボランティア団体」と連携して学習（午前）と遊び（午後）を実施する。5日間のうち1日は、バス移動を伴ったレクリエーションを行い、最終日には、4仮設それぞれで、「キャンドルナイト in NAMIE」を開催する。

このように、学習支援を通して、子ども達が安心して学校生活を送ることができるように、そして仮設住宅での子ども同士のつながりができ、物理的にも精神的にも居場所ができるように支援している。

e 浪江町立浪江小学校・（以下浪江小）・津島小学校（以下津島小）での放課後学習・遊び支援

平成26年12月からは、浪江小、津島小でも放課後学習・遊び支援を行っている。

震災のため休校していた浪江小は、震災約5か月後の平成23年8月25日、旧二本松市立下川崎小学校を借り住まいとし、開校式を行った。現在は、隣接する津島小の子どもも加わり、10数名の子どもが一緒になって生き生きと活動している。

この二校の子どもは、浪江町の出身であり、福島市、二本松市等に避難してきているが、近隣の小学校に通うのではなく、浪江小・津島小への通学を選択している。全員が浪江町の通学バスを利用しているため、学校での活動時間にも制限がある。それは、通学バスの時間が決まっているからである。

そのため、例えば下校時刻は15時30分の一斉下校となるので、1、2年生が、各教室で「さようなら」をしてから、下校のバス時刻まで、約1時間の空き時間が出てくる。

この1時間の居場所確保の課題について、帰宅後の居場所を確保しながら学習支援と遊びを支援している我々に対して、浪江小・津島小、浪江町教育委員会から、「帰宅後の学習支援」と同様の支援を行ってほしいという要請があった。そこで、浪江小での活動を平成26年12月から実施し、浪江小・津島小との協議を経て、平成27年度も継続している。また、同小の学校教育意見交換会、修了式・卒業式、平成28年度の入学式に招かれるなど、つながりが強まっている。ここでの課題としては、活動時間が午後の早い時間帯であることにより、学生や社会人等のボランティア、アルバイトの確保がづらいことから、スタッフの安定的な確保があげられる。

② レクリエーション

子どもも大人も一緒に楽しい活動をして、元気な仲間づくり、楽しい地域コミュニティづくりをすること、子どもが、一緒に学習をしている友達や、浪江町の別の仮設住宅で暮らす友達と元気いっばいに遊ぶことにより、一人ひとりをさらに元気にすること、友達と一緒に約束を守りながら、楽しい時間を過ごすことにより、支え合って困難に負けないで進もうとする心をはぐくむこと、保護者も仮設住民も、活動に協力しながら、子どもと一緒に楽しむことにより、仮設内の大人同士が仲良くなることを目的として、レクリエーションも行っている。

対象は、学習支援に参加している子ども達、保護者、学習支援等にご協力いただく仮設住民などであり、バスで出かけたり、もちつきをしたり、簡単な調理をしてみんなで一緒に食べるというようなことをしている。これらのレクリエーションについては、上記4仮設に加え、田村市にある1つの仮設住宅（平成25年度、26年度と水耕栽培を実施）も対象としている。

③ 他団体との連携

その他に、仮設住宅の保護者や自治体といった身近な大人以外の大人たちが子ども達を支援するために、様々な団体や個人と連携している。もちろん我々との連携の中心は、浪江町であり、浪江町教育委員会であり、子どもが通う小中学校である。しかし、それ以外にも例えば、先に述べた東京新聞・静岡の大学生ボランティア団体であったり、県内の大学・短大の教員および学生による運動遊びの支援やボランティア派遣、その他の団体による募金活動、講演会、水耕栽培協力や様々なイベントの実施などである。今後も子ども達のために、よりよい連携の仕方を探っていく。

④ ボランティアの確保

学習支援についてもだが、すべての活動を実施、継続するにはボランティアの協力は欠かせない。「うつくしまふくしま子ども未来応援プロジェクト」のホームページを工夫することにより、閲覧数が増え、ボランティア希望の問い合わせが増えた。また、ボランティアのための宿泊施設「ビーンズハウス」を、平成26年8月から某仮設住宅の2世帯分を借りることができたため、遠方の方々でもボランティアしやすい環境になっている。そのため、平成26年度後半以降の傾向として、県外のボランティアが増えていて、1～2日程度の活動をして帰ることが多い。しかし、我々が一番大事にしている各仮設における週2回の「帰宅後の学習支援」での手厚い指導のため、定期的、安定的なボランティア参加が必要であり、福島県内、それも近隣の市町村からのボランティアを開拓していく方法を探っていく必要がある。

⑤ その他の活動…仮設住宅での水耕栽培

次に、水耕栽培について紹介したい。この活動は、ある仮設住宅では集会所前に我々が約一坪のビニルハウスと家庭用の水耕栽培キットを設置し、トマトを育てることから始まり、大人の活動を子どもが手伝っていた。実がなる頃に、子どもに自分の房を決めさせ、名前をつけさせた。名前のあるものは、自分のものであるというしるしで、自由に食べてよいことにしたところ、世話する意欲が高まった。また、収穫した作物で料理をし、仮設住宅で収穫祭を行い、たいそう盛り上がった。子ども達は作物を育てる大人の知恵を見、聞き、そして自分でも試し、収穫という形で手ごたえを感じていたようである。大人たちの姿から、子どもも学ぶことがあり、共通の話題があることで、大人と子どものコミュニティが形成されたように思われる。このようなことから、今後もいくつかの仮設住宅で水耕栽培を実施したいと考えている。その際は、これまでの経験を踏まえ、以下のことを目的にあげることにしている。

- 水耕栽培の仕組みを知り、放射能に負けないより安全な栽培方法を、実際の栽培活動を通して学ぶ。(子ども)
- 毎日の栽培活動を通して、仲間と協力しながら責任を持って仕事をこなすことを身に付けさせる。(子ども)
- 収穫の喜びを味わわせ、自然の恵みを実感としてつかませて、福島県民としての夢や希望を自分なりに描けるようにする。(子ども)
- 子どもと大人が一緒になって力を合わせて栽培活動をやりとげ、一緒に収穫を喜び合うことを通して、仮設住宅内をもっと元気にする。(子どもと大人)
- トマトの収穫量をできるだけ増やすよう工夫して取り組み、実際に収穫して成就感、充実感を得ることにより、次への活動意欲へつなげてこれからの自分探しのきっかけを作る。(大人)

2) 大人が子ども達に寄り添う地域をつくる～「保護者説明会(保護者会)」の実施～

子ども達が安心して避難生活ができるために、家庭の中のみならず、新しく生活をはじめた仮設住宅が子どもにとって安心できる地域でなければならない。そこで、大人が子ども達に寄り添う地域をつくるために、「保護者説明会(保護者会)」や「レクリエーション」、そして「水耕栽培」を企画し、実施している。

ここでは、保護者説明会について述べる。保護説明会については、子ども達の学習の様子の参観を保護者に勧めるとともに、話し合いを定期的に、または必要に応じて持ち、大人みんなで子ども達をはぐくんでいくという意識付けを図っている(保護者説明会は、年4回の実施を予定している)。また、月1回程度の「学習支援だより」を発行し、学習の様子や協力いただきたいことなどを、保護者や仮設住民へ知らせている。レクリエーションの様子を写真にし、集会所へ貼り出してその都度知らせ、活動への理解を求めたり、行事によっては、仮設自治会の協力を求め、活動することで、仮設内のコミュニティをより良いものにしていきたいと考えて実施している。

しかしながら、保護者説明会への参加人数は減少傾向にある。これは仕事の再開などにより、保護者の都合がつきにくくなっていることなどが原因だと考えられる。一方、継続して学習支援やレクリエーションなどの支援を行っているため、保護者との信頼関係は深まってきている。子ども達が活動しやすいように、送迎や参観を行う保護者の姿がみられるようになってきた。保護者とのコミュニケーションをはかる方策の1つとして「家庭連絡用ファイル」を活用している。また、教育委員会との

連携をとりながら、保護者会で出された課題にも対応している。このように、保護者や教育委員会が子ども達に寄り添う姿が、子ども達にとって、大人への試し行動のようなことをせずに安心して過ごす基盤になってきているように思われる。

3) 大人同士もつながり合える地域をつくる

仮設住宅の近隣の地域や子ども達が通う学校との連携をとりながら、また、仮設住民と一緒にあった活動をしていく中で、子どもを大事にした仮設コミュニティの形成や維持につながることを願い、いくつかの活動を行っている。

例えば、先に述べたように、仮設住宅に住む子ども達は仮設住宅のある地域の学校には通っていない。これは、仮設に入居する前の避難所から浪江町の通学バスである小学校に通学したため、仮設入居後も、保護者は、子どものことを考えて、そのままの小学校に籍を置いたためと考えられる。そのため、「地域で子どもを育む」と言っても、仮設は地域に根ざしたものにはなっていないとも考えられる。そこで、仮設住宅におけるレクリエーションのお知らせを近隣の小学校に出したり、小学校での行事の案内を仮設に出してもらったりし、その結果、交流のきっかけを作ることができた。

平成27年度、28年度と仮設住民の転居は少しずつ進み、特に、小さな仮設では「過疎化」の問題が顕著になると思われる。今後、行政の具体策がない場合、今の入居率がさらに下がったとき、仮設のコミュニティは、徐々に崩壊へと向かい、残った住民の孤立化の問題が一層深刻になる可能性がある。そこで、そこに住む子ども達を支援するためにも、住民の孤立化を防ぐため、仮設住民とともに歩む地域づくりのお手伝いを継続していきたいと考えている。

具体策としては、「各種行事、レクリエーション等には、必ず学区の小学校、地域住民には案内を出し続ける。」、「子どもの活動を通して、仮設住民、地域住民の交流する場を工夫する。」、「学区の小学校や地域からは、仮設自治会へ各種行事への案内を出すよう働きかける。」、「仮設住民に地域で行われる催し物等を紹介し、仮設外で活動する機会を増やして参加を促す。」、「仮設で行っている水耕栽培を学区の小学校に紹介し、小学校で水耕栽培を実施するよう働きかける。」ということを考えている。この水耕栽培については、1) で述べたとおりである。

このような活動を通して、今後、仮設住宅住民の転居が進んでいく中で、新しい生活に踏み出したいが踏み出せずにいる方々だけが仮設に残らないわば「仮設の過疎化」の問題が生じたときに、残った住民の孤立化を少しでも防げたらと考えている。

(4) むすびにかえて

震災及び原発事故から4年が経過し、「ふくしまの子ども」の記憶が日本人から薄れゆく中、彼らに対する支援の手が減っている。これは、支援する我々にとっても、外部からの資金的な援助やボランティア希望者が減少するなど影響が出ていて、子どもへの手厚い支援を続けづらい状況になっている。しかし、活動の継続については、子ども、保護者からの強い要望と、浪江小・津島小、浪江町教育委員会から要請があり、かつ仮設住民にも好評で信頼も厚い。我々は、それらに答えるべく、様々な困難を何とか克服し、今後も同等の支援活動を続けていきたいと考えている。

原発事故等により避難を余儀なくされて、県内に避難している子どもは約12,000人いるが、ここで紹介した支援は1%にも満たない子どもをできるだけ手厚く支援していこうとしているにすぎない。しかし、ここでの支援は、子ども達の安心できる居場所を作りながら、4年間積み重ねてきた。その結果、子どものみならず、仮設住宅の住民や自治体からの信頼を得ることにつながっている。今

後は、新しい生活に踏み出せる人とそうでない人の差も広がっていくであろう。仮設住宅に住む子ども達に求められる支援の内容も変わっていくかもしれない。「はじめに」でも述べたが、子どもが、本活動の支援を必要としてくれる限り、様々な支援の在り方に反省、改善を加えながら、必要とされる支援を続けていくと決め、取り組んでいる。最後の一人が支援の必要がないと言う日はいつ来るのかを待ち、今後も支援を続けていきたい。

(新山伸一)

次に、東日本大震災において、地震と津波に加え、福島第一原子力発電所事故の放射能漏れによって屋内退避区域に指定され、食料・燃料等の救援物資が満足に届かない被災地の窮状を全世界に発信したことでも知られるようになった南相馬市の地域住民への支援の例を紹介したい。

2. 南相馬市における地域住民への事例

南相馬市では、震災前後に人口が大きく推移している。とくに、0～9歳層が震災以降大きく率が低くなっていて、40歳以上になると55～59歳層を除き、70%以上となっている。

また、親世代である30～34歳の率も50%代であることから、乳幼児期から児童期にかけての子どもとその親の世代が避難もしくは他の地域に移住したことが窺い知ることができる(図10)。

このような実態から、居住している子どもとその親の支援は様々な不安や事情を抱えながら南相馬市に居住していることが推測される。ここでは、一部の地域を除き、少しずつ生活の場を取戻しつつある南相馬市の震災後の支援の一つである「母子愛育会」による活動を紹介したい。

「母子愛育会」は、震災による原発事故の影響により、子どもとその親を取り巻く環境の変化に伴い、放射線の健康被害への不安、避難による生活や家族形態の変化などにより健康問題が生じている課題を踏まえ、親と子の元気と笑顔を応援すること、子ども自身が成長する力を支え、その養育者である親の悩みや喜びを共に分かち合い親子に寄り添うことを目的としたものである。40歳半ば過ぎ位から70歳台の平均年齢は65歳前後になる「女性の会」で、「おせっかいおばさんの会」とも呼ばれている。

この会に属するには、南相馬市が主催する「母子健康推進員講座」を全7講座中4講座受講し修了証書を取得しなければならない。平成23年度から始まり、平成26年度現在で34名の母子健康推進員が属し、活動をしている「母子健康推進員」は、「母子愛育会」のメンバーとして南相馬市の未就園児の子どもとその親を対象とした「母子に特化」した活動を行っている。

平成26年度には、自主活動として、母子が集う広場を開催し(10回)、331名の母子の参加を得た。その他には7回の活動を行った。これらの活動は、母子健康推進員が自主的に企画、運営をし、行ったいわば自主活動である。とくに平成26年度は芋ほりを実施し、母子共に好評であったため、今後は、できているものを「掘る」だけでなく、母子による「畑(土)づくり」から始めることができるような計画作成を目指しているそうである。

また自主活動の他、保健事業への協力として、離乳食教室やお母さんたちが集い、話をする場を設けるなどの活動を行った。

以上のような活動を通し、母子推進員は母子と交流し、支援を行っている。そのような支援の中で推進員と母親の信頼関係を前提に母親にとって次のような効果が得られ、結果、母親のストレスが解消でき、育児によい影響を与えているそうである。

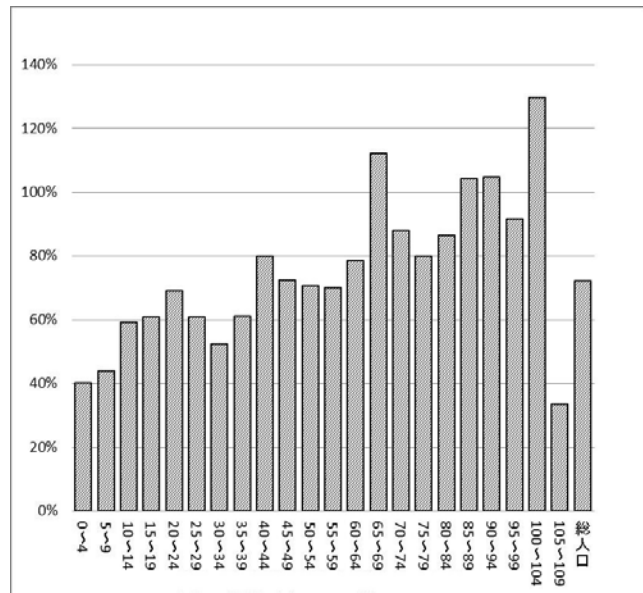


図10 南相馬市の3.11前との人口比



- (1) 姑に言えないことを相談できる。
- (2) 伝統料理（煮物や赤飯等）を教わることができる。
- (3) 子どもを預かってもらえることで、自分の時間を持つことができる。

母親に与えるこのような効果は、活動場所及び時間が「癒しの空間」「癒しの時間」となり育児へのエネルギーになっているという。

この他、平成 26 年度において母子健康推進員のスキルアップのための研修会がファシリテーション研修をはじめ 7 回、話し合いやベビーマッサージを内容とした定例会が 5 回行われた。

このように、東日本大震災後の福島県内では子どもや親を支援する活動が各所で行われている。少しずつ震災前の生活に戻ってきているようには見えるが、年月を経るにつれ、生じる問題は形を変えてきているかにみえる。しかしながら、地域で子どもや家庭を支えるという理念のもと、福島県では多くの人々が力を尽くしていることを少しでも多くの人に知っていただきたい。

(塚 秋彦)

<引用文献>

(1) 『福島大学東日本大震災総合支援プロジェクト「緊急の調査研究課題」報告書』震災後の保育現場が直面する課題とその対応事例に関する調査研究～リアルタイムの保育現場への支援をめざして～（2012）大宮勇雄・白石昌子・中村哲也・西内裕一・原野明子・浜島京子・斉藤和代・星俊子・遊佐早苗・佐藤久美子。

<謝辞>

本章の「3. 地域住民への支援」の項は、NPO法人ビーンズふくしまの新山伸一氏にお忙しい中、執筆のご協力を賜りました。記して感謝申し上げます。

あとかき

本報告書は特別委員会活動継続調査の2年目、3年目の結果を中心にまとめた。ここから何を読み取ることができるか、今後に向けて何を提言することができるかに触れることが難しく、結論のでない研究報告であることのお叱りを受けるかもしれない。しかし、とにかく放射能災害後の子ども、保護者、保育者の現実をとらえること、日々の実践に心砕いている保育者に向き合うことを基本として委員会活動を継続してきた。

その中で少ない機会であったが、保育者との研究会は複雑な問題の性質を理解する上で有効であったと考えられる。子どもの状態や子どもへの思いを述べる保育者の何気ない一言や、自分の保育についての戸惑いの表情、言いよどみのなかに深い問題が表れ、データになりにくい状況に触れることができた。保育者の皆様には話すことで状況を整理したり、客観化することに役立てていただいた。研究集会における話し合いも同様であった。

保育者・保護者は、いかなる状況であっても育ちつつある子どもにとっては「今、ここ」が、かけがえのない時と場であることを自覚している。そして、子どものための最善の手立てを講じようとしている。その保育の現場が、環境汚染状態において、個々にまた大人集団として保育や子育てにどう取り組んだか、その経過や課題は、原発事故による放射能災害という特殊な状況に限らず、急激に変転する自然と社会に適応していかなければならない現代社会の子ども達や保育の実態の典型とみることができる。放射能災害という特殊な状況で顕在化した子どもの経験や保育の実情が今後に生かされるよう、その体験や努力が無駄にならないよう、ここに集められた資料が多少なりとも役に立てば幸いである。

子ども達には最良の環境が用意されることが重要であることは言うまでもない。それぞれの専門分野からの活発な研究、支援活動が展開され、子どもの健康と安全、安心の保障への努力が継続している。保育研究、保育実践の立場として、限られた条件の中で個々の子どもが「自分らしく」発達できる状況をどう作るか、保育の営みをどう形成するかという、保育の本質的な問いへの手がかりを得るために、今後さらに長期的な資料の収集が求められよう。

本委員会活動は、不条理で複雑な状況の現実を担う保育現場の関係者、それを支え、捉まえ、整理しようとする委員会委員、ワーキンググループの先生方それぞれの誠意による共同作業であり、現場の皆様の貴重な実践と資料提供、保護者の方々の調査へのご協力によりここに報告書としてまとめることができましたことに深く感謝申し上げます。

報告書作成に際して、元原稿の編集から印刷に至る厄介なお仕事を原野委員がお引き受け下さり、学会事務局の細かい原稿点検により、このような形にまとまりましたことを付記し、重ねて謝意を表します。

(委員会メンバーに代わって 関口はつ江)

放射能災害下の保育問題研究

平成25年・26年調査報告書

発行日 平成27年12月31日

発行者 一般社団法人日本保育学会

〒102-0073 東京都千代田区九段北 3-2-2 B.R ロジェ T-1

編集 放射能災害にかかる保育問題研究委員会

印刷 タカラ印刷株式会社

〒960-8141 福島県福島市渡利字絵馬平86-9

非売品